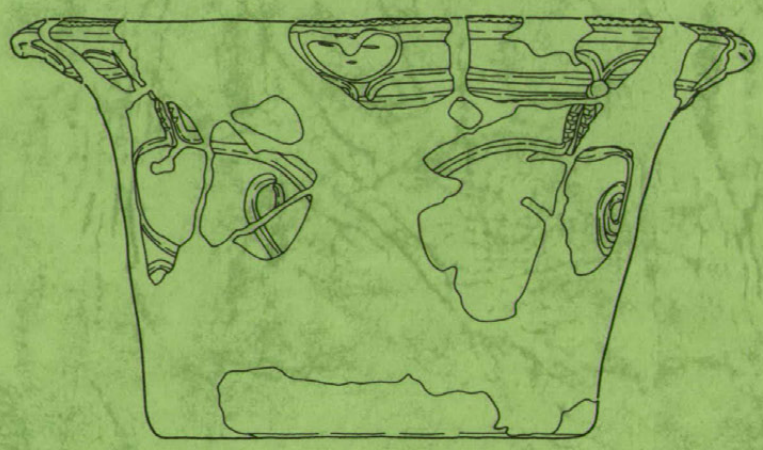
長野県木曽郡上松町

中山間総合整備事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

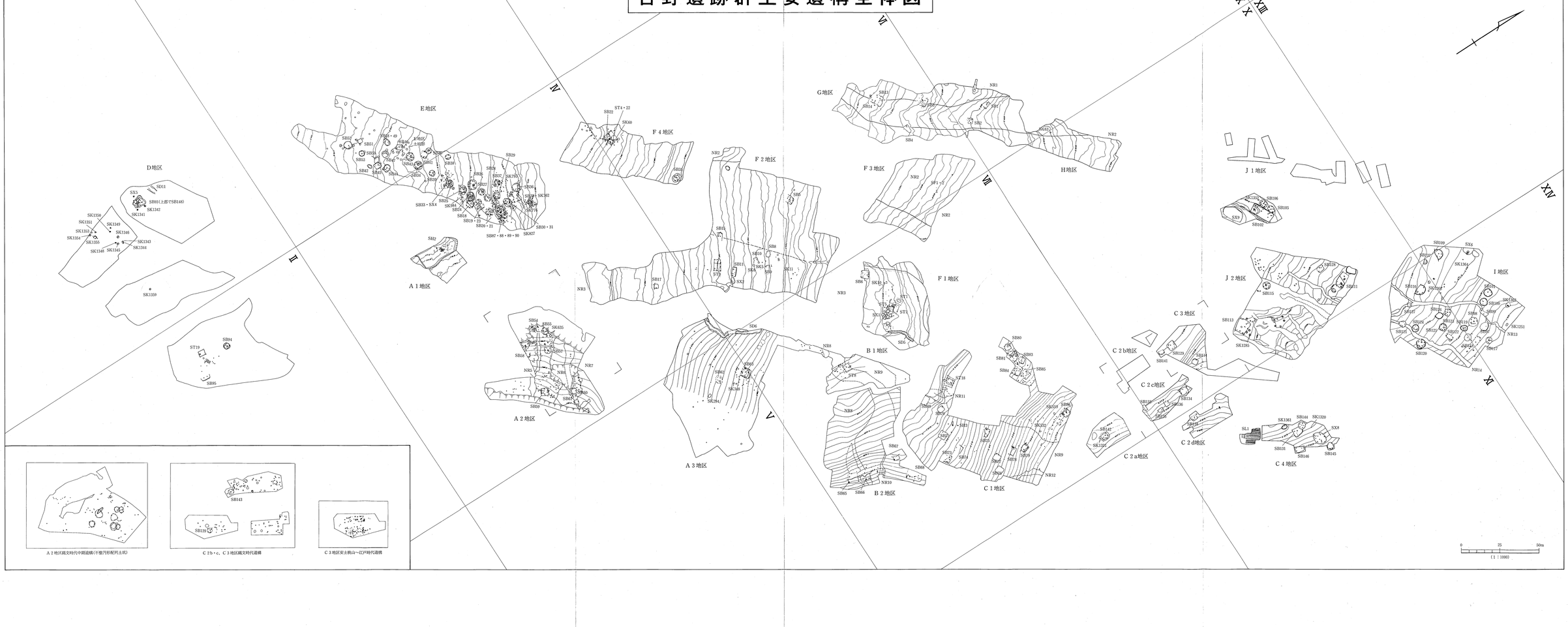
吉野遺跡群



2001

長野県木曽地方事務所
上松町教育委員会
木曽広域連合

吉野遺跡群主要遺構全体図



A 2 地区縄文時代中期遺構(不整円形配列土坑)

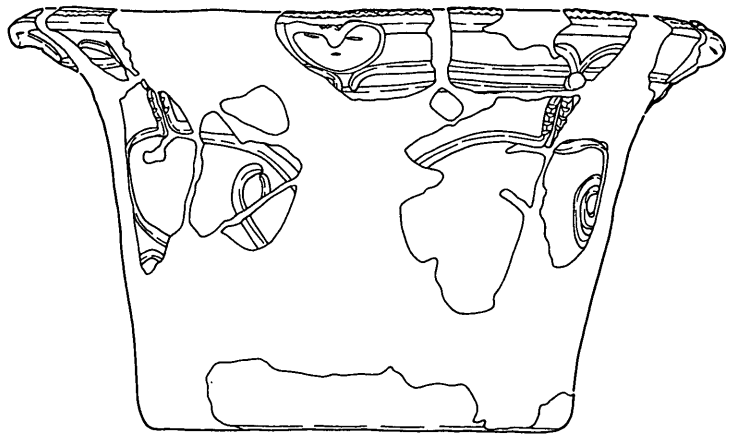
C 2 b・c、C 3 地区縄文時代遺構

C 3 地区安土桃山～江戸時代遺構

長野県木曽郡上松町

中山間総合整備事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

吉野遺跡群



2001

長野県木曽地方事務所
上松町教育委員会
木曽広域連合

吉野遺跡群遠景（中央やや下）

SB124　人面装飾付土器

御物石器

はじめに

上松町の南東部に位置する吉野地区は、東方には中央アルプスの山々が間近に迫り、西方には木曽川が流れ、寝覚の床にも近く、また東海地方と中部地方を結ぶ旧中山道にも近いなど、古くから交通の要所、また景勝地として知られてきました。

この地域において平成８～11年度に中山間総合整備事業が行われる事となり、事業地内で多くの住居跡や遺物が出土すると予想されたため、上松町教育委員会が事業主体となり、木曽郡町村会埋蔵文化財整理作業所(後に木曽広域連合)に事業の調査指導を委託して、ほ場整備事業と並行する形で発掘調査が行われました。

調査の結果、吉野地区では縄文時代～江戸時代に至るまで、断続的ではありますが、人々の生活の痕跡が認められました。縄文時代は早期～晩期まで各時期の遺構が見つかり、特に中期は遺構数も多く、集落が変遷する様相を把握することができました。続く弥生・古墳時代は、木曽郡下で今まで調査例に乏しい時代でしたが、今回は幾つかの住居跡を発見することができました。平安時代～中世前期についても集落の変遷が確認できました。江戸時代の初め頃には、礎石をもつ建物跡も見つかっています。

また調査区内では活断層の露頭も確認され、地質学的にも重要な発見となりました。

これらの資料は、この地域の先人の営みを知るための貴重な手がかりを与えてくれるものと思います。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで、深いご理解とご協力をいただいた吉野地区の地権者・関係者の皆様、長野県木曽地方事務所土地改良課、長野県教育委員会、木曽広域連合の皆様、そして発掘・整理作業にご協力いただいた多くの皆様、工事関係者の皆様、御教示を頂いた諸先生方に、この場を借りて心より感謝申し上げる次第であります。

平成13年８月

上松町教育委員会

教育長　　上田　朝男

例　言

1　本書は中山間総合整備事業にかかわる長野県木曽郡上松町吉野遺跡群の発掘調査報告書である。

2　発掘調査および整理作業は、上松町教育委員会が木曽地方事務所の委託を受けて実施した。上松町教育委員会では『木曽郡埋蔵文化財調査委託実施要綱』に基づき、木曽郡町村会(平成11年度以降は木曽広域連合)に調査指導を委託した。これを受けて木曽郡町村会およびその業務を引き継いだ木曽広域連合では、発掘調査および報告書の刊行を含む整理作業に対して指導的な立場で携わった。

3　発掘調査は平成8年度から平成11年度、整理作業は平成12年度から平成13年度にかけて実施した。

4　吉野地区には調査前に14ヵ所の遺跡・埋蔵文化財包蔵地が確認されていたが、発掘調査の成果を基に、吉野地区全体を一つの遺跡群として扱い、「遺跡」の呼称を「地区」として報告する。

5　発掘調査および報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関より御指導・御助力を得ている。
お名前をあげさせていただき、感謝申し上げたい。(敬称略、五十音順)
合戸敏彦　市川隆之　上田典男　大竹憲昭　大橋　登　岡本直久　奥村晃史　金子直行　神村　透
苅谷愛彦　川崎　保　小林秀夫　佐々木藤雄　澤谷昌英　下平博行　白沢勝彦　新谷和孝　須貝俊彦
関根慎二　田中　総　谷藤保彦　土屋　積　寺内隆夫　寺平　宏　徳永哲秀　永井節治　中沢道彦
西島　力　早川万年　原　明芳　樋口昇一　平林　彰　廣瀬昭弘　藤沢良祐　古川金利　細田　勝
松島信幸　三上徹也　水沢教子　村田広司　望月明彦　百瀬忠幸　百瀬長秀　山下生六　山本典幸
若林　卓　綿田弘実　和田和哉　渡辺博人　渡辺　誠
飯田市教育委員会　各務原市埋蔵文化財調査センター　(社)木曽シルバー人材センター
岐阜県文化財保護センター・同飛騨出張所　共同体研究会　瀬戸市埋蔵文化財センター
通産省工業技術院地質調査所　長野県教育委員会　長野県埋蔵文化財センター　長野県立歴史館
(有)堀口建設　吉野地区ほ場整備実施委員会　山一建設(株)　(有)レックアイ

6　本報告書では、多くの諸氏・諸機関より御教示を頂き、その成果を基に記述を行っているが、報告内容に誤認がある場合は、全て編集者の側に責任がある。

7　吉野遺跡群出土の御物石器は、合戸敏彦氏の御厚意により資料化を行った。

8　御物石器は現在長野県立歴史館に展示されており、写真については長野県立歴史館が撮影したものを使用している。

9　本遺跡の概要は年度ごとに報告されているが、内容において本書と相違がある場合は、本報告をもって訂正する。

10　調査体制、整理体制の期間と委託業務については、第Ⅰ章に記した。

11　本報告書をまとめるにあたり次の方々から玉稿を賜った。記して謝意を表する。
第Ⅵ章第1節　飯田市美術博物館客員研究員　松島信幸
第Ⅵ章第2節　沼津工業高等専門学校物質工学科　望月明彦

12　本書の編集は広田和穂が行った。執筆分担は次のとおりである。
第Ⅲ章第1節　贄田　明
第Ⅲ章第4節　第Ⅴ章第3節2　松原和也
上記以外　広田和穂

13　本報告書内には、担当により表記法が異なる部分が存在するが、内容にかかわるものではない。

14　本調査にかかわる記録および出土遺物は、上松町教育委員会が保管している。

凡　例

1　主な遺構実測図　　遺構全体図　1：1000　竪穴住居跡　1：60(縄文時代)　1：80(弥生時代以降)
掘立柱建物跡1：80　　土坑・不明遺構　他　1：20～1：100

2　主な遺物実測図　　土器実測図　1：4または1：6　　土器拓影図1：2または1：3
石器実測図　　石鏃等2：3　石斧等1：3　　石皿等1：6
金属製品実測図　1：2　　銭　貨2：3

3　主な遺物写真図版の縮尺は遺物実測図と同一とする。

4　遺構実測図中のレベルは海抜高、方位は真北を示す。

5　遺物番号は本文、図版類、表と一致する。

6　遺構実測図の表現は次のとおりである。
遺構の削平部分：実線
遺構の推定範囲：破線
床面などの硬化範囲：一点破線
断面図における炉・カマド等の焼土表現については、被熱化範囲を含む。
遺構実測図中の「●」は土器を、「▲」は石器・鉄器等を表す。
遺構実測図中のスクリーントーンについては以下の通りとする。
被熱化範囲
炭化物等の分布範囲

7　遺物実測図の表現は下記のとおりである
縄文土器胎土の断面図：スクリーントーン＝繊維の混入
平安時代以降の土器：口縁部面取り、明確な稜線、削り技法などを表現し、ロクロ目の線は入れない。
施釉は明確な資料のみ一点破線で表現。
土器の赤色範囲：スクリーントーン
鉄器の木質部　：スクリーントーン

本 文 目 次

はじめに
例　言
凡　例
目　次

第Ⅰ章　序　説 …… 1
第１節　調査の概要 …… 1
1　調査に至る経緯 …… 1
2　調査体制と経過 …… 1
3　委託事業等 …… 5
4　発掘・整理作業参加者 …… 5
第２節　調査・整理の方法 …… 6
1　グリッドの設定と測量方法 …… 6
2　遺構記号と遺構番号 …… 6
3　注記・復元・遺物実測 …… 6
第Ⅱ章　遺跡群周辺の環境 …… 8
第１節　遺跡群周辺の環境 …… 8
1　遺跡群の概要 …… 8
2　遺跡群内の基本層序 …… 8
3　自然流路 …… 10
第２節　周辺の遺跡 …… 13
第Ⅲ章　縄文時代 …… 18
第１節　早・前期 …… 18
1　遺構 …… 18
(1)　遺構の概要 …… 18
(2)　Ｄ地区の遺構 …… 18
(3)　Ｅ地区の遺構 …… 23
(4)　Ｃ２ａ地区の遺構 …… 23
(5)　遺構に関する若干のまとめ …… 24
2　土器 …… 27
(1)　土器の分類 …… 27
(2)　遺構出土土器 …… 28
(3)　遺構外出土土器 …… 29
(4)　出土土器の様相 …… 33
第２節　中　期 …… 37
1　初頭～前葉 …… 37
(1)　遺構の概要 …… 37

(2) 竪穴住居跡 ……37
(3) 土坑 ……40
(4) 遺構外出土遺物 ……41
2 中葉 ……41
(1) 遺構の概要 ……41
(2) 竪穴住居跡 ……41
(3) 土坑・性格不明遺構 ……44
(4) 不整円形配列土坑 ……44
(5) 遺構外出土遺物 ……45
3 後葉 ……45
(1) 遺構の概要 ……45
(2) 竪穴住居跡 ……45
(3) 土坑・性格不明遺構 ……59
(4) 遺構外出土遺物他 ……60
4 土器 ……61
(1) 概略 ……61
(2) 分類 ……61
第3節 後・晩期 時期不明 ……70
1 後・晩期 ……70
(1) 遺構の概要 ……70
(2) 各地区の様相 ……70
2 後・晩期土器 ……74
(1) 概略 ……74
(2) 分類 ……74
3 時期不明 ……77
(1) 竪穴住居跡 ……77
(2) 土坑他 ……77
第4節 縄文時代石器 ……79
1 概要 ……79
2 分類 ……79
3 SK1321周辺部出土の石器について ……86
4 石器組成と石材組成 ……86
第Ⅳ章 縄文時代晩期末・弥生時代・古墳時代後期 ……93
第1節 縄文時代晩期末～弥生時代前期 ……93
1 遺構 ……93
(1) 遺構の概要 ……93
(2) 性格不明遺構 ……93
2 遺構外出土遺物 ……95
第2節 弥生時代後期 ……95
1 遺構 ……95

(1) 遺構の概要 ……95
(2) 竪穴住居跡 ……95
(3) 土坑 ……97
2 遺構外出土遺物 ……97
第3節 古墳時代後期 ……97
1 遺構 ……97
(1) 遺構の概要 ……97
(2) 竪穴住居跡 ……97
2 遺構外出土遺物 ……98
第Ⅴ章 平安時代～中世前期・安土桃山～江戸時代・時期不明 ……99
第1節 平安時代～中世前期 ……99
1 遺構 ……99
(1) 遺構の概要 ……99
(2) 竪穴住居跡 ……99
(3) 土坑 ……113
2 遺構外出土遺物 ……113
第2節 安土桃山～江戸時代・時期不明 ……114
1 安土桃山～江戸時代 ……114
(1) 遺構の概要 ……114
(2) Ｃ３地区の遺構 ……114
(3) Ｆ１地区の遺構 ……116
(4) Ｅ地区の遺構 ……117
(5) Ｈ地区の遺構 ……117
2 時期不明 ……118
第3節 土器・石器・金属製品・鍛冶資料 ……120
1 平安時代～中世前期の土器 ……120
(1) 器種分類 ……120
(2) 時期区分 ……120
2 石器(砥石) ……122
3 金属製品・鍛冶資料 ……122
(1) 鉄製品 ……122
(2) 銅製品 ……124
(3) 鍛冶資料 ……124
第Ⅵ章 成果と課題 ……125
第1節 吉野の地形地質と活断層調査 ……125
第2節 吉野遺跡群出土黒曜石製石器の産地推定 ……158
第3節 吉野遺跡群における集落の変遷 ……169
結語 ……183

挿　図　目　次

第１図　吉野遺跡群分布図
第２図　年度別調査区
第３図　調査区位置図およびグリッド設定図
第４図　各地区基本層序
第５図　遺跡群内で検出された溝と自然流路
第６図　上松町の遺跡分布図
第７図　周辺の遺跡出土遺物
第８図　縄文時代早・前期遺構分布状況
第９図　早・前期第Ｉ群３・４・８類ａ土器
第10図　早・前期第Ｉ群３～９類土器の様相
第11図　縄文時代中期初頭～前葉遺構分布状況
第12図　縄文時代中期中葉遺構分布状況
第13図　縄文時代中期後葉Ｉ期遺構分布状況
第14図　縄文時代中期後葉II期遺構分布状況
第15図　縄文時代後・晩期遺構分布状況
第16図　縄文時代晩期末・弥生時代・古墳時代後期遺構分布状況
第17図　平安時代～中世前期遺構分布状況
第18図　安土桃山～江戸時代遺構分布状況
第19図　模式的に示した木曽谷とその周辺の地塊の配置
第20図　木曽郡の山系・水系・断層系
第21図　吉野遺跡群Ｄ地区・断層露頭の位置図
第22図　６月の断層露頭スケッチ
第23図　トレンチの位置・大きさ・スケッチ図番号の壁面
第24図　Ｓトレンチのｓ面スケッチ
第25図　ＳトレンチＳ面の拡大スケッチ
第26図　ＳトレンチＳ面の拡張
第27図　ＳトレンチのＥ面スケッチ
第28図　ＳトレンチのＮ面スケッチ
第29図　ＮトレンチのＳ面スケッチ
第30図　ＮトレンチのＮ面スケッチ
第31図　Ｓトレンチ壁面の砂粒分析試料採取位置
第32図ａ　14Ｃ年代測定試料採取場所(1)
第32図ｂ　14Ｃ年代測定試料採取場所(2)
第33図ａ　吉野扇状地の微小地形面区分図
第33図ｂ　吉野扇状地の地形面区分図
第34図　吉野扇状地　前野の新規小扇状地
第35図　上松町中央部の地形面区分図と凡例
第36図　上松町の空から見た吉野扇状地と木曽駒ヶ岳の西面
第37図　原石を採取・分析した東日本の黒曜石産地
第38図　黒曜石産地の判別図(1)
第39図　黒曜石産地の判別図(2)
第40図　吉野遺跡群における集落の変遷(1)
第41図　吉野遺跡群における集落の変遷(2)
第42図　吉野遺跡群における集落の変遷(3)

挿　表　目　次

第１表　上松町遺跡地名表
第２表　縄文時代石器組成
第３表　縄文時代竪穴住居跡別石器出土点数
第４表　縄文時代石器観察表
第５表　上松町吉野砂粒分析結果
第６表　上松町吉野における上松断層トレンチでの黒ボクの14Ｃ年代
第７表　産地原石判別群
第８表　吉野遺跡群出土黒曜石製石器の産地組成
第９表　吉野遺跡群出土黒曜石製石器産地推定結果
第10表　吉野遺跡群縄文時代中期の竪穴住居形態

写　真　目　次

巻頭図版
1　吉野遺跡群遠景
2　人面装装飾付土器
3　御物石器
本文中写真
1　活断層検出状況(1)
2　活断層検出状況(2)

遺構・遺物図版目次

図版１　縄文時代早・前期　Ｄ地区遺構分布状況
図版２　縄文時代早・前期　Ｄ地区竪穴住居跡
図版３　縄文時代早・前期　Ｄ地区土坑
図版４　縄文時代早・前期　Ｄ地区集石・集石炉
図版５　縄文時代早・前期　Ｅ地区竪穴住居跡(1)
図版６　縄文時代早・前期　Ｅ地区竪穴住居跡(2)
　　およびＣ２ａ地区
図版７　縄文時代早・前期　Ｃ２ａ地区土坑
図版８　縄文時代早・前期土器(1)
図版９　縄文時代早・前期土器(2)
図版10　縄文時代早・前期土器(3)
図版11　縄文時代早・前期土器(4)
図版12　縄文時代早・前期土器(5)
図版13　縄文時代早・前期土器(6)
図版14　縄文時代早・前期土器(7)
図版15　縄文時代早・前期土器(8)
図版16　縄文時代早・前期土器(9)
図版17　縄文時代早・前期土器(10)
図版18　縄文時代中期初頭～前葉遺構図(1)
図版19　縄文時代中期初頭～前葉遺構図(2)
図版20　縄文時代中期初頭～前葉遺構図(3)
図版21　縄文時代中期初頭～前葉遺構図(4)
図版22　縄文時代中期初頭～前葉遺構図(5)
図版23　縄文時代中期初頭～前葉土器(1)
図版24　縄文時代中期初頭～前葉土器(2)
図版25　縄文時代中期初頭～前葉土器(3)
図版26　縄文時代中期初頭～前葉土器(4)
図版27　縄文時代中期初頭～前葉土器(5)
図版28　縄文時代中期初頭～前葉土器(6)
図版29　縄文時代中期初頭～前葉土器(7)
図版30　縄文時代中期初頭～前葉土器(8)
図版31　縄文時代中期初頭～前葉土器(9)
図版32　縄文時代中期初頭～前葉土器(10)
図版33　縄文時代中期初頭～前葉土器(11)
図版34　縄文時代中期初頭～前葉土器(12)
図版35　縄文時代中期初頭～前葉土器(13)
図版36　縄文時代中期初頭～前葉土器(14)
図版37　縄文時代中期初頭～前葉土器(15)
図版38　縄文時代中期初頭～前葉土器(16)
図版39　縄文時代中期初頭～前葉土器(17)
図版40　縄文時代中期初頭～前葉土器(18)
図版41　縄文時代中期初頭～前葉土器(19)
図版42　縄文時代中期初頭～前葉土器(20)
図版43　縄文時代中期中葉遺構図(1)
図版44　縄文時代中期中葉遺構図(2)
図版45　縄文時代中期中葉遺構図(3)
図版46　縄文時代中期中葉遺構図(4)
図版47　縄文時代中期中葉遺構図(5)
図版48　縄文時代中期中葉遺構図(6)
図版49　縄文時代中期中葉土器(1)
図版50　縄文時代中期中葉土器(2)
図版51　縄文時代中期中葉土器(3)・初頭～前葉土器
図版52　縄文時代中期中葉土器(4)
図版53　縄文時代中期中葉土器(5)
図版54　縄文時代中期中葉土器(6)
図版55　縄文時代中期中葉土器(7)
図版56　縄文時代中期後葉Ｉ期遺構図(1)
図版57　縄文時代中期後葉Ｉ期遺構図(2)
図版58　縄文時代中期後葉Ｉ期遺構図(3)
図版59　縄文時代中期後葉Ｉ期遺構図(4)
図版60　縄文時代中期後葉Ｉ期遺構図(5)
図版61　縄文時代中期後葉Ｉ期遺構図(6)
図版62　縄文時代中期後葉Ｉ期遺構図(7)
図版63　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(1)
図版64　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(2)
図版65　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(3)
図版66　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(4)
図版67　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(5)
図版68　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(6)
図版69　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(7)
図版70　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(8)
図版71　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(9)
図版72　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(10)
図版73　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(11)
図版74　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(12)
図版75　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(13)
図版76　縄文時代中期後葉II期遺構図(1)
図版77　縄文時代中期後葉II期遺構図(2)
図版78　縄文時代中期後葉II期遺構図(3)
図版79　縄文時代中期後葉II期遺構図(4)
図版80　縄文時代中期後葉II期遺構図(5)
図版81　縄文時代中期後葉II期遺構図(6)
図版82　縄文時代中期後葉II期遺構図(7)
図版83　縄文時代中期後葉II期遺構図(8)
図版84　縄文時代中期後葉II期遺構図(9)
図版85　縄文時代中期後葉II期遺構図(10)

図版86　縄文時代中期後葉II期遺構図(11)
図版87　縄文時代中期後葉II期遺構図(12)
図版88　縄文時代中期後葉II期遺構図(13)
図版89　縄文時代中期後葉II期遺構図(14)
図版90　縄文時代中期後葉II期遺構図(15)
図版91　縄文時代中期後葉II期土器(1)
図版92　縄文時代中期後葉II期土器(2)
図版93　縄文時代中期後葉II期土器(3)
図版94　縄文時代中期後葉II期土器(4)
図版95　縄文時代中期後葉II期土器(5)
図版96　縄文時代中期後葉II期土器(6)
図版97　縄文時代中期後葉II期土器(7)
図版98　縄文時代中期後葉II期土器(8)
図版99　縄文時代中期後葉II期土器(9)
図版100　縄文時代中期後葉II期土器(10)
図版101　縄文時代中期後葉II期土器(11)
図版102　縄文時代中期後葉II期土器(12)
図版103　縄文時代中期後葉II期土器(13)
図版104　縄文時代中期後葉II期土器(14)
図版105　縄文時代中期後葉II期土器(15)
図版106　縄文時代中期後葉II期土器(16)
図版107　縄文時代中期後葉II期土器(17)
図版108　縄文時代中期後葉II期土器(18)
図版109　縄文時代中期後葉II期土器(19)
図版110　縄文時代中期後葉II期土器(20)
図版111　縄文時代中期後葉II期土器(21)
図版112　縄文時代中期後葉II期土器(22)
図版113　縄文時代中期後葉土器(1)
図版114　縄文時代中期後葉土器(2)
図版115　縄文時代中期後葉土器(3)
図版116　縄文時代中期後葉土器(4)
図版117　縄文時代後・晩期遺構図(1)
図版118　縄文時代後・晩期遺構図(2)
図版119　縄文時代後・晩期遺構図(3)
図版120　時期不明遺構図(1)
図版121　時期不明遺構図(2)
図版122　時期不明遺構図(3)
図版123　時期不明遺構図(4)
図版124　時期不明遺構図(5)
図版125　縄文時代後・晩期土器(1)
図版126　縄文時代後・晩期土器(2)
図版127　縄文時代後・晩期土器(3)
図版128　縄文時代後・晩期土器(4)
図版129　縄文時代後・晩期土器(5)
図版130　縄文時代石器(1)
図版131　縄文時代石器(2)
図版132　縄文時代石器(3)
図版133　縄文時代石器(4)
図版134　縄文時代石器(5)
図版135　縄文時代石器(6)
図版136　縄文時代石器(7)
図版137　縄文時代石器(8)
図版138　縄文時代石器(9)
図版139　縄文時代石器(10)
図版140　縄文時代石器(11)
図版141　縄文時代石器(12)
図版142　縄文時代石器(13)
図版143　縄文時代石器(14)
図版144　縄文時代石器(15)
図版145　縄文時代晩期末・弥生時代・古墳時代後期遺構図(1)
図版146　縄文時代晩期末・弥生時代・古墳時代後期遺構図(2)
図版147　縄文時代晩期末・弥生時代・古墳時代後期遺構図(3)
図版148　縄文時代晩期末・弥生時代・古墳時代後期土器(1)
図版149　縄文時代晩期末・弥生時代・古墳時代後期土器(2)
図版150　縄文時代晩期末・弥生時代・古墳時代後期土器(3)
図版151　縄文時代晩期末・弥生時代・古墳時代後期土器(4)
図版152　縄文時代晩期末・弥生時代・古墳時代後期土器(5)
図版153　平安時代～中世前期遺構図(1)
図版154　平安時代～中世前期遺構図(2)
図版155　平安時代～中世前期遺構図(3)
図版156　平安時代～中世前期遺構図(4)
図版157　平安時代～中世前期遺構図(5)
図版158　平安時代～中世前期遺構図(6)
図版159　平安時代～中世前期遺構図(7)
図版160　平安時代～中世前期遺構図(8)
図版161　平安時代～中世前期遺構図(9)
図版162　平安時代～中世前期遺構図(10)
図版163　平安時代～中世前期遺構図(11)
図版164　平安時代～中世前期遺構図(12)
図版165　平安時代～中世前期遺構図(13)
図版166　平安時代～中世前期土器(1)
図版167　平安時代～中世前期土器(2)
図版168　平安時代～中世前期土器(3)
図版169　平安時代～中世前期土器(4)
図版170　平安時代～中世前期土器(5)
図版171　平安時代～中世前期土器(6)
図版172　平安時代～中世前期土器(7)
図版173　安土桃山～江戸時代・時期不明遺構図(1)
図版174　安土桃山～江戸時代・時期不明遺構図(2)
図版175　安土桃山～江戸時代・時期不明遺構図(3)

図版176　安土桃山～江戸時代・時期不明遺構図(4)
図版177　安土桃山～江戸時代・時期不明遺構図(5)
図版178　安土桃山～江戸時代・時期不明遺構図(6)
図版179　安土桃山～江戸時代・時期不明遺構図(7)
図版180　安土桃山～江戸時代・時期不明遺構図(8)
図版181　安土桃山～江戸時代・時期不明遺構図(9)
図版182　安土桃山～江戸時代・時期不明遺構図(10)
図版183　安土桃山～江戸時代土器
図版184　平安時代以降石器・銭貨・銅製品・土製品・玉類
図版185　平安時代以降鉄製品(1)
図版186　平安時代以降鉄製品(2)
図版187　平安時代以降鉄製品(3)

写真図版目次

ＰＬ１　吉野遺跡群遠景・遺構空中写真(1)
ＰＬ２　吉野遺跡群遠景・遺構空中写真(2)
ＰＬ３　吉野遺跡群遠景・遺構空中写真(3)
ＰＬ４　縄文時代早・前期遺構
ＰＬ５　縄文時代中期初頭～前葉遺構
ＰＬ６　縄文時代中期中葉遺構(1)
ＰＬ７　縄文時代中期中葉遺構(2)
ＰＬ８　縄文時代中期後葉Ｉ期遺構(1)
ＰＬ９　縄文時代中期後葉Ｉ期遺構(2)
ＰＬ10　縄文時代中期後葉II期遺構(1)
ＰＬ11　縄文時代中期後葉II期遺構(2)
ＰＬ12　縄文時代中期後葉II期遺構(3)
ＰＬ13　縄文時代中期後葉II期遺構(4)
ＰＬ14　縄文時代後期～晩期・時期不明遺構
ＰＬ15　縄文時代晩期末・弥生時代・古墳時代後期遺構
ＰＬ16　平安時代～中世前期遺構(1)
ＰＬ17　平安時代～中世前期遺構(2)
ＰＬ18　平安時代～中世前期遺構(3)
ＰＬ19　平安時代～中世前期遺構(4)
ＰＬ20　安土桃山～江戸時代・時期不明遺構(1)
ＰＬ21　安土桃山～江戸時代・時期不明遺構(2)
ＰＬ22　縄文時代早・前期土器(1)
ＰＬ23　縄文時代早・前期土器(2)
ＰＬ24　縄文時代早・前期土器(3)
ＰＬ25　縄文時代早・前期土器(4)
ＰＬ26　縄文時代早・前期土器(5)
ＰＬ27　縄文時代中期初頭～前葉土器(1)
ＰＬ28　縄文時代中期初頭～前葉土器(2)
ＰＬ29　縄文時代中期初頭～前葉土器(3)
ＰＬ30　縄文時代中期初頭～前葉土器(4)
ＰＬ31　縄文時代中期初頭～前葉土器(5)
ＰＬ32　縄文時代中期初頭～前葉土器(6)
ＰＬ33　縄文時代中期初頭～前葉土器(7)
ＰＬ34　縄文時代中期初頭～前葉土器(8)
ＰＬ35　縄文時代中期初頭～前葉土器(9)
ＰＬ36　縄文時代中期初頭～前葉土器(10)・中期中葉土器
ＰＬ37　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(1)
ＰＬ38　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(2)
ＰＬ39　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(3)
ＰＬ40　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(4)
ＰＬ41　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(5)
ＰＬ42　縄文時代中期後葉Ｉ期土器(6)
ＰＬ43　縄文時代中期後葉II期土器(1)
ＰＬ44　縄文時代中期後葉II期土器(2)
ＰＬ45　縄文時代中期後葉II期土器(3)
ＰＬ46　縄文時代中期後葉II期土器(4)
ＰＬ47　縄文時代中期後葉II期土器(5)
ＰＬ48　縄文時代中期後葉II期土器(6)
ＰＬ49　縄文時代中期後葉II期土器(7)
ＰＬ50　縄文時代中期後葉II期土器(8)・後葉土器
ＰＬ51　縄文時代中期後葉II期土器(9)・後葉土器
ＰＬ52　縄文時代後・晩期土器
ＰＬ53　縄文時代石器(1)
ＰＬ54　縄文時代石器(2)
ＰＬ55　縄文時代石器(3)
ＰＬ56　縄文時代石器(4)
ＰＬ57　縄文時代石器(5)
ＰＬ58　縄文時代石器(6)
ＰＬ59　縄文時代晩期末・弥生時代・古墳時代後期土器(1)
ＰＬ60　縄文時代晩期末・弥生時代・古墳時代後期土器(2)
ＰＬ61　平安時代～中世前期土器(1)
ＰＬ62　平安時代～中世前期土器(2)
ＰＬ63　安土桃山～江戸時代土器・銭貨
ＰＬ64　平安時代以降鉄製品(1)
ＰＬ65　平安時代以降鉄製品(2)

第Ｉ章　序　　説

第１節　調査の概要

１　調査に至る経緯

本書に所収する吉野遺跡群の発掘調査は、すべて県営中山間総合整備事業〈上松町吉野地区〉に関連して行われたものである。同事業は上松町を申請者とし、長野県が代行事業者となって、平成８年度から平成11年度までの４年次にわたって実施された。主な事業内容は農業基盤の整備であり、木曽地方事務所が事業母胎となり、水田および畑地の「土地改良」を目的として事業化された。

吉野地区では平成７(1995)年度に県営農業基盤整備事業が計画された段階で、対象地内のＡ・Ｂ・Ｃ遺跡が周知の遺跡として登録されていたため、同年夏に現地踏査による分布調査を行った結果、予定工区内で新発見も合わせて14カ所の遺跡および埋蔵文化財包蔵地を確認するに至った(第１図)。

このため、長野県教育委員会・木曽地方事務所土地改良課・木曽郡町村会・上松町教育委員会により保護協議が行われ、平成８年度事業工区内の試掘調査を行うこととなった。同年11月に試掘調査が行われ、遺構が事業地内の広範囲に存在し、事業実施前の発掘調査が必要であることが判明した。平成８年４月の協議では、吉野地区の整備事業が４年計画であるため、年度ごとの対象工区について、前年に試掘を行い、翌年に発掘を進める点と調査報告書を平成12年度を目安に作成する点が了解された。同年６月に県教育委員会より木曽地方事務所に対し、工事に先立つ発掘調査を上松町教育委員会に委託して行うよう通達が出された。上松町は、『木曽郡埋蔵文化財調査委託実施要綱』によって木曽郡町村会と技術指導委託協定書を結び、同会に専門的技術指導を委託したうえで、吉野遺跡群の発掘調査が開始された。

２　調査体制と経過

年度ごとにおける調査体制と整理体制の概要は、以下に掲げるとおりである(第２・３図)。

(年　度)	(発掘調査地区)	(調査面積)
平成８年度	Ｄ地区(遺跡)	5,600㎡
平成９年度	Ａ１・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ地区(遺跡)	15,500㎡
平成10年度	Ａ２～３・Ｂ１～２・Ｃ１・Ｊ１・Ｌ・Ｍ地区(遺跡)	15,400㎡
平成11年度	Ｃ２・Ｊ２～３・Ｉ・Ｋ・Ｎ地区(遺跡)	38,400㎡

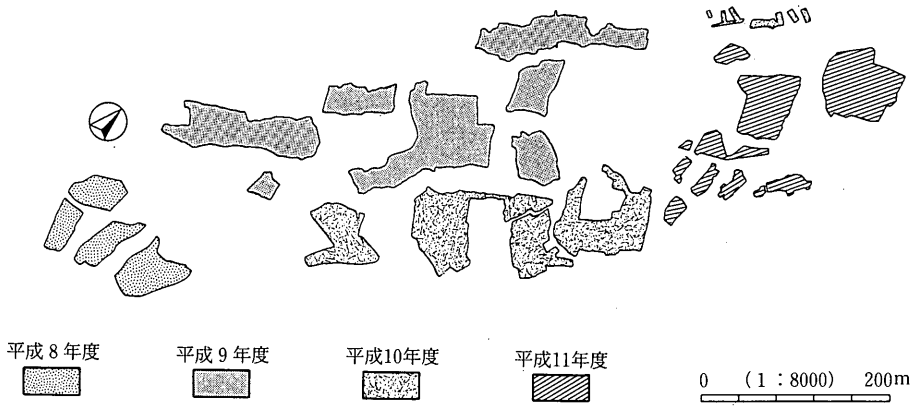
平成８（1996）年度

調査体制　事務局　上松町教育委員会

石原初雄(教育長)

橋本一郎(教育次長)

第１図　吉野遺跡群分布図



第２図　年度別調査区

村田広司(社会教育係長)

調査担当　　木曽郡町村会

松原和也(埋蔵文化財保護専門指導員)

神村　透(埋蔵文化財保護専門指導員、嘱託職員)

調査期間　６月17日～９月13日

初年度はＤ地区の調査が行われ、縄文時代と平安時代の竪穴住居跡が発見された。また、地区内において木曽谷では初めて活断層が検出され、松島信幸氏に依頼して調査を行った。10月には、平成９年度以降の調査に対応するため、長野県埋蔵文化財センターから調査研究員の派遣を受ける方針が協議された。年度末には、次年度対象工区の試掘調査が行われた。

平成９（1997）年度

調査体制　　事務局　　上松町教育委員会

石原初雄(教育長)

橋本一郎(教育次長)

村田広司(社会教育係長)

調査担当　　木曽郡町村会

若林　卓(長野県埋蔵文化財センター派遣調査員)

神村　透(埋蔵文化財保護専門指導員、嘱託職員)

調査期間　５月６日～12月17日

Ａ１・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ地区の調査が行われた。Ａ１地区では縄文時代の敷石遺構、Ｆ・Ｇ地区では平安時代の竪穴住居跡群、Ｈ地区では江戸時代の墓を調査した。Ｅ地区は本遺跡群において遺構密集度がもっとも高く、縄文中期後葉の竪穴住居跡20軒以上や、弥生時代後期の竪穴住居跡６軒などが発見された。年度末には次年度対象工区の試掘調査が行われた。

平成10（1998）年度

調査体制　　事務局　　上松町教育委員会

石原初雄(教育長)

前野一夫(教育次長)

田上洋介(社会教育係長)

調査担当　　澤谷昌英(長野県埋蔵文化財センター派遣調査員)

調査期間　4月23日～12月16日

Ａ２～３・Ｂ１～２・Ｃ１・Ｊ１・Ｌ・Ｍ地区の調査が行われた。Ｌ・Ｍ地区については試掘により、面的な調査の必要なしと判断した。Ｊ１地区の北西部は本調査でも遺物が若干散布するのみで、遺構の検出には至らなかった。Ａ地区では縄文時代中期・弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代の遺構が検出された。Ｂ地区では平安時代の竪穴住居跡や中世以降の建物跡が検出された。Ｃ地区では平安時代の竪穴住居跡が約15軒検出されている。年度末には次年度対象工区の試掘調査が行われた。

平成11（1999）年度

調査体制　事務局　　上松町教育委員会

石原初雄(教育長)

前野一夫(教育次長)

田上洋介(社会教育係長)

調査担当　　広田和穂(長野県埋蔵文化財センター派遣調査員)

調査期間　4月8日～12月15日

Ｃ２～４・Ｊ２～３・Ｉ・Ｋ・Ｎ地区の調査が行われた。４・５月に試掘調査を行い、今年度分の調査範囲を確定した。遺構・遺物が検出されなかったＪ・Ｃ地区の一部については、保護協議を行ったうえで調査対象から除外した。Ｋ・Ｎ地区は試掘により、面的な調査の必要なしと判断した。本調査は５月以降実施し、Ｉ地区では縄文中期の集落を、Ｊ・Ｃ地区では縄文中期と平安時代の集落跡を調査した。Ｃ地区では江戸時代初期と思われる礎石をもつ建物跡なども確認されている。発掘調査終了後には、注記・接合・遺物実測などを行った。

平成12（2000）年度

事務局　　上松町教育委員会

石原初雄(教育長)　10月１日から上田朝男

田上洋介(教育次長)

原　浩志(社会教育係長)

整理担当　　広田和穂(長野県埋蔵文化財センター派遣調査員)

贄田　明(長野県埋蔵文化財センター派遣調査員)

遺構・遺物の実測・トレース・図版作成・遺物写真撮影・原稿執筆を行った。

平成13（2001）年度

事務局　　上松町教育委員会

上田朝男(教育長)

田上洋介(教育次長)

原　浩志(社会教育係長)

印刷業務が行われ、本書の刊行となった。

3　委託事業等

委託事業等に関して、下記の諸先生・諸機関に依頼した。記して謝意を表する。(敬称略)

活断層調査：通商産業省工業技術院地質調査所　須貝俊彦・奥村晃史・苅谷愛彦
飯田市美術博物館客員研究員　松島信幸
黒曜石の産地同定：沼津工業高等専門学校物質工学科　望月明彦
遺跡・遺構の測量と航空写真：株式会社 写真測図研究所
土器の実測・トレース：株式会社 シン技術コンサル
共同体研究会
石器の実測・トレース：株式会社 シン技術コンサル
鉄器の保存処理：財団法人 長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

4　発掘・整理作業参加者

吉野遺跡群の発掘調査および整理作業に際しては、多くの皆様に御協力をいただいた。
記して謝意を表する。　(五十音順・敬称略)

大戸美恵子　大橋貞雄　大畑美知子　大原はるみ　大屋美代子　小坂　賢　織田さゆり　加藤登美子
金城芳子　上原温子　上村由美子　木下はる代　久保寺すみ子　久保寺　倍　久保寺　実　栗林千世子
黒沢義男　越けさ子　小幡和枝　小畑恵美　小林佳奈子　小林記一郎　坂上金次郎　杉澤忠彦　高倉良子
武居泰雄　田沢清子　忠地　弘　田中勝房　田中はる江　塚本政一　辻　美智子　徳原トヨ　徳原とら子
中栗鐵男　中沢清子　中畑清子　中畑龍太郎　野口高男　野田武彦　畑中喜代子　般若芳行　福田武正
福邑国一　藤原芳子　古瀬定一　細澤幸弘　前野カマノ　前野とし子　前野光代　牧　晴世　丸山アツ子
三浦真智子　森田好弘　八木沼康子　横道ふさ子　横道みね子

第２節　調査・整理の方法

１　グリッドの設定と測量方法

グリッドの設定は、国土座標のメッシュを用いた。測量基準点は国土地理院の平面直角座標系の原点(第Ⅷ系、Ｘ＝0.0000　Ｙ＝0.0000)を起点とする座標中に、区切りのいい任意のＸ・Ｙ座標を求め、本遺跡の測量基準線とした。これを基にグリッドが設定され、14の大地区(200×200m)を設定した。また大地区を分割して25の中地区(40×40m)、更に中地区を分割して小地区(８×８m)を設定した。大地区には南西から北東に向かってⅠ、Ⅱ…の記号を、中地区には北西から南東へ向かってＡ、Ｂ…の記号を、小地区には北西から南東へ向かって１、２…の数字を付した。測量基準杭は小地区を基本とし、測量業者に委託して設定した(第３図)。また調査で検出された遺構の記録および遺物の取上げには、原則として小地区単位ごとの割付図を用いたが、竪穴住居跡と掘立柱建物跡などについては個別遺構図を作成した。縮尺は1：20を基本とし、必要に応じ１：10とした。一部の地区は航空測量を業者に委託して行った。

２　遺構記号と遺構番号

遺構名称は記録、注記、収納等の便宜を図るため記号を用い、遺構番号は記号ごとの検出順に付した。遺構記号は、基本的に検出時に、主として平面的な形態や分布の特徴を指標として決定したため、必ずしも個々の遺構の性格を示していない。本書では混乱を避けるため、記号・番号を付した遺構に関しては、原則として調査時のものを本報告で用いた。ただし、一部の遺構については遺跡全体での整合性を図るため、番号変更した例がある(溝跡・土坑に多い)。遺構記号は以下のとおりである。

ＳＢ：２m以上を目安とした方形・円形・楕円形の掘り込み。(竪穴住居跡、竪穴状遺構)
ＳＫ：SBより平面形が小さな掘り込み。(土坑、貯蔵穴、井戸跡、陥し穴　等)
ＳＤ：帯状に連続する掘り込み。(溝跡)
ＳＦ：火を焚いたあとが面的に広がるもの。(火床、炉、焼土　等)
ＳＴ：小さな落ち込みや石が一定間隔で方形、円形に配列されるもの。(掘立柱建物跡)
ＳＨ：石が面的に集中するもの。
ＳＬ：畠
ＳＸ：以上の遺跡記号に該当しない性格不明遺構。
ＮＲ：自然流路

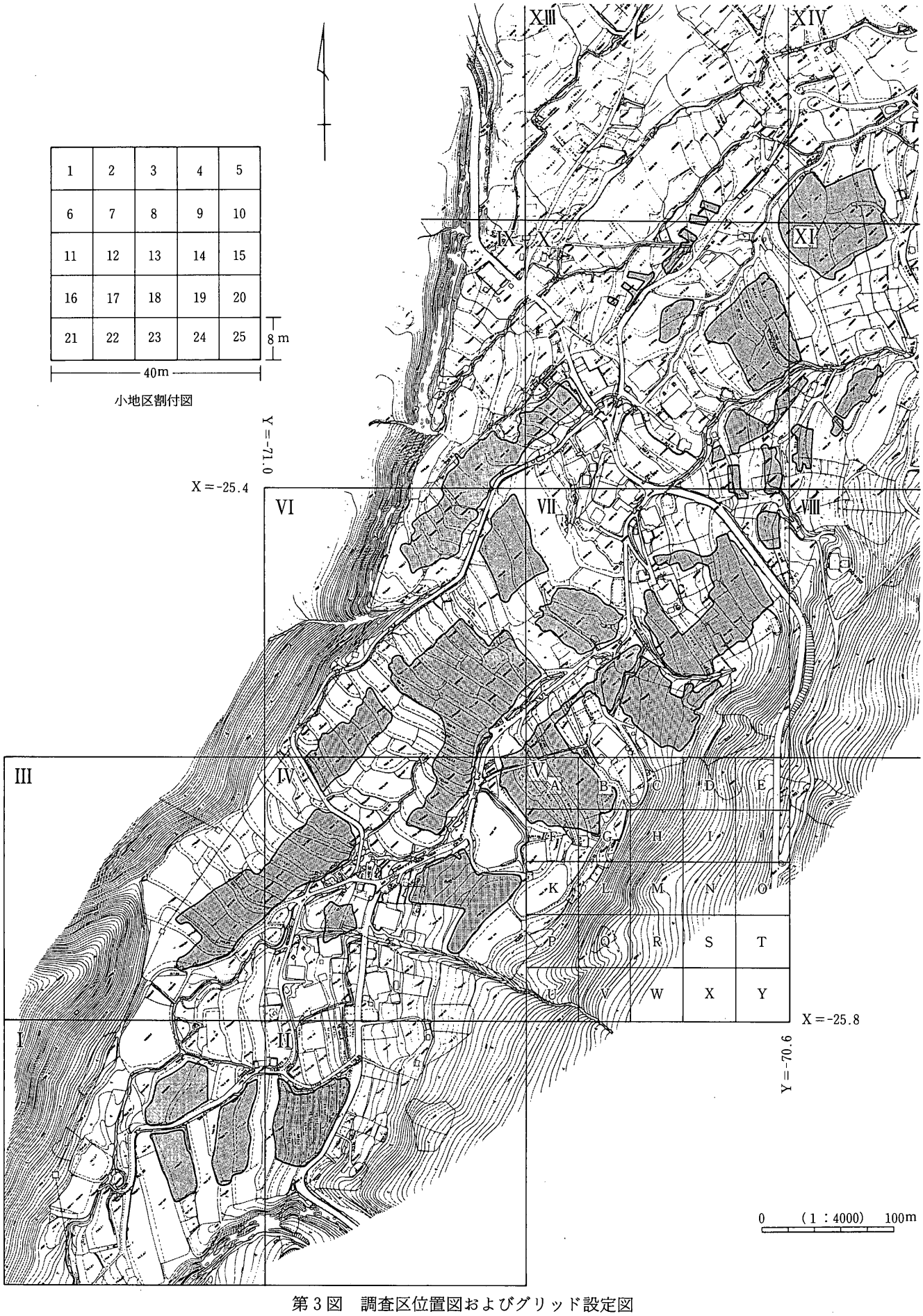
３　注記・復元・遺物実測

注記については、遺跡名と地区名→遺構記号と番号、グリッド名→取上ナンバーや層位の順に記した。ただし調査から整理までの年数が長いため、注記に一部不統一も見られる。

まず遺跡名は、ローマ字で「上松町」の頭文字の「Ａ」と「吉野遺跡」の「Ｙ」を、地区名にはＡ～Ｎを、調査地区不明の場合はＺを用いた。続く遺構名・番号は、前項で示した記号を用い、遺構外出土の場合はグリッド名を用いた。最後に取上ナンバーや層位を、出土状況が明確な場合に記した。層位が不明な場合は覆土の「フ」や埋土の「マ」が記されている。(注記例　AYF SB59 マ・AYG VIF-25 Z等)

土器の復元については、長野県埋蔵文化財センターの協力を得ている。

実測については、器形復元が可能な縄文土器と、石器の大半については外部委託を行い、それ以外は木曽広域連合埋蔵文化財整理室において行った。



第３図　調査区位置図およびグリッド設定図

第II章　遺跡群周辺の環境

第１節　遺跡群周辺の環境

１　遺跡群の概要

上松町は長野県の西南に位置する木曽谷のなかにある。木曽谷は東を中央アルプス、西を飛騨山脈に挟まれ、その間には木曽川が流れており、地域全体が急峻な谷状地形を呈している。このため居住可能な地域は木曽川とその支流である小河川によって造られた河岸段丘・小扇状地などに集中する。また全体に標高が高く、気候条件も県下の平野部に比べればやや寒冷である。これらの地理的条件は、集落の立地に大きな影響を与えていると推測される(青沼1986)(巻頭写真　PL１～３)。

吉野遺跡群は、中央アルプス駒ヶ岳(2,956m)に源を発する滑川の左岸に形成された扇状地上に位置する。この扇状地の南西側には滑川が流れ、南東側には風越山(1,699m)がそびえる。北東側は７km程で駒ヶ岳に達し、遺跡群からも険しい山並みを間近に望むことが出来る。遺跡群は標高760～840mの範囲に広がり、面積は調査されただけでも7.5ha以上におよぶ。

２　遺跡群内の基本層序

吉野遺跡群は、上述のとおり駒ヶ岳から流れる滑川の左岸に発達した扇状地上に位置する。上方斜面から土石流によってくり返しもたらされたと考えられる堆積物が厚く堆積し、加えて小河川からの堆積も見られる。南東側では斜面の崩落による堆積も存在するなど、調査区内における地層は均一ではなく、複雑な堆積状況を示している(第VI章第１節)。また本遺跡群は耕作地に適した緩斜面に位置していることから、旧来より棚田状の田畑が造成され、遺構が等高線に沿って削平される場合も目立つ。

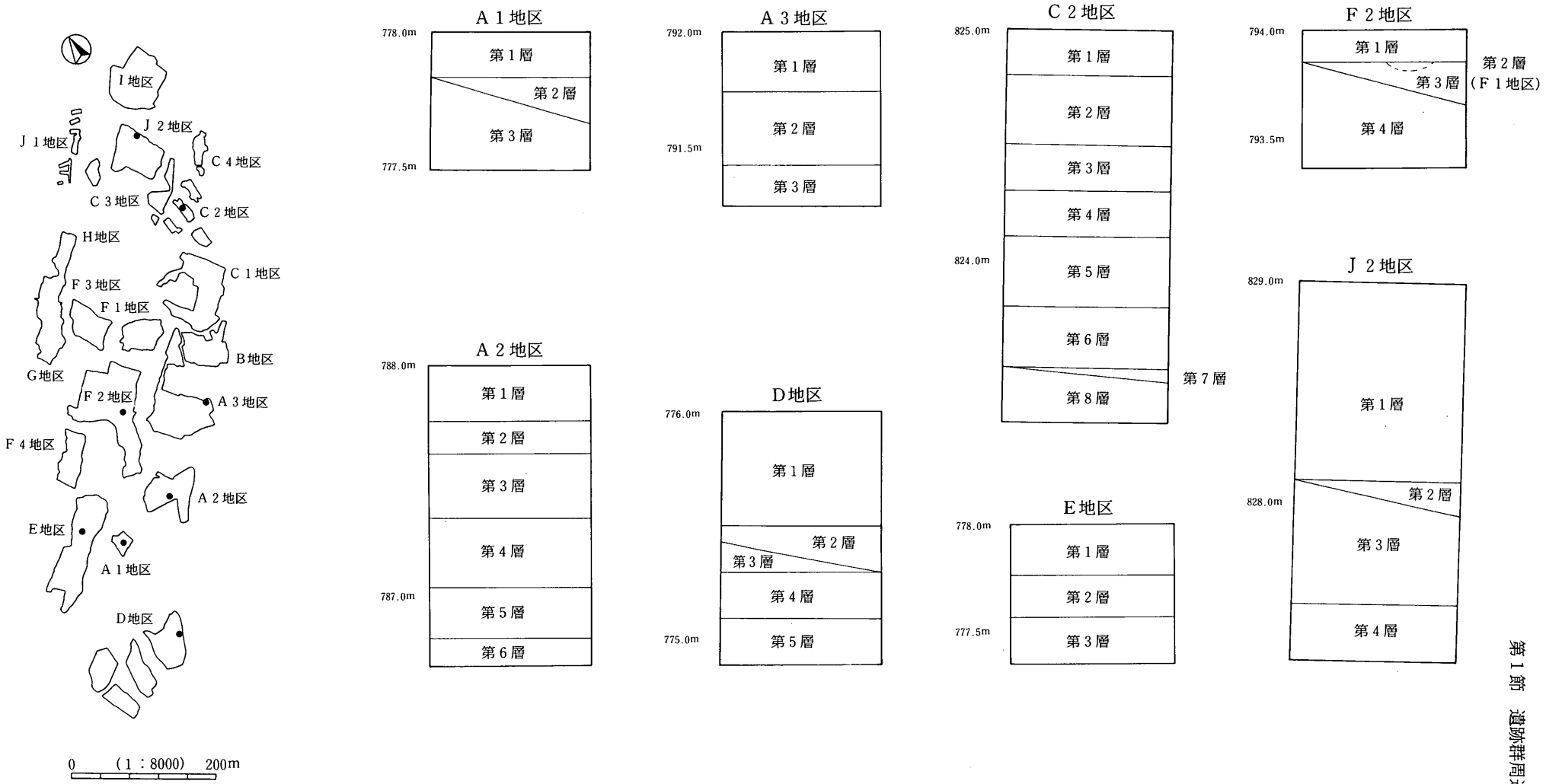
これに加え、調査対象地が広範囲で事業が多年度にわたったため、遺跡群全体の統一した基本層序を明らかに出来ない状況がある。よって、遺跡群内で代表的な堆積状況を示す地区の土層を個別に紹介し、基本層序の概要を提示したい(第４図)。

Ｊ２地区

第１層は耕土。第２層は暗褐色土で、自然流路の堆積物。部分的に検出され、拳～人頭大の礫を多く含む。第３層は褐色土～黒褐色土で、縄文時代中期～平安時代の遺物包含層。第４層は黄褐色土層である。Ｊ２地区と同様の堆積を示すのがＩ地区とＪ１地区である。

Ｃ２地区

第１層は耕土。第２層は茶褐色の砂質土で、安土桃山～江戸時代の遺物包含層。第３層は黄褐色の砂質土。第４層は暗褐色土で、弥生時代～中世前期の遺物包含層。第５層は黄褐色の砂質土。第６層は黒色土で、縄文時代中期の遺物包含層。第７層は褐灰色の砂質土で、Ｃ２ａ地区で部分的に検出された。縄文時代早期の遺物を少量包含する。第８層は黄褐色の砂質土。当該地区では、近接する斜面の崩落が激しく、黄褐色の砂質土が各時代の遺物包含層を覆う状況が観察できる。しかし、第２層と第４層は後世の耕作で大きく削平を受けており、部分的に検出されたのみである。Ｃ２地区と同様の堆積を示すのがＣ３・４地


I地区
J 1地区
J 2地区
C 4地区
C 3地区
C 2地区
H地区
C 1地区
F 3地区
F 1地区
B地区
G地区
F 2地区
A 3地区
F 4地区
A 2地区
E地区
A 1地区
D地区
0　(1：8000)　200m
A 1地区
778.0m
第1層
第2層
第3層
777.5m
A 3地区
792.0m
第1層
第2層
791.5m
第3層
C 2地区
825.0m
第1層
第2層
第3層
第4層
824.0m
第5層
第6層
第7層
第8層
F 2地区
794.0m
第1層
第2層
第3層
(F 1地区)
793.5m
第4層
A 2地区
788.0m
第1層
第2層
第3層
第4層
787.0m
第5層
第6層
D地区
776.0m
第1層
第2層
第3層
第4層
775.0m
第5層
E地区
778.0m
第1層
第2層
777.5m
第3層
J 2地区
829.0m
第1層
第2層
828.0m
第3層
第4層

第4図　各地区基本層序

区である。

Ｆ２地区

第１層は耕土。第２層は茶褐色土。第３層は褐灰色の自然流路堆積層。中世以降の遺構が本層を掘り込むように検出されている。第４層は黒色の自然流路堆積層で、本層を掘り込むように平安時代～中世前期の遺構が検出された。Ｆ２地区と同様の堆積を示すのが、Ｂ１・Ｂ２・Ｃ１・Ｆ１・Ｆ３・Ｇ・Ｈ地区である。特に第２層はＦ１地区で部分的に検出されている。

Ａ３地区

第１層は耕土。第２層は黒褐色土で、縄文時代中期以降の遺物包含層。第３層は暗黄褐色土層である。

Ｅ地区

第１層は耕土。第２層は黒褐色土で、縄文時代以降の遺物包含層。第３層は明黄褐色土層である。本地区では第２層の削平が激しく、１層直下で、ほぼ第３層となる部分も見られる。Ｅ地区と同様の堆積を示すのが、Ｆ４地区である。

Ａ１地区

第１層は耕土。第２層は淡黄褐色の砂層で、縄文時代後・晩期の遺物包含層である。第３層は明黄褐色土層である。縄文時代後・晩期の包含層が単独で検出されたのは本地区のみである。

Ａ２地区

第１層は耕土。第２層は縄文時代中期以降の遺物包含層。第３層は黄褐色の砂層で、遺物を含まない。第４層は黒褐色土。第５層は黒色土で、縄文時代中期の遺物包含層。第６層は暗褐色土層である。

Ｄ地区

第１層は耕土。第２層は黒色土で、縄文時代中期以降の遺物包含層。削平が激しくＤ地区東端の調査区で確認されたのみである。第３層は砂礫層。第４層は黒色土層で、縄文時代早期の遺物包含層である。第５層は黄褐色土。特に第４層については、Ｃ２～４地区の第７層においても縄文時代早期の土器片が検出されており、両層が近似した時代の所産である可能性も推測される。また、Ｄ地区では活断層が調査されており、土層スケッチのＡ黒ボクが第２層、Ｂ黒ボクが第４層に対応すると推測される(第VI章第１節)。

3　自然流路

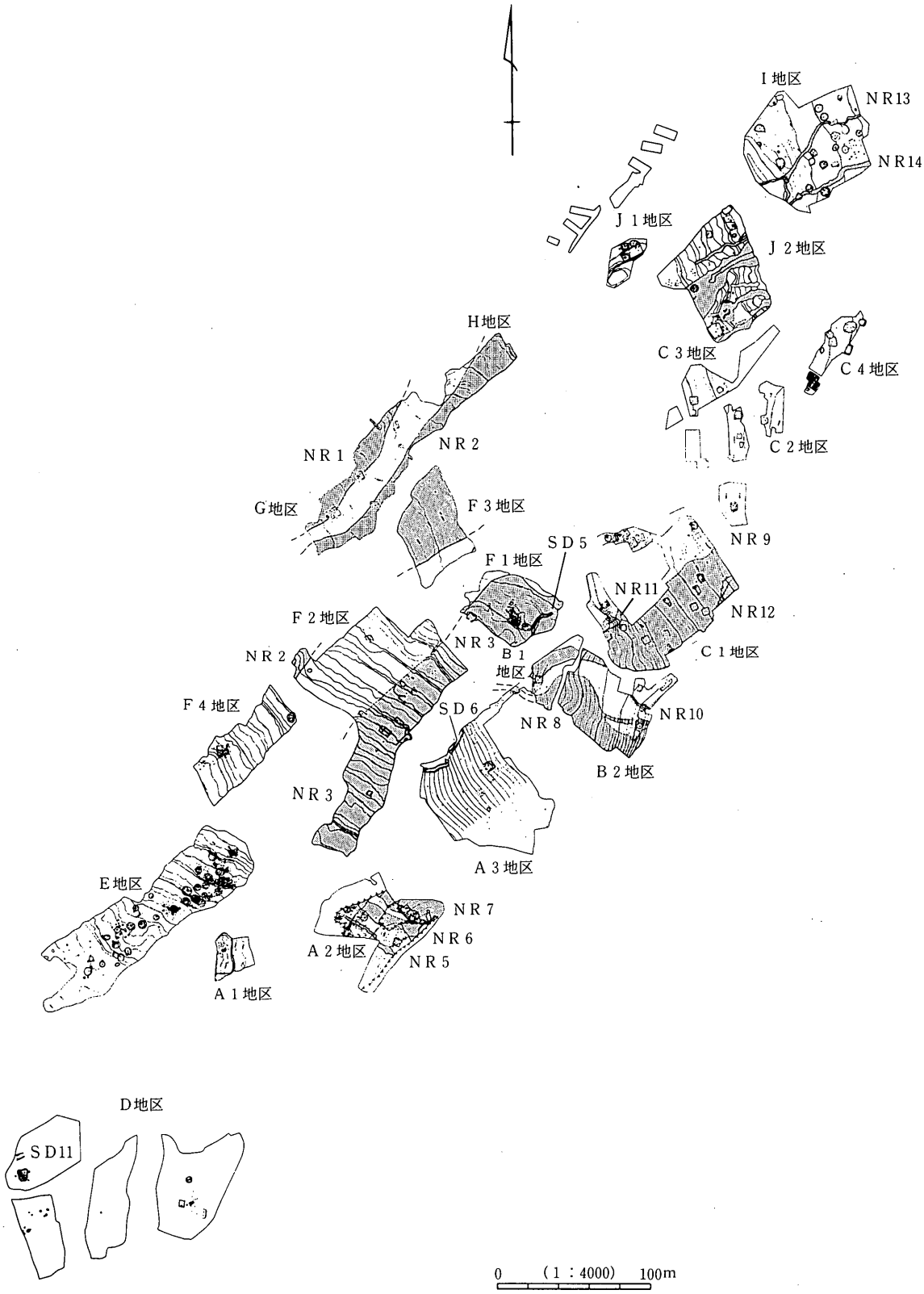
吉野遺跡群では、多くの自然流路(以下NR)が検出され、その規模も非常に大きい。一方、人為的な流路の可能性が推測されるものは、SD5(Ｆ１地区・平安時代以降)、SD6(Ａ３地区・平安時代以降・旧SD7を含む)、SD11(Ｄ地区・時期不明)などきわめて少ない。吉野地区では南西部に接する風越山系に源流を有する小河川が多く見られ、常に土地利用に影響を与えていると考えられる。調査区内で検出されたNRには、遺構との切り合い関係が判明する例もあり、本項で若干検討を加えたい(第５図)。

NR1(旧SD1)・2(旧SD2)・13・14

調査区から離れた上方の斜面に端を発し、北東→南西方向に流れる。NR1はＧ地区、NR2はＧ・Ｈ・Ｆ２・Ｆ３地区に位置し、上面で平安時代の遺構が検出されているので、流路はそれ以前に埋没したと推測される。NR13･14はＩ地区に位置し、縄文時代中期～中世までの遺物包含層の上面で確認され、一部これらの遺構を切っており、中世以降に形成されたと推測される。Ｊ２地区でも複数のSDが検出されているものの、遺構との切り合い関係はＩ地区と同様であり、NR13・14いずれかの流路の一部と推測する。

NR3(旧SD3)・5～10

調査区に近接する南東側の斜面に端を発する。NR9はＣ１・Ｂ地区、NR8・10はＢ２地区に位置し、い



第５図　遺跡群内で検出された溝と自然流路

ずれも南東→北西方向に流れ、最後に下方のNR3(Ｆ１・２地区)に合流し、北東→南西方向に向きを変える。これらNRの上面でも平安時代の遺構が検出されており、流路はそれ以前に埋没したと推測される。またＦ１地区では平安時代の遺構の上部にも流路堆積層があり、上面で中世以降の遺構が検出された。NR5・6・7はＡ２地区に位置し、南東→北西方向に流れる。流路の存続期間は不明であるが、縄文時代中期の遺構群を切り、古墳時代後期の遺構(SB60・61)に切られるので、縄文時代後期～古墳時代中期の間に限定できる。

吉野地区における流路の様相を見ると、現在に至るまで幾つもの小河川が常に流れており、たとえ埋没しても、近接した場所に流れを変えていたと推測される。これは人為的な溝がほとんど見つからない点とも関連すると思われる。

これらNRの存続期間については、流路の規模が大きすぎて調査が行えないため、不明瞭な部分が多い。しかし平安時代以降については、遺構の切り合い関係からNR1・2・3・8・9が埋没した後に集落が形成されたと言える。本来なら集落に対応する耕作地と流路との関連も検討する必要があるものの、資料となる明確な痕跡は得られていない。

縄文時代は、一層不明瞭ではあるものの、NR3の流路方向がＥ地区とＡ１地区の間にある現在の流路と同一である点には注意が必要である。Ｅ地区は縄文時代中期後葉の集落が形成されており、調査区南東側に接する現流路の部分が当時も水利に適した谷地形であった可能性を指摘しておきたい。

(広田和穂)

第２節　周辺の遺跡

上松町の遺跡は、散布地を含めて87地点が確認されている(第６図・第１表)。時期別に見ると旧石器時代６地点、縄文時代78地点、弥生時代３地点、古墳時代１地点、奈良～平安時代23地点、中・近世９地点であり、このうち本格的に発掘調査された遺跡としては、林の平遺跡(34・37)・最中上遺跡(39)・金比羅遺跡(56)・お宮の森裏遺跡(７)・吉野遺跡群(62・74・75・77～87)等があげられる。従来の調査では縄文時代と平安時代の資料が中心であったが、近年、本遺跡群や大桑村などで、弥生時代～古墳時代・中～近世の調査例が増加し、木曽における原始・古代～中・近世までの歴史を連続的に把握できる可能性が出てきた。以下、資料報告のある遺跡を中心として時期別の概要を紹介する。

旧石器時代

徳原Ａ遺跡(18)、最中遺跡(35)、大宮神社遺跡(29)で遺物が発見されている。吉野遺跡群Ｉ地区でも尖頭器が出土している(第７図１)。

縄文時代

草創期～早期初頭はお宮の森裏遺跡(７)があり、表裏縄文土器の時期に所属する竪穴住居跡９軒が検出されている。表裏縄文土器は一括資料が多く注目を集めており、竪穴住居跡数も当該期としては県内最多である。早期中葉になると遺跡数が増加する傾向を見せる。お宮の森裏遺跡(７)・林の平遺跡(34・37)最中上遺跡(39)などに良好な資料が存在し、破片資料ながら町内各地で大鼻式・大川式・立野式・沢式・樋沢式・細久保式・相木式といった押型文系土器が出土している。前期では裏寝覚遺跡(28)・北野遺跡(30)・野口遺跡(９)などをあげることができる。野口遺跡では諸磯ｂ式(第７図２)が出土し、北野遺跡には後葉の関西系土器群が多い。中期ではさらに遺跡数が増加し、徳原Ａ遺跡(18)、最中上遺跡(39)、金比羅遺跡(56)、お宮の森裏遺跡(７)などで多くの遺構が調査されている。吉野遺跡群でも中期初頭～後葉に渡る多くの遺構が発見された。後・晩期になると遺跡数は激減する。吉野遺跡群では後・晩期の遺構がわずかに出土し、後期前葉～晩期前葉・晩期末～弥生時代前期の土器などが少量発見されている。ただし、該期の所産と考えられる御物石器が表採資料ながら１点発見されていることは注目される(藤沢1949・家高1935)。このほか、お宮の森裏遺跡(７)で晩期の資料が若干出土している。

弥生時代

金比羅遺跡(56)で後期の遺構を調査。他に見帰遺跡(61)で磨製石包丁、徳原Ｂ遺跡(19)で櫛描文の土器が発見されている。吉野遺跡群では後期の竪穴住居跡が８軒検出され、磨製石鏃が出土した。

古墳時代～奈良時代

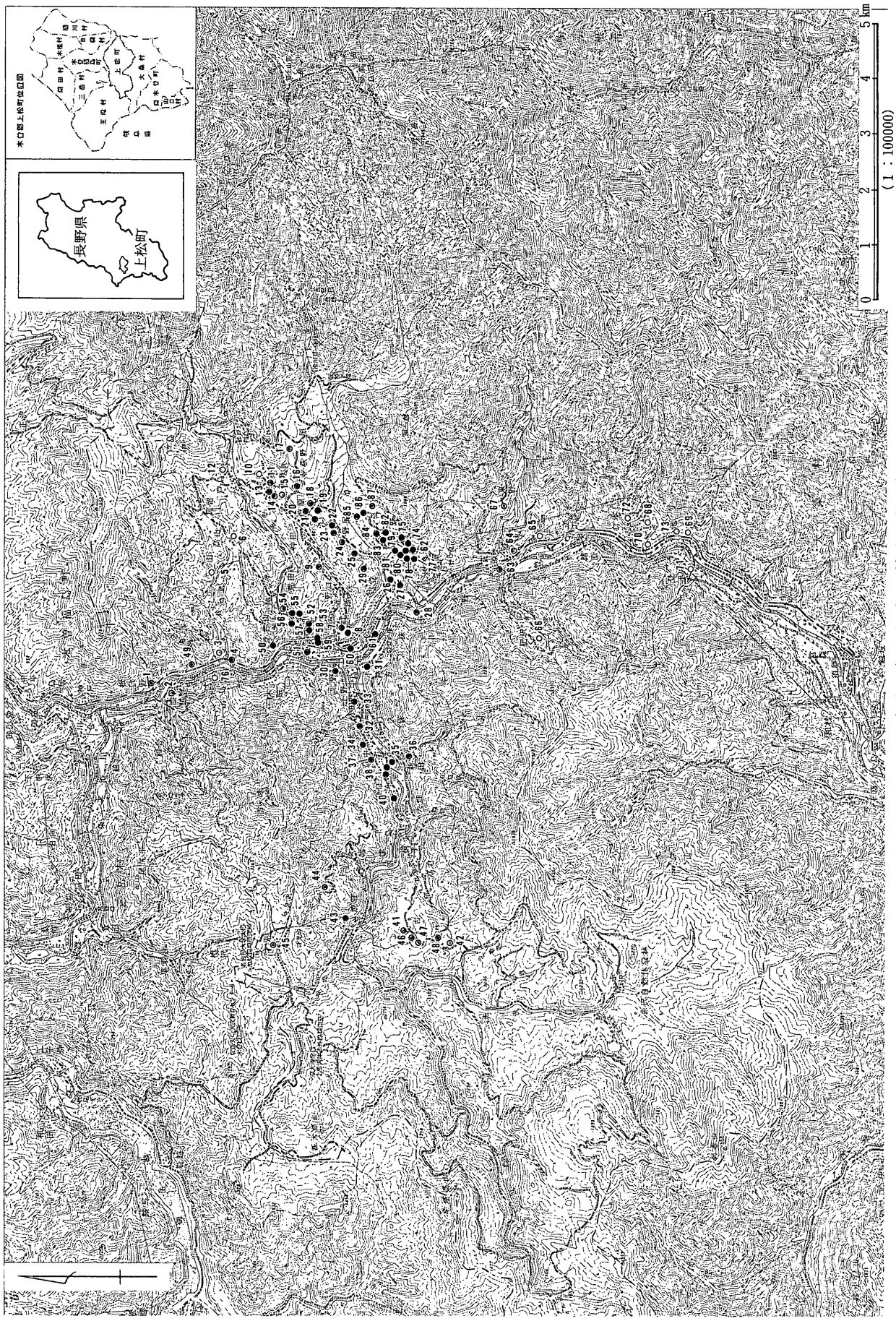
資料的に乏しい時期である。古墳時代では、最近、野中地区で、須恵器坏蓋と土師器甕片が発見されている(第７図3～5)。奈良時代では、お宮の森裏遺跡(７)で竪穴住居跡が５軒発見された。吉野遺跡群では古墳時代後期の竪穴住居跡が２軒発見されるものの、奈良時代の遺物は破片が少量散見されるのみである。

平安時代～中世前期

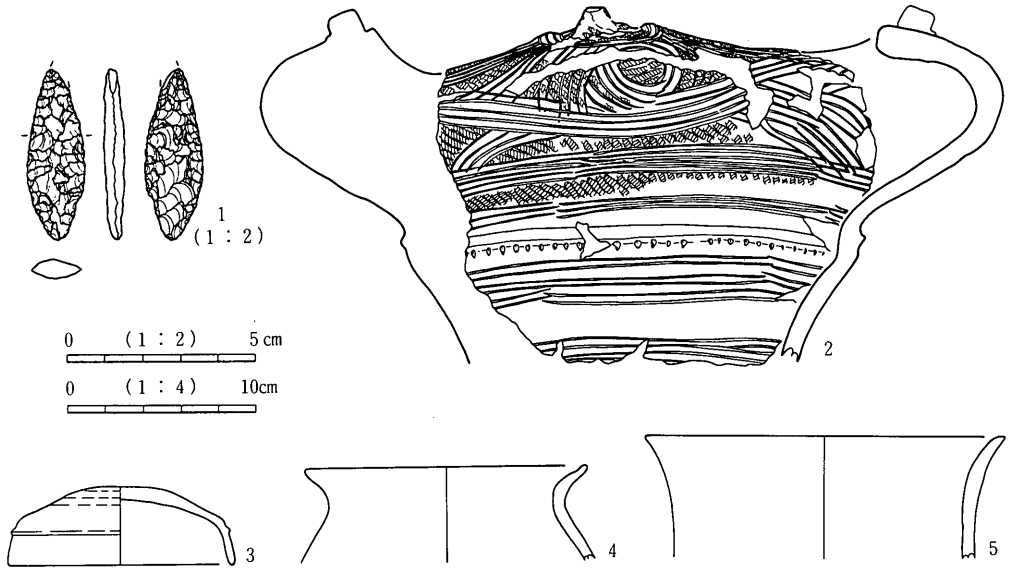
縄文時代に続いて遺跡数が多く、調査の行われた遺跡以外にも町内各地で当該期資料の出土が報告されている。最中上(39)で２軒、お宮の森裏遺跡(７)で平安時代の竪穴住居跡等の遺構が調査されたほか、吉野遺跡群でも約50軒の平安時代～中世前期の竪穴住居跡が発見された。

近世

お宮の森裏遺跡(７)では中世以降と推測される多数の土抗と、近世の陶磁器が出土している。吉野遺跡群では礎石をもつ建物跡と墓が発見されている。　(広田和穂)



第６図　上松町の遺跡分布図（上松町管内図使用）



第７図　周辺の遺跡出土遺物

参考・引用文献

青沼博之　1975　「木曽谷の考古学（２）－木曽郡遺跡地名表－」『木曽教育』44

青沼博之　1986　「木曽谷－西日本への回廊」『歴史手帳』第147号

上松中学校考古学クラブ　1975　「上松町の遺跡と遺物１」

伊深　智　1977　「木曽谷の考古学界の現状と問題点」『木曽』11

大山　柏　1926　「木曽寝覚の床付近の遺跡」『人類学雑誌』41-9

神村　透　1977　『新茶屋・沓掛・板敷野遺跡』木曽福島町教育委員会

神村　透　1977　「上松町の遺跡と遺物(二)」『木曽』11

神村　透　1978　「山と古代人　－考古学からの試考－」『木曽』13

神村　透　1979　「上松町徳原Ａ遺跡出土の縄文中期土器」『木曽教育』53

神村　透　1984　「上松町の先史時代」『木曽の上松　わが郷土の文化と歴史』

神村　透　1995　「木曽・林の平遺跡の押型文土器」『信濃』III47-5

生駒勘七・神村　透・小松芳郎　1982　『図説・木曽の歴史』長野県の歴史シリーズ19　郷土出版社

新谷和孝　1993　『最中上遺跡』上松町教育委員会

新谷和孝　1994　『金比羅遺跡』上松町教育委員会

新谷和孝　1995　『お宮の森裏遺跡』上松町教育委員会

㈳長野県史刊行会　1981　『長野県史　考古資料編』全１巻（１）

藤沢宗平　1949　「木曽谷の御物石器」信濃III１－３

家高荒治郎　1935　「木曽に復御物石器」信濃Ⅰ４－５

第1表　上松町遺跡地名表

番号	名　称	所　在　地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備　考
1	沓掛	小川，北上原		1							神村1977
2	漆脇	小川，北上原		1				1			
3	衛生センター西	小川，新茶屋		1							
4	新茶屋	小川，新茶屋		1							神村1977
5	二つ山	小川，二つ山						1			
6	高山	小川，高山		1				1			
7	諏訪神社付近(お宮の森裏)	小川		1			1	1			新谷1995
8	万場	小川		1							
9	野口	小川，野口		1				1			
10	樽沢A	小川，樽沢		1				1			
11	樽沢B	小川，樽沢		1				1			
12	上の平	小川，芦島		1							
13	大木A	小川，大木		1							
14	大木B	小川，大木						1			
15	大木C	小川，大木		1							
16	大井野	小川，荻野原						1			
17	荻野原A，B	小川，荻野原		1				1			
18	徳原A	小川，徳原	1	1				1			神村1979
19	徳原B	小川，徳原		1	1			1			
20	サイの神(徳原C)	小川，徳原		1							
21	向	小川，徳原	1	1							
22	野尻	小川，野尻		1							
23	墓地下	小川，野尻		1							
24	日向	小川，野尻		1							
25	下の畑	小川，野尻		1							
26	田代	小川，寝覚	1	1				1	1		
27	中学校	小川，寝覚		1							
28	裏寝覚	小川，寝覚		1							大山1926
29	大宮神社	小川，寝覚	1	1				1			
30	北野	小川，島		1				1			上松中学校考古学クラブ1975
31	小路方	小川，島		1							
32	小田野B	小川，小田野		1							
33	小田野A	小川，小田野	1	1							
34	林の平A	小川，小田野		1				1			神村1995
35	最中	小川，西中	1	1				1			
36	新田	小川，西中		1							
37	林の平B	小川，西中		1							
38	田代沢	小川，西中		1				1			
39	最中上	小川，西沖		1				1			新谷1993
40	田口	小川，西沖						1			
41	台A	小川，西奥		1							
42	台キャンプ	小川，西奥		1							
43	焼笹	小川，西奥		1							
44	山室	小川，西奥		1							

45	才児	小川，西奥		1							
46	台B	小川，西奥						1			
47	台C	小川，西奥		1							
48	台D	小川，西奥		1							
49	マンジ(万路)	小川，下路						1			
50	上旭町	小川，上旭町		1							
51	正島	上松，正島		1							
52	瀬木	上松，瀬木						1			
53	玉林院裏	上松，瀬木		1							
54	小脇	上松，瀬木		1							
55	いざり石	上松，瀬木		1							
56	金比羅(水神社下)	上松，瀬木		1							新谷1994
57	本町	上松，本町		1							
58	仲町	上松，中町		1							
59	沖田町	上松，沖田町		1							
60	栄町	上松，栄町		1							
61	見帰	上松，見帰		1	1						神村1977
62	さんがり(吉野A)	荻原，吉野		1	1	1		1			
63	荻原	荻原，荻原		1							
64	串ヶ下	荻原，荻原		1							
65	宮戸	荻原，荻原		1							
66	肥沢	荻原，荻原		1							
67	東野	荻原，東野		1				1			
68	観音	荻原，倉本		1							
69	かじか沢	荻原，倉本		1				1			
70	大沢	荻原，倉本		1				1	1		
71	桃山	荻原，倉本		1							
72	新田	荻原，倉本		1							
73	家老地	荻原，倉本		1							
74	吉野B	荻原，吉野		1				1			
75	吉野C	荻原，吉野		1				1			
76	池島	北上条		1				1			
77	吉野D	荻原		1				1			
78	吉野E	荻原		1						1	
79	吉野F	荻原		1						1	
80	吉野G	荻原						1		1	
81	吉野H	荻原		1						1	
82	吉野I	荻原						1		1	
83	吉野J	荻原		1						1	
84	吉野K	荻原		1							
85	吉野L	荻原		1						1	
86	吉野M	荻原		1							
87	吉野N	荻原		1				1			

第Ⅲ章　縄文時代

第１節　早・前期

１　遺構

(1)　遺構の概要

縄文時代早・前期として検出された遺構には竪穴住居跡・土坑・集石・礫を伴う土坑があり、このうち土坑１基がＣ２ａ地区に位置するほかはＤ・Ｅ地区に分布する(第８図)。各地区によって異なる様相が認められるため、地区ごとに概要を述べる。

①　Ｄ地区

調査区最南端となるＤ地区ではＩ-Ｈ・Ｉ・Ｍ～Ｏグリッドにおいて、竪穴住居跡１軒(SB93)、土坑12基(SK1342～1346・1349・1351・1353～1357)、集石１基(SX5)、集石を伴う土坑４基(SK1341・1348・1350・1359)が検出された(図版１)。出土した土器の様相から土坑１基(SK1355)が早期前葉立野式期、竪穴住居跡１軒(SB93)・土坑３基(SK1346・1349・1354)が早期末葉石山式～天神山式期の所属と思われる。また、礫を伴う土坑２基(SK1341・1348)ではそれぞれ第Ｉ群１類土器、第II群６類土器の小破片が出土したとの記録が残るが、それ以外は時期を特定できない。

時期が特定できない遺構については次のように扱う。Ｄ地区では検出面が２面に分かれ、基本土層第２層黒色土で縄文中期の遺構を、基本土層第４層黒色土で縄文早期の遺構を検出している(第II章第１節参照)。時期不明の遺構は第４層の検出で縄文早期に所属する可能性は高いが、Ｄ地区の遺構外出土遺物には早期中～末葉・前期中～末葉の土器が認められ、特に早期後葉・前期中葉の土器はほかの地区では出土していない。従って、遺構の時期は土器の様相を考慮して、早～前期と時間幅を持たせて捉える。

②　Ｅ地区

南側のIIIＴグリッドで検出された竪穴住居跡３軒(図版５)があり、このうち２軒(SB52・53)は早期前葉立野式期、１軒は前期末葉大歳山式期(SB50)に所属する。

③　Ｃ２ａ地区

早期中葉田戸上層式後半期の土坑１基(SK1321)が検出された(図版６)。土坑内およびその周辺から多くの土器が出土し、土坑内外で接合関係が認められる。また、若干のレベル差をもつが土器の分布範囲と一部が重複するように黒曜石が分布するなど、遺物の出土状況が注目される。

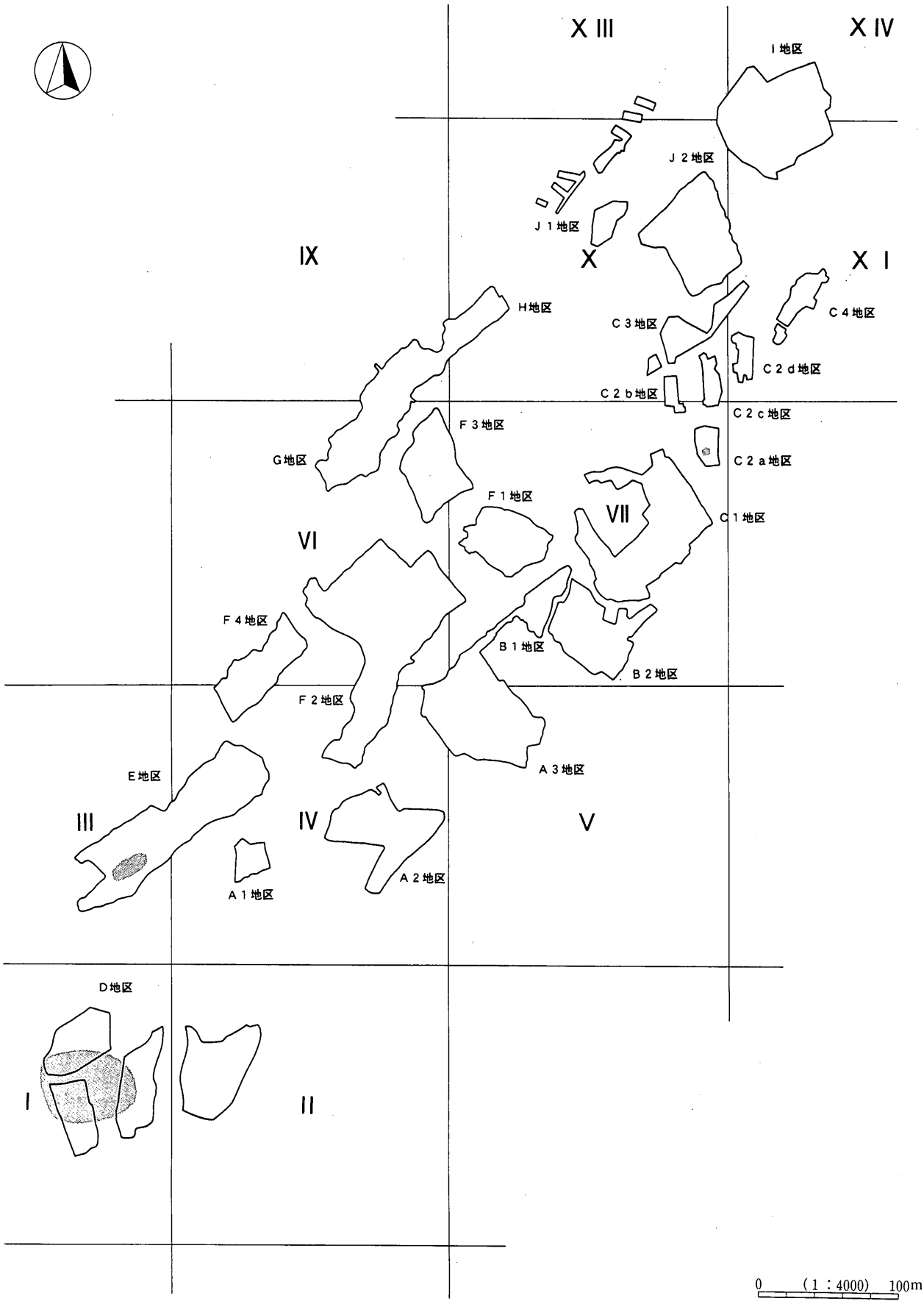
(2)　Ｄ地区の遺構

Ｄ地区検出の遺構は整理作業において、重複の修正や遺跡全体の整合性を図るために遺構名称を変更した。その旧名称も併せて(　)内に記載しておく。

①　竪穴住居跡

ＳＢ93（旧１号竪穴住居跡　図版２・８・９・130・131・132・135・136　PL４・22・53～55）

位置：ＩＨ20・ＩＩ16　**切り合い関係**：SB148に切られる。　**形状・規模**：隅丸台形　5.2×11.8m



第８図　縄文時代早・前期遺構分布状況

深さ60cm

構造：基本土層第５層の黄褐色土を掘り込んでそのまま床面とし、貼り床や硬化面は認められない。壁は床面から斜めに立ち上がり、全体的に緩やかである。住居内施設は炉・主柱穴・壁柱穴・周溝が検出された。ほぼ中央に位置する２基の焼土が、炉に相当するものと思われる。焼土下位に広がる不整形の掘り込みは炉に伴う可能性が高く、不整形の浅い掘り方に焼土が堆積する地床炉と考えたい。ピット２・５・６・15・16・25が深く、主柱穴と考えられる。その配置から対称構造であることが窺われるが、主柱穴に接してそれに準ずるピット１・７などが配置されたり、また、主柱穴間には多くの浅い柱穴も見受けられる。壁柱穴・周溝は壁下部に沿って１周し、壁柱穴は小形の円形でわずか数cmと浅く、周溝は断続的で一部が壁からそれる。２基の地床炉を有する点、柱穴が多数存在する点、周溝の一部が壁からそれる点などから、本住居跡で建て替えがなされた可能性もあるが、その構造は不明である。

遺物：埋土および床面から第II群３～８類土器(24～47)、石鏃(30・46・52・59)、石匙(88)、削器(116)、掻器(126)、石錐、ピエス・エスキーユ、打製石斧、石錘、磨石、板状石皿などの石器類が出土した。

時期：早期末葉　主体となる土器から判断して、石山式～天神山式期となろう。

② 土坑

ＳＫ1342（旧土坑１　図版３）

位置：ＩＩ16　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：不整形　0.9×1.2m　深さ20cm　**埋土**：単層　黒褐色砂質土　**構造**：ほぼ平坦な底部から明確に壁が立ち上がり、断面形状は浅い逆台形を呈する。

遺物：なし。

時期：早～前期。

ＳＫ1343（旧土坑２ａ　図版３）

位置：ＩＮ７　**切り合い関係**：SK1344を切る。　**形状・規模**：円形　1.1×1.2m　深さ60cm

埋土：単層　炭化物を多く含んだ黒色土で、底部から礫が出土。　**構造**：ほぼ平坦な底部から明確に壁が立ち上がり、断面形状は箱形を呈する。

遺物：打製石斧２点および剝片が出土(SK1344出土の可能性もあり)。

時期：早～前期。

ＳＫ1344（旧土坑２ｂ　図版３）

位置：ＩＮ８　**切り合い関係**：SK1343に切られる。　**形状・規模**：楕円形　0.8×1.2m　深さ38cm

埋土：不明、底部で角柱状および長楕円形状の礫が長軸方向の壁に接触して出土。　**構造**：ほぼ平坦な底部から明確に壁が立ち上がり、断面形状は箱形を呈する。

遺物：なし。

時期：早～前期。

ＳＫ1345（旧土坑３　図版３）

位置：ＩＮ７　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：楕円形　1.2×1.5m　深さ72cm

埋土：単層　黒褐色土　**構造**：ほぼ平坦な底部から壁が明確に立ち上がり、断面形状は逆台形を呈する。

遺物：石錐が１点出土した。

時期：早～前期。

ＳＫ1346（旧土坑４　図版３・11）

位置：ＩＮ７　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：円形　1.5×1.6m　深さ1.7m

埋土：単層　黒褐色砂質土　**構造**：壁は明確に立ち上がり逆台形の断面形状を呈するが、底部中央に径30cm、深さ40cm前後の小ピットを伴う。

遺物：埋土から第II群３・５類土器の小破片(73～76)および剝片が出土した。

時期：早期末葉　出土した土器から判断すれば、石山式～天神山式期となろう。

ＳＫ1349（旧土坑７　図版３・11）

位置：ＩＮ６　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：楕円形　0.8×1.1m　深さ62cm

埋土：単層　黒褐色砂質土　**構造**：ほぼ平坦な底部から壁が明確に立ち上がり、断面形状は逆台形を呈する。

遺物：埋土から第II群５～８類土器の小破片および剝片が出土した(77～85)。

時期：早期末葉　出土した土器から判断すれば、石山式～天神山式期となろう。

ＳＫ1351（旧土坑９　図版３）

位置：ＩＮ11　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：不整形　0.4×1.0m　深さ28cm

埋土：単層　黒色砂質土　**構造**：底部から壁がなだらかに立ち上がる。

遺物：剝片が出土した。

時期：早～前期。

ＳＫ1353（旧土坑11　図版３）

位置：ＩＭ20　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：円形　0.8×0.8　深さ44cm

埋土：単層　黒色砂質土　**構造**：ほぼ平坦な底部から壁が明確に立ち上がり、断面形状は箱形～逆台形を呈する。

遺物：黒曜石の剝片が出土した。

時期：早～前期。

ＳＫ1354（旧土坑12　図版３・11）

位置：ＩＮ16　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：円形　1.1×1.1　深さ48cm

埋土：単層　黒色砂質土　**構造**：ほぼ平坦な底部から壁が明確に立ち上がり、断面形状は逆台形を呈する。

遺物：埋土から第II群７・８類土器の小破片(86～91)および板状石皿・磨石・凹石・石鏃・剝片が出土した。

時期：早期末葉　出土した土器から判断すれば、石山式～天神山式期となろう。

ＳＫ1355（旧土坑13　図版３・11）

位置：ＩＮ16　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：楕円形？　2.1×(2.0)m　深さ22cm

埋土：単層　褐色土　**構造**：ほぼ平坦な底部から壁が明確に立ち上がり、断面形状は逆台形を呈する。

遺物：第Ｉ群１類ｂに分類される土器の小破片が出土した(72)。

時期：早期前葉　出土した土器から判断すれば、立野式期となろう。

ＳＫ1356（図版３）

位置：ＩＮ16　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：不整円形　0.4×0.5m　深さ16cm

埋土：不明　**構造**：ほぼ平坦な底部から壁が明確に立ち上がり、断面形状は逆台形を呈する。

遺物：なし。

時期：早～前期。

ＳＫ1357（図版３）

位置：ＩＮ16　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：不整円形　0.3×0.4m　深さ16cm

埋土：不明　**構造**：底部から壁がなだらかに立ち上がる。

遺物：なし。

時期：早～前期。

③ 集石・集石を伴う土坑

ＳＸ５（旧集石１　図版４）

位置：ＩＨ20　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：1.0～1.3mの範囲で礫が集中する。

構造：平面上に円礫・角礫を主体として、若干平石を含む礫集中が検出された。焼礫は存在しない。全体で長方形を呈するが、規則的あるいは意図的な配置とは思えず性格不明。

遺物：なし。

時期：早～前期。

ＳＫ1341（旧集石炉１　図版４）

位置：ＩＩ21　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：円形　0.9×0.9m　深さ25cm

構造：底面が丸状を呈する土坑の上部を覆うように礫が集中していた。礫の中には焼礫も認められ、集石炉に該当する。

遺物：第II群６類土器の小破片が出土した。

時期：早期末葉　出土した土器から判断すれば、石山式～天神山式期となろう。

ＳＫ1348（旧土坑６・集石炉２　図版４　PL4）

位置：ＩＮ12　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：円形　1.16×1.21m　深さ10cm

構造：底面が浅く摺鉢状を呈する土坑中央に、底面から埋土上部にわたって礫が充塡されていた。底面には礫が敷かれていたようである。礫の中には焼礫も認められ、集石炉に該当する。

遺物：第Ｉ群１類ｂに分類される土器の小破片が出土した。

時期：早期前葉　出土した土器から判断すれば、立野式期の可能性がある。

ＳＫ1350（旧土坑８　図版４　PL4）

位置：ＩＮ６　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：楕円形　0.7×1.0m

構造：底面が平坦な土坑の底面～埋土上部に、礫が充塡されていた。土坑の深さや焼礫の有無は不明。

遺物：剝片が出土した。

時期：早～前期。

ＳＫ1359（旧集石炉３　図版４　PL4）

位置：ＩＯ７　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：楕円形　0.84×1.04m

構造：比較的平坦な底面を持つ土坑の壁を礫が囲い、底面～埋土上層にわたって多くはないが礫が充塡されていた。壁を囲う礫には被熱の著しい花崗岩が認められ、また、土坑全体から多くの炭化物・焼土が検出された。

遺物：なし。

時期：早～前期。

(3)　Ｅ地区の遺構

①　竪穴住居跡

ＳＢ52（図版５・８　PL4・22）

位置：ⅢＴ11　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：円形　5.0×5.4m

構造：基本土層第３層明黄褐色土を掘り込んでそのまま床面とし、貼り床や硬化面は認められない。壁は斜めで、床面から緩やかに立ち上がる。柱穴・炉・周溝など、住居内施設は全く検出されていない。

遺物：埋土から第Ｉ群１類に分類される土器（１～18）および磨石・叩石などの石器類が出土した。

時期：早期前葉　出土した土器から、立野式期に該当すると思われる。

ＳＢ53（図版５・８・140　PL4・56）

位置：ⅢＴ７　**切り合い関係**：なし。　**形状・規模**：円形　3.7×3.7m

構造：基本土層第３層明黄褐色土を掘り込んでそのまま床面とし、貼り床や硬化面は認められない。壁は斜めで、床面から緩やかに立ち上がる。住居内施設は不明確だが、中央に浅い円形の土坑が検出された。焼土などの存在は不明だが、地床炉の可能性を考えておきたい。

遺物：埋土から第１群１類に分類される土器（19～23）および磨石（186・192）などの石器類が出土した。

時期：早期前葉　出土した土器から判断して、立野式期に該当すると思われる。

ＳＢ50（図版６・９・10・142　PL4・23）

位置：ⅢＴ１・６　**切り合い関係**：SB45およびSK702に切られる。

形状・規模：隅丸長方形（１短辺が若干張り出し気味）　2.9×4.0m　**構造**：基本土層第３層明黄褐色土を掘り込んでそのまま床面とし、貼り床はないもののほぼ中央に硬化面が認められる。壁は斜めに立ち上がるが、南西壁が他よりやや浅い。住居内施設として、柱穴７基・埋設土器２基が存在する。埋設土器は口縁上部・底部を欠き、胴上部以上を床面から露出させた状態で検出されたもの（49、縄文中期分類の第Ｉ群Ａ類２種に分類される）と、第Ⅳ群９類の胴下部（48）が用いられるものがある。焼土・灰・炭化物の散布や堆積は認められないが、いずれも埋甕炉の炉体土器と推測される。柱穴は小形円形で浅いものも含まれ、配置に規則性はない。

遺物：炉体土器のほか、埋土から第Ⅳ群４類土器（50～53）および石皿（216）が出土した。

時期：前期末葉　埋土出土土器や炉体土器から判断して、大歳山式期に該当すると思われる。

(4)　Ｃ２ａ地区の遺構

①　土坑および黒曜石の集中

ＳＫ1321（図版６・７・10・11　PL4・23・24）

位置：VIIE23・24　**切り合い関係**：SB142に切られる。

形状・規模：不整楕円形　1.4×1.6m　深さ50cm

検出状況：早期中葉の良好な土器と黒曜石や剝片類が土坑内外から出土した。双方の関係を明らかにするため、調査の手順や所見を検出状況の記録として述べておく。

まず、調査の所見であるが、縄文中期の竪穴住居跡(SB142)を調査後、中期包含層(C 2地区基本土層の6層に対応)の下部となる褐灰色砂質土層(基本土層7層、部分的に堆積)から黒曜石の原石と若干の剝片類が東西8m、南北5mの範囲で出土し、さらに黒曜石の取り上げ後に精査した所、不明瞭ではあるが土坑のプランを検出した。この検出レベルではプラン内外から早期土器片が出土し、その範囲はIVE18・23・24グリッドに広がる。土器は傾向として黒曜石の出土レベルより下位だが、一部は黒曜石のレベルと重複する。さらに土坑の掘り下げを進めると、土坑底面から若干浮いた状態で多くの土器が出土し、土坑上部にまで土器の分布が及び、土坑上部には土器とともに若干の黒曜石を含んでいた。次に、整理段階で分布状況を検討した結果、図版7のような状況を示すに至った。土器は土坑内、黒曜石は土坑外に分布する例が多いが、黒曜石の分布範囲に土器も分布している。土器は土坑内外で接合する例があり(55)、黒曜石の主たるレベルと、土坑内とで接合関係が認められる。

以上から、黒曜石は土坑外に多く分布し、土器より相対的にやや上部で出土し、土器は土坑内に多く相対的に黒曜石より下部で出土したといえ、土器と黒曜石には若干の時期差が介在すると考えられる。しかしながら、出土レベルから見た土器と黒曜石の重複状況などからすれば、黒曜石は土器の時期から大きく逸脱しないと思われ、黒曜石の集中に対して、土器の年代である早期中葉の時期を与えておきたい。また、出土した土器はほぼ一時期を形成するものと捉えておきたい。

構造：断面形状は逆台形を呈し、底部は平坦である。壁の立ち上がり上部の北東側に浅い段を形成する。埋土は単層で暗褐色土が堆積するが、下位に炭化物を多く含む傾向がある。

遺物：土坑内および周辺で第I群3・5a・5b・8a・8b類土器が多量に出土し(54～71)、器形復元が可能な個体が含まれるなど、当該期の良好な資料と評価される。黒曜石の集中範囲については、第3章第4節を参照されたい(PL55)。

時期：早期中葉　出土した土器から、田戸上層式後半に並行する時期として捉えておきたい。

(5)　遺構に関する若干のまとめ

早期前～末葉・前期末葉に関わる遺構について事実記載を行ってきたが、竪穴住居跡、土坑、黒曜石の集中、礫を伴う土坑およびその分布について簡単に整理する。

①　竪穴住居跡

早期前葉(立野式期)・早期末葉(石山式～天神山式期)・前期末葉(大歳山式期)の竪穴住居跡が検出されている。

立野式期の竪穴住居跡(SB52・53)は円形プランで、住居の規模が直径3.7mと5mを超える2タイプが存在する。床面に貼り床や硬化面は認められず、SB53には地床炉を推測したものの、確実な住居内施設は検出されていない。

当該期の竪穴住居跡は飯田市美女遺跡で多数検出され、報告書で住居の特徴が示されているため(馬場1998)、それと比較したい。プランは美女遺跡で不整楕円形とされた中に、本遺跡と同様のプランが見受けられる。規模は「小型のものとやや大きめのもの」があって、小型のものは直径3～4m、大きめのものはそれ以上を測り、この基準に従えば直径3.7mのSB53は小型の、5mを超えるSB52は大きめのものに該当する。住居内施設は地床炉・柱穴が存在し、多くの例外を認めながらも「小型で炉址を伴わないものと、

規模が大きく多く地床炉を伴うものとに定型化する」と述べているが、本遺跡で地床炉の存在を推定したSB53は小型の住居である。また、美女遺跡でも直径6mクラスで地床炉をもたない例があり、双方とも例外に含まれるのであろうが、こうした状況は当該期の竪穴住居跡が定型化の方向へ進みながらも、未だ不安定な段階にあることを示していよう。

石山式～天神山式期の竪穴住居跡(SB93)は、1短辺が短く不整気味の隅丸台形プランで、住居内施設には柱穴・炉・周溝が認められた。柱穴は主柱穴と思われるピットが、長方形の対象構造に配置される。SB93では住居の建て替えが推測されるものの、建て替えの新旧に伴う主柱穴の組み合わせは明確でない。主柱際や主柱間にはそれを補助すると思われるピットが存在し、また、壁際に沿って1周する小ピットが多数ある。炉は2基で掘り込みを有する地床炉となり、住居の建て替えに合わせて造り変えがなされたと考えられる。周溝は途切れながら小ピットとともに壁際を1周するが、周溝がプランから反れて内側に入り込む部分があり、建て替え時におけるプランの拡張の可能性を指摘できる。

県下では石山式～天神山式に限らず、早期末葉に所属する竪穴住居跡の検出例は希少で、木曽地方も例外ではない。しかしながら東信地方の小諸市郷土遺跡(桜井他2000)では、本遺跡とは地域や出土した土器型式も違うが6軒の竪穴住居跡を検出している。6軒の竪穴住居跡は絡条体圧痕文系土器群最終段階の住居であり、方形・楕円形のプランだが、双方は明確な差異を示さず中間的または不整形な要素を含む。規模は方形・楕円形ともに長・短軸が4.5～4.9×3.95～4.5mを測る大形のグループと、2.7～3.6×2.5～2.7mを測る小形のグループが存在し、住居内施設には不規則な配置や対象構造配置の柱穴が検出されている。本遺跡のSB93とは住居のプランが異なり、また、5.2×5.9mを測るSB93は郷土遺跡の大形グループよりも規模が大きい。これは地域性や土器型式の差異などを反映している可能性もあるが、類例の蓄積を待ち、それぞれの特徴を整理した上で、改めて比較検討を行う必要があろう。

大歳山式期の竪穴住居跡(SB51)は1短辺が若干張り出す隅丸長方形のプランで、床面は貼床ではないが中央部に硬化面が認められた。柱穴は浅く床面の南東側に片寄って集中し、明確な配置をなさない。床面には2個体の土器が埋設され、焼土・炭化物などを伴うとの記録はないが埋甕炉の炉体土器と考えられる。1個体は住居の中軸線(長軸)上に、もう1個体はほぼ直行軸(短軸)上に乗り、それぞれ中央ではなく若干片寄った位置へ設置される。

木曽地方では近年、木曽福島町水無神社附近遺跡(神村1996)や大桑村万場遺跡(百瀬2001)などで前期末葉の竪穴住居跡が相次いで検出された。水無神社附近遺跡では円形プランと推測される3軒の竪穴住居跡があり、2軒は埋甕炉が、1軒は地床炉が設置されていた。また、1軒で柱穴を確認しており、壁に沿って点在するも明確な規則性はないようである。本遺跡とは、埋甕炉を設置する以外の一致点は認められない。一方、万場遺跡では円形・隅丸方形・その中間的なプランがあり、隅丸方形プランには1短辺が張り出す例が存在して逆側に出入り口部を想定している。柱穴は壁に沿って配置する例・三角形～多角形などの非対象構造配置・対象構造配置があり、炉はほとんどが埋甕炉で複数の炉体土器をもつ住居もある。隅丸方形プランの1短辺が張り出す状況や埋甕炉を設置する点、複数の炉体土器をもつ点は本遺跡のSB51と同様で、また、円形プラン・柱穴配置・埋甕炉の設置では水無神社附近遺跡と共通する。万場遺跡は本遺跡や水無神社附近遺跡の様相を包括し、さらに遺跡の規模や系統あるいは地域を異にする複数の土器型式が存在するなど、当該期の木曽地方を代表する拠点的な集落と位置付けるにあって充分な内容をもつ遺跡である。それに対して、本遺跡や水無神社附近遺跡は数軒の住居で成立する小規模集落で、一地域のほぼ同時期に性格の異なる集落が営まれる状況は、生業などを含めた総括的な立場からの検討により、集落間構造が把握されるものと思われる。

② 土坑、黒曜石の集中

立野式期のSK1355、田戸上層式後半期のSK1321、石山式～天神山式期のSK1346・1349・1354、このほかにD地区で検出された早～前期の土坑が存在するが、いずれも性格は不明である。

SK1321は土坑内および周辺に分布する沈線文系土器群の出土状況と併せて、土坑の機能など課題は多い。沈線文系土器群は非常に良好な資料で、当該期の土器群を把握するにあたり重要な資料である。また、黒曜石の集中は、未剝離の原石が圧倒的に多い点、さらにそれらが3～5cm大の比較的小形のものによって占められている点に注目すべきと思われる。拳大などの原石からなる黒曜石の集中は他遺跡にも認められるが、本遺跡の状況はそれと異なる。

③ 礫を伴う土坑

SK1341・1348・1350・1359の4基が検出され、焼礫を伴う点から集石炉と判断される。時期はSK1341が石山式～天神山式期、SK1348が立野式期に所属し、その他は早～前期と時期幅をもつ。平面形状は円形と楕円形が2基ずつで、礫の状態から2タイプに分かれる。すなわち、埋土の上部を礫が覆うSK1341と、土坑内を礫で充塡するSK1348・1350・1359であり、SK1348は底部に礫を敷き、SK1359とSK1348では礫の粗密が認められるなど、礫の状態にも差異がある。また、土坑の底面形状も多様で、平坦・丸状・浅い摺鉢状を呈するものが存在する。

④ 早～前期の遺構分布

早期前葉立野式期はD地区(I-H・I・M～Oグリッド)～E地区(III-S・Tグリッド)に分布域をもち、竪穴住居跡・土坑・礫を伴う土坑で構成するものの、土坑・礫を伴う土坑はD地区、竪穴住居跡はE地区とやや距離を置いての検出である。小規模集落で各遺構が占める位置に興味がもたれるが、両地区間には未調査範囲も相当あり不明確な点が多い。

早期中葉の田戸上層式後半期は、C2a地区で土坑1基が検出されたのみだが、遺構外出土土器の分布はVII区C2b地区(VIIEグリッド)～C2a地区～C1地区(VIIE・I・Jグリッド)ともう少し範囲に広がりを見せる。この間に居住施設はなく、居住の場以外の性格も考慮したい。

早期末葉石山式～天神山式期はD地区(I-H・I・M～Oグリッド)に限定される。竪穴住居跡・土坑・礫を伴う土坑が遺構の主要要素となる中で、竪穴住居跡は1軒の検出にとどまる。試掘結果から、本調査が行われていない周辺地点に遺構は広がらないと思われ、当該期における集落の在り方について1例を示している可能性がある。しかしながら、時期決定ができない土坑・礫を伴う土坑・集石もあり、また、遺構外からは早期中葉沈線文系土器群終末期・前期前葉木島式・前期中葉北白川下層IIb式土器が出土しており、これらの土器群に対応する遺構を含むことも考えられるなどその分離は困難である。

前期末葉はE地区に1軒の竪穴住居跡が検出された以外に、遺構は存在しない。しかしながら、D地区のSB93やI地区の中期初頭に所属する竪穴住居跡の埋土から、当該期の土器が出土している。D地区の土器はE地区と関係する可能性もあろうが、I地区はD・E地区からかなり離れた位置にあり、異なる展開も推測される。

以上、早～前期の遺構を概観してきたが、どの時期も小規模であって、中期以降に展開する大規模な集落とは一線を画す状況がうかがえる。　(贄田　明)

参考・引用文献

神村　透　1996『水無神社付近遺跡』木曽福島町教育委員会

桜井秀雄他　2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』19　長野県埋蔵文化財センター

馬場保之　1998『美女遺跡』飯田市教育委員会

百瀬忠幸　2001『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』大桑村教育委員会

2　土器

(1)　土器の分類

本遺跡出土の早～前期土器を、以下のように分類した。

第Ⅰ群：早期前～中葉土器群

1類：押型文を施文するもの。

a：ネガティブ文　b：山形文　c：楕円文　d：格子目文　e：その他

2類：縄文・撚糸文を施文するもの。

3類：横位多段の押引き文を施文するもの。

4類：斜位方向や矢羽状の刺突を行うもの。

5類：沈線で文様を描くもの。

a：幅狭の口縁部文様帯に鋸歯状文を描き、その中を縦位沈線・刺突で充塡するもの。

b：幅広の口縁部文様帯に横位・縦位・斜位方向の文様を組み合わせて描くもの。

6類：条痕様沈線で曲線・縦位・斜格子状等の文様を描くもの。

7類：刺突を施すもの。

8類：無文のもの。

a：胎土にガラス質鉱物・雲母が目立つもの。

b：胎土に白色粒子が目立つもの。

9類：条痕を地文として、口唇部及び直下に縄文の押捺・C字形の深い刺突を施すもの。

10類：条痕を地文として、幾何学的な文様を描くもの。

第Ⅱ群：早期末葉土器群

1類：絡条体条痕と推測される条痕を施すもの。

2類：絡条体圧痕文を施文するもの。

3類：縄文を施文するもの。

4類：横位・波状等を構成する突帯上に連続する刻みを施すもの。

5類：連続爪形文を施文するもの。

6類：横位・縦位等の波状文を描くもの。

7類：条痕を施すもの。

8類：無文のもの。

第Ⅲ群：前期中～後葉土器群

1類：横位・波状等を構成する偏平隆帯へ櫛歯状工具による条線を施すもの。口唇部をつまみ出すものや、口唇部あるいは口唇部直下へ櫛歯状工具の刺突を施すものが存在する。

2類：爪形文で横位・レンズ状等の文様を構成するもの。

3類：０段多条の縄文を施文するもの。３類の胴部破片を含むと思われる。

4類：縄文を地文として沈線で横位・曲線等の文様を描くもの。波状口縁の波頂部下に突起をもつ。

5類：縄文を施文するもの。

6類：隆帯文あるいは浮線文で文様を構成するもの。

第Ⅳ群：前期末葉土器群

1類：沈線を地文として棒状貼付文・結節沈線文を施すもの。ボタン状突起や耳状貼付文が伴う例も多い。

2類：沈線で横位・レンズ状・矢羽状などの文様を描くもの。耳状突起を貼付する例がある。

3類：結節浮線文で文様を描くもの。

4類：結節浮線文・結節沈線文で文様を描くもの。三角印刻文を伴うものが多い。

5類：断面が半丸状を呈する隆帯文で口縁部の文様を構成するもの。

6類：縄文や爪形状の刺突を施す隆帯で文様を構成するもの。

7類：口縁部上端に短い縦位隆帯を貼付するもの。

8類：Σ字状の刺突やそれに類似する刺突を施す突帯で文様を構成するもの。内面に、一定幅の肥厚部をもつ。

9類：縄文を施文するもの。底部側面に凹状の圧痕が認められる。

(2)　遺構出土土器（図版8～11　ＰＬ22～24）

ＳＢ52（1～18、PL22）

第Ｉ群1類の良好な資料が出土した。1～11は1類ａ、12～16は1類ｃ、17は1類ｄ、18は1類ｅに該当する。18は無文の可能性が指摘されるが、極めて圧痕の浅い文様を施文しているようにも見える。1・9・12・17・18は口縁部で、いずれも強く外反する点を特徴とし、1・17・18は口唇部に刻みを施す。

ＳＢ53（19～23）

19・20、21～23はそれぞれ同一個体と思われる胴部破片で、前者は第Ｉ群1類ｄ、後者は1類ｂに分類される。1類ｄの格子目文は極めて細かい。

ＳＢ93（24～47、PL22）

第II群3～8類が出土した。早期末葉における良好な資料である。24・25は4類で、24は横位隆帯、25は波状隆帯および隆帯脇に連続した刻みを施す。25の内面には、斜位方向の条痕調整が認められる。26は5類で、横位方向の連続爪形文を施し、波状口縁の口唇部には細かい刻みを加える。27～32は6類である。27は胴部から口縁部の器形をうかがう事ができ、平縁で胴中部に最大径をもち、そこから狭まりながら底部へと至る。口唇部を細かく刻み、口唇部直下から平行沈線で縦位の波状文を描く。28～32は櫛歯状工具による条線で、横位･斜位･縦位の波状文を描いている。33～38は7類であり、33～35は内外面に、36～38は外面に斜位・横位方向の条痕をそれぞれ施す。39～45は8類の可能性がある破片で、39・40は口唇部に刻みを加える。46・47は3類で、46は上端に隆帯が認められる。縄文は単節縄文の斜構成である。

ＳＢ50（48～53、PL23）

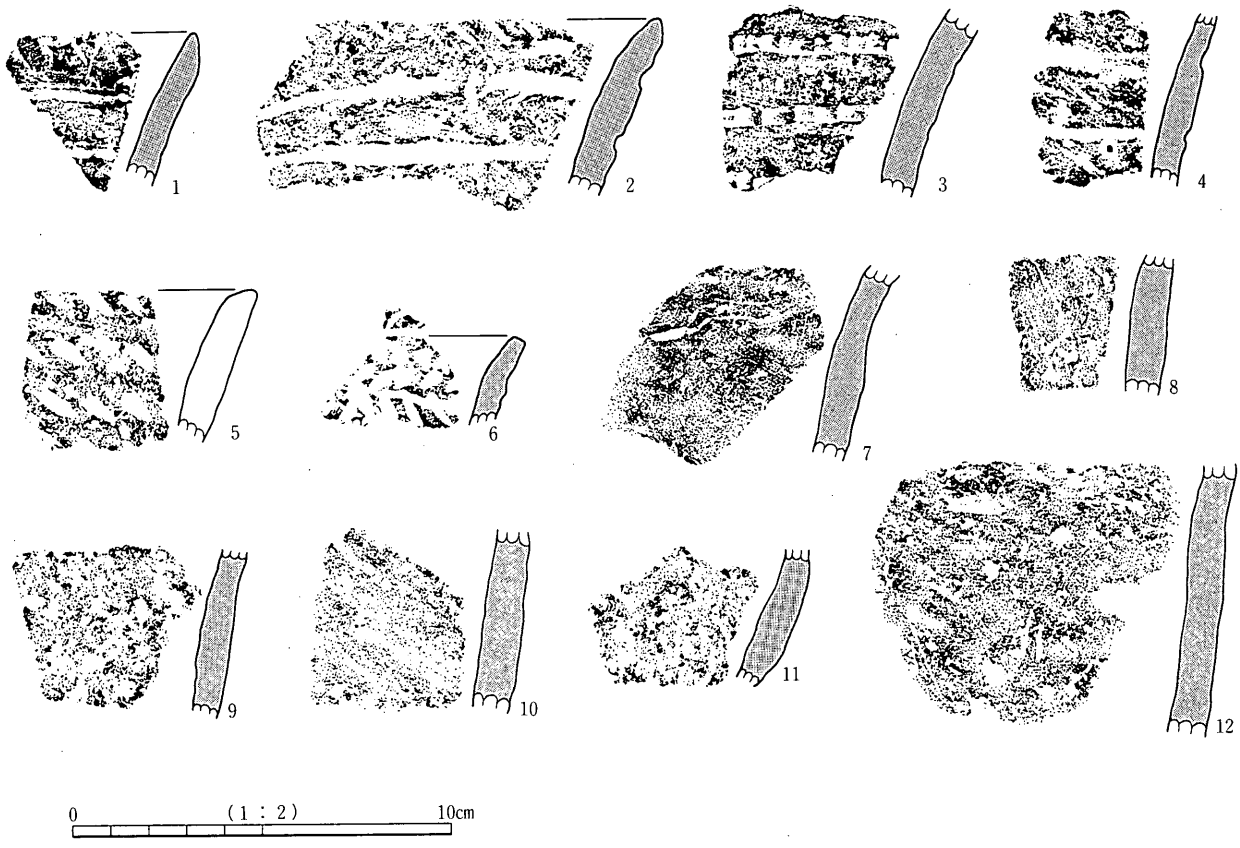
第IV群4類・9類、中期分類(第2節参照)の第1群Ａ類2種が出土した。48は第IV群9類で、底部から立ち上がって胴中部で膨らむ器形を呈し、器面全面に縄文RLを施文する。また、底部側面には凹状の圧痕を有する。49は中期分類の第1群Ａ類2種で、横位・縦位・矢羽状などの平行沈線を組み合わせて文様を構成する。50～53は第IV群4類であり、同一個体と思われる。頸部に括れをもつ器形を呈し、口縁部は結節浮線文によって文様描き、胴部は単節縄文で羽状を構成する。

ＳＫ1355（72）

第Ｉ群1類ｂが1点出土した。72は胴部破片で、山形文を縦位施文する。

ＳＫ1321およびその周辺（54～71、PL23・24）

第Ｉ群3類・5類ａ・5類ｂ・8類ａ・8類ｂがSK1321とその周辺から出土した。図示した54～71の中で、SK1321より出土したのは54～56・59～61・66であり、55は土坑外と接合が認められる。54・55・58は3類で、平縁を呈し頸部で括れて口縁部が外反する。口唇部直下に斜位あるいは矢羽状の刻みを施し、4条前後を数える横位の押し引き文を施文する。56は5類ａで、4単位の緩やかな波状口縁を呈し、幅狭



第９図　早・前期第Ｉ群３・４・８類ａ土器

の口縁下部に段を形成する。口唇部直下を刻み、鋸歯～波状の文様を描いて縦位沈線および刺突を充塡する。59～61は５類ｂで、横位・縦位・斜位方向の沈線を組み合わせて文様を描き、60はさらに円形刺突・弧状の沈線が加わる。全体の器形は不明だが、口縁部が外反するなど３類と類似し、59は口唇部に細かな刻みを施す。62～71は８類ａで、器壁のナデ調整が顕著なものが多い。胎土にガラス質鉱物・雲母の混入が目立ち、３類の胎土に類似する。57は８類ｂで、頸部が括れて口縁部が強く外反する。

ＳＫ1346（73～76）

第II群３類・５類が出土した。73は５類で、縦位の連続爪形文を施文する。74は５類もしくは６類の胴部破片と思われるが、小破片のため判然としない。75・76は３類で、単節縄文を施文する。

ＳＫ1349（77～85）

第II群５～８類が出土した。77は５類で、弧状を構成する連続爪形文を施文し、口唇部に刻みをもつ。78～80・82は６類で、78・82は櫛歯状工具による条線、79・80は単沈線によって横位の波状文を描く。81・83は７類となり、縦位～斜位方向の条痕を施している。84・85は８類で、84は口唇部を刻む。

ＳＫ1354（86～91）

第II群７・８類が出土した。86は７類で、横位の条痕が認められる。87～91は８類である。

(3)　遺構外出土土器（図版12～17、第９図、PL24～26）

第Ｉ群土器（92～130、第９図 PL24・25）

１類

92～94はａのネガティブ文で、92は口唇部直下を斜位方向に刻み、以下、楕円文を横位施文する。94は胴部で、市松状の文様を施文する。95～104はｂの山形文で、比較的厚手の器壁をもつものと薄手の器壁をもつものが存在する。95～100は前者で胎土の砂粒が目立つものが多く、95・97～100は縦位施文、96は縦

位＋横位＋縦位施文を組み合わせている。101～104は後者で、101は横位施文、102は縦位～斜位施文、103は横位＋縦位の直行施文、104は縦位施文となる。105・106はｃの楕円文で、105は横位＋斜位の密接施文、106は横位密接施文である。

2類

107～109は単節縄文を施文する。107は口縁部が外反しており、縄文は条が縦走する点から斜位方向の施文と考えられる。108・109は横位施文である。110・111は撚糸文施文で、110は縦位、111は斜位方向の施文を行っている。

3・4・8類a

第9図の1～4は3類で、数条の押し引き文を横位施文する。1・2は外反する口縁部の破片であり、口唇部を斜位方向に刻む。5・6は4類の刺突を行うもので、5は斜位方向の刺突を多段に、6は刺突の方向を変えて矢羽状を構成する。6の口唇部は、斜位方向の刻みをもつ。7～12は8類aで、内外面をナデ調整する。胎土はガラス質鉱物や雲母が目立つなど、3類に類似する。以上の第9図に掲載した資料はSK1321に隣接する、C1・C2b地区のVII-E・I・Jグリッドより出土した土器である。

図版12の114は押し引き文を施文する3類で、波状口縁に沿った押し引き文や、波状の押し引き文を描いている。

5類

112・113は沈線で文様を描く。112は小破片のため文様構成や器形に不明確な点が多いが、口唇部直下に縦位沈線を描き、以下、横位沈線と斜位方向の刺突で文様を構成する。113は5類aで頸部に段を形成し、4条で1単位となる斜位方向の沈線に沿って縦位刺突を施す。

6類

116～118は条痕様沈線で、曲線・鋸歯状・縦位などの文様を描いている。条痕様沈線は細かく、4条前後で1単位となる。内面はナデ調整だが、118は横位方向の条痕を施す。胎土は白色粒子を含み、7・8類bと類似する。

7類

119・120は刺突を施すもので、119は押し引き気味の横位刺突を、120は先端が角状を呈する施文原体で縦位刺突を行っている。

8類b

115・121～127は無文土器であり、内外面をナデによって調整する。胎土に白色粒子を多く含む点が、特徴となる。

9類

128は器形がうかがえ、直線的な胴部から立ち上がって頸部で括れ、口縁部が外反する。外面に横位～斜位方向の条痕を施し、口唇部直下へC字形を呈する刺突を深く施す。また、口唇部を絡条体で斜位に刻む。

10類

129～130は内外面に条痕を施し、単沈線によって幾何学的な文様を描く。129は口唇部を刻み、幾何学的な文様の中に微隆帯を加えている。

第II群土器（131～154、図版14・15、PL25）

1類

131・132は器面内外に横位方向の条痕を施文する。条痕の原体として絡条体が考えられるが、明確ではない。

2類

133～135は絡条体圧痕文を施文する一群で、撚糸文を地文とし、内面にはナデ調整を施す。133は口唇部直下に横位隆帯をもち、隆帯上は鋸歯状に、隆帯際は横位方向に絡条体を押捺する。また、隆帯下部は弧状の絡条体圧痕文が連続する。134・135は絡条体を横位に押捺し、135は横位多段を構成する。

3類

136・137は縄文施文であり、いずれも単節の原体による斜縄文を施文する。

6類

138～148は横位・縦位などの波状文を描く一群で、138・145・146は施文原体に櫛歯状工具を用いる。138は胴上部に最大径をもち、若干径を減らしながら平縁の口縁部に至る。横位の波状文を描いており、口唇部には細かな刻みを施す。139～144の波状文は単沈線であり、波状口縁の139は口唇部を刻む。147・148は、櫛歯状工具による斜位方向の条線を描く。148の内面は、横位方向の条痕が顕著である。

7類

153・154は条痕を施すもので、双方とも内外面に斜位方向の条痕が認められる。

8類

149～152は無文土器で、149・150は口唇部を細かく刻む。

第III群土器（155～191・214、図版15～17、PL26）

1類

155～171は偏平隆帯やつまみだし状の刺突で、口縁部を加飾する一群である。155・156・160は口縁部に平行する偏平隆帯を貼付し、櫛歯状工具による縦位～斜位方向の条線を施す。また、口唇部にはつまみ痕状の刺突をもつ。157～159は口唇部直下に縦位の刺突を行い、横位の偏平隆帯を貼付する。刺突および隆帯上へ櫛歯状工具による縦位・横位の条線を施すが、157・159は口唇部にも刺突と条線が認められる。161～166は横位・縦位などの偏平隆帯を貼付し、櫛歯状工具の条線を施している。167～171は155～166などの胴部破片と思われ、櫛歯状工具による縦位の条線が見受けられる。

2類

172～180は爪形文で、横位・レンズ状などの文様を構成する。爪形文は172などの側線をもたないもの、175～177などの側線をもつもの、また、173のように同一個体の中で側線をもつ爪形文ともたない爪形文を併用するものが存在する。

3類

181～184は縄文施文であり、一部に2類の胴部破片を含むと思われる。0段多条の単節原体を用いて斜縄文を施文しており、183には結節が顕著である。

4類

185～189は縄文を地文として、沈線によって文様を描く。185は波状口縁の波頂部に円形突起を貼付し、弧状・横位などの沈線を描く。また、186～189は横位・曲線などの沈線を描いている。

5類

190・191は縄文施文で、4類に伴うものと思われる。緩やかな波頂部を形成する波状口縁を呈し、単節斜縄文を施文する。

6類

214は隆帯文あるいは浮線文で文様を構成する土器であり、口縁部に幅広の偏平隆帯を貼付し、隆帯から胴部にかけて単節の斜縄文を施文する。

第IV群（192～213・215～229）

1類

192～197は沈線の地文上へ、棒状貼付文を貼付する。192・193は同一個体で、横位沈線の地文上へ棒状貼付文・ボタン状突起を貼付し、胴部は縦位・斜位方向の沈線を描く。194は矢羽状の沈線、195は斜位方向の沈線を地文として、棒状貼付文を貼付する。197は、結節沈線文で文様を構成する。

2類

198～202は横位・縦位・斜位・矢羽状などの沈線を組み合わせて文様を構成し、201はさらに耳状突起を貼付する。

3類

203・204は同一個体の可能性があり、渦巻を結節浮線文と思われる手法で構成する。

4類

205～213は結節浮線文・結節沈線文で文様を構成する。205～207は口縁部に三角印刻文を施し、その下位へ205・206は結節浮線文で、207は結節沈線文でそれぞれ文様を描く。208は口唇部直下に縦位の浮線文を貼付し、結節浮線文あるいは結節沈線文(判然とせず)で文様を描く。209は結節浮線文で、横位・鋸歯状を組み合わせた文様を構成する。210～213は渦巻を結節浮線文で構成する。

5類

215・216は文様を構成する隆帯上への加飾が認められない一群であり、215は断面が半丸状を呈する隆帯で文様を構成し、内面の口唇部直下へ肥厚部を形成して単節縄文を施文する。また、口唇部は丸棒状工具で刻み、小波状を形成する。216は縄文を地文として、断面が三角形を呈する隆帯で環状などの文様を構成する。

6類

217～220は文様を構成する隆帯へ、縄文や刺突を施す一群である。217は弧状などを構成する偏平隆帯へ縄文を、218は三角形の隆帯へ押し引き状の刺突を、219・220は横位隆帯へ爪形状の刺突をそれぞれ施す。217・218は地文としての、単節縄文が見受けられる。

7類

221・222は口唇部直下に短い縦位隆帯を貼付し、内面の折り返し状を呈する肥厚部に縄文を施文する。221は口縁部に平行する2条の隆帯を貼付し、隆帯以下に単節縄文を施文する。縦位隆帯はきわを工具でなぞり、横位隆帯と連結する。222は波状口縁で、波頂部に円形状突起をもち、内面には爪形状の刺突を行う。

8類

223～229は隆帯上にΣ字状刺突やそれと類似する爪形状の刺突を施し、内面の口唇部直下に一定幅を確保して縄文施文や隆帯を貼付する一群である。223は内外面の口唇部直下に縄文施文を行い、横位隆帯の際へ爪形状の刺突を行う。224は縄文を地文として、波状口縁に沿った爪形状刺突の隆帯を貼付する。隆帯は内面の肥厚部にも認められ、外面のみ縄文を地文とする。225は縄文を地文として隆帯を貼付し、隆帯の一方のきわのみ、刺突を施す。226は爪形状の刺突を施す頸部以下へ、単節縄文を施文する。口唇部および内面は単節の縄文施文となり、さらに口唇部直下には爪形状の刺突が認められる。227・228は口唇部や、縄文を地文とする口縁部の横位隆帯へ、Σ字状刺突を施す。また、内面は縄文を施文する。229は胴部の破片であり、単節縄文の地文上へΣ字状刺突を有する縦位隆帯を貼付する。

(4)　出土土器の様相

第Ｉ群土器

第Ｉ群は早期前～中葉を一括した。１・２類は押型文、３～５類・８類の一部は沈線文およびそれに並行するもの、６・７類、８類の一部・９類は３～５類に後続すると思われるもの、10類は条痕文として括ることができる。

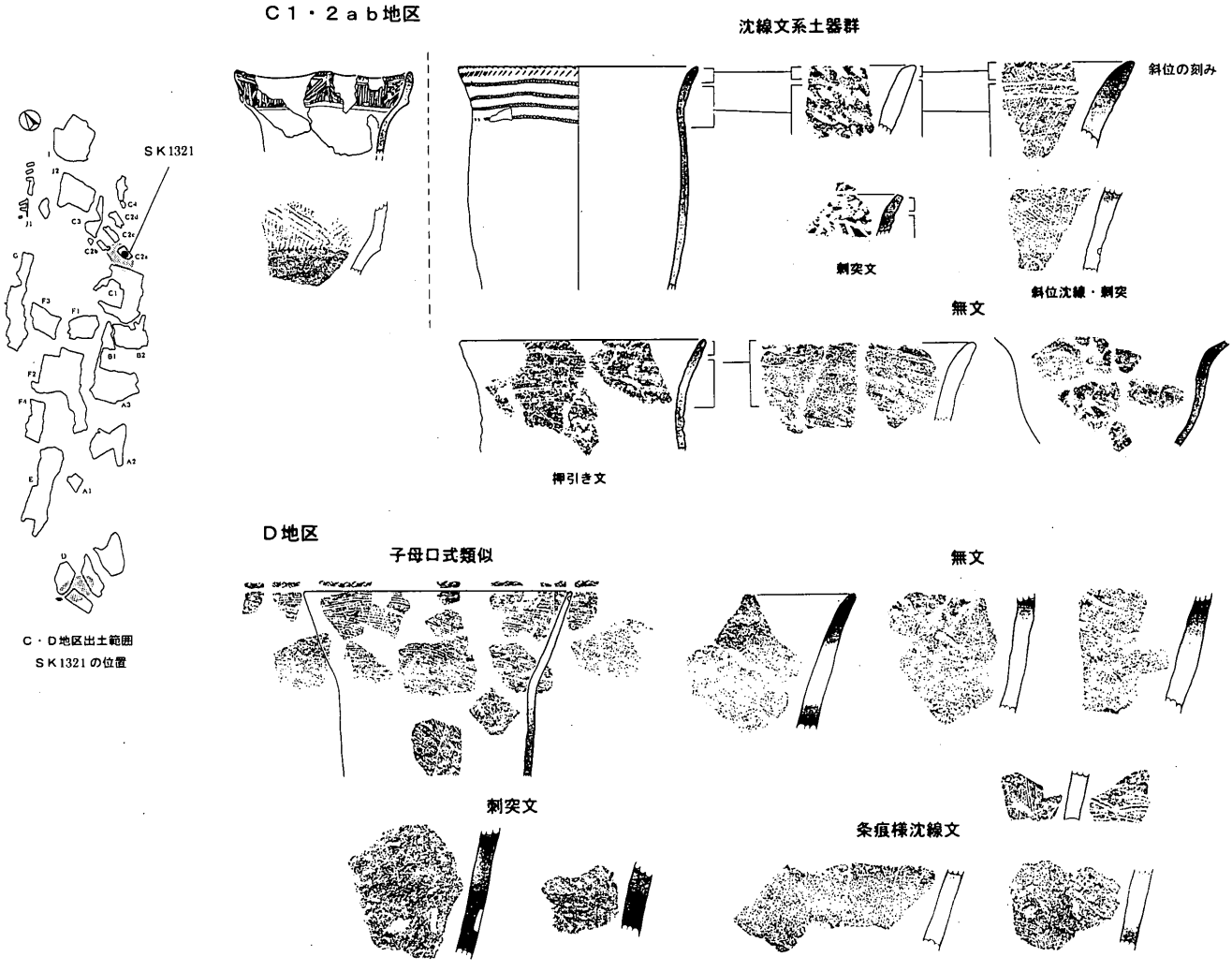
１類の押型文は立野式・樋沢式・細久保式が認められるなかで、立野式が圧倒的に主体となる。立野式は遺構外出土資料のほか、SB52・53、SK1355で出土し、特にSB52の資料は文様のバラエティーが豊富であるなど良好な資料と言える。一方、樋沢式・細久保式は遺構外出土資料に限られ、量的にもわずかである。小破片の資料が多く不明確な点も残るが、事実記載で比較的薄手の器壁をもつとしたものが該当し、図版12・101～104を樋沢式、105・106を細久保式と捉えておきたい。文様構成はほとんどが不明だが、103は異方向施文、105は横位＋斜位方向の密接施文となる。なお、２類の縄文・撚糸文は樋沢式あるいは細久保式に伴うと推測しておきたい。

３～５類は沈線文で無文の８類ａ・ｂが伴い、田戸上層式後半以降のある段階に並行するものと思われる。SK1321を主体としてＣ１・２ａｂ地区に分布し、以下のような内容であった(第10図)。

３類　横位多段の押し引き文を施文するもの。

４類　斜位方向や矢羽状の刺突を行うもの。

５類　ａ：比較的薄手の器壁で、下端に段を形成する幅狭の口縁部に鋸歯状の沈線を描き、その中を



第10図　早・前期第Ｉ群３～９類土器の様相

縦位沈線で充填するもの。

b：幅広の口縁部文様帯に横位・縦位・斜位方向の沈線を組み合わせて文様を構成するもの。

8類　a：胎土にガラス質鉱物・雲母が目立つもの。

b：胎土に白色粒子が目立つもの。

3～5・8類の関係について、まず、SK1321では3・5・8類bが出土し、出土状況から3・5・8類bを並行する時期に置くことができよう。また、第9図に掲載したC1・2ab地区出土資料では3・4・8類aが認められ、後述するような器形・文様・胎土などの特徴から同時期として扱える。従って、3～5・8類を以って田戸上層式後半以降の、ある段階の様相を示していることが考えられる。

3・4・5b・8a類は、文様要素は大きく異なるものの、類似点を指摘することができる。器形は全体が把握できる資料はほとんどないが、頸部で括れて口縁部が外反する形態となり、胎土のガラス質鉱物や雲母がかなり目立つ。無文以外は口唇部に斜位方向の刻みを施し、刻みの下位へ文様帯を設定して、沈線文・押し引き文・刺突文からなる主文様を配置し、いずれも幅の広い文様帯を形成する。ただし、文様帯がどこまで広がるのかは、完形に近い個体が得られた3類以外は不明である。これに対して、5類aは口縁部形態などの器形・文様帯幅・要素が異なり、更に器壁が薄手で胎土も緻密な傾向にあり、3・4・5類bとは異なる系統の沈線系文土器群と理解できる。また、8類bの無文土器は器形と胎土が高山寺式に類似し、特に器形は高山寺式の古～中段階とされるものに近い。この点から8類bは高山寺式古～中段階の土器と考えられ、その判断に誤りがなければ3・4・5・8類aも高山寺式古～中段階並行の土器群である可能性が高い。

以上に後続する土器群、すなわち沈線文の終末期以降に所属すると思われる土器群が6・7・9類である。6・7・9類は良好な出土状況ではないが、先に「田戸上層式後半以降のある段階」とした土器群とは出土位置を大きく異にするD地区で検出された(第10図)。6類は条痕様沈線で文様を描くもの、7類は刺突を施すものであり、これに9類の子母口式に類似する土器が出土している。子母口式に類似する土器は、条痕は外面のみだが口唇部に絡条体を押捺し、口唇部直下へC字形を呈する深い刺突を行うといった特徴をもつ。また、8類bの白色粒子を含む無文土器が一定量認められ、この胎土と6・7類は非常に近く、6・7・8類bは高山寺式系統の土器群であることがうかがえる。ここで6類の条痕様沈線に注目すると、高山寺式では「直後の段階」に同要素が見受けられ、直後の段階は子母口式前半段階に位置付くとされる(関野1988)。

また、条痕様沈線は「直後の段階」より若干古い時期と思われる大桑村万場遺跡(百瀬他2001)でも出土し、この段階では内裏口唇部直下への沈線が刻みとして残り、圧倒的な量で撚糸文施文土器が主体となる点を特徴とする。本例は裏面沈線や刻みをもつものと撚糸文が存在せず、9類が出土している点を評価すれば高山寺式「直後の段階」に該当し、6・7・8b・9類をもって木曽地方における子母口式段階の様相を示しているとも思われる。しかしながら出土総数がわずかで、小破片の資料が多いといった資料的な制約から不明確な点も多く、可能性を指摘するにとどめて今後の課題としておきたい。

10類は器面内外に条痕を施し、沈線や微隆帯で幾何学的な文様を構成するもので、鵜ガ島台式に該当しよう。遺構からの出土はなく、図示した3点が確認されたにすぎない。

第II群土器

第II群は早期末葉土器群で、SB93、SK1346・1349・1354出土資料と遺構外出土資料が存在し、入海II式・石山式・天神山式およびそれに伴出する土器群が認められる。

1類は絡条体条痕の可能性があるものの、明確ではない。圧痕の浅い条痕を、器面内外に施文する。2類に伴うものであろう。

2類の絡条体圧痕文は遺構外出土資料の3点があり、口唇部直下に隆帯をもち、横位・鋸歯状・弧状の絡条体を押捺して文様を組み合わせるものや、横位多段構成のものが見受けられる。いずれも撚糸文を地文とし、内面はナデ調整が施されている。内面条痕がなく、絡条体圧痕文の地文に撚糸文を施文するのは、入海II式～天神山式並行期の特徴とされ(中沢1997)(綿田1996)、さらに石山式～天神山式並行期では横位多段構成が増加し(綿田2000)縄文施文が加わる。本類もこうした特徴を備えており、入海II式並行期以降の絡条体圧痕文と評価できるが、東海系土器群の主体が6類の天神山式である点、また、3類の縄文施文が存在する点から、さらに時期を限定して石山式～天神山式並行期と捉えておきたい。

3類の縄文施文はSB93・SK1346・遺構外で出土しており、石山式～天神山式並行期に位置付けられる。単節の原体を用いて斜構成の縄文を施文しているが、羽状あるいは菱形構成であった可能性が高い。縄文施文は東北系土器群の影響を受けて成立したと考えられ、次段階の前期初頭土器群の成立母体になる。

4類の入海II式は、SB93で出土した以外には存在しない。

5類は石山式であり、6類の天神山式を主体とするSB93、SK1346・1349で若干数が出土した。

6類の天神山式は、ある程度の器形・文様構成を把握できる資料が2点存在する。SB93の27や遺構外の138を見ると、器形は胴中部に最大径をもち、口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。やや突出する口唇部に刻みを施し、口縁部以下へ27は縦位帯状の波状文を、138は横位多段の波状文を描いている。破片資料を加えると、横位波状文・縦位波状文のほかに斜位方向に描く29があるが、横位波状文がもっとも多い。波状文は単沈線によるものと3条以上の条線によるものが認められ、施文原体としてヘラ状(棒状)工具・櫛歯状工具・貝殻などが推測されよう。

7類は、6類の胴部破片を多く含んでいることが推測され、斜位方向の条痕(条線)を施す。

6・7類はSB93、SK1346・1349・1354出土資料のほか、遺構外出土資料があり、特にSB93の様相は木曽地方における早期末葉、石山式～天神山式期の状況を示すものとして注目される。SB93では3類の縄文施文、4類の入海II式、5類の石山式、6・7類の天神山式、8類の無文が出土し、6～8類が主体となる。繊維を含む3類がわずかで絡条体圧痕文を伴出せず、東海系土器群が主体を占める在り方は、木曽地方が東海地方に接するといった地理的な事情を反映していよう。その一方で開田村の下向B遺跡(松原他2001)では、東海系土器群とともに一定量の縄文施文が出土しており、開田高原と木曽川流域とではそれぞれ異なった様相がうかがえる。この差異は木曽地方における地域性と考えられるが、資料の増加を待った上でさらなる検討が必要である。

8類の無文土器はSB93、SK1349・1354、遺構外で出土し、6・7類に伴出する。内外面にナデ調整を施し、口唇部には細かな刻みを有するものが多い。

第III群土器

第III群は前期中～後葉土器群で、遺構に帰属する資料は存在せず、資料総数も他より少ない。

1類は東海系土器群の木島式であり、偏平隆帯で口縁部の文様を構成し、櫛歯状工具による条線を施す。口唇部につまみ痕や刺突をもつものが多く、木島VI式(渋谷1982)が主体になるものと思われる。

2類は爪形文で横位・レンズ状などの文様を構成するもので、爪形文の特徴から北白川下層IIb式古段階に相当しよう。爪形文には、側線をもつものともたないものが認められる。また、3類の縄文は2類に伴い、撚りが強く0段多条の原体を含んでいる。

4類は縄文を地文としながら沈線で文様を描いており、諸磯b式中段階以降の資料と思われ、緩やかな波状口縁を呈する5類の縄文がそれに伴う。

6類は王滝村崩越遺跡(神村1982)や大桑村万場遺跡で良好な資料が出土した、隆帯文あるいは浮線文で文様を構成する土器であり、第III群2類に伴う可能性がある。

第IV群土器

第IV群土器は前期末葉土器群であり、SB50出土資料と遺構外出土資料が存在する。

1～3類は棒状貼付文・結節浮線文・結節沈線文・沈線文で主文様を構成するもので、下島式に相当しよう。いずれも遺構外の資料であり、出土総数も少ない。

4類は結節沈線文や結節浮線文で渦巻・横位＋波状などの主文様を構成し、口縁部上端に三角印刻文や縦位の浮線文を施す。晴ヶ峯式に並行する一群である。

5～8類は隆帯で口縁部文様を構成する一群であり、いわゆる特殊突帯文も存在する。隆帯の形態や隆帯上への加飾の有無など多様なものがあり、岐阜県上原遺跡(掘田2000)で主体となった隆帯文の土器や北白川下層III式～大歳山式が認められる。

9類は縄文施文で、底部形態の特徴から大歳山式に該当するものと思われる。

第IV群の唯一の遺構資料であるSB50では、炉体土器としての機能が推測される埋設土器に9類の縄文施文と中期分類第Ⅰ群Ａ類2種の集合沈線文系土器が用いられ、埋土で4類の結節浮線文が出土した。この状況は、前期末葉最終段階の様相を示していることが考えられる。　(贄田　明)

参考・引用文献

会田　進他　2000　『樋沢遺跡』　岡谷市教育委員会・塩尻市教育委員会
神村　透　1982　『崩越』　王滝村教育委員会
渋谷昌彦　1982　「木島式土器の研究」『静岡県考古学研究』11　静岡県考古学研究会
関野哲夫　1988　「高山寺式土器の編年」『先史考古学研究』1　阿佐ヶ谷先史学研究会
中沢道彦　1997　「縄文時代早期末「膳棚Ｂ式」の設定と「プレ塚田式」の理解に向けて」『川原田遺跡　縄文時代編』御代田町教育委員会
堀田一浩　2000　『上原遺跡』II　(財)岐阜県文化財保護センター
松原和也他　2001　『県営担い手育成事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』　開田村教育委員会
百瀬忠幸　1988　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』　(財)長野県埋蔵文化財センター
百瀬忠幸他　2001　『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』　大桑村教育委員会
和田秀寿　1988　「縄文早期高山寺式土器の成立過程と細分編年」『古代学研究』117　古代学研究会
綿田弘実　1996　「中央高地における縄文早期末葉絡条体圧痕文土器」『長野県立歴史館研究紀要』2　長野県立歴史館
綿田弘実　2000　「長野県の縄文早期末葉土器群」『第13回縄文セミナー　早期後半の再検討』　縄文セミナーの会

第2節　中　　期

1　初頭～前葉

(1)　遺構の概要(第11図)

中期初頭～前葉(五領ヶ台式～狢沢式並行期)に属する遺構・遺物を報告する。時期の判明した遺構は竪穴住居跡8軒、土坑2基である。竪穴住居跡のすべてと土坑1基(SK1268)がⅠ地区で検出され、遺構外出土遺物もⅠ地区の出土が目立つ。Ⅰ地区が当該期の中心となる地域と推測され、他の地区ではⅠ2地区で土坑1基(SK1285)を確認するのみである。ただしⅠ地区のSB50では、前期末葉の土器と五領ヶ台式並行期の土器が供伴して出土しており、付近に何らかの遺構が存在した可能性もある(本章第1節)。

以下、遺構別に紹介する。竪穴住居跡規模の(　)内数値は推定を表す。土器については第2節4、石器については第4節を参照されたい。

(2)　竪穴住居跡

ＳＢ100（図版18　PL5）

位置：Ⅰ地区　XⅣV11　**切り合い**：なし。　**形状**：不整円形　**規模**：5.2×5.0m

構造：プランは黄褐色土層と埋土の差で明確に判明。調査開始直後から、壁面より中心寄りの埋土上部より拳～人頭大の礫の集中を検出。礫を除去して床面を確認。炉は中央部奥壁寄りのピット1・2の間に位置する。地床炉で形状は不整円形、床面上に弱い比熱痕が見られる。直径は約70cm。主柱穴はピット1～4と推測され、いずれも30cm以上の深さをもつ。

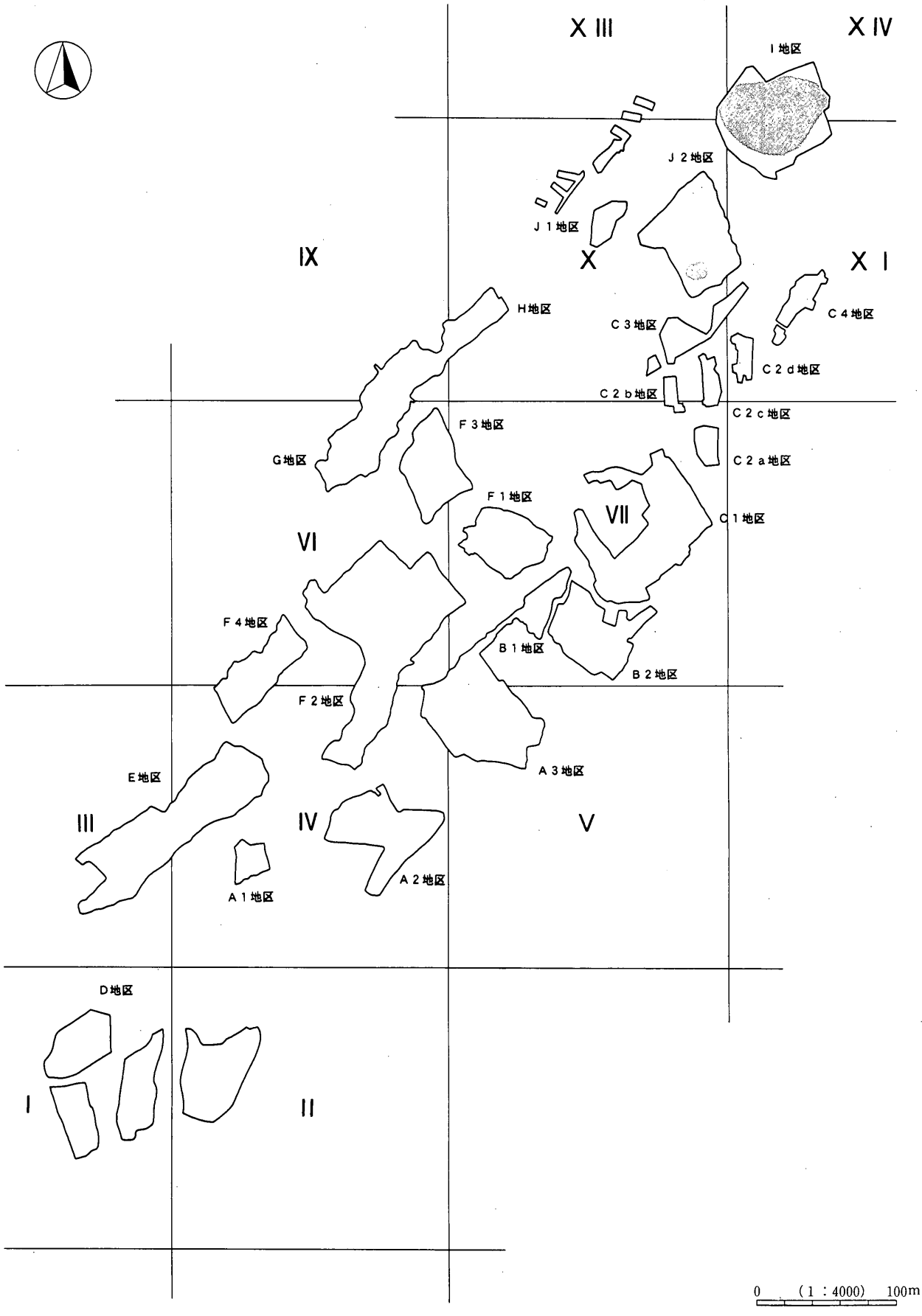
遺物：埋土中より出土。土器(図版23～26　PL27・28)　230～235・263は1群Ａ類1種、236～239・242は1群Ａ類2種、248・250・251・253・255・260・264は1群Ｂ類1種、244～247・249・252・254・256～259・261・262・265・266は1群Ｂ類2種、267～269・273～276は1群Ｃ類、270・271は1群Ｄ類、243は1群Ｅ類1種、282・283・285は1群Ｅ類2種、284は1群Ｅ類4種ａ、280・281は1群Ｅ類4種ｂ、240・241・272・277～279・286は1群Ｆ類である。石器(図版130・132・133・136　PL53・54)　21は石鏃、66は石錘、91は石匙、134はピエス・エスキーユである。このほかに、打製石斧などが出土した。

ＳＢ109（図版19　PL5）

位置：Ⅰ地区　XⅣU16　**切り合い**：なし。　**形状**：円形　**規模**：径約6.4m

構造：約2/3残存。プラン北側は黄褐色土層と埋土の差で明確に判明。南側は削平と礫の流れ込みにより、破壊されている。残存した遺構内では壁面から中心寄りの埋土上部より拳～人頭大の礫が集中して出土。礫を除去して床面を確認。炉は中央部に位置する。地床炉で形状は不整円形、床面上に被熱痕が若干見られる程度。直径は約40cm。主柱穴は壁面に沿って位置するピット1～5の可能性がある。

遺物：礫の集中部～床面にかけて比較的多く出土した。土器はほとんどが破片で占められるが、深鉢(332)は接合により略完形となる。土器(図版27～32　PL29～31)　287～297・324～326・335・336・363は1群Ａ類1種、298～307・310・311・328～331・371は1群Ａ類2種、313～318・320～322は1群Ｂ類1種、319・323は1群Ｂ類2種、332・333は1群Ｃ類、366は1群Ｅ類3種、308・343・346～353は1群Ｅ類4種ａ、309・342・344・345・354・355・359～362・364・365は1群Ｅ類4種ｂ、367～369は1群Ｅ類5種、312・327・334・337・356～358・370・372は1群Ｆ類である。土製品(図版30　PL30)　338



第11図　縄文時代中期初頭～前葉遺構分布状況

～341は土製円板である。石器(図版130・131・134　PL53・54)　7・9・10・14・19・47は石鏃、104は削器である。このほかに打製石斧と部分的に磨痕のある棒状礫2点(長さ約50cm)などが出土した。

ＳＢ110（図版20　PL5）

位置：Ｉ地区　XIＡ２・３　**切り合い**：なし。　**形状**：不整形　**規模**：径約6.7m

構造：約2/3残存。プラン東側は黄褐色土層と埋土の差で明確に判明。西側は削平と流れ込みで不明。流路に近いため、人頭大以上の礫が多く、住居内の礫も人為的なものか流れ込みか判断できない。床面も礫で荒れており、炉も確認できない。柱穴も不明瞭である。

遺物：埋土中より出土。土器(図版40　PL35)　496・501は１群Ａ類１種、497～500は１群Ａ類２種、502は１群Ｃ類である。石器は打製石斧などが出土した。

ＳＢ117（図版20　PL5）

位置：Ｉ地区　XIVＶ19　**切り合い**：なし。　**形状**：不整円形　**規模**：4.3×4.0m

構造：検出時にプラン全体を確認。削平の影響を受け、壁面は北東部で約50cmの高さで残るのに対し、南西部では約20cmしか残らない。住居跡中央部やや奥壁寄りには、床面から約10cm浮いて焼土がレンズ状に堆積する。住居跡中央部では深鉢(406)を検出。深鉢の東側に接する床面上約40cmの範囲に焼土が集中するものの、埋甕炉と推測される。主柱穴はピット１～５と推測される。

遺物：埋土中で礫と共に床より浮いた状況で出土。土器(図版33・34　PL32)　浅鉢(421)は床面で口縁を下にしてつぶれた状態で出土。383～388は１群Ａ類１種、389～391・393～395・397～403・421は１群Ａ類２種、408は１群Ｂ類１種、406・407・409～418・420は１群Ｂ類２種、419は１群Ｃ類、381・392は１群Ｅ類１種、380は１群Ｅ類２種、374・382・396・404・405は１群Ｆ類である。
373・375～379は、口唇部を断面四角形状に整形し、口唇部および特殊突帯上には刺突が見られるなど、早・前期で分類された第IV群８類に該当する。石器(図版134・141　PL57)　102は削器、206は石錘である。このほかに、打製石斧などが出土した。

ＳＢ118（図版21　PL5）

位置：Ｉ地区　XIVＶ23・XIＢ２　**切り合い**：なし。　**形状**：不整円形　**規模**：径6.1×5.6m

構造：検出時にプラン全体を確認。埋土中の東壁～中央部付近に拳大の礫が集中して出土。住居跡中央部の床面上に直径約30cmの被熱痕を検出。不整円形で、地面の赤化はほとんどみられないが地床炉と考えられる。ピットは６基検出された。ピット１～４は主柱穴の可能性がある。さらに本住居跡に近接して３基のピットを検出した(７～９)。これらは、住居跡からの距離も類似し、ほぼ90度ずつ等間隔に位置し、住居構造の一部の可能性がある。ただし、住居跡内の推定柱穴とは軸が若干ずれる。

遺物：埋土中の礫集中部から出土。土器(図版35　PL33)　422～425は１群Ａ類１種、427～435・439～441は１群Ａ類２種、436は１群Ｃ類、426・437・438は１群Ｆ類である。石器(図版132　PL53)　75は石錘である。

ＳＢ119（図版19　PL5）

位置：Ｉ地区　XIVＶ22　**切り合い**：なし。　**形状**：不整楕円形　**規模**：径4.5×3.5m

構造：検出時に不明瞭ながらプランを確認。埋土全体に礫が多く含まれ、特に北壁・南壁付近で集中的に出土した。自然によるものか、人為的かは不明。住居跡中央部の床面上に直径約60cmの不整形の被熱痕を

検出。地床炉と推測される。床面は礫により荒れているが、掘り込みが明確なものピットとした。主柱穴はピット１～４と推測される。

遺物：埋土中の礫集中部や床面で出土。土器(図版36・37　PL33)　442～446・470は１群Ａ類１種、447・471は１群Ａ類２種、454・455・458・461・462は１群Ｂ類１種、456・457・459・460・463は１群Ｂ類２種、450・451・453は１群Ｃ類、448は１群Ｄ類、467は１群Ｅ類４種ａ、468は１群Ｅ類４種ｂ、469は１群Ｅ類３種、472は１群Ｅ類５種、449・452・464～466は１群Ｆ類である。石器(図版130)　13は石鏃である。このほかに、打製石斧などが出土した。

ＳＢ124（図版22　PL5）

位置：Ｉ地区　XIA20　**切り合い**：NR14に切られる。　**形状**：不整円形　**規模**：径4.9×4.3m

構造：検出時に北側のプランを確認。南側はNR14に一部切られる。床面では８つのピットを検出したが、どれも浅く、炉も検出されていない。埋土は単層。住居跡中央部に床面よりやや浮いた状態で、拳～人頭大の礫が集中して検出され、そのなかから人面装飾付土器(495)が出土した。底部片は形を残して正位の状態で遺存し、他の部位は小破片の状態で、その周辺から集中的に出土した。人面装飾付土器以外の土器片についても礫の集中部や埋土中より出土している。

遺物：土器(図版38・39　PL34)　473～477は１群Ａ類１種、478・481～484は１群Ａ類２種、485・487は１群Ｂ類１種、486は１群Ｂ類２種、492・495は１群Ｃ類、479・480は１群Ｅ類１種、494は１群Ｅ類３種、493は１群Ｅ類４種ｂ、488は１群Ｆ類、489～491は２群Ｂ類である。石器(図版132　PL53)　71は石錐である。このほかに、打製石斧などが出土した。

ＳＢ137（図版21）

位置：Ｉ地区　XⅣU21　**切り合い**：なし。　**形状**：円形　**規模**：径約3.2m

構造：北東側約1/2残存。南西側は削平で不明。残存部のプランは検出時に判明。わずかに残る床面も礫で荒れているため、詳細は不明。焼土は北側の壁付近で検出されたが、炉とは考えにくい。柱穴も壁に沿う可能性もあるが、明確にできない。

遺物：埋土中より出土。土器(図版40)　503・505は１群Ａ類１種、506・507・509～512は１群Ａ類２種、513～516は１群Ｂ類２種、504は１群Ｅ類４種ａ、508は１群Ｆ類である。石器(図版130　PL53)　８は石鏃である。

(3)　土坑

ＳＫ1268（図版22）

位置：Ｉ地区　XIA３　**切り合い**：なし。　**形状**：不整方形　**規模**：1.1×0.8m

構造：検出時にプラン全体を確認。中央部の埋土中上部より拳大の角礫と深鉢の底部(517)が出土。底面ではピット、遺物などは検出されていない。

遺物：埋土中より出土。土器(図版41　PL35)　517は１群Ａ類１種である。

ＳＫ1285（図版22　PL5）

位置：Ｊ２地区　**切り合い**：なし。　**形状**：円形　**規模**：1.2×1.2m

構造：検出時にプラン全体を確認。削平を受けるものの、深さ約50cmを測る。断面形態は底部から上方に広がる逆台形状を呈する。底面よりやや浮いて深鉢形土器の上半部(518)が割れた状態で出土。周辺部に

は同形状・同規模の土坑が点在しており、同時期に収まる可能性がある。
遺物：埋土中より出土。土器(図版41　PL35)　518は１群Ｆ類である。

(4)　遺構外出土遺物

土器(図版41・42・51　PL35・36)　534・609がＦ４地区、543・623がＣ４地区、532・544・549～556がＤ地区、610がＪ地区、519～531・533・535～542・545～548・557・558・608・611がＩ地区で出土。

519～523・536・538は１群Ａ類１種、524～526・528～532は１群Ａ類２種、534は１群Ｂ類１種、608～611は１群Ｃ類、527・623は１群Ｄ類、556は１群Ｅ類１種、542～544は１群Ｅ類２種、545～548は１群Ｅ類３種、540・541は１群Ｅ類４種ａ、535・537・539は１群Ｅ類４種ｂ、557・558は１群Ｅ類５種、533・549～555は１群Ｆ類である。

２　中葉

(1)　遺構の概要（第12図）

中期中葉(新道式・藤内式・井戸尻式並行期)に属する遺構・遺物を報告する。

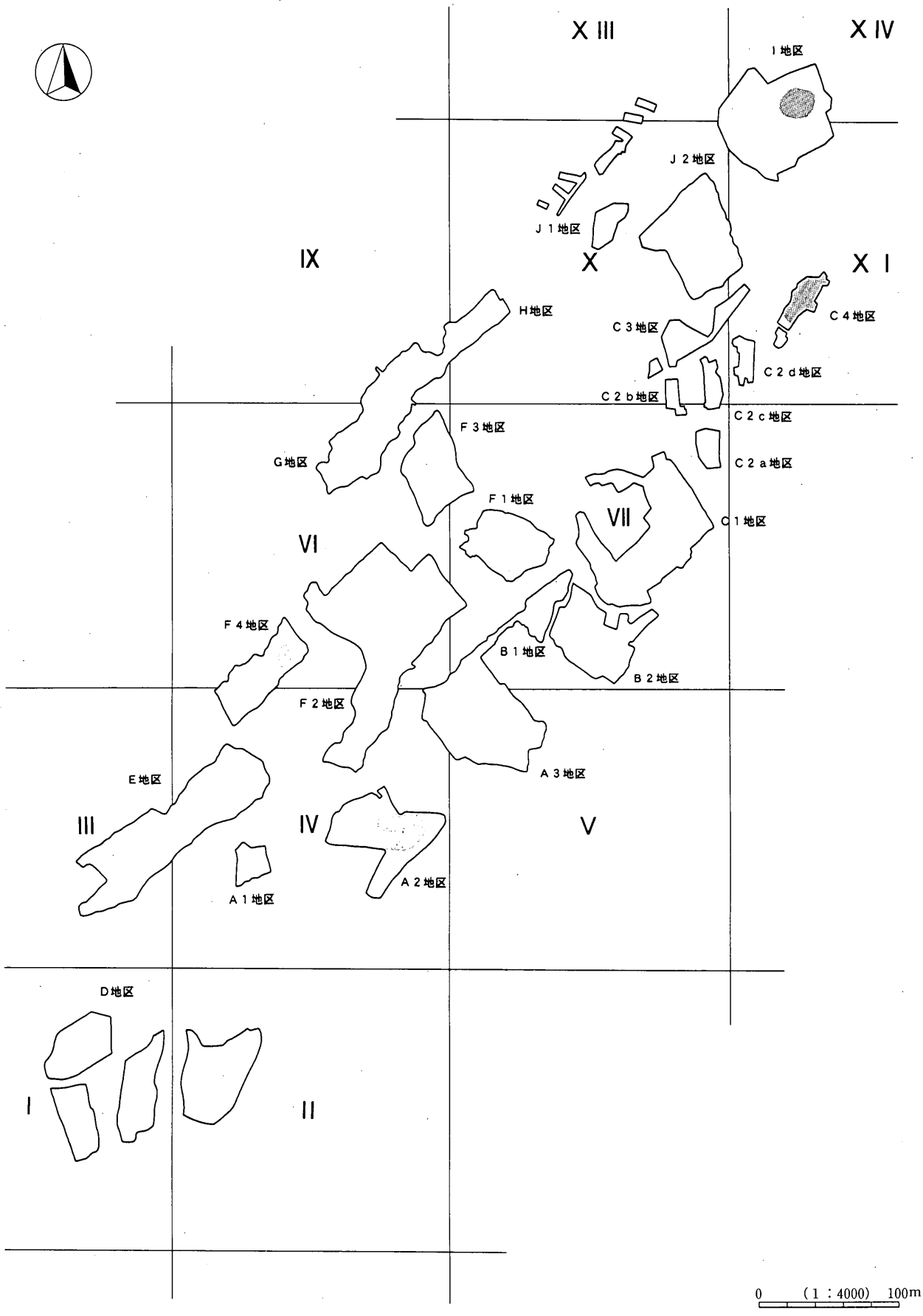
時期の判明した遺構は、Ｉ地区で竪穴住居跡２軒、Ｃ４地区で竪穴住居跡２軒と土坑等が数基、Ｆ４地区で竪穴住居跡１軒、Ａ２地区で土坑等と不整円形配列土坑を検出した。遺構外出土遺物を見てもＩ・Ｃ地区での出土が目立ち、両地区が当該期の生活域の中心と推測される。一方、Ａ２地区の第２検出面では不整円形配列土坑が検出され、少量であるが中期中葉の遺物が主体的に出土する点から、生活域とは異なる性格の空間が存在したと推測される。

以下、遺構別に紹介する。住居跡規模の(　)内数値は推定を表す。土器については第２節４、石器については第４節を参照されたい。

(2)　竪穴住居跡

ＳＢ144（図版43　PL6）

位置：Ｃ４地区　XIQ１・２　**切り合い**：SB131に切られる。　**形状**：円形　**規模**：径約4.6m
構造：検出時にほぼプラン全体を確認。埋土中に礫はほとんどみられない。床面中央部に埋甕炉(559)が付設される。口縁部と底部を欠く深鉢形土器の胴部を用いている。炉内には焼土も確認された。ピットのうち１～５は規則的に配置され、深さも平均40cm前後あり、主柱穴と考えられる。床面調査では、北～東壁に幅10cm、深さ10cm程の周溝も検出した。
遺物：埋土中より出土。土器(図版49　PL36)　563は１群Ｃ類、559は１群Ｄ類、560・561は２群Ｄ類、562は１群Ｆ類、564～582は２群Ａ類、586～588は２群Ｅ類、583～585は２群Ｆ類である。土製品(図版49)　589は土製円板である。石器(図版133・134・140　PL54・56)　93は石匙、109は削器、195は磨石である。このほかに、打製石斧などが出土した。
時期：559は１群Ｄ類であるものの、沈線文が太く、隆線区画内には斜位の単純斜行沈線文を施し、頸部に文様区画が存在するなど、比較的新しい要素を有している。また、本住居跡では中期初頭～前葉の住居跡で出土する１群Ａ・Ｂ類が存在しない点、前段階にほとんどみられない２群Ａ類(三角押文を有するもの)が出土する点から、中期中葉(新道式期)とした。



第12図　縄文時代中期中葉遺構分布状況

ＳＢ99（図版43　PL6）

位置：Ｉ地区　XⅣV12　**切り合い**：NR13に切られる。　**形状**：不整形　**規模**：径約6.0m

構造：北側は削平で不明。南側は上部をNR13に切られ、床面が部分的に残存する。炉は確認できない。ピットは１が深さ40cm、その他のピットは深さ10cm前後。

遺物：埋土中より出土。土器(図版50　PL36)　590・591は２群Ｂ類、592・593は２群Ｃ類、594は２群Ｆ類である。石器(図版138　PL55)　164は打製石斧である。

時期：中期中葉(藤内式期)。

ＳＢ35（図版45　PL6）

位置：Ｆ４地区　VIW７・８　**切り合い**：なし。　**形状**：楕円形　**規模**：6.1×4.8m

構造：検出時にプラン全体を確認。床面は全面が硬化する。炉は２基検出した。住居跡中央部に位置する炉１は小形の石囲炉で、床面上に被熱痕が見られる。炉縁石は南西に開く「コ」の字状を呈し、内寸は約30cm。炉２は炉１から北へ約70cm離れて付設されている。埋甕炉(627)であり、底部のみ用いている。埋土には炭化物と焼土が含まれる。主柱穴はピット１～６の６基と推測される。本住居跡では、北壁側に周溝が部分的に存在するほかに、主柱穴間を結ぶ溝が確認された。幅10cm、深さ10cm程で、ピット５～６の間以外はほぼ全周する。

遺物：埋土中より出土。土器(図版52)　624～628は２群Ｆ類である。石器(図版132・138　PL53)　67は石錘、151は打製石斧である。このほかに、ピエス・エスキーユなどが出土した。

時期：中期中葉(井戸尻式期)。

ＳＢ145（図版46　PL6）

位置：Ｃ４地区　XIＬ19・24　**切り合い**：なし。　**形状**：楕円形　**規模**：4.4×3.7m

構造：検出時にプラン全体を確認。住居跡中央部西寄りに石囲炉を検出。30cm程の棒状の石を床面上に「コ」の字状に配置する。炉より少し離れて同様の石が出土したものの、炉縁石であったかどうかは不明。炉内には被熱痕がほとんど見られない。ピットは壁面に沿って６基検出された。深さ30cm以上のピット１・２は柱穴の可能性がある。ピット４より深鉢の底部(634)が逆位で出土。

遺物：埋土中より出土。土器(図版52)　629・630・633・634は２群Ｃ類、631・632・635～638は２群Ｆ類である。

時期：中期中葉(井戸尻式期)。

ＳＢ123（図版46　PL6）

位置：Ｉ地区　XIＡ５　**切り合い**：なし。　**形状**：隅丸方形　**規模**：4.5×3.8m

構造：検出当初は南側のプランを確認し、調査を進める過程で北側プランも不明瞭ながら確認。自然流路に近いため埋土中には拳大～人頭大の礫が多く出土する。礫の分布範囲も不規則であり、自然の流入か、意図的かは不明。床面も礫で荒れていたが、中央部に石囲炉を検出した。炉縁石は北東辺で長さ20～30cmの細長い石３個が床面上に「Ｌ」字状に残存し、被熱痕は直径約50cmに広がる。ピットは７を除いて掘り込みが深い。

遺物：埋土中より出土。土器(図版53　PL36)　639・640は１群Ａ類１種、641・643・645・646は１群Ａ類２種、652は１群Ｂ類１種、653・654は１群Ｂ類２種、647～650は１群Ｃ類、644は１群Ｆ類、657は２群Ａ類、651・655は２群Ｂ類、656は２群Ｃ類、658は２群Ｅ類、642は２群Ｆ類である。石器はピエス・エ

スキーユなどが出土した。
時期：中期初頭～中葉。

(3)　土坑・性格不明遺構

ＳＫ1320　（全体図）
位置：Ｃ４地区　XIＬ22
構造：削平を受けており、底面のみ残存。プランも不明瞭。
遺物：土器（図版50）　603が埋土中より正位で出土。２群Ｂ類である。
時期：中期中葉（藤内式期）。

ＳＫ1361（旧SB132　図版44　PL6）
位置：Ｃ４地区　XIＱ６　**形状**：不整楕円形　**規模**：長軸3.7×短軸2.6m
構造：検出時に不明瞭ながらプランを確認。深さ約30cmを測る。壁に近接して直径20cm、深さ20cm程の小ピットを検出。
遺物：埋土中より出土。土器（図版50）　595～597は２群Ｂ類、598～602は２群Ｆ類である。
時期：中期中葉。

ＳＸ８（旧SB130　図版44）
位置：Ｃ４地区　XIＬ23　**形状**：不整円形　**規模**：径約９ｍ
構造：削平を受けており底面部のみ調査。プラン内より多くのピットが検出されるものの、いずれも深さ10cm前後と浅い。
遺物：埋土中より少量出土。土器（図版50）　605～607は２群Ａ類、604は２群Ｂ類である。
時期：中期中葉（藤内式期）。

(4)　不整円形配列土坑（図版47・48　PL6・7）

Ａ２地区においては、第１検出面の調査後、無遺物の間層を挟んで第２検出面の調査が行われた。第１検出面は主に縄文時代中期中葉以降の遺構・遺物が出土したのに対し、第２検出面では中期中葉の遺物が主体的に出土している。また中期後葉の遺物がほとんどみられない点から、本遺構もほぼ中葉に限定できると推測した（第１検出面の遺構図は図版122を参照）。

検出遺構の大半は小土坑状を呈し、深さ10～20cm前後のものが主体を占める。調査区南部で多く検出され、９～11基の土坑が不整円形状（長軸は約４～５ｍ）に分布する地点７箇所が確認された。これら７つの土坑群は南部の中でも約500㎡の範囲にまとまり、不規則に分布する。一方、北部では検出された土坑も少なく、配置に規則性などはみられない。本報告書では、上記の分布状況から調査区南部の不整円形状に配列する土坑を１～７群として紹介する。なおこれら土坑群は当初STとして調査されているため、旧番号も提示する。

１群（旧ST14）は11基の土坑で構成される。２群（旧ST13）は10基の土坑で構成され、大きめの土坑（直径60cm程）が１基含まれる。３群（旧ST12）は８基の土坑で構成され、大きめの土坑（直径50cm程）が１基含まれる。４群（旧ST9）は直径60cm程の土坑が６基と40cm以下の土坑３基で構成される。５群（旧ST10・11）は２重の配列で、内側は６基、外側は10基の土坑で構成される。６群（旧ST15）は９基の土坑で構成され、大きめの土坑（直径60cm程）が１基含まれる。７群（旧ST16・17）は２重の配列で、内側は７基、外側

は9基の土坑で構成される(1基は内側と重複)。

上記の土坑群が発見された第2検出面の特徴として、比較的小形の土坑が中心で部分的に近接し、分布状況に規則性がみられない点、土坑同士の切り合いがほとんど認められない点、土坑以外の遺構は検出されない点(住居跡・焼土跡・溝跡など)、出土遺物の量が少ない点、時期が中期中葉にほぼ限定される点などがあげられる。

遺物：土器(図版54・114　PL36・50)　第1検出面では、SK139で659～661、SK164で662、SK165で663、SK179で664、NR6で665・666が出土した。この他SK635では中期後葉の遺物(1321～1324)も出土している(第2節3遺構外出土遺物他を参照)。660・664は2群B類、659・665・666は2群C類、661～663は2群E類、1321は3群A類2種、1322～1324は3群G類と推測される胴部片である。第2検出面では、SK429で667、SK441で668、SK433で669が出土した。670～677は遺構外出土資料である。669・672・674・675は2群B類、667・668・670・671は2群C類、673・676・677は2群F類である。

(5)　遺構外出土遺物

土器(図版51・55　PL36)　686がA2地区、613・678～682がC地区、612・618がE地区、614・616・617・619～622・683・685・687がI地区、684がJ地区で出土。615は地区不明。

612～616・618・619は2群A類、620～622は2群B類、678～680・683・685が2群C類、617・681・682・684・686・687が2群F類である。

3　後葉

(1)　遺構の概要（第13・14図）

本節では中期後葉に属する遺構・遺物を取り上げ、おおむね2時期に分けて報告する。時期区分の目安としては、第3群A・B類が主体的に出土する遺構をI期、第3群D類～G類が主体的に出土する遺構をII期とする。

当該期は縄文時代の中でもっとも遺構・遺物が多く見られる時期である。竪穴住居跡軒数はI期約10軒、II期約30軒である。分布範囲については、I期が遺跡群全体に点在するのに対し(第13図)、II期は、遺構は遺跡群全体に分布するものの、埋甕を有する竪穴住居跡はE地区に集中する傾向が強い(第14図)。

以下、遺構別に紹介する。竪穴住居跡規模の(　)内数値は推定を表す。土器については第2節4、石器については第4節を参照されたい。

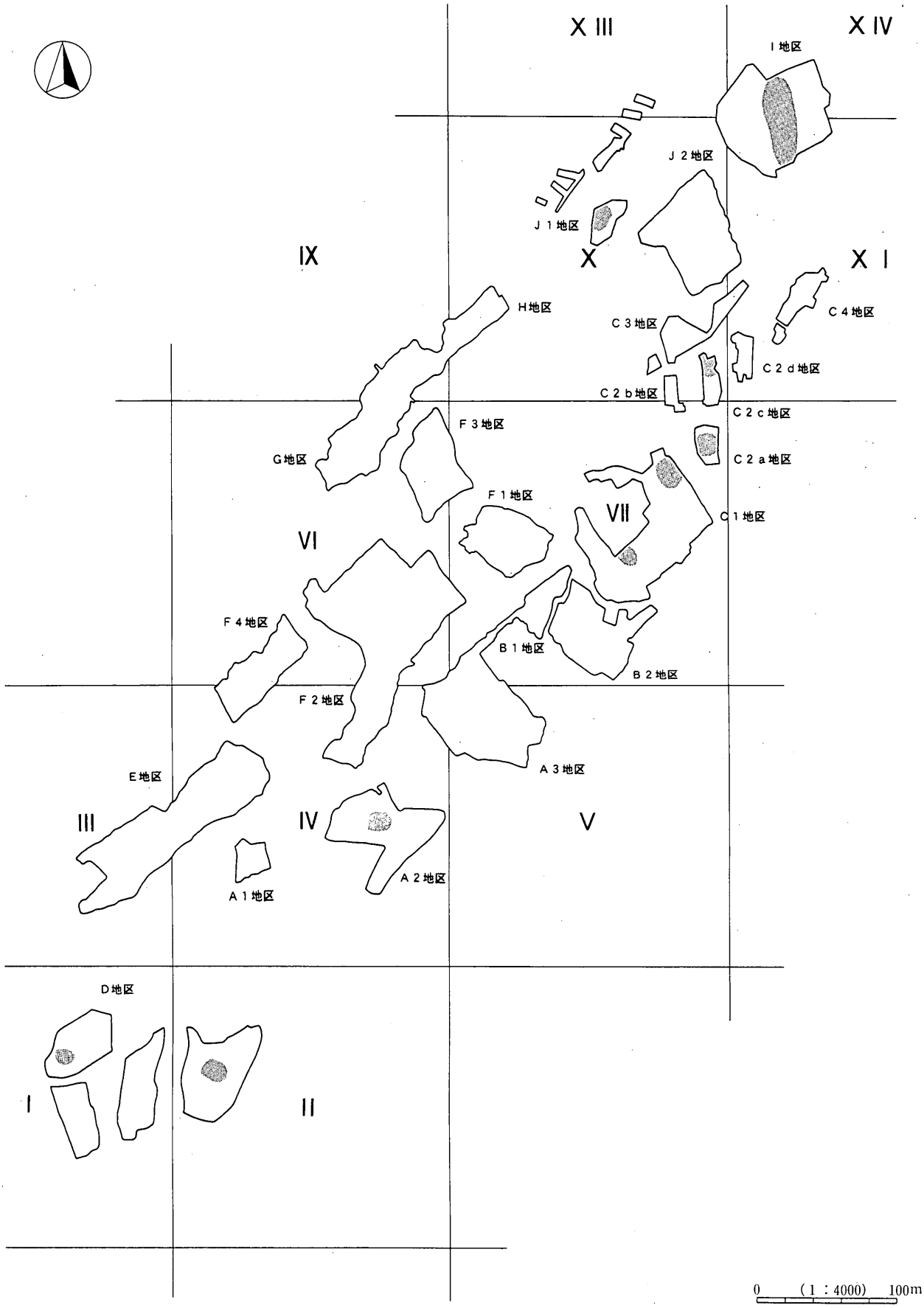
(2)　竪穴住居跡

SB142（図版56　PL9）

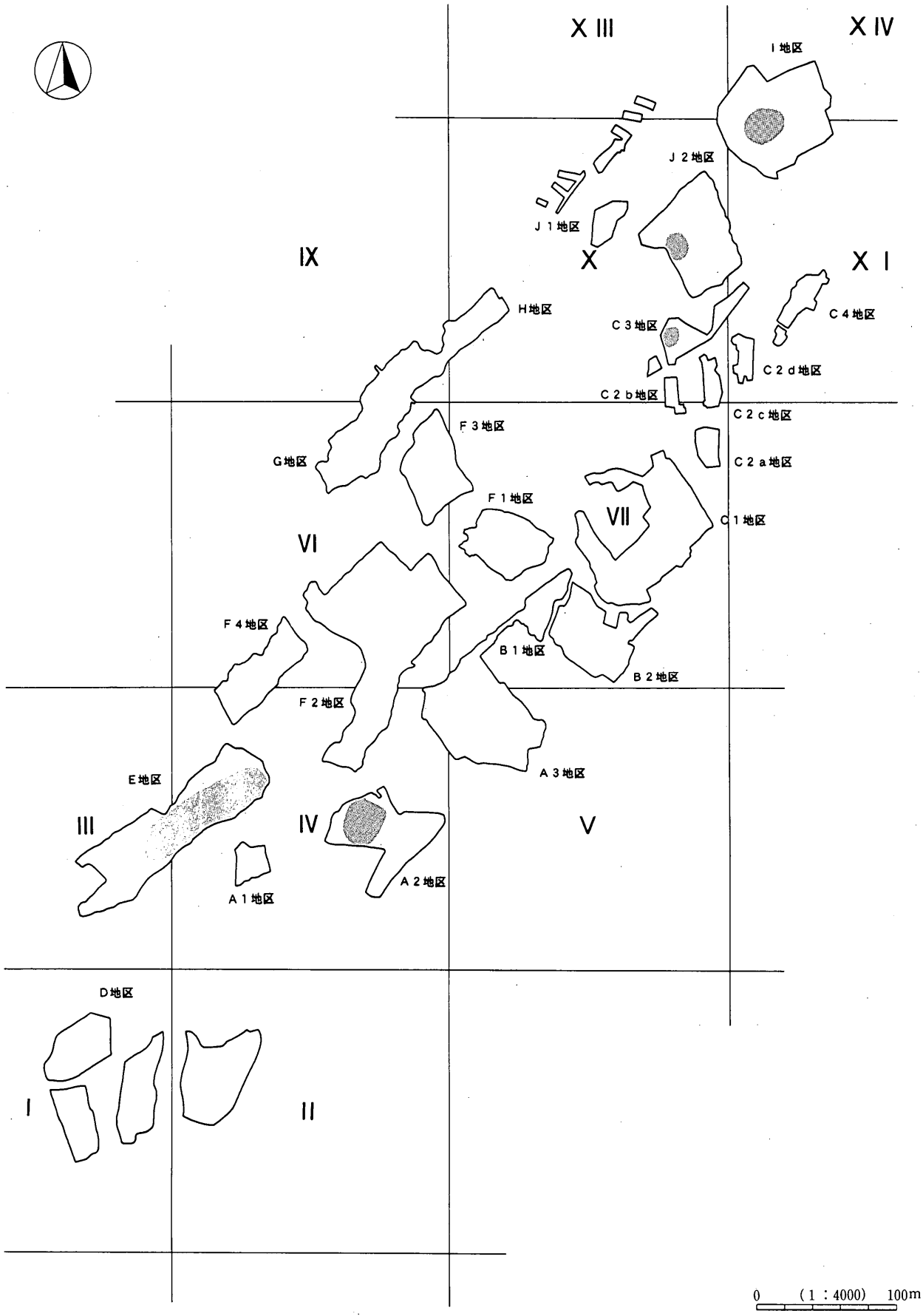
位置：C2a地区　VIIE19・24　**切り合い**：SK1321を切る。　**形状**：不整楕円形　**規模**：6×(5.3)m

構造：検出時に東半分のプランを確認。西側は不明確なまま掘り下げ、柱穴の配列から範囲を推定した。住居跡中央部に石囲炉を検出。床面上に約20～40cmの石を不整円形に配置。特に南東側と北西側には40cm程と大形の平石が設置される。また奥壁側の右寄りには花崗岩を3個設置している。主柱穴はピット1～4・7・9と推測される。

遺物：埋土中より出土。土器(図版63　PL37)　688は1群B類2種、689は2群A類、690・696～699・702は2群C類、691～695・701・703・704は2群F類、700は3群A類4種、705・706は3群B類1種a、707・708は3群J類2種aである。石器(図版134・135　PL54)　106・108・110・113は削器である。このほかに、石鏃と打製石斧などが出土した。



第13図　縄文時代中期後葉Ⅰ期遺構分布状況



第14図　縄文時代中期後葉II期遺構分布状況

時期：中葉から後葉にかけての遺物を含み、時期比定に微妙な要素を残す。出土状況から伴出土器を分離する明確な根拠にも乏しいが、時期的に新しい要素である３群Ｂ類１種と３群Ｊ類２種が存在する点から後葉Ⅰ期に含める。

ＳＢ143（図版57　PL9）

位置：Ｃ２ｃ地区　ＸＹ８　**切り合い**：なし。　**形状**：隅丸長方形　**規模**：3.2×3.6m

構造：プランは南西壁の一部を除いてほぼ確認。床面中央のピット１・２寄りに石囲炉が付設される。検出時には人頭大の礫が炉内を覆う形で発見されており、人為的に覆われた可能性がある。炉縁石は大きさ約20cmの石で構成され、床面上に南側が開く「コ」の字状に配置する。特に入り口側の左端には大きめの偏平な花崗岩を用いる。このほか住居跡の北西部床面では約40cmの偏平な花崗岩が検出された。ピットは５基検出された。１～４は深さ40cmであり、規則的な配置から主柱穴と推測される。炉の近辺の埋土より釣り手土器(719)が出土。把手部分が欠損する以外はほぼ完形である。

遺物：埋土中より出土。土器(図版64　PL37)　709～713・716・717・719・721・722は２群Ｃ類、714・718・720・723・729・730は２群Ｆ類、726・728は３群Ａ類３種、715は３群Ａ４類、724・725・727は３群Ｊ類２種ａである。石器(図版141　PL57)　199は磨石である。このほかに、打製石斧などが出土した。

時期：ＳＢ142同様に中葉から後葉にかけての遺物を含むが、３群Ａ類３と３群Ｊ類２種ａが存在する点から後葉Ⅰ期に含める。

ＳＢ57（図版61　PL8）

位置：Ａ２地区　ⅣN13　**切り合い**：なし。　**形状**：多角形状を呈する不整円形。　**規模**：径約4.8m

構造：プラン全体を検出。削平を受けるものの、壁面は約50cm残存。炉は中央東寄りで検出。床面上に長さ40～70cm前後の棒状礫を長方形に配置する。特に住居跡奥壁側の中央部には花崗岩を用いている。炉の大きさは内寸で60cm×50cm。炉内には住居跡床面を覆っていた土に相似する埋土が堆積し、炉底部に被熱痕は確認されていない。ピットについては１～５が直径約40cm、深さ約50cmを測り、主柱穴と推測される。規模の小さいピット７は入り口施設に関係する可能性がある。周溝はほぼ全周する。

遺物：埋土中より出土。土器(図版73　PL40)　836は３群Ａ類３種、838は３群Ⅰ類１種、840は３群Ｊ類７種、831～835・837・839は３群Ｋ類である。石器(図版130・135　PL54)　35は石鏃、115は削器である。このほかに、打製石斧などが出土した。

時期：後葉Ⅰ期。

ＳＢ86（図版62　PL8）

位置：Ｃ１地区　ⅦⅠ５・Ｊ１　**切り合い**：なし。　**形状**：隅丸長方形　**規模**：(5.5)×4.9m

構造：全体の約3/4を検出。西壁面は削平を受ける。炉は中央部東寄りで検出。床面上に30cm前後の角礫を方形に配置する。炉の大きさは内寸で30cm×35cm。炉内では被熱痕が検出されている。ピットについては１～５が直径40～50cm、深さ50cm前後を測り、主柱穴と推測される。ピット６は残存する深さが10cm程であるが、他のピットとの位置関係から主柱穴と推測される。ピット３・５の間に位置し、深さ40cmを測るピット７も、住居跡に伴なうと推測される。

遺物：埋土中より出土。土器(図版68)　769は２群Ｃ類、765・766・768は２群Ｆ類、770～773は３群Ａ類１種、774・775は３群Ａ類３種、767は３群Ｊ類２種ｂ、776は３群Ｋ類である。石器(図版136・139・143　PL55・56・58)　127は掻器、180・182は磨製石斧、228は垂飾りの未製品である。このほかに、打製石斧

などが出土した。
時期：後葉Ⅰ期。

ＳＢ94（旧３号竪穴住居跡）（図版58　PL8）
位置：Ｄ地区　ⅡＦ19・24　**切り合い**：なし。　**形状**：隅丸方形？　**規模**：径4.6×4.5m
構造：プラン全体を検出、西側は削平により床面のみ残存。炉は中央部北東寄りで検出。床面上に長さ30cm前後の棒状の角礫を配置した石囲炉である。２辺にのみ角礫が残存するが、他の２辺にも石の置かれた痕跡が認められることから、本来は４辺が石に囲まれた長方形の炉であったと推定される。また残存する炉縁石は焼けていない。炉の中央には土器を埋設しており、口縁部が床面上に出た状態で検出された。炉の大きさは内寸で50cm×40cm。長軸を入り口方向に向ける。ピットは数多く検出されるが、深さ40cm以上のピット１～５が主柱穴、約20cm程のピット７が入り口ピットの可能性がある。
周溝は南西部を除き、ほぼ全周する。幅は約10cm、深さ約10cmを測る。
遺物：埋土中より、個体や破片を含め、多数の土器が出土。炉内埋設土器(743)は、胴下半部まで形を残し、底部は欠損。土器の多くはピット７から炉を通過して奥壁に至る軸線上において出土している。(764)は炉付近で出土。(742)は炉内埋設土器の(743)と同類の土器で、ピット７と炉の中間で、東に倒れた状態で出土。(741)は炉付近で床面より浮いてつぶれた状態で出土。(744)は炉と奥壁の中間部の床面上でほぼ完形のまま正位で出土。(736)は床面より約20cm上で口縁～胴部が形を残して出土。口縁は北東を向く。(739)は奥壁付近で出土。胴部に３段の張りをもち、脚を有する。
土器(図版65～68　PL38～40)　731は３群Ａ類１種、741・744は３群Ａ類２種、742・743は３群Ａ類３種、740は３群Ａ類４種、732は３群Ｂ類１種ｂ、734・735は３群Ｂ類２種ａ、739は３群Ｂ類２種ｂ、736は３群Ｂ類２種ｃ、733は３群Ｂ類２種ｄ、737・738は３群Ｂ類１種もしくは２種の口縁部、745は３群Ｇ類と推測される胴部片、746～749は３群Ⅰ類１種、750・752は３群Ⅰ類２種、763・764は３群Ｊ類１種、761は３群Ｊ類２種ａ、759・760・762は３群Ｊ類２種ｂ、753は３群Ｊ類６種、754は３群Ｊ類７種、755～758は３群Ｊ類８種、751は３群Ｋ類である。石器(図版135・136・140・141　PL54・55・57)　114・117は削器、120は掻器、188は磨石、207は石錘である。このほかに、打製石斧と石核などが出土した。
時期：後葉Ⅰ期。

ＳＢ98（図版58　PL8）
位置：Ⅰ地区　ⅩⅣＶ17・22　**切り合い**：なし。　**形状**：不整円形　**規模**：径約5.5m
構造：検出時に北西側約1/2のプランを把握。南東側は、床面ピットを検出後に範囲を推定した。埋土中からは拳大～人頭大の角礫が集中して出土した。特に炉の周辺では土器と角礫が混在するのに対し、南東側では角礫だけが集中出土し、遺構を超えて広がっていた。このため本遺構の礫集中は一部土砂の流れ込みによる可能性もある。炉は住居跡中央やや北寄りに付設される。床面上に長さ30cm前後の角礫を不整円形状に配置する。内寸径は約30cm。奥壁側の石は自然石をそのまま利用したと推測される。炉内にはわずかに被熱痕がある。主柱穴は深さが30cm以上あるピット１～５と推測される。
遺物：炉周辺より集中して出土。土器(図版69～73　PL41・42)　785～792は３群Ａ類１種、794・795・803・804は３群Ａ類２種、805～811・816は３群Ａ類３種、798は３群Ｂ類１種ｂ、796・797・799・802・817は３群Ｂ類２種ａ、801は３群Ｂ類２種ｂ、800は３群Ｂ類２種ｃ、793は３群Ｂ類２種ｄ、824は３群Ｂ類３種、813～815・818・819は３群Ａ類２種かＢ類１・２種と推測される胴部片、820・821は３群Ｃ類、823・828は３群Ｊ類２種ａ、827・829は３群Ｊ類３種、826・830は３群Ｊ類８種、812・822・825は３群

K類である。石器(図版132・135・138　PL53～55)　72は石錘、112は削器、156は打製石斧である。
時期：後葉Ⅰ期。

ＳＢ101（図版59　PL9）
位置：Ⅰ地区　XⅣU10・Ｖ６　**切り合い**：なし。　**形状**：隅丸方形　**規模**：5.1×5.1m
構造：上部は削平されていたが、ほぼプラン全体を把握。炉は中央部やや北寄りで検出。床面上に30cm前後の棒状礫を長方形に配置する。特に奥壁側の左端の炉縁石だけは花崗岩を用いる。炉の大きさは内寸で60cm×40cm。被熱痕は検出されていない。ピットは１～５が直径50～60cm前後、深さ30cm前後を測り、主柱穴と推測される。ピット11・12も深さが30cm程あり、入口施設に関連するピットと推測される。ピット８と11・12の間の床面上で、完形の石皿(217)が正位で出土した。
遺物：埋土中から出土。土器(図版74　PL40)　841は３群Ａ類１種、847～851は３群Ａ類２種、842は３群Ａ類４種、843は３群Ｂ類２種ａ、844は３群Ｂ類１種もしくは２種の口縁部、845・846・852・855は３群Ａ類２種かＢ類１・２種と推測される胴部片、854は３群Ｊ類２種ｂ、853・856～862は３群Ｋ類である。石器(図版130・142　PL57)　18は石鏃、217は石皿である。
時期：後葉Ⅰ期。

ＳＢ106（図版59）
位置：Ｊ１地区　ＸＨ15　**切り合い**：なし。　**形状**：楕円形？　**規模**：(5.4)×(4.3)m
構造：直径60cm前後のピットが、円形状の配列で検出されたため、住居跡と想定して調査。プランは推定による。ピット1・2・5・6・7・8は深さ30cm以上を測り、主柱穴と推測される。位置的にピット４が炉に対応する可能性があるが、被熱痕は検出されていない。
遺物：土器(図版68　PL40)　ピット３から少量出土。777は２群Ｃ類、779は３群Ｂ類２種ａ、780・781は３群Ⅰ類１種、778・782～784は３群Ｋ類である。石器(図版140　PL56)　187は磨石である。
時期：後葉Ⅰ期。

ＳＢ120（図版60　PL9）
位置：Ⅰ地区　XⅠB16　**切り合い**：NR14に切られる。　**形状**：多角形状を呈する楕円形
規模：6.4×(5.7)m
構造：北西部の一部をNR14に切られるものの、検出段階で多角形状のプランとして把握した。炉は中央部北寄りに位置し、拳大～人頭大の礫を用い、床面上に長方形状に配置する。特に奥壁側の左端の炉縁石だけは不整円形の大きめの花崗岩を用いる。炉の南側は開口するものの、明確な石の抜き取り痕は見られない。炉の大きさは内寸で60cm×30cmを測る。ピットは１～６が直径40cm前後、深さ40cm前後を測り、主柱穴と推測される。一方、ピット7・9・11・13・14についても深さ40cm前後を測り、住居跡を建て替えた可能性も推測される。ピット５と６の間は撹乱である。
遺物：埋土中より出土。土器(図版75)　876は２群Ｂ類、863～867は３群Ａ類１種、868・870は３群Ａ類２種、869は３群Ａ類３種、872は３群Ｂ類３種、873は３群Ａ類２種かＢ類１・２種と推測される胴部片、874は３群Ｃ類、875は３群Ⅰ類２種、871・877～879は３群Ｋ類である。
時期：後葉Ⅰ期。

ＳＢ148（全体図　PL8）

位置：Ｄ地区　ＩＩ16

構造：SB93(早期末葉)の埋土上面で炉だけ検出した。炉には約30cmの棒状の炉縁石が３点確認され、炉底部には大きな被熱痕が見られた。炉縁石と被熱範囲から判断して、炉は方形～長方形で内寸60cm四方以上の規模を有したと推測される。

遺物：炉の周辺部より出土。土器(図版75　PL40)　881・882・885～888が３群Ａ類２種かＢ類１・２種と推測される胴部片、891は３群Ｊ類１種、880・883・884・889・890は３群Ｋ類である。

時期：後葉Ｉ期。

ＳＢ18（図版76　PL10）

位置：Ｅ地区　ⅣＫ10　**切り合い**：SB24と接するものの、明確な切り合い関係は不明。

形状：楕円形　**規模**：4.2×(5.0)m

構造：住居跡北側約2/3が残存。貼床などは見られないが、残存部は全面硬化している。ピット１～６が壁面に沿って左右対称に並ぶので、主柱穴と推測される。炉は中央部北寄りに位置し、大きさは推定で直径１m前後。炉縁石は検出されないが、炉底中央は赤変している。

埋甕：ピット７より(901)が出土。正位逆位は不明。ピット７の底部では石の頂部が検出されているものの、人為的配置によるものかは不明。

遺物：埋土中より出土。土器(図版91　PL43)　898・904は３群Ｅ類、892は３群Ｇ類２種、893～896・907は３群Ｇ類と推測される胴部片、899～903・905・906は３群Ｊ類７種、897は３群Ｋ類である。石器(図版131・136　PL53・55)　61は石鏃、124は掻器、130は微小剥離痕を有する剥片である。このほかに、石核などが出土した。

時期：後葉II期。

ＳＢ19（図版76　PL10）

位置：Ｅ地区　ⅣＬ１・６　**切り合い**：SB23を切る。　**形状**：円形？　**規模**：径約5.2m

構造：削平により床以上をほとんど失う。炉は中央部東寄りに位置し、大きさは推定で直径１m前後。炉縁石は検出されず、炉底中央から西壁が赤変する。

埋甕：ピット６より(913)が正位で出土。底部は抜かれており、口縁部は欠損する。

遺物：埋土中より出土。土器(図版92　PL43)　918は３群Ｅ類、911・914～917は３群Ｇ類と推測される胴部片、913は３群Ｈ類、919は３群Ｉ類２種、912は３群Ｋ類である。石器(図版130・136・137　PL53)3・26は石鏃である。132は微小剥離痕を有する剥片、142は石核である。

時期：後葉II期。

ＳＢ20（図版77　PL10）

位置：Ｅ地区　ⅣＬ１・２　**切り合い**：なし。　**形状**：不明　**規模**：径約4.5m

構造：削平により床以上をほとんど失う。ピット１～５が主柱穴と推測され、特に２～４は推定壁面に沿って左右対称に並び、各ピットには張り出し部が見られる。また柱穴に囲まれる床面は硬化している。炉は中央部北西寄りに位置する。炉縁石は検出されず、炉底中央は赤変している。炉の南半部は土坑に切られている。この土坑は所見によると撹乱とされるものの、上部から花崗岩と推測される大きな石が検出されている(PL10)。本住居跡とは異なる時代の所産かもしれないが、注意が必要である。

埋甕：ピット６より底部が抜かれた(908)が正位で出土。土器は掘り方下部に施された厚さ約15cmの敷き土の上に埋設される。敷き土の下半部には焼土も含まれる。
遺物：埋土中より少量出土。土器(図版91　PL43)　908は３群H類、909・910は３群Ｉ類２種である。石器(図版136)　131は微小剥離痕有する剥片である。このほかに、打製石斧などが出土した。
時期：後葉II期。

ＳＢ21（全体図）
位置：Ｅ地区　IVG21　**切り合い**：なし。　**形状**：円形(推定)
構造：約1/4程残存。３基のピットと被熱痕を検出した。床面残存部は全面硬化し、周溝は残存部ではほぼ全周する。削平部に浅く窪む２基の被熱痕があり、炉を造り替えた可能性がある。埋甕の有無は不明。
遺物：埋土中より少量出土。土器(図版92)　926は３群Ｅ類、920～925は３群Ｇ類と推測される胴部片である。石器(図版130・132・138　PL53・55)　27は石鏃、65・74は石錘、145は打製石斧である。
時期：後葉II期。

ＳＢ23（図版77　PL10）
位置：Ｅ地区　IVK５　**切り合い**：SB19に切られる。　**形状**：不整楕円形？　**規模**：(3.7)×(3.2)m
構造：削平により床面のみ残存。床面は全面硬化する。周溝は部分的にとぎれるものの、ほぼ全周する。主柱穴はピット１～４と推測される。ピット５～９は擂鉢形に浅く窪む。炉は方形で、中央部北西寄りに位置し、大きさは内寸で約60cm。北東側と南西側の炉縁石が残存し、炉底部は全面が赤変する。
遺物：埋土中より出土。土器(図版94)　960は３群Ｇ類１種、961～966は３群Ｇ類２種、968～970は３群Ｇ類と推測される胴部片、967は３群Ｋ類である。石器は磨石などが出土した。
時期：後葉II期。

ＳＢ24（図版78　PL10）
位置：Ｅ地区　IVK９・10　**切り合い**：SB18と接するが、明確な切り合い関係は不明。
形状：不整楕円形？　**規模**：(5.4)×(５)m
構造：南西壁は削平を受け、床面は全面硬化する。周溝はほぼ全周し、北西部には別の周溝が存在する。炉は２基確認された。いずれも炉縁石は検出されない。ピットも多数検出されていることから住居跡が建て替えられた可能性も推測される。
遺物：埋土中より出土。土器(図版93・94　PL43・44)　Ｐ１の埋土上面で小形の深鉢(955)がほぼ原形のまま出土。950～952は３群Ｅ類、931・932は３群Ｆ類、933～937は３群Ｇ類２種、927・928・938・939・941～948は３群Ｇ類と推測される胴部片、954は３群Ｉ類１種、956は３群Ｊ類４種ｂ、957～959は３群Ｊ類８種、929・930・940・949・953・955は３群Ｋ類である。石器(図版133・134・136・138　PL54)　95・105は削器、125は掻器、150は打製石斧である。このほかに、石鏃、ピエス・エスキーユ、石核などが出土した。
時期：後葉II期。

ＳＢ25（図版79　PL10）
位置：Ｅ地区　IVK９　**切り合い**：なし。　**形状**：不整円形？　**規模**：径約5.5m
構造：床面のみ検出。周溝は床の残存部では全周する。本住居跡では、ピット・炉・埋甕等の施設が複数

検出されており、切り合い関係と埋土の状況から、２回以上の建て替えが考えられる。

１期：黄褐色土主体のブロック土で埋め戻されているもの。ピットは7・8・16・20・21・22が相当する。炉は３基検出されたが、炉２の上面が暗黄褐色土で埋められており、炉１を切るため、炉１・２が１期に属すると判断した。炉２は楕円形プランを呈し、大きさは内寸が約70cm。炉縁石を伴うかは不明。炉底は赤変する。炉１は赤変した底部のみ確認された。埋甕１(977)がピット23より正位で出土した、底部は抜いてあり、黄褐色土と黒褐色土のブロック土で埋め戻されている。上記の遺構配置から、住居の出入口は南西方向と推測される。

２期：埋土が黒褐色土のもの。第１期のピットなどを切る箇所もある。ピットは1～6が相当し、いずれも第１期の柱穴より規模が大きく、主柱穴と推測される。炉３は不整円形を呈し、大きさは直径1.2m前後。炉縁石は残存しないものの、抜き取り痕(設置痕)が明瞭に観察される。炉底は赤変し、炉１を切る。埋甕２(976)がピット24より逆位で出土した。埋土は第２期柱穴や炉３と同様な黒褐色土。上記の遺構配置から住居跡の出入口部は南東方向と推測される。

遺物：埋土中より出土。土器(図版95　PL44)　971は３群Ｇ類１種、973・976は３群Ｇ類２種、972・974・977～979は３群Ｇ類と推測される胴部片、975は３群Ｆ・Ｇ類と推測される装飾把手、982は３群Ｊ類５種、980は３群Ｊ類７種、981は３群Ｋ類である。石器(図版130・131・139　PL53)　1・25・33・43は石鏃、177は磨製石斧である。このほかに、石錘、ピエス・エスキーユ、打製石斧、磨石、石核などが出土した。

時期：後葉Ⅱ期。

ＳＢ26（図版80）

位置：Ｅ地区　ⅣＫ４　**切り合い**：なし。　**形状**：楕円形　**規模**：6.5×(5.9)m

構造：削平により出入り口部を失う。床面は残存部で全面硬化し、周溝もほぼ全周する。主柱穴はピット１～６と推測され、壁際に沿って左右対称に並ぶ。ピット11・12は出入り口施設の柱穴と推測される。炉は中央部北東壁寄りに位置する。炉縁石は部分的に残存し、形状は方形と推測される。規模は内寸約80cm。炉底は赤変する。

遺物：埋土中より出土。土器(図版96～99　PL44・45)　983は３群Ｄ類、1018～1025は３群Ｅ類、998・1005は３群Ｇ類１種、992・994・995・997・999・1006は３群Ｇ類２種、1000～1004・1007～1015・1017は３群Ｇ類と推測される胴部片、984・985・993・996は３群Ｆ類、986～991は３群Ｆ・Ｇ類と推測される装飾把手、1030は３群Ｈ類、1041・1042は３群Ｉ類１種、1033～1035・1037・1039は３群Ｊ類４種ａ、1036・1038・1040は３群Ｊ類４種ｂ、1032・1043・1045～1050・1052は３群Ｊ類８種、1016・1026～1029・1031・1044・1051は３群Ｋ類である。石器(図版136・138・141　PL55・57)　128は掻器、146は打製石斧、197・198が磨石である。このほかに、石鏃と磨製石斧などが出土した。

時期：後葉Ⅱ期。

ＳＢ27（図版81　PL11）

位置：Ｅ地区　ⅣＦ25・Ｋ５　**切り合い**：なし。　**形状**：惰円形？　**規模**：径約4.5m

構造：削平により、壁と埋土のほとんどを失う。床面は全面硬化し、周溝は一部残存する。主柱穴はピット１～６と推測され左右対称に並ぶ。炉は中央部北壁寄りに位置し、炉縁石は入り口側の１辺のみが残存する。形状は方形と推測され、規模は内寸が約80cm。炉底全面が赤変する。

埋甕：２基検出されている。ピット７では埋甕１(1055)が出土。底部を抜いて正位で埋設され、暗黄褐色

土で埋め戻される。ピット８では埋甕２(1056)が出土。埋甕１を埋めた後に、それに接して正位で埋設される。土器内は住居跡埋土と同じ黒褐色土が堆積する。

遺物：埋土中より出土。土器(図版100　PL46)　1056・1059は３群Ｅ類、1055・1057・1058は３群Ｇ類２種である。石器(図版130・131・133　PL53・54)　２・45・54は石鏃で、94は石匙である。このほかに、打製石斧などが出土した。

時期：後葉II期。

ＳＢ28(図版81　PL10)

位置：Ｅ１地区　IVＦ25・Ｋ５　**切り合い**：なし。　**形状**：楕円形　**規模**：径約4.5m

構造：削平により、壁と埋土を失う。床面は残存部で全面硬化する。周溝は、北東～北西～南西部に残存する。埋甕に接する部分の周溝は外側に張り出しており、出入口に関連する構造と思われる。主柱穴はピット1～6と推測され、壁際に沿って左右対称に並ぶ。炉は中央北東寄りに位置し、炉縁石は検出されない。形状は方形で、規模は内寸約90cm。炉底中央が赤変する。

埋甕：ピット７より正位で出土(1060)。底部は抜かれている。埋甕内は埋土と同じ黒褐色土が堆積する。

遺物：埋土中より出土。土器(図版100　PL46)　1060・1063は３群Ｇ類１種、1061・1062は３群Ｇ類２種、1066は３群Ｇ類と推測される胴部片、1064・1065は３群Ｋ類である。石器(図版132・137　PL53)　77は石錐、140は石核である。

時期：後葉II期。

ＳＢ29（図版82　PL11）

位置：Ｅ地区　IVＦ25・Ｇ20　**切り合い**：なし。　**形状**：楕円形　**規模**：5.0×4.6m

構造：プラン全体を検出。床面は全面が硬化する。周溝は数カ所でとぎれ、北東壁では溝の内側半分程に貼床的に土を充塡している。ピットは多数検出され、対応関係は明確にできないが、建て替えが行われたと推測される。炉は検出されない。中央部の大きい掘り込みは、埋め戻されており、上面の硬化も認められない。

埋甕：２基検出された。ピット７からは、埋甕１(1089)が胴部だけ正位で出土。黄褐色土主体のブロック土で埋め戻されており、ピット５に切られる。ピット８からは埋甕２(1067)が正位で出土。底部は抜かれている。埋土は黒褐色土である。

遺物：埋土中より出土。土器(図版101・102　PL46・47)　1089は３群Ｅ類、1076は３群Ｆ類、1078は３群Ｇ類１種、1067～1070・1073～1075・1077・1079～1084は３群Ｇ類２種である。1085～1088は３群Ｇ類と推測される胴部片、1071・1072は３群Ｆ・Ｇ類と推測される装飾把手、1090・1092は３群Ｈ類、1093は３群Ｊ類７種、1091は３群Ｋ類である。石器(図版130～133・136　PL53・55)　5・6・15・23・39・41は石鏃、68・79は石錐、97・98は削器、139は異形石器である。このほかに、打製石斧、石核などが出土した。

時期：後葉II期。

ＳＢ30（図版82）

位置：Ｅ１地区　IVＧ16・17・21・22　**切り合い**：SB31を切る。　**形状**：不明瞭　**規模**：径約4.5m

構造：削平で床面以上を失う。ピット7・10・11・13・15～19と炉１の位置関係から住居跡とした。ピット18がSB31の周溝を切る。炉１では赤変部を一部検出。規模・形状は不明。

埋甕：ピット19より正位で出土(1053)。底は抜かれている。埋土は黒褐色土。上面は削平を受けている。
遺物：土器(図版99　PL45)　埋甕のみ出土。1053は3群G類と推測される胴部片である。
時期：後葉II期。

ＳＢ31（図版82　PL12）
位置：Ｅ地区　IVG16・17・21・22　**切り合い**：SB30に切られる。　**形状**：不明瞭　**規模**：径約5ｍ
構造：削平で床面以上を失う。ピット1～6・8・9・12と炉2の位置関係から住居跡とした。ピット9付近で周溝が一部残存し、SB30のピット18に切られている。炉2では赤変部を一部検出。規模・形状は不明。
埋甕：ピット9より底部が正位で出土(1054)。埋土は黒褐色土。上面は削平を受けている。
遺物：土器(図版99　PL45)　埋甕のみ出土。1054は3群H類である。
時期：後葉II期。

ＳＢ33（図版83　PL12）
位置：Ｅ地区　IVＫ８・13　**切り合い**：SX4に切られる。　**形状**：隅丸方形　**規模**：4.5×4.5m
構造：プラン全体を検出。床面は南西隅を除いて硬化する。周溝は北東・北西隅および南壁中央部の3カ所でとぎれる。ピット1～4が主柱穴、ピット5は出入口施設に関係すると推測される。炉は中央部北壁寄りに検出。炉縁石は検出されず、形状は不明。炉底は赤変する。中央部の埋土中には角礫が多く含まれていた。
遺物：埋土中より出土。土器(図版103・104　PL47)　1123～1126は3群E類、1094は3群F類、1105は3群G類1種、1095～1102・1104は3群G類2種、1107～1122は3群G類と推測される胴部片、1103・1106は3群F・G類と推測される装飾把手、1127～1132は3群I類2種である。石器(図版130～132・136・138・139・142・143　PL53・55～58)　4・49・56は石鏃、76は石錘、119は掻器、135はピエス・エスキーユ、147・152は打製石斧、170・173は磨製石斧、208は敲石、221は石剣である。このほかに、石核などが出土した。
時期：後葉II期。

ＳＢ34（図版84　PL11）
位置：Ｅ１地区　IIIO20　**切り合い**：なし。　**形状**：円形　**規模**：径約5.5m
構造：プラン全体を検出。埋土3層には炭化物・焼土が多く含まれ、床面の直上にはほぼ純粋な炭化物層(4層)が堆積する。所見によると住居廃絶時に、上屋材等を焼却した可能性が指摘されている。また炭化物の量が多い割には大半が小片であり、材の方向を推定するまでには至っていない。床面は全面が硬化する。周溝は東～北～西壁下を廻り、南部では検出されていない。炉は中央北西寄りで検出。形状は方形で、規模は内寸で100×90cm。出入り口に面した炉縁石の両側に円礫を配置する。炉底は赤変しており、出入り口側の焼け具合が強い。主柱穴と埋甕は、埋土の埋め戻しの状態と切り合い関係から2時期に分離することが可能である。1期の主柱穴はピット7～12で、黄褐色土主体のブロック土で埋め戻され、ピット13の埋甕1(1154)と組み合う。第2期はピット1～6で、いずれも第1期主柱穴を切るのが特徴である。埋土は黒褐色土であり、ピット14の埋甕2(1153)と組み合う。このほか、ナンバーを付けないピットの埋土は第2期主柱穴と同じ黒褐色土である。特にピット15は第2期の出入口施設に関係すると推測され、ピット15と炉を結ぶ軸線上の中間で、石皿(218)が検出された。またピット15は14の掘り方を切っており、埋甕は住居

建て替えに伴って埋設された可能性がある。

埋甕：２基検出。ピット13では埋甕１(1154)が正位で出土。底部は抜いてあり、口縁部は欠損する。埋甕の埋土は黄黒灰色土で埋め戻した後に、さらに上面を黄褐色土で貼り床にする。ピット14では埋甕２(1153)が正位で出土。底部は抜いてあり、口縁部は欠損する。埋土は炭化物を含む黒褐色土。

遺物：埋土中より出土。土器(図版105・106　PL48)　1145・1153～1160・1163・1164は３群Ｅ類、1140・1141は３群Ｆ類、1144・1146・1165は３群Ｇ類１種、1142は３群Ｇ類２種、1143・1148～1152は３群Ｇ類と推測される胴部片、1161は３群Ｉ類２種、1162は３群Ｊ類４種ａ、1147は３群Ｋ類である。石器(図版130・131・134・136・139～142　PL53～57)　17・22・24・28・29・32・34・55は石鏃、101・107は削器、121は掻器、179は磨製石斧、193・201は磨石、218は石皿である。このほかに、打製石斧と敲石などが出土した。

時期：後葉II期。

ＳＢ37（図版83　PL12）

位置：Ｅ１地区　IVＦ20　**切り合い**：なし。　**形状**：隅丸方形　**規模**：径約4.1×4.2m

構造：プラン全体を検出。床は全体的に硬い。周溝は柱穴部でとぎれるものの、ほぼ全周する。埋甕に接する部分の周溝だけ外側にピット状に張り出す。主柱穴はピット１～４と推測される。炉は中央北西壁寄りに位置し、炉縁石は検出されず形状不明。規模は内寸で約100cm前後か。炉底の奥壁寄りの一段深くなった部分が赤変する。

埋甕：ピット５より正位で出土(1133)。底は抜いてある。埋甕の下に石が存在するものの、人為的なものかは不明。

遺物：埋土中より出土。土器(図版104　PL47)　1134・1136は３群Ｈ類、1135・1138・1139は３群Ｉ類２種、1137は３群Ｊ類２種ｂ、1133は３群Ｊ類７種である。石器(図版139　PL56)　181は磨製石斧である。

時期：後葉II期。

ＳＢ39（図版85　PL12）

位置：Ｅ１地区　IVＫ11　**切り合い**：なし。　**形状**：円形　**規模**：径約3.8m

構造：プラン全体を検出。床面は南部の一部を除き、全面が硬い。周溝はない。主柱穴はピット１～４で、ピット５は出入口施設と推測される。炉は中央北壁寄りに位置する。炉縁石は検出されない。北壁と南壁の上部が赤変する。埋甕は出土しない。

遺物：埋土中より出土。土器(図版106)　1169は３群Ｅ類、1166・1167は３群Ｇ類２種、1168は３群Ｇ類と推測される胴部片である。石器は石鏃と掻器などが出土した。

時期：後葉II期。

ＳＢ40（図版85　PL12）

位置：Ｅ地区　IIIＯ10　**切り合い**：SB41に切られる。　**形状**：不整円形？　**規模**：径約3.7m

構造：プラン全体を検出。床面は全面が硬い。周溝は東側を除いて全周する。柱穴はピット１～４でピット５は出入口施設と推測される。炉は中央北西壁よりに位置する。方形で北東辺の炉縁石は抜き取られている。規模は内寸で１辺が約70cm。炉底は赤変する。埋甕は検出されていない。

遺物：埋土中より出土。土器(図版106)　1170は３群Ｅ類、1172は３群Ｇ類と推測される胴部片、1171は３群Ｋ類である。石器(図版131　PL53)　38は石鏃である。このほかに打製石斧などが出土した。

時期：後葉II期。

ＳＢ43（図版86　PL12）

位置：Ｅ地区　IIIＯ19　**切り合い**：なし。　**形状**：楕円形　**規模**：5.5×4.8m

構造：プラン全体を検出。床面は全面が硬化する。周溝はほぼ全周する。主柱穴はピット１～６の６基と推測され、左右対称に並ぶ。ピット７は上部に黄褐色土の貼り床が施される。炉は中央北西壁寄りに位置する。炉縁石は検出されず、炉底のみ赤変する。

遺物：埋土中より出土。土器(図版107　PL48)　1186は３群Ｅ類、1173・1174は３群Ｆ類、1175・1176は３群Ｇ類２種、1180～1185は３群Ｇ類と推測される胴部片、1178・1179は３群Ｆ・Ｇ類と推測される装飾把手、1187は３群Ｉ類１種、1188は３群Ｉ類２種、1177・1189・1190は３群Ｋ類である。石器(図版130・131　PL53)　16・50は石鏃である。このほかに打製石斧などが出土した。

時期：後葉II期。

ＳＢ54（図版87　PL13）

位置：Ａ２地区　IVN11　**切り合い**：なし。　**形状**：円形？　**規模**：径約4.6m

構造：床面のみ検出。床面は軟弱。主柱穴についてはピット１～５の可能性があるが、周辺では多くの土坑が検出されているため、明確にできない。炉は中央付近の方形土坑と推測されるが、焼土は確認されていない。

埋甕：ピット６より(1191)が正位で出土。底は抜けている。

遺物：土器(図版108　PL49)　1192～1194は３群Ｉ類２種、1191は３群Ｊ類７種、1195・1196は３群Ｋ類。石器(図版132　PL54)　84は石匙である。

時期：後葉II期。

ＳＢ55（図版87　PL13）

位置：Ａ２地区　IVN７・12　**切り合い**：なし。　**形状**：円形　**規模**：径約５m

構造：床面のみ検出。硬化した床面も一部残存する。主柱穴はピット１～４の４本と推測され、左右対称に並ぶ。本住居跡では壁に沿って直径30cm前後、深さ20cm前後のピットが９基検出された(５～13)。壁柱穴と推測されるが、該期の他の住居跡にはみられない構造である。炉は中央北東壁寄りの方形土坑と推測されるが、焼土は確認されていない。

埋甕：ピット10より(1197)が正位で出土。上部は削平を受けている。

遺物：土器(図版108　PL49)　1197は３群Ｈ類、1198～1201は３群Ｊ類７種である。石器は石鏃などが出土した。

時期：後葉II期。

ＳＢ115（図版88　PL13）

位置：Ｊ２地区　XＯ６　**切り合い**：なし。　**形状**：円形　**規模**：径約5.1m

構造：自然流路の下で、プラン全体を検出。床面の硬化は認められない。周溝は全周する。主柱穴はピット１～５と推測され、多角形状に配置される。炉は中央南西壁寄りに設置され、不整形の窪みと被熱痕を検出した。ピット４・５の間の床面に直径約60cmの平石が出土した。石の上面は平坦ではなく、下面でも土坑等は確認されていない。自然石の流入とも考えにくく、性格は不明。

遺物：埋土中より出土。土器(図版109)　1223～1225は３群Ｅ類、1212は３群Ｆ類、1213・1215～1222は３群Ｇ類と推測される胴部片、1210・1211は３群Ｆ・Ｇ類と推測される装飾把手、1228・1231は３群Ｉ類１種、1227・1229・1230・1232は３群Ｉ類２種、1214・1226・1233は３群Ｋ類である。石器(図版131・134)　36は石鏃、111は削器である。このほかに、打製石斧、磨石などが出土した。
時期：出土遺物についてはII期の特徴を有しているものの、破片がほとんどである。また本住居跡は住居跡内の炉が小さく、柱穴が５本で、配置が整然としており、Ｉ期以前にみられる要素を含んでいる。帰属についてはII期の中でも古い時期に属する可能性がある。

ＳＢ125（図版88　PL13）
位置：Ｉ地区　XIＢ６　**切り合い**：なし。　**形状**：隅丸方形　**規模**：4.7×4.6m
構造：プラン全体を検出。周溝は北東壁側のみ確認。主柱穴はピット1・2・5・6の４本と推測されるが、他のピットの深さも20cm以上を有しており、補助的な柱穴であった可能性がある。炉は中央北西壁寄りに位置し、円形の窪みと被熱痕を検出した。この他、50cm前後の平石がピット２に近接して３点、ピット６に近接して１点がそれぞれ床面から出土した。
遺物：埋土中より出土。土器(図版110・111　PL49)　1234～1236・1246は３群Ａ類１種、1238・1239は３群Ａ類２種、1237は３群Ａ類４種、1240は３群Ｂ類１種ａ、1241～1243は３群Ｂ類２種ｂ、1244・1245・1247は３群Ａ類２種かＢ類１・２種と推測される胴部片、1248・1249は３群Ｆ類、1250・1253～1255・1260は３群Ｇ類１種、1256～1259・1261・1262は３群Ｇ類２種、1263～1270は３群Ｇ類と推測される胴部片、1252は３群Ｆ・Ｇ類と推測される装飾把手、1272は３群Ｊ類４種ａ、1251・1271は３群Ｋ類である。石器(図版131　PL53)　64は石鏃である。このほかに、打製石斧、磨製石斧、敲石、石皿などが出土した。
時期：後葉Ｉ期とII期の土器を含み、時期設定に微妙な要素を残すものの、出土状況から伴出土器を分離する明確な根拠にも乏しい状況にある。両時期の土器がみられる中、時期的に新しい要素である３群Ｇ類等が存在する点からII期の中でも古い時期に属すると推測する。

ＳＢ139（図版86　PL13）
位置：Ｃ３地区　ＸＳ25　**切り合い**：なし。　**形状**：隅丸方形　**規模**：径約3.2×3.3m
構造：西壁の一部を除きプラン全体を検出。床面の硬化は認められない。主柱穴はピット１～４の４本で、左右対称に並ぶ。ピット５は出入り口施設に関するものと推測される。炉は中央東壁寄りに設置される。炉縁石は長さ20cm前後の棒状の礫を用いて、長方形に配置する。特に入り口側左端に相当する北西隅の炉縁石にだけ花崗岩を用いている。炉の規模は内寸で50×30cmを測る。炉内の埋土(暗赤褐色土)を除去したところ、多数の土器片が表面を上にして、全体に敷き詰められているのを確認した。接合の結果、３個体(1273・1274・1277)を復元した。いずれも1/3以上残存する。炉内では復元個体以外の破片は非常に少い(1278)。一方、炉外では３点を復元したが(1275・1276・1279)、遺物量は炉内が圧倒的に多い。
遺物：土器(図版112　PL50)　1274・1277は３群Ｉ類１種、1276は３群Ｉ類２種、1273・1275・1278・1279は３群Ｋ類。石器(図版139　PL56)　178は磨製石斧である。このほかに、削器などが出土した。
時期：1273には口縁部の弧状文の上端(波頂部)に渦巻文を有しており、同様の文様は後葉II期の住居跡から出土している点、また典型的なＥ～Ｇ類等はみられない点から、後葉II期の中でも古い時期に属すると推測される。

ＳＢ105（図版89）

位置：Ｊ１地区　ＸＨ15　**切り合い**：SB102(平安時代)に切られる。　**形状**：楕円形　**規模**：7.5×5.7m

構造：削平がはげしく、床面のみ検出。プランは明確である。埋土中央部に拳～人頭大の礫が集中して出土し、集礫直下に炉を検出。床面上に約20cmの大きさの角礫を長方形状に設置。北側で石が一部抜けているが、人為的かどうかは不明。内寸は約40×20cm。ピットは住居跡壁面に沿って９基検出された。いずれも約40cmの深さがあり、柱穴の可能性がある。

遺物：埋土中より出土。土器(図版113)　1281～1284は２群Ｃ類、1285は３群Ａ類１種、1286～1288は３群Ａ類２種、1280は３群Ｆ類、1289～1293は３群Ｇ類と推測される胴部片、1294は３群Ｉ類１種、1295は３群Ｉ類２種、1296は３群Ｊ類４種ｂである。石器(図版131)　42は石鏃である。このほかに削器、掻器、ピエス・エスキーユ、打製石斧などが出土した。

時期：後葉中心の遺物が出土するが、小破片が多く、明確な時期は不明。

ＳＢ126（全体図）

位置：Ｉ地区　XIＡ５　**切り合い**：なし。　**形状**：不整円形？　**規模**：4.3×3.9m

構造：住居跡の東側プランを一部検出。西側プランは削平のため不明。埋土中には礫が多く、炉・ピット等を明確に検出することができなかった。

遺物：埋土中より出土。土器(図版113)　1297～1299は１群Ａ類２種、1301～1303・1306・1314は２群Ｃ類、1300・1304・1305・1307は２群Ｆ類、1308・1309は３群Ａ類２種、1310は３群Ｂ類２種ｂ、1312は３群Ｂ類３種、1311・1313は３群Ａ類２種かＢ類１・２種と推測される胴部片である。石器(図版133 PL54)　89は石匙である。

時期：中期初頭～後葉の破片が出土するものの、小破片が多いため、明確な時期は不明。

(3)　土坑・性格不明遺構

Ｅ地区北東部のSK群(全体図　図版89・90　PL13)

土器(図版108・114・115　PL49～51)　石器(図版130・132・136・137・142　PL53・55)

Ｅ地区では多くのSKが検出されるものの、縄文文時代～近世の遺構を同一検出面で調査しており、帰属時期を明確にすることが難しい。この中で形状・出土遺物等から縄文時代と推測されるSK群がＥ地区の北東部で確認された。数は200基以上あり、形状は円形～不整円形、規模は直径50cm～70cm前後である。ここでは北東部の土坑群で、埋土中の遺物により中期後葉と推測されるものについて紹介する。

ⅣＧ11グリッド周辺では直径約5.5mの範囲で７基のピットが円形状に並んで検出され、SB36(全体図)として調査した。遺物は周辺部より石核(141)が出土している。

ⅣＧ12グリッド周辺では約５m四方の範囲内より、近接してSK754・755・756・762・787・789等が検出された。特にSK762では深鉢片(1333-３群Ｉ類１種)が正位で出土し、SK789では深鉢底部片(1328・1329-３群Ｋ類)が出土している。またSK756に接して焼土跡も発見された。所見では焼土跡を炉、周辺の土坑群を柱穴、SK762の深鉢を埋甕とする竪穴住居跡が存在した可能性が指摘されている。

ⅣＧ16グリッド周辺では約４m四方の範囲内より近接してSK793～798と土器１個体を検出した。特にSK793では埋土中より深鉢３点(1325・1326-３群Ｊ類７種、1327-３群Ｋ類)がつぶれた状態で出土した。所見では土坑群を柱穴、土器を埋甕とする住居跡が存在した可能性が指摘されている。

ⅣＧ21・22・23グリッド周辺では、不明瞭ながら土坑群が円形状に並んで検出されており、その配列の中から焼土跡や、土器片が出土した。これら土坑群について、整理段階で土坑群・焼土跡・土器の位置関

係から4軒(SB87・88・89・90)の住居跡を想定した。出土遺物は、SB87では石錘(70)、SB88では土器(1205・1209-3群H類、1206-3群G類2種、1207・1208-3群K類)と掻器(122・123)、ピエス・エスキーユ(133)が出土、特にピット1では土器(1205-3群H類)が正位で出土しており、埋甕と推測される。SB89では土器(1202-3群G類と推測される胴部片、1203-3群Ⅰ類2種、1204-3群E類)と石皿(213)が出土。SB90ではピット2から土器片、遺構周辺から石鏃(60)、石錘(80)が出土している。このほか、E地区で遺物の出土した土坑としては、ⅣG13グリッドのSK776(1319・1320-3群K類)、ⅣG17グリッドのSK827(1330-3群G類2種、1332-3群G類と推測される胴部片、1331-3群Ⅰ類2種)、ⅣK9グリッドのSK984(1334-3群G類と推測される胴部片、1335-3群G類2種)などがある。

ＳＫ1364（旧SB112　全体図）

位置：Ⅰ地区　XⅣU7

規模：不整楕円形で、長軸80cm、短軸40cmを測る。検出当初は住居跡を想定したものの、周囲で関連遺構が見つからず、SKとした。

遺物：土器(図版115)埋土中より深鉢(1336)が出土。1336は3群Ⅰ類1種である。

ＳＨ３（図版62　PL9）

位置：Ｃ１地区　ⅦN17

規模：拳大～人頭大の礫が、長軸80cm、短軸50cm程の範囲で、約20cmの厚さをもち集中的に出土した。礫の中にある隙間には土器片が散見されたため、礫を除去したところ、2個体の深鉢がつぶれた状態で発見された。また調査段階でSH3の周囲を精査するものの、明確なプランや落ち込み等は検出されない。

遺物：土器(図版115　PL51)　1337は3群A類2種、1338は3群B類1種ａである。いずれも接合により略完形となるものの、1338は底部が欠損する。

(4)　遺構外出土遺物他

土器(図版114～116　PL50・51)　1315・1354はＡ２地区より出土。1356～1358はＣ地区、1359～1361はＤ地区、1355はＥ地区、1353はＦ３地区(PL13・51)、1362～1366はＩ地区、1367はＪ２地区より出土。

1315はＡ２地区のSK145として調査を行った落ち込みより出土したが、SKとは判断されず、遺構外扱いとした。このほかＡ２地区ではSK635より1321～1324が出土した(第2節2不整円形配列土坑を参照)。またＦ４地区ではSK35より1316～1318が出土、同土坑は後・晩期の遺構集中区に位置しており、遺構に伴わない可能性がある。

SX9はＪ１地区に位置し、中期の遺物を出土するものの(1339～1352　図版115)、流れ込み等の可能性もあり、遺構に伴うものかは不明である。(第3節3　時期不明を参照)。

1365は2群C類、1366は2群F類、1354・1356・1363は3群A類1種、1315・1359は3群A類2種、1357は3群A類4種、1360は3群B類3種、1348・1349・1362は3群E類、1353は3群G類1種、1344は3群G類2種、1340・1345～1347は3群G類と推測される胴部片、1367は3群H類、1355は3群Ⅰ類1種、1343は3群J類2種ｂ、1350・1351・1364は3群J類4種ａ、1361は3群J類4種ｂ、1316～1318・1339・1341・1342・1352・1358は3群K類である。

石器(図版130・131・136・138・140・141　PL53・55)　SX9より石鏃(31・44・51)、微小剥離痕を有する剥片(129)、ピエス・エスキーユ(137)、打製石斧(148・154)、磨石(190・200)が出土しているが、遺構に伴わない可能性がある。

4　土器

(1)　概略

本遺跡群より出土した中期の土器について、文様構成・器形等から主要な特徴を抽出し、既存の土器型式を参考にしながら分類する。このため、小破片で明確な特徴を抽出できないもの、異なる分類の特徴など複数の要素が混じり、分類が曖昧なものも少なからず存在する。

(2)　分類

第1群　中期初頭～前葉の土器群

A類

関東の五領ヶ台式およびそれに並行する中期初頭の土器群を一括する。

1種

縄文および撚糸文を地文とするもの。

(230～235・263・287～297・324～326・335・336・363・383～388・422～425・442～446・470・473～477・496・501・503・505・517・519～523・536・538・639・640)

2種

沈線により縦位・斜位・横位・格子目などを施文するもの(401・447等)、交互刺突文を有するもの(481等)、印刻を有するもの(328・329等)、連続爪形文を伴う隆帯をもつもの(307等)。

(236～239・242・298～307・310・311・328～331・371・389～391・393～395・397～403・421・427～435・439～441・447・471・478・481～484・497～500・506・507・509～512・524～526・528～532・641・643・645・646・1297～1299)

B類

平出III類Aおよび系統上その祖形をなすと考えられるものを一括する。口縁部は外傾しながら開き、端部が「く」の字形に折れてほぼ直立する。胴部は上半部に最大径をもつ。文様は半裁竹管およびヘラ状工具による平行沈線文が主体となる。

1種

縄文を地文とするもの。

(248・250・251・253・255・260・264・313～318・320～322・408・454・455・458・461・462・485・487・534・652)

2種

縄文を地文としないもの。

(244～247・249・252・254・256～259・261・262・265・266・319・323・406・407・409～418・420・456・457・459・460・463・486・513～516・653・654・688)

246は口縁部が無文であり、266は器面全体に沈線で斜格子を描き、隆帯によるクランク文を施している。246・266共に平出III類Aに見られる文様とは異なるが、関連性があるものとして含める。319はミニチュア土器で、口縁部の一部を残して完存する。胴部が張る器形であり、文様にも半裁竹管による押し引きが見られるなど、古い要素が見られるものの、口縁部や胴部の文様構成や胎土が黄褐色で長石を多く含む点などの特徴から本類に関連性があるものとして本種に含める。

C類

角押文を多用し、区画文や交互刺突文、隆帯によるクランク文や楕円区画を施すもの。狢沢式土器およびその直前段階となる可能性をもつものも含める。

(267～269・273～276・332・333・419・436・450・451・453・492・495・502・563・608～611・647～650)

273・274・276は粘土紐輪積み痕が看取される。332は口縁部に意匠の異なる4つの突起が認められる。口縁部には横位の交互刺突文や角押文、胴部にはクランク文が見られる。436は横位の楕円区画の中に角押文を充塡している。610は渦巻文の橋状把手を有し、角押文も刺突するような押し引きを施す。495は人面装飾付土器である。口径推定35.5cm、底径推定22.5cm、器高推定22cm。器形全体の約1/3程度が残存する。口縁部～胴部片は比較的多く接合するが、底部との接合部位は確認されていない。当該期の類似例を参考にして、胴部の短い器形と推測した。口縁端部に交互刺突を施し、端部直下には人面が付けられており、吉本洋子・渡辺誠両氏の分類によればⅡA類となる(吉本・渡辺1999)。人面は具象的な顔4つと抽象的な顔の3つが確認され、接合関係から交互に四ヶ所ずつ配置されていたと推測した。人面の直下には細い隆帯で楕円区画を作り、両端に具象的人面、中間に抽象的人面を配置する。抽象的人面の直下には左右対称に垂下する渦巻文が見られる。土器の色調は黄褐色を呈し、胎土には白色の粒子を多く含む。内外面にスス痕や煮焦げ痕などは認められない。

D類

斜行沈線文を有するもの。類例は東信地方に多く見られる(寺内1996)。

(270・271・448・527・559・623)

271は隆線区画内に交互の斜行沈線文を施す。559は沈線文が太く、隆線区画内には斜位の単純斜行沈線文を施し、頚部に文様区画が存在するなど、比較的新しい要素を有している。

E類

搬入品と推測されるもの、および東海・北陸・西日本など周辺諸地域の影響を受けたと推測されるもの。

1種　ソーメン状の細い粘土紐を器面に貼り付けて装飾を施すもの。朝日下層式に類似例がある。

(243・381・392・479・480・556)

243は、粘土紐を用いずに「C」字状の押し引きを施しているが、479と同様の部位であり、関連性があるものとして含める。

2種

縄文を地文とし、「I」字状の押引きや刻み目、貝殻背圧痕文を施すもの。船本式に類似例がある。

(282・283・285・380・542～544)

282・542は口縁内面に肥厚部を有し、縄文を施文する。282・380・542・544は貝殻背圧痕文が施される。

3種

幅の広い「C」字状爪形文を連続的に施したもの。鷹島式・船本式に類似例がある。

(366・469・494・545～548)

4種

連続爪形文を多用し、文様構成や胎土・焼成等から東海地方における中期初頭～前葉の諸型式に類似するもの。東海地方において幾つかの分類・編年案が提示されているが(静岡県考古学会シンポジウム実行委員会1998　以下、静岡シンポ1998)、本遺跡群では五領ヶ台式・狢沢式と供伴する例が多いため、関東地方における供伴関係を参考にして2細分とする(中山1998)。

a

連続爪形文を主体とするもの。北裏CⅠ式に類似すると推測される。

(284・308・343・346～353・467・504・540・541)

b

連続爪形文以外に、三角陰刻や弧線を多用するもの。縄文を地文とするものも多い。

(280・281・309・342・344・345・354・355・359～362・364・365・468・493・535・537・539)

4種b類としたものは、北裏CII式から前畑式に類似する特徴をもつ。468は口縁部内面に玉抱き三叉文を有する。360・361・535は共に口縁部の下に大きな連弧状の文様帯を有する。535は三角印刻や橋状把手を有し、色調は暗褐色、胎土も非常に硬質である。362は、口縁部が波状を呈し、下弦の連弧文を付すかのような装飾を施す。類例は知多半島の山田平遺跡A地点で出土しており、口縁部には連続爪形文が施されている(静岡シンポ1998)。本遺跡の362は地文が縄文であるが、施文具の差異を除けば、両者の器形と文様区画構成は類似点がある。281についても連弧文状の文様構成が見られ、山田平遺跡A地点に類似資料がみられる。364・365・539には対向三叉文が見られ、北裏CII式との類似性が推測される。280は硬質で焼成良好、色調は灰褐色を呈する。波状口縁端部に連続爪形文を施し、口縁部は竹管状施文具によると推測される半隆帯で連弧文状を呈する文様区画を作り、内部には三角印刻と縄文が施される。胴部にも縦位の文様区画を作り、矢羽状の半隆帯を施している。類例は静岡県上山地遺跡包含層で出土しており、縄文を地文とする(静岡シンポ1998)。本遺跡の280とは、器形と文様区画構成に類似点が認められる。

5種

印刻蓮華文や幅広の半隆起線文を有するもの。北陸地方に主な分布をもつ新崎式に類例がある。

(367～369・472・557・558)

F類

第1群の中で分類が不明瞭のもの。

(240・241・272・277～279・286・312・327・334・337・356～358・370・372・374・382・396・404・405・426・437・438・449・452・464～466・488・508・518・533・549～555・562・644)

278・279は有孔鍔付土器。286・372・549～555は地文に撚糸文を施す。372も胎土が褐灰色で搬入品の可能性がある。374・382は縄文を地文とする。518は撚りのきつい縄文を横位施文し、胎土は堅緻である。類似例と推測されるものは岐阜県磯谷口遺跡で出土しており、縄文中期前葉に属するとされる(三島他2001)。549・550は同一個体で、胎土が褐灰色を呈し、搬入品の可能性がある。

第2群　中期中葉の土器群

A類

三角押文を多用するもの。主として新道式に相当する一群。

(564～582・605～607・612～616・618・619・657・689)

B類

三角形、楕円、長方形などの区画文をもつもの、隆帯の脇に半割竹管状工具による幅広の連続爪形文を施すもの、単隆帯の周囲に爪形文を施したムカデ状文を有するものを一括する。主として藤内式に相当する一群。

(489～491・590～591・595～597・603・604・620～622・651・655・660・664・669・672・674・675・876)

C類

主として井戸尻式に相当するものを一括する。櫛形文・連鎖状文、弧線文、ミミズク状把手、隆帯上に刻みを施す等の特徴を有するものを含むが、本類は破片資料が多く、住居跡内で中期後葉の土器と共に出土する例もみられ、分類上時期比定に曖昧な部分を含む可能性がある。

(592・593・629・630・633・634・656・659・665～668・670・671・678～680・683・685・690・696～699・702・709～713・716・717・719・721・722・769・777・1281～1284・1301～1303・1306・1314・1365)

D類

小型環状突起と曲隆線を有するもの。類例は焼町式に見られる。

(560・561)

E類

搬入品と推測されるもの、および東海・北陸・西日本など周辺諸地域の影響を受けたと推測されるもの。

(586～588・658)

658は刻目隆帯で連弧文や円形文を施しており、船本・里木式土器様式の第3様式に類似例がある(泉1988)。587・588は隆帯による連弧文が施され、連弧文の両脇には587に爪形の刺突列、588に円形の刺突列が見られる。

F類

第2群の中で分類が不明瞭のもの。大半のものが住居跡内で中葉の土器と共に出土しているが、破片資料だけで見た場合、分類が困難なものが多い。特に櫛形文が施されるものなど、後葉に属する可能性のある資料も含まれる。

(583～585・594・598～602・617・624～628・631・632・635～638・642・661～663・673・676・677・681・682・684・686・687・691～695・701・703・704・714・718・720・723・729・730・765・766・768・1300・1304・1305・1307・1366)

第3群　中期後葉の土器群

A類

キャリパー形の口縁部を有し、胴部に張りのあるもの。

1種

波状口縁部に渦巻文や弧状の文様区画を有し、胴部に櫛形文を有するもの。戸田哲也による中野山越A2類(戸田1995)、神村透による波状口縁櫛形文土器(神村1996)とされる一群である。

(731・770～773・785～792・841・863～867・1234～1236・1246・1285・1354・1356・1363)

2種

口縁部に褶曲文等を有するもの。

(741・744・794・795・803・804・847～851・868・870・1238・1239・1286～1288・1308・1309・1315・1321・1337・1359)

794・1315・1337は胴部に櫛形文を有し、頸部に無文部が存在する。特に1315は口縁部文様帯を2段に分割し、上半に褶曲文、下半に隆帯による縦位と斜位の施文を行っている。744・795・847はいずれも胴部文様帯に下弦弧と横位の楕円区画を組み合わせた文様を配置する。741は胴部に「U」字と逆「U」字を組み合わせた意匠が見られる。

3種

口縁部に縦位・横位・斜位に細い隆帯を有するもの。長野県の中南信地方～岐阜県の美濃地方にかけて類例が見られる一群を含む。

(726・728・742・743・774・775・805～811・816・836・869)

742・743は胴部に櫛形文を有し、口縁部文様帯に4単位の逆三角形区画を有す。

4種

1～3種以外のもの。

(700・715・740・842・1237・1357)

740は口縁部が直線的で端部が内傾するなどB類の特徴を有するもの、胴部にはA類2種の741と類似する「U」字と逆「U」字を組み合わせた意匠が見られるなど折衷的な特徴を有する。類似文様はK類の1273にも見られる。

B類

口縁部が直線的で、端部が内傾するもの。胴部は直線的なものと頚部が膨らむものがある。口縁部文様帯は無文または縦位隆帯等を1～4単位貼り付ける。

1種

口縁部から底部にかけて直線的なコップ形の器形で、隆線や沈線により縦位の施文を行うもの。

a

胴部文様帯に1～2単位の縦位施文を行うもの。

(705・706・1240・1338)

b

胴部文様帯に連弧状もしくは「J」字状の施文を行うもの。

(732・798)

2種

胴部が直線的、もしくは頚部が膨らみ、隆帯や隆線、沈線で「十」字状文や「J」字状文、縦位・横位・格子目等の意匠を施文するもの。

a

膨らんだ頚部に、隆帯で斜格子・縦位・横位などの文様を施すもの。

(734・735・779・796・797・799・802・817・843)

b

頚部から胴部にかけて数段の張りをもち、頚部に隆帯による楕円区画を施すもの。胴部が直線的ではないものの、口縁部の4単位隆帯や胴部に「十」字文等の施文意匠等が見られる点から、本種に含める。

(739・801・1241～1243・1310)

c

胴部に横位の沈線で施文するもの。

(736・800)

d

口径が30cm以上と大形で、胴部に沈線で縦位・横位に施文を行うもの。

(733・793)

B類1種もしくは2種の口縁部。

(737・738・844)

A類2種かB類1・2種と推測される胴部片。

(813～815・818・819・845・846・852・855・873・881・882・885～888・1244・1245・1247・1311・1313)

3種

胴部が直線的で、条線文を地文とするもの。

(824・872・1312・1360)

C類

底部から胴部にかけて逆「ハ」の字状に開き、口縁が内湾するもの。

(820・821・874)

874は隆帯による格子目文を施す。820・821は胴部に隆帯を連弧状にめぐらしている。

D類

沈線文を地文とし、キャリパー形の口縁部に楕円区画文を有し、頸部が無文のもの。

(983)

983は口縁部に1もしくは2単位の突起部を有し、腕骨文を施す。また口縁部の楕円区画の中には沈線による渦巻文が見られ、渦の一端が三角形状に突出する。

E類

条線文を地文とし、棒状工具で渦巻文等を施文するもの。

(898・904・918・926・950～952・1018～1025・1056・1059・1089・1123～1126・1145・1153～1160・1163・1164・1169・1170・1186・1204・1223～1225・1348・1349・1362)

1089・1153・1156・1186には渦巻文が見られ、渦の一端が三角形状に突出する。

F類

短沈線文を地文とし、頸部が強く括れ、キャリパー形の口縁部に渦巻文などを施し、頸部にも文様帯を有するもの。

(931・932・984・985・993・996・1076・1094・1140・1141・1173・1174・1212・1248・1249・1280)

G類

短沈線文を地文とし、口縁下および胴部に隆帯による唐草状の渦巻文を有するもの。

1種

口縁部が外反もしくは上方に向くもの。

(960・971・998・1005・1060・1063・1078・1105・1144・1146・1165・1250・1253～1255・1260・1353)

1253は口縁が外反し、頸部の括れも強く、口縁部内面に渦巻き文と交互刺突文を施す。1254は装飾把手を有し、底部は脚台付である。

2種

口縁部が内湾し、いわゆる樽形の器形となるもの。

(892・933～937・961～966・973・976・992・994・995・997・999・1006・1055・1057・1058・1061・1062・1067～1070・1073～1075・1077・1079～1084・1095～1102・1104・1142・1166・1167・1175・1176・1206・1256～1259・1261・1262・1330・1335・1344)

976・1067は隆帯による渦巻文の渦の一端が三角形状に突出する。1055・1057・1070には装飾把手が付けられる。992・1068・1073・1075・1095には口縁部より突出した渦巻文が見られる。

G類と推測される胴部片

(745・893～896・907・911・914～917・920～925・927・928・938・939・941～948・968～970・972・974・977～979・1000～1004・1007～1015・1017・1053・1066・1085～1088・1107～1122・1143・1148～1152・1168・1172・1180～1185・1202・1213・1215～1222・1263～1270・1289～1293・1322～1324・1332・1334・1340・1345～1347)

927・928・1150は短沈線による綾杉状の地文に隆帯で腕骨文を施しており、G類の中では比較的古い様相を示す可能性がある。類例は梨久保遺跡の中に見られる(岡谷市教委1986)。

F・G類と推測される装飾把手。

(975・986～991・1071・1072・1103・1106・1178・1179・1210・1211・1252)

H類

隆帯もしくは沈線による1条または2条単位の縦位懸垂文を垂下させて、器面を縦位分割し、その間をやや粗い綾杉文等による地文で埋めるもの。胴部に渦巻文を施さないと推測される。

(908・913・1030・1054・1090・1092・1134・1136・1197・1205・1209・1367)

I類　縄文を地文とするもの。

1種

数条の細い沈線で横位・縦位に直線文・曲線文・渦巻文等を施すもの。

(746～749・780・781・838・954・1041・1042・1187・1228・1231・1274・1277・1294・1333・1336・1355)

746・747・1041・1187・1228・1231は数条の平行沈線で横位・縦位に文様を施す。1228は縦位と横位の沈線文が施され、1274は沈線文の一端が棒状に突出する。縄文を地文として沈線で文様を施文する例は、東北の大木8b式(水沢1996)・北関東の加曽利E1式(海老原1988)、南信地方の天竜川沿岸とりわけ下伊那地域にみられる深鉢の施文法(米田1980)等にもみられるものであり、地域間の並行関係を検討する上で、注意が必要である。

2種

1種以外のものを一括する。

(750・752・875・909・910・919・1127～1132・1135・1138・1139・1161・1188・1192～1194・1203・1227・1229・1230・1232・1276・1295・1331)

J類

搬入品と推測されるもの、および関東・東海・北陸・西日本など周辺諸地域の影響を受けたと推測されるもの。

1種

東海系の北屋敷式に類似するもの。

(763・764・891)

763・764は、頸部が括れる深鉢形土器で、いずれもSB94出土。色調は褐灰色で胎土は堅緻。口縁部が「く」の字状に折り曲げられ、763は7単位、764は8単位の角状突起を有する。鋭く内傾する口縁部には細かい連続刺突文を数条巡らし、波底部から頸部にかけて縦位の隆帯を垂下させる。764の胴部には「V」字状の刻目隆帯を施している。891は角状突起の特徴から本種に属すると推測される。長野県での類例も幾つか報告されている(三上1998・下平他1999)。

2種

隆帯、沈線、刺突列等を主文様として多用するものを一括する。類例は岐阜県上原遺跡において中期C5群とされる資料に見られ、船本III式の一部が在地化した土器と考えられている。C5群は上原遺跡以外でも一定量出土し、岐阜県下では中期後葉の「在地」土器型式となる可能性が指摘されている(柘植他1998)。

a

隆帯を多用するもの。

(707・708・724・725・727・761・823・828)

707・708・724・725は隆帯間に櫛状沈線を施しており、岐阜県戸入村平遺跡に類例がある(坂東他2000)。

761は口縁部に横位の刻目隆帯、頸部に連弧文、頸部と胴部には縦位の条線を施している。823は口縁部に縦位の隆帯、頸部に鎖状の隆帯、胴部に縦位の沈線をめぐらす。828は口縁部に鎖状の隆帯を施す。

b

沈線、刺突列を多用するもの。
(759・760・762・767・854・1137・1343)
762・854には沈線による褶曲文が施される。
3種
縄文を地文とし、口縁部に刺突文と隆帯による連弧文が見られるもの。船本式に類例がある。
(827・829)
827・829は同一個体と推測される。
4種　咲畑式および同式に類似するもの。
a
極端なキャリパー型の口縁部を有し、口縁部文様帯に太い沈線の渦巻文や楕円区画文を施し、胴部に連弧文やそれに類似する文様を施すもの。泉拓良の咲畑・醍醐式土器様式の第1様式に類似する(泉1988)。
(1033～1035・1037・1039・1162・1272・1350・1351・1364)
1033・1037には沈線による連弧文が見られる。
b
a以外で渦巻文・楕円区画文・連弧文等が見られるもの。
(956・1036・1038・1040・1296・1361)
5種
口縁部にブリッジ状の把手を有し、楕円区画を作るもの。
(982)
982は泉拓良の咲畑・醍醐式土器様式の第2様式に類似する(泉1988)。類例は岐阜県上原遺跡(柘植他1998)、炉畑遺跡(各務原市教委1973)などで出土している。
6種
曽利式に類似するもの。
(753)
7種
加曽利E式および同系に類似するものを一括する。
(754・840・899～903・905・906・980・1093・1133・1191・1198～1201・1325・1326)
840は口縁部文様区画内に棒状工具による斜方向の押し引きが見られ、頸部には1条の沈線をめぐらす。901～903・905・906・1133・1191は胴部に磨消縄文を施す。1198～1201は同一個体と推測される。1325は胴部に沈線による縦位の区画を施すが、磨消縄文は認められない。980・1326は条線を地文とし、在地化した折衷的な土器と考えられる。
8種
1～7種以外で、関東・東海・北陸・西日本など周辺諸地域の影響を受けたと推測されるもの。
(755～758・826・830・957～959・1032・1043・1045～1050・1052)
755～757は波状口縁の波頂部で、758を含めて同一個体と推測される。830は鉢と推測され、外面に円形状の浮文が施される。1045～1047は波状口縁の波頂部片で、同一個体と推測される。硬質で橙褐色を呈する。口縁端部はほぼ直角に内湾し、波頂部の両側には棒状工具で渦巻文や押引文を施す。類例は岐阜県戸入村平遺跡で出土している(板東他2000)。

K類

3群の中で規定が困難なもの。破片資料の中には中期中葉に属する可能性のあるものも含まれる。

(751・776・778・782～784・812・822・825・831～835・837・839・853・856～862・871・877～880・883・884・889・890・897・912・929・930・940・949・953・955・967・981・1016・1026～1029・1031・1044・1051・1064・1065・1091・1147・1171・1177・1189・1190・1195・1196・1207・1208・1214・1226・1233・1251・1271・1273・1275・1278・1279・1316～1320・1327～1329・1339・1341・1342・1352・1358)

878・879は浅鉢の胴部片と推測され、内面に赤色塗彩が施されている。839・1189は肥厚した口縁に文様をもつ浅鉢である。912は口縁部に楕円区画文、胴部には縦位で2条の沈線文を施し、その間に斜行沈線を施す。949は地文、渦巻文ともに沈線で描かれている。955は縦位の条線文を器面全体に施している。981は釣手土器。1273は地文は半隆起線で、口縁部には隆帯による渦巻文を施す。胴部には「U」字と逆「U」字を組み合わせた意匠がみられ、3群A類2種の741、同類4種の740と類似した特徴がみられる。1279は無文の浅鉢と考えられる。

(広田和穂)

参考・引用文献

泉　拓良　1988「咲畑・醍醐式土器様式」『縄文土器大観』3
泉　拓良　1988「船本・里木式土器様式」『縄文土器大観』3
海老原郁雄　1988「北関東加曽利E式土器様式」『縄文土器大観』3
岡谷市教育委員会　1986『梨久保遺跡』
岡谷市教育委員会　1996『花上寺遺跡』
名務原市教育委員会　1973『炉畑遺跡発掘調査報告書』
神村　透　1996「波状口縁櫛形文土器を追う」『長野県の考古学』(財)長野県埋蔵文化財センター
静岡県考古学会シンポジウム実行委員会　1998『縄文時代中期前半の東海系土器群』
下平博行他　1999『大門原遺跡』飯田市教育委員会
柘植卓伸他　1998『上原遺跡Ⅰ』岐阜県文化財保護センター調査報告書36
瀬口眞司　1998「粟津貝塚出土の中期前半東海系土器」『縄文時代中期前半の東海系土器群』静岡県考古学会シンポジウム実行委員会
寺内隆夫　1996「斜行沈線文を多用する土器群の研究」『長野県の考古学』(財)長野県埋蔵文化財センター
戸田哲也　1995「中野山越A2類土器論」『先史考古学研究』5
中山真治　1998「関東地方の中期前半東海系土器」『縄文時代中期前半の東海系土器群』静岡県考古学会シンポジウム実行委員会
坂東　肇他　2000『戸入村平遺跡II 小谷戸遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書64
藤森栄一他　1965『井戸尻』中央公論美術出版
三上徹也　1998「長野県における中期前半東海系土器」『縄文時代中期前半の東海系土器群』静岡県考古学会シンポジウム実行委員会
三島　誠他　2001『寺屋敷遺跡・磯谷口遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書35
水沢教子　1996「大木8b式の変容(上)」『長野県の考古学』(財)長野県埋蔵文化財センター
吉本洋子・渡辺　誠　1994「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』1
吉本洋子・渡辺　誠　1999「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究(追補)」『日本考古学』8
米田明訓　1980「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」『甲斐考古』40

第３節　後・晩期　時期不明

１　後・晩期

(1)　遺構の概要(第15図)

後・晩期の遺構については、Ａ１地区で集石遺構、Ｅ地区で竪穴住居跡１軒と土坑多数。Ｆ４地区で、掘立柱建物跡数棟、竪穴住居跡１軒、土抗約40基を検出した。遺物の出土量も上記３地区がもっとも多く、他地区では遺構・遺物ともにほとんど検出されていないなど、Ａ１・Ｅ・Ｆ４地区が該期の中心的な地域だったと推測される。また土製耳飾もＡ２地区とＥ地区で出土した。このほか御物石器(図版144-229 PL59)も表採されている。

以下、地区ごとに報告する。土器については第３節２、石器については第４節を参照されたい。

(2)　各地区の様相

Ａ１地区

ＳＨ２（図版117　PL14）

位置：ⅣＬ23・24

構造：第２層である淡黄褐色砂層直上で検出した。厚さ10～20cmの扁平な花崗岩の角礫・亜角礫を不整形に敷きつめる。石の集中範囲は長軸約4.2m・短軸約２mであるが、周辺にも石が散乱し、本来的な形状と異なる可能性もある。個々の石の下に掘り方は確認できず、柱穴、炉なども確認されない。所見によれば、敷石の一部は第２層と同様な砂に覆われ、廃絶後短時間の内に埋没した可能性が指摘されている。

本遺構の性格については、石の配置は不規則であるが、配石遺構の可能性を指摘しておきたい。

遺物：石の隙間や周辺から出土。土器(図版125　PL52)　1382は１群、1370・1375・1376・1380は２群Ａ類、1381は２群Ｃ類、1368・1369は２群Ｄ類、1374・1377・1378は３群Ａ類、1379は５群Ａ類、1383は５群Ｃ類、1371～1373は７群である。石器は石鏃・打製石斧・磨石・ピエス・エスキーユ・加工痕のある剝片もしくは定形石器の未製品が出土している。

時期：伴出遺物は後期前葉～中葉のものが主体を占めており、本跡も同様の時期の所産である可能性が高いと推定される。

検出面出土遺物　土器(図版125　PL52)　1384は２群Ｂ類、1385は５群Ｄ類、1386は６群Ｃ類である。

Ａ２地区

遺物が採集されたのみである。ただしＡ２地区とＡ３地区に挟まれた未調査区(第15図)では過去に御物石器(図版144　PL59)が表採されており、今後の調査にも注意が必要である。土器(図版125　PL52)　1387・1388は２群Ａ類、1391は２群Ｂ類、1393は４群Ａ類、1394は４群Ｂ類、1390・1392は６群Ｄ類、1389は７群である。土製品(図版129　PL52)　土製耳飾が１点出土した。

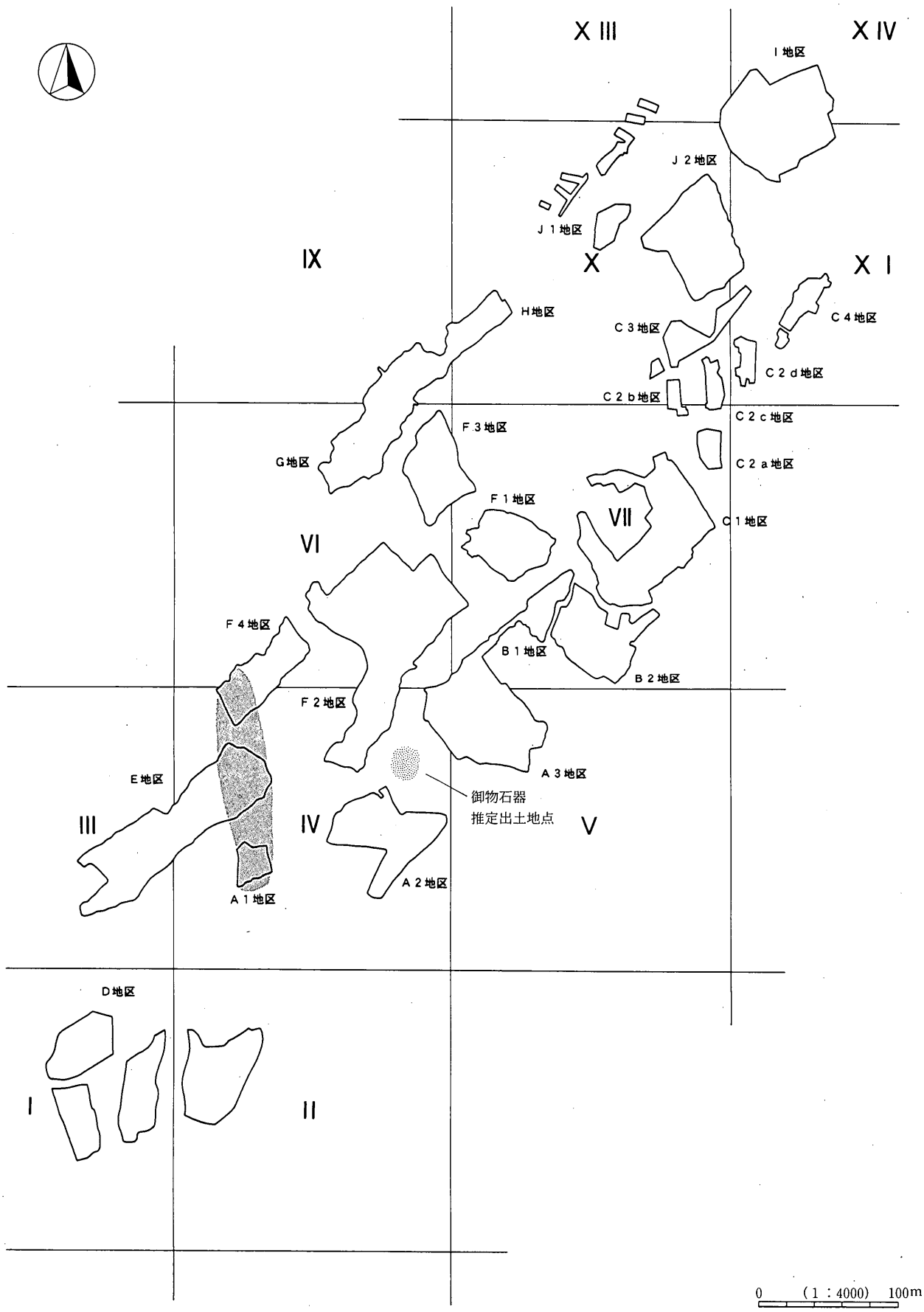
Ａ３地区

遺物が採集されたのみである。土器(図版125)　1395・1396は７群である。

Ｂ地区

遺物が採集されたのみである。土器(図版125　PL52)　1398は３群Ａ類、1399・1400は４群Ａ類、1397は５群Ｂ類、1401は７群である。

Ｃ１地区



第15図　縄文時代後・晩期遺構分布状況

遺物が採集されたのみである。土器(図版126　PL52)　1403は5群B類、1402は6群A類、1408は6群B類、1406は6群C類、1404は6群E類、1405・1407・1409・1410は7群である。

C 2 b地区

遺物が採集されたのみである。土器(図版126)　1411は3群A類、1414は5群D類、1415は6群A類、1412・1413・1416・1417は7群である。

E地区

本遺跡群の中で当該期の土器がもっとも多く検出されている。特にSB32周辺での出土が目立つ。同付近は中期後葉の遺構密集度がはげしい地点であり、明確な後・晩期の遺構を抽出する事は困難であった。出土遺物を見ると、本地区遺構外出土遺物では後期、SB32では晩期の資料が目立つ。

このほか所見によると、本地区北東部の遺構検出中に、人為的な配石の可能性がある範囲も検出されている。当該期の所産かどうかも不明であるものの、報告する。

S B32 (図版117)

地区：E地区　IVG12・13　**形状**：不整方形　**規模**：(3.8)×4m

構造：縄文時代中期後葉と推測されるSK群と切り合って検出されている。床面は硬化はしていない。周溝は東壁の一部に認められる。柱穴を抽出することは困難であるが、北壁～東壁下に小形のピットが幾つか検出されている。

遺物：埋土中より出土。土器(図版127　PL52)　1436は1群、1434・1435は5群D類、1432は6群A類、1433・1437は6群B類、1430・1431は6群D類、1428・1429は7群である。石器(図版130・143　PL53・58)　11・53は石鏃、196は磨石、222は石剣である。このほか、ピエス・エスキーユ、打製石斧、磨石などが出土した。

時期：全体に6群の土器が目立つ。晩期前葉中心か。

検出面出土遺物

土器(図版127・128　PL52)　2群～5群の土器が目立つ。1443・1445・1447～1450は2群B類、1438～1441・1444・1451・1457・1459～1461は2群C類、1442・1452～1455は2群D類、1462・1472は3群A類、1463は3群B類、1446・1464・1478は4群A類、1465・1466・1468～1471は5群A類、1474は5群A類・B類と推測される破片、1473は5群C類、1467は5群D類、1456は6群D類、1458・1475～1477・1479は7群である。土製品(図版129　PL52)　土製耳飾が1点出土した(図版129)。石器(図版143　PL58)　石棒(220)と石製装身具(226)が地区北東部の検出段階に出土した。時期は限定できないが当該期の所産である可能性もあり、報告する。

F 1 地区

遺物が採集されたのみである。土器(図版128　PL52)　1483は4群A類、1481は4群B類、1484は5群B類、1485～1488は5群A類・B類と推測される破片、1489・1490は5群C類、1482は6群C類、1480は7群である。

F 2 地区

遺物が採集されたのみである。土器(図版128　PL52)　1492は1群、1496は2群C類、1497は5群C類、1493～1495は6群D類である。石器(図版143　PL58)　石棒(223)が地区南部の検出段階に出土している。時期は限定できないが当該期の所産である可能性もあり、報告する。

F 3 地区

遺物が採集されたのみである。土器(図版128)　1491は７群である。

Ｆ４地区

地区の南西部で、１軒の竪穴住居跡、複数の掘立柱建物跡、墓を含む複数の土坑・焼土跡を検出した。また所見によれば、時期不明であるものの遺構検出中に骨片が集中して出土している。本地区では当該期の竪穴住居跡は１軒のみで、そのほかは土坑や焼土跡、掘立柱建物跡の存在が目立っており、通常の居住域とは性格を異にすると推測される。出土遺物は後・晩期土器が主体であり、遺構に切り合い関係もみられる。SK35(1316～1318)では中期の土器が出土しているものの、遺構に伴わない可能性がある(第２節３遺構外出土遺物他を参照)。

ＳＢ22（図版119　PL14）

位置：Ｆ４地区　VIV16・16・21・22　**切り合い**：ST4を切る。　**形状**：方形　**規模**：１辺2.5m前後。炉は小形石組み炉で、４つの石を「口」の字状に組み合わせる。

遺物：埋土中より出土。土器(図版129)　1534～1536は７群である。石器(図版131　PL53)　37・57は石鏃である。

時期：遺物量が少量で不明瞭であるが、本住居跡と切り合うST4付近で、後・晩期の遺物が出土する点から、当該期の所産と推測する。

ＳＴ４（図版118・119　PL14）

位置：Ｆ４地区　VIV16・17・21・22　**方位**：Ｅ５Ｎ　**切り合い**：SB22に切られる。

構造：桁行は２間で長さ6.4m、柱間寸法は約2.5m。梁行は２間で長さ5.8m、柱間寸法は0.7～１m。建物跡の認定は調査時に行った。ピットはいずれも直径0.8～１m程の不整円形状を呈する。深さは北端列のピット１・２・３が約40cmと浅く、それ以外のピットは70～90cm程と非常に深い。ピット5・8では柱の抜き取り痕が見られ、ピット1・7の底面には柱が落ち込んだと推測される窪みがある。

遺物：遺物は柱穴埋土やST4付近から出土した。土器(図版128　PL52)　1502・1503・1507は４群Ａ類、1508～1511は５群Ａ類・Ｂ類と推測される破片、1498・1499・1501・1513は６群Ａ類、1517は６群Ｅ類、1500・1504～1506・1512・1514～1516は７群である。

ＳＫ45・47・49・50・53・58（ＳＴ22）（図版118・119）

構造：いずれもST4範囲内で検出された遺構である。SK45・50・53・58は土抗で、SK47・49は溝状遺構である。これらの遺構を組み合わせ、１間×１間で柱穴間に溝状遺構を伴う建物跡を想定した。規模は３×３m程で、方位はN30Wである。ただし、ST4との切り合い関係は不明。

遺物：土器(図版129　PL52)　SK49から1521(６群Ａ類)が、SK50から1522(７群)が、SK53から1524・1525(５群Ａ類)、1529(６群Ａ類)、1527(６群Ｂ類)、1523(６群Ｄ類)、1526・1528(７群)がそれぞれ出土した。特に1529は器面の荒れが激しく、被熱したと推測される。

ＳＫ19（図版118）

構造：溝状遺構で、長さ2.3m、幅0.6m、深さ約40cmを測る。断面形状は不明。遺構内からは人頭大ほどの礫が２つ出土。

遺物：土器(図版129)　埋土中より少量出土した。1518は４群Ａ類、1519は５群Ａ類・Ｂ類と推測される破片、1520は７群である。

ＳＫ60（図版118・119　PL14）

構造：長方形で、長軸1.4m、短軸0.7mを測る。残存高は約５cm。長軸方向はN58Eである。ST4との切り合い関係は不明。北東部の埋土中より鉢(1533)が正位で出土。遺構の形状や遺物の出土状態から墓の可能性を推測したい。

遺物：土器(図版129　PL52)　1531は４群Ａ類、1532は５群Ｄ類、1530・1533は７群である。

ＳＦ６・７・８・９（図版118・119）

構造：直径60cm程の不整円形状を呈する。焼土面の深さは不明。ST4範囲内でもSF8・9が検出されているが、ST4に伴うかは不明。

検出面出土遺物

土器(図版129　PL52)　1552は２群Ａ類、1538は３群Ａ類、1537は３群Ｂ類、1539・1540・1542は４群Ａ類、1545は５群Ｂ類、1544は５群Ａ類・Ｂ類と推測される破片、1558は５群Ｃ類、1551・1553は６群Ａ類、1549は６群Ｂ類、1550・1554は６群Ｃ類、1546・1548・1555は６群Ｄ類、1541・1543・1547・1556・1557は７群である。石器(図版143　PL58)　検出段階で石棒(219)と石製装身具(225・227)が出土した。特に石棒は地区南西部より出土している。時期は限定できないが当該期の所産である可能性もあり、報告する。

Ｉ地区

遺物が採集されたのみである。土器(図版126　PL52)　1424は６群Ａ類、1426は６群Ｃ類、1425は６群Ｄ類、1427は７群である。

Ｊ地区

遺物が採集されたのみである。土器(図版126　PL52)　1422は３群Ａ類、1419・1423は６群Ｂ類、1418・1420・1421は７群である。

２　後・晩期土器

(1)　概略

吉野遺跡群より出土した後期～晩期の土器は遺物量が点箱約４箱と少なく、遺構外表採資料が中心で、遺構内での供伴関係を検討することも難しい。

時期的な傾向として、後期初頭は土器が数片確認されただけで、生活痕跡もみられないのに対し、後期前葉～晩期前葉は、資料も一定量出土しており、当該期における最盛期と考えられる。しかし、晩期の佐野Ｉｂ式(平林・綿田1988ｂ)以降によくみられる鍵の手文・工字文の文様を伴う資料や晩期中葉資料が少ない点から、晩期中葉以降は衰退期を迎えたと推測される。

再び生活痕跡がみられるのは晩期末葉である。しかし、氷式土器の出土量はわずかであり、主体となる土器は弥生時代前期の水神平式土器となる。

(2)　分類

時期判別の可能な口縁部～胴部資料を中心に191点を報告する。資料は地区ごとに集成している。いずれも小破片であり、器形全体を把握しきれない資料が多いため、文様や器形などの諸特徴から既存土器型式に対応させている。

氷式土器については、水神平式土器を主体とする遺構の中に若干含まれているため、次章で扱う。
該期土器型式の内容を参考に、文様・文様帯・器形などから以下のように分類を行った。

第１群

関東～中部地方における後期初頭土器の特徴を有する土器群を一括する。称名寺式および並行する土器型式に相当する特徴を有するもの。(1382・1436・1492)

第２群

関東～中部地方における後期前葉土器の特徴を有する土器群を一括する。堀之内式および並行する土器型式に相当する特徴を有するもの。

Ａ類　口縁部が直線的に開く深鉢と推測されるもの。(1370・1375・1376・1380・1387・1388・1552)
1387は口縁部に横位の文様帯があり、堀之内II式に類例がある。

Ｂ類　小さく内屈する口縁部をもち、ヘルメット形の鉢と推測されるもの。(1384・1391・1443・1445・1447～1450)

Ｃ類　深鉢と推測される胴部片。(1381・1438～1441・1444・1451・1457・1459～1461・1496)

Ｄ類　球形や算盤玉状の胴部を呈し、注口土器の可能性があるもの。(1368・1369・1442・1452～1455)

第３群

関東～中部地方における後期中葉の特徴を有する土器群を一括する。加曽利Ｂ式および並行する土器型式に相当する特徴を有するもの。

Ａ類　加曽利Ｂ１式に類似するものを一括する。(1374・1377・1378・1398・1411・1422・1462・1472・1538)
1378・1411・1462・1472・1538は磨消縄文系の深鉢と推測され、1377はこれに対応する突起と思われる。1462は横位の磨消縄文帯を「Ｌ」字状の沈線で区切る。1378は波状口縁の波頂部に沈線で縦位に文様を施しており、八王子式に類例がある。

Ｂ類　加曽利Ｂ２・３式に類似するものを一括する。(1463・1537)
1463は水平口縁で口唇部に刻目をもち、口縁部直下から羽状沈線文を施している。

第４群

関東～中部地方における後期後葉の特徴を有する土器群を一括する。

Ａ類　曽谷式・高井東式および並行する相当型式の特徴を有するもの。(1393・1399・1400・1446・1464・1478・1483・1502・1503・1507・1518・1531・1539・1540・1542)
1478は鉢で、赤色塗彩を施す。

Ｂ類　隆帯文を有するもの。(1394・1481)
1394は、波状口縁で口縁部に幅広い凹線をめぐらし、口縁部の上・下端にコブが付く。1481は口縁部に４条の隆帯をめぐらし、その中に縦方向の隆線と突起が見られる。

第５群

東海～北陸地方における後期の特徴を有する土器群を一括する。

Ａ類　元住吉山１式に相当する特徴を有するもの。(1379・1465・1466・1468～1471・1524・1525)

1465・1466・1469～1471・1524・1525は口縁部や胴部の沈線に沿って擬縄文を施す。1524・1525は胎土が在地と異なり淡青灰色を呈し、搬入品と推測される。1465は口縁部が内屈し、口縁下端に1条の沈線を引く。1469・1470は注口土器の可能性がある。1468は4単位の波状口縁と推測され、口縁部が屈折して内向する。口縁部に4条の沈線がめぐり、沈線間に縄文を施し、波頂部にコブが付く。精製品で搬入品と推測される。

B類　宮滝式に相当する特徴を有するもの。(1397・1403・1484・1545)

A類・B類と推測される破片。(1474・1485～1488・1508～1511・1519・1544)

1485・1486・1487は凹線の擦痕の様子から　器面調整に貝殻を用いたと推測される。

C類　条痕調整の土器を一括する。(1383・1473・1489・1490・1497・1558)

D類　A類～C類以外の東海～北陸地方の特徴を有する土器を一括する。(1385・1414・1434・1435・1467・1532)

1385は後期前葉の縁帯文土器と推測される。1414・1467は凹線文を施す。1435は滋賀里1式に類似する。1532は飛騨～北陸における後期中葉～後葉の粗製土器と推測される。

第6群

晩期初頭から後葉土器群を一括する。

A類　口縁部に隆帯文を有するものを一括する。(1402・1415・1424・1432・1498・1499・1501・1513・1521・1529・1551・1553)

B類　佐野Ⅰ式に類似するものを一括する。(1408・1419・1423・1433・1437・1527・1549)

1423・1433・1437は無文精製土器である。1419は三叉文を有し、沈線間に縄文を施文する。1423は深鉢で、口縁部に小突起を有する。

C類　安行式・大洞式に類似するものを一括する。(1386・1406・1426・1482・1550・1554)

1406・1426は口縁部に列点文を施す。

D類　北陸の御経塚式・中屋式に類似するものを一括する。(1390・1392・1425・1430・1431・1456・1493～1495・1523・1546・1548・1555)

1493は平縁の鉢で、口縁部内面が肥厚する。口唇部には沈線がめぐり、それに直交する形で3条の隆線を施す。胴部は無文である。類例は御経塚式にみられる。1494・1495は蓋で、1495は胴部に2条の沈線をめぐらし、御経塚式に類似する。

E類　女鳥羽川式・離山式に類似するものを一括する。(1404・1517)

1404は口縁部外面に2条、内面に1条の沈線を施し、器面調整がていねいで、女鳥羽川式に類似する(中沢1998)。1517は外面に1条の沈線を施しており、離山式に類似する。

第7群

後期・晩期の帰属が曖昧な土器群を一括する。

(1371～1373・1389・1395・1396・1401・1405・1407・1409・1410・1412・1413・1416・1417・1418・1420・1421・1427～1429・1458・1475～1477・1479・1480・1491・1500・1504～1506・1512・1514～1516・1520・1522・1526・1528・1530・1533～1536・1541・1543・1547・1556・1557)

1371・1389・1506・1515・1516・1533～1535は後期の無文土器の可能性がある。1395・1396・1407・1410・1417・1476・1500・1520・1557は晩期の無文土器の可能性がある。

参考・引用文献
千葉　豊　1994「Ⅳ　縄文時代後期・晩期の土器」『平出丸山遺跡』長野県辰野町教育委員会
中沢道彦　1998「「氷Ⅰ式」の細分と構造に関する試論」氷遺跡発掘調査資料図譜　第３冊
平林彰・綿田弘実　1988ａ「（６）縄文後期の土器」『長野県史　考古資料編』全１巻（四）
平林彰・綿田弘実　1988ｂ「（７）縄文晩期の土器」『長野県史　考古資料編』全１巻（四）
百瀬長秀　1999「中ノ沢式土器の再検討」『長野県考古学会誌』89

３　時期不明

遺構の検出状況、形態的特徴などからみて、縄文時代に属すると推測する遺構を取り上げる。遺物量が少なく、明確な時期決定は難しい。

(1)　竪穴住居跡

ＳＢ38（図版120）

位置：Ｅ地区　ⅣＫ１　**形状**：隅丸長方形　**規模**：3.5×３ｍ

構造：床面は、貼り床ではないが、全面が硬化する。炉は小形石組み炉で４つの石を方形に配置する。主柱穴はピット１～４と推測される。ピット５は浅く、性格は不明。東南部の穴は後世の撹乱である。

遺物：ほとんど出土しない。

(2)　土坑他

Ｅ地区土坑群（図版121　PL14）

位置：ⅢＯ18・19・23・24

構造：Ｅ地区の南西部にある約250m²の範囲に20基以上の大形土坑が検出された、形状はほぼ円形で、規模は、直径１～1.3m、深さ0.7～１ｍを測る。これら土坑の中には直線的に並んで列を組める例も存在するが、方形配列を想定するには至らない。これら土坑の一部（SK660・662・680・681・683・687）は弥生時代後期の住居跡（SB46～49）に切られており、帰属時期はそれ以前になると推測される。またSK687では石匙（図版133-90）も出土している。Ｅ地区では、早・前期・中期後葉・後・晩期の遺構が検出されており、いずれかに帰属する可能性もある。

Ａ２・Ｃ１・Ｉ地区の礫が出土する土坑（図版122・123・全体図）

SK87・133・139・140・635（Ａ２地区）・SK532（Ｃ１地区）・SK1352（Ｊ１地区）

Ａ２地区では第１検出面で、縄文時代中期の竪穴住居跡に近接して多くの土坑を検出した（全体図）。土坑全体の分布に規則性はなく、大部分は直径30cm程の小さい土坑である。しかし、直径60cm～１ｍ程の比較的大きい土坑も存在し、埋土から拳大～人頭大の礫が出土する例がみられた。その性格は不明であり、人為的なものか否か確認には至らない。ここでは代表的な、SK87・133・139・140・635を報告する。また他地区の例としてSK532（Ｃ１地区）、SK1352（Ｊ１地区）も図示する。

礫が意図的に配置された可能性のある土坑

ＳＫ1362（旧SB96　図版123　PL14）

位置：Ｉ地区　ⅩⅣＶ２　**規模**：(2.8)×2.4m

構造：プラン北側は削平を受けるものの、形状は長方形状を呈すると推測される。プランの中央部に、直径20cm程の花崗岩が円形を意識したように並べられている。
花崗岩の下には明確な掘り込みも見られず、火床も形成されていない。床面上ではピットなども発見されていない。埋土中より多くの礫が出土しているものの、遺物はほとんど見られない。

「陥し穴」の可能性がある土坑

ＳＫ294（図版124）

位置：Ａ３地区　ＶＡ19　**規模**：2.7×1.7m

構造：プランは検出面で長楕円状、底面で長方形状を呈する。深さは1.3mを測る。底面が平坦で、土坑下部の壁面がほぼ垂直に立ち上がるのに対し、土坑上部は外側に開く形状である。底面でピットは検出されていない。「陥し穴」の可能性もあるが、詳細は不明。

ＳＫ559（図版124　PL14）

位置：Ｃ１地区　ⅦＩ10　**規模**：1.6×１m

構造：プランは検出面で長楕円状、底面で長方形状を呈する。底面が平坦で、壁面が逆「ハ」の字状に広がる形状である。深さは25cmを測る。底面でピットは検出されていない。埋土中より角礫が出土しているが、本遺構に伴うかどうかは不明である。「陥し穴」の可能性もあるが、詳細は不明。

性格不明遺構

ＳＸ９（旧SB103　図版120　PL14）

位置：Ｊ１地区　ＸＭ４・５　**形状**：楕円形　　**規模**：13.5×８m

構造：大型で楕円状のプランとして調査を開始したが、埋土中からは拳大～人頭大の礫が大量に出土し、床面を想定することも出来なかった。炉・ピット等も確認されていない。

遺物：中期土器片を主体に出土するものの、流れ込み等の可能性もあり、遺構に伴うものかは不明(第２節３　遺構外出土遺物他を参照)。

第４節　縄文時代石器

１　概要

吉野遺跡群から出土している縄文時代の石器は早期及び後・晩期に該当するものも認められるが、数量的には中期に該当するものを主体としていると思われる。したがって、以下の石器の事実記載は中期の石器を中心に器種ごとに行い、分類を示して該期の石器の形態的特徴を把握することに努めた。中期以外と思われる石器についても一括して扱ったが、時期が明確なものは必要に応じてその時期と形態的特徴についてふれている。その上で竪穴住居跡出土石器を中心に石器組成・石材組成などのおおまかな傾向についてふれている。

２　分類

石鏃（１～64　図版130・131　PL53）

分類　Ⅰ類：無茎鏃

１類：凹基鏃

ａ類：基部の抉りが深いもので、抉りの深さが器長の半分近くに及ぶもの

ｂ類：基部の抉りが深いもので、幅に対して長さが短いもの

ｃ類：基部の抉りが深いもので、幅に対して長さが長いもの

ｄ類基部の抉りが浅いもの

２類：平基鏃

３類：凸基鏃

ａ類：基部が尖るいわゆる凸基鏃

ｂ類：基部が丸みを帯びるいわゆる円基鏃

Ⅱ類：有茎鏃

１類：凹基鏃

２類：凸基鏃

１～61はⅠ類とした無茎鏃である。１～３は、基部の抉りが、器体の長さの半分近くに及ぶⅠ－１ａ類である。側縁はいずれも外湾する。4～12は幅に対する長さが短いⅠ－１ｂ類である。７・８はⅠ－１ａ類に分類することも可能であろう。13～40は基部の抉りが深いⅠ－１ｃ類に分類される。長さが幅の約1.5倍程度のものを基本的な形態とする。出土点数が最も多く、出土した石鏃の中でもっとも主体的な位置を占める形態である。側縁の形態は、直線的なもの(15・19)、やや内湾するもの(13・18・20・26)、内側に屈曲するもの(29・30)などがある。脚部の先端は尖るものが大半を占めるが、丸みを帯びるもの(17・18)もわずかに認められる。側縁の形態・脚部の形態の多様なものが含まれているが、特に細分はしていない。大きさも37～40などやや大きなものが認められる。41～45は１ｃ類に類似するものであるが、基部の抉りが浅くⅠ－１ｄ類として別類に分類した。48～53は基部が平らな、いわゆる平基鏃で、Ⅰ－２類とした。50は素材の主要剥離面を残し、未製品の可能性が高い。51はⅠ－３ａ類に分類されるが、１点しか出土していない。52～61は円基鏃でⅠ－３ｂ類とした。52・53などの小形のものも認められるが、他類に比べやや大形のものが多い。

62～64はⅡ類とした有茎鏃である。62・63は凹基鏃、64は凸基鏃でそれぞれⅡ－１類、Ⅱ－２類とした。

分類別では圧倒的にⅠ類が多いが、基部の形態、側縁の形態は多様である。あえて挙げるとすればⅠ-1類が主体を占めていると言えよう。II類は後・晩期に属する可能性が高いと思われるが、中期の遺構から出土しているものもあり、明確に遺構単位で時期を確認できたものはない。石材は黒曜石・チャート・下呂石が用いられているが、黒曜石が約70%を占め他の石材を圧倒している。

石錐（65～82　図版132　PL53）

分類　1類：つまみ部があるもの

a類：つまみ部と錐部との区別が明瞭なもの

b類：つまみ部と錐部との区別が不明瞭なもの

2類：三角形状のもの

3類：棒状を呈するもの

a類：側縁に段が無いもの

b類：側縁に段が有るもの

65～75はつまみ部を有する1類である。つまみ部と錐部との間の抉りが顕著なもの(65～70)と、やや内湾する程度で不明瞭なもの(71～77)が認められ、それぞれ1a・1b類として細分した。1a・1b類ともに長さ2cm程度の小形のものと、4cm程度のやや大形のものがある。78は三角形状を呈するもので、錐部付近の側縁部が緩やかに外湾する。79～82はつまみ部がなく棒状を呈するものである。側縁に段の無い3a(79～81)と、段の有る3b類(82)とに細分した。

分類別ではつまみ部を有する1類がやや多い。石材については石鏃と同様の傾向がうかがえ、黒曜石が約68%を占めて主体となっている。

石匙（83～94　図版132・133　PL54）

分類　Ⅰ類：小形のもの

1類：縦形のもの

2類：横形のもの

a類：つまみ部の位置が左右に偏るもの

b類：つまみ部の位置が中央部に位置し、体部が台形状または木葉状のもの

c類：つまみ部の位置が中央部に位置し、体部が棒状のもの

d類：つまみ部の位置が中央部に位置し、体部の肩と刃部が内湾するもの

II類：大形のもの

1類：縦形のもの

2類：横形のもの

83～91は小形の石匙でⅠ類とした。縦形のもの(83・84)と横形のもの(85～91)とに分類され、それぞれⅠ-1類とⅠ-2類した。さらにⅠ-2類は体部や刃部の形態などに若干のバラエティーが認められ、4つに細分した。つまみ部は体部の中央に位置するもの(86～91)が多いが、左右に偏るもの(85)も認められる。体部は2b類とした台形状か木葉状を呈するもの(86～89)が多いが、90のようなやや特殊な形態のものも認められる。Ⅰ-1類は刃部の加工はあまり顕著でなく、特に83はつまみ部が作出されたのみである。

92～94は大形のものでII類とした。92・93は横形のもの、94は縦形のものがあり、それぞれII-1類、II-2類とした。

Ⅰ類が主にチャート・下呂石・黒曜石を用いるのに対し、II類はすべてガラス質安山岩を用いている。

次に述べる削器と同様に、石材との間に明確な相関関係が認められる。

Ⅰ類の小形のものは９点中５点が、早期の遺構が分布するＤ地区・Ｅ地区出土である。４点は検出面出土であるため断定はできないが、いずれも早期に該当する可能性が高い。Ⅰ類は中期に帰属すると思われるもの(89・91)も認められるが、中期以前に位置づけられる石匙に特徴的な形態であろう。一方、中期の石匙にはⅠ類に加え、大形のⅡ類が認められるようになる。石材はⅠ類では主にチャートが、Ⅱ類ではすべてガラス質安山岩が用いられている。

削器（95～118　図版133～135　PL54）

分類　Ⅰ類：小形のもの

Ⅱ類：大形のもの

１類：刃部が直線状を呈するもの

２類：刃部が円形状を呈するもの

95～100は小形のⅠ類である。黒曜石・チャート・下呂石を主体とする。おおむね刃部は直線的であり、加工が連続したていねいなものが多い。101～118は大形のⅡ類である。ガラス質安山岩を用いるものが主体をなす。刃部の位置や、形態は多様であるが、大きく刃部が直線状を呈する１類と円形状を呈する２類に分類した。１類が大半を占める。113・115は刃部と反対側の辺に素材の原礫面を有する。２類は110・111を図示したが、この２点の他にはほとんど認められない。

Ｄ地区出土の99・100と103は大きさの点で若干異なるためそれぞれⅠ類・Ⅱ類に分類したが、縦長の剝片の側縁部に連続したていねいな加工を施す点で類似する。それらは早期に該当する削器の特徴と考えられ、吉野遺跡群においても、早・前期の遺構分布は上記３点が出土したＤ地区・Ｅ地区が中心となる。したがって、それらは遺構出土のものではないが早期に位置づけられる可能性が考えられよう。それに対し、中期に該当する削器は刃部の加工が不連続なものが多く、とりわけⅡ類とした大形でガラス質安山岩を用いるものが顕著となる。

掻器（119～128　図版136　PL55）

分類　１類：１～２cm程度の小形のもの

２類：３～５cm程度の中形のもの

119～124は１類とした小形のものである。長さは１～２cm前後のもので、119・120など特に小形のものも認められる。125～128は２類としたやや大形のものである。いずれも縦長剝片の端部に入念な加工が施される。１・２類ともに121～123・125など必ずしも刃部の角度が大きくないものも含まれているが、ここでは剝片の端部に円形な刃部が作出されているものを掻器として扱った。

分類別では、小形の１類が多い。通常掻器として認識される２類のような大きさのものよりも、小形の１類の方が多いことが特徴としてあげられる。大半が中期に位置づけられるものである。

加工痕を有する剝片（Ｒ・Ｆ）

加工痕を有する剝片として、剝片に数回の剝離が行なわれたのみのものや、器種が特定できない未製品の可能性があるものなどを一括した。したがって、異なる性格のものが混在している。そのため特に図化は行っていない。

微小剥離痕を有する剥片(Ｕ・Ｆ)（129～132　図版136）

129～132は微小剥離痕を有する剥片である。特に分類を行っていない。やや縦長の剥片の縁辺部に連続した細かな剥離痕を有するものが多い。なお、本書では詳細な使用痕分析などは行っていないため、それらの微小な剥離痕が使用によって生じたものかどうかは言及しないが、略号については一般的に用いられることが多い「Ｕ・Ｆ」を用いた。石材はすべて黒曜石である。

ピエス・エスキーユ（133～137　図版136）

133～137はピエス・エスキーユである。微小剥離痕を有する剥片と同様に分類は行わず、典型的な例として５点を示した。大きさは２～４cm程度のものが多い。石材は黒曜石が大半を占める。

尖頭器（138　図版136）

138は下呂石製の尖頭器である。下半部に器体の最大幅がある。表裏両面ともに加工が器体の全周に及ぶが、剥離は比較的浅く中央部に素材の主要剥離面を大きく残す。平面形は尖頭器状に仕上げられているが剥離自体はあまり顕著でなく、未製品の可能性が高い。表面採集資料であるため詳細な時期については不明である。吉野遺跡群ではほかに黒曜石製で柳葉形を呈する尖頭器が採集されている(第II章第２節)。

異形石器（139　図版136　PL55）

139は黒曜石製の異形石器である。SB29出土で中期後葉II期に位置づけられる。上部には丸みを帯びるつまみ部が作出され、端部は尖る。ほぼ器面全体に押圧剥離と思われる平坦な剥離が及ぶ。全体は強く湾曲し、断面は三角形状を呈する。同様の石器は、隣接する大桑村に所在し中期後葉に位置づけられる川向遺跡において水晶製のものが１点出土している(百瀬他2001)。いずれも「石鈎」(桐原1988)などと呼ばれてきた石器に該当するものと考えられる。

石核（140～142　図版137）

140～142は石核である。３点を図示した。140は一辺２cm弱の小形の石核である。141・142はそれより一回り大きなものである。図示した３点以外にも石核は認められるが、打面や作業面のあり方などは多様である。

原石（143・144　図版137　PL55）

143・144はともに１辺10cm近くに及び、重さ400gを超す大形の黒曜石の原石である。Ｉ地区の検出面において２つ並んで出土した。検出面出土であり掘り込み等は確認されなかったが、出土状況からして埋設されていた可能性も高いと思われる。また、上記２点の原石は望月明彦氏に依頼し、原産地分析を行った(第VI章第２節)。それによれば、２点はいずれも諏訪エリア星ヶ台群であるとの結果を得ている。

打製石斧（145～165　図版138　PL55）

分類　１類：短冊形もしくは撥形を呈するもの

　　２類：分胴形を呈するもの

145～161は１類とした短冊形もしくは撥形を呈するものである。先端部がやや幅広な撥形が主体を占めるものと思われるが、152・157・158のような横幅がほぼ均一な短冊形も認められる。両者の差異は微妙であり中間的なものも多いため、これらを合わせて１類とした。大きさとしては145～147のような小形の

もの、148～158のような中形のもの、159～161のような大形のものが認められるが、中形のものが主体をなす。162～165は2類とした分胴形を呈するものである。側縁中央部付近で内湾し、先端部は丸みを帯びる。162・163は中形に、164・165は大形に分類されよう。

分類別では1類が圧倒的に多い。中期をとおして、打製石斧の主体をなしている形態である。時期ごとの詳細な検討を経てはいないが、大きさについても中期の各細分期による差異は認められないものと思われる。2類は図化した4点のみしか検出されていない。石材は輝緑凝灰岩が約89%を占める。

磨製石斧（166～183　図版139　PL56）

分類　1類：乳棒状磨製石斧

2類：定角式磨製石斧

a類：小形のもの

b類：中形のもの

166～169は乳棒状磨製石斧である。166はやや小形のもので、使用による欠損のためか刃部は鋭角でない。166・168・169には敲打痕が観察され、ていねいな器体の整形の痕跡がうかがえる。一方、167は敲打痕が観察されず、素材に若干の研磨を施したのみで素材の残したまま磨製石斧として使用されたものと思われる。170～183は2類とした定角式磨製石斧である。小形の2a類(170～173)とそれ以外の2b類(174～183)に分類される。2a類・2b類はともに大きさがほぼ一定で、形態的にも斉一性が高い。182は破損品を再加工しているものと思われる。

分類別では1類が4点、2類が14点で2類が卓越する。1類には時期を確定できるものがないため断定はできないが、中期の磨製石斧は2類が主体となっていると思われる。特に、2類は時期が比定できる8点中6点が中期後葉II期に帰属することが注意される。磨製石斧については隣接する大桑村万場遺跡において前期末葉段階において乳棒状磨製石斧が減少し、定角式磨製石斧が増加する傾向が捉えられている(百瀬他2001)。吉野遺跡群の磨製石斧の出土傾向はおおむね万場遺跡のあり方と合致するものであろう。石材は1類には変質玢岩、2類には流紋岩・蛇紋岩が主に用いられている。

磨石類（184～202　図版140・141　PL56・57）

分類　1類：使用される面が主に表裏両面に限られるもの

2類：複数の面が使用され、立方体に近い形状を呈するもの

3類：表裏両面に加え、側面にも磨面・敲打痕のあるもの

4類：細長いもの

磨面の数や範囲・凹部・敲打痕の数や位置などは多様であるが、ここでは主に平面形と側面の磨面有無によって分類した。184～193は側面には磨面が認められないもので1類とした。側面にも使用痕は観察されるが、敲打痕が中心である。そのため素材の形状が大きく変化しておらず、横断面もほぼ円形を呈する。194・195は立方体に近い形状を呈するもので2類とした。196～199・202は3類としたもので、表裏両面に加え、側面の使用が顕著である。したがって、1類とは対象的に各面が稜をなし、横断面が方形状を呈する。4類はやや大形の細長いものである。201は側面の磨面の他に上端部に敲打痕も観察される。

分類別では、1類・3類が主体を占める。2類・4類あるいは3類でも大形の202などは例外的な形態であると言えよう。石材は砂岩・安山岩が多く、次いで花崗岩・濃飛流紋岩が用いられている。

特殊磨石（203・204　図版141　PL57）

203・204はいわゆる特殊磨石である。断面三角形状を呈する素材が用いられ、その稜上にザラザラとした特徴的な使用面が観察される。204には使用面の稜上に細かな剝離痕が観察される。

当該石器の位置づけから縄文時代早期に該当するものと思われる。検出面出土ながら、いずれも早期の遺構が分布するD地区出土であり、その点でも早期への位置づけが確認される。石材は2点とも濃飛流紋岩が用いられている。

丸石（205　図版141　PL57）

205は安山岩製の丸石である。表面の風化のため観察が困難であるが、表面を敲打などによって整形されているものと思われる。E地区の検出面出土であり、時期は不明である。

石錘（206・207　図版141　PL57）

石錘は2点を図示した。206はひも掛け部を研磨によって作出した切り目石錘である。207は上下両端からの打ち欠きによって作出した礫石錘である。

敲石（208～212　図版142　PL57）

分類　1類：長さ約10cm未満のもの
　　2類：長さ約10cm以上のもの

208～211は1類とした細長いものである。210には側面に磨面も観察される。212は2類とした大形のもので、長さ約20cmを測る。上下両端に敲打痕が観察される。

分類別では1類が多く、2類は図示した1点(212)が出土したのみである。石材は砂岩がやや多い。

石皿（213～218　図版142　PL57）

分類　1類：盤状石皿
　　2類：円礫を素材とし、楕円形を呈するもの
　　a類：小形のもの
　　b類：大形のもの

出土した6点すべてを図示した。213は1類とした盤状石皿である。両面が使用され、平滑な面を有する。214～218は2類とした円礫を素材とするもので、214・215は比較的小形なもの、216～218は大形のものである。それぞれ2a類・2b類として細分した。いずれもほぼ楕円形を呈し、皿部の窪みが深く明瞭である。217は裏面にも皿部と思われる窪みが明瞭に観察される。石材はすべて安山岩製である。

石棒・石剣（219～223　図版143　PL58）

219～223は石棒もしくは石剣である。219は石棒の頭部で、下半部を欠いている。頭部には幾何学的な文様が彫刻されている。下半部につながる破損部付近では、極端に括れている。220は石棒の上半部である。頭部が作出され、横位に浅い沈線が刻まれている。221は石剣の胴部である。断面は船底状を呈し、背の部分には縦位に1条の沈線が刻まれている。全体がていねいに研磨されている。222は石剣で、端部の一部が欠損するが、ほぼ完形である。明瞭な研磨痕は背にあたる部分と思われる1面にしか認められず、未製品の可能性がある。223は大形の石棒の胴部である。上下両端を欠損する。断面はほぼ円形に近く、全体がていねいに研磨されている。石材については219が緑色片岩、220～222が粘板岩、223が変質玢岩であると思

われる。

用途不明の石製品（224　図版143　PL58）

224は全面に研磨が認められる用途不明の石製品である。砂岩製である。Ｊ区検出面出土である。両端部の磨面が顕著であり、端部が使用されていたものと推測される。時期は不明であり、縄文時代のものでない可能性もあると思われるが、便宜的に縄文時代の石器の項で掲載した。

石製装身具（225～228　図版143　PL58）

石製装身具には玉類と垂飾りの未製品？がある。225はヒスイ製の玉製品である。225はやや扁平な球状を呈し、中央部に穿孔がなされている。226・227は小玉である。226は円形、227はやや楕円形状を呈する。226は全体が球状を呈するものではなく、裏側の面が内側に窪んでいる。226・228は、一方から中心よりやや深いところまで穿孔を施し、反対側からそれより小さくて浅い孔を穿っている。両側からの穿孔が貫通したある程度の時点で穿孔を中断している。そのため孔の部分の断面形は上下非対称である。

228は、実際に穿孔が行われていないため断定はできないが、石質・大きさ・平面形状から垂飾りの未製品と判断した。ただし、先端部が比較的鋭利であり、小形の定角式磨製石斧の未製品である可能性も残ると思われる。石材についてはヒスイの可能性があるものの、明確にすることはできなかった。

御物石器（229　図版144　PL58）

明治35年にＡ２～３地区の間を開墾した際に発見された。推定出土地点は現在でも未調査区である。

今回の発掘調査報告書刊行にあたり、再図化を行った。伴出土器は不明であるため、ここでは時期的な位置づけなどの詳細な検討は行わず、形態等の事実記載を行うに留めておくこととする。

長さ34.5cm、幅9.7cm、厚さ12.6cm、重さ4.96kgを測る。両側面には左右対称の彫刻が観察される。それら側面に彫刻された４つの文様の内、中央部が括れる細長のものは文様自体が彫り込まれたネガティブなものであり、一方渦巻き状および円形状のものは周辺を削ることによって彫り出されたポジティブなものである。下面は溝状に細長く彫り窪められており、上部では端部の括れ部につながった一連のものとなっている。上端部と下端部には括れた部分が観察される。さらに上面についても下側に円形状を呈する突起部分の張り出しが認められる。両端部には欠損部が認められ、いずれも４方向からの規則的なものであることから、何らかの意図的な行為の結果である可能性があることが注意される。

御物石器は縄文時代後・晩期頃の所産と推測され、濃尾・北陸地方に分布している。長野県内では３例が確認されており（南木曽町太田垣外遺跡・大桑村野尻・上松町吉野遺跡群）、いずれも木曽郡下の中でも鳥居峠より南側に位置していることから、木曽地方と当該地方との深い関連性を示す資料として重要である。

参考・引用文献

神村　透　1998　『太田垣外遺跡』南木曽町教育委員会

鈴木道之助　1991　『図録・石器入門辞典〈縄文〉』

藤沢宗平　1949　「木曽谷の御物石器」『信濃』III１－３

百瀬忠幸他　2001　『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』大桑村教育委員会

家高荒治郎　1935　「木曽に復御物石器」『信濃』Ｉ４－５

3　ＳＫ1321周辺部出土の石器について

SK1321およびその周辺部から出土している石器はすべて黒曜石である(PL55)。その大半は人為的な剝離痕が認められない原石あるいは数回の剝離痕が認められる程度の石核で、剝片はあまり認められない。角礫状を呈するものが多い。大きいものでも５cm程度のものが大半を占め、それ以下の大きさのものも認められる。ごく小形のものであっても原産地から原石として遺跡内に搬入されていることが確認され、原石獲得における石材の選択性の一端をうかがうことができる。石鏃など小形の石器の原石である可能性が考えられよう。ただし、本跡から出土した原石は、散漫な出土状態を示し、143・144(図版137)に示したような、貯蔵され管理されていた可能性のある原石の出土状態とは異なる。廃棄といったような位置づけが可能かどうかは別としても、これらの原石が石器製作には適していなかった可能性も考えられ、詳細な性格等については不明な点が多いと思われる。なお、出土した大半の黒曜石について望月明彦氏に依頼して、原産地分析を実施した。詳細な分析結果は第VI章第２節に掲載しているが、大半が諏訪エリア星ヶ台群であるとの結果が得られている。

4　石器組成と石材組成

吉野遺跡群全体の縄文時代石器組成および竪穴住居跡別の石器出土点数を第２・３表に示した。ここでは本遺跡から出土している石器の中心をなす中期の竪穴住居跡出土の石器を対象に、その石器組成と石材組成の概略について触れておくこととする。

まず中期の竪穴住居跡では打製石斧が卓越することが特徴として挙げられる。10点を超えるような突出した出土点数を示す住居跡はわずかであるものの、各住居跡とも数点の出土点数が安定して認められる。分類の項で述べたように撥形を呈するものが大半であり、さらに大きさについても10cm前後のものが多い。中期を通じて形態に大きな変化はなく、その点でも組成上安定した位置を占めていた石器であったものと推測される。打製石斧と並んで、主体となっている石器には石鏃がある。いずれの住居跡においてもほぼ例外なく出土することは打製石斧と同じであるが、石鏃は住居跡によって出土点数がやや偏るという傾向が認められる。その他の石器として石錐、石匙、削器、掻器といった加工具類があげられる。石匙は中期に特徴的な形態とされるガラス質安山岩を用いた大形で粗製のものも認められるが、量的には多いとは言えない。削器は同じくガラス質安山岩を用いる大形のII類が認められる。以上のほかに本遺跡群の石器組成の特徴としては磨石、石皿の出土が低調であることが注意されよう。磨石は一住居跡あたり数点しか出土しておらず、全く出土が確認されない住居跡も認められる。石皿は住居跡から出土し時期を比定できるものは４点しか確認されていない。

剝片石器の石材について注目すると、黒曜石が全体の７割以上を占めている。下呂石、チャートも組成上の安定した位置を占めているものの、黒曜石が剝片石器の主要な石材となっている。各時期ごとの石材組成を詳細に検討してはいないものの、本遺跡群の中期を主体とする剝片石器の石材には主に黒曜石が用いられていたことがうかがえる。石材組成の詳細が明らかな近隣の遺跡としては、大桑村に位置する万場遺跡において前期末葉段階における黒曜石の増加傾向が指摘されている。本遺跡群において中期を主体とする剝片石器の大半が黒曜石で占められている点は、前期末葉段階に活発化した黒曜石の獲得活動の継続したあり方として理解されよう。石材組成上の割合に加え、拳大ほどの原石２点(143・144)やSK1321およびその周辺から出土した黒曜石の原石のあり方からも黒曜石原産地との密接なつながりが推察される。さらに望月明彦氏に依頼して行った原産地分析では、中期を通じて搬入されている黒曜石の大半が諏訪エリア星ヶ台群であるとの結果が得られており、黒曜石の獲得方法に一定の安定性を認めることができよう。

ただし、木曽谷の遺跡における剝片石器の主要石材である黒曜石・下呂石・チャートの割合については、上記したような時期的な要因のほかに地理的な要因も考慮しなければならないであろう。すなわち、北部ほど黒曜石原産地に近く、南部ほど木曽谷に搬入された下呂石が採取されたと推測される木曽川下流域に近い点である。そのため上記した石材組成を単純に時期的な要素として断定できない面もあるが、吉野遺跡群と万場遺跡の距離はそれほど大きなものとは言えない。したがって、ここでは両遺跡をほぼ同一地域に属するものとして、上記のような石材組成の差異を時期的な要素を反映したものとして捉えておきたい。

（松原和也）

註:

黒曜石の原産地分析は、時期を限定できる竪穴住居跡を選択し、その住居跡・土坑から出土した黒曜石の大半を分析するという方法をとった。そのため、剝片資料が多く図版に掲載して紹介したものは少ない。

第2表　縄文時代石器組成

	黒曜石	チャート	下呂石	ガラス質安山岩	ヒスイ	珪質頁岩	流紋岩	蛇紋岩	緑色片岩	変質玢岩	輝緑凝灰岩	粘板岩	ホルンフェルス	花崗岩	砂岩	濃飛流紋岩	安山岩	合計
石鏃	103	26	18															147
石錐	13	4	2															19
石匙	1	5	2	4														12
削器	12	2	2	14														30
掻器	9	5	1															15
R・F	32	7	2															41
U・F	33																	33
ピエス・エスキーユ	25	2																27
尖頭器	1		1															2
異形石器	1																	1
石核	10	3																13
打製石斧											165	18					1	184
磨製石斧						1	6	3		7					1			18
磨石														7	15	4	16	42
特殊磨石																2		2
丸石																	1	1
石錘												1			2		1	4
敲石													1		4		2	7
石皿																	6	6
石棒									1	1		1						3
石剣												2						2
石製品					2		1											3
合計	240	54	28	18	2	1	7	3	1	8	165	22	1	7	22	6	27	612

第3表　縄文時代竪穴住居跡別石器出土点数

遺構名	細分期	石鏃	石錐	石匙	削器	掻器	ﾋﾟｴｽ･ｴｽｷｰﾕ	R・F	U・F	打斧	磨斧	石錘	敲石	磨石	石皿	石核	剥片	その他	合計
SB18	中期後葉II	2				2		3	2							1			10
SB19	中期後葉II	3							1							1			5
SB20	中期後葉II								1	1									2
SB21	中期後葉II	1	2						1	1									5
SB22	後・晩期	2																	2
SB23	中期後葉II								1					1					2
SB24	中期後葉II	3			2	2	2	5	6	3						1			24
SB25	中期後葉II	14	1				1	4	2	5	1			1		3			32
SB26	中期後葉II	1				2		1	1	7	1			2					15
SB27	中期後葉II	4		1				1	1	1									8
SB28	中期後葉II		1													1			2
SB29	中期後葉II	22	3		2			7	8	1						2		異形石器1	46
SB31	中期後葉II								1							1			2
SB32	後・晩期	2					3			3				1				石剣1	10
SB33	中期後葉II	15	1			1	3	4	5	4	2		1			2		石剣1	39
SB34	中期後葉II	26			1	2		5	3	6	1		2	1					47
SB35	中期中葉		1				1			2									4
SB37	中期後葉II										1								1
SB39	中期後葉II	1					1												2
SB40	中期後葉II	2						1		5									8
SB43	中期後葉II	5						1		2									8
SB50	前期末葉														1				1
SB52	早期前葉												1	1					2
SB53	早期前葉													2					2
SB54	中期後葉II			1															1
SB55	中期後葉II	1																	1
SB57	中期後葉I	1			1			1		5									8
SB86	中期後葉I					1				1	1							垂飾り未製品?1	4
SB87	中期後葉		1		1					4									6
SB88	中期後葉					2	3	1	1										7
SB89	中期後葉	1								3					1				5
SB90	中期後葉	2	1				1	1											5
SB93	早期末葉	8	1	1	1	1	2			1		1		5	3				24
SB94	中期後葉I				5	3		2	2	3		1		1		1			18
SB98	中期後葉I		1		1					14									16
SB99	中期中葉									1									1
SB100	中期初頭～前葉	1	1				2	1		1									6
SB101	中期後葉I	1					1												2
SB105	中期	1			1	1	1			1									5
SB106	中期後葉I													1					1
SB109	中期初頭～前葉	6			1		2			7									16
SB110	中期初頭～前葉									1									1
SB115	中期後葉II	1			1					1				1					4
SB117	中期初頭～前葉				1					2		1							4
SB118	中期初頭～前葉											2							2
SB119	中期初頭～前葉	1								1									2
SB123	中期初頭～中葉						2												2
SB124	中期初頭～前葉		1							2									3
SB125	中期後葉II	1							1	5	1		1		1				10
SB126	中期			1															1
SB137	中期初頭～前葉	1																	1
SB139	中期後葉II				2						1								3
SB142	中期後葉I	1			4					3									8
SB143	中期後葉I									3				1					4
SB144	中期中葉			1	2					2				1					6

第４表　縄文時代石器観察表

番号	出土位置	器種	分類	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	SB25	石鏃	Ⅰ-1a	黒曜石	1.8	1.3	0.2	0.3	
2	SB27	石鏃	Ⅰ-1a	下呂石	2.1	0.8	0.2	0.2	
3	SB19	石鏃	Ⅰ-1a	下呂石	2.5	1.4	0.3	0.8	
4	SB33	石鏃	Ⅰ-1b	黒曜石	1.5	1.2	0.2	0.4	
5	SB29	石鏃	Ⅰ-1b	下呂石	1.6	1.7	0.2	0.5	
6	SB29	石鏃	Ⅰ-1b	下呂石	2.0	1.6	0.3	0.8	
7	SB109	石鏃	Ⅰ-1b	黒曜石	1.4	0.9	0.4	0.5	
8	SB137	石鏃	Ⅰ-1b	黒曜石	1.6	0.9	0.4	0.4	
9	SB109	石鏃	Ⅰ-1b	黒曜石	1.6	1.0	0.3	0.5	
10	SB109	石鏃	Ⅰ-1b	黒曜石	1.8	1.1	0.4	1.0	
11	SB32	石鏃	Ⅰ-1b	下呂石	1.9	1.5	0.3	0.8	
12	Ⅰ地区	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	1.8	0.9	0.3	0.4	
13	SB119	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	1.9	0.8	0.2	0.3	
14	SB109	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	2.0	0.8	0.2	0.5	
15	SB29	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	1.9	1.0	0.2	0.4	
16	SB43	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	2.1	0.9	0.3	0.5	
17	SB34	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	2.3	0.8	0.2	0.5	
18	SB101	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	2.3	1.1	0.4	1.1	
19	SB109	石鏃	Ⅰ-1c	下呂石	2.1	0.9	0.4	0.7	
20	B2地区	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	2.4	1.1	0.4	0.8	
21	SB100	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	2.0	1.0	0.3	0.8	
22	SB34	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	2.2	1.3	0.3	0.7	
23	SB29	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	2.4	1.4	0.4	1.4	
24	SB34	石鏃	Ⅰ-1c	チャート	2.4	0.9	0.3	1.2	
25	SB25	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	2.2	1.3	0.3	1.0	
26	SB19	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	2.3	1.4	0.3	0.8	
27	SB21	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	2.0	1.3	0.4	0.8	
28	SB34	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	2.1	0.5	0.2	0.5	
29	SB34	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	2.2	0.5	0.4	0.5	
30	SB93	石鏃	Ⅰ-1c	チャート	1.8	0.5	0.2	0.3	
31	SX9	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	2.2	1.4	0.4	1.3	
32	SB34	石鏃	Ⅰ-1c	チャート	3.6	1.5	0.5	2.9	
33	SB25	石鏃	Ⅰ-1c	チャート	2.6	1.7	0.4	1.9	
34	SB34	石鏃	Ⅰ-1c	水晶	2.2	1.3	0.4	1.7	
35	SB57	石鏃	Ⅰ-1c	チャート	2.9	1.8	0.6	2.8	
36	SB115	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	2.6	1.3	0.3	1.1	
37	SB22	石鏃	Ⅰ-1c	下呂石	3.1	1.6	0.4	2.2	
38	SB40	石鏃	Ⅰ-1c	チャート	3.7	1.3	0.6	3.9	
39	SB29	石鏃	Ⅰ-1c	下呂石	2.9	1.5	0.2	1.0	
40	表採	石鏃	Ⅰ-1c	黒曜石	3.2	1.5	0.3	1.3	個人蔵
41	SB29	石鏃	Ⅰ-1d	チャート	1.6	0.9	0.3	0.5	
42	SB105	石鏃	Ⅰ-1d	黒曜石	2.1	1.5	0.5	1.1	
43	SB25	石鏃	Ⅰ-1d	下呂石	2.3	1.7	0.6	1.9	
44	SX9	石鏃	Ⅰ-1d	黒曜石	2.5	1.4	0.6	2.6	
45	SB27	石鏃	Ⅰ-1d	チャート	2.7	1.3	0.4	1.6	
46	SB93	石鏃	Ⅰ-2	チャート	1.8	1.0	0.3	0.5	
47	SB109	石鏃	Ⅰ-2	黒曜石	2.2	1.3	0.6	1.7	
48	表採	石鏃	Ⅰ-2	下呂石	2.2	1.2	0.7	2.5	
49	SB33	石鏃	Ⅰ-2	黒曜石	2.7	1.3	0.2	1.6	
50	SB43	石鏃	Ⅰ-2	下呂石	3.2	2.2	0.5	4.4	
51	SX9	石鏃	Ⅰ-3a	黒曜石	1.4	0.6	0.2	0.2	
52	SB93	石鏃	Ⅰ-3b	チャート	1.7	1.1	0.3	0.6	
53	SB32	石鏃	Ⅰ-3b	黒曜石	2.1	1.4	0.6	1.3	
54	SB27	石鏃	Ⅰ-3b	黒曜石	2.0	1.8	0.6	2.2	
55	SB34	石鏃	Ⅰ-3b	黒曜石	2.1	1.9	0.4	1.6	
56	SB33	石鏃	Ⅰ-3b	チャート	2.8	1.9	0.4	4.1	
57	SB22	石鏃	Ⅰ-3b	黒曜石	2.8	1.8	0.8	4.1	
58	SX6	石鏃	Ⅰ-3b	下呂石	2.9	1.4	0.5	2.7	
59	SB93	石鏃	Ⅰ-3b	チャート	2.9	1.8	0.8	4.9	
60	SB90付近	石鏃	Ⅰ-3b	黒曜石	3.1	2.2	1.2	7.2	
61	SB18	石鏃	Ⅰ-3b	チャート	3.5	2.3	1.7	5.9	

62	SX6	石鏃	II-1	黒曜石	1.7	0.9	0.3	0.4	
63	I地区	石鏃	II-1	黒曜石	2.3	1.2	0.2	0.6	
64	SB125	石鏃	II-2	チャート	3.0	1.4	0.5	3.1	
65	SB21	石錐	1a	黒曜石	2.2	0.3	0.2	0.3	
66	SB100	石錐	1a	黒曜石	2.2	0.3	0.2	0.5	
67	SB35	石錐	1a	黒曜石	2.5	0.5	0.3	1.4	
68	SB29	石錐	1a	黒曜石	2.7	0.5	0.3	1.1	
69	I地区	石錐	1a	黒曜石	3.2	0.4	0.3	2.1	
70	SB87	石錐	1a	チャート	2.9	0.6	0.3	3.2	
71	SB124	石錐	1b	黒曜石	1.9	0.4	0.2	0.8	
72	SB98	石錐	1b	黒曜石	2.5	0.3	0.3	1.1	
73	SX6	石錐	1b	下呂石	2.5	0.4	0.1	1.1	
74	SB21	石錐	1b	チャート	3.5	0.5	0.3	2.2	
75	SB118	石錐	1b	下呂石	3.5	0.3	0.2	1.8	
76	SB33	石錐	1b	黒曜石	3.0	0.7	0.4	3.3	
77	SB28	石錐	1b	黒曜石	4.2	0.7	0.3	4.1	
78	表採	石錐	2	チャート	3.3	0.6	0.3	4.6	
79	SB29	石錐	3a	黒曜石	1.9	0.4	0.3	0.5	
80	SB90付近	石錐	3a	黒曜石	2.6	0.5	0.2	0.6	
81	SX6	石錐	3a	黒曜石	2.6	0.5	0.3	1.4	
82	I地区	石錐	3b	黒曜石	2.4	0.4	0.2	0.7	
83	表採	石匙	I-1	チャート	5.4	2.1	0.9	10.6	
84	SB54	石匙	I-1	チャート	5.3	3.2	0.7	15.3	
85	D地区	石匙	I-2a	チャート	2.9	5.8	0.7	12.0	
86	D地区	石匙	I-2b	チャート	3.8	5.4	0.9	17.2	
87	D地区	石匙	I-2b	チャート	3.9	4.9	0.9	13.7	
88	SB93	石匙	I-2b	下呂石	3.4	5.0	0.9	11.4	
89	SB126	石匙	I-2b	黒曜石	3.0	3.8	0.7	7.3	
90	SK687	石匙	I-2c	下呂石	2.7	5.4	0.8	7.8	
91	SB100	石匙	I-2d	ガラス質安山岩	3.0	4.0	0.4	5.3	
92	I地区	石匙	II-2	ガラス質安山岩	4.7	7.3	0.8	25.1	
93	SB144	石匙	II-2	ガラス質安山岩	4.2	6.1	1.1	29.2	
94	SB27	石匙	II-1	ガラス質安山岩	8.6	5.8	1.3	73.3	
95	SB24	削器	I	黒曜石	2.7	1.5	0.4	2.1	
96	SX6	削器	I	黒曜石	3.2	1.6	0.7	3.6	
97	SB29	削器	I	黒曜石	3.9	2.9	0.6	7.3	
98	SB29	削器	I	黒曜石	3.5	1.5	0.7	35.0	
99	E地区	削器	I	黒曜石	4.9	1.9	0.7	7.3	
100	D地区	削器	I	チャート	5.8	2.4	0.8	16.2	
101	SB34	削器	II-1	黒曜石	3.4	6.1	0.7	10.8	
102	SB117	削器	II-1	黒曜石	5.7	2.5	1.3		
103	D地区	削器	II-1	チャート	7.7	3.3	0.6	30.6	
104	SB109	削器	II-1	下呂石	5.8	4.1	1.0	24.1	
105	SB24	削器	II-1	下呂石	7.3	4.1	1.2	37.0	
106	SB142	削器	II-1	チャート	5.0	4.0	0.6	15.5	
107	SB34	削器	II-1	ガラス質安山岩	4.8	3.7	0.7	15.7	
108	SB142	削器	II-1	ガラス質安山岩	5.6	3.1	1.1	21.0	
109	SB144	削器	II-1	ガラス質安山岩	7.2	3.5	0.9	23.0	
110	SB142	削器	II-2	チャート	4.7	4.0	1.7	28.0	
111	SB115	削器	II-2	チャート	6.4	5.4	1.5	48.2	
112	SB98	削器	II-1	ガラス質安山岩	5.1	4.5	1.3	35.0	
113	SB142	削器	II-1	ガラス質安山岩	5.1	4.7	2.0	45.0	
114	SB94	削器	II-1	ガラス質安山岩	8.6	4.4	2.2	84.0	
115	SB57	削器	II-1	ガラス質安山岩	7.0	6.0	2.3	98.5	
116	SB93	削器	II-1	ガラス質安山岩	7.7	4.6	1.8	66.5	
117	SB94	削器	II-1	ガラス質安山岩	9.5	5.7	2.0	134.0	
118	F地区	削器	II-1	下呂石	11.5	6.3	1.1	372.0	
119	SB33	掻器	1	黒曜石	1.2	1.6	0.5	1.1	
120	SB94	掻器	1	黒曜石	1.7	1.5	0.6	1.2	
121	SB34	掻器	1	黒曜石	2.3	1.7	0.5	1.7	
122	SB88	掻器	1	黒曜石	2.4	1.8	0.7	2.0	
123	SB88	掻器	1	黒曜石	2.8	1.5	0.6	2.4	
124	SB18	掻器	1	黒曜石	2.2	2.3	0.8	3.9	

125	SB24	掻器	2	黒曜石	3.4	2.6	0.7	4.2	
126	SB93	掻器	2	チャート	3.2	2.9	0.9	11.2	
127	SB86	掻器	2	チャート	4.1	2.7	1.2	16.5	
128	SB26	掻器	2	黒曜石	5.3	3.4	1.1	18.2	
129	SX9	U・F		黒曜石	3.7	1.4	0.7	3.6	
130	SB18	U・F		黒曜石	3.9	1.5	0.8	2.3	
131	SB20	U・F		黒曜石	3.0	1.3	0.5	1.3	
132	SB19	U・F		黒曜石	2.6	2.0	0.5	2.2	
133	SB88	ピエス・エスキーユ		黒曜石	1.9	1.4	0.5	1.0	
134	SB100	ピエス・エスキーユ		黒曜石	1.8	0.9	0.7	0.9	
135	SB33	ピエス・エスキーユ		黒曜石	2.6	1.7	0.7	2.2	
136	SX6	ピエス・エスキーユ		黒曜石	3.6	1.3	1.2	4.4	
137	SX9	ピエス・エスキーユ		黒曜石	2.7	2.1	13.0	6.3	
138	表採	尖頭器		下呂石	6.0	3.0	0.9	16.6	
139	SB29	異形石器		黒曜石	6.8	1.0	1.0	7.6	
140	SB28	石核		黒曜石	1.4	1.9	2.2	6.9	
141	SB36	石核		チャート	4.3	4.8	2.4	60.2	
142	SB19	石核		黒曜石	2.7	6.5	3.0	50.2	
143	Ｉ地区	原石		黒曜石	10.4	8.0	5.3	424.0	
144	Ｉ地区	原石		黒曜石	7.5	6.5	8.4	416.0	
145	SB21	打製石斧	1	輝緑凝灰岩	7.5	2.1	0.4	12.6	
146	SB26	打製石斧	1	輝緑凝灰岩	8.2	3.0	0.8	32.3	
147	SB33	打製石斧	1	輝緑凝灰岩	8.0	3.5	1.0	44.0	
148	SX9	打製石斧	1	輝緑凝灰岩	9.5	2.9	0.8	27.0	
149	SX6	打製石斧	1	輝緑凝灰岩	10.4	3.9	1.5	91.0	
150	SB24	打製石斧	1	輝緑凝灰岩	10.4	4.4	1.2	66.3	
151	SB35	打製石斧	1	輝緑凝灰岩	11.5	3.0	0.8	43.0	
152	SB33	打製石斧	1	輝緑凝灰岩	11.3	3.5	0.8	47.9	
153	Ｃ地区	打製石斧	1	輝緑凝灰岩	10.9	4.0	1.4	93.0	
154	SX9	打製石斧	1	粘板岩	11.9	4.1	1.4	114.0	
155	表採	打製石斧	1	粘板岩	11.4	4.6	1.1	95.0	
156	SB98	打製石斧	1	輝緑凝灰岩	12.3	4.6	1.6	140.0	
157	SX6	打製石斧	1	輝緑凝灰岩	12.5	4.0	1.4	100.0	
158	SX6	打製石斧	1	輝緑凝灰岩	12.5	3.8	1.6	108.0	
159	SX6	打製石斧	1	輝緑凝灰岩	15.5	5.3	1.0	150.0	
160	Ｉ地区	打製石斧	1	輝緑凝灰岩	15.3	6.3	1.9	270.0	
161	Ｃ地区	打製石斧	1	輝緑凝灰岩	16.1	6.5	1.5	270.0	
162	SX6	打製石斧	2	輝緑凝灰岩	9.2	3.2	1.2	57.0	
163	表採	打製石斧	2	輝緑凝灰岩	11.9	4.6	1.5	142.0	
164	SB99	打製石斧	2	輝緑凝灰岩	14.3	5.8	1.6	212.0	
165	Ｃ地区	打製石斧	2	安山岩	13.8	6.5	1.2	206.0	
166	Ｆ地区	磨製石斧	1	砂岩	11.1	3.7	3.2	246.0	
167	Ｃ地区	磨製石斧	1	変質玢岩	17.1	3.7	2.5	262.0	
168	表採	磨製石斧	1	変質玢岩	19.2	5.3	4.2	785.0	
169	Ｉ地区	磨製石斧	1	変質玢岩	20.2	6.9	4.6	1000.0	
170	SB33	磨製石斧	2 a	流紋岩	4.8	3.5	0.8	23.7	
171	表採	磨製石斧	2 a	変質玢岩	5.5	2.7	0.9	23.7	
172	表採	磨製石斧	2 b	流紋岩	5.7	2.7	0.9	25.8	
173	SB33	磨製石斧	2 b	流紋岩	7.7	4.0	1.7	90.0	
174	表採	磨製石斧	2 b	蛇紋岩	8.5	4.2	2.0	142.0	
175	表採	磨製石斧	2 b	変質玢岩	9.2	4.5	2.0	162.0	
176	Ｉ地区	磨製石斧	2 b	流紋岩	8.9	4.6	2.1	152.0	
177	SB25	磨製石斧	2 b	流紋岩	9.0	4.7	2.3	146.0	
178	SB139	磨製石斧	2 b	流紋岩	10.1	4.2	2.2	182.0	
179	SB34	磨製石斧	2 b	変質玢岩	10.0	5.1	2.8	222.0	
180	SB86	磨製石斧	2 b	蛇紋岩	9.4	5.6	2.3	214.0	
181	SB37	磨製石斧	2 b	変質玢岩	11.6	5.0	2.5	258.0	
182	SB86	磨製石斧	2 b	蛇紋岩	10.6	5.9	2.2	236.0	
183	表採	磨製石斧	2 b	珪質頁岩	12.2	5.1	2.1	220.0	
184	Ｃ地区	磨石	1	砂岩	5.4	5.3	2.4	106.0	
185	Ｉ地区	磨石	1	安山岩	8.3	7.4	4.0	352.0	
186	SB53	磨石	1	砂岩	9.9	7.6	2.6	318.0	
187	SB106	磨石	1	安山岩	9.6	8.3	5.3	540.0	

188	SB94	磨石	1	砂岩	10.4	9.5	3.0	436.0	
189	Ⅰ地区	磨石	1	安山岩	9.7	9.6	6.4	740.0	
190	SX9	磨石	1	濃飛流紋岩	11.0	9.4	5.1	890.0	
191	Ⅰ地区	磨石	1	安山岩	11.1	10.0	6.1	1030.0	
192	SB53	磨石	1	砂岩	12.2	7.2	3.8	515.0	
193	SB34	磨石	1	安山岩	11.7	7.0	5.3	630.0	
194	SX6	磨石	2	安山岩	7.5	6.4	7.4	545.0	
195	SB144	磨石	2	花崗岩	9.6	8.9	5.8	860.0	
196	SB32	磨石	3	安山岩	9.0	6.2	4.8	336.0	
197	SB26	磨石	3	安山岩	8.5	6.9	4.2	358.0	
198	SB26	磨石	3	濃飛流紋岩	10.2	8.5	8.7	645.0	
199	SB143	磨石	3	安山岩	11.6	7.3	4.8	750.0	
200	SX9	磨石	4	流紋岩	15.1	5.3	6.4	805.0	
201	SB34	磨石	4	安山岩	19.7	8.4	4.2	1214.0	
202	Ｆ地区	磨石	3	安山岩	17.7	12.0	5.6	2000.0	
203	Ｄ地区	特殊磨石		濃飛流紋岩	11.8	5.4	7.5	565.0	
204	Ｄ地区	特殊磨石		濃飛流紋岩	15.7	4.7	7.9	955.0	
205	Ｅ地区	丸石		安山岩	11.2	10.6	9.7	1000.0	
206	SB117	石錘		砂岩	4.4	3.6	1.7	33.0	
207	SB94	石錘		砂岩	4.5	3.5	1.5	35.6	
208	SB33	敲石	1	砂岩	7.2	3.2	2.7	89.6	
209	Ｃ地区	敲石	1	ホルンフェルス	9.7	4.0	3.5	226.0	
210	Ｃ地区	敲石	1	砂岩	10.9	3.2	2.2	136.0	
211	Ｃ地区	敲石	1	砂岩	11.5	6.6	3.1	376.0	
212	Ｊ地区	敲石	2	砂岩	20.9	8.7	5.2	1000.0	
213	SB89	石皿	1	安山岩	29.7	23.1	2.4	3200.0	
214	Ｆ地区	石皿	2ａ	安山岩	14.7	13.0	4.2	1100.0	
215	Ⅰ地区	石皿	2ａ	安山岩	18.3	16.9	4.9	22000.0	
216	SB50	石皿	2ｂ	安山岩	34.5	25.2	9.2	12200.0	
217	SB101	石皿	2ｂ	安山岩	41.1	27.6	13.8	22800.0	
218	SB34	石皿	2ｂ	安山岩	45.8	26.0	10.7	23400.0	
219	F4地区表採	石棒		緑色片岩	4.8	2.8	2.3	39.0	個人蔵
220	Ｅ地区表採	石棒		粘板岩	7.9	2.5	2.1	58.2	個人蔵
221	SB33	石剣		粘板岩	8.0	2.3	1.8	64.9	
222	SB32	石剣		粘板岩	13.0	1.6	1.0	32.0	
223	F2地区表採	石棒		変質玢岩	21.4	4.6	3.9	710.0	個人蔵
224	Ｊ地区	石製品		砂岩	10.1	4.8	5.8	496.0	
225	F4地区表採	小玉		ヒスイ	2.2	2.2	1.7	14.4	個人蔵
226	Ｅ地区表採	小玉		流紋岩	0.8	0.8	0.7	0.5	個人蔵
227	F4地区表採	小玉		ヒスイ	1.0	0.8	0.6	0.8	個人蔵
228	SB86	垂飾り？			6.2	2.3	0.9	19.4	
229	表採	御物石器			34.5	9.7	12.6	0.0	個人蔵

第Ⅳ章　縄文時代晩期末・弥生時代・古墳時代後期

第1節　縄文時代晩期末～弥生時代前期

1　遺構

(1)　遺構の概要（第16図）

当該期の遺構はⅠ地区のSX6だけである。遺構外出土遺物もⅠ・J地区で少量出土するのみで、他の地区ではほとんど見られない。

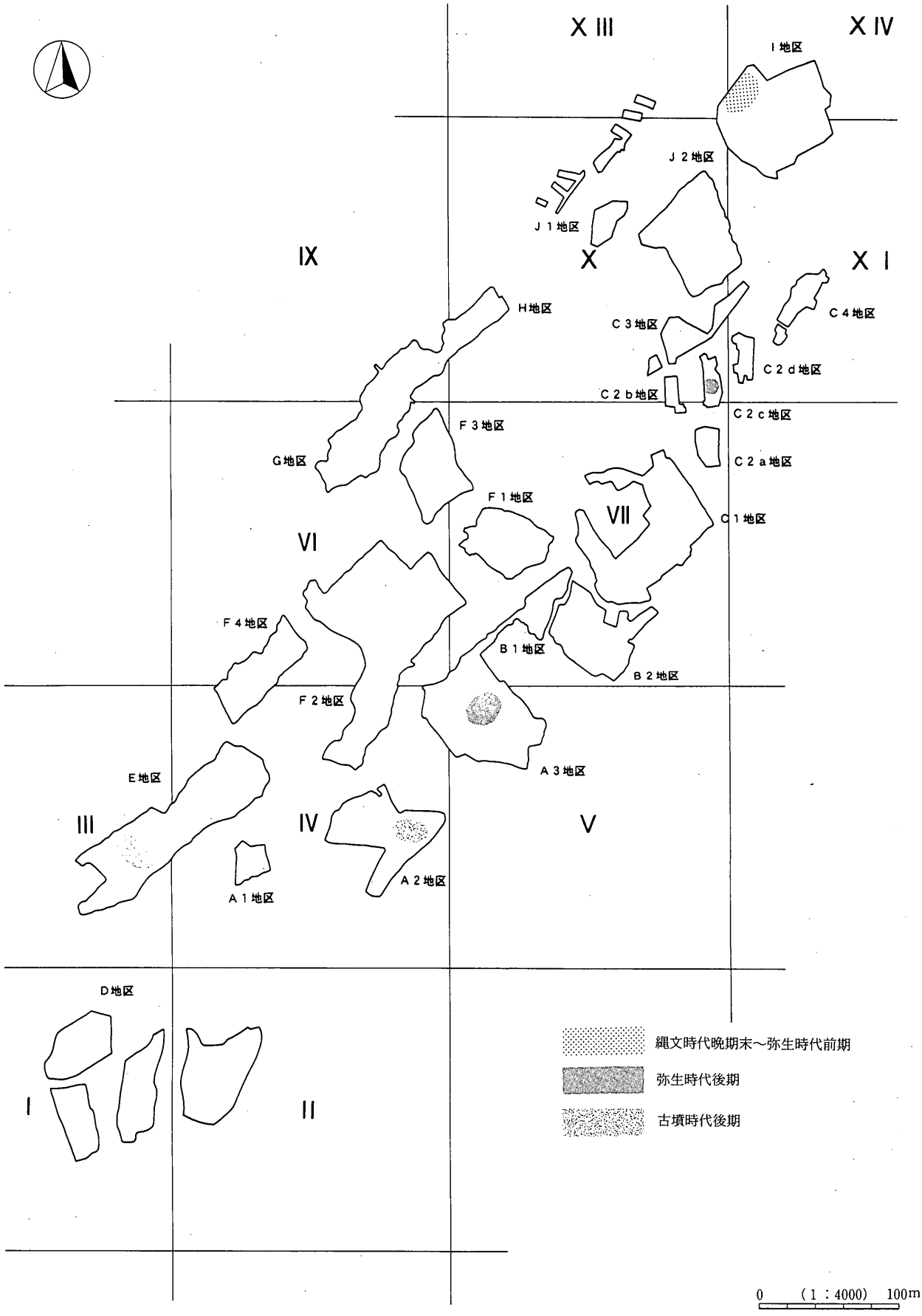
(2)　性格不明遺構

ＳＸ６（旧SB107・108　図版147　PL15）

位置：Ⅰ地区　XⅣＵ２・７

構造：検出当初は、長軸５m程の２つの不整楕円形の遺構が部分的に切り合うと想定し、調査を開始した。しかし、遺構内からは拳大～人頭大の礫が集中的に出土するのみで、柱穴・炉などを検出することが出来なかった。また両遺構の埋土は近似しており、切り合い関係も不明瞭である。遺物は散在的であるが、縄文時代晩期末～弥生時代前期の土器片が主体的に出土し、縄文中期の土器片が若干含まれる。また弥生時代中期の土器片も数片みられる。整理段階で土器の遺構間接合も確認され、両遺構の出土傾向に差異がない点から、SX6として一括報告する。

遺物：土器(図版148～150　PL59)　１～３・５・６・49～52・65は氷式土器で、１・２・６・65はⅠ式、３・５はⅡ式に属すると推測される。１は甕で、胴部には細密条痕の上に「稲妻状文」が施される。２は小型の甕で、頸部は無文で胴部に細密条痕が施される。49～52は甕の胴部破片と思われ、細密条痕が施されている。３は口縁部に平行沈線文をもつ。５は壷の胴部片で、沈線の渦巻文が施される。６は無文の浅鉢で、内外面にミガキを施す。７～25は水神平式の壷で、粗くて幅の広い条痕が施される。７・８は口縁部片で、外反して突帯をめぐらす。内面は無文。７は口縁部内面をかすかにつまむ。９～12・23～25は頸部片で、９・10～12・25には波状文が見られる。13～22は胴部片である。28～42・44～46・48・53・54・61は条痕文系の甕である。口縁端部を外反させ、口唇部には工具による連続圧痕や条線、胴部には横位～斜位の条痕を施す。28～34・37・38には粗くて幅の広い条痕が施される。44～46・48・53・54・61には粗くて幅の狭い条痕が施される。35・36・39・40はヘラ状工具による条痕が施される。41・42は底部片で、41には幅の広い条痕が施され、底部に葉脈痕が見られる。55～58は岩滑式と推測される。内傾する厚手の環状口縁をもつ厚口鉢で、胴部には粗くて幅の広い条痕が施される。64・68は壷の頸部片で、64には波状文が施される。４・26・27・43・47・62・63・66・67は甕片と推測される。26・27は口縁片で、27は内面口縁端部に連続する指頭圧痕と外面に横方向の条痕を施し、26は外面に斜位方向の沈線を施す。４・43・47は縦位・横位・斜位の条痕が施される。43・47は撚糸の節が観察される点から、条痕の原体に撚糸を用いた可能性があろう。また43は他の甕と異なり、口縁部に縦方向の条痕を施している。62・63・66はヘラ状工具による条痕が施される。69～74は無文土器である。69・70は甕口縁部片で、括れ部がなく口縁部がほ



第16図　縄文時代晩期末・弥生時代・古墳時代後期遺構分布状況

ぼ直立する。外面には横位～斜位の削りが施される。59・60は弥生時代中期に属する可能性がある。59は頸部外面に直線文を施し、胎土が白く焼成も良好である点から搬入品と推測される。近隣の土器では朝日式に類似例がある。60は頸部外面にヘラによる斜格子沈線文を施しており近隣の土器では瓜郷式に類似例がある。石器(図版131～133・136・138・140　PL53・55・56)　埋土中より出土している。本跡では縄文中期土器も若干出土しており、注意が必要である。58・62は石鏃、73・81は石錘、96は削器、136はピエス・エスキーユ、149・157・158・159・162は打製石斧、194は磨石である。

2　遺構外出土遺物

土器(図版150　PL59)　75～85はＩ地区、86～89はＪ地区より出土。75・76・84・86は氷式土器である。75は甕で、口縁部に磨かれた１条の隆線が施され、胴部にも横方向のミガキをていねいに施す。頸部にはミガキがほとんど無い。76・84・86には細密条痕が施され、76には「稲妻状文」がみられる。79・81～83は水神平式の壷で、83には波状文が施される。77・78・87は条痕文系の甕片で、いずれも口縁端部には条痕と同一の工具を用いて施文を行い、77・87には条線、78には押し引きが見られる。80は岩滑式で、内傾する厚手の環状口縁をもつ厚口鉢である。85・88・89は壷で、85は頸部に棒状の工具で沈線文を施し、88・89は粗い条痕が施される。

第２節　弥生時代後期

1　遺構

(1)　遺構の概要（第16図）

Ｅ地区で竪穴住居跡６軒、Ａ３地区で竪穴住居跡１軒と土坑１基、Ｃ２ｃ地区で竪穴住居跡１軒を検出した。このほか、Ａ２・Ｉ・Ｊ地区で若干破片が出土した。

(2)　竪穴住居跡

ＳＢ44（図版145）

位置：Ｅ地区　ⅢＴ４　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｎ36Ｗ

形状：不整楕円形　**規模**：5.2×3.9m

構造：床面で多くのピットを検出した。ピット１～４は深さが20cm以上あり、主柱穴と推測される。柱穴配置はゆがむ。ピット６～10は小形で、壁柱穴と推測される。炉は地床炉で、中央部の北壁寄りに設置。

遺物：埋土中から土器片が少量出土。

ＳＢ45（図版145　PL15）

位置：Ｅ地区　ⅢＴ３・４・８・９　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｎ２Ｅ

形状：隅丸方形　**規模**：4.1×(3.9)m

構造：南壁は削平を受けている。ピット１～４が主柱穴と推測される。ピット１・２間より若干中央部寄りに浅い窪みがあり底面に甕の上半部(１)が置かれ、その中より拳大の石が出土している。炉の可能性が高いが、被熱痕は検出されていない。

遺物：埋土中より出土。土器(図版151　PL60)　１は甕で、上半部がほぼ完存。口縁部径より胴部最大径が大きく、頸部には連続する櫛描波状文が見られる。

ＳＢ46（図版145　PL15）

位置：Ｅ地区　ⅢＯ18　**切り合い**：縄文時代と推測される土坑を切る。　**方位**：Ｎ32Ｅ

形状：隅丸長方形　**規模**：3.9×3.5m

構造：ピット１～４が主柱穴と推測される。いずれも壁際で検出されている。炉は主柱穴間より若干中央寄りに位置する。石を「コ」の字状に組み合わせており、炉底は全体的に被熱している。このほか、本住居跡では北西壁沿いの床下に溝状の掘り込みが検出されており、黄褐色土主体のブロック土で埋められていた。住居跡中央部のピットにも黄褐色土主体の土が貼られている。

遺物：炉の北側の埋土中より出土。土器（図版151　PL60）　１は甕で、内外面ともナデ整形である。内面の底部よりやや上部に煮焦げ痕、外面の頸部にスス痕が見られる。

ＳＢ47（図版145　PL15）

位置：Ｅ地区　ⅢＯ23・ⅢＴ３　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｎ３Ｅ

形状：隅丸長方形　**規模**：4.5×4m

構造：主柱穴はピット１～３と推測される。南壁中央部にはピット６～８があり、出入口施設に関するものと推測される。炉はピット５の可能性があるが、被熱面が形成されていない。このほか、北壁と西壁に沿って「Ｌ」字状の溝状掘り込みがある。所見によれば、溝内埋土は上部（竪穴埋土）と明確に区分できるが、自然堆積と思われる性状で、その上面は軟弱である。よって床下遺構ではなく、住居廃絶直後に掘り込まれたとされる。

遺物：埋土中より出土。土器（図版151　PL60）　１～７は甕である。１には４条（残存部のみ）の連続する櫛描波状文が施文され、波状文の重なりはほとんど見られない。２は外面ハケ整形の甕で、頸部より下にスス痕が見られる。４は頸部に連続する櫛描波状文が施文される。10～12は壷である。10は受け口状口縁の壷で、胴部に円弧文が施文される。

ＳＢ48・49（図版146　PL15）

位置：Ｅ地区　ⅢＯ22・２　**切り合い**：SB49がSB48を切る。　**方位**：Ｎ70Ｅ

構造：両住居跡とも長方形に近い楕円形で、SB49の床面下にSB48のプランが存在している。ピット１～４と炉はSB48に伴う。炉は浅く窪む地床炉で、炉底は全体的に被熱する。

遺物：土器（図版151　PL60）　１～５は甕である。１はSB49の床面やや上で出土し、ほぼ完形。口縁部径より胴部最大径が大きい器形で、内外面にハケ整形が見られる。内面の胴下半部（底面を除く）に煮焦げ痕、外面の胴部最大径付近にスス痕も見られる。２はSB48の床面やや上で、正位で検出された。口唇部はやや面取り気味で、口縁部径が胴部最大径より大きい器形である。頸部から胴部最大径にかけての間に、櫛描波状文を２条、その下に斜走単線文、さらにその下に櫛描波状文を１条施文する。胴下半部には不定方向のケズリが見られる。３・４は同一個体と推測され、２条の連続する櫛描波状文が、距離を離して施文されている。５は櫛描波状文が施文される。１・２以外の遺物はSB48・49のどちらに伴うか不明。

ＳＢ62（図版146）

位置：Ａ３地区　ＶＡ13　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｓ54Ｅ

形状：長方形　**規模**：(4.7)×(4)m

構造：削平が激しく、床面部分のみ調査したため、規模は推定である。ピットは１～６が主柱穴で、８～10は壁柱穴の可能性が推測される。炉は地床炉で、中央やや奥壁よりに設置している。

遺物：床面上で土器片が出土。土器(図版152　PL60)　１・２は甕で、１は頸部の廉状文を施文した後に、連続する櫛描波状文を頸部と胴部に描く。２は胴部最大径付近に櫛描波状文を描き、その下にはハケ整形、そして底部付近にはタテ方向のミガキを施す。

ＳＢ136（図版146）
位置：Ｃ２ｃ地区　ＸＹ19　**切り合い**：なし。
構造：削平が激しく、北東のコーナー部のみ検出した。ピットの性格も不明瞭である。
遺物：土器・石器(図版152)　櫛描波状文の甕片(１・２)と、磨製石鏃(３)が出土。

(3)　土坑
ＳＫ348（図版147　PL15）
位置：Ａ３地区　ＶＡ９
構造：長軸約50cm、短軸約35cmの不整円形状を呈する。埋土は黒褐色土で、中央部より甕(１)が正位で出土。SK348の両側では、小形のピットが出土した。いずれも深さは約20cmであり、SK348に関係する遺構の可能性がある。
遺物：土器(図版152)　１は甕で、頸部に連続する櫛描波状文、胴部には斜走単線文が描かれる。

２　遺構外出土遺物

土器(図版152)　１は高坏脚部で、外面に赤色塗彩が施される。Ｊ地区出土。２～６は甕である。２は連続する櫛描文を口縁端部に１条描き、間隔をあけて頸部に３条(残存部)描く。Ａ３地区ＶＡ19グリッドで出土。３は口縁部片で、Ａ２地区出土。４は口縁部片である。５は頸部片で、廉状文の上下に波状文が見られる。６は胴部片で、斜走単線文が見られる。４～６はＩ地区出土である。

第３節　古墳時代後期

１　遺構

(1)　遺構の概要（第16図）
Ａ２地区で竪穴住居跡２軒を検出した。遺構外の遺物は、Ａ３地区とＥ地区で須恵器片が少量出土したのみであり、生活痕跡はＡ３～Ｅ地区の範囲にとどまると推測される。

(2)　竪穴住居跡
ＳＢ60（図版147　PL15）
位置：Ａ２地区　ⅣＯ12　**切り合い**：なし。　**方位**：N18E　**形状**：隅丸方形　**規模**：3.3×3.3m
構造：削平を受け、床上10cm程を調査した。ピットは検出されていない。北壁中央部に近接して被熱痕があり、カマドの設置場所と推測される。
遺物：埋土中より少量出土。土器(図版152　PL60)　１は須恵器坏身で、口径8.8cm・器高3.8cmを測る。口縁部は短く内傾する、外面底部約1/3に回転削り痕がある。ほぼ完形品で、住居跡東側の埋土中より出土。２は土師器甕で、口縁部が短く外反し、端部を丸く整える。内外面にハケが見られ、外面下部にはススが見られる。

ＳＢ61（図版147　PL15）

位置：Ａ２地区　　ⅣO13・18　**切り合い**：なし。　**方位**：N15E　**形状**：隅丸方形　**規模**：3.2×3.3m

構造：削平を受け、床上約10cm程を調査した。４つのピットを検出しているが、いずれも浅い。北壁中央部に焼土面を検出したが、床面より浮いているので、カマドに伴うかどうかは不明である。

遺物：埋土中より少量出土。土器（図版152　PL60）　１は須恵器蓋坏で約1/4残存。口径10.8cmを測る。天井部約1/3に回転削り痕がある。２は須恵器甕で、頸部に緩やかな段をもつ。このほか、土師器甕片が出土した。

2　遺構外出土遺物

土器（図版152　PL60）　１は須恵器甕口縁部で、頸部から口縁部にかけて強く外反する。焼成はあまり良くない。Ａ３地区出土。２は須恵器坏身底部片で、底面には回転ヘラ切り痕が見られる。胎土は灰白色で緻密。Ｅ地区出土。　（広田和穂）

第Ｖ章　平安時代～中世前期・安土桃山～江戸時代・時期不明

第１節　平安時代～中世前期

１　遺構

(1)　遺構の概要（第17図）

竪穴住居跡軒数は約50軒を数える。遺構はほぼ全範囲で検出されており、特に多いのはＣ・Ｇ・Ｊ地区である。Ｉ地区では遺構は検出されないものの、地区南西側で多くの灰釉陶器片が表採されており、本来は同地区にも遺構が存在した可能性も推測される。遺構の大半は縄文時代以降の検出面で発見されており、唯一Ｃ２～３地区で平安～中世前期面が確認された(第II章第１節)。当該期の遺構は縄文時代の遺構より若干検出面が高いため、後世の削平を激しく受け、壁面まで残る住居跡は少ない。また、掘立柱建物跡も当該期に属するものとしては抽出困難である。

遺構の事実記載に関して、若干の統一基準を設定した。

住居形態　Ａ：方形　Ｂ：長方形　Ｃ：不定形　Ｄ：不明　住居規模の(　)は残存長を表す。

カマド位置　Ａ：壁面中央　Ｂ：壁面中央よりややコーナー寄り　Ｃ：壁面右隅　Ｄ：壁面左隅
Ｅ：コーナー　Ｆ：不明

遺物については、土器は第Ｖ章第３節１、石器は第３節２、金属製品は第３節３を参照されたい。

(2)　竪穴住居跡

ＳＢ１（全体図）

位置：Ｇ地区　IXY11　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｓ17Ｅ

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｄ　**規模**：(4.5)×(1.5)m

構造：南東部カマド付近のみ残存。壁面も浅く不明瞭。床面は全体的にやや硬化する。カマドは南東壁の東隅に付設。ピットはすべて20cm以下と浅い。

遺物：土器(図版166)　灰釉陶器片が少量出土。１は碗で整形が粗く、釉がかすかに見られる。

時期：IV期古相。

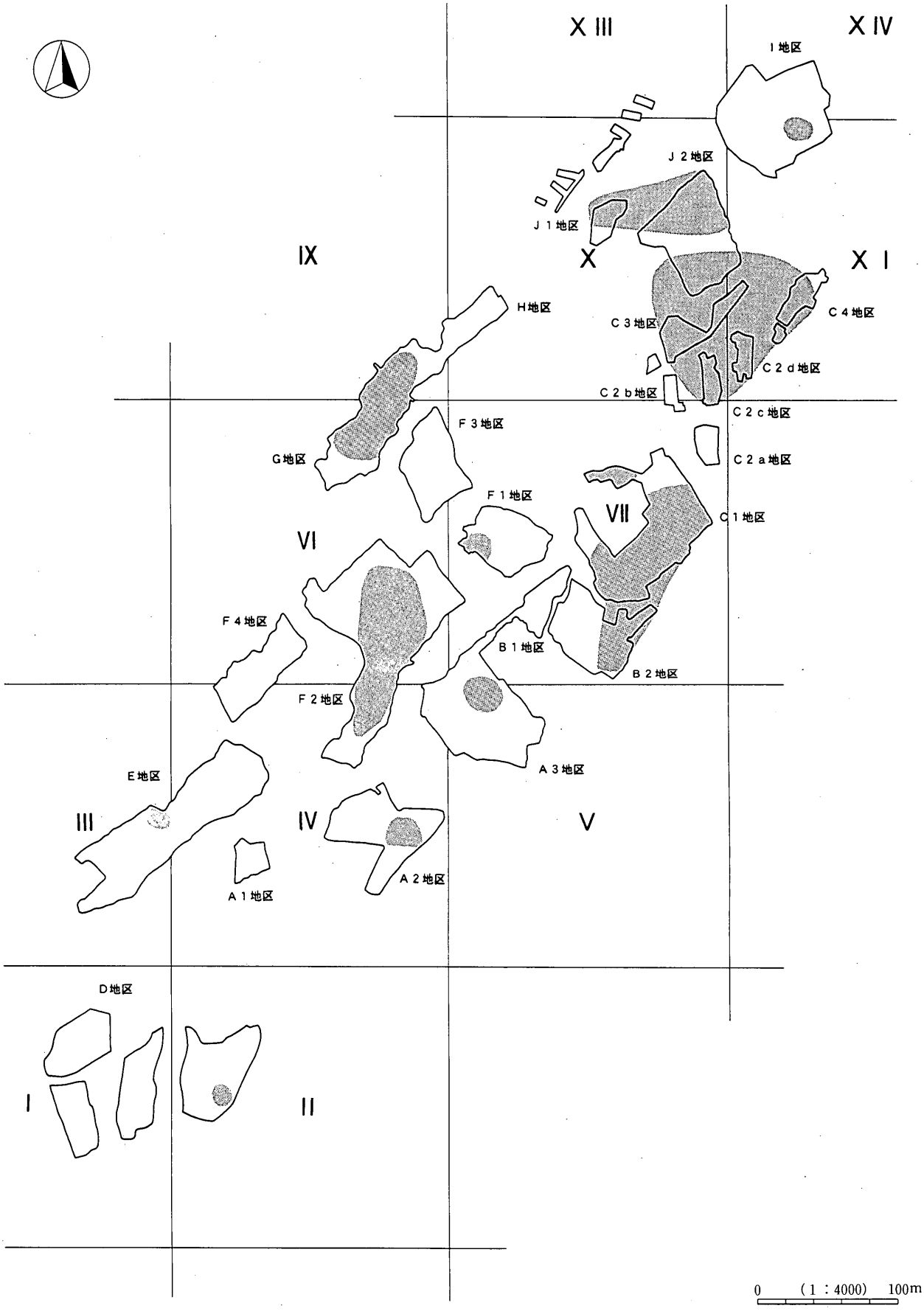
ＳＢ３（全体図）

位置：Ｇ地区　VID８　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｓ34Ｅ

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｄ　**規模**：5.6×(3.2)m

構造：北東部約2/3残存。壁面も浅く不明瞭。床面は全体的にやや硬化する。カマドは南東壁の東隅に設置。燃焼部奥壁が住居壁外側に若干張り出す。袖は残存せず、礫など炉体の痕跡はみられない。柱穴は南東壁面の中央部に２本を近接して配置。北西側は壁面よりやや内側に配置する。

遺物：土器(図版166)　灰釉陶器片を主体に少量出土。１は碗で、底部に回転ナデを施す。２は白磁片で、IV類である。このほか、鉄滓が少量出土した。



第17図　平安時代～中世前期遺構分布状況

時期：III期。

ＳＢ４（全体図）

位置：Ｇ地区　VID19　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｅ３Ｓ

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｄ　**規模**：4.8×(2.8)m

構造：北東のコーナー付近のみ残存。東壁の東北隅寄りに被熱面のみ残存しており、カマドが付設されたに推測される。

遺物：土器(図版166)　灰釉陶器片と山茶碗片が少量出土。１は小皿で、底部に回転糸切り痕が残る。２は灰釉陶器碗の底部片である。

時期：平安時代～中世前期。

ＳＢ５（図版153　PL16）

位置：Ｆ２地区　VIN24　**切り合い**：なし。　**方位**：E26N

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｄ　**規模**：(4.3)×(6.5)m

構造：削平で南西側半分を失う。残存床面は全面硬化している。カマドは３基検出された。カマド１は本住居跡の最終カマドで、東壁の北隅に付設され、角礫を芯材として粘質土で固めて構築されている。カマド２は東壁の中央に位置し、作り替えの際に火床上部に黄褐色土を貼り、床下に封じている。カマド３は東壁の東隅に位置し、上部に黄褐色土を貼って床下に封じられている。ピット１と５は約40cmの深さを有しており主柱穴の可能性がある。このほか中央部付近では焼土分布範囲１基が検出されている。

遺物：土器(図版166)　灰釉陶器片を主体に出土。１・２は碗Ｉで、１の底部に回転糸切り痕が見られる。３は碗IIで、底部に回転ヘラ削りを施す。カマドより出土。４～11は皿で、10は底部に回転ナデ、それ以外の皿には回転ヘラ削りが施されている。12は緑釉陶器片で、胎土は青灰色で硬質、釉の色調は濃緑色、ツヤがあり釉着も良好。13は須恵器甕片、14は鉢片、15・16は壷片である。このほか、鉄製品では刀子片が出土した。

時期：III期。

ＳＢ６（図版153　PL16）

位置：Ｆ１地区　VIIK12　**切り合い**：NR3を切る。　**方位**：N45E

形態：Ａ　**カマド位置**：Ａ　**規模**：5.3×5.3m　**床面積**：28.09m²

構造：NR3埋土を掘り込む部分に貼り床が施される。カマドは２基検出。カマド１は北東壁の中央に付設。両袖部には袖石抜き取り痕らしき窪みが認められる。カマド２は南西壁の南寄りに付設。両カマドとも床面上で検出されており、明確な時期差は推測できない。主柱穴はピット１・２・３と推測される。特にピット１・２は北東壁のカマド１に近接して検出された。ピット５の規模は他の３基と一致する。

遺物：土器(図版166　PL61)　灰釉陶器片を主体に出土。１～６は碗Ｉ、７～９は碗II、10～20は皿である。上記碗・皿類の底部には１～４・８・10・11・16・18～20が回転ヘラ削り、５・９には中央に回転糸切り痕を残して回転ヘラ削り、12が回転糸切り後ナデ、７・13・15・17には回転糸切り痕が見られる。18には「二」の墨書が見られる。21は緑釉陶器片で、胎土は灰白色でやや硬質、釉の色調は緑～淡緑色、ツヤは無く、釉着はまだらである。22は壷胴部片で、胴部全体に回転ヘラ削りを施す。このほか、石器では砥石、鉄製品では紡錘車の紡軸片が出土した。

時期：III期古相。

ＳＢ８（図版154　PL16）

位置：Ｆ２地区　VIT16・17　**切り合い**：NR3を切る。　**方位**：N40E

形態：D　**カマド位置**：A　**規模**：(2.7)×3.7m

構造：削平により南西部を失う。貼り床はない。カマドは北東壁の中央部に付設。燃焼部奥壁が住居壁の外側に張り出す。左右の袖石と火床最奥部に支脚石が検出された。柱穴は検出されない。

遺物：土器(図版167　PL62)　カマド付近の内外から土師器甕片(１)が散乱して出土。他の土器片はほとんど見られない。１は長胴甕で、口縁部が短く外反し、端部に面取りを施す。整形は口縁部が粗い横ナデ、胴部外面は工具によるナデ、内面は縦方向のナデが見られる。

時期：平安時代？。

ＳＢ９（全体図）

位置：Ｆ２地区　VIT22・23　**切り合い**：NR3を切る。　**方位**：不明

形態：D　**カマド位置**：F　**規模**：(2.0)×(2.0)m

構造：削平により東～南部を失う。北東壁の一部のみ残存。カマドは検出されない。ピット間に長方形の掘り込みがあり、肩の一部が被熱赤変している。

遺物：土器片が数片出土。

時期：平安時代？。

ＳＢ10（全体図）

位置：Ｆ２地区　VIT21　**切り合い**：NR3を切る。SK5に切られる。　**方位**：N20E

形態：D　**カマド位置**：D　**規模**：(2.1)×(2.8)m

構造：北西隅部～北東壁部のみ残存。カマドは北東壁の西寄りに付設される。焼土と炭、袖土と思われる黄色土粒の広がりがみられる。床面～埋土に炭化材が目立って出土。

遺物：土器片が数片出土。

時期：平安時代？。

ＳＢ11（図版154）

位置：Ｆ２地区　VIY６　**切り合い**：NR3を切る。　**方位**：E40S

形態：D　**カマド位置**：D　**規模**：6.2×(2.7)m

構造：北東部の約1/2残存。カマドは南東壁の東隅寄りに付設される。短く急に立ち上がる煙道をもつ。左袖には石の抜き取り痕と思われる窪みがある。主柱穴はピット１・３と推測され、ピット１は北東壁中央部の壁面よりやや離れて位置する。

遺物：土器(図版167)　カマド周辺から山茶碗片を主体に少量出土。１は山茶碗、２・３は小碗で、いずれも底部に籾痕が見られる。４・５は灰釉陶器の壷である。このほか、西壁際床面で鉄滓が出土。

時期：Ⅳ期新相。

ＳＢ13（図版154）

位置：Ｇ地区　VID21　**切り合い**：なし。　**方位**：S35E

形態：D　**カマド位置**：D　**規模**：6.3×(5)m

構造：北東部の約1/2残存。全体的な貼り床はないが、部分的に硬化している。カマドは南東壁の東隅寄

りに付設される。燃焼部奥壁が住居壁外側に張り出す形態である。煙道は確認されない。右袖石(大形板状礫)のみ残存し、左は袖石抜き取り痕がある。焚き口部に窪みがあり、支脚抜き取り痕の可能性もある。検出時にはカマド上面の埋土中に多数の角礫が溜まっており、何らかの廃棄行為が推測される。主柱穴はピット１～４と推測され、４本とも太さ20cm程の柱痕が観察された。特にピット１・２は南東壁の中央部に近接して検出された。このほか、本住居跡の南東壁外方１mに火床面が１基と、細長いピットが検出されている。

遺物：土器(図版167)　灰釉陶器片と山茶碗片が出土。１は灰釉陶器碗片、２・３は山茶碗片、４～８は小碗片で、３・８には籾痕がみられる。９は灰釉陶器碗片で、底部に回転ヘラ削りが見られる。１・９は混入品と推測される。10は白磁片で、IV類である。鉄製品(図版185　PL64)　鉸具(３・４)が出土。

時期：IV期。

ＳＢ14（全体図）

位置：Ｇ地区　VID21　**切り合い**：なし。　**方位**：不明

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｆ

構造：北東辺の一部が残存。残存床面はやや硬化している。カマドは明確なものが検出されなかったが、残存辺近くに被熱痕が１基検出された。

遺物：土器(図版167)　埋土中より灰釉陶器耳皿が１点出土した。耳皿(１)は、ていねいな作りで、釉が内外の全面に施される。

時期：II期？。

ＳＢ15（全体図）

位置：Ｆ２地区　VIX３　**切り合い**：NR3を切る。　**方位**：W35N

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｆ　**規模**：(3.0)×(3.5)m

構造：北西コーナー部のみ残存。床面にはNR3に重なる部分に貼り床を施す。カマドは北西壁に付設。袖石の抜き取り痕を検出。カマド部分は浅く広く掘り窪められており、火床も失う。カマド埋土の焼土中には焼骨片も混じる。

遺物：土器(図版167)　カマド周辺より土師器片が集中して出土。１～３は甕、４は鉢片か？。

時期：平安時代？。

ＳＢ17（図版155）

位置：Ｆ２地区　IVD14　**切り合い**：NR3を切る。　**方位**：E20S

形態：Ａ　**カマド位置**：Ａ　**規模**：3.0×(2.9)m

構造：北東側約2/3残存。カマドは南東壁中央に付設。カマド構築部分は台状に若干高くなる。袖石抜き取り痕あり。柱穴は不明。

遺物：土器(図版167)　埋土中より灰釉陶器片を主体に出土。１は碗で、胴部に削り痕はみられない。２は碗IIで、底部には回転糸切り痕がみられる。３は皿で、釉は漬け掛けで、整形は良好。底部には回転ヘラ削り痕がみられる。混入品と推測される。４は皿で、底部に回転糸切り痕がみられる。

鉄製品(図版185　PL64)　中央床面付近で刀子(５)が出土。

時期：III期新相。

ＳＢ41（図版155　PL16）

位置：Ｅ地区　ⅢＯ14・15　**切り合い**：SB40(縄文)を切る。　**方位**：Ｎ35W

形態：Ｂ　**カマド位置**：Ａ　**規模**：4.5×(4.2)m

構造：南西壁部のみ削平を受ける。床面は全面にやや硬化している。カマドは北西壁中央に付設。両側にピット１・４が存在する。燃焼部奥が住居壁外側に張り出し、中央部に小ピット(支脚痕か？)が存在する。主柱穴はピット２・３・11・12と推測され、ピット９は出入口施設に関するものと推測される。ピット２・３はカマドに近接し、11・12は出入り口側の壁の中央部に近接して位置する。

遺物：土器(図版167　PL61)　灰釉陶器片・土師器片・須恵器片・黒色土器片が出土。１～３は黒色土器坏で、内面に黒色処理を施す。４は須恵器有台坏片で、底部には回転ヘラ削り痕がみられる。５は灰釉陶器碗で、整形が粗く混入品と推測される。６は須恵器蓋片。７～９は土師器甕片で、７は胴下端に静止ヘラ削り、８は内外面にカキメ、９はハケがみられる。このほか、黒色土器鉢片も出土した。

時期：Ⅰ期。

ＳＢ59（図版156　PL16）

位置：Ａ２地区　ⅣＯ21　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｎ30Ｅ

形態：Ａ　**カマド位置**：Ａ　**規模**：4.9×4.9m　**床面積**：24.01m²

構造：壁はほぼ垂直で約40cm残存する。カマドは北東壁中央に付設。袖部は約10cmほど残存。燃焼部の窪みは浅い。柱穴はピット２・３・12・15と推測されピット13は出入口施設に関するものと推測される。２・３はカマドに近接し、12・15は出入り口側の壁の中央部に近接して位置する。

遺物：土器(図版168)　灰釉陶器片・土師器片・須恵器片・黒色土器片が出土。１は須恵器坏で、底径が4.8cmと小さく、形態は逆台形状を呈する。２は黒色土器坏、３は黒色土器皿である。４は須恵器有台坏、５は須恵器壷底部、６は灰釉陶器瓶の把手片である。７～９は土師器甕片である。鉄製品(図版185　PL64)　住居南西部で鉄鎌(１)が出土。

時期：Ⅰ期。

ＳＢ63（図版156　PL16）

位置：Ａ３地区　ＶＡ３・４　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｎ35W

形態：Ｃ　**カマド位置**：Ｂ　**規模**：6.2×(6.5)m

構造：北西部約1/3が削平を受ける。埋土もほとんど削平されている。本住居跡では床面を２枚検出している。所見によると、第１床面は住居東壁の最もカマド寄りのラインまでと推測され、テラス状遺構はこの時点で存在する。第２床面は、第一床面の範囲に貼り床を施して作られ、この時点で壁周辺のピット(７～10・17～20)と周溝が作られる。カマド上部の溝は後世のものと推測される。

遺物：土器(図版168)　灰釉陶器片を主体に周溝付近で多く出土。１～３は碗Ⅰ、４は碗Ⅱ、５は碗Ⅲ、６～８は皿である。底部には、１～３・６・８は回転ヘラ削り、４・５・７は回転糸切り痕がみられる。９は土師器碗の底部で内面の黒色処理はみられない。10は灰釉陶器碗で「二」の墨書がみられる(PL62)。11は耳皿片である。12は玉縁の灰釉陶器碗で、混入品の可能性がある。13は緑釉陶器片で、胎土は横灰色のやや硬質、色調は濃緑色で、ツヤがある。鉄製品(図版185　PL64)　苧引鉄(６)と鉄滓が埋土中より、小刀(７)がカマド左袖部より出土した。

時期：Ⅲ期。

ＳＢ65（図版157　PL17）

位置：Ｂ２地区　ⅦW15・ⅦX11　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｓ25W

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｄ　**規模**：6.5×(3.5)m

構造：東南部側約1/2が残存。カマドは南西壁東隅に付設され、周辺に袖石と推測される礫が見られる。本住居跡埋土からは多くの炭化材・焼土・拳大の礫が出土している。柱穴は不明。

遺物：土器(図版168)　灰釉陶器片を主体に出土。１・２は碗Ｉで、１の底部には回転糸切り痕がみられる。３は壺の頸部片である。鉄製品(図版185)　用途不明品(２)が出土。

時期：III期新相。

ＳＢ66（図版157　PL17）

位置：Ｂ２地区　ⅦX６　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｅ19Ｓ

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ａ　**規模**：(2.8)×6.5m

構造：東部側約1/3が残存。カマドは東壁中央に付設される。カマド周辺の埋土中に集中して拳大の礫が出土。いずれも床面より浮いている。

遺物：土器(図版168)　カマド周辺や礫の中から灰釉陶器破片を主体に出土。１は碗、２・３は皿である。いずれも胴部まで回転ヘラ削りを施し、整形も良好である。

時期：II期。

ＳＢ67（図版158　PL17）

位置：Ｂ２地区　ⅦＳ16・21　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｓ16W

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｄ　**規模**：4.0×(2.5)m

構造：東部側約2/3が残存。部分的に貼り床を検出。カマドは南壁の東端に付設される。燃焼室奥壁が若干外に張り出す。両袖部は列をなして石が確認され、奥の天井石も残存する。柱穴は確認できない。

遺物：土器(図版168)　灰釉陶器片・山茶碗片が出土。１は灰釉陶器碗片で底部に回転ヘラ削り痕が見られる。２は山茶碗片で、高台の張り付けも粗く、籾痕がみられる。３は灰釉陶器碗で整形が良好であり混入品と推測される。

時期：IV期。

ＳＢ68（図版158）

位置：Ｂ２地区　ⅦＳ18・19　**切り合い**：なし。　**方位**：W40Ｓ

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｄ　**規模**：9.7×(3.5)m

構造：南東部側約1/3が残存。カマドは南西壁の東隅に付設される。左袖部が若干残存する。袖石などは明確に残らない。カマドからやや離れて、被熱痕を検出。主柱穴はピット１・４・６を想定したいが、いずれも浅い。埋土中には拳大の礫も若干混じる。

遺物：土器(図版168)　灰釉陶器片と山茶碗片が出土。１・２は山茶碗で、１には底部に板状圧痕と籾痕がみられる。３は灰釉陶器碗で、底部が厚く、回転糸切り痕がみられる。４～８は小碗で、４は底部に板状圧痕と糸切り痕、５～８の底部には回転ナデがみられる。10・11は灰釉陶器の耳皿で、いずれも口縁部にヒダを有する。11は10より口径がやや大きい。灰釉陶器・山茶碗の産地については、１が美濃、２・３・７が瀬戸、６が猿投の可能性がある。

時期：IV期。

ＳＢ69（全体図）

位置：Ｃ１地区　ⅦM23・24　**切り合い**：なし。　**方位**：不明

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｆ　**規模**：(6.0)×(3.7)m

構造：北東側約1/2残存。ほとんど削平されており、床面の広がりをわずかに確認。カマドも未検出。

遺物：土器(図版168)　灰釉陶器片を主体に出土。１・２は碗で、３は皿である。１は口径に比べて器高が低い形態を呈する。２・３は整形が良好で、高台も細くていねいに貼り付けている。施釉法はいずれも漬け掛け。

時期：II期。

ＳＢ72（全体図）

位置：Ｃ１地区　ⅦN21・22　**切り合い**：なし。　**方位**：不明

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｆ　**規模**：5.1×(2.2)m

構造：北東側約1/3残存。削平がはげしく詳細は不明。

遺物：土器(図版169)　北東壁付近で床面から浮いた状態で土師器甕(１)の上半部破片が出土。胴部内外面にハケを施す。

時期：平安時代？。

ＳＢ73（図版159）

位置：Ｃ１地区　ⅦＳ３・４　**切り合い**：なし。　**方位**：E17S

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｄ　**規模**：5.2×(2.6)m

構造：北東側約1/3残存。カマドは東壁北端に付設され、周囲には貼り床が検出された。両袖石は比較的残存する。カマド右側にも礫が散見されるが、構築材か、投棄されたものかは不明。

遺物：土器(図版169)　灰釉陶器片を主体に出土。１・２は碗で、１は釉がほとんどみられない。２は整形が雑である。石器(図版184)　埋土中より砥石(1・4)が出土。鉄製品(図版185)　カマド右袖より刀子(８)が出土。

時期：IV期古相。

ＳＢ74（全体図）

位置：Ｃ１地区　ⅦN23　**切り合い**：なし。　**方位**：不明

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｆ　**規模**：(2.3)×(2.3)m

構造：北東隅のみ残存。削平がはげしく詳細は不明。

遺物：灰釉陶器片が少量出土。

時期：平安時代か？。

ＳＢ75（図版159　PL17）

位置：Ｃ１地区　ⅦN８　**切り合い**：なし。　**方位**：N35W

形態：Ｂ？　**カマド位置**：Ａ　**規模**：5.2×(3.0)m

構造：北東側約1/2残存。カマドは北西壁中央に付設。袖などは確認できないが、全体に焼土ブロックと拳大の礫が散乱する。主柱穴はピット１・３と推測される。

遺物：土器(図版169)　灰釉陶器片を主体に出土。１・２は碗で、３は皿である。１・３は底部に回転糸

切り痕を残し、整形も粗い。１の底部には墨書がみられる。「六万」か？(PL62)。２は胴部まで回転ヘラ削りを施し、胎土・整形も非常に良好。１・３と２には明らかに時期差が認められるが、出土状況等から住居跡の時期を決定するのは難しい。石器(図版184)　砥石(７)が出土。

時期：II期かIII期新相。

ＳＢ76（全体図）

位置：Ｃ１地区　VIIO12　**切り合い**：なし。　**方位**：不明

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｆ　**規模**：4.5×(1.0)m

構造：北東側壁が若干残存。削平がはげしく詳細は不明。カマドも検出されない。

遺物：土器(図版169)　南東隅において灰釉陶器が出土。１～３は碗で、いずれも底部には回転ヘラ削り痕がみられる。３には「本」の墨書がみられる(PL62)。

時期：III期。

ＳＢ77（全体図）

位置：Ｃ１地区　VIIO６・11　**切り合い**：なし。　**方位**：N17W

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｆ　**規模**：4.4×(2.5)m

構造：北東側約1/3残存。削平がはげしく詳細は不明。北西壁中央の焼土がカマドの痕跡と推測される。

遺物：土器(図版169)　灰釉陶器片を主体に出土。１は碗、２は皿、３は壷底部片である。１の底部には回転糸切り痕がみられ、整形も粗い。

時期：III期新相。

ＳＢ78（図版159　PL17）

位置：Ｃ１地区　VIIO１　**切り合い**：なし。　**方位**：N29W

形態：Ａ？　**カマド位置**：Ａ　**規模**：5.4×(3.1)m

構造：南西側約1/2残存。カマドは北東壁の中央に付設される。被熱痕と袖の一部が残存。カマド周辺では床面より浮いて拳大の礫が埋土中に集中的に出土しており、何らかの廃絶行為が推測される。右袖部で直径約80cmのピット３を検出した。埋土は粘性のある黒褐色土。主柱穴はピット１・２・４・５と推測される。１・２はカマドに近接し、４・５はカマド側とは反対側の壁の中央部に近接して位置する。

遺物：土器(図版169)　灰釉陶器片を主体に出土。１～４は碗で、５～８は皿である。いずれも胴下部に回転ヘラ削りはみられず、底部のみ１～５に回転ヘラ削り、６～８に回転糸切り痕がみられる。墨書土器は、２の「元」？と、６の「二」がある。９は清郷鍋である(PL62)。このほか、灰釉短頸壺片と羽釜片が出土した。

時期：III期。

ＳＢ79（図版160）

位置：Ｃ１地区　VIIJ21　**切り合い**：なし。　**方位**：N15W

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｂ　**規模**：4.8×(4.0)m

構造：東側約2/3残存。カマドは北西壁中央よりやや左コーナー寄りに位置する。両袖の痕跡が若干残る。カマド内部には小礫が散乱していた。右袖に近接して床下から旧火床、住居跡東南コーナーで被熱痕が検出された。主柱穴はピット１・２・７・８と推測される。

遺物：土器(図版169)　カマド周辺から灰釉陶器片を主体に出土。1は灰釉陶器皿、2は碗で、いずれも整形がていねいで、胴部に回転ヘラ削りを施し、胎土も緻密である。3・4は土師器甕である。このほか、黒色土器碗底部片も出土した。鉄製品(図版185)　埋土中より茎部の曲った刀子(9)が出土。
時期：II期。

ＳＢ80（図版160　PL17）
位置：Ｃ１地区　ⅦＨ８・９　**切り合い**：SB81と切り合うものの、先後関係は不明。　**方位**：Ｎ９Ｅ
形態：Ｄ　**カマド位置**：Ａ　**規模**：4.1×(3.8)m
構造：東側約2/3残存。床は比較的堅緻。カマドは北壁中央部に付設。袖石と支脚を検出。燃焼部奥壁はSKにより破壊される。東～南壁には周溝を検出。幅約20cmで深さは約20cm。主柱穴は確認できない。
遺物：土器(図版169)　灰釉陶器片を主体に出土。1・2は碗、3は皿で、いずれも整形が粗く底部に回転糸切り痕がみられる。2は底部内面に「元」？の墨書、3は底部内外面に「本」の墨書がみられる。
時期：III期新相。

ＳＢ81（図版160　PL18）
位置：Ｃ１地区　ⅦＨ９　**切り合い**：SB80と切り合うものの、先後関係は不明。　**方位**：Ｓ28Ｅ
形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｄ　**規模**：4.3×(3.9)m
構造：東側約1/3残存。カマドは南東壁東端に付設。遺構中央部西寄りの位置にも被熱痕を検出している。ピット2・3は40cmの深さがあり、主柱穴の可能性がある。
遺物：灰釉陶器片が少量出土。
時期：平安時代？。

ＳＢ83（図版160　PL18）
位置：Ｃ１地区　ⅦＨ５・10　**切り合い**：なし。　**方位**：N30W
形態：Ｂ？　**カマド位置**：Ａ　**規模**：4.0×(2.0)m
構造：北東側約1/2残存。カマドは北西壁中央部に付設。袖部は若干残存。周溝は北東コーナー部から東壁に沿って検出。幅10cm、深さ10cmを測る。
遺物：土器(図版170)　カマド右袖付近に土師器甕片が小礫と共に集中的に出土。1～3は土師器甕片で、3にはカキメがみられる。このほか、須恵器坏片と土師器碗片が出土した。
時期：Ⅰ期。

ＳＢ84（図版161　PL18）
位置：Ｃ１地区　ⅦＩ６・11　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｓ22Ｅ
形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｄ　**規模**：6.1×(3.0)m
構造：南東側約1/3残存。残存床面は堅緻。カマドは南壁の東端に付設。両袖の痕跡がわずかに残る。削平を受けた西半部ではピットが「Ｌ」字状に検出されており(6～13)、柱穴の可能性がある。
遺物：埋土中より出土。土器(図版170)　灰釉陶器片・山茶碗片が出土。1・3は灰釉陶器碗、4は皿で、いずれも整形が粗く、4の底部には回転糸切り痕がみられる。5は土師器甕底部片。2は山茶碗で、底部に籾痕がみられる。混入品と推測される。
時期：III期新相。

ＳＢ85（図版161　PL18）

位置：Ｃ１地区　ⅦＩ６　**切り合い**：なし。　**方位**：N16W

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｂ　**規模**：4.8×(4.0)m

構造：東側約1/3残存。残存床面は堅緻。カマドは北壁の中央西寄りに付設。

遺物：土器(図版170)　灰釉陶器片を主体に出土。２は碗、１は皿で、いずれも整形が粗く、底部に回転ヘラ削り痕がみられる。

時期：Ⅲ期新相。

ＳＢ95（旧２号竪穴住居跡　図版155　PL18）

位置：Ｄ地区　ⅡＫ10　**切り合い**：なし。　**方位**：不明

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｆ　**規模**：5.5×(2.9)m

構造：東側約1/2残存。カマドは確認出来ない。主柱穴はピット１(深さ約50cm)と２(約30cm)と推測される。ピットの上面で角礫が検出されているが、住居跡に伴うかは不明。

遺物：土器(図版170)　灰釉陶器片が少量出土。１・２は碗で、いずれも整形が粗く、底部に回転糸切り痕を残す。このほか、刀子片と鉄滓が出土した。

時期：Ⅲ期新相。

ＳＢ102（図版162　PL18）

位置：Ｊ１地区　ＸＨ15・20、ＸＩ11・16　**切り合い**：SB105を切る。　**方位**：N29W

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ａ　柱：Ｄ　**規模**：(6.7)×13.7m

構造：北側約1/2残存。カマドは北壁中央に付設。被熱痕のみ確認。カマド付近からは床より浮いた状態で拳大の焼けた礫が集中して出土。また住居跡北東隅付近には炭化材と焼土が広がり、それ以外の部分では焼土はほとんどみられない。北壁カマドより西側にはテラス状の段が存在する。検出ピットはいずれも浅く、主柱穴は不明。

遺物：大半が炭化物と焼土の分布範囲からの出土である。特に北東隅には約15cmの堆積がみられ、その中から山茶碗１点(10)、小碗と小皿が約10点、青磁皿１点(15)が集中して出土した。カマド付近の焼土範囲からは緑釉陶器片(11)、白磁片(14)が出土した。土器(図版170　PL61)　山茶碗片を主体に出土。１～３は小碗で、１・３に籾痕がみられる。４～９は小皿で、５の底部に板状圧痕がみられる。10は山茶碗で、胴部が張り、底部に籾痕がみられる。上記山茶碗・小碗・小皿の産地については、尾張産の可能性がある。12は灰釉陶器片で、判読不能の墨書がみられる。11は緑釉陶器で、胎土は灰白色でやや硬質、色調は淡い黄緑色でツヤあり、釉着は不均質である。11・12は混入品と推測される。13は白磁Ⅳ類。14は白磁Ⅴ類である。15は龍泉窯系青磁皿Ⅰ類で底部内面に劃花文がみられる。16は山茶碗系の鉢で、口縁端部に面を取り、胴下部と底部には回転ヘラ削り痕がみられ、高台には籾痕がつく。鉄製品(図版185)　釘(12)と用途不明品(13)が出土。銅製品(図版184)　蓋状の用途不明品(１)が出土。このほか羽口片、鉄滓が融着した小皿片、刀子片や鉄滓が出土した。玉類(図版184)　管玉(２)が１点出土したものの、本住居跡に伴うかどうかは不明。

時期：Ⅳ期新相～Ⅴ期。

ＳＢ111（図版163　PL18）

位置：Ｊ２地区　ＸＪ８　**切り合い**：なし。　**方位**：不明

形態：D　**カマド位置**：F　**規模**：(4.5)×(4.3)m
構造：南東隅約1/4残存。北西部はプランを把握したものの、人頭大の礫が大量に流れ込み、床面を確認することができなかった。南東隅に焼土範囲が検出されたが、カマドに伴うかは不明。
遺物：土器(図版170)　ピット２の壁面から灰釉陶器片が集中して出土。１～４は碗Ⅰ、５は碗Ⅱ、６は碗底部、７・８は皿である。底部には１・４・７に回転ヘラ削り痕、２・３・８に回転糸切り痕が見られる。９・10は青磁片で外面に蓮弁文が見られる。11は白磁片である。９～11は混入品と推測される。鉄製品(図版185　PL64)　鉄鏃(10)と鉄製紡錘車の紡輪(11)が出土している。
時期：Ⅲ期。

ＳＢ113（図版164　PL19）
位置：Ｊ２地区　ＸＯ22　**切り合い**：周辺のSKと切り合うものの、関係は不明。　**方位**：Ｓ21Ｅ
形態：Ａ？　**カマド位置**：Ｄ　**規模**：8.9×(7.5)m
構造：北東側約2/3残存。埋土中には炭化物と焼土が多く含まれ、拳大の礫も一定量出土している。南東隅に残りの良い被熱痕が存在し、カマドの痕跡と推測される。ピットは幾つか検出されるが、規模も不規則で、主柱穴は不明。
遺物：土器(図版171　PL61・62)　山茶碗片を主体に出土。１～４は山茶碗で、いずれも胴部に張りがあり、底部に籾痕がみられる。５～11は小碗、12は小皿である。５～７、９・10は底部に籾痕があり、８・11にはみられない。13～16は白磁で、13～15はⅣ類、16は白磁皿Ⅷ類で、底部内面に草花文が描かれ、内面屈曲部には沈線状の段を有する。このほか、白磁９片が出土した。17・18は短頸壺で、17は無釉である。石器(図版184)　砥石が２点(3・6)出土。鉄製品(図版186　PL64)　雁股の鉄鏃(14)・鎌(15)・小刀(16)が出土。このほか鉄滓も出土した。土製品(図版184)　紡錘車(１)が出土。
時期：Ⅳ期新相。

ＳＢ114（図版163　PL19）
位置：Ｃ３地区　ＸＴ22・23　**切り合い**：なし。　**方位**：N30W
形態：Ａ　**カマド位置**：Ａ　**規模**：3.5×3.6m　**床面積**：12.6m²
構造：カマドは北壁の中央に付設。被熱痕がわずかに確認できた。柱穴などは確認できない。
遺物：土器(図版170　PL62)　カマド手前に土師器長胴甕(１)が、つぶれた状態で出土。約1/2残存。
時期：平安時代？。

ＳＢ122（PL19）
位置：Ｉ地区　ＸＩＢ６　**方位**：不明
形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｆ　**規模**：(2.9)×(5.0)m
構造：南東側の床面約1/2残存。削平がはげしく詳細は不明。東南隅に被熱痕と拳大の礫が検出されており、カマドの可能性がある。
遺物：土器(図版171)　灰釉陶器片を主体に出土。１は碗Ⅱ、２は碗底部片で、１は回転ヘラ削り痕、２は回転糸切り痕がみられる。２の底部外面には「六」の墨書がある。
時期：Ⅲ期。

ＳＢ128（全体図）

位置：Ｊ２地区　ＸＪ７　**切り合い**：なし。　**方位**：不明

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｆ　**規模**：(3.8)×(2.5)m

構造：東側の床面約1/3残存。削平がはげしく詳細は不明。

遺物：土器(図版171)　山茶碗(１)が出土した。胴部に張りがあり、底部に籾痕がみられる。

時期：Ⅳ期新相～Ⅴ期。

ＳＢ129（図版165　PL19）

位置：Ｃ３地区　ＸＸ５・ＸＹ１　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｎ４Ｗ

形態：Ａ　**カマド位置**：Ａ？　**規模**：5.2×5.2m　**床面積**：27.04m²

構造：プラン全体が床面から約20cmの高さまで残存。北壁中央部に２ヵ所被熱痕があり、カマドの付設場所と推測される。新旧関係は不明。ピットは１・２がカマドに近接し、４・５が反対側の壁面中央に近接して位置しており、主柱穴の可能性がある。遺構検出時から床面より浮いた状態で大量の焼土と炭化材、そして灰釉陶器片が出土。炭化材の方向に規則性はない。

遺物：土器(図版171)　灰釉陶器片を主体に大量に出土。接合する個体は少なく、貯蔵具は少量出土するだけである。１～４は碗Ⅰ、５～８は碗Ⅲ、９は耳皿、10～18は皿である。底部には１・２・７・12・14・18に回転ヘラ削り、３・５・６・９～11・13・15～17には回転糸切り痕がみられる。19は壺胴部である。鉄製品(図版186　PL64)　鉄鏃２点(18・19)、苧引鉄(17)が出土。

時期：Ⅲ期新相。

ＳＢ131（図版165　PL19）

位置：Ｃ４地区　XIQ２　**切り合い**：SB144(縄文)を切る。　**方位**：Ｎ３Ｅ

形態：Ｃ　**カマド位置**：Ｄ　**規模**：6.0×5.0m　**床面積**：30m²

構造：プラン全体を検出。東壁は約60cmの深さで残存するものの、西壁は削平により10cm以下しか残らない。床面全面に炭化材、焼土が広がり、材は放射状に倒れている。カマドは北西隅に付設。袖石と支脚石を検出し、燃焼部には焼土塊も多く見られる。住居跡の西壁側では直径30cm程の平らな花崗岩が２個出土した。何らかの工作台の可能性がある。ピットはいずれも浅く、主柱穴は不明。

遺物：土器(図版171)　灰釉陶器片がカマド右側の北壁付近の床面中心に出土。１・２・５は碗、３・４・６は皿、７は耳皿である。底部には１・２・５・６に回転ヘラ削り、３・４・７には回転糸切り痕がみられる。

時期：Ⅲ期。

ＳＢ133（全体図）

位置：Ｃ２ｂ地区　ＸＹ23・24　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｅ３Ｎ

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｆ　**規模**：4.0×(2.5)m

構造：南側約1/2残存。東壁中央部に焼土を検出。カマド痕と推測される。ピットは検出されていない。

遺物：土器(図版172)　灰釉陶器片を主体に出土。１～３は灰釉陶器碗Ⅰで、１は底部中央に糸切り痕を残して回転ヘラ削り、２は胴部まで回転ヘラ削りがある。４～６は皿で、４の底部には回転ヘラ削り痕、５には回転糸切り痕がみられる。

時期：Ⅲ期。

ＳＢ134（図版164）

位置：Ｃ２ｃ地区　ＸＹ９　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｎ７Ｅ

形態：Ｂ？　**カマド位置**：Ａ　**規模**：5.3×(4.7)m

構造：東側約2/3残存。カマドは北壁の中央に付設される。焼土のみ残存。周囲に拳大の礫が散乱。主柱穴はピット１・３・５と推測される。カマドの右奥では検出されていないが、プランが若干張り出しており、柱穴が存在した可能性がある。東壁には小ピットが並んでおり、壁柱穴が存在したと推測される。

遺物：土器(図版172)　灰釉陶器片と土師器片が出土。１～３は碗Ｉで、いずれも胎土が緻密である。１・３は胴部まで削りを施し、３は内外面全面にていねいに施釉されている。４は碗II、５・６は碗IIIである。７～９は皿である。特に８・９は、胎土が緻密で整形も良好である。施釉法は漬け掛け。６・７は底部に回転糸切り痕を残し、整形も雑であるので、混入品と推測される。10は土師器甕底部片。このほか、底部内面にハケ塗りが見られる灰釉陶器片と、鉄滓も少量出土した。

時期：II期。

ＳＢ138（全体図）

位置：Ｃ２ｃ地区　XIＵ６・11　**切り合い**：なし。　**方位**：Ｓ５Ｅ

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｅ？　**規模**：3.7×(2.5)m

構造：東側約1/2残存。カマドは南壁東隅に付設。周囲に拳大の角礫が散乱。

遺物：土器(図版171)　灰釉陶器片が少量出土。１は碗で底部に回転糸切り痕がみられる。

時期：III期新相。

ＳＢ141（全体図）

位置：Ｃ３地区　ＸＸ10・ＸＹ６　**切り合い**：なし。　**方位**：不明

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｆ　**規模**：3.7×(2.0)m

構造：東側約1/2残存。カマドは確認できない。東壁にピットが３つ並ぶ。中央付近に拳大の礫がまとまって出土。

遺物：土器(図版171)　山茶碗片が少量出土。１・２は小碗で、２は底部に籾痕がみられる。鉄製品(図版186　PL64)　火打金２点(20・21)と刀子(22)が出土。このほか、鉄滓が出土した。

時期：IV期新相。

ＳＢ146（図版163　PL19）

位置：Ｃ４地区　ＸＩＱ８　**切り合い**：なし。　**方位**：不明

形態：Ｄ　**カマド位置**：Ｆ　**規模**：5.7×(3.6)m

構造：東側約1/2残存。南東隅に拳大の角礫が集中するが、明確な被熱痕は検出されない。近接して炭化物が広がるものの、壁から離れており、カマドとの関係は不明である。

遺物：土器(図版172)　礫集中部より灰釉陶器片・緑釉陶器片・土師器片が若干出土。１は碗Ｉで、口縁部内面に１条の沈線を入れる。３は碗底部片である。１・３の底部には回転糸切り痕がみられる。４は皿である。２は緑釉陶器碗で、南東隅より出土。略完形品で口縁部外面に１条の沈線を入れる。高台は高く外面がやや湾曲する。胎土は薄い青灰色で硬質、色調は緑色。釉着はやや不均質でツヤがある。高台部まで施釉が確認でき、底部内外面に三叉トチンの釉着痕が残る(PL62)。６は土師器甕片。５は小碗で、混入品と推測される。

時期：III期。

(3)　土坑

当該期の遺物が出土した土坑としてSK10（Ｆ１地区）とSK11（Ｆ２地区）がある（全体図）。しかし両土坑とも遺構の詳細は不明である。

SK10では須恵器坏(1)と土師器甕片(2)が出土した。須恵器坏は底部に回転糸切り痕が見られる。SK11では灰釉陶器皿(1)が出土した。底部には「満」と推測される墨書が見られる（図版172　PL62）。

2　遺構外出土遺物

土器（図版172）　１は小碗で、底部に籾痕が付く。時期はIV期新相。２～５は灰釉陶器で、いずれも底部に墨書が見られる。２は「十」、３は「二」、７・８は判読不能である。６～８は須恵器蓋である。９は須恵器坏底部片で、底部に回転ヘラ切り痕がみられる。６～９はいずれもＩ期以前の所産と推測される。10は緑釉陶器で、胎土は青灰色で硬質、色調は濃緑色で、ツヤはあまりない。底部外面～高台まで施釉される。11は灰釉陶器底部片で、赤褐色の付着物がみられる。12は清郷鍋、13は白磁IV類、14は古瀬戸前期様式四耳壷片である。

９がＡ地区、５がＢ地区、４・11・12がＣ地区、２・３・６～８がＦ地区、13がＧ地区、１がＨ地区、10がＪ地区、14が地区不明からの出土である。特にＩ期以前と推測される資料がＦ地区で集中的に発見されている。しかし、Ｉ期以前の明確な遺構は検出されていない。

第２節　安土桃山～江戸時代・時期不明

１　安土桃山～江戸時代

(1)　遺構の概要（第18図）

Ｃ３地区で礎石を有する建物跡と土抗群、Ｅ地区・Ｆ１地区で土坑群、Ｈ地区で墓を検出した。出土遺物は16世紀～17世紀代が中心である。上記以外の地区でも掘立柱建物跡が検出されているものの、遺物がほとんど出土しないため、時期を推測することができない。以下、地区別に紹介する。

(2)　Ｃ３地区の遺構

現水田耕土直下より遺構が３つの検出面に分かれて発見された(図版175)。いずれの検出面も茶褐色の砂質土で差はほとんど見られないものの、各検出面には明確な標高差が存在する。まず第１検出面でST20、続く第２検出面ではST21、そして第３検出面では10基の土坑を検出した。これら遺構から出土した遺物の時期はおよそ16世紀後半～17世紀代に収まる。Ｃ３地区は周囲が緩斜面であるものの、当該期遺構の検出面だけは平坦地であり、建物の建築時に整地を行い、廃絶後には水田として利用されたと推測される。遺構群が検出された平坦面にほぼ相当する現水田の面積は約500m²である。

ＳＴ20（図版176　PL20）

位置：ＸＳ20・25、ＸＴ16・21、ＸＸ５、ＸＹ１　**棟方向**：N11W　**面積**：約120m²

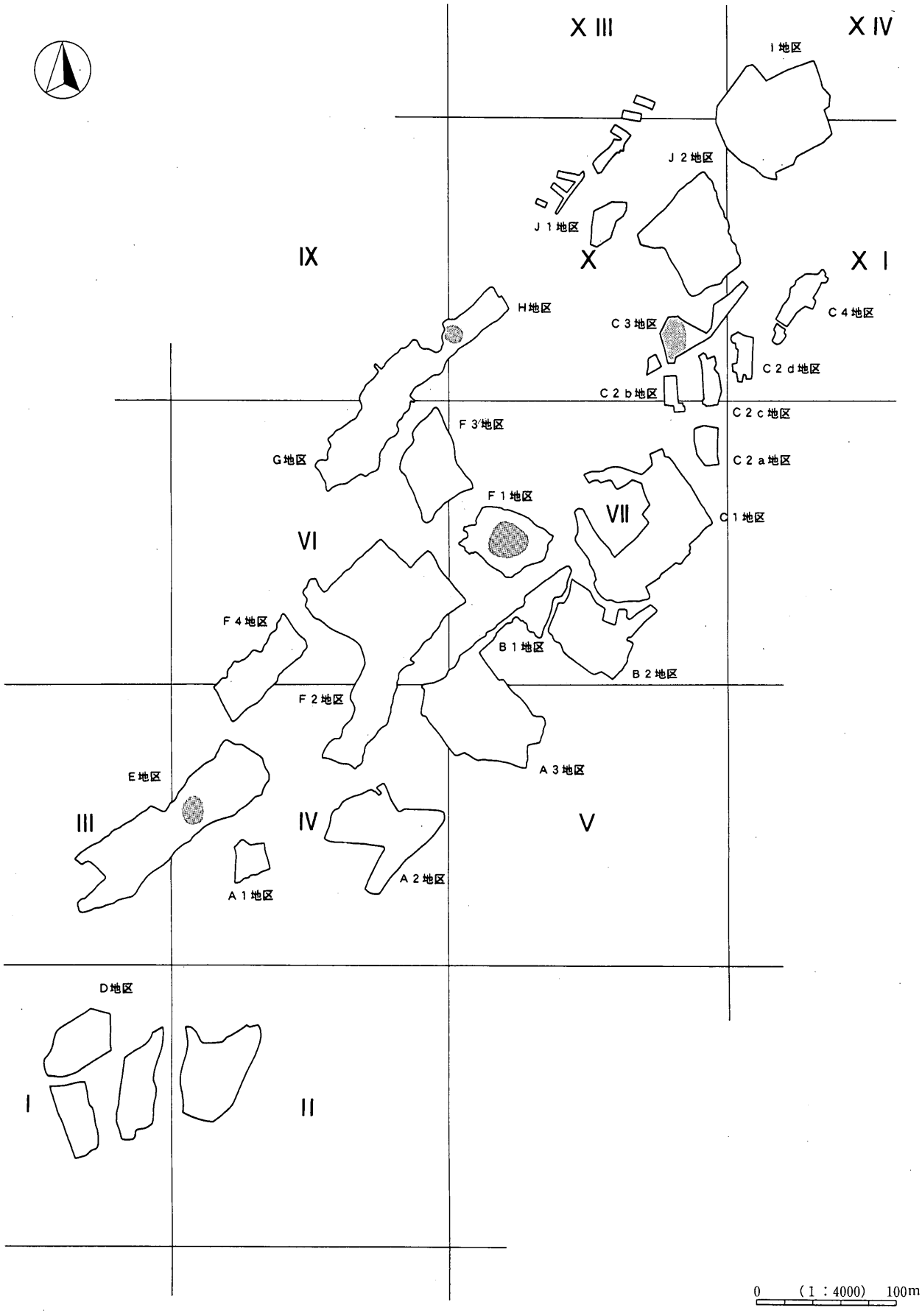
構造：ST20は礎石をもつ建物跡である。水田面と接して検出されたため、礎石が欠落している可能性があり、建物規模も推定である。建物跡認定は調査時に行い、整理段階で一部修正した。桁行は３間約12m、柱間寸法は北側から4.4、2.8、4.0mである。梁行は中央部の礎石が試掘時に１列分出土しているので、４間約8.2mである。柱間寸法は東側から３間分が２～2.4m、西端の１間のみ1.6mである。礎石の下部に明確な掘り込みはない。礎石の規模も直径20～60cmとばらつきがある。このほか、ST21西側には棟方向と並行する礎石が見られ、建物跡が西側に延びる可能性もある。地形的に見ると建物跡の東側に斜面が迫り、西側が谷部で開けるため、建物跡西面に庇状の構造を想定することも可能である。

遺物：土器(図版183　PL63)　建物跡検出面より陶磁器が若干出土した。１は瀬戸美濃の菊花皿で17世紀前半。２は本業焼の片口で17世紀中葉。３は肥前磁器の碗で17世紀後半(PL63)。鉄製品(図版187)　24は用途不明の棒状鉄製品である。

ＳＴ21（図版177　PL20）

位置：ＸＳ20・25、ＸＴ16・21、ＸＸ５、ＸＹ１　　**棟方向**：W10Ｓ

構造：ST21は礎石をもつ建物跡である。ST20の礎石を除去した後に検出を行ったところ、第１検出面より約20cm下で新たな礎石群を発見し、建物跡として調査した。棟方向が東西に延びる建物を想定したが、残存状況が悪く、想定した柱の位置に礎石が存在しないなど、構造の詳細は不明である。調査前のトレンチは第２検出面まで達していたと推測されるが、礎石の有無は不明である。礎石の下部に明確な掘り込みはない。礎石の規模は直径40cm程で、比較的まとまる。ST21の北西側にも礎石が存在しており、建物が南側に延びる可能性もある。また、同建物跡の北西にある礎石の存在から、１間×１間の別の建物跡の存在も想定される。



第18図　安土桃山～江戸時代遺構分布状況

遺物：土器(図版183　PL63)　建物跡検出面より陶磁器が若干出土した。1は大窯の稜皿と推測される。2は志野丸皿で17世紀初頭。3は唐津皿で17世紀前半。4は瀬戸美濃本業焼丸碗で17世紀前半。5は白磁皿で16世紀。6は大窯の折縁丸ノミ皿で16世紀末。7は大窯の擂鉢で17世紀前半。8は瀬戸美濃本業焼の丸碗で、鉄釉の上に灰釉を飛ばしており17世紀前半と推測される。9は瀬戸美濃本業焼の天目茶碗で灰釉を飛ばす。17世紀前半。10は天目茶碗で17世紀前半。11・13は瀬戸美濃新業焼の茶碗で、19世紀第2四半期以降の所産と推測される。12は丸碗である。14は瀬戸美濃本業焼の水滴で、17世紀前半の所産か。15は瀬戸美濃本業焼の擂鉢で17世紀前半。16は大窯の擂鉢で器面の発色は若干紫を帯びる。16～17世紀前半。石器(図版184)　8は砥石である。鉄製品(図版187　PL65)　25は苧引鉄である。このほか鉄滓も出土。

ＳＫ1321～1329（図版178　PL20）

ST21の調査終了後に、第2検出面より約20cm下で土坑群を検出し調査した。土坑は10基存在し、そのうち8基の埋土中からは炭化材と焼土が検出された。これらの土坑は形状も不均質で、規模も1.7～0.6mとばらつきがある。特にSK1325からは炭化物を多く含む埋土中から鉄製包丁(図版187-26　PL65)と寛永通寶(図版184-7　PL63)が、SK1329でも寛永通寶(図版184-8　PL63)が出土した。またSK1330では1辺50cm程の方形プランの中に木炭が充塡されたような状態で検出された(PL20)。上記土坑群はほぼ同一レベルで検出されており、土坑の分布範囲も上面のST21・20と重なる。また、建物跡と土坑群の出土遺物についても顕著な時期差は見られない。

Ｃ3地区表採

Ｃ3地区では検出面不明で、陶磁器が若干出土している(図版183　PL63)。1は大窯の折縁丸ノミ皿で、16世紀末。2は鉄釉茶碗である。3は瀬戸美濃の天目茶碗で17世紀初頭。4は瀬戸美濃本業焼の茶碗で、17世紀後半。

(3)　Ｆ1地区の遺構

Ｆ1地区基本土層3層である灰褐色の自然流路堆積層を掘り込む形で、茶褐色土の不整形な広がりを検出し、SX1とした。Ｅ地区ではこのほかに、竪穴住居跡(SB6)と掘立柱建物跡(ST1・2・5)も調査されているが、所見によればSX1とは埋土が異なる。

ＳＸ1（図版179・180　PL20）

位置：ⅦK10・15・20・ⅦL 6・11・16・17

構造：SX1は当初、不整形なプランとして調査を開始したが、調査の進展にともない、埋土に茶褐色で焼土や炭を多く含む土坑が密集する様相が明らかになってきた。これら土坑群は類似性があり、調査段階で、総体をSX1のまま一括し、各土坑にピット番号を付した。

ピットの多くは重複して掘り込まれており、切り合いを有すると思われるが、その関係は不明瞭である。各ピットの平面形はやや不整ながら円形(楕円形)または方形(長方形)で、断面形はおおむね逆台形を呈する。ピットの壁面には被熱痕跡が見られないため、内部で火を焚いたのではない。埋土はブロック土堆積の様相が看取される場合があり、その性状からしても、自然の流れ込みとは考えにくく、人為的な埋め戻し・埋め立てが推測される。ピット5・7・8の上部には焼土堆積が見られる。また、ピット3の底面には四隅に小ピットが見られ、何らかの上部構造が存在したと推測される。

遺物は遺構内とSX1検出面から出土しているので、両者を分けて報告する。時期的には16世紀中葉～後

葉を中心とするものの、15世紀の遺物も若干含んでおり、SX1と切り合うST1・2・5に関連する遺物の可能性も若干ながら含まれる。

SX1遺構内出土遺物：ピット埋土から陶磁器片を中心に、鉄製品・銭貨・鉄滓などが出土した。埋土中からの散在的な出土であり、特定のピットに集中することはない。土器(図版183　PL63)　１は古瀬戸の縁釉小皿で15世紀。２は大窯の丸皿で16世紀前半。３は大窯の稜皿で16世紀中葉。４は大窯の内禿皿で16世紀後半。５は大窯の折縁丸ノミ皿で16世紀後半。６は古瀬戸の縁釉小皿で15世紀後半。７は備前系の碗で17世紀。８は瀬戸美濃の腰錆碗で、18世紀前半。９は壷の蓋である。10は大窯の擂鉢で16世紀中葉。

金属製品については、鉄製品の破片が約200g、鉄滓が450g出土。

SX1検出面出土遺物：１は古瀬戸のおろし皿で13～15世紀。２は内禿皿で16世紀中葉。３は大窯の丸皿で16世紀後半。４は古瀬戸の平碗か？。５は大窯の茶碗で16世紀後半。６は中国の青花皿で16世紀前半と推測される(PL63)。鉄製品(図版187　PL65)　刀子(27・29)・火打金(28)・小柄(30)が出土し、このほか器種不明で、鉄製品の破片が約150g、鉄滓が約410g出土した。銅製品(図版184・PL63)　装飾部品(２)と、銭貨３枚以上(２～４)が出土した。

(4)　Ｅ地区の遺構

縄文～近世までの遺構を同一検出面で調査した。その中で、周囲の遺構と異なり、焼土・炭を多く含む茶灰褐色土を埋土とする土坑群を検出し、調査を行った。

ＳＸ４（図版181　PL21）

地区：ⅣＫ７・８・12・13

構造：埋土の特徴が共通する土坑群をSX4として一括し、各土坑にピット番号を付けた。ピットの幾つかは重複して掘り込まれており、切り合いを有すると思われるが、その関係を把握することはできない。各ピットの平面形はやや不整形な円形または方形である。断面形はおおむね逆台形であるが、端正な形状を呈さないものもある。埋土には焼土が多く含まれるが、壁面・底面に被熱痕跡を認めたピットは皆無であり、その内部で火を焚いたとは考えがたい。埋土はブロック土堆積の様相が看取され、人為的な埋没(埋め戻し)が推測される。ピット８・９・10の埋土上面には焼土堆積が見られる。いずれも重複するそれぞれのピットより新しいことは明白だが、SX4は全体として一定期間における掘り込みと埋め戻しの累積と考えられるので、SX4と何らかの関係があると言える。このほか、SX4と重なるように直径20cm程のピットが多く検出された。桁行５間、梁行３間の建物跡を想定したが、詳細は不明である。

遺物：検出面で出土。土器(図版183　PL63)　１は古瀬戸の縁釉小皿で15世紀。２は大窯の稜皿で16世紀後半。３は大窯の丸皿で16世紀後半。４は大窯の折縁丸ノミ皿で16世紀後半。５は志野の向付で17世紀前半。６は大窯の丸皿で、内面にスタンプ文が見られる。16世紀前半。７は瀬戸美濃の鉢で、内面にスタンプ文が見られる。17世紀前半。８は本業焼の鉢か。９・10・11は本業焼の擂鉢で17世紀。12・13・14は内耳鍋である。15は中国の青花皿で15世紀末～16世紀前半と推測される(PL63)。鉄製品(図版187　PL65)　用途不明の鉄製品(31)と刀子(32)が出土した。特に用途不明の鉄製品は、身部を２回折り曲げている。このほか鉄製品の破片が約80g、鉄滓が100g出土した。

(5)　Ｈ地区の遺構

SK63を検出した。本地区では当該期の遺構はほかに検出されていない。

ＳＫ63（図版182　PL21）

地区：ＸＰ20

構造：後世の削平を受け、基底部が約10cm前後残存するのみである。遺構の状況、出土遺物等から墓壙と判断した。直径約70cmの円形プランで、底面は平坦である。壁面に沿って10～15cm程の石が配置されており、中央やや北寄りに木棺底板の一部が残存する。

遺物：埋土中より出土。土器（図版183　PL63）　1は伊万里の皿で、内面には「副」の文字が描かれる。17世紀中葉。2は伊万里の小碗で17世紀中葉。3は本業焼の壷である。銭貨（図版184　PL63）　3枚重ねの寛永通寶(6)と、腐食の激しい3枚重ねの銭貨（寛永通寶か？）が出土。このほか、骨片や歯も出土している。

遺構外出土遺物（図版183　PL63）

1は大窯の丸皿で16世紀後半。Ｆ１地区NR3で出土。2は瀬戸美濃本業焼の輪禿皿で、17世紀前半。吉野遺跡群内の表採品で、個人蔵である。

2　時期不明

出土遺物がほとんどみられず、所属時期が不明な遺構で、主に平安時代以降の所産で、残存状況がよい遺構を報告する。

ＳＴ１（図版179　PL20）

位置：Ｆ１地区　ⅦK10・15、ⅦＬ６・11　**棟方向**：N56Ｅ　**面積**：約13.6m²

構造：NR3上面で検出。建物認定は調査時に行い、整理段階で一部変更した。桁行は2間約4ｍで、柱間寸法は約1ｍ。梁行は1間約3.4mである。南西側柱穴列の柱筋の通りはやや悪い。柱穴のプランは円形と方形が存在し、直径は約20cmである。建物跡の範囲内には方形土坑があり、長軸2.3m、短軸1.4m、深さ20cmを測る。土坑の底面は平坦である。建物跡の棟方向と長軸は一致し、ST1に伴うものと推定される。建物跡に明確に伴う出土遺物はない。しかしST1・2・5と切り合うSX1（16世紀中～後葉中心）で15世紀代の遺物が若干出土しており、注意が必要である。

ＳＴ２（図版179　PL20）

位置：Ｆ１地区　ⅦK15、ⅦＬ11　**棟方向**：N54Ｅ　**面積**：約31.2m²

構造：NR3上面で検出。整理段階で認定。一部柱穴が検出されていない部分もある。桁行は3間約6.5mで、柱間寸法は2～2.2m。梁行は2間約4.8mである。柱間寸法は2.4mか。柱穴のプランは円形・楕円形・方形などで、直径は約20～40cmである。建物跡の範囲内には方形土坑があり、長軸2.2m、短軸1.7m、深さ20cmを測る。土坑の底面は平坦で、埋土には角礫を多く含む。ST2に伴うものと推測される。

ＳＴ３（図版173）

位置：Ｆ２地区　ⅥX10・15、ⅥＹ11　**棟方向**：N55W　**面積**：約29.4m²

構造：NR3上面で検出。整理段階で認定。一部柱穴が検出されていない部分もある。桁行は3間約7ｍで、柱間寸法は約2.3m。梁行は2間約4.3mで、柱間寸法は約2m。柱穴のプランは方形が多く、直径は40～60cm程である。建物跡の北東辺では切り合うピットがみられるので、周囲のピットも含めて建て替えの可能性も考えられる。

ＳＴ５（図版179）

位置：Ｆ１地区　ⅦK15、Ⅶ11・16　**棟方向**：N52E　**面積**：約19.35㎡

構造：NR3上面で検出。整理段階で認定。桁行は２間約4.5mで、柱間寸法は約2.2m。梁行は２間約4.2mで、柱間寸法は約2.1mである。柱穴のプランは円形・楕円形などで、直径は約30cmである。ST5の周囲には類似した土坑が幾つか存在しており、建て替えが行われた可能性もある。

ＳＴ８（図版173　PL21）

位置：Ｂ１地区　ⅦQ18　**棟方向**：Ｅ２Ｎ　**面積**：約18㎡

構造：調査時に認定。建物跡の北辺部では一部柱穴が検出されていない。不整方形で、桁行は３間約4.5m、梁行は２間で東辺4m、西辺5mを測る。柱穴のプランは円形で、直径は約20cmである。ST8の周辺部では土坑が多く発見されており、建物跡と同時期に帰属する可能性がある。

ＳＴ18（図版174　PL21）

位置：Ｃ１地区　ⅦM８・９・13・14　**棟方向**：N60E　**面積**：約27.5㎡

構造：調査時に認定。部分的に柱穴が検出されていないが、桁行３間・梁行２間で、四方に庇が付く方形の建物を想定した。長さは桁行が約４ｍ、梁行が約1.6mを測る。柱穴のプランは円形で、直径は約20～40cmである。

ＳＴ19（図版174）

位置：Ｄ地区　ⅡＫ３・４　**棟方向**：N10E　**面積**：13.6㎡

構造：調査時に認定。桁行１間４ｍ、梁行１間3.4mの長方形プランである。柱穴はいずれも円形で、直径は約60cm。遺物は出土しないものの、付近では平安～中世前期の竪穴住居跡が出土しており、当該期に属する可能性もある。

ＳＫ５（図版182　PL21）

位置：Ｆ２地区　ⅥT22　**切り合い**：SB10を切る。

構造：NR3上面で検出。底部のみ残存。形状は方形で規模は１辺約50cm。底面は平坦で、残存壁面はほぼ垂直に立ち上がる。四隅に杭痕が認められ(深さ20～25cm)、壁面が垂直であることを考えると、木枠(板壁)を伴う可能性が高いと思われる。埋土中に角礫が見られたが、意図的な投棄は想定しにくい。遺物は出土していない。構造的に見て井戸の可能性が推測される。

ＳＫ６（図版182）

位置：Ｆ２地区　ⅥT22、ⅥY２

構造：NR3上面で検出。上部は平面円形で擂鉢状の形態を呈する。形状・規模はSK5と同様で、四隅に杭をもつ構造であり、木枠(板壁)を伴う可能性がある。杭痕の深さは19～24cmを測る。下部方形部分の内部には角礫が密集した状態で詰まっており、意図的に放り込んだ可能性がある。SK5と同様に井戸の可能性がある。SK5と6の間は2.5mと近接しており、構造も類似している。

ＳＸ２（図版182）

位置：Ｆ２地区　ⅥY７・12

構造：NR3上面で検出。削平で南西半分を削られる。形状は不整円形で、規模は直径約４mである。上面から深さ50cmまでは緩やかな擂鉢状で、そこから平面形を径1.4m程度に狭めて急傾斜で落ち込み、井筒設置部分を形成する。湧水のため井筒設置部分の40cm程下で調査を断念し、底部の深さ・構造は不明。井筒部分内埋土は円筒状を呈して検出面まで立ちあがり、掘り方埋土とは明確に区別できるので、井戸機能時に何らかの井筒構造が存在したと想定される。

ＳＦ１・２（図版182　PL21）

位置：Ｆ３地区　VIE25

構造：NR2上面で検出。２箇所の焼土分布範囲が隣接している。SF1はごく浅い擂り鉢状の形態を呈し、東側の肩に黄白色粘土が貼り付けられている。貼り付け粘土は本来完周していた可能性も考えられる。SF2には掘り込みは認められない。

ＳＫ1251（図版182）

位置：Ｉ地区　XIVＶ８

構造：プランは長方形で、長軸1.8m、短軸1.1m、深さは10cmを測る。削平を受けているので、上部構造は不明。埋土１層は炭化物や炭化材を多く含む。２層は焼土で、底面には被熱痕がみられた。本遺構は形状・規模・埋土の状況から判断して、火葬施設の可能性を推測する。しかし、出土遺物が無く所属時期は不明。

ＳＬ１（全体図　PL21）

位置：Ｃ４地区　XIＰ25付近

構造：表土直下の砂質土に覆われた、畑の畝（褐色土）を検出した。畝は確認しただけで13×10m程の範囲に広がり、畝の幅は35～45cm、高さは15～20cm程で、40～50cm間隔で、平行に作られている。一部、直交する形で別の畝群も作られていた。この畝の時期については出土遺物がほとんどないため不明。

第３節　土器・石器・金属製品・鍛冶資料

１　平安時代～中世前期の土器

(1)　器種分類

灰釉陶器食膳具については、以下の法量を目安として分類し、報告する。碗Ⅰ：口径15cm以上、器高５cm以上。碗II：口径15cm以下、器高３～５cm。碗III：口径10cm前後、器高４cm前後。皿：器高３cm以下。

輸入陶磁器については、横田賢次郎氏と森田勉氏の分類に従う（横田・森田1978）。

(2)　時期区分

木曽郡下では平安時代～中世前期の集落が多く存在し、今回報告する遺跡についても同様の傾向がみられる。本報告書では、主に近年の発掘調査によって良好な住居跡一括出土資料が得られた上松町ならびに大桑村所在遺跡の調査成果などを用い、土器様相を６期に区分して紹介する。また、吉野遺跡群ではVI期の良好な資料は存在しないため、大桑村所在遺跡（振田遺跡等）の資料を参照されたい（百瀬他2001）。

Ⅰ期　食膳具は灰釉陶器・須恵器・黒色土器で構成。灰釉陶器の形態には、胴部がゆるやかに張り、三日月高台を有する個体がみられる。整形には底部と腰部～胴部にかけての回転ヘラ削り、施釉法にはハケ塗りが見られる。整形良好。

Ⅱ期　灰釉陶器が食膳具の主体を占め、須恵器や黒色土器が食膳具から姿を消す。碗の形態は胴部がゆるやかに張り、三日月高台とともに退化形態の高台がみられ、いずれも細くていねいに作られる。整形では底部と腰部～胴部にかけての回転ヘラ削りが認められる。施釉法には漬けがけが登場し、ハケ塗りはほとんど消滅する。整形・胎土ともにきわめて良好である。

Ⅲ期　碗Ⅰが明確に登場する。碗は胴部の張りが強い形態となり、施釉方法は漬けがけとなる。整形技法により２相に分かれる。古相には底部と腰部～胴部にかけての回転ヘラ削りがみられ、高台も前時期に比べて高い高台を特徴とする。内面口縁下に沈線を入れる場合もある。整形および胎土が良好な個体も存在する。新相では底部に回転糸切り痕が残り、胴部に回転ヘラ削りを施さないものが主体となる。整形は粗雑化する。

Ⅳ期　灰釉陶器から山茶碗への転換期である。古相では灰釉陶器の高台幅が広くなり、断面形態が三角形や四角形を呈す。整形が非常に雑で、施釉が目立たない個体が多い。口縁部に玉縁をもつ碗もみられる。また、山茶碗や小碗が若干登場する。新相では灰釉陶器が消滅し、高台に籾痕を有する山茶碗・小碗がみられる。

Ⅴ期　小碗の高台が無くなり、小皿となる。碗の形態は、古相では胴部がやや張る個体が目立ち、新相では胴部が直線的になり底部から口縁部に向かって「ハ」の字状に開く個体が目立つ。

Ⅵ期　碗は高台と底部の境がほとんど見られず、器形は底部から口縁部に向かって「ハ」の字状に開く形態となる。高台には細い粘土紐を用いる。底部は薄く、中央に指圧痕が見られる。胎土は緻密で焼成も良好。

上記段階区分を生産地における編年観(山下1995)に対応させると、おおむね以下のとおりとなる。なお、灰釉陶器は猿投窯編年、山茶碗は尾張型を用いる。

Ⅰ期：K90　　Ⅱ期：O53　　Ⅲ期：H72　　Ⅳ期：百代寺・尾張３・４型式

Ⅴ期：尾張５型式　　Ⅵ期：尾張６・７型式

年代観については、Ⅰ期：９世紀後半、Ⅱ期：10世紀前半、Ⅲ期：10世紀後半～11世紀初頭、Ⅳ期：11世紀前半～12世紀中葉、Ⅴ期：12世紀後半～13世紀前葉、Ⅵ期：13世紀中葉中心を目安とする。

(広田和穂)

参考・引用文献

原　明芳　1989　「吉田川西遺跡における食器の変容」『吉田川西遺跡』長野県埋文センター

百瀬忠幸他　2001　『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』大桑村教育委員会

山下峰司　1995　「灰釉陶器・山茶椀」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

横田賢次郎・森田　勉　1978　「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館論集』四

2　石器（砥石）

平安時代以降の所産と推測される砥石８点を図示した(図版184)。１～６はいずれも平面形が長方形状を呈し厚みがあるもので、研磨の痕跡が顕著に観察される。使用されている面の数に違いはあるものの形態的な類似性が高く、石材もすべて流紋岩製である。出土地点は１・４がSB73、３・６がSB113出土で、２・５はそれぞれＣ地区・Ｆ地区の検出面出土である。７は砂岩製でやや扁平な大形品である。SB75出土である。８は流紋岩製で板状を呈するものである。ST21検出面出土である。

上記した砥石に用いられている流紋岩は乳白色でところにより縞状の模様をもつという特徴があり、きめが細かく砥石の石材に適しているものである。木曽谷においては平安時代以降の遺跡から出土する砥石の多くにこの石材が用いられている。贄川砥石などの名称で楢川村に産出することが知られているほか、永井節治氏のご教示によれば大桑村伊奈川上流域や上松町においても同様の岩石あるいは岩石学的に類似するものが認められ、本遺跡の砥石もそれらの石材が用いられていると考えられる。

（松原和也）

3　金属製品・鍛冶資料

(1)　鉄製品（図版185～187　PL64・65）

比較的残存状況の良い資料を中心に、平安時代～中世前期23点(１～23)、安土桃山～江戸時代・時期不明14点(24～37)を報告する。器種別には鎌２点、鍬鋤先１点、苧引鉄４点、紡錘車１点、鋸１点、火打金３点、釘１点、包丁１点、刀子８点、小刀２点、小柄３点、鉄鏃４点、鉸具２点、用途不明４点である。

鎌

１は基部から刃部までの幅にあまり差が無く、刃部の湾曲が次第に大きくなる形態である。基部の柄に対する角度は約140度と鈍角である。刃の方向から左利き用と推測される。SB59の出土で、Ⅰ期に所属する。15は基部から刃部にかけて「く」の字状に屈曲し、基部が細く長い形態である。基部は全体を折り返す。刃の方向から左利き用と推測される。SB113の出土で、Ⅳ期新相に所属する。このほか、SX4付近より破片が出土している。

鍬鋤先

23は「U」字形鍬鋤先で、内縁袋部の一部を除き、外周部のほとんどが欠損しているので長さと幅の比は不明。内縁部形状は「コ」状で、外縁部形状は「U」字状を呈すると推測される。遺構外出土資料である。

苧引鉄

６は肩が丸い形態で、刃部の断面形状は錆化がはげしく不明。SB63の出土で、Ⅲ期に所属する。17は肩部が丸い形態で、背の突起部は長い。SB129の出土で、Ⅲ期新相に所属する。25は肩部が角状の形態で、刃部の長さは7.5cmである。ST21検出面の出土。33は肩の端部に面をもつ。Ｃ地区の表採。

紡錘車

11は紡輪で、上・下面ともに上側に湾曲する。SB111の出土で、Ⅲ期に所属する。このほか、SB6(Ⅲ期古相)より棒軸の破片が出土している。

鋸

36は関部から約1.5cm先端側より鋸歯を付ける。茎部には目釘穴が１つ確認できる。刃部先端は欠損するものの、茎部は７cm程で、刀子と同程度の大きさである。Ｆ１地区の表採で、所属時期は不明。

火打金

20・21はいずれも丸い頂部に穿孔を有し、身の両端が欠損する。ともにSB141の出土で、Ⅳ期新相に所

属する。SB141では他にも１点出土した。28は丸い頂部に穿孔を有し、身の両端を欠損する。SX1検出面出土。

釘

12は基部上端に窪みを有し、軸断面は角形である。SB102の出土で、Ⅳ期新相～Ⅴ期に所属する。このほか、SX1周辺でも１点出土した。

包丁

26は、身部の幅が先端付近まで変化せず、先端部で湾曲する形態である。ほぼ完存。ST21の下面より検出されたSK1325の出土で、寛永通寶（７）とともに発見されている。

刀子

５は身部が6.5cmの長さで、関部から直線的に減幅し、先端が尖る形態。茎部には木質が残存する。SB17の出土で、Ⅲ期新相に所属する。８は身部の棟側が若干反り、刃側が直線的に減幅する形態。SB73の出土で、Ⅳ期古相に所属する。９は茎部に目釘穴が２つ確認できる。SB79より茎部が曲がった状態で出土。Ⅱ期に所属する。22は身部がほとんど減幅しないまま刃部を形成する。SB141の出土で、Ⅳ期新相に所属する。27は刃部のみ折り曲げた状態で出土。29は茎部に木質が残存する。27・29はSX1検出面出土。32は身部がほとんど減幅しないまま刃部を形成。先端は欠損で不明。SX4検出面出土。37はＦ１地区の表採である。このほかに破片が、SB5(Ⅲ期)・95(Ⅲ期新相)・102(Ⅳ期新相～Ⅴ期)、ST21、遺構外のＣ１・Ｊ地区より出土している。

小刀

刀子と比較して明らかに大形の資料をまとめる。７はほぼ完存で、身部20.5cm、茎部9.7cmを測る。身部の棟側は反りをもち、刃側は徐々に減幅し、先端を尖らせる。SB63の出土で、Ⅲ期に所属する。16は刃部先端を欠損するものの、ほぼ完存。非常に小さい棟関をもつ。茎部には目釘穴が１つ確認できる。SB113の出土で、Ⅳ期新相に所属する。

小柄

刀子とほぼ同じ大きさであるが、茎部に銅板を巻いており、いずれも近世に所属する可能性がある。30は刃部・茎部ともに先端を欠損。身部に反りはみられない。茎部の銅板も残存状況は悪い。SX1検出面出土。35は鉄製の茎部が完存。銅板の残存状況は悪い。Ｆ１地区の表採。34は身部が欠損するものの、茎部は完存。茎部には棟側を下にして象眼が施され、木の切り株と花が表現される。Ｃ１地区の表採。

鉄鏃

10は身部平面が長三角形で、断面は両丸造り、身部関は撥状を呈する。SB111の出土で、Ⅲ期に所属する。14はいわゆる雁股鏃である。箆被部が関から刃にかけて逆三角形状に広がり、刃部は短い。SB113の出土で、Ⅳ期新相に所属する。18・19はともに身部平面が長三角形で、断面は両丸造り、身部関は撥状を呈する。いずれもSB129の出土で、Ⅲ期新相に属する。

鉸具

３・４はともにSB13より出土した。断面形状は四角。Ⅳ期に所属する。

用途不明

２は平たい棒状を呈し、片側をほぼ直角に折り曲げる。両端は欠損。SB65の出土で、Ⅲ期新相に所属。13は板状の鉄の端を丸めて筒部を造り、板部をつぶして袋状にする。板側の端部は欠損。SB102の出土で、Ⅳ期新相～Ⅴ期に所属。24は断面角形の棒状を呈し、両端は欠損。ST20検出面出土。31は身部を２回折り曲げた状態で出土。棟側と刃側の厚さに変化が無いため、どちらが刃部かは不明。半月形状を呈する側が刃部の可能性もある。基部端を欠損。SX4検出面出土。

(2)　銅製品（図版184　ＰＬ63）

銭貨

16点以上出土している。Ｅ地区では遺構外で２点出土。Ｆ１地区ではSX1検出面で３点と、渡来銭や寛永通寶の破片が数片出土。Ａ２地区では近世墓より３点出土。Ｈ地区ではSK63より６点出土。Ｃ３地区ではSK1325、1329より１点ずつ出土した。Ｃ１地区では遺構外で１点出土した。上記のうち残りの良いもの(１～９)を報告する。１～４は渡来銭である。１は開元通寶で初鋳年は621年。二枚重なって出土した。Ｅ地区出土。２は祥符通寶で初鋳年は1009年。３は皇宋通寶で字体は篆書。初鋳年は1039年。４は元豊通寶で字体は真書。初鋳年は1078年。２～４はⅦＬ16(SX1検出面)出土。５～９は寛永通寶で、初鋳年は1626年。５はＡ２地区の試掘時に近世墓より出土。６はSK63より３枚重ねで出土。本遺構では、三枚重ねの古銭が別に１点出土している。７はSK1325より包丁(26)とともに出土。８はSK1329より出土。９はＣ１地区の表採品。

銅製品

２点(１～２)を報告する。１は蓋状の用途不明品で、器壁は非常に薄く、内面に葉脈状の文様が見られる。SB102の出土で、Ⅳ期新相～Ⅴ期に所属する。２は装飾部品で、表面に文様が打ち出され、金箔も若干残存する。SX1検出面出土。

(3)　鍛冶資料

羽口と鉄滓が出土している。羽口は小破片が、SB13(Ⅳ期)とSB102(Ⅳ期新相～Ⅴ期)より出土した(PL65)。また、SB102では鉄滓が融着した小皿も出土している(PL65)。

鉄滓は、Ｆ１地区のSX1とＥ地区のSX4における出土状況と量が注目される。SX1では20点以上の鉄滓、SX4でも約10点の鉄滓が出土した(PL65)。両者ともに掘立柱建物跡と焼土遺構、そして不整形なピットが多数検出された。また、鉄滓以外に欠損した鉄製品が多く出土したり、SX1検出面では銭貨が複数枚見つかるなど、遺物出土のあり方も特徴的である。両跡内あるいはその周辺で何らかの小鍛冶が行われた可能性が推測される。このほか、鉄滓が数個程度出土した遺構としては、SB134(Ⅱ期)、SB3(Ⅲ期)、SB63(Ⅲ期)、SB95(Ⅲ期新相)、SB138(Ⅲ期新相)、SB11(Ⅳ期新相)、SB113(Ⅳ期新)、SB141(Ⅳ期新)、SB102(Ⅳ期新相～Ⅴ期)、ST21(安土桃山～江戸時代)がある。

(広田和穂)

第Ⅵ章　成果と課題

第１節　吉野の地形地質と活断層調査

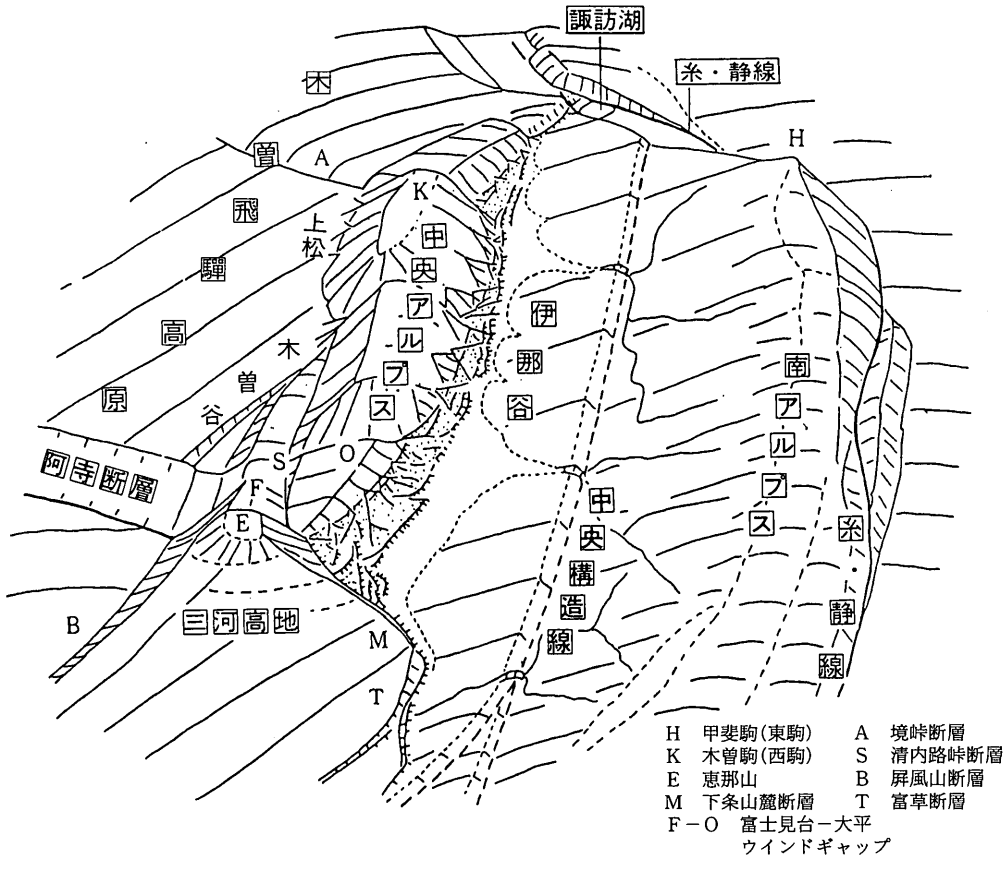
飯田市美術博物館　客員研究員
松島　信幸

１　造地形史的に見た調査地域の位置

(1)　木曽川は山脈と高原の地形境界を流れる

木曽郡を木曽路とは言うが、木曽川谷とは言わない。なぜなら、太平洋に流れ下る急流の木曽川と、延々と日本海まで達する奈良井川とが低い分水界で接している二つの谷であるから。両大河の源流に位置する木曽郡は本州の屋根にあたる。木曽路とは二つの谷を通過する道で、昔は中山道、今は国道１９号線である。木曽川谷では狭い渓谷の左岸を通過している。主要な集落はすべて左岸に連なるためである。

これは、木曽山脈側からの木曽川の支流が山脈の隆起に起因する扇状地形成による(第19図)。

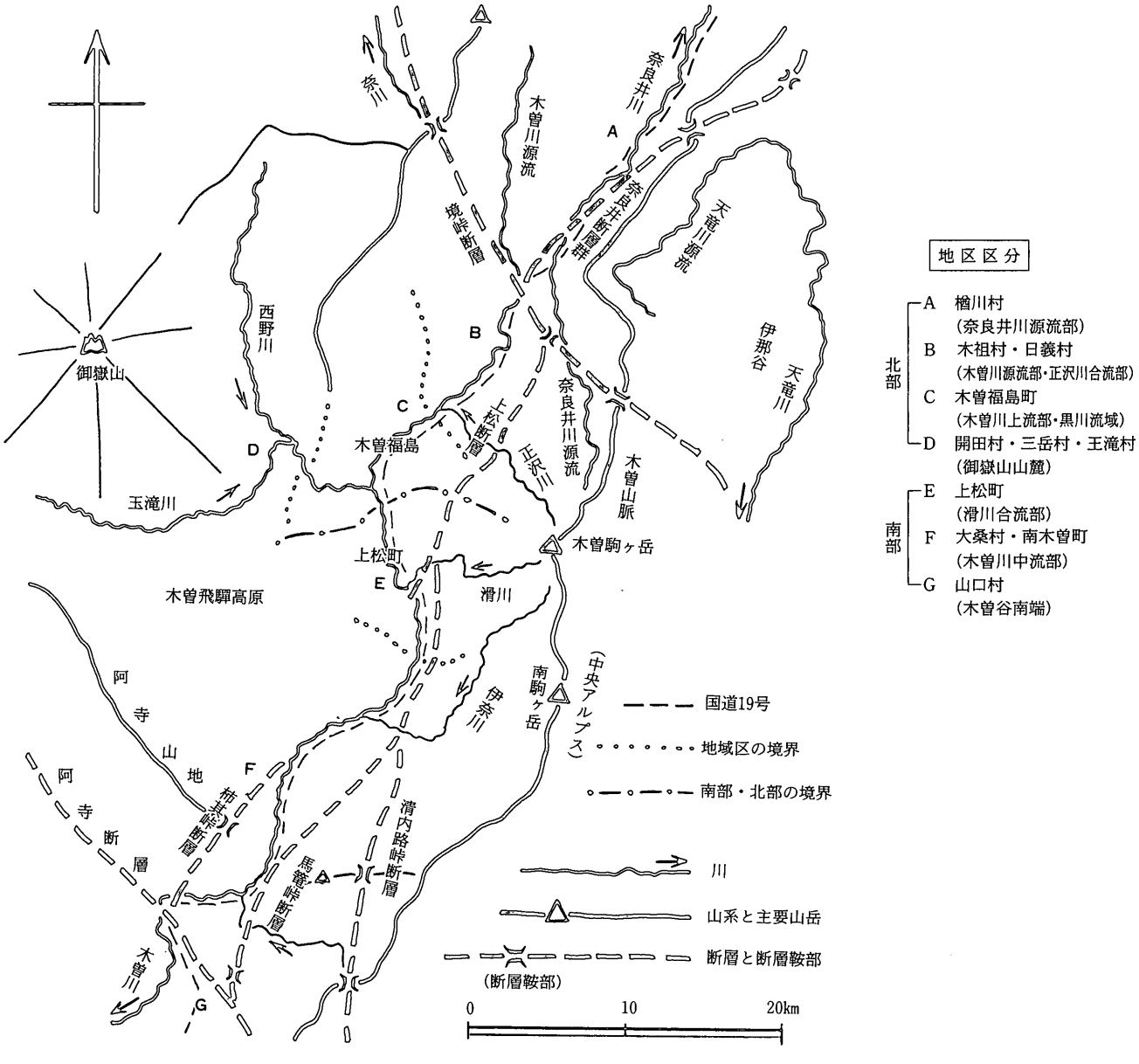


第19図　模式的に示した木曽谷とその周辺の地塊の配置

空中から鳥の目で見れば、木曽川谷の左岸と右岸の大地形は大きく異なっている。左岸は木曽山脈が至近距離に迫まり、谷底から山脈主稜線までの高度差は実に2,000mを越えている。駒ヶ岳北西面の日義村に流下する正沢川での高度差は2,200m、同峰西面の上松町に流下する滑川では2,350m、空木岳西面の大桑村に流下する伊奈川では2,340mである。木曽川の左岸山地の比高は日本でも１・２の高度差を持つ急傾斜の大規模斜面である(PL1)。

これに対して木曽川右岸の大地形は一変する。山頂部は木曽から飛騨地域まで連続している平頂性の高原地形である。これを木曽－飛騨高原と呼ぶ。木曽地域の高原上には木曽を象徴する活火山の御嶽山が載っている。高原上の標高は木曽郡の南西境界にあたる阿寺山地で高くなり最高峰は1,900mである。木曽川の谷底からは高原地形を見ることができない。第四紀末の侵食により、木曽川は深い谷になっていて左岸・右岸の大地形の違いには気づかない。

木曽川はこうした二つの相対する大地塊の境界部を大きく蛇行して流れている。調査地の上松町は木曽川谷のほぼ中央部に位置している(第19図)。



第20図　木曽郡の山系・水系・断層系

(2)　二つの地塊を分ける木曽谷活断層系

木曽山脈の地塊を中央アルプスブロック、同じく木曽－飛騨高原を木曽－飛騨高原ブロックと呼ぶ(松島1995)。両ブロックの境界部に木曽谷活断層系(仁科ほか1985)がある。代表する主断層は北から奈良井断層群(大塚1996・片田ほか1962)・上松断層(片田ほか1961)・清内路峠断層(山田・村山1958)である。

断層は木曽山脈の山麓部を南北の直線状に貫き、木曽川の流路とは完全に一致していない。上松の吉野地域では木曽谷活断層系中の上松層が一番木曽川に接近している。断層を境にしてその東側が急斜面になって木曽山脈が立ち上がっている。断層は山脈を造る急斜面と山麓部の緩斜面山地との地形変換点を通過している。断層より西側の山地は丘陵性で、一部では平坦な山頂部に古い礫層を載せている。

木曽谷断層系は上松より南側でいくつかに分岐している。本報告書の中心となる吉野の上松断層は主断層から分岐した部分にあたる。大桑からは柿其峠断層(片田ほか1961)、伊奈川からは馬篭峠断層(片田ほか1961)が分岐している(第20図)。なお、木曽地方の活断層についての先行的な文献は活断層研究会(1991)・仁科ほか(1885)・同(1986)などがある。

(3)　地形発達および地文的に見た上松の位置

木曽郡の11町村は３ヶ村が御嶽山々麓の高原部にあり、８町村が谷に沿う木曽路にある。うち１ヶ村は奈良井川の谷にある。郡内の主要町村は木曽路に沿い延々と一列に並んでいるから、北部と南部での自然および地文的な条件は大きく異なる。南北では気候・気象条件や植生の差が著しく、自然発生的に郡内を南北に二分することができる。境界は上松町で、上松より南が木曽南部、木曽福島より北が木曽北部にあたる。北部の谷は木曽川・奈良井川ともに南部のように深く侵食が進んだ渓谷でなく、川の勢いもおだやかである。これに対して南部は侵食が進んだ険しい峡谷をつくり、北部より大量の水が奔流となって流れる。ただし、平常時は水力発電によって大半の水が奪われ、花崗岩の巨礫が累々とした半死の大河と化している。

木曽郡内の地域区分を細分すると次のようになる。

北部

○楢川村－奈良井川源流部
○木祖村・日義村－木曽川源流部・正沢川合流部
○木曽福島町－木曽川上流部・黒川流域
○開田村・三岳村・王滝村－御嶽山山麓

南部

○上松町－滑川合流部
○大桑村・南木曽町－木曽川中流部
○山口村－木曽谷南端

2　上松町の基盤岩類

上松町は西南日本内帯に位置し、基盤岩類はジュラ紀付加体の古期堆積岩類および古期堆積岩を源岩とする変成岩類があり、そこに濃飛流紋岩類と花崗岩類などの火成起源の岩石から構成している。上松町の地質は５万分の１地質図幅「上松」および同説明書(片田ほか1958)と同じく地質図幅「赤穂」(村山ほか1957)に基本的な調査がなされている。町には「上松町誌第１巻自然編」の地形地質の章がある(永井1995)。以下の記述は上記の地質図幅による。ただし、付加体の部分は最近の知見で記述する。

ジュラ紀付加体は美濃帯に属し、その北東端に位置する。町の北部に分布して粘板岩および砂岩を主とする。まれにチャート・石灰岩・緑色岩のレンズ状小岩体を介在する。隣接地域で石灰岩からは古生代二畳紀のフズリナ、チャートからは中生代三畳記のコノドントが産出している。これらは異地性の礫状岩体でジュラ紀付加体中に混在している。

変成岩類は領家変成岩類に属し、ジュラ紀付加体の堆積岩類が高温低圧の広域変成作用を受けた産物で

ある。分布は木曽谷断層系の東側である。断層より東側が中央アルプスの隆起によって、より深部が洗い出された結果である。変成度は北から南に向かって上昇していて、黒雲母帯から片状ないし縞状片麻岩帯へと変化している。

濃飛流紋岩類は大部分が流紋岩質溶結凝灰岩である。その分布は木曽川より西側の高原地帯を構成している。少量ながら礫岩・砂岩・頁岩が挟まれている。これらは中生代後期の広域的な火山深成活動に伴って、当時の地表に噴出した大規模火砕流が厚く堆積した地層である。これらは西方の高原地域の標高約1,200m付近より上部を覆っている。おもに小川の右岸側の高原上に分布し、同左岸側では台ヶ峰山頂部にのみ分布している。層序は最下部に礫岩から砂岩・頁岩が現れ、それらの上部に厚い溶結凝灰岩が重なっている。

花崗岩類は濃飛流紋岩類を貫いて分布している。流紋岩類から引き続いた花崗岩質火山深成活動の産物である。花崗岩類はおもに木曽川谷と小川の谷に沿って露出している。標高が高くなる山地部ではジュラ紀付加体の堆積岩類や濃飛流紋岩類が残っていて、第四紀の隆起運動による侵食作用で深部まで掘り込まれた谷の部分に花崗岩類が顔を出している。

木曽谷活断層系の東側にあたる木曽山脈側は花崗岩類の分布が異なっている。中央アルプスの激しい隆起によって山脈が深部まで侵食されているから全面的に花崗岩類が露出している。ただし、滑川より北部の斜面下部は変成岩で占められる。

当地域の花崗岩類は領家帯の花崗岩類に属している。領家帯には長期にわたり次々と花崗岩の貫入が続いた。上松地域では貫入の古い順に伊奈川花崗岩・上松花崗岩・木曽駒花崗岩などの岩体が分布している。

伊奈川花崗岩体は自形のカリ長石斑晶が目立つ粗粒角閃石黒雲母花崗岩で、場所により変輝緑岩質の包有物や変成岩を含み、弱片麻状構造を示す場合もある。分布は、中央アルプス主稜線では空木岳から南へ広域に広がる。境界断層の清内路峠断層沿いでは倉本より南に分布する。清内路峠断層の西側ではごく限られた部分に伊奈川花崗岩体が分布する。倉本から吉野の清内路峠断層の西側、上松断層の東側、小野から倉本に至る木曽川の東側、以上の線に囲まれた鋭角三角形の部分に表れている。この理由は上松断層による東側隆起と倉本より北部の清内路峠断層による西側逆隆起によるものと考えられる。

上松町中心部とその周辺、小川の中流部の上部、滑川合流部から下流の木曽川右岸には上松花崗岩体が分布している。その岩相は角閃石黒雲母花崗岩を主とするが、中心部は粗粒で周辺に向かって中粒から細粒へと変化する。寝覚ノ床は周辺相にあたる細粒黒雲母花崗岩である。上松花崗岩体は伊奈川花崗岩体より遅れて貫入した岩体である。

木曽駒ヶ岳を造っている花崗岩体は木曽駒花崗岩として知られている。この岩体の分布は山頂部の一帯を造る岩体と木曽川の渓谷部に延びてくる岩体、小川の渓谷部に露出する岩体など三ヶ所に分布する。木曽駒ヶ岳山頂部に分布する岩体は、木曽前岳尾根の登山ルートで金懸岩の下1,750m付近から上方に分布する。木曽谷側も伊那谷側でも中腹部から上部に露出し、宝剣岳を中心として南北に長軸をもつ長楕円形の分布を示す。当地域の花崗岩では一番新しく貫入した花崗岩で滴状の貫入形態を示すと共に周りの変成岩に接触熱変成作用を与えている。岩相は等粒状の中粒角閃石黒雲母花崗閃緑岩で円形から楕円形の塩基性包有物が多数混じっている。

木曽川の渓谷部に延びてくる木曽駒花崗岩体は滑川左岸の尾根から倉本の木曽川河床に達している。岩相は中粒斑状角閃石黒雲母花崗閃緑岩である。一方、小川の渓谷部では倉本と同じ岩相を主とし、部分的に細粒(角閃石)黒雲母花崗閃緑岩に変わる。

3　活断層の露頭が現れる

(1)　吉野で木曽谷最初の活断層露頭の発見

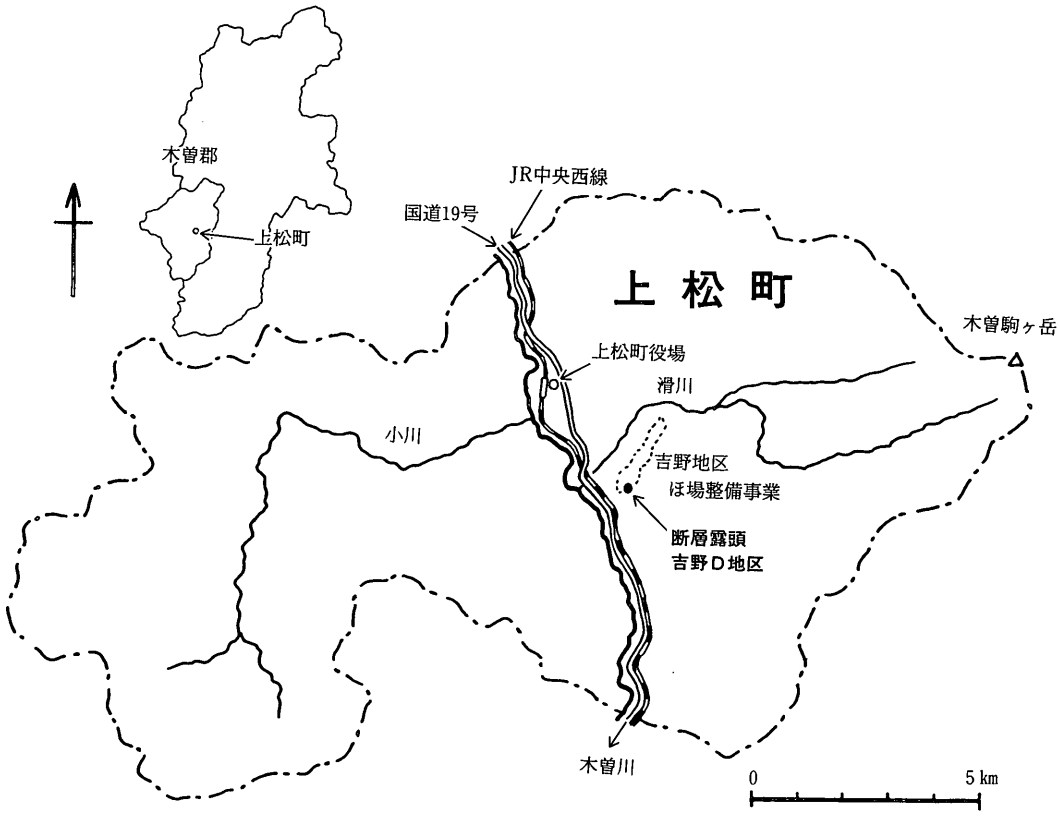
上松町吉野地区において平成八年度(1996年度)から県営のほ場整備「中山間総合整備事業」が実施された。これに伴う埋蔵文化財調査が吉野Ｄ地区で1996年６月から行われていた。神村透氏(96年度発掘担当)から、黒土層を切っている逆断層露頭が現れたとの連絡を受けた(第21図)。

６月、現地調査に行く。吉野の前野地区の南東端(Ｄ地区)、道路下の発掘場所で黒土層(以下、黒ボクと記す)を明瞭に切っている断層面が現れている。木曽山脈側が隆起する東上がり西落ちの逆断層である。

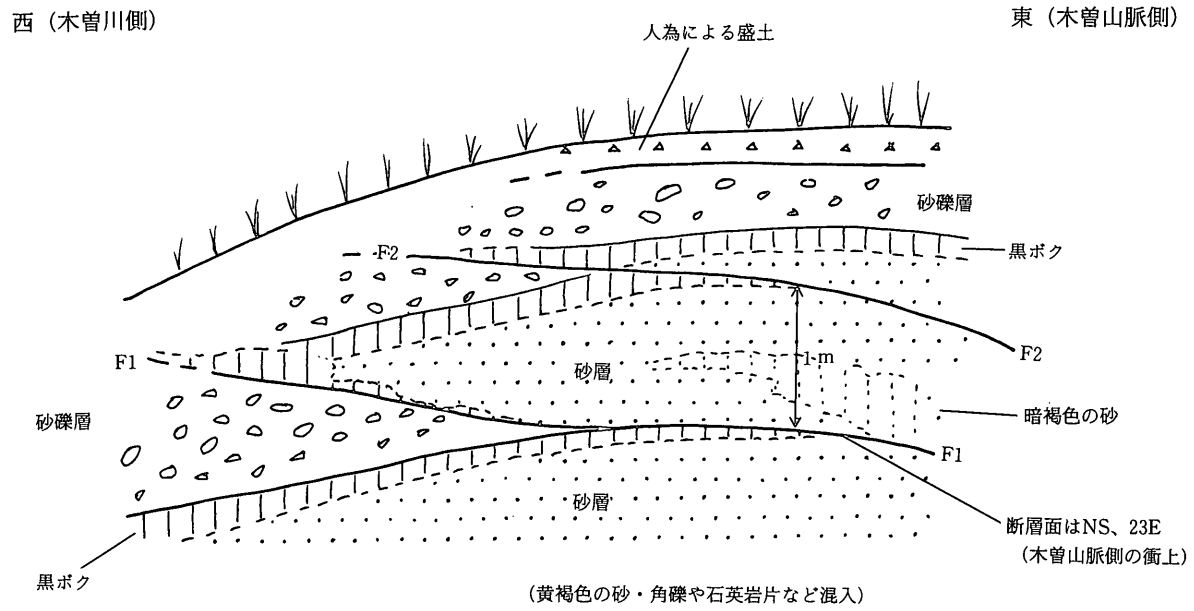
(2)　６月の調査結果からわかったこと

一番山側で発掘した床面を取り巻く掘削壁面に断層が現れている。北東側壁面(以下Ｎ面と記す)と南西側壁面(以下Ｓ面と記す)には断層面を横切る切り口が見えており、それら両壁面の断層をつなぐ断層線が南東側壁面(以下Ｅ面と記す)に追跡できる。断層の露出状況は明瞭で理解しやすい。Ｎ・Ｓ両壁面に見えている断層はＦ１とＦ２の２本がある。Ｎ面では２本がほぼ並行して重なっている。Ｆ１の走向はＮＳで、東傾斜の23度である(第22図a)。Ｓ面はＦ１・Ｆ２から分岐する断層が４～５本あって複雑な形態を示している。Ｆ１の走向はＮ２Ｅで、東傾斜の20度を示す(第22図b)。

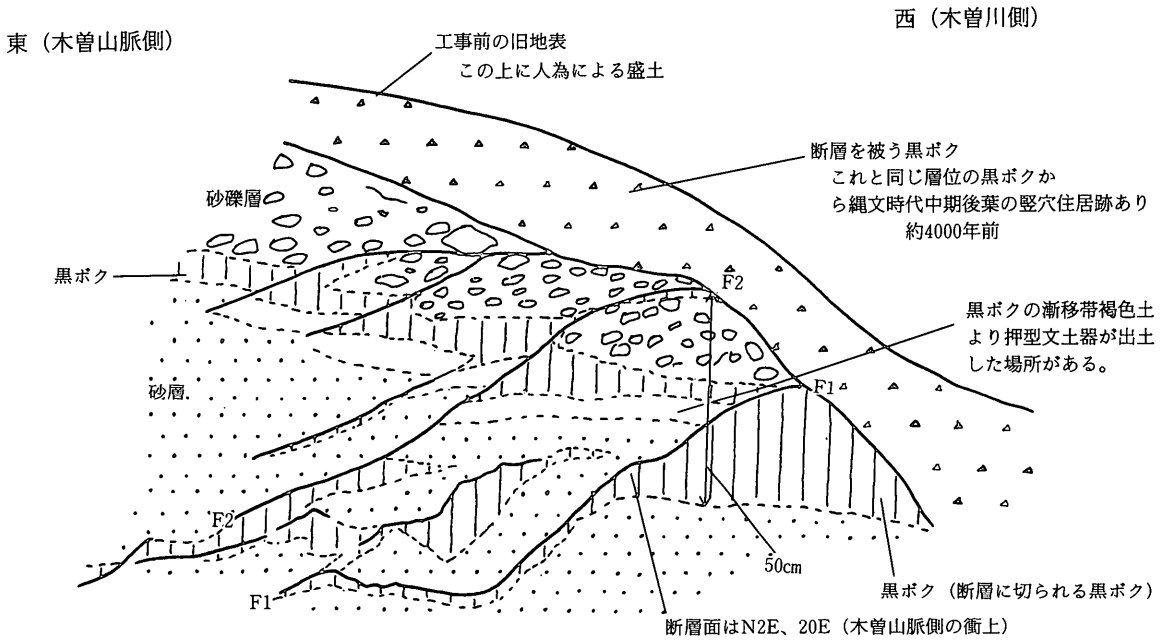
壁面に見える地層は４層に大別できる。地表面を覆う黒ボクは下の地層および断層を不整合に覆っている。埋文調査では最上部黒ボク土から縄文時代中期後葉の竪穴住居跡があり、約４千年前以降の地層と推定される。断層はこの地層によって覆われている。断層で変位している地層の最上部層は角礫混じりの砂礫層である。基質の砂は白っぽい。その下位に断層によって切られる黒ボクがある。黒色部の下に最下位の砂層との漸移部に褐色土層がある。これに対比される場所の褐色土から約８千年前とされる押型文土器



第21図　吉野遺跡群Ｄ地区・断層露頭の位置図



a　N面（トレンチのスケッチ第28図と同じ位置）



b　S面（トレンチのスケッチ第24図と同じ位置）

第22図　6月の断層露頭スケッチ

が包含されている。したがって、第一回地質調査の段階で、埋蔵する土器の年代から見れば本断層の地震発生は８千年前以降－４千年前以前となる。

断層の観察からＦ１およびＦ２は同時に動いたもので、その垂直変位量は１ｍである。Ｎ面のＦ１断層の垂直変位量は0.7m、水平変位量は1.5mである。断層の傾斜は20度余であるから低角の逆断層である。横ずれ成分を伴わない真の逆断層と仮定すれば、これらから推定される真のずれ(ネットスリップ)は約２ｍとなる。この変位量から推定する地震の規模(マグニチュード)はＭ７級である。

木曽地方では王滝村を震央とする長野県西部地震がある。この地震は1984年９月14日に発生、マグニチュード6.8の直下型地震である。余震活動は現在も続いている。これに対して、木曽山脈西麓にある木曽谷活断層群(仁科ほか1985)はこれまで活断層研究が為されていなかったためにあまり注目されていなかった。吉野において木曽谷活断層群の一つから新期活動を示す断層露頭が発見され、木曽谷における防災対策に新たな視点が加わったことになる。

４　上松断層トレンチ調査（1996年９月）

(1)　調査の経緯

上松町教育委員会では吉野遺跡群内の活断層調査(トレンチ調査)を平成８(1996)年９月に実施することに決定した。

調査は通産省工業技術院地質調査所地震地質部活断層研究室の協力を受けて行うこととなり、当時、同研究室の奥村晃史氏(現在、広島大学)・苅谷愛彦氏(現在、千葉大学)・須貝俊彦氏(現在、東京大学)の三氏が来町した。トレンチのスケッチ等の現地作業は、上記に加えて地元研究者の永井節治氏(木曽郡南木曽町・上松町誌調査執筆者)と筆者の五名があたり、堆積物の分析を寺平宏氏(上伊那郡中川村・伊那谷自然友の会会員・日本第四紀学会会員・日本地質学会会員)が担当した。年代測定試料の採取は地質調査所の三人が行って、同所の費用で分析処理された。分析値の暦年補正等は苅谷氏が担当した。考古学的な助言は神村透氏(96年度発掘担当)が担当した。

(2)　トレンチの場所

トレンチは６月に予備調査をしたＳＰＣ地点を拡幅してＳトレンチ(主トレンチ)とし、その北東側にＳトレンチに並行する幅の狭いＮトレンチ(副トレンチ)を掘削した。その位置関係と大きさは第23図に示す。

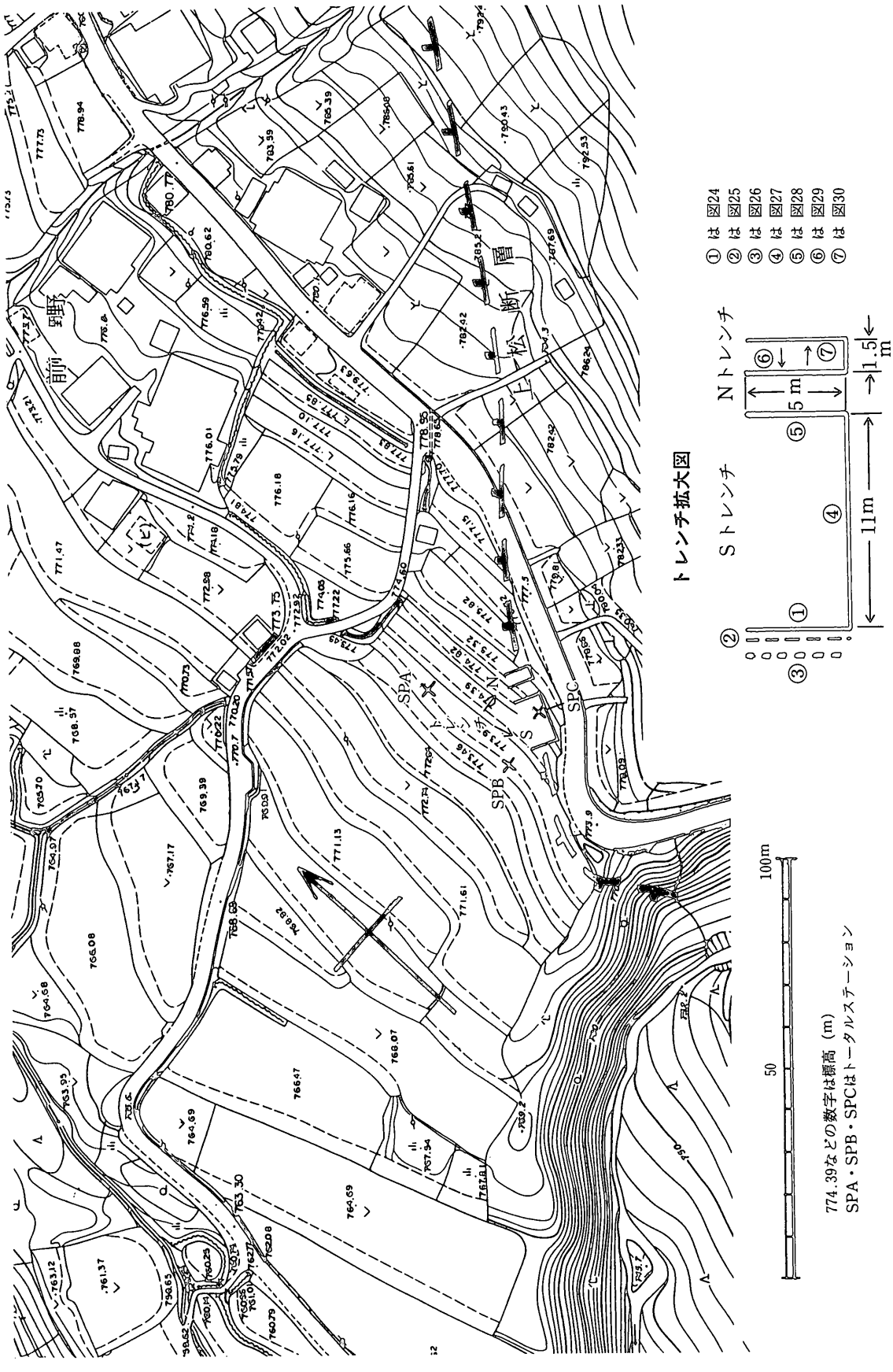
本トレンチ調査における仕上げのクリーニングは工事現場で用いる動力噴水機で壁面を洗浄した。砂と細礫を主とする地層に対して非常に効果的だった。

以下で、トレンチ壁面のスケッチ図を示す。スケッチ図は第24図から第30図まである。第24図から第28図まではＳトレンチ(主トレンチ)のスケッチである。第25図は第24図の断層先端部を拡大した詳細図である。第26図はＳ面のスケッチ終了後、さらに壁面を南側へ拡張したときのスケッチである。

(3)　ＳトレンチＳ面

以下、スケッチ図の説明にはいる。最初に鍵層となる黒ボク(黒土層)と古土壌について総括説明する。

黒ボクは地震発生時期の決め手になる重要な鍵層で、全体の壁面から３層の黒ボクを確認した。上位の黒ボクから、Ａ黒ボク・Ｂ黒ボク・Ｃ黒ボクと呼ぶ。Ａ黒ボクは一番新しく、断層を覆っているから地震発生後の地層である。Ｂ黒ボクは地震発生直前の地層である。なぜなら、断層の先端部や地震時の滑落面でＢ黒ボクが動いているからである。Ｃ黒ボクは断層で大きく変位している。地震発生より少し古い地層である。Ｄ古土壌・Ｅ古土壌は地震発生よりずっと前の地層である。



第23図　トレンチの位置・大きさ・スケッチ図番号の壁面

Ｓ面のスケッチ図は第24図・25図・26図の３枚ある。第24図はＳ面の最初のスケッチで横幅６ｍ、高さ４ｍ、壁面にＡ・Ｂ・Ｃの黒ボクとＤ・Ｅの古土壌があらわれた。断層は２本確認でき、Ｆ１・Ｆ２とし、Ｆ１が主断層である。Ｆ２はＦ１から分岐した断層である。Ａ黒ボクはわずかに露出するが、人工改変により大部分が失われている。Ｂ黒ボクは断層の先端部で切られると同時に逆断層によって発生した斜面を滑落し、斜面および斜面下を埋積している。Ｃ黒ボクは断層Ｆ１とＦ２により切られ３段に食い違って現れている。Ｄ層は暗褐色古土壌、Ｅ層は赤褐色古土壌である。

第25図は第24図の断層先端部を２倍に拡大した詳細図である。Ｆ１の先端部を覆う黒ボクの産状を観察した。Ｆ１の先端部を覆っている黒ボクはＢ黒ボクとＣ黒ボクである。上部から滑落したイベント時(地震時)に発生した斜面が瞬時に崩れたものである。

第26図は第24・25図のスケッチ終了後、Ｓ面をさらに南側に1.5m堀り込んで拡張した壁面のスケッチである。Ｆ１の下部に雑然と堆積した滑落堆積物が厚く現れている。地震発生と同時に逆断層斜面が崩れて滑落してきたＢ黒ボク・Ｃ黒ボクとその下位の砂礫である。砂礫はブロック化しており、黒ボクを主体にする崩落土には雑然と砂礫やその小ブロックが混在している。Ｆ２断層は消えている。第24図から約1.5m離れたに過ぎないがＦ２断層はＦ１断層に収束している。

(4)　Ｓトレンチの Ｅ面

Ｅ面のスケッチ図が第27図である。第27図はＳトレンチのＳ面とＮ面とをつないでいる。第27図にはＡ黒ボクが水田の造成で削られている。壁面にはＢ・Ｃの黒ボクとＤ・Ｅの古土壌がある。最上部の水田耕作土の下に床土を挟んでＢ黒ボクがある。Ｂ黒ボクの下側で弱く変形を受けている場所がある。Ｃ黒ボクは見かけ上２層になる。上のＣ黒ボクはトレンチの横幅11mに連続して現れている。下に出ているＣ黒ボクはＮ５～Ｎ８ｍの間に現れる。この部分はＦ１が山形に高まっている区間である。こうした産状を示す理由は隣接する第28図を見ると判明する。第27図の中央部分は第28図のＮ３ｍの位置で切り取っており、第27図の左右の場合は第28図のＮ1.5mの位置で切り取っているためである。

Ｆ２はＳ面に近いＮ８ｍから右側でＦ１より分岐している。Ｆ２の分岐はＮ８ｍから第24図の間に見られる現象である。断層はこの部分で凸型に西側へ張り出すためである。

Ｄ暗褐色古土壌はＮ２～Ｎ３ｍでＦ１に切られて消滅する。Ｅ赤褐色古土壌は左側に下がっていき見えなくなる。

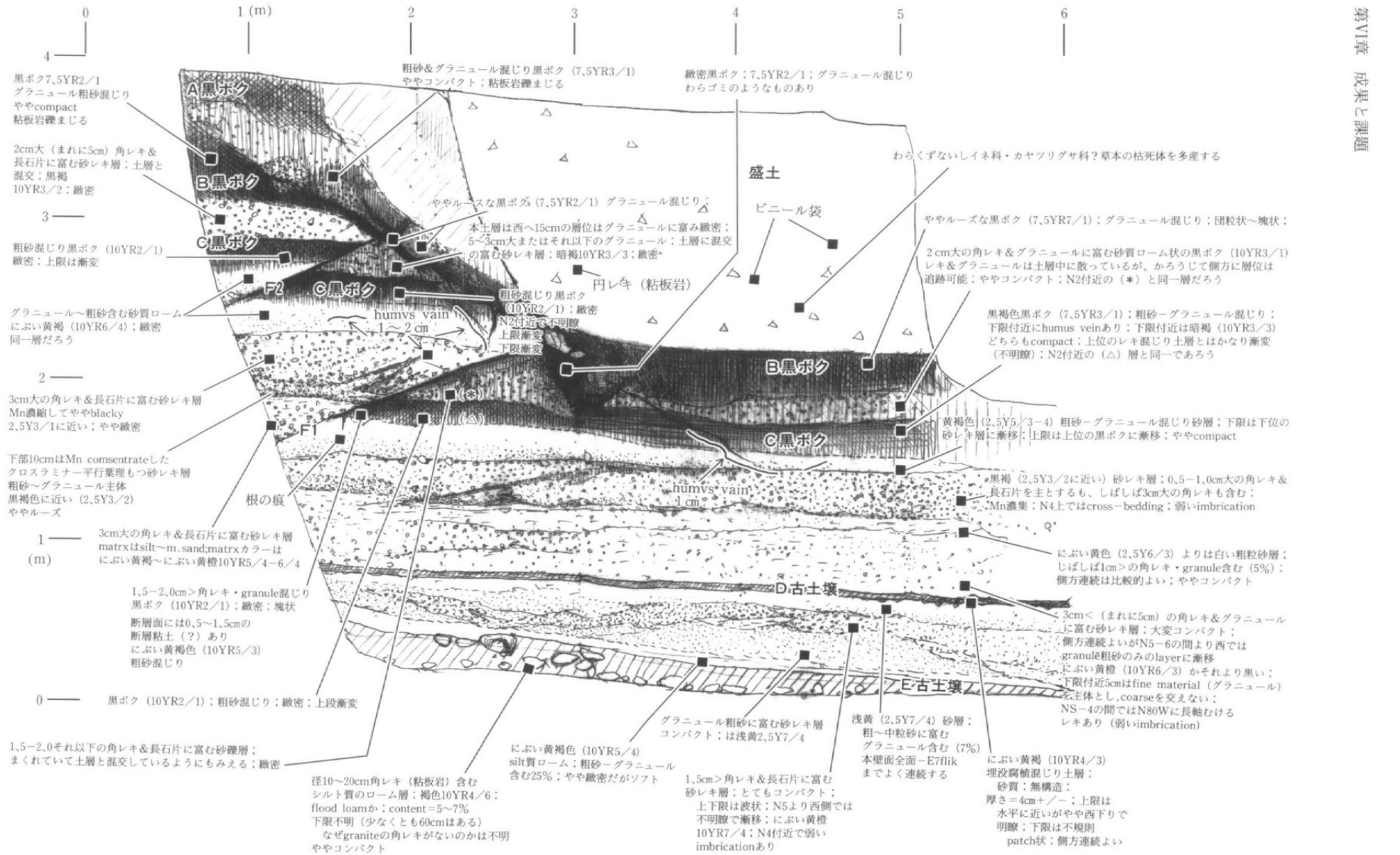
(5)　Ｓトレンチの Ｎ面

Ｎ面のスケッチ図が第28図である。Ａ黒ボクは上部に出ている。Ｂ黒ボクとＣ黒ボクはＦ１で食い違って、２段になって露頭全面に現れている。Ｆ１断層によるＣ黒ボクの変位の状況はＮ面で最もわかりやすく現れているが、Ｂ黒ボクは壁面の西側が人工的に削り取られ盛土になっていて、Ｆ１先端部の地震時の産状を見ることができない。

(6)　Ｎトレンチの Ｓ面とＮ面

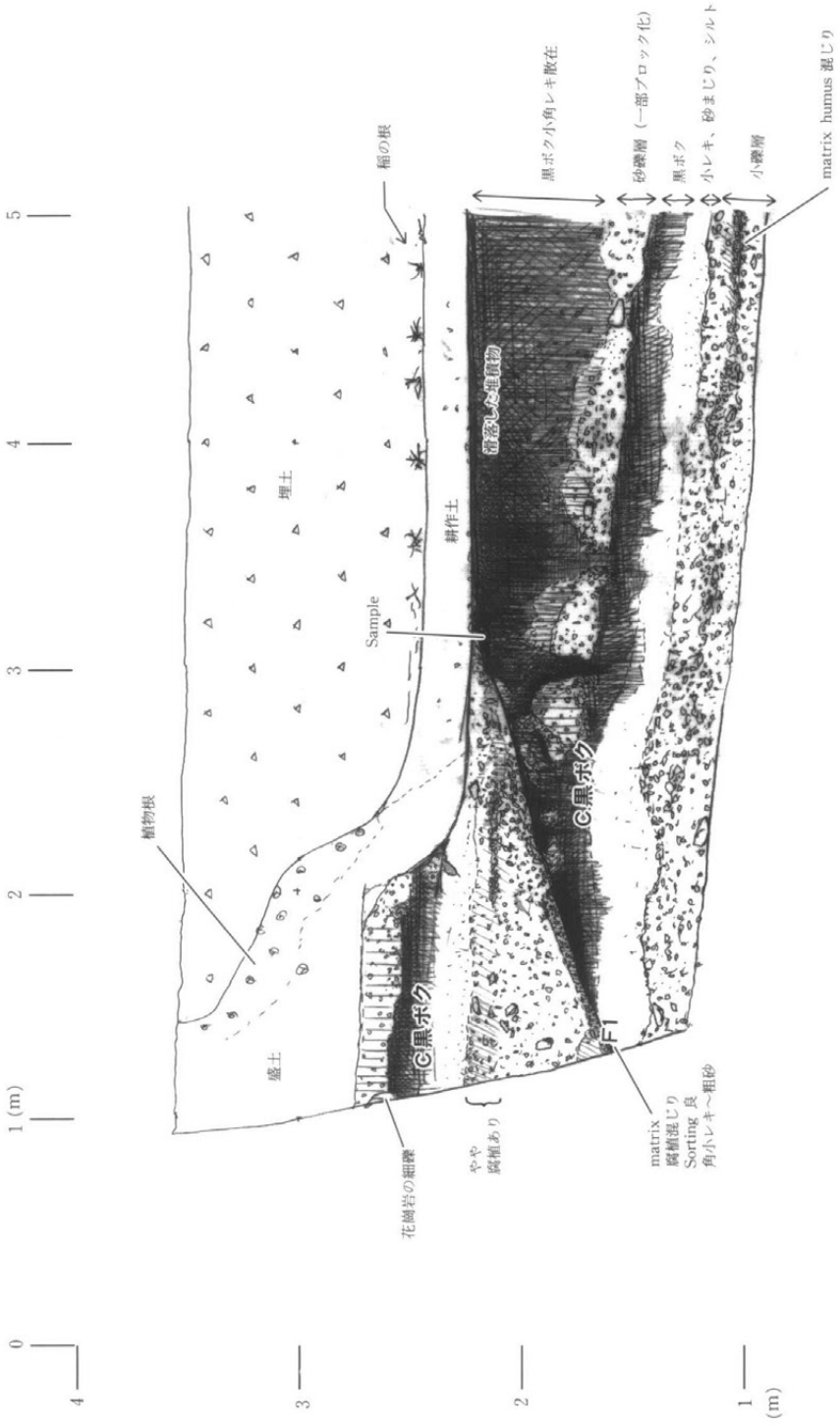
ＮトレンチはＳ面とＮ面を示す。第28図の背中合わせの位置にあたるスケッチが第29図である。第29図ではＡ黒ボクがＦ１をカバーしている。Ｂ黒ボクはＦ１の先端部にあってＦ１で切られる。断層上盤側のＢ黒ボクは見えているが黒ボク全体が厚く、Ａ黒ボクとの区別ができない。Ｃ黒ボクはＦ１によって変位して２段になって見える。

ＮトレンチのＮ面は第30図である。Ｎ面ではＦ１断層の先端部が観察できる。Ｆ１の上盤側が前方に押

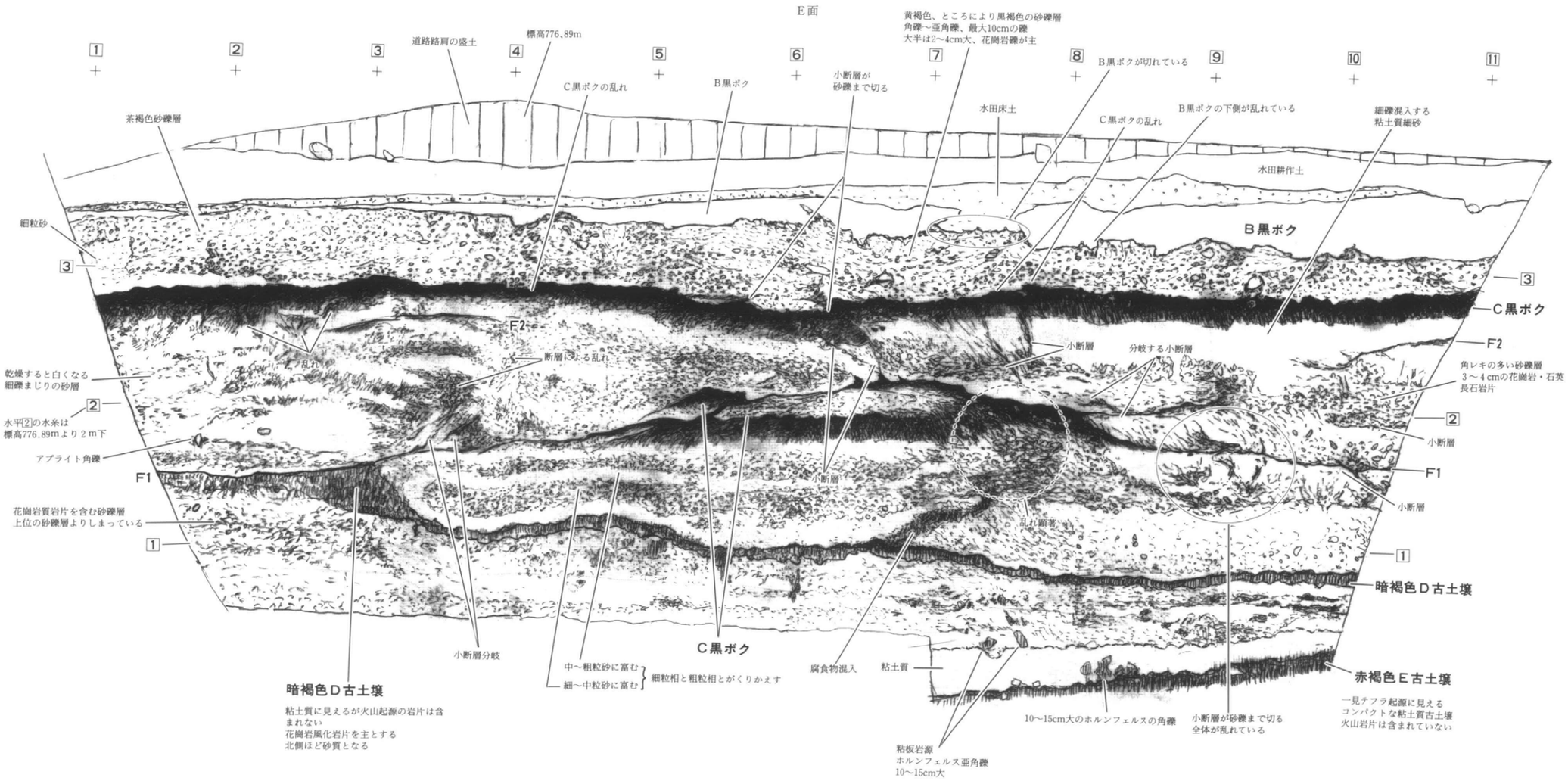


第24図　Sトレンチの S面スケッチ

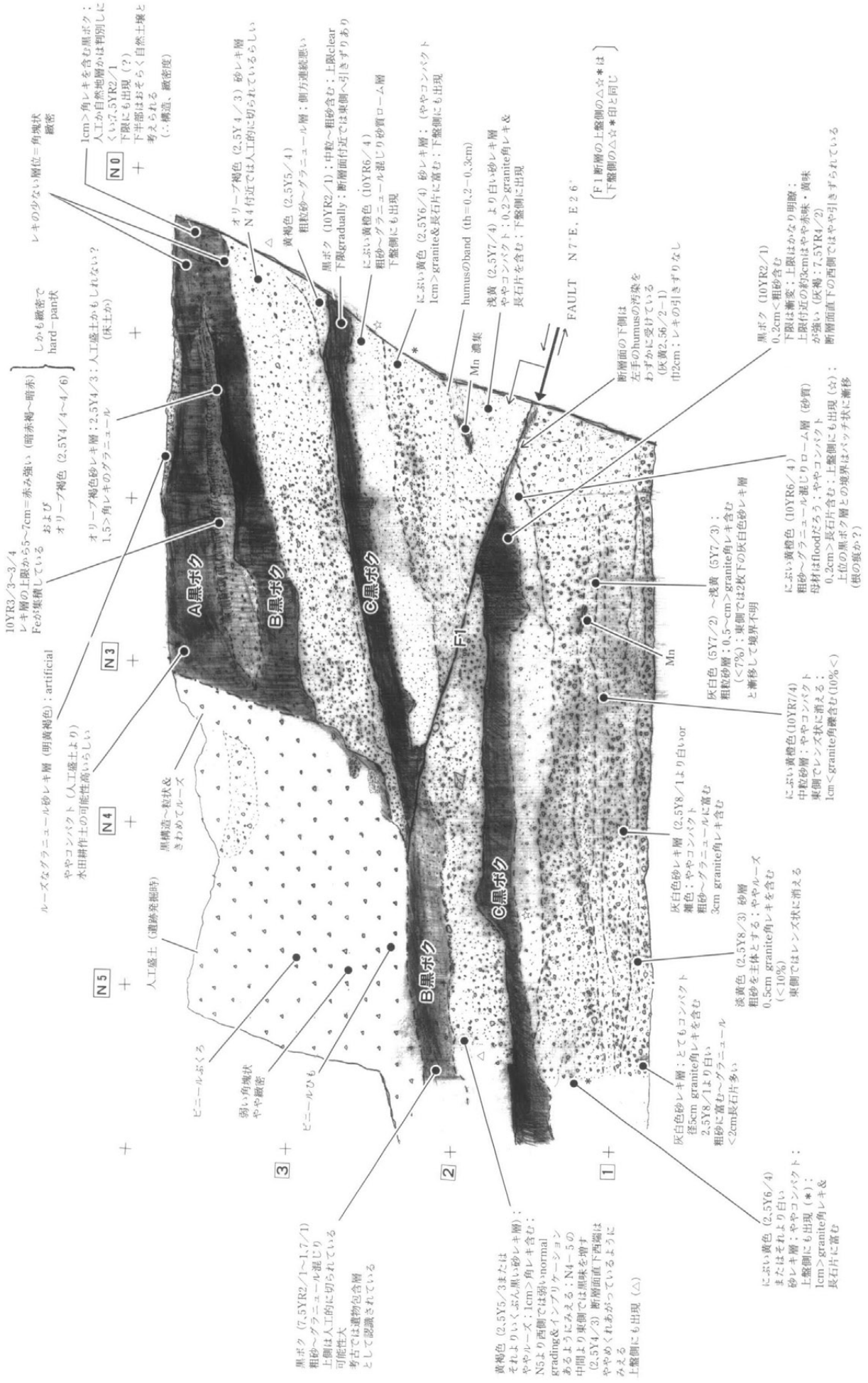
第25図　Ｓトレンチ Ｓ面の拡大スケッチ



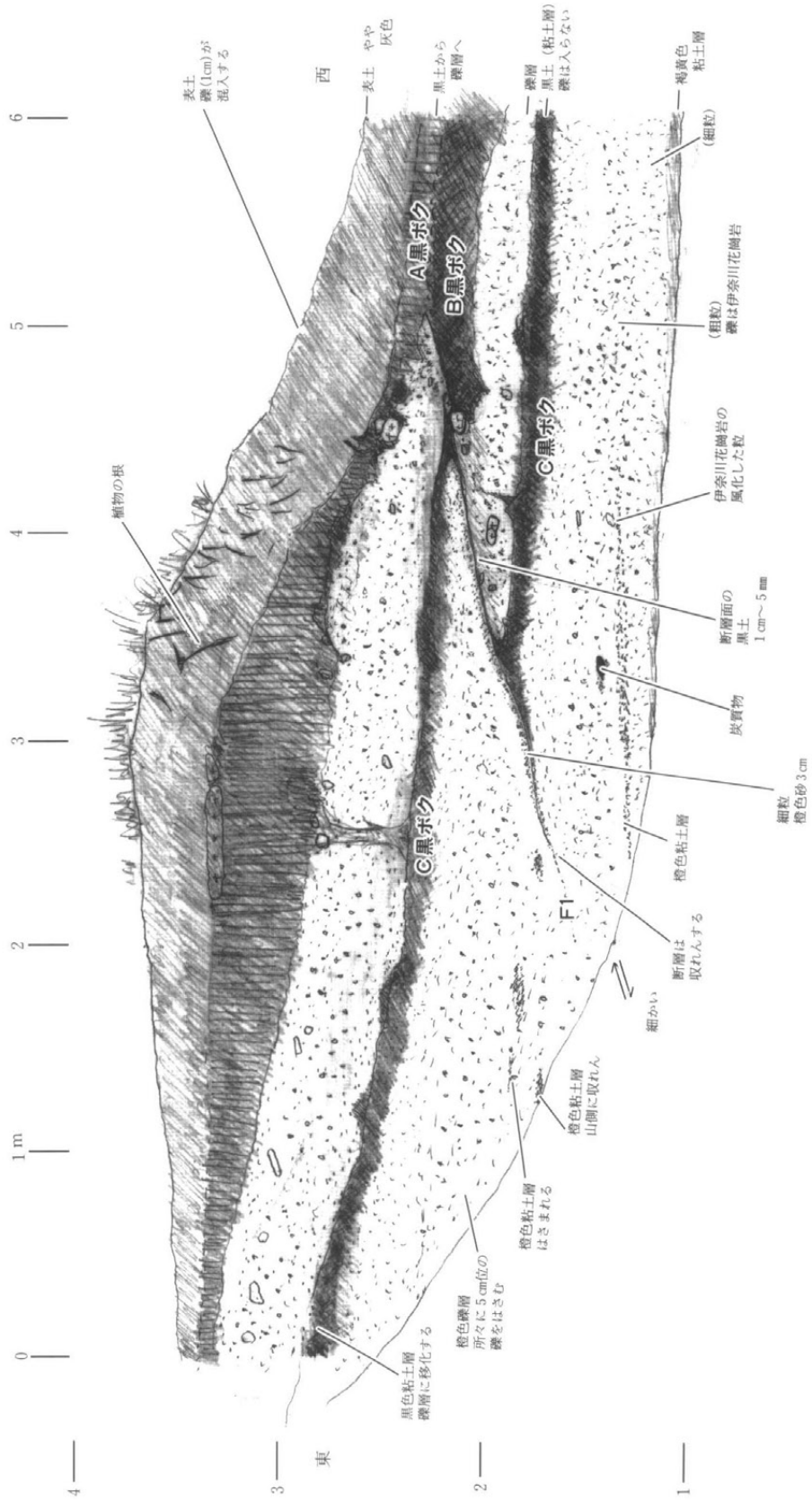
第26図　Ｓトレンチ Ｓ面の拡張



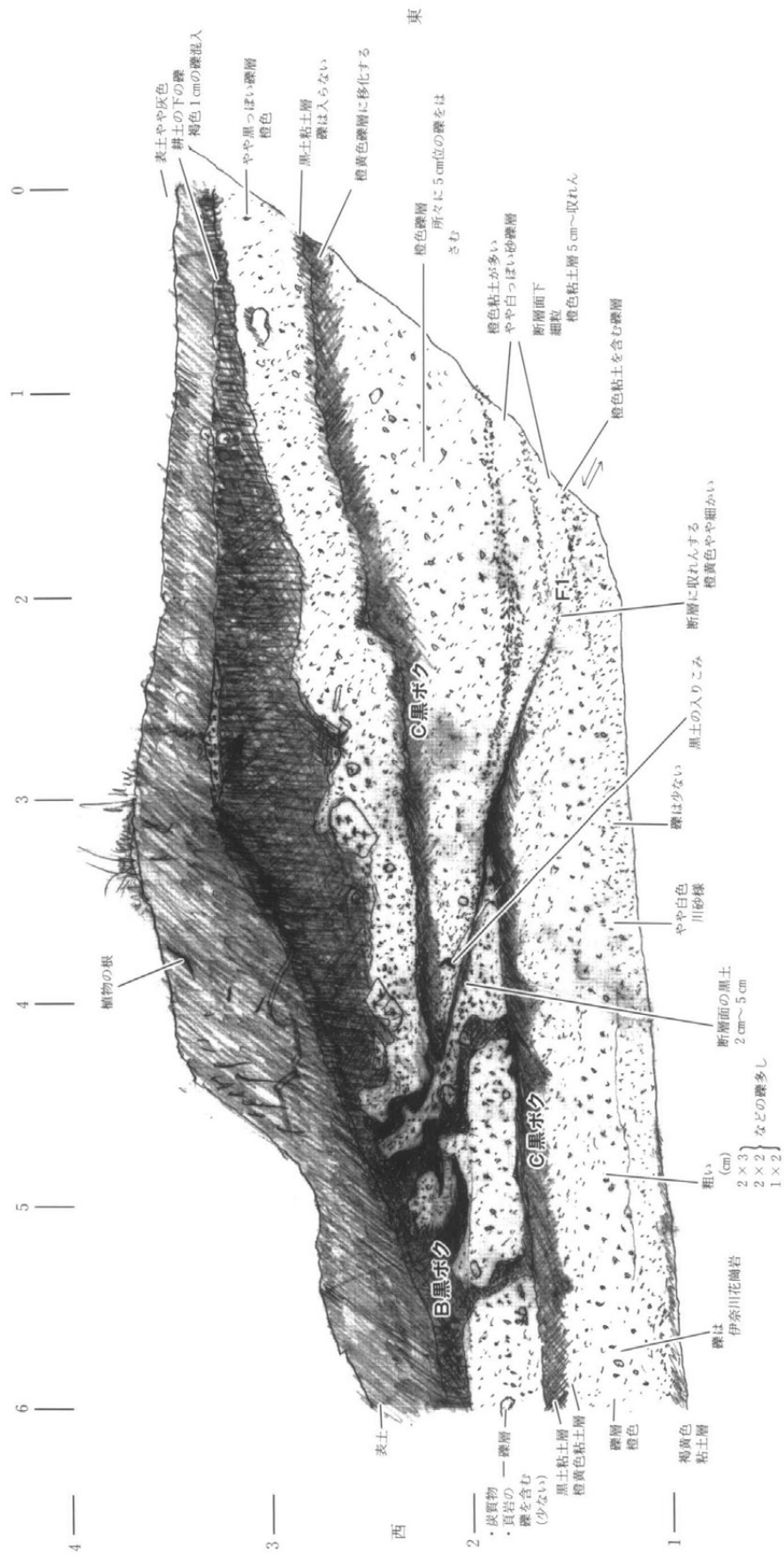
第27図　Sトレンチの E面スケッチ



第28図　Ｓトレンチの N面スケッチ



第29図　NトレンチのS面スケッチ



第30図　Ｎトレンチの N面スケッチ

し出している。B黒ボクとC黒ボクとの間の砂礫層がブロック化して火炎状の複雑な形態を示す。砂礫ブロックの間には黒ボクが充塡している。上盤のB黒ボクに連続するものである。地震時に上盤が前方へ迫り出すと同時に、迫り出した滑落物にF１断層がのし上がっている様子を示している。こうした現象は１～２秒間の瞬時に発生する現象である。

逆断層による上盤の滑落は瞬間的に起こる。動いた瞬間、上盤の先端部は空中に突き出る。同時に、突き出た部分が崩れる。つぎに、崩れた崩落物に上盤がのし上がってくる。こうした現象を1964年のアラスカ地震(マグニチュード8.5)で、たまたまアラスカ南部を地質調査中のプラフカ(PLAFKER,G.1967)が観察して報告している。

一般に30度以下の低角逆断層の場合のネットスリップ(実変位量)は水平短縮量より２倍ほど大きくなる(IKEDA,Y.,and YONEKURA,N.1986)。こうした低角逆断層の産状が観察できる断面である。

(7)　トレンチ壁面のテフラと砂粒の分析結果

トレンチではA・B・C・D・Eの黒ボク・古土壌など細粒堆積物が断層解明の鍵になる。B・C黒ボクは断層で切られるから地震前の堆積物である。とくに、B黒ボクは地震直前の堆積物である。A黒ボクは断層をカバーしているから地震後の堆積物である。A・B・Cの堆積時期を知る手がかりを得るため、黒ボク中の広域テフラの検出を試みた。また、D・E古土壌中に御嶽起源の鉱物があるか、これも年代資料になる。さらに、砂礫中に火山起源の鉱物が混入しているかも確認するため、寺平により30ヶ所から試料採取して分析を行った。

試料採取はSトレンチのS・E・Nの各壁面で実施した(第31図)。試料分析結果は第５表に示す。

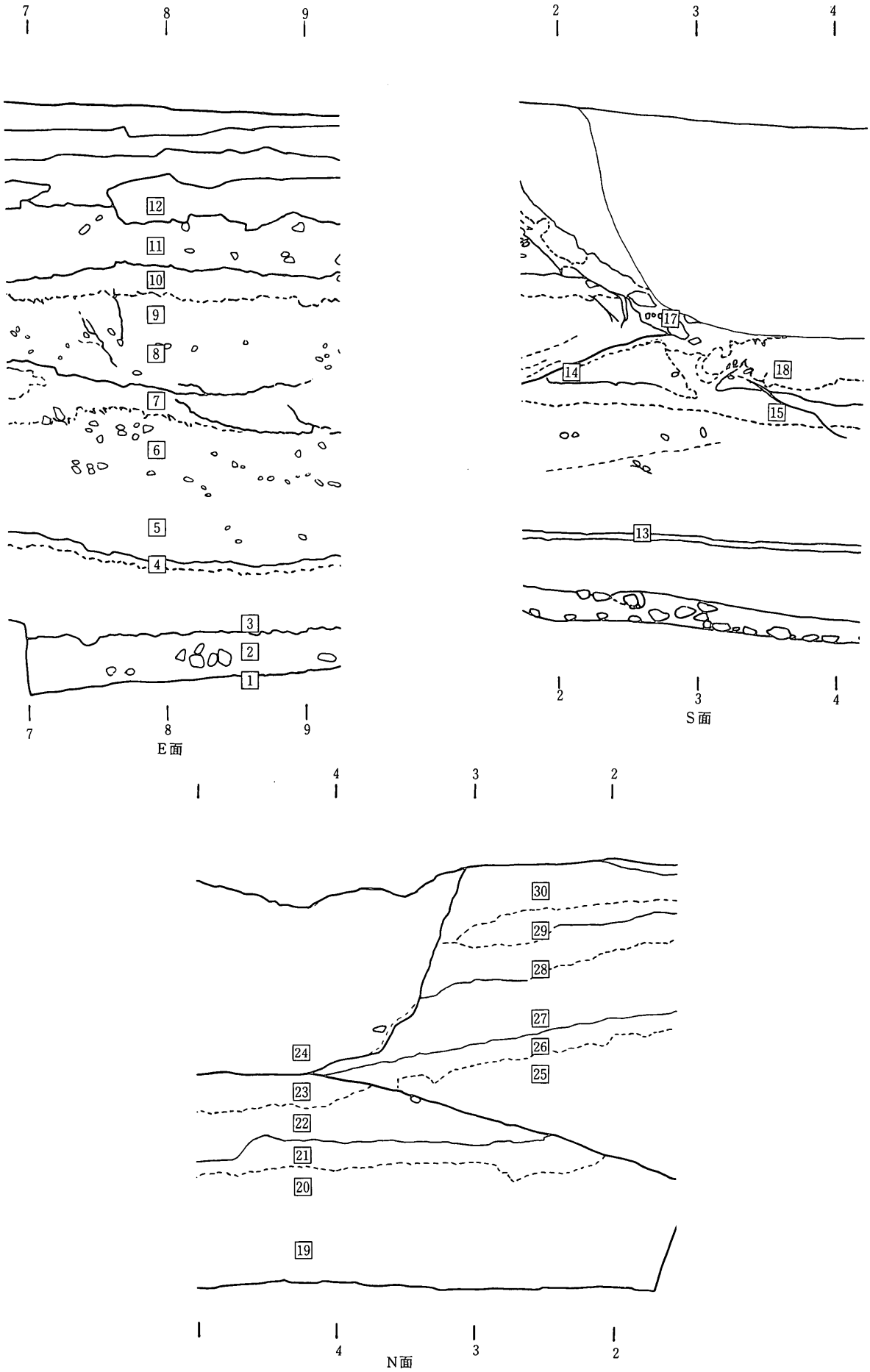
広域テフラの鬼界アカホヤテフラ(以下K-Ahと記す)がSトレンチE面の試料E12、S面のS16・S18、N面のN28の４試料から確認された。４試料はB黒ボクである。したがって、B黒ボクの年代はK-Ahの降下暦年代である7200年前より新しい。この結果から地震発生はK-Ahの降下以降である。

D・E古土壌から火山起源の鉱物は未確認である。砂礫中からはK-Ah以外の広域テフラや近傍の御嶽山からのテフラが確認できなかった。これは、トレンチ内堆積物が広域テフラの姶良Tn(AT)約25000年前より新しい地層からなると考えられる。

第５表　上松町吉野砂粒分析結果

試料No.	採集場所	特徴	主な鉱物	火山ガラスの量	火山ガラスの形態他	備考
2815	Ｓトレンチ E1	黒褐色土、0.2～0.3(大1.0)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2816	Ｓトレンチ E2	灰褐色土、0.1～0.3(大0.8)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2817	Ｓトレンチ E3	ベージュ色土、0.1～0.3(大0.8)cm花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2818	Ｓトレンチ E4	灰褐色土、0.1～0.3(大0.8)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2819	Ｓトレンチ E5	灰色土、0.1～0.3(大1.0)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2820	Ｓトレンチ E6	灰白色砂、0.2～0.6(大1.4)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2821	Ｓトレンチ E7	黒色土、0.1～0.3(大0.5)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2822	Ｓトレンチ E8	灰色砂質土、0.2～0.4(大0.6)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2823	Ｓトレンチ E9	灰色砂質土、0.2～0.6(大0.8)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2824	Ｓトレンチ E10	黒色土、0.2～0.4(大0.6)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2825	Ｓトレンチ E11	灰色砂、0.2～0.6(大1.5)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi,ho			花崗岩風化砂粒
2826	Ｓトレンチ E12	黒色土、0.2～0.4(大0.5)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi	＋	bw,(br-gl)	花崗岩風化砂粒、K-Ah
2827	Ｓトレンチ S13	黒褐色土、0.2～0.5(大0.7)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2828	Ｓトレンチ S14	黒色土、0.2～0.4(大0.6)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2829	Ｓトレンチ S15	黒色土、0.2～0.4(大1.3)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2830	Ｓトレンチ S16	黒色土、0.2～0.4(大0.6)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi	＋	bw,br-gl	花崗岩風化砂粒、K-Ah
2831	Ｓトレンチ S17	黒色土、0.2～0.3(大0.5)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2832	Ｓトレンチ S18	黒色土、0.2～0.4(大0.8)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi	＋	bw,br-gl	花崗岩風化砂粒、K-Ah
2833	Ｓトレンチ N19	ベージュ色砂質土、0.2～0.4(大0.7)cm花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2834	Ｓトレンチ N20	暗灰色土、0.2～0.4(大0.6)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2835	Ｓトレンチ N21	黒色土、0.2～0.3(大0.5)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2836	Ｓトレンチ N22	黒灰色砂、0.2～0.4(大0.9)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2837	Ｓトレンチ N23	黒色土、0.2～0.6(大1.5)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2838	Ｓトレンチ N24	黒色土、0.2～0.4(大0.8)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2839	Ｓトレンチ N25	黄褐色砂、0.2～0.4(大0.8)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2840	Ｓトレンチ N26	黒色土、0.2～0.3(大1.1)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2841	Ｓトレンチ N27	灰褐色砂、0.2～0.5(大1.2)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2842	Ｓトレンチ N28	黒色土、0.2～0.4(大0.8)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi	＋	bw,br-gl	花崗岩風化砂粒、K-Ah
2843	Ｓトレンチ N29	黒褐色土、0.2～0.4(大4.0)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒
2844	Ｓトレンチ N30	黒色土、0.2～0.4(大0.8)cm 花崗岩破片混入	fl,qt,bi			花崗岩風化砂粒

凡例
鉱物・岩片等　ho：角閃石，bi：黒雲母，fl：長石，qt：石英
火山ガラスの量　＋：<1%，＋＋：1%～10%，＋＋＋>10%
火山ガラスの形態他　bw：泡壁型，pm：軽石型，br-gl：褐色ガラス
(　)はごくわずか含まれるもの



第31図　Sトレンチ壁面の砂粒分析試料採取位置

(8)　黒ボクの14Ｃ年代

断層が動き地震が発生した年代を決めるため黒ボクの７地点から試料採取して14Ｃ年代の測定を行った。試料採取場所とその結果(年代値)を第６表・第32図a・a′・b・cで示す。14Ｃ年代の測定は(株)地球科学研究所に委託した。測定方法は高精度の結果を得るため加速器質量分析(ＡＭＳ)法による。

位置番号	試料名	14Ｃ年代 (y BP)	δ13Ｃ (permil)	補正14Ｃ年代(y BP)	暦年代(14Ｃ年代をCALIB3.0で暦年補正＊) (cal yBP)
1	3.0-0.75	8100±70	-25.2	8100±70	8955(8990)9182
2	2.1-1.88	7020±80	-24.9	7030±80	7713(7810,7870,7880)7909
3	2.6-2.15	4680±70	-22.5	4720±70	5322(5340,5350,5460)5578
4	2.4-2.5	7720±70	-26.3	7700±70	8377(8420)8500
5	2.35-3.05	3310±50	-22.4	3350±50	3476(3574)3632
6	5.10-2.20	2720±60	-24.3	2730±60	2763(2790)2866
7	5.17-2.25	810±60	-24.7	820±60	670(720)776

第６表　上松町吉野における上松断層トレンチでの黒ボクの14Ｃ年代

(加速器質量分析法による。発注は工業技術院地質調査所環境地質部地震地質課)

註

＊14Ｃ年代(y BP)：試料の14Ｃ／12Ｃ比から、西暦1950年(AD)から何年前(BP)かを計算した年代。
14Ｃ半減期として5,568年を使用した。

＊δ13Ｃ(permil)：試料の炭素安定同位体比(13Ｃ／12Ｃ)を測定し、試料炭素の同位体分別の補正をして測定精度を向上させる。(単位は千分率)

＊暦年代：測定された14Ｃ年代から暦年代に較正する。過去の宇宙線強度の変動で大気ＣＯ²の14Ｃ濃度は一定ではない。数千年オーダーの長周期変動と百年から数十年オーダーの短周期変動がある。アメリカのBristlecone pineなど年代既知の樹木年輪の14Ｃの詳細な測定値により、現在から7500年前に遡って較正曲線が得られているから、放射壊変による減衰の効果を補正して暦年代が求められる。ただし、この場合一万年(BP)より古い試料には適用できない。

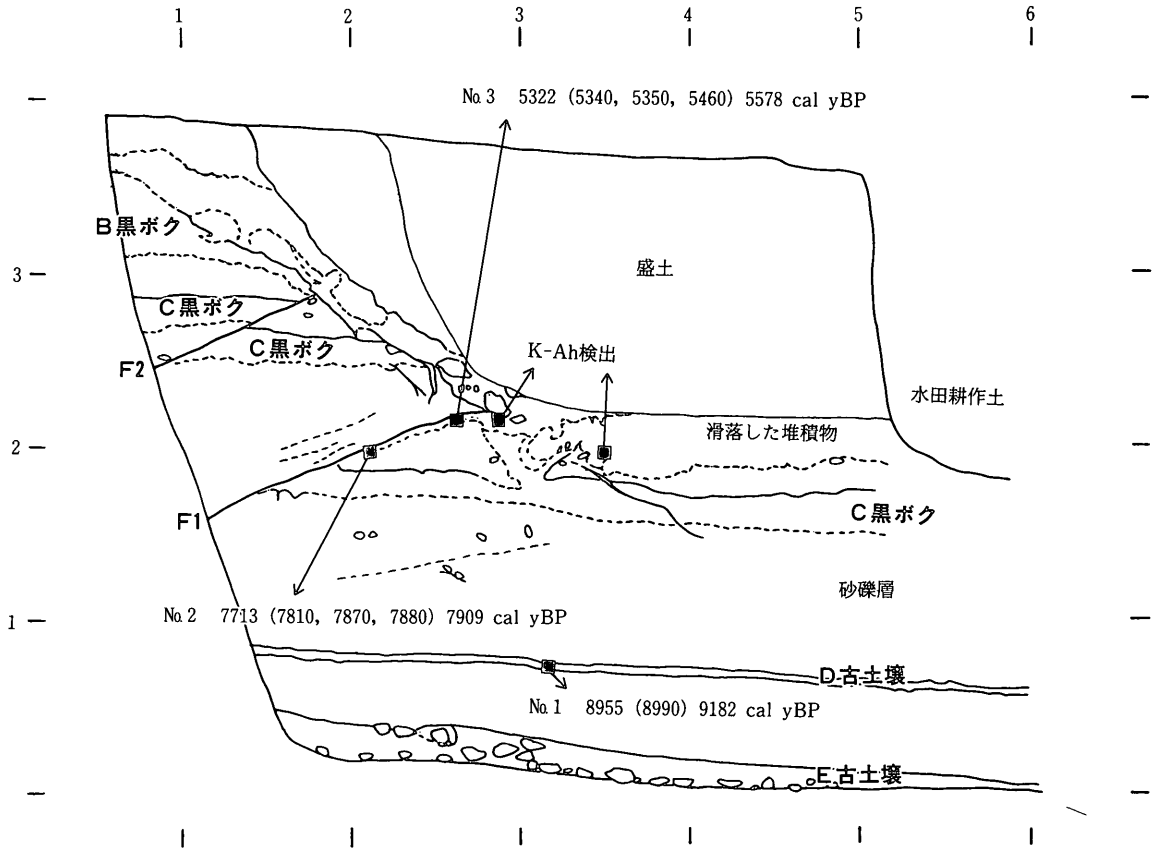
今回の暦年補正は、刈谷愛彦によりMS-DOS上で動くコンピュータ・プログラムのCALIB　3.0を使って補正した。その文献は Stuiver,M.and Reimer,J.(1993):Extended 14C data base and revised CALB 3.0 14C age calibration program. Radiocarbon, 35, 215-230.

なお、暦年補正値には補正に使うデータセットが異なれば補正値も変わる。ここでは上記CALIB 3.0を用いた。暦年補正値の見方をNo.1試料で説明する。14Ｃ年代は8100±70年(BP)であるが暦年補正値は8955(8990)9182年前と約千年古くなる。この表記の意味は8990年前を中心に68％の確率で8955～9182年前には入ることを示す。過去において14Ｃ濃度が一定でなかったために、8990年の両側の年数は必ずしも対称になっていない。また、8678～9231年前にはいる確率は95％である。

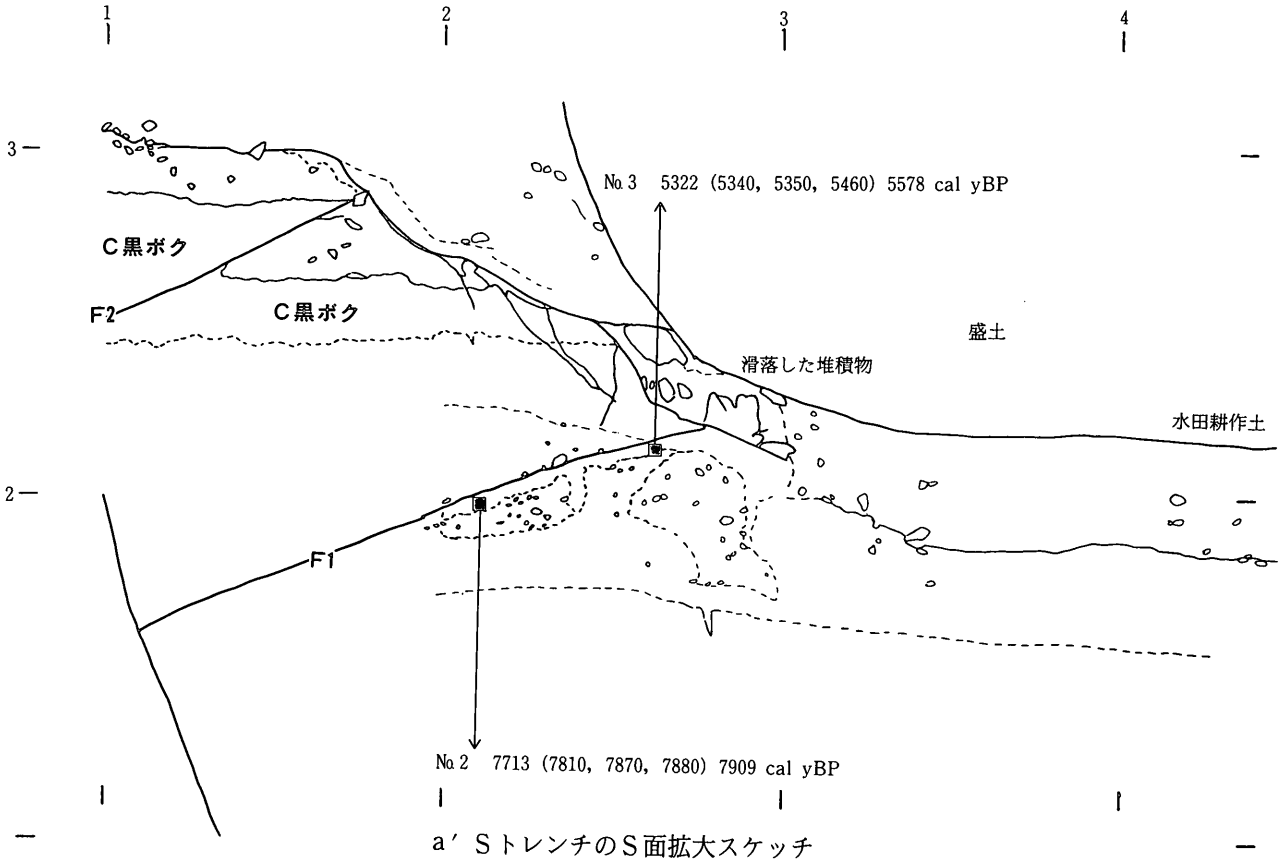
(9)　14Ｃ年代測定から考えられるイベントの年代

吉野のトレンチ調査では一回の断層活動(地震発生を意味しており、以下イベントと記す)を確認した。その年代を考察したい。断層で切られているＢ黒ボクから得られた14Ｃ年代はNo.5の3574 cal yBP、No.6の2790 cal yBPである。

若い年代値No.6の場合からイベント年代を考察してみる。年代の末尾に記すcalはcalendarであり、暦年代であることを示す。BPはbefor AD 1950であるから、No.6の2790 cal yBPは1950年から2790年前であることを示している。今年は2000年であるから2790＋(2000－1950)＝2840年前となる。吉野でのイベントは2840年前より後である可能性がある。しかし、No.5の3574 cal yBPという年代も出ているので、これを考

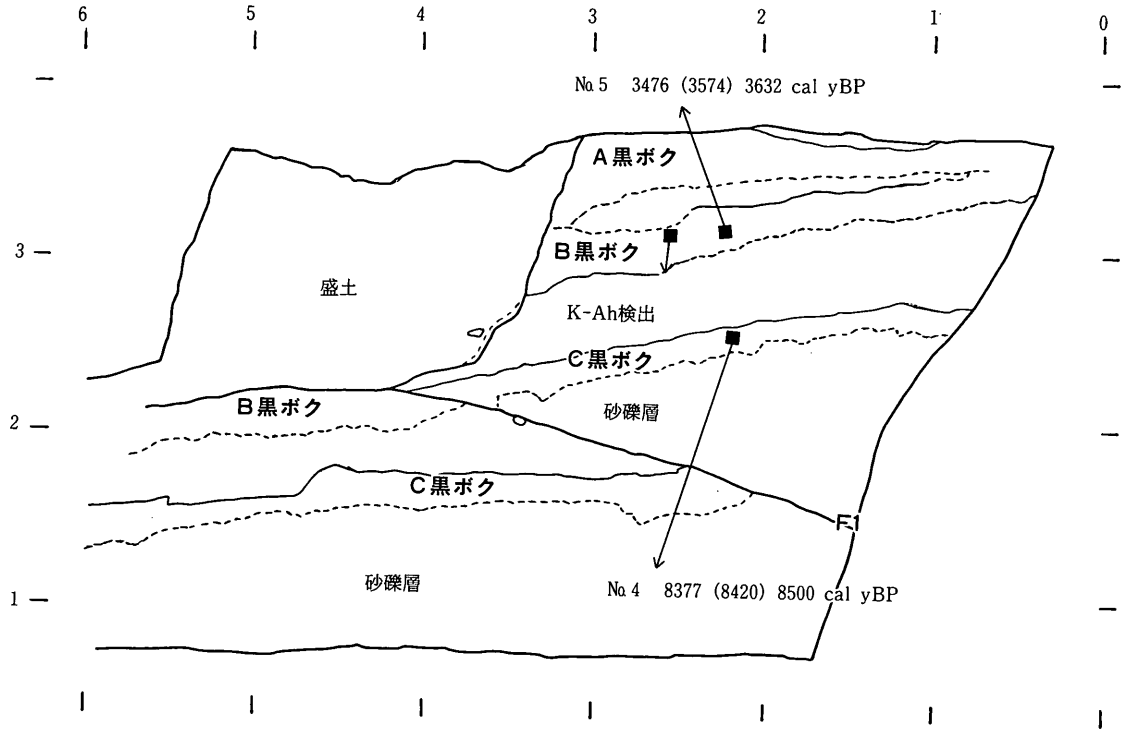


a　Sトレンチの S 面の年代試料位置（総合図）

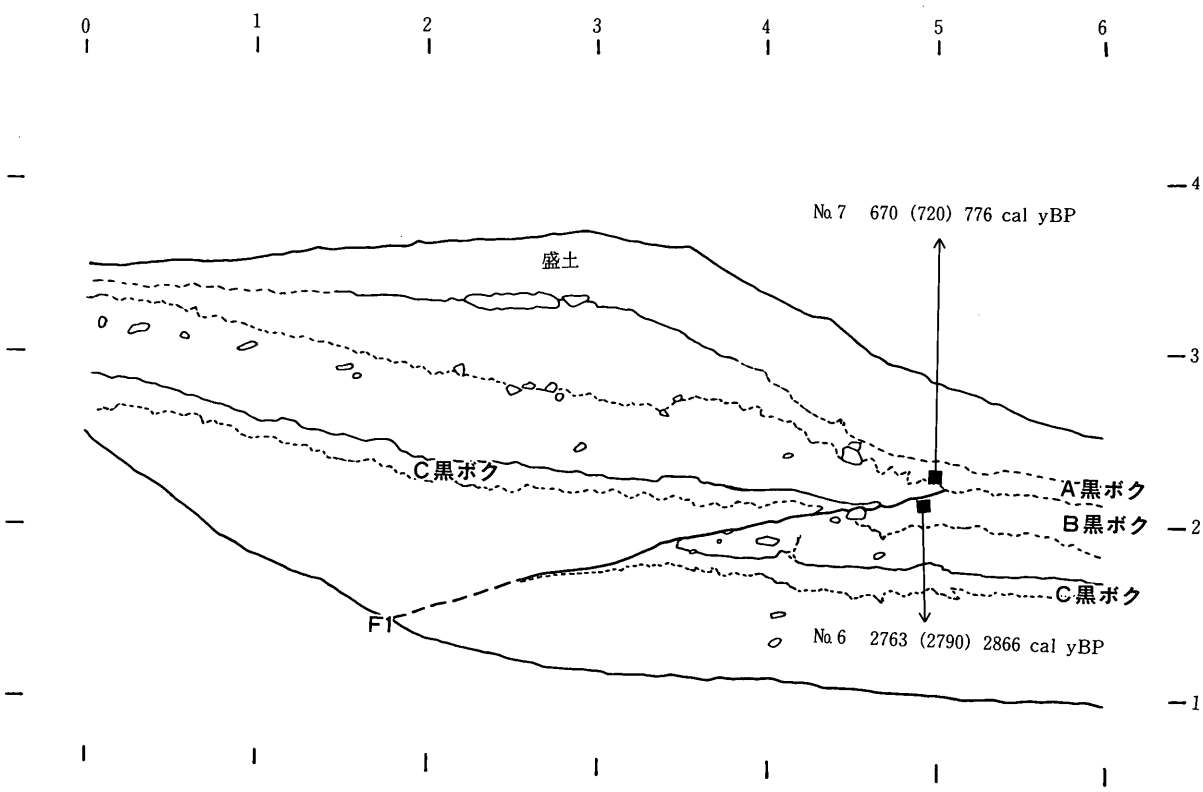


a′ Sトレンチの S 面拡大スケッチ

第32図a　14C 年代測定試料採取場所(1)



b　Ｓトレンチの N 面の年代試料位置



c　Ｎトレンチの N 面の年代試料位置

第32図b　14Ｃ年代測定試料採取場所(2)

慮すると5400～2840年前以降となる。

付記 1

14C年代とは別の年代基準としてB黒ボクから再堆積と見られる広域テフラのK-Ahが検出されている。K-Ahが降下した暦年代は約7200年前である。これを考慮するとイベントの14C年代は5400～2840年前付近とするのは妥当である。

A黒ボクから採取した№7の14C年代は720 cal yBPである。これはイベント後の年代である。

付記 2

トレンチ周辺での埋蔵文化財調査では、B黒ボクと同時期にあたると見られる黒ボクから約8千年前の押型文土器が出ている。また、A黒ボクに相当する所には約4千年前とされる縄文時代中期後葉の竪穴住居跡がある。黒ボクに包含される遺物から推定するイベントの年代は8000年以降－4000年以前である。これも概略的に14Cのイベント年代と矛盾しない。

付記 3

吉野のトレンチ調査後、苅谷ほか(1999)は南木曽町一石栃の馬篭峠断層で、高瀬ほか(1998)および高瀬ほか木曽地方地質研究会(1999)は上松町芦島北方の上松断層、上松町林道松山線の清内路峠断層、南木曽町胡桃田の馬篭峠断層などの活断層露頭から新期の活動年代を報告している。その結論は上記文献を見られたい。吉野の解釈については本報告と異なっている。

5　吉野扇状地の地形地質

(1)　吉野の扇状地

吉野の扇状地は木曽駒ヶ岳から流れ下る滑川の左岸に発達している。滑川本流は木曽前岳・本岳・中岳・宝剣岳・三沢岳の水を集めて下る稀にみる急流河川である。また、支流の北股沢は木曽前岳・麦草岳から一直線に下る、本流に勝る急流河川である。滑川が木曽川に注ぐ寝覚ノ床からは稜線に突き上げていく北股沢が迫って見える。谷頭の稜線には林立する尖鋒の牙岩(2,676m)が空を刺している。

木曽駒ヶ岳(2,956m)から木曽川合流点(650m)までの直線距離は約10kmであるから滑川の平均河床勾配は1/7.7で、大変な急流河川といえる。ここから大量に押し出してくる巨大な花崗岩塊が木曽川本流の河床まで達している。少しさかのぼった3万年前ころの地質時代に、現在より激しく流れ下ってきた花崗岩塊が滑川左岸を埋めて吉野の土石流扇状地を造っている。

(2)　吉野扇状地の原地形の復元

吉野の扇状地は大規模ほ場整備事業によって地表部の地形は大きく改変している。少し前の自然地形はほとんど消えている。事業実施前の計画平面図(千分の一)と、ほ場整備前の垂直空中写真があった。これらには道路と水路が地形境界線に準じて走っている。田畑の土手は水平線を示す。これらの情報と現地地表調査との結果から吉野扇状地の微小地形面区分図(第33図a)と地形面区分図(第33図b)を作成した。

以下は調査結果による吉野扇状地の生い立ちと上松断層との関わりを考察する。

(3)　上松断層の隆起に伴う小扇状地の形成

上松断層を吉野扇状地上に追跡するとN35Eの走向で延びている。断層崖の比高は10m前後である。南の前野付近では崖上が山林のため地形がわかりにくいが、吉野の最上部に位置する北東端の集落内を断層が通過していて、崖地形の全貌が観察できる。ここでの比高は10～13mである。

断層崖の斜面を流れ下っている小渓流がある。小渓流が断層崖下で小扇状地を形成している。前野の集

落の場合はよくわかりやすい(第34図)。断層が動いて隆起すれば上盤側から土砂の供給が盛んになって扇状地の形成を促進する。前野では集落が立地する部分に最新の小扇状地ができている。上方斜面から流れ出て小扇状地を構成しているのは砂である。基盤の花崗岩の風化産物であるマサが供給されている。現河床は小扇状地を１m余掘り込んでいる。隆起に伴った土砂の供給が平常に戻れば、侵食が復活して扇状地が解析されるようになった結果である。

扇状地の形成は一回でなく二回以上あると観察できる。吉野扇状地の全域では上松断層に沿って断層隆起を反映した新期の小扇状地が複合して連なっている。その様子は第33図に示した。

(4)　吉野扇状地の形成過程

吉野扇状地を歩くとあちこちに木曽駒花崗岩の２～３m大の巨礫が散在している。畑に埋まっているから詳しくはわからないが、さらに大きな巨礫がある可能性は十分にある。こうした土石流堆積物により、扇状地上には微高地と微低地を繰り返している。微低地はやや連続していて水田として利用していることが多い。微高地は微低地より連続性に乏しく、末端部で盛り上がった地形を示す。こうした場所を宅地に利用しているところが多い。

吉野のほぼ中央部を北東から南西に横切っている古くからの道がある。その先は東野へ通じる林道につながっている。この横断道より上方の扇状地面は小起伏に富んでいて土石流による巨礫が散在している。横断道よりやや下側からは比較的平坦な地形となっていてほ場整備前から水田が一面に広がっていた。吉野扇状地では横断道より下の部分が一番初期の扇状地面である。そこには巨礫が少なく砂礫の堆積に富んでいる。地形面区分図(第33図ｂ)でＩ面としている。これに対して、横断道より上方の土石流堆積物に富む扇状地面をII面としている。

吉野扇状地の北端の縁の部分は巨岩累々とした土石流堆積物で占められており多くは雑木林として利用している。末端部はII面よりやや高く盛り上がっている。ここをIII面とする。III面は礫の粒径がII面より大きくなる。吉野扇状地では複数の扇状地が順次重なっていく合成扇状地であり、新しくなるにしたがって礫の粒径が増大する。これは中央アルプスの脊梁部の標高が上昇してきたことを現している。

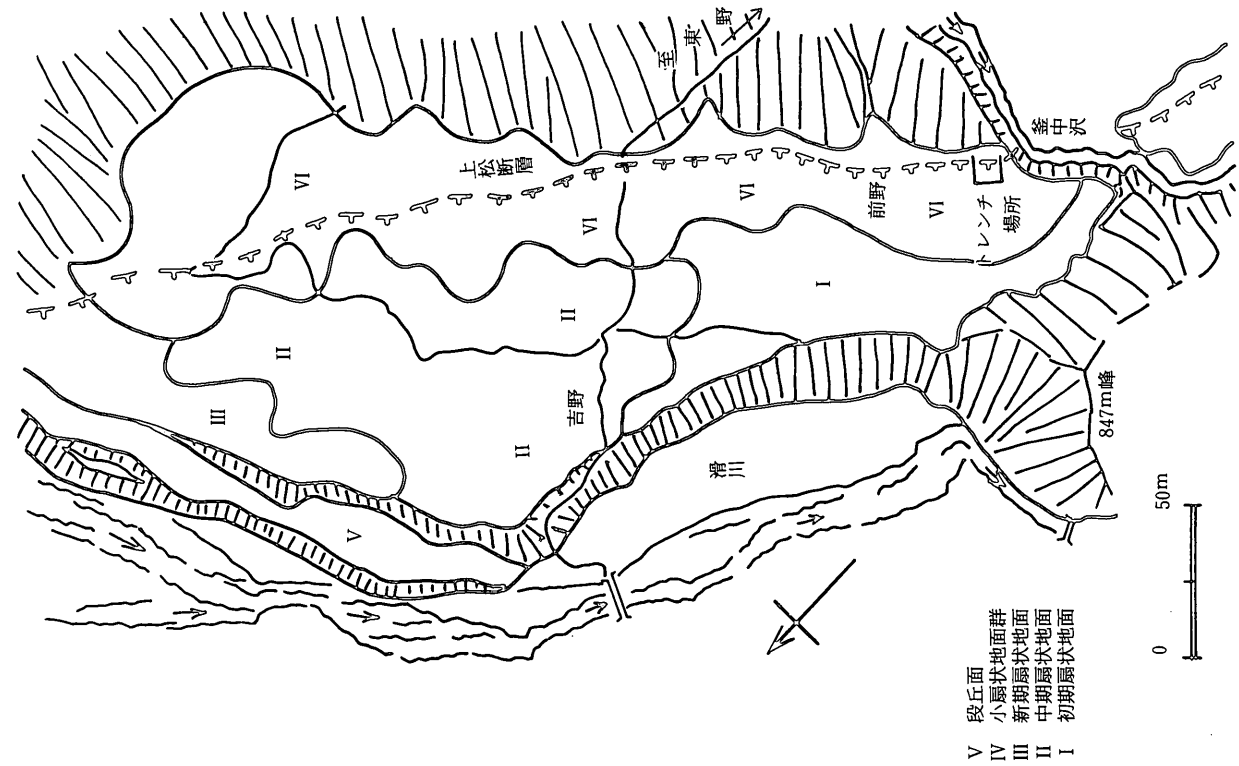
III面は上方でII面を侵食している。これは断層隆起の結果を反映している。上松断層が活発になってからの土石流扇状地である。先に述べたように上松断層に沿っている小扇状地はＩ～III面を覆っている。堆積物は断層の上盤側斜面から供給されている砂に富む砂礫である。吉野扇状地面では一番新しく形成された部分で、これをIV面とする。

滑川に面している北側には段丘が付随している。これをＶ面とする。

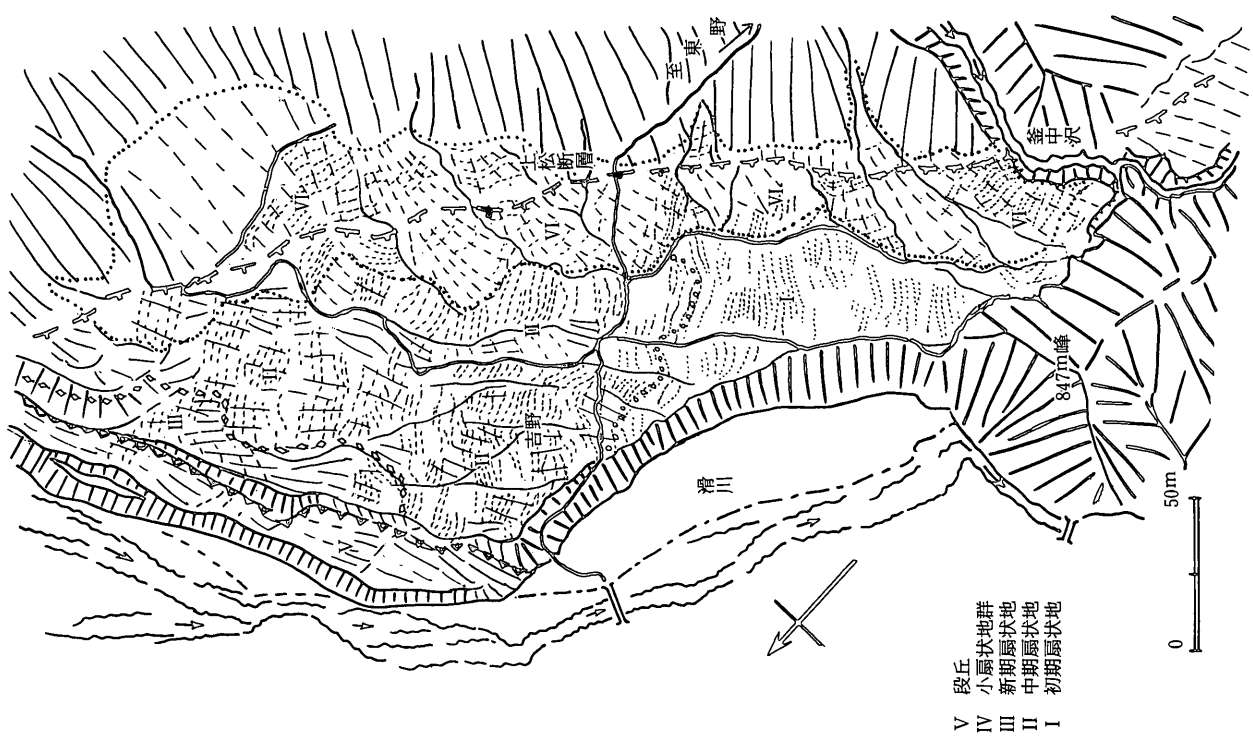
(5)　吉野扇状地面上のテフラ

吉野扇状地上の褐色土や黒ボクには御嶽火山起源のテフラが混入していない。一部の黒色土からはATやK-Ahが極わずか含まれる。上松断層の上側斜面で林道東野線の一部からは御嶽起源のテフラが混じっていた。以上の少ない知見による地表地質調査の結果では、吉野扇状地の形成期は新期御嶽火山活動の末期ころからと考えられる。約３～４万年前ころからと推定する。

トレンチ掘削地の壁面の古土壌中からも新期御嶽起源のテフラは入っていない。ただ、Ｉ面やII面の堆積物中からの検討ができなかった。この面を造る土石流堆積物の下にテフラを含む細粒堆積物があるので今後の課題である。



b　吉野扇状地の地形面区分図

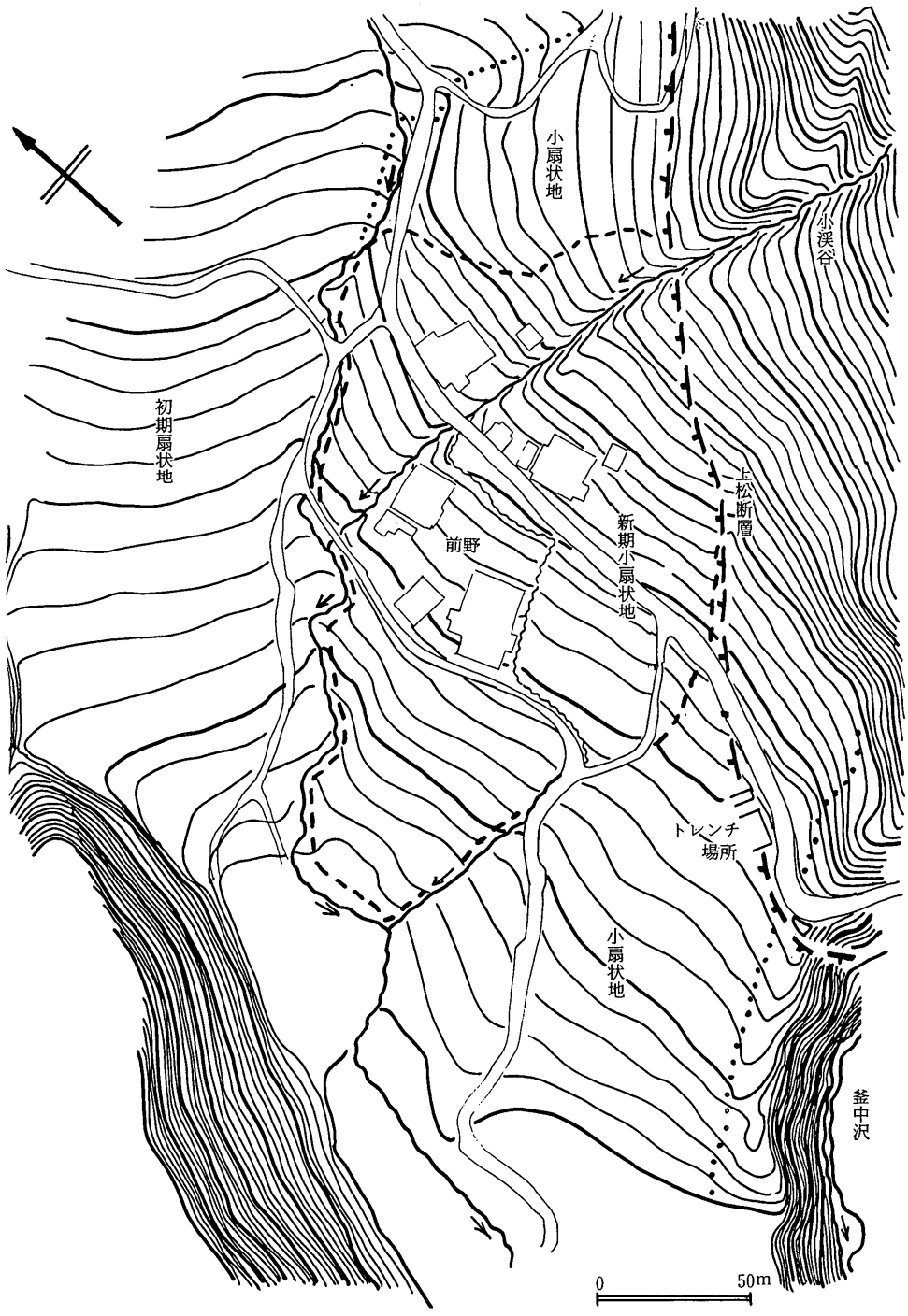


第33図a　吉野扇状地の微小地形面区分図

6　吉野扇状地の形成と木曽川本流への影響

(1)　最終氷期における大規模扇状地の形成

滑川右岸には荻野原など木曽山脈山麓斜面に大規模扇状地が発達している。上松断層の上盤側で隆起し、開析されている。面の傾斜も現河床より強く、木曽山脈の隆起を反映し木曽川の谷に向かって撓曲している。今回の調査では荻野原の形成年代の決め手は確認できなかった。しかし、荻野原の直下にあたる徳原で三岳スコリア以降の御嶽テフラの被覆が見つかった。荻野原の形成は徳原と同じか、それ以前の可能性があり最終氷期の前半でステージ４にあたると考えられる。



第34図　吉野扇状地　前野の新規小扇状地

吉野の扇状地も滑川が形成した大規模の土石流扇状地である。ここでも、上松断層の上盤側で著しく撓曲している。荻原の上部では御嶽のテフラを混入しているが指標になるテフラは未確認である。吉野の扇状地面とは一続きであって、連続して形成した滑川の扇状地と風越山側からの崖錐斜面である。

吉野の表層部には御嶽テフラが被覆しない。土石流の押し出しは2万年前前後に最盛期があったであろう。伊那谷側でも最終氷期後半の最寒冷期に大規模な土石の押し出しがある(松島・寺平1999)。氷期に伴う中央アルプス主稜部での活発な岩屑生産を反映して、大規模土石流が滑川谷を埋積して吉野の扇状地が形成された。

(2)　滑川による木曽川のせき止め

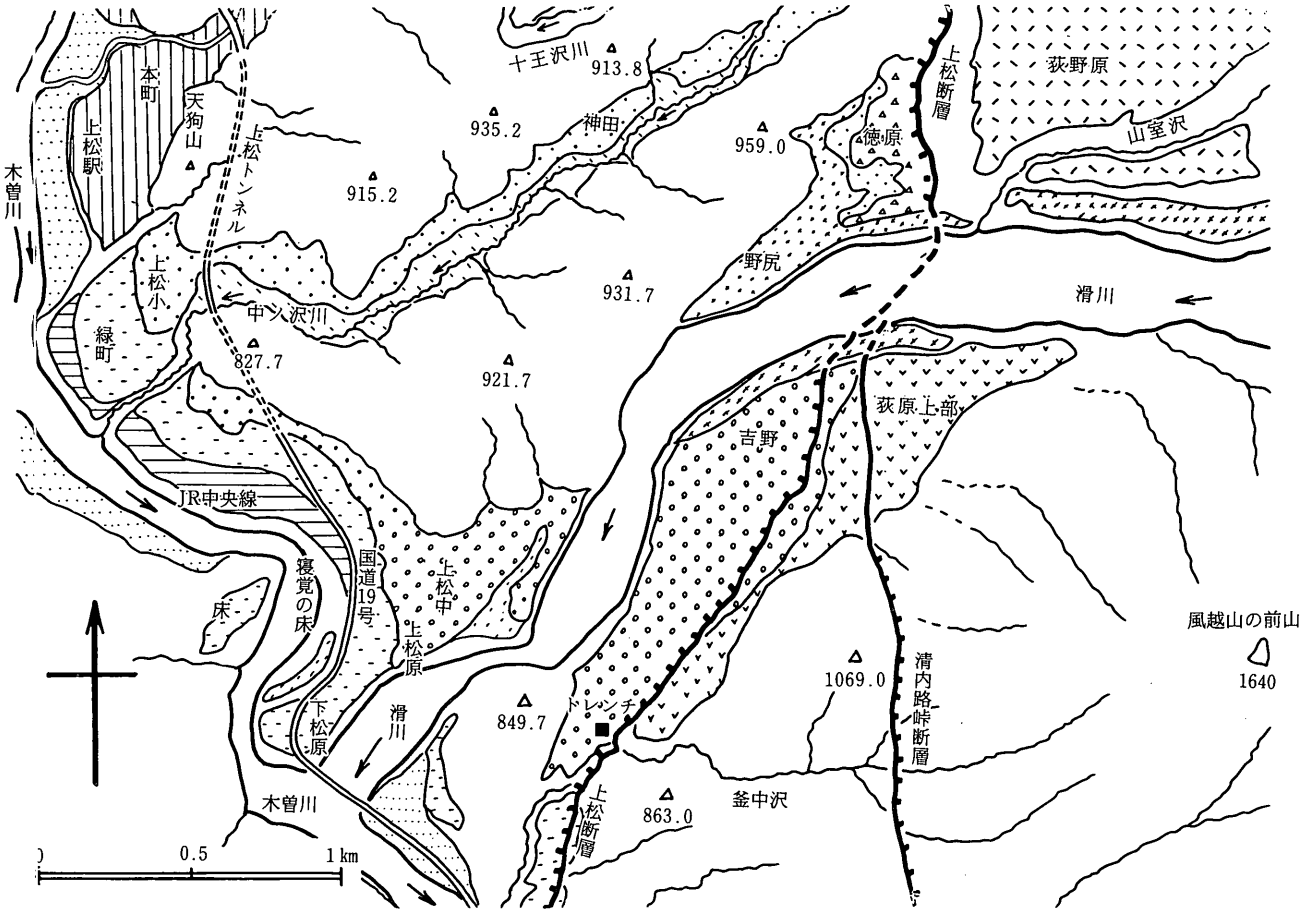
最終氷期での滑川による大量土石の流下は木曽川をせき止めた。滑川合流部より上流の木曽川谷はせき止めによって土石が溜まり、木曽川の河床は一気に上昇して広い氾濫原を形成した。上松町の主要集落はこうしてできた平坦な土地に発達している。最終氷期以後の約1万5千年の間に、木曽川による侵食が復活し、現在ではせき止め効果による平坦面を約50mほど掘り込んで流れている。

以上の結果をまとめて作成したのが第35図である。地形面相互の対比に関しては堆積物の調査が不十分のため行き届いていない。御嶽山からの泥流堆積物や指標テフラなどを確認して木曽川流域の地形と地質との対比が今後に残されている。

7　木曽山脈西面の地形発達と吉野　－まとめにかえて－

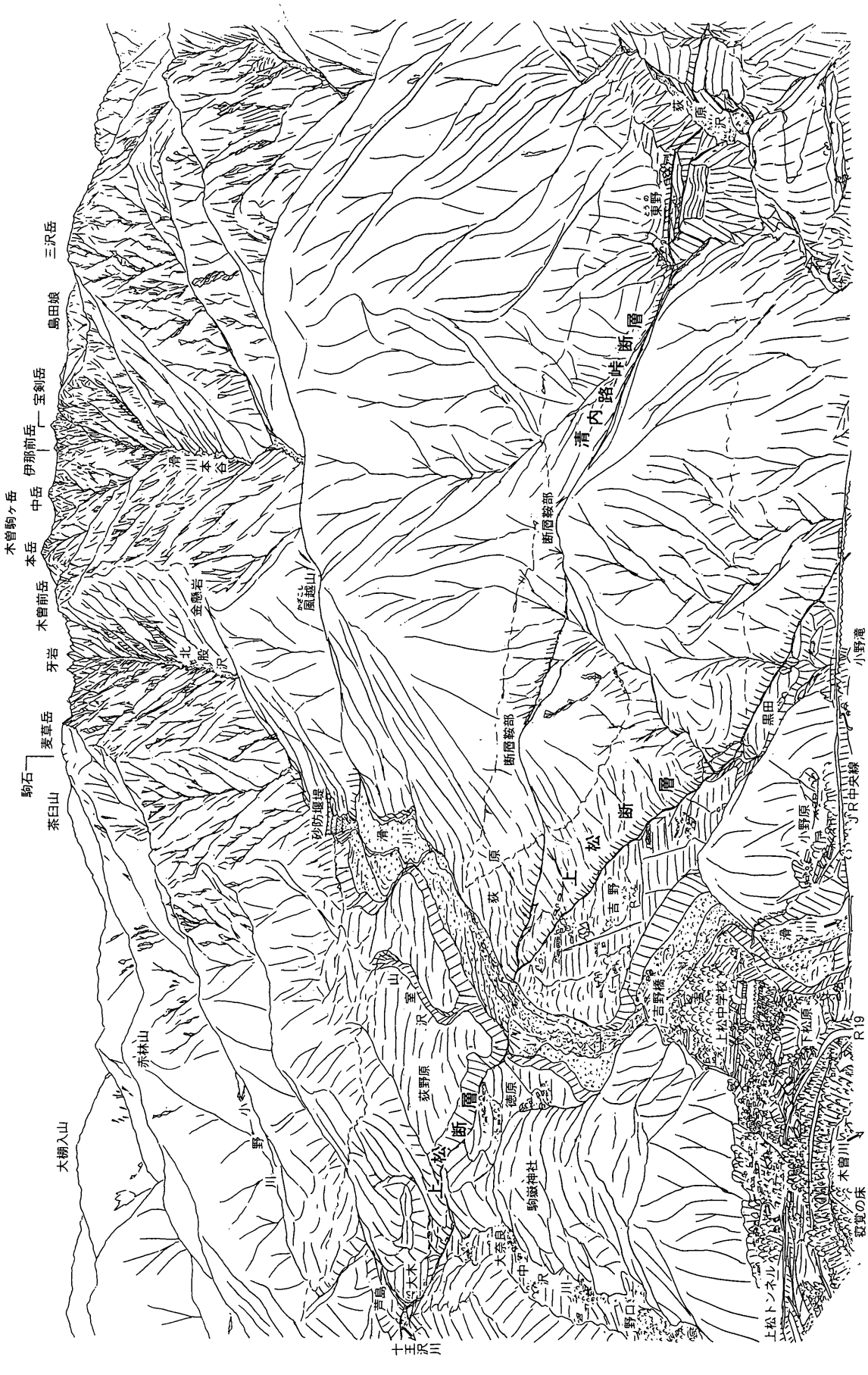
今回、上松町吉野の自然環境の一部を調査できた。かねてより、滑川は本州では筆頭にあげられる荒れ川であると聞いていた。そのとおり現在の滑川の洪水氾濫原は広大であり、巨大な岩石が累々と横たわっている。多数の砂防ダムの効果で氾濫原の大半は河川林に覆われていて一見すれば荒々しさが見えていない。河川林の緑を剝ぎ取った光景を想像すれば滑川本来の姿が浮かんでくる。その一助として第36図を作成した(PL1参考)。

今回実施された大規模ほ場整備事業は終了し、吉野および上松町の新たなる時代が期待される。この成果は多面的に生かされて町の経済発展だけでなく、文化の向上にも役立ってほしい。さらに、安全防災面からの基礎的な指針が得られることを願っている。



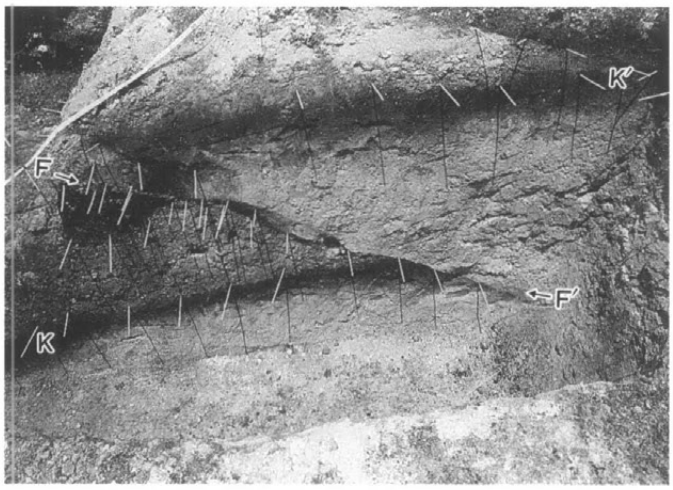
No.		模式地	説明	形式年代	No.		模式地	説明	形式年代
14		現河床	滑川・木曽川の現河床面	現在	6		上松小周辺	滑川のせき止めにより上流部を埋積	ステージ2の最終氷期後半に形成される1、5～3万年前ころ
13		木曽川氾濫原	木曽川の氾濫原など		5		上松中周辺	吉野扇状地末端木曽川をせき止めている	
12		木曽川低位段丘	木曽川による低位段丘	数千年前ころ	4		吉野	吉野扇状地活発な土石流で形成	
11		中ノ沢川沿い	中ノ沢沿いの低位面	1、5万年前以降	3		荻原上部	山麓部の扇状地上松断層で隆起	
10		上松町本町	十王沢川末端の扇状地と木曽川の段丘	1万年前以降	2		徳原	開折された扇状地	三岳スコリヤをのせる5万年前以前
9		野尻	滑川沿いの低位段丘	1万年前ころ	1		荻野原	山麓部の扇状地隆起して木曽川谷へ撓曲している	ステージ4の氷期5～6万年前ころ
8		JR 中央線沿い	木曽川による中位の段丘	1、5 ～1万年前ころ					
7		寝覚国道沿い	せき止めによる埋積と木曽川の侵食面						

第35図　上松町中央部の地形面区分図と凡例

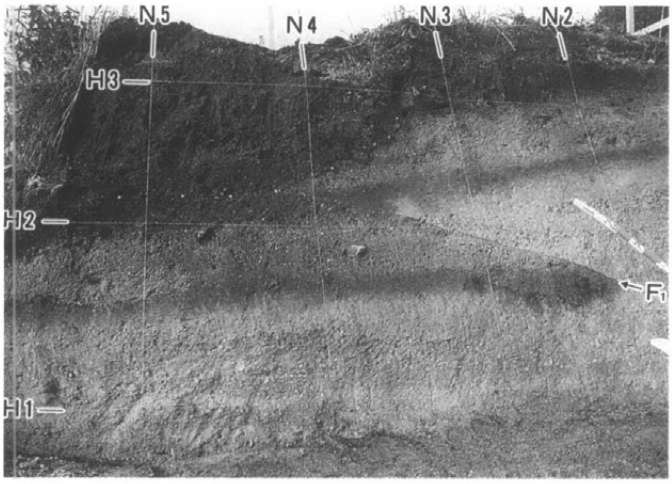


第36図　上松町の空から見た吉野扇状地と木曽駒ヶ岳の西面

写真１　活断層検出状況(1)



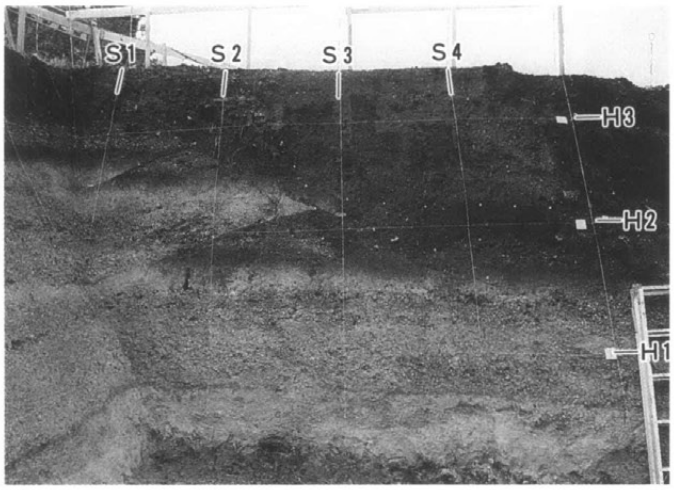
① 1996年６月上松町吉野の埋文調査で発見されたときの上松断層の露頭(第24図と同じ)、F－F′が断層、K・K′は黒土（黒ボク）で断層でくいちがっている同じ地層。



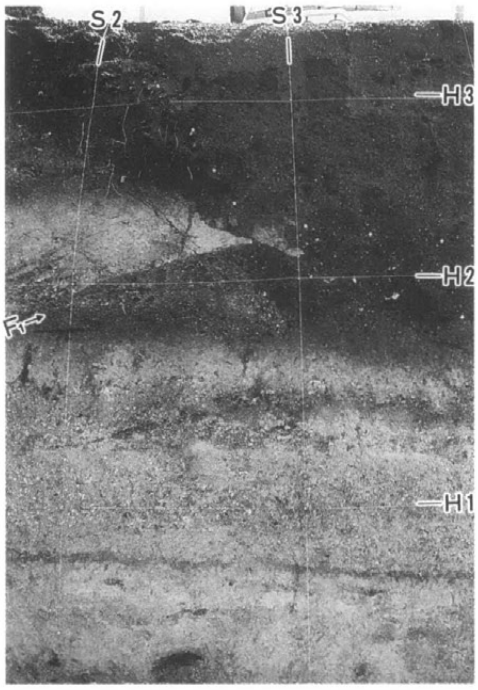
② Ｓトレンチ N面、①と同じ。
場所を削り取ったときの壁面、第28図と同じ。

③ Ｓトレンチ E面の壁面。第27図と同じ。

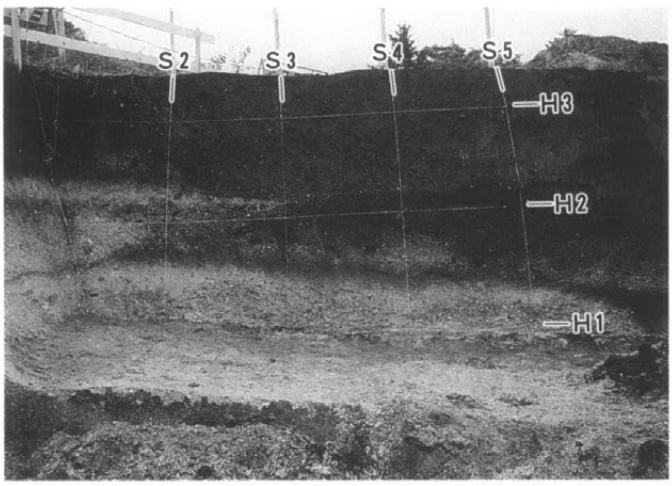
写真２　活断層検出状況(2)



④　Ｓトレンチ Ｓ面、第24図と同じ壁面。



⑤　Ｓトレンチ Ｓ面、写真１のＳ２・Ｓ３・Ｈ２・Ｈ３部分を中心にＦ１断層先端部の拡大、第25図と同じ壁面。



⑥　Ｓトレンチ Ｓ面を南側へ拡張したときの壁面。第26図と同じ。

文献

IKEDA, Y., and YONEKURA, N (1986) :Determination of late Quaternary rates of net slip on two major fault zones in Central Japan. Bull.Dept., Univ.Tokyo, 18, 49-63.

苅谷愛彦・水野清秀・永井節治（1999）：長野県南木曽町に出現した馬籠峠断層の露頭と完新世の断層活動，第四紀研究，37,5.

片田正人・礒見　博（1958）：５万分の１地質図幅「上松」および同説明書，地質調査所.

片田正人・礒見　博（1962）：５万分の１地質図幅「伊那」および同説明書，地質調査所.

片田正人・礒見　博・山田直利・村山正朗・河田清雄（1961）：中央アルプスとその西域の地質・その３領家帯の地質構造，地球科学，57,12-23.

活断層研究会（1991）：「新編日本の活断層－分布図と資料－」，東京大学出版会.

松島信幸（1995）：「伊那谷の造地形史」，飯田市美術博物館調査報告書３，飯田市美術博物館.

松島信幸（2000）：木曽谷からの西駒ヶ岳，『伊那谷の自然』伊那谷自然自然友の会報,89号,8-9.

松島信幸・奥村晃次・須貝俊彦・苅谷愛彦・永井節治・寺平　宏・松島　透（1997）：
木曽谷断層帯・上松断層のトレンチ調査，地球惑星科学関連学会1997年合同大会予稿集，p.63.

松島信幸・寺平　宏（1999）：伊那谷の地形面の編年と気候変動および地盤運動との関連，飯田市美術博物館研究紀要,9,171-198.

村山正朗・片田正人（1957）：５万分の１地質図幅「赤穂」および同説明書，地質調査所.

永井節治（1995）：上松町の地質，「上松町誌第１巻自然編」,p.3-63.

仁科良夫・松島信幸・赤羽貞幸・小坂共栄（1985）：長野県の活断層－分布図と資料－，信州大学紀要，20,p.171-198.

仁科良夫・松島信幸・赤羽貞幸・小坂共栄（1986）：長野県活断層分布図(20万分の1)，長野県.

大塚　勉（1996）：楢川村の地質構造(断層)，「大地と生物」木曽・楢川村誌－自然，110-113.

PLAFKER, G. (1967):Surface faults on Montague Island associated with the 1964 Alaska Earthquake.
「アメリカ地質調査所専報」543.

信濃毎日新聞社編集局編（1999）：『信州の活断層を歩く』信濃毎日新聞社,177-179.

STUIVER, M. and REIMER, J. (1993):Extended 14C data base and revised CALB 3.0 14C age calibration program. Radiocarbon, 35, 215-230.

高瀬信一・二階堂　学・田中邦雄・永井節治・木船　清・波多腰忠行・遠藤忠慶（1998）：
木曽山脈西縁の活断層の最新活動時期:上松断層・清内路峠断層について，地球惑星科学関連学会1998年合同大会予稿集，p.324.

高瀬信一・二階堂　学ほか木曽地方地質研究会（1999）：木曽谷の断層－最近の活動について－，
木曽地方地質研究会(ダイヤコンサルタント)

山田直利・村山三郎（1958）：５万分の１地質図幅「妻籠」および同説明書，地質調査所.

(松島信幸：下伊那郡高森町下市田2091)

第2節　吉野遺跡群出土黒曜石製石器の産地推定

沼津工業高等専門学校　望月明彦

1　はじめに

長野県木曽郡上松町に所在する吉野遺跡群は縄文時代中期を中心とする遺跡で、検出された竪穴住居跡などからは多くの黒曜石製石器が出土している。そのなかで各時期ごとの黒曜石の利用の傾向を把握することを目的として、良好な住居跡を選択し、その住居跡から出土した砕片を含む黒曜石の大半について産地推定分析を行った。さらに、C２ａ地区(VIIE23・24グリット)で検出された黒曜石集中地点出土の遺物、Ｉ地区(XIVグリット)で検出された２点の大形の原石についても分析を行った。

2　分析法

試料の測定にはエネルギー分散蛍光Ｘ線分析法を用いた。蛍光Ｘ線分析法は試料に１次Ｘ線を照射し、試料から発生する各元素の蛍光Ｘ線を検出し、そのエネルギーと強度から分析を行う方法である。試料を破壊せずに迅速に分析できることが最大の特徴である。

セイコーインスツルメンツ蛍光Ｘ線分析装置SEA-2110Lを用いて測定を行った。

産地原石はハンマーで割って剝片をつくり、できるだけ平坦部を選んでそのまま測定した。遺跡出土試料は破壊せずにそのまま測定するので、できるだけ遺跡出土試料に近い条件で測定を行うためである。遺跡出土試料は超音波洗浄器で洗浄し、できるだけ平坦なきれいな面を選んで測定した。

測定条件は以下のとおりである。

印加電圧：50kV　　印加電流：産地原石 17μA　　遺跡出土試料 自動設定

雰囲気：真空　　測定時間：産地原石500sec　　遺跡出土試料 240sec　　照射径：10mm

測定した元素は、アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の11元素である。

3　分析試料

(1)　産地原石

蛍光Ｘ線分析によって遺跡出土の黒曜石を産地推定するためには、推定の基礎試料として黒曜石産地の原石を分析しておく必要がある。現在全国で100箇所以上の産地原石を分析しているが、第７表には中部関東地方の産地のほか、北海道、東北、北陸、隠岐の産地を挙げた。

また、それらの産地の概略の位置を第37図に示した。これらの図表には示していないが、その他に以下の産地原石についてもすでに分析済みである。

九州

大分県：姫島村観音崎

佐賀県：伊万里市腰岳

長崎県：松浦市岳崎免、佐世保市淀姫、佐世保市針尾中町、佐世保市針尾古里、佐世保市針尾大崎、川棚町大崎

熊本県：小国町西小国、人吉市桑ノ木津留、球磨村白浜

鹿児島県：大口市日東、大口市五女木、大口市猩猩、鹿児島市竜ヶ水、鹿児島市三船神社、
市来町平木場、樋脇町上牛鼻、根占町大根占

東北・北陸

青森県：小泊村折腰内

岩手県：雫石町小赤沢、水沢市折居、花泉町日形

宮城県：宮崎町湯ノ倉、色麻町根岸、仙台市秋保、塩竈市塩竈漁港

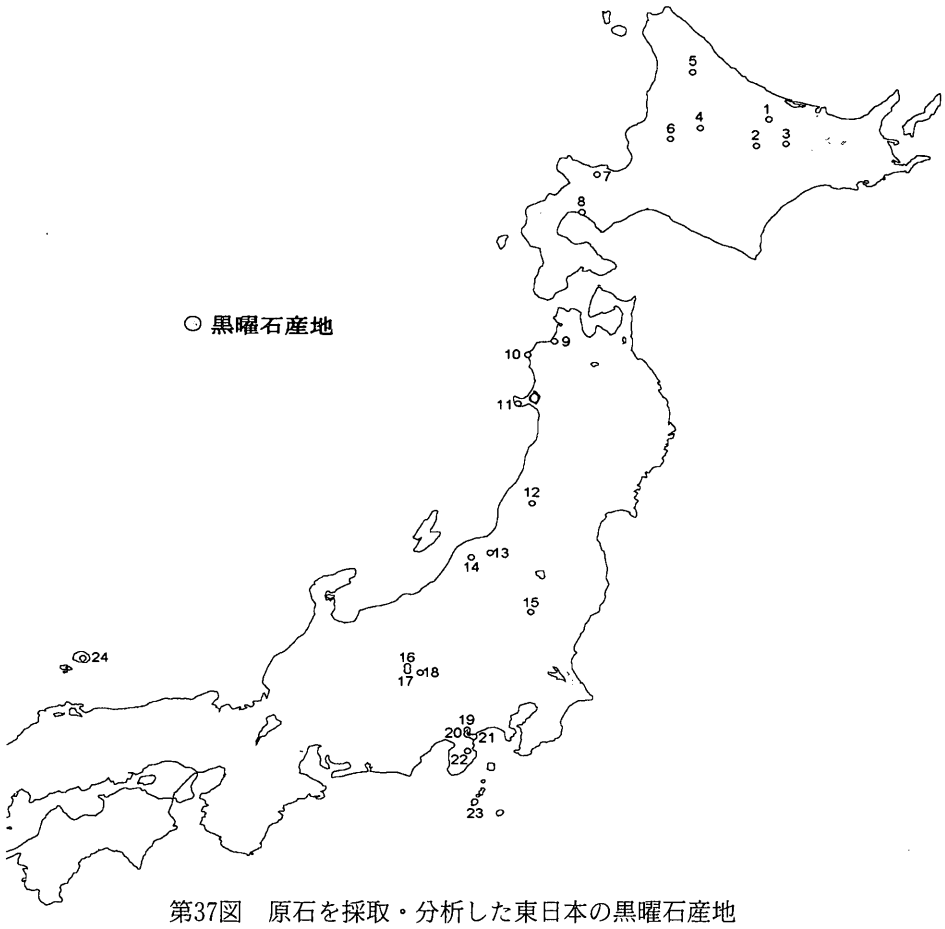
新潟県：佐渡郡金井町二ツ坂、佐渡郡佐和田町真光寺

富山県：魚津草月上野

第７表　産地原石判別群（SEIKO SEA-2110L蛍光Ｘ線分析装置による）

都道府県	地図No.	エリア	新判別群	旧判別群	新記号	旧記号	原石採取地（分析数）
北海道	1	白滝	八号沢群		STHG		赤石山山頂(19)、八号沢露頭(31)、八号沢(79)、黒曜の沢(6)、幌加林道(4)
			黒曜の沢群		STKY		
	2	上士幌	三股群		KSMM		十三ノ沢(16)
	3	置戸	安住群		ODAZ		安住(25)、清水ノ沢(9)
	4	旭川	高砂台群		AKTS		高砂台(6)、雨紛台(5)、春光台(5)
			春光台群		AKSK		
	5	名寄	布川群		NYHK		布川(10)
	6	新十津川	須田群		STSD		須田(6)
	7	赤井川	曲川群		AIMK		曲川(25)、土木川(15)
	8	豊浦	豊泉群		TUTI		豊泉(16)
青森	9	木造	出来島群		KDDK		出来島海岸(34)
	10	深浦	八森山群		HUHM		八森山公園(8)、六角沢(8)、岡崎浜(40)
秋田	11	男鹿	金ヶ崎群		OGKS		金ヶ崎温泉(37)、脇本海岸(98)
			脇本群		OGWM		脇本海岸(16)
山形	12	羽黒	月山群		HGGS		月山荘前(30)
			今野川群		HGIN		今野川(9)、大網川(5)
新潟	13	新津	金津群		NTKT		金津(29)
	14	新発田	板山群		SBIY		板山牧場(40)
栃木	15	高原山	甘湯沢群	高原山１群	THAY	TKH1	甘湯沢(50)、桜沢(20)
			七尋沢群	高原山２群	THNH	TKH2	七尋沢(9)、自然の家(9)
長野	16	和田(WD)	鷹山群	和田峠１群	WDTY	WDT1	鷹山(53)、小深沢(54)、東餅屋(36)、芙蓉ライト(87)、古峠(50)、土屋橋北(83)、土屋橋西(29)、土屋橋南(68)、丁字御領(18)
			小深沢群	和田峠２群	WDKB	WDT2	
			土屋橋北群	和田峠３群	WDTK	WDT3	
			土屋橋西群	和田峠４群	WDTN	WDT4	
			土屋橋南群	和田峠５群	WDTM	WDT5	
			芙蓉ライト群		WDHY		
			古峠群		WDHT		
		和田(WO)	ブドウ沢群	男女倉１群	WOBD	OMG1	ブドウ沢(36)、ブドウ沢右岸(18)、牧ヶ沢上(33)、牧ヶ沢下(36)、高松沢(40)
			牧ヶ沢群	男女倉２群	WOMS	OMG2	
			高松沢群	男女倉３群	WOTM	OMG3	
	17	諏訪	星ヶ台群	霧ヶ峰群	SWHD	KRM	星ヶ塔第１鉱区(36)、星ヶ塔第２鉱区(36)、星ヶ台Ａ(36)、星ヶ台Ｂ(11)、水月霊園(36)、水月公園(13)、星ヶ塔のりこし(36)
	18	蓼科	冷山群	蓼科系	TSTY	TTS	冷山(33)、麦草峠(36)、麦草峠東(33)、渋ノ湯(29)、美し森(4)、八ヶ岳７(17)、八ヶ岳９(18)、双子池(34)
			双子山群		TSHG		双子池(26)
			擂鉢山群		TSSB		擂鉢山(31)、亀甲池(8)
神奈川	19	箱根	芦ノ湯群	芦ノ湯	HNAY	ASY	芦ノ湯(34)
	20		畑宿群	畑宿	HNHJ	HTJ	畑宿(71)
			黒岩橋群	箱根系Ａ群	HNKI	HKNA	黒岩橋(9)
	21		鍛冶屋群	鍛冶屋	HNKJ	KJY	鍛冶屋(30)
静岡			上多賀群	上多賀	HNKT	KMT	上多賀(18)
	22	天城	柏峠群	柏峠	AGKT	KSW	柏峠(80)
東京	23	神津島	恩馳島群	神津島１群	KZOB	KOZ1	恩馳島(100)、長浜(43)、沢尻湾(8)
			砂糠崎群	神津島２群	KZSN	KOZ2	砂糠崎(40)、長浜(5)
島根	24	隠岐	久見群		OKHM		久見パーライト中(30)、久見採掘現場(18)
			箕浦群		OKMU		箕浦海岸(30)、加茂(19)、岸浜(35)
			岬群		OKMT		岬地区(16)
その他			NK群		NK		中ッ原1G、5G(遺跡試料)、原石産地は未発見

地図No.は第37図中の数字を示す。判別群名はその判別群の原石を採取した代表的な採取地名で示した。



第37図　原石を採取・分析した東日本の黒曜石産地

(2)　遺跡群出土試料

分析番号AYC3-1～98は石器集中地点出土遺物である。詳細は第III章第4節の事実記載を参照されたいが、出土状況からは縄文時代早期後葉に位置づけられる可能性が考えられる。器種はすべて原石または剝片である。

分析番号AYC3-349・350は縄文時代中期の検出面で出土した大形の原石である。

住居跡出土のものについては、量が多く分析に適する住居跡を中期の各細分期から選択し、黒曜石を砕片も含めて大半を分析した。分析番号AYC3-99～274・425・426はSB33(中期後葉II期)、分析番号AYC3-275～315はSB94(中期後葉I期)分析番号AYC3-316～348・427～429はSB100(中期初頭～前葉)出土である。

4　産地推定法

図から産地推定を行う判別図法によって産地を推定し、その結果を確認・検証するために多変量解析(判別分析)を用いた。指標には、試料を蛍光X線分析することで得られる各元素の蛍光X線強度を用いた。元素記号を各元素の蛍光X線強度を示すこととし、Sum＝Rb＋Sr＋Y＋Zrとして、次の3つの指標を計算した。

Rb分率＝Rb×100/Sum　　Sr分率＝Sr×100/Sum　　Zr分率＝Zr×100/Sum

この値は、Rb,Sr,Y,Zrの4元素の強度の合計中で、Rb,Sr,Zrそれぞれの強度が何％であるかを示す値である。また、Mn×100/Fe,log(Fe/K)の値も指標として用いた。

判別図法では横軸にRb分率、縦軸にMn×100/Feをプロットした図と、横軸にSr分率、縦軸log(Fe/K)にlog(Fe/K)をプロットした図の二つの図から視覚的に産地を判別した。判別分析では5つのすべての指標を用いた。

判別分析はすでに分類された群(産地原石判別群)があるときに、未知の試料が分類された群のいずれに属するかを解析する手段である。判別図法であるひとつの試料の産地を推定するときには、その試料のプロットに、各産地の判別群のうち最も近い判別群を視覚的に捕らえて、その判別群を試料の産地と推定する。すなわち、試料と最も距離の近い判別群を産地としていることになる。判別図法は二次元プロットであるが、三次元プロットでも同じことが言える。さらに4次元以上でも数学的には試料と判別群との距離を算出することができるので、試料と各判別群との距離を計算して、最も試料との距離の短い判別群を産地とすることができる。距離はマハラノビス距離で表した。また、各試料と各判別群の重心との距離から各試料が各判別群に属する確率を求めた。

5　産地推定結果

判別図法の結果を第38図、第39図に示す。グレーで示した記号が産地原石を示す。×は中部関東地方の産地原石、＋は東北北陸の産地原石、△は北海道の産地原石を示す。吉野遺跡群出土試料は●で示してある。

個々の試料の産地推定結果は第9表にまとめた。この表において、判別図判別群の列は判別図法による産地推定結果を示す。判別分析の中の候補1、候補2は各試料が属する可能性の高い判別群の第1候補と第2候補を示す。距離1、距離2は各試料と候補1、候補2の判別群の間のマハラノビス距離を示す。この距離が短いほど試料と判別群とが類似していることを意味する。確率1、確率2は各試料が候補1、候補2の判別群に属する確率を示す。この値が1に近いほど推定結果は信頼性が高い。本遺跡群では判別図法と判別分析の結果に相違はなかったが、もし、両者が異なる場合には判別分析の結果を最終結果としている。今までの分析例では両者が異なる場合でも同一の産地エリア内での細分された群の違いであって、異なる産地エリアに推定されてしまうようなことはない。

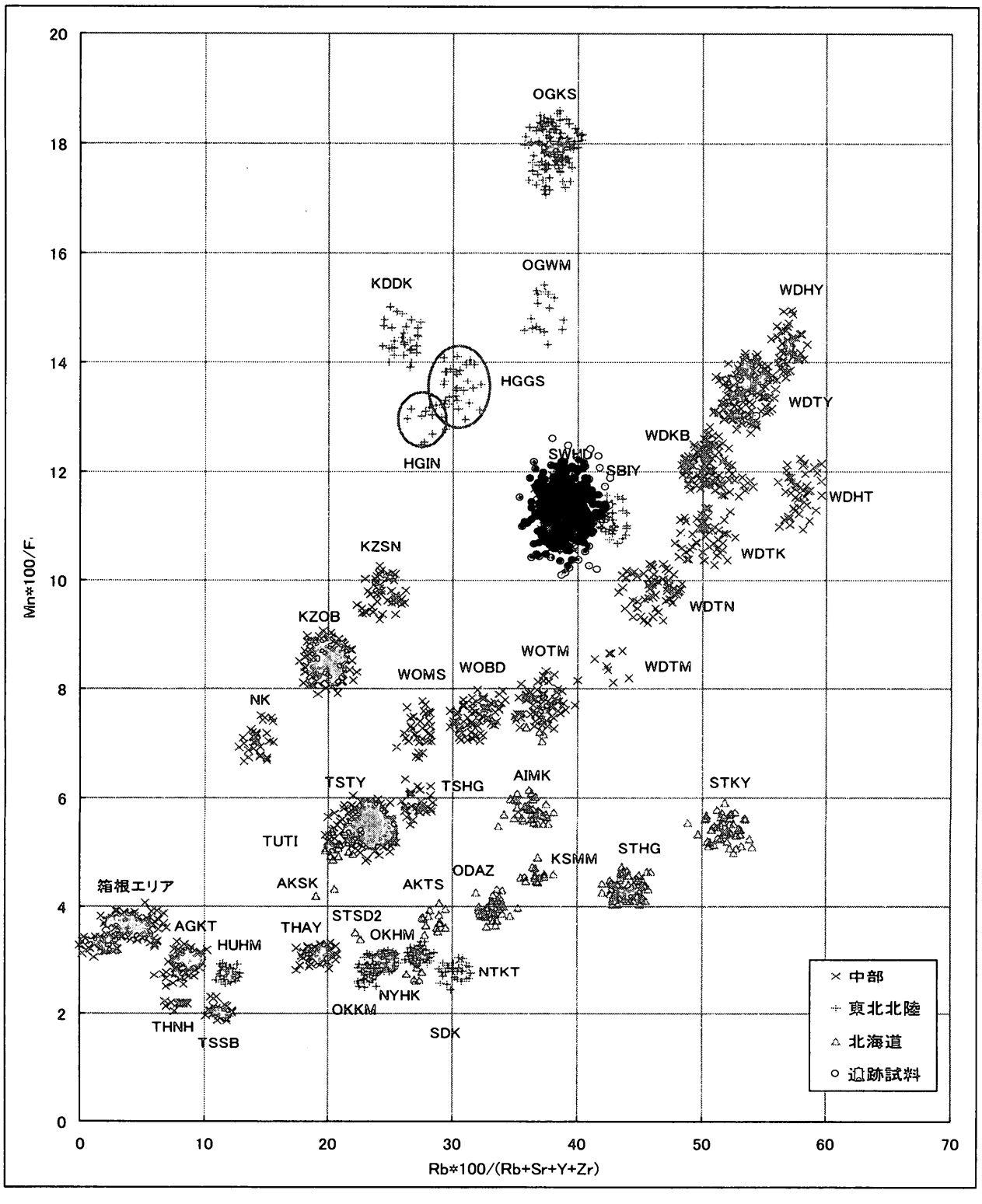
第8表　吉野遺跡群出土黒曜石製石器の産地組成

産地			吉野遺跡出土試料試料	
エリア	判別群	記号	試料数	%
和田(WD)	鷹山	WDTY	1	0.3
諏訪	星ヶ台	SWHD	349	98.3
不可など			5	1.4
合計			355	100

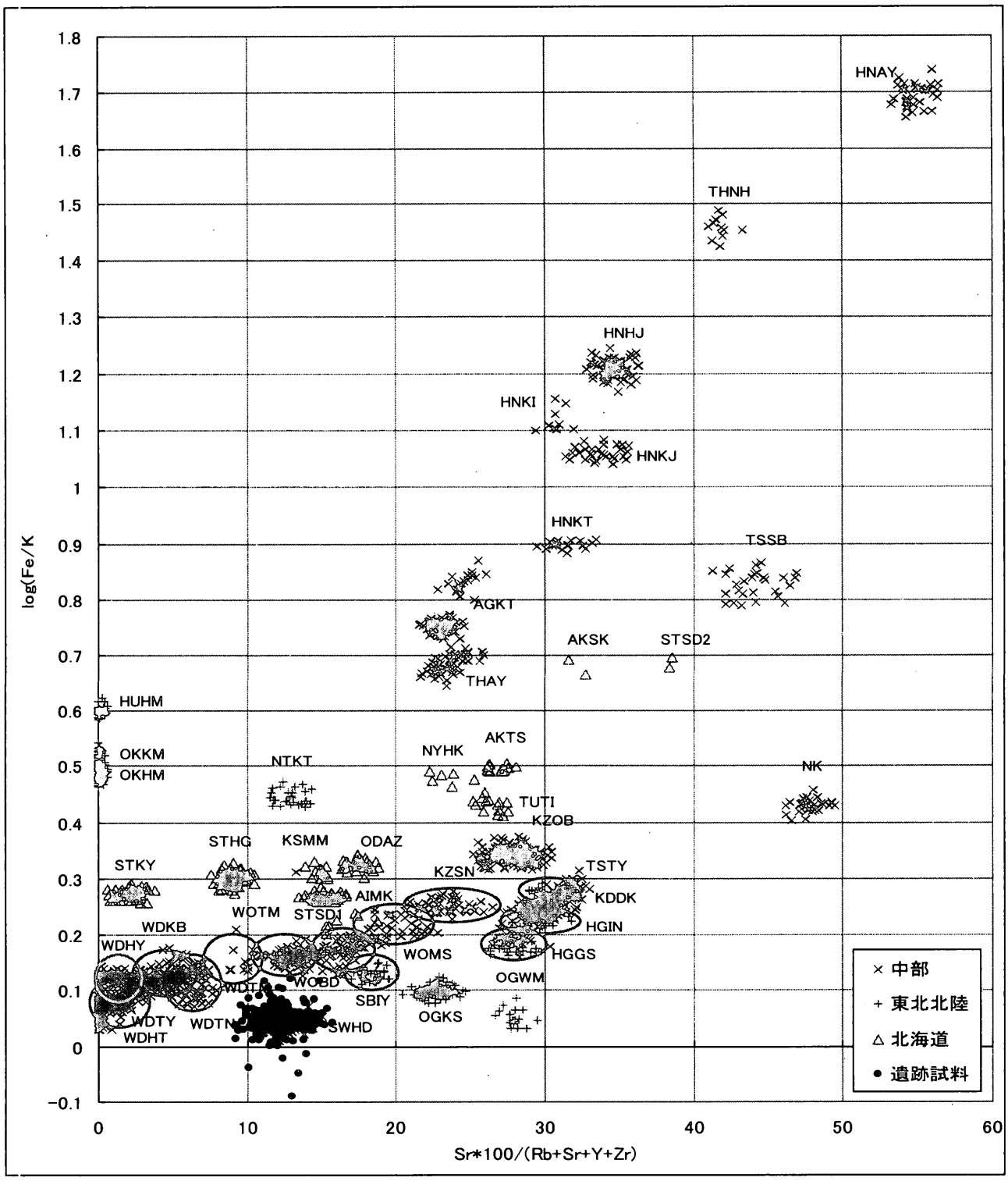
吉野遺跡群出土の黒曜石試料は表面状態が非常に良好であったため、ほとんどの試料の産地推定が可能で推定ができなかった試料は355点のうちわずかに5点のみで、このうち1点は黒曜石ではなかった。また、判別図法による推定結果と判別分析による推定結果はすべて一致した。結果として、1点(AYC3-319)が和田エリア鷹山群に帰属された以外はすべて諏訪エリア星ヶ台群(旧霧ヶ峰系)であった。上松町から諏訪エリア、和田エリアへは直線距離で60-70kmで距離的にはさほど変わらないにもかかわらず、和田エリアの黒曜石はほとんど使用されていないことが判明した。木曽郡の旧石器時代、縄文時代の黒曜石の産地推定は例が少なく、本遺跡群の結果だけから考古学的に言えることは少ないであろう。さらに近隣の遺跡の産地推定を進める必要がある。

本遺跡群の黒曜石試料と同時に、大桑村の大野遺跡、万場遺跡出土の黒曜石についても産地推定を行ったが、諏訪星ヶ台群を主体とし、和田エリアの黒曜石が若干混在すると言う状況は本遺跡群の様相と酷似している。万場遺跡、大野遺跡については以下の報告書を参照されたい。

百瀬忠幸他　2001　『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』大桑村教育委員会



第38図　黒曜石産地の判別図(1)



第39図　黒曜石産地の判別図(2)

第 9 表　吉野遺跡群出土黒曜石製石器産地推定結果

分析番号	遺物番号	判別図	判別分析						遺構名	細分番号	備考
		判別群	候補 1	候補 2	距離 1	距離 2	確率 1	確率 2			
AYC3-1	VIIE24-1-1	SWHD	SWHD	SBIY	4.82	67.88	1	0	VIIE24	1	
AYC3-2	VIIE24-1-2	SWHD	SWHD	SBIY	9.65	87.46	1	0	VIIE24	2	
AYC3-3	VIIE24-2-1	SWHD	SWHD	SBIY	9.03	116.82	1	0	VIIE24	1	
AYC3-4	VIIE24-2-2	SWHD	SWHD	SBIY	26.14	154.73	1	0	VIIE24	2	
AYC3-5	VIIE24-2-3	SWHD	SWHD	SBIY	9.85	64.42	1	0	VIIE24	3	
AYC3-6	VIIE24-3	SWHD	SWHD	SBIY	4.15	65.39	1	0	VIIE24		
AYC3-7	VIIE23-4-1	SWHD	SWHD	WDTN	5.38	98.83	1	0	VIIE23	1	
AYC3-8	VIIE23-4-2	SWHD	SWHD	WDTN	3.19	97.31	1	0	VIIE23	2	
AYC3-9	VIIE23-5	不可	不可	不可					VIIE23		
AYC3-10	VIIE24-6	SWHD	SWHD	WDTN	2.53	99.41	1	0	VIIE24		
AYC3-11	VIIE23-7	SWHD	SWHD	SBIY	0.77	94.24	1	0	VIIE23		
AYC3-12	VIIE24-8-1	SWHD	SWHD	WDTN	15.07	81.64	1	0	VIIE24	1	
AYC3-13	VIIE24-8-2	SWHD	SWHD	SBIY	9.23	132.16	1	0	VIIE24	2	
AYC3-14	VIIE24-8-3	SWHD	SWHD	SBIY	2.72	92.3	1	0	VIIE24	3	
AYC3-15	VIIE24-8-4	SWHD	SWHD	SBIY	2.89	86.82	1	0	VIIE24	4	
AYC3-16	VIIE24-9-1	SWHD	SWHD	SBIY	6.76	122.82	1	0	VIIE24	1	
AYC3-17	VIIE24-9-2	SWHD	SWHD	WDTN	15.65	69.44	1	0	VIIE24	2	
AYC3-18	VIIE24-9-3	SWHD	SWHD	SBIY	5.6	73.9	1	0	VIIE24	3	
AYC3-19	VIIE24-9-4	SWHD	SWHD	SBIY	9.52	58.6	1	0	VIIE24	4	
AYC3-20	VIIE24-10-1	SWHD	SWHD	SBIY	5.52	60.65	1	0	VIIE24	1	
AYC3-21	VIIE24-10-2	SWHD	SWHD	SBIY	6.52	56.79	1	0	VIIE24	2	
AYC3-22	VIIE23-11	SWHD	SWHD	SBIY	2.55	69.38	1	0	VIIE23		
AYC3-23	VIIE24-12-1	SWHD	SWHD	WDTM	21.37	53.97	1	0	VIIE24	1	
AYC3-24	VIIE24-12-2	SWHD	SWHD	SBIY	1.16	80.99	1	0	VIIE24	2	
AYC3-25	VIIE24-13	不可	不可	不可					VIIE24		
AYC3-26	VIIE24-14-1	SWHD	SWHD	SBIY	3.93	58.86	1	0	VIIE24	1	
AYC3-27	VIIE24-14-2	SWHD	SWHD	WDTN	14.14	75.36	1	0	VIIE24	2	
AYC3-28	VIIE24-14-3	SWHD	SWHD	SBIY	4.54	83.69	1	0	VIIE24	3	
AYC3-29	VIIE24-14-4	SWHD	SWHD	WDTN	18.61	114.19	1	0	VIIE24	4	
AYC3-30	VIIE24-15	SWHD	SWHD	WDTN	7.86	73.25	1	0	VIIE24		
AYC3-31	VIIE24-16	SWHD	SWHD	SBIY	6.1	53.41	1	0	VIIE24		
AYC3-32	VIIE24-17	SWHD	SWHD	SBIY	11.44	89.77	1	0	VIIE24		
AYC3-33	VIIE24-18	SWHD	SWHD	WDTM	12.5	73.03	1	0	VIIE24		
AYC3-34	VIIE24-19	SWHD	SWHD	SBIY	14.72	128.29	1	0	VIIE24		
AYC3-35	VIIE24-20-1	SWHD	SWHD	SBIY	2.87	85.89	1	0	VIIE24	1	
AYC3-36	VIIE24-20-2	SWHD	SWHD	WDTM	7.98	101.75	1	0	VIIE24	2	
AYC3-37	VIIE24-21	SWHD	SWHD	SBIY	19.71	121.06	1	0	VIIE24		
AYC3-38	VIIE24-22	SWHD	SWHD	SBIY	5.7	110.89	1	0	VIIE24		
AYC3-39	VIIE24-23	SWHD	SWHD	SBIY	8.89	87.19	1	0	VIIE24		
AYC3-40	VIIE24-24	SWHD	SWHD	SBIY	8.57	71.84	1	0	VIIE24		
AYC3-41	VIIE24-25	SWHD	SWHD	WDTN	32.14	39.68	0.9935	0.0065	VIIE24		
AYC3-42	VIIE24-26-1	SWHD	SWHD	WDTN	12.1	73.4	1	0	VIIE24	1	
AYC3-43	VIIE24-26-2	SWHD	SWHD	WDTN	8.85	64.25	1	0	VIIE24	2	
AYC3-44	VIIE24-27	SWHD	SWHD	SBIY	17.37	74.76	1	0	VIIE24		
AYC3-45	VIIE24-28	SWHD	SWHD	WDTM	9.02	86.32	1	0	VIIE24		
AYC3-46	VIIE24-29	SWHD	SWHD	SBIY	5.76	102.34	1	0	VIIE24		
AYC3-47	VIIE24-30-1	SWHD	SWHD	SBIY	9.23	83.76	1	0	VIIE24	1	
AYC3-48	VIIE24-30-2	SWHD	SWHD	WDTN	7.91	83.75	1	0	VIIE24	2	
AYC3-49	VIIE24-30-3	SWHD	SWHD	SBIY	9.92	98.74	1	0	VIIE24	3	
AYC3-50	VIIE24-30-4	SWHD	SWHD	SBIY	3.96	56.81	1	0	VIIE24	4	
AYC3-51	VIIE24-30-5	SWHD	SWHD	SBIY	10.29	81.54	1	0	VIIE24	5	
AYC3-52	VIIE24-30-6	SWHD	SWHD	SBIY	1.89	77.79	1	0	VIIE24	6	
AYC3-53	VIIE24-31	SWHD	SWHD	SBIY	9.4	115.68	1	0	VIIE24		
AYC3-54	VIIE23?-32-1	SWHD	SWHD	SBIY	9.12	68.91	1	0	VIIE23？	1	
AYC3-55	VIIE23?-32-2	SWHD	SWHD	SBIY	0.26	79.18	1	0	VIIE23？	2	
AYC3-56	VIIE24-33	SWHD	SWHD	SBIY	3.29	73.87	1	0	VIIE24		
AYC3-57	VIIE24-34	SWHD	SWHD	SBIY	9.4	63.67	1	0	VIIE24		
AYC3-58	VIIE24-35-1	SWHD	SWHD	WDTN	15.58	56.2	1	0	VIIE24	1	
AYC3-59	VIIE24-35-2	SWHD	SWHD	SBIY	7.76	82.79	1	0	VIIE24	2	
AYC3-60	VIIE24-36	SWHD	SWHD	SBIY	4.75	61.85	1	0	VIIE24		
AYC3-61	VIIE24-37	SWHD	SWHD	SBIY	8.14	66.83	1	0	VIIE24		
AYC3-62	VIIE24-38	SWHD	SWHD	SBIY	6.66	86.44	1	0	VIIE24		
AYC3-63	VIIE24-40-1	SWHD	SWHD	SBIY	2.79	89.4	1	0	VIIE24	1	
AYC3-64	VIIE24-40-2	SWHD	SWHD	SBIY	6.2	113.57	1	0	VIIE24	2	
AYC3-65	VIIE24-41-1	SWHD	SWHD	SBIY	6.81	73.62	1	0	VIIE24	1	
AYC3-66	VIIE24-41-2	SWHD	SWHD	SBIY	5.37	84.5	1	0	VIIE24	2	
AYC3-67	VIIE24-42	SWHD	SWHD	WDTM	23.46	54.19	1	0	VIIE24		
AYC3-68	VIIE24-43	SWHD	SWHD	WDTN	2.94	101.53	1	0	VIIE24		
AYC3-69	VIIE24-44	SWHD	SWHD	SBIY	6.18	69.18	1	0	VIIE24		
AYC3-70	VIIE24-45	SWHD	SWHD	WDTM	10.94	90.46	1	0	VIIE24		
AYC3-71	VIIE24-46	SWHD	SWHD	SBIY	4.89	77.72	1	0	VIIE24		
AYC3-72	VIIE24-47	SWHD	SWHD	SBIY	6.16	71.97	1	0	VIIE24		
AYC3-73	VIIE24-48	SWHD	SWHD	SBIY	12.76	115.64	1	0	VIIE24		
AYC3-74	VIIE24-49	SWHD	SWHD	WDTN	5.78	82.75	1	0	VIIE24		

AYC3-75	VIIE24-50	SWHD	SWHD	SBIY	8.15	117.18	1	0	VIIE24		
AYC3-76	VIIE24-51	SWHD	SWHD	SBIY	2.46	64.13	1	0	VIIE24		
AYC3-77	VIIE24-52	SWHD	SWHD	SBIY	6.94	85.63	1	0	VIIE24		
AYC3-78	VIIE24-53	SWHD	SWHD	SBIY	28.35	96.78	1	0	VIIE24		
AYC3-79	VIIE24-54	SWHD	SWHD	WDTM	12.45	66.22	1	0	VIIE24		
AYC3-80	VIIE24-55	SWHD	SWHD	SBIY	2.99	105.71	1	0	VIIE24		
AYC3-81	VIIE24-56	SWHD	SWHD	SBIY	9.43	69.89	1	0	VIIE24		
AYC3-82	VIIE24-57	SWHD	SWHD	SBIY	5.77	88.12	1	0	VIIE24		
AYC3-83	VIIE24-58	SWHD	SWHD	WDTM	6.66	120.35	1	0	VIIE24		
AYC3-84	VIIE24-59	SWHD	SWHD	WDTN	19.94	94.27	1	0	VIIE24		
AYC3-85	VIIE24-60	SWHD	SWHD	SBIY	2.84	96.14	1	0	VIIE24		
AYC3-86	VIIE24-61	SWHD	SWHD	SBIY	4.07	68.6	1	0	VIIE24		
AYC3-87	VIIE24-62-1	SWHD	SWHD	SBIY	5.02	54.95	1	0	VIIE24	1	
AYC3-88	VIIE24-62-2	SWHD	SWHD	SBIY	15.24	109.26	1	0	VIIE24	2	
AYC3-89	VIIE24-63	SWHD	SWHD	SBIY	7.6	86.57	1	0	VIIE24		
AYC3-90	VIIE24-64	SWHD	SWHD	WDTN	8.46	74.72	1	0	VIIE24		
AYC3-91	VIIE24-65	SWHD	SWHD	SBIY	4.86	83.14	1	0	VIIE24		
AYC3-92	VIIE24-66	SWHD	SWHD	SBIY	1.41	86.45	1	0	VIIE24		
AYC3-93	VIIE24-67	SWHD	SWHD	SBIY	2.73	81.75	1	0	VIIE24		
AYC3-94	VIIE23-1	SWHD	SWHD	SBIY	3.79	57.57	1	0	VIIE23		
AYC3-95	VIIE23-2	SWHD	SWHD	SBIY	17.63	117.99	1	0	VIIE23		
AYC3-96	VIIE23-3	SWHD	SWHD	SBIY	10.9	141.96	1	0	VIIE23		
AYC3-97	VIIE23-4	SWHD	SWHD	SBIY	1.07	93.9	1	0	VIIE23		
AYC3-98	VIIE23-5	SWHD	SWHD	SBIY	13.37	72.79	1	0	VIIE23		
AYC3-99	SB33-1	SWHD	SWHD	SBIY	2.72	108.05	1	0	SB33		
AYC3-100	SB33-2	SWHD	SWHD	SBIY	5.04	120.16	1	0	SB33		
AYC3-101	SB33-3	SWHD	SWHD	WDTM	16.43	65.41	1	0	SB33		
AYC3-102	SB33-4	SWHD	SWHD	SBIY	0.65	78.41	1	0	SB33		
AYC3-103	SB33-5	SWHD	SWHD	SBIY	12.55	42.04	1	0	SB33		
AYC3-104	SB33-6	SWHD	SWHD	WDTN	9.49	113.23	1	0	SB33		
AYC3-105	SB33-7	SWHD	SWHD	WDTN	4.55	88.2	1	0	SB33		
AYC3-106	SB33-8	SWHD	SWHD	SBIY	11.34	61.81	1	0	SB33		
AYC3-107	SB33-9	SWHD	SWHD	SBIY	2.33	93.49	1	0	SB33		
AYC3-108	SB33-10	SWHD	SWHD	SBIY	28.8	62.86	1	0	SB33		
AYC3-109	SB33-11	SWHD	SWHD	SBIY	1.11	98.32	1	0	SB33		
AYC3-110	SB33-12	SWHD	SWHD	SBIY	15.69	94.92	1	0	SB33		
AYC3-111	SB33-13	SWHD	SWHD	SBIY	9.14	82.98	1	0	SB33		
AYC3-112	SB33-14	SWHD	SWHD	WDTN	5.03	80.85	1	0	SB33		
AYC3-113	SB33-15	SWHD	SWHD	SBIY	5.13	89.01	1	0	SB33		
AYC3-114	SB33-16	SWHD	SWHD	SBIY	3.74	97.79	1	0	SB33		
AYC3-115	SB33-17	SWHD	SWHD	WDTN	6.86	88.88	1	0	SB33		
AYC3-116	SB33-18	SWHD	SWHD	WDTN	10.82	89.79	1	0	SB33		
AYC3-117	SB33-19	SWHD	SWHD	SBIY	26.62	61.6	1	0	SB33		
AYC3-118	SB33-20	SWHD	SWHD	SBIY	3.6	88.83	1	0	SB33		
AYC3-119	SB33-21	SWHD	SWHD	SBIY	17.57	68.35	1	0	SB33		
AYC3-120	SB33-22	SWHD	SWHD	SBIY	3.54	71.65	1	0	SB33		
AYC3-121	SB33-23	SWHD	SWHD	SBIY	2.28	74.54	1	0	SB33		
AYC3-122	SB33-24	SWHD	SWHD	WDTM	10.35	88.91	1	0	SB33		
AYC3-123	SB33-25	SWHD	SWHD	SBIY	6.96	74.69	1	0	SB33		
AYC3-124	SB33-26	SWHD	SWHD	SBIY	8.45	73.24	1	0	SB33		
AYC3-125	SB33-27	SWHD	SWHD	SBIY	22.36	102.73	1	0	SB33		
AYC3-126	SB33-28	SWHD	SWHD	SBIY	10.64	108.79	1	0	SB33		
AYC3-127	SB33-29	SWHD	SWHD	SBIY	9.79	47.55	1	0	SB33		
AYC3-128	SB33-30	SWHD	SWHD	WDTN	9.63	113.95	1	0	SB33		
AYC3-129	SB33-31	SWHD	SWHD	SBIY	8.27	114.57	1	0	SB33		
AYC3-130	SB33-32	SWHD	SWHD	WDTN	22.58	127.97	1	0	SB33		
AYC3-131	SB33-33	SWHD	SWHD	SBIY	1.43	80.21	1	0	SB33		
AYC3-132	SB33-34	SWHD	SWHD	SBIY	2.83	99.14	1	0	SB33		
AYC3-133	SB33-35	SWHD	SWHD	SBIY	12.51	104.43	1	0	SB33		
AYC3-134	SB33-36	SWHD	SWHD	WDTM	16	113.34	1	0	SB33		
AYC3-135	SB33-37	SWHD	SWHD	SBIY	2.02	94.3	1	0	SB33		
AYC3-136	SB33-38	SWHD	SWHD	SBIY	4.09	80.69	1	0	SB33		
AYC3-137	SB33-39	SWHD	SWHD	WDTN	7.5	108.89	1	0	SB33		
AYC3-138	SB33-40	SWHD	SWHD	SBIY	6.74	114.55	1	0	SB33		
AYC3-139	SB33-41	SWHD	SWHD	SBIY	5.87	107.24	1	0	SB33		
AYC3-140	SB33-42	SWHD	SWHD	WDTN	10.69	58.15	1	0	SB33		
AYC3-141	SB33-43	SWHD	SWHD	SBIY	11.51	62.54	1	0	SB33		
AYC3-142	SB33-44	SWHD	SWHD	SBIY	1.78	83.11	1	0	SB33		
AYC3-143	SB33-45	SWHD	SWHD	SBIY	2.4	83.46	1	0	SB33		
AYC3-144	SB33-46	SWHD	SWHD	WDTN	11.75	76.66	1	0	SB33		
AYC3-145	SB33-47	SWHD	SWHD	SBIY	7.54	85.98	1	0	SB33		
AYC3-146	SB33-48	SWHD	SWHD	WDTN	16.29	104.96	1	0	SB33		
AYC3-147	SB33-49	SWHD	SWHD	SBIY	1.84	85.11	1	0	SB33		
AYC3-148	SB33-50	SWHD	SWHD	WDTN	12.19	111.65	1	0	SB33		
AYC3-149	SB33-51	SWHD	SWHD	SBIY	2.43	59.3	1	0	SB33		
AYC3-150	SB33-52	SWHD	SWHD	SBIY	5.63	77.56	1	0	SB33		
AYC3-151	SB33-53	SWHD	SWHD	SBIY	4.65	59.1	1	0	SB33		
AYC3-152	SB33-54	SWHD	SWHD	SBIY	3.58	83.66	1	0	SB33		

AYC3-153	SB33-55	SWHD	SWHD	WDTN	18.4	125.95	1	0	S B33		
AYC3-154	SB33-56	SWHD	SWHD	SBIY	3.04	98.83	1	0	S B33		
AYC3-155	SB33-57	SWHD	SWHD	SBIY	13.97	84.41	1	0	S B33		
AYC3-156	SB33-58	SWHD	SWHD	SBIY	6.59	52.56	1	0	S B33		
AYC3-157	SB33-59	SWHD	SWHD	SBIY	6.06	122.77	1	0	S B33		
AYC3-158	SB33-60	SWHD	SWHD	SBIY	9.28	103	1	0	S B33		
AYC3-159	SB33-61	SWHD	SWHD	WDTN	13.14	119.84	1	0	S B33		
AYC3-160	SB33-62	SWHD	SWHD	SBIY	9.21	104.83	1	0	S B33		
AYC3-161	SB33-63	SWHD	SWHD	SBIY	7.48	117.51	1	0	S B33		
AYC3-162	SB33-64	SWHD	SWHD	SBIY	8.96	60.01	1	0	S B33		
AYC3-163	SB33-65	SWHD	SWHD	WDTN	12.97	140.39	1	0	S B33		
AYC3-164	SB33-66	SWHD	SWHD	SBIY	2.78	58.7	1	0	S B33		
AYC3-165	SB33-67	SWHD	SWHD	SBIY	12.43	105.09	1	0	S B33		
AYC3-166	SB33-68	SWHD	SWHD	WDTN	4.65	78.64	1	0	S B33		
AYC3-167	SB33-69	SWHD	SWHD	SBIY	6.45	82.08	1	0	S B33		
AYC3-168	SB33-70	SWHD	SWHD	WDTN	12.11	63.71	1	0	S B33		
AYC3-169	SB33-71	SWHD	SWHD	SBIY	32.39	110.61	1	0	S B33		
AYC3-170	SB33-72	SWHD	SWHD	SBIY	3.48	90.23	1	0	S B33		
AYC3-171	SB33-73	SWHD	SWHD	SBIY	4.16	121.2	1	0	S B33		
AYC3-172	SB33-74	SWHD	SWHD	WDTN	14.4	89.95	1	0	S B33		
AYC3-173	SB33-75	SWHD	SWHD	SBIY	8.81	63.68	1	0	S B33		
AYC3-174	SB33-76	SWHD	SWHD	WDTN	3.67	113.75	1	0	S B33		
AYC3-175	SB33-77	SWHD	SWHD	SBIY	2.64	97.97	1	0	S B33		
AYC3-176	SB33-78	SWHD	SWHD	SBIY	11.45	54.23	1	0	S B33		
AYC3-177	SB33-79	SWHD	SWHD	WDTN	12.85	56.05	1	0	S B33		
AYC3-178	SB33-80	SWHD	SWHD	SBIY	2.58	82.72	1	0	S B33		
AYC3-179	SB33-81	SWHD	SWHD	SBIY	5.19	101.81	1	0	S B33		
AYC3-180	SB33-82	SWHD	SWHD	SBIY	4.19	118.78	1	0	S B33		
AYC3-181	SB33-83	SWHD	SWHD	SBIY	6.55	83.69	1	0	S B33		
AYC3-182	SB33-84	SWHD	SWHD	SBIY	8.35	103.26	1	0	S B33		
AYC3-183	SB33-85	SWHD	SWHD	SBIY	3.77	96.54	1	0	S B33		
AYC3-184	SB33-86	SWHD	SWHD	SBIY	6.33	63.56	1	0	S B33		
AYC3-185	SB33-87	SWHD	SWHD	SBIY	4.37	110.91	1	0	S B33		
AYC3-186	SB33-88	SWHD	SWHD	SBIY	16.15	132.54	1	0	S B33		
AYC3-187	SB33-89	SWHD	SWHD	SBIY	9.42	101.3	1	0	S B33		
AYC3-188	SB33-90	SWHD	SWHD	SBIY	5.41	95.23	1	0	S B33		
AYC3-189	SB33-91	SWHD	SWHD	WDTN	12.19	95.47	1	0	S B33		
AYC3-190	SB33-92	SWHD	SWHD	SBIY	2.75	110.95	1	0	S B33		
AYC3-191	SB33-93	SWHD	SWHD	SBIY	2.41	97.63	1	0	S B33		
AYC3-192	SB33-94	SWHD	SWHD	SBIY	1.09	79.59	1	0	S B33		
AYC3-193	SB33-95	SWHD	SWHD	SBIY	5.15	95.29	1	0	S B33		
AYC3-194	SB33-96	SWHD	SWHD	SBIY	5.7	71.31	1	0	S B33		
AYC3-195	SB33-97	SWHD	SWHD	SBIY	14	67.96	1	0	S B33		
AYC3-196	SB33-98	SWHD	SWHD	SBIY	11.61	130.42	1	0	S B33		
AYC3-197	SB33-99	SWHD	SWHD	SBIY	7.2	53.37	1	0	S B33		
AYC3-198	SB33-100	SWHD	SWHD	WDTM	17.21	95.9	1	0	S B33		
AYC3-199	SB33-101	SWHD	SWHD	SBIY	7.98	84.29	1	0	S B33		
AYC3-200	SB33-102	SWHD	SWHD	SBIY	5.25	95.92	1	0	S B33		
AYC3-201	SB33-103	SWHD	SWHD	SBIY	2.37	105.06	1	0	S B33		
AYC3-202	SB33-104	SWHD	SWHD	SBIY	3.75	67.08	1	0	S B33		
AYC3-203	SB33-105	SWHD	SWHD	WDTN	2.64	85.74	1	0	S B33		
AYC3-204	SB33-106	SWHD	SWHD	WDTN	12.63	96.46	1	0	S B33		
AYC3-205	SB33-107	SWHD	SWHD	WDTN	10.34	90.12	1	0	S B33		
AYC3-206	SB33-108	SWHD	SWHD	SBIY	8.89	87.01	1	0	S B33		
AYC3-207	SB33-109	SWHD	SWHD	SBIY	1.79	64.73	1	0	S B33		
AYC3-208	SB33-110	SWHD	SWHD	WDTN	8.26	83.39	1	0	S B33		
AYC3-209	SB33-111	SWHD	SWHD	SBIY	9.66	78.79	1	0	S B33		
AYC3-210	SB33-112	SWHD	SWHD	WDTN	5.8	89.12	1	0	S B33		
AYC3-211	SB33-113	SWHD	SWHD	SBIY	3.92	67.62	1	0	S B33		
AYC3-212	SB33-114	SWHD	SWHD	SBIY	5.15	75.24	1	0	S B33		
AYC3-213	SB33-115	SWHD	SWHD	SBIY	21.94	39.96	1	0	S B33		
AYC3-214	SB33-116	SWHD	SWHD	SBIY	12.91	112.34	1	0	S B33		
AYC3-215	SB33-117	SWHD	SWHD	SBIY	2.1	100.15	1	0	S B33		
AYC3-216	SB33-118	SWHD	SWHD	SBIY	13.35	122.34	1	0	S B33		
AYC3-217	SB33-119	SWHD	SWHD	WDTN	23.26	155.3	1	0	S B33		
AYC3-218	SB33-120	SWHD	SWHD	SBIY	6.33	105.82	1	0	S B33		
AYC3-219	SB33-121	SWHD	SWHD	WDTN	6.43	92.81	1	0	S B33		
AYC3-220	SB33-122	SWHD	SWHD	SBIY	16.94	111.56	1	0	S B33		
AYC3-221	SB33-123	SWHD	SWHD	SBIY	6.82	81.41	1	0	S B33		
AYC3-222	SB33-124	SWHD	SWHD	WDTN	21.9	138.12	1	0	S B33		
AYC3-223	SB33-125	不可	不可	不可					S B33		
AYC3-224	SB33-126	SWHD	SWHD	SBIY	11.18	39.4	1	0	S B33		
AYC3-225	SB33-127	SWHD	SWHD	SBIY	5.18	103.15	1	0	S B33		
AYC3-226	SB33-128	SWHD	SWHD	WDTN	10.22	102.49	1	0	S B33		
AYC3-227	SB33-129	SWHD	SWHD	SBIY	7.72	75.55	1	0	S B33		
AYC3-228	SB33-130	SWHD	SWHD	WDTN	8.82	83.46	1	0	S B33		
AYC3-229	SB33-131	SWHD	SWHD	WDTN	6.17	91.69	1	0	S B33		
AYC3-230	SB33-132	SWHD	SWHD	SBIY	4.78	59.29	1	0	S B33		

AYC3-231	SB33-133	SWHD	SWHD	SBIY	10.35	66.74	1	0	ＳＢ33		
AYC3-232	SB33-134	SWHD	SWHD	SBIY	6.01	64.72	1	0	ＳＢ33		
AYC3-233	SB33-135	SWHD	SWHD	SBIY	14.44	53.54	1	0	ＳＢ33		
AYC3-234	SB33-136	SWHD	SWHD	SBIY	5.28	75.7	1	0	ＳＢ33		
AYC3-235	SB33-137	SWHD	SWHD	SBIY	3.63	93.35	1	0	ＳＢ33		
AYC3-236	SB33-138	SWHD	SWHD	SBIY	6.77	124.19	1	0	ＳＢ33		
AYC3-237	SB33-139	SWHD	SWHD	SBIY	4.03	108.26	1	0	ＳＢ33		
AYC3-238	SB33-140	SWHD	SWHD	SBIY	3.64	76.08	1	0	ＳＢ33		
AYC3-239	SB33-141	SWHD	SWHD	SBIY	12.09	56.85	1	0	ＳＢ33		
AYC3-240	SB33-142	SWHD	SWHD	SBIY	7.29	99.45	1	0	ＳＢ33		
AYC3-241	SB33-143	SWHD	SWHD	WDTM	6.12	100.08	1	0	ＳＢ33		
AYC3-242	SB33-144	SWHD	SWHD	SBIY	7.78	82.98	1	0	ＳＢ33		
AYC3-243	SB33-145	SWHD	SWHD	SBIY	28.03	107.22	1	0	ＳＢ33		
AYC3-244	SB33-146	SWHD	SWHD	WDTN	8.91	69.39	1	0	ＳＢ33		
AYC3-245	SB33-147	SWHD	SWHD	SBIY	22.15	128.72	1	0	ＳＢ33		
AYC3-246	SB33-148	SWHD	SWHD	SBIY	15.45	138.88	1	0	ＳＢ33		
AYC3-247	SB33-149	SWHD	SWHD	SBIY	3.81	60.23	1	0	ＳＢ33		
AYC3-248	SB33-150	SWHD	SWHD	SBIY	13.55	109.25	1	0	ＳＢ33		
AYC3-249	SB33-151	SWHD	SWHD	WDTN	2.12	89.19	1	0	ＳＢ33		Ｕ・Ｆ
AYC3-250	SB33-152	SWHD	SWHD	SBIY	7.62	98.05	1	0	ＳＢ33		
AYC3-251	SB33-153	SWHD	SWHD	SBIY	2.79	72.9	1	0	ＳＢ33		石鏃
AYC3-252	SB33-154	SWHD	SWHD	SBIY	1.88	86.3	1	0	ＳＢ33		石鏃
AYC3-253	SB33-155	SWHD	SWHD	SBIY	15.86	140.09	1	0	ＳＢ33		石鏃
AYC3-254	SB33-156	SWHD	SWHD	SBIY	7.3	119.14	1	0	ＳＢ33		削器
AYC3-255	SB33-157	SWHD	SWHD	SBIY	6.51	97.92	1	0	ＳＢ33		石核
AYC3-256	SB33-158	SWHD	SWHD	SBIY	7.75	89.44	1	0	ＳＢ33		石鏃
AYC3-257	SB33-159	SWHD	SWHD	SBIY	2.41	73.32	1	0	ＳＢ33		削器
AYC3-258	SB33-160	SWHD	SWHD	SBIY	19.83	141.9	1	0	ＳＢ33		Ｒ・Ｆ
AYC3-259	SB33-161	SWHD	SWHD	WDTN	11.26	82.31	1	0	ＳＢ33		
AYC3-260	SB33-162	SWHD	SWHD	SBIY	8.6	57.21	1	0	ＳＢ33		Ｒ・Ｆ
AYC3-261	SB33-163	SWHD	SWHD	SBIY	3.81	68.24	1	0	ＳＢ33		石鏃
AYC3-262	SB33-164	SWHD	SWHD	SBIY	2.37	93.46	1	0	ＳＢ33		石鏃
AYC3-263	SB33-165	SWHD	SWHD	SBIY	13.57	109.1	1	0	ＳＢ33		Ｒ・Ｆ
AYC3-264	SB33-166	SWHD	SWHD	SBIY	23.82	76.24	1	0	ＳＢ33		Ｕ・Ｆ
AYC3-265	SB33-167	SWHD	SWHD	WDTM	13.82	108.66	1	0	ＳＢ33		石鏃
AYC3-266	SB33-168	SWHD	SWHD	WDTN	17.82	97.58	1	0	ＳＢ33		ピエス・エスキーユ
AYC3-267	SB33-169	SWHD	SWHD	SBIY	12.02	101.42	1	0	ＳＢ33		石鏃
AYC3-268	SB33-170	SWHD	SWHD	WDTM	24.97	60.88	1	0	ＳＢ33		ピエス・エスキーユ
AYC3-269	SB33-171	SWHD	SWHD	WDTM	15.17	108.43	1	0	ＳＢ33		Ｒ・Ｆ
AYC3-270	SB33-172	SWHD	SWHD	SBIY	10.97	46.76	1	0	ＳＢ33		石鏃
AYC3-271	SB33-173	SWHD	SWHD	SBIY	8.95	105.51	1	0	ＳＢ33		石鏃
AYC3-272	SB33-174	SWHD	SWHD	SBIY	11.05	84.12	1	0	ＳＢ33		削器
AYC3-273	SB33-175	SWHD	SWHD	SBIY	7.8	92.33	1	0	ＳＢ33		石鏃
AYC3-274	SB33-176	SWHD	SWHD	SBIY	23.2	132.75	1	0	ＳＢ33		
AYC3-275	SB94-1	SWHD	SWHD	SBIY	1.52	96.18	1	0	ＳＢ94		石鏃
AYC3-276	SB94-2	SWHD	SWHD	WDTN	4.28	94.02	1	0	ＳＢ94		
AYC3-277	SB94-3	SWHD	SWHD	WDTN	14.92	58.8	1	0	ＳＢ94		
AYC3-278	SB94-4	SWHD	SWHD	SBIY	17.54	104.71	1	0	ＳＢ94		
AYC3-279	SB94-5	SWHD	SWHD	SBIY	4.46	86.82	1	0	ＳＢ94		
AYC3-280	SB94-6	SWHD	SWHD	SBIY	1.89	67.31	1	0	ＳＢ94		
AYC3-281	SB94-7	SWHD	SWHD	SBIY	14.52	96.27	1	0	ＳＢ94		
AYC3-282	SB94-8	SWHD	SWHD	SBIY	8.29	77.09	1	0	ＳＢ94		
AYC3-283	SB94-9	SWHD	SWHD	SBIY	11.83	89.72	1	0	ＳＢ94		
AYC3-284	SB94-10	SWHD	SWHD	SBIY	11.21	74	1	0	ＳＢ94		
AYC3-285	SB94-11	SWHD	SWHD	SBIY	7.03	89.45	1	0	ＳＢ94		
AYC3-286	SB94-12	不可	不可	不可					ＳＢ94		
AYC3-287	SB94-13	SWHD	SWHD	SBIY	11.25	90.62	1	0	ＳＢ94		
AYC3-288	SB94-14	SWHD	SWHD	SBIY	12.08	115.59	1	0	ＳＢ94		
AYC3-289	SB94-15	SWHD	SWHD	WDTN	9.17	112.2	1	0	ＳＢ94		
AYC3-290	SB94-16	SWHD	SWHD	WDTM	12.65	78.39	1	0	ＳＢ94		
AYC3-291	SB94-17	非黒曜石	非黒曜石	非黒曜石					ＳＢ94		
AYC3-292	SB94-18	SWHD	SWHD	WDTN	5.43	82.49	1	0	ＳＢ94		
AYC3-293	SB94-19	SWHD	SWHD	SBIY	16.38	65.71	1	0	ＳＢ94		
AYC3-294	SB94-20	SWHD	SWHD	WDTN	7.03	124.4	1	0	ＳＢ94		
AYC3-295	SB94-21	SWHD	SWHD	SBIY	9.02	84.86	1	0	ＳＢ94		
AYC3-296	SB94-22	SWHD	SWHD	SBIY	11.08	77.91	1	0	ＳＢ94		
AYC3-297	SB94-23	SWHD	SWHD	SBIY	2.44	69.79	1	0	ＳＢ94		
AYC3-298	SB94-24	SWHD	SWHD	WDTM	21.92	100.74	1	0	ＳＢ94		石鏃
AYC3-299	SB94-25	SWHD	SWHD	SBIY	2.21	85.07	1	0	ＳＢ94		
AYC3-300	SB94-26	SWHD	SWHD	SBIY	0.74	99.05	1	0	ＳＢ94		
AYC3-301	SB94-27	SWHD	SWHD	SBIY	10.41	90.15	1	0	ＳＢ94		
AYC3-302	SB94-28	SWHD	SWHD	SBIY	2.14	90.44	1	0	ＳＢ94		
AYC3-303	SB94-29	SWHD	SWHD	WDTN	2.97	108.6	1	0	ＳＢ94		
AYC3-304	SB94-30	SWHD	SWHD	SBIY	1.58	88.2	1	0	ＳＢ94		石鏃
AYC3-305	SB94-31	SWHD	SWHD	SBIY	11.08	120.43	1	0	ＳＢ94		
AYC3-306	SB94-32	SWHD	SWHD	SBIY	4.23	82.81	1	0	ＳＢ94		
AYC3-307	SB94-33	SWHD	SWHD	SBIY	8.19	99.58	1	0	ＳＢ94		
AYC3-308	SB94-34	SWHD	SWHD	WDTN	11.08	68.07	1	0	ＳＢ94		

AYC3-309	SB94-35	SWHD	SWHD	SBIY	7.71	61.92	1	0	S B94		
AYC3-310	SB94-36	SWHD	SWHD	SBIY	7.03	88.3	1	0	S B94		
AYC3-311	SB94-37	SWHD	SWHD	SBIY	5.69	115.18	1	0	S B94		
AYC3-312	SB94-38	SWHD	SWHD	SBIY	7.57	88.43	1	0	S B94		
AYC3-313	SB94-39	SWHD	SWHD	SBIY	2.99	88.53	1	0	S B94		
AYC3-314	SB94-40	SWHD	SWHD	SBIY	32.94	111.27	1	0	S B94		石核
AYC3-315	SB94-41	SWHD	SWHD	SBIY	9.38	79.38	1	0	S B94		
AYC3-316	SB100-1	SWHD	SWHD	WDTN	5.55	119.6	1	0	S B100		
AYC3-317	SB100-2	SWHD	SWHD	SBIY	2.14	97.95	1	0	S B100		
AYC3-318	SB100-3	SWHD	SWHD	WDTN	8.66	130.12	1	0	S B100		
AYC3-319	SB100-4	WDTY	WDTY	WDHY	5.1	34.42	1	0	S B100		
AYC3-320	SB100-5	SWHD	SWHD	SBIY	30.41	84.15	1	0	S B100		
AYC3-321	SB100-6	SWHD	SWHD	SBIY	2.15	93.87	1	0	S B100		
AYC3-322	SB100-7	SWHD	SWHD	SBIY	2.85	75.93	1	0	S B100		
AYC3-323	SB100-8	SWHD	SWHD	SBIY	3.35	71.5	1	0	S B100		
AYC3-324	SB100-9	SWHD	SWHD	SBIY	9.35	69	1	0	S B100		
AYC3-325	SB100-10	SWHD	SWHD	SBIY	6.36	78.82	1	0	S B100		
AYC3-326	SB100-11	SWHD	SWHD	SBIY	4.65	64.42	1	0	S B100		
AYC3-327	SB100-12	SWHD	SWHD	SBIY	5.1	94.31	1	0	S B100		
AYC3-328	SB100-13	SWHD	SWHD	WDTN	12.33	116.88	1	0	S B100		
AYC3-329	SB100-14	SWHD	SWHD	SBIY	2.72	67.06	1	0	S B100		
AYC3-330	SB100-15	SWHD	SWHD	SBIY	0.96	82.27	1	0	S B100		
AYC3-331	SB100-16	SWHD	SWHD	SBIY	5.17	92.21	1	0	S B100		
AYC3-332	SB100-17	SWHD	SWHD	SBIY	18.85	81.19	1	0	S B100		
AYC3-333	SB100-18	SWHD	SWHD	WDTN	20.81	90.29	1	0	S B100		
AYC3-334	SB100-19	SWHD	SWHD	SBIY	8.91	58.35	1	0	S B100		
AYC3-335	SB100-20	SWHD	SWHD	WDTN	6.73	74.69	1	0	S B100		
AYC3-336	SB100-21	SWHD	SWHD	SBIY	3.54	83.38	1	0	S B100		
AYC3-337	SB100-22	SWHD	SWHD	SBIY	4.97	68.41	1	0	S B100		
AYC3-338	SB100-23	SWHD	SWHD	SBIY	9.18	90.25	1	0	S B100		
AYC3-339	SB100-24	SWHD	SWHD	SBIY	3.14	90.72	1	0	S B100		
AYC3-340	SB100-25	SWHD	SWHD	WDTN	20.49	60.52	1	0	S B100		
AYC3-341	SB100-26	SWHD	SWHD	WDTM	8.59	92.91	1	0	S B100		
AYC3-342	SB100-27	SWHD	SWHD	SBIY	7.75	74.94	1	0	S B100		
AYC3-343	SB100-28	SWHD	SWHD	SBIY	4.52	75.19	1	0	S B100		
AYC3-344	SB100-29	SWHD	SWHD	WDTN	4.93	120.29	1	0	S B100		
AYC3-345	SB100-30	SWHD	SWHD	SBIY	21.59	25.4	0.9741	0.0259	S B100		
AYC3-346	SB100-31	SWHD	SWHD	SBIY	17.02	104.58	1	0	S B100		
AYC3-347	SB100-32	SWHD	SWHD	SBIY	11.65	133.47	1	0	S B100		
AYC3-348	SB100-33	SWHD	SWHD	SBIY	6.36	50.02	1	0	S B100		ピエス・エスキーユ
AYC3-349	XIVU18-1	SWHD	SWHD	WDTN	5.77	92.45	1	0	XIVU18		原石
AYC3-350	XIVU18-2	SWHD	SWHD	SBIY	14.22	42.65	1	0	XIVU18		原石
AYC3-425	SB33-26	SWHD	SWHD	SBIY	4.96	59.78	1	0	S B33		ピエス・エスキーユ
AYC3-426	SB33-91	SWHD	SWHD	WDTM	21.59	63.75	1	0	S B33		石鏃
AYC3-427	SB100-34	SWHD	SWHD	SBIY	30.62	144.03	1	0	S B100	1	石鏃
AYC3-428	SB100-35	SWHD	SWHD	SBIY	15.26	113.1	1	0	S B100	2	石錐
AYC3-429	SB100-36	SWHD	SWHD	WDTN	12.65	131.26	1	0	S B100	3	ピエス・エスキーユ

第３節　吉野遺跡群における集落の変遷

吉野遺跡群では縄文時代～江戸時代の間に、断続して集落が存在した事が判明した。本節では調査成果をもとに各時期ごとの集落変遷を把握したい。また本遺跡群においては、遺構の削平がはげしく、形状が不明瞭であったり、遺物が少量で時期が不明瞭な遺構が多く見られるため、検討の対象が時期の判明した竪穴住居跡(SB)に偏る点を了承いただきたい。

１　縄文時代

吉野遺跡群では、縄文時代以前にさかのぼる遺物としては尖頭器が表採されるのみであり、遺構・遺物が一定量出土するのは縄文時代からである。

早・前期（第40図１）

当該期の遺構については、第III章第１節で詳細な検討が行われているので、本項では概略を述べる。

竪穴住居跡４軒と多数の土坑・集石土坑を確認した。遺構の大半はＤ地区とＥ地区で検出され、土坑１基のみＣ２ａ地区で検出されている。全体的に遺構・遺物の量も少なく、生活の痕跡も断続的である。

早期前～中葉については、立野式期の遺構をＥ地区(SB52・53)、Ｄ地区(SK1355等)で、田戸上層式後半期の遺構をＣ２ａ地区(SK1321)で検出した。早期末葉の石山式～天神山式期についてはＤ地区でSB93に多数の土坑、集石を伴う土坑を検出した。前期末葉の大歳山式期についてはＥ地区でSB50を検出した。

住居跡の形状については、早期前葉にはプランが円形のもの２軒(SB52・53)を検出したが、遺構内部で明確な施設は確認されていない。早期末葉にはプランが隅丸台形のもの１軒(SB93)を検出した。主柱穴と推測されるピットが長方形に配置され、中央部には地床炉が存在する。前期末葉にはプランが隅丸長方形のもの１軒(SB50)を検出した。柱穴の配列は不明瞭で、中央部付近には埋甕炉と推測される２個体の土器が検出されている。

このほか、遺跡群内では早期中葉沈線文系土器群終末期のものや、前期前葉木島式、前期中葉北白川下層IIｂ式土器が出土しているが、明確な遺構は確認されていない。また、前期末葉の遺物はＩ地区において中期初頭～前葉の住居跡内からも若干出土している。

中期初頭～前葉（第40図２）

吉野遺跡群において、遺構数が増加して一定規模の集落が構成されるようになる時期である。竪穴住居跡８軒と２基の土坑を確認した。遺構の分布については、１基の土坑(SK1285)がＪ２地区に位置する以外は、すべてＩ地区で検出された。表採資料にも同様の傾向が見られる点から、Ｉ地区が当該期集落の中心的な位置と推測される。遺構の配置を見ると、約5,000㎡あるＩ地区の中央部付近に遺構のほとんどない空間が存在し、その空間を取り巻くように８軒の竪穴住居跡が点在する状況が見られる。これら住居跡は、出土した遺物の様相から同時期というよりは、時間差を有して数軒単位で営まれた可能性がある。またＩ地区では多数の土坑が検出されているが、縄文～平安時代までの検出面であるため、本時期に対応する土坑を抽出するのが困難な状況にある。

竪穴住居跡の形状はいずれも円形～不整円形を呈する。炉については埋甕炉が１軒(SB117)、地床炉が４軒(SB100・109・118・119)確認された。直径30～70cm程で、いずれも炉の被熱痕跡は弱い。柱穴配列は様々で、SB100では４本柱で方形に配列、SB117では５本柱で不整五角形状に配列する。

このほか、当該期については住居跡の埋土中より礫が集中して出土する状況が見られる点も注意される。礫集中が見られる住居はSB100・109・118・119・124である。これら礫集中は、Ｉ地区の上面に自然流路

が流れていた状況もあり、自然のものか人為的なものかは明確に判断することはできない。また当該期以外にも埋土中より礫が出土する事例もあり、すべてが人為的な所産によるものとは思われない。しかし、SB109・124などでは礫の中からも遺物が出土する例もみられる。特にSB124では人面装飾付土器が出土し、礫の中から破片が出土するなど、何らかの廃棄行為が推測される事例も認められる。礫集中については今後も、類例を集めて行く必要性を感じる。

中期中葉（第40図３）

新道式期・藤内式期・井戸尻式期の間に、竪穴住居跡５軒、土坑数基、７つの不整円形配列土坑を確認した。

新道式期は、Ｃ４地区でSB144を検出。円形状を呈し、柱穴は５角形に配置される。炉は埋甕炉である。藤内式期は、Ｉ地区でSB99とＣ４地区でSK1320・SX8を検出した。いずれの遺構も削平がはげしく、形状等を検討することは出来ない。またＡ２地区では、中期中葉を中心とした不整円形配列土坑が出土している。遺物は量的に少ないものの、上部に無遺物の間層を挟んでの検出であったために、ほぼ当該期に限定することができた。いずれも土坑の配列は不規則であり、ピットの深さも浅く、住居跡などとは推測しにくい。井戸尻式期は、Ｃ４地区でSB145、Ｆ４地区でSB35を検出した、形状はいずれも楕円形状を呈する。SB35は主柱穴が６本と推測され、柱穴間を結ぶ溝状遺構も確認された。炉は中央部に「コ」の字状の石囲炉(内寸は約30cm)と奥壁寄りに埋甕炉を検出した。SB145は、主柱穴が壁面に沿って配置されたと推測される。炉は中央部西寄りに「コ」の字状の石囲炉を検出した。内寸は約30cm。資料不足ではあるが、本遺跡群で石囲炉が確実に見られるのはこの時期からである。このほか、中葉と推測されるが、時期が不明瞭な遺構にSB123・SK1361などがある。

中期中葉は遺構数も少なく、各時期の様相は不明瞭であるが、中葉全体の遺構の分布範囲で見るとＩ地区とＣ４地区に竪穴住居跡と土坑が集中する傾向が認められる。遺構外出土遺物も、新道式期・藤内式期はＩ地区、井戸尻式期はＣ４地区で出土しており、遺構の分布状況と一致する。これは中期初頭～前葉にＩ地区にみられた遺構の集中範囲が次第にＣ４地区に移動した事をうかがわせる。また井戸尻式期には竪穴住居跡がＦ４地区でも検出されており、生活空間が次第に分散する可能性も存在する。

もう一つ注目すべきはＡ２地区で検出された７つの不整円形配列土坑である。これらはＩ・Ｃ４・Ｆ４地区に存在する住居跡等とは異なる性格の遺構群と推測され、藤内～井戸尻式期における居住域とそれ以外の区域との関係を推測する上で、注目すべき点と考えられる。今後の資料の増加を待ちたい。

中期後葉Ｉ期（第40図４）

10軒の竪穴住居跡と１基の礫集中遺構を確認した。遺構の分布範囲は大きく２地区存在する。一つは遺跡群北東部のＩ・Ｊ・Ｃ地区で、SB86・98・101・106・120・142・143とSH3であり、もう一つは遺跡群南西部のＡ２・Ｄ地区で、SB57・94・148である。これら住居跡は出土遺物の様相から、ある程度の時間差をもって存在していたと推測される。特にSB142・143は遺構内より中期中葉と推測される土器を出土しており、当該期の中でも極めて中葉に近い微妙な時期に属する。加えて両住居跡はＣ２地区に位置しており、中期中葉の遺構が集中して発見されたＣ４地区にも近接しているため、Ｃ４からＣ２地区への居住域の変遷も推測できるかもしれない。このほか、SB94とSB98については出土土器量が豊富で、様相も類似している点から、極めて近い時期に存在した可能性があり、SB98がＩ地区、SB94がＤ地区に位置する点から、中期後葉Ｉ期には居住域が２つに分かれていたと推測される。また全体的に住居跡も密集しないで点在する点もＩ期の特徴といえる。

つぎに遺構の特徴を見たい。竪穴住居跡の形状については、不整円形～楕円形状を呈するものが３軒(SB98・106・142)、やや多角形状の不整円形～楕円形状を呈するものが２軒(SB57・120)、隅丸の方形～長方形

状を呈するものが4軒(SB86・94・101・143)である。炉の形状についてはすべて石囲炉であり、「ロ」あるいは「コ」の字状で、内寸の規模は30～60cm程になるものが6軒(SB57・86・94・101・120・143)あり、中期中葉の炉にくらべてやや大きくなる傾向がある。また形状が不整円形状を呈する炉が2軒(SB98・142)ある。このほか炉石の一部に花崗岩を配置する例が見られるものもⅠ期に多く、意図的な配置の可能性があり、注目される。確認された住居跡は6軒(Ⅰ期はSB57・101・120・142・143、Ⅱ期はSB139)で、配置場所はSB57が奥壁側中央、SB101・120が奥壁側左端、SB142が奥壁側右寄り、SB143は入り口側左端、SB139は入り口側左端である。用いられる石の形状はSB120・142・143が大きめの平石、SB57・101・139は棒状の石である。主柱穴の本数についても推定ではあるが、4本となるのが1軒(SB143)、5本となるのが4軒(SB57・94・98・101)、6本となるのが4軒(SB86・106・120・142)であり、特定のプランに対応する柱穴配置を想定するにはやや不安がある。

住居跡以外の遺構についてはSH3が注目される。本遺構は、プランは確認できなかったが、礫集中の下から2個体の土器がつぶれた状況で出土しており、何らかの行為によるものと推測される。出土地点についても、遺跡群北東部にある遺構群に含まれるが、居住域とは離れた場所に位置している点が注意される。このほか、A2地区の土坑群の中から当該期の土器が出土しているものの、当地区では中期全体の遺物が出土しており、当該期の遺構として特定の土坑を抽出するのは困難である。

中期後葉Ⅱ期（第41図1・2）

24軒の竪穴住居跡を確認した。このほか、竪穴住居跡の可能性のある柱穴群が幾つか確認されており、整理段階で復元を試みているが(SB87～90など)、ここでは、時期・形状が明確に判明した事例を基に報告する。

遺構の分布範囲は2地区存在する。一つは遺跡群北東部のⅠ・J・C地区で、SB115・125・139であり、もう一つは遺跡群南西部のA2地区とE地区で、SB18～21・23～31・33・34・37・39・40・43・54・55である。これら住居跡は軒数も多く遺構の密集度も高い点などから、時間差をもって存在していたと推測される。まず遺跡群北東部の3軒の竪穴住居跡(SB115・125・139)は遺構や遺物の特徴から、Ⅱ期の中でも古い時期に属すると推測され、当該地区において中期後葉Ⅰ期からⅡ期の古い時期までは生活域が存在したことが考えられる。また3軒の住居跡からは埋甕が検出されていない。つぎにA2地区とE地区であるが、竪穴住居跡が20軒以上確認され、縄文時代を通して最も住居軒数が増加し、集中する地区となった。その中で両地区合わせて13軒の竪穴住居跡から埋甕が出土している。これら住居跡は土器の様相から遺跡群北東部の住居跡よりも新しい時期に属すると推測され、若干時間差が存在するものの、後葉Ⅰ期に見られたA2地区・D地区の生活域から、次第にE地区へ変遷してきた可能性もうかがえる。またE地区における遺構の位置関係については、埋甕を伴わない住居跡は7軒(SB23・24・26・33・39・40・43)あり、密集せずに等高線に直行する形で直線的に点在している。これに対し、埋甕を伴う住居跡は11軒(SB18～20・25・27～31・34・37)あり、SB34を除き、地区北東部の約1,300m²の範囲に、切り合い関係を有して密集する様相が見られる。これは後葉Ⅱ期以前に吉野遺跡群に見られた複数地区に点在する住居跡のあり方とは対照的であり、埋甕の存在も含めて当該期の生活の背景に大きな変化が訪れていたことを推測させられる(第41図1)。

つぎに遺構の特徴をみたい。当該期については竪穴住居跡の形状と主柱穴本数そして埋甕の有無について若干傾向が認められそうである。形状別に見ると、円形のものは4軒(SB34・39・55・115)あり、その中で柱穴本数については、6本が1軒(SB34)、5本が1軒(SB115)、4本が2軒(SB39・55)である。埋甕は2軒(SB34・55)で出土した。つぎに楕円形(縦・横両方向を含む)のものは5軒(SB18・26・28・29・43)あり、柱穴は不明のSB29を除き、すべて6本で壁際に左右対称に配置されている・埋甕は3軒(SB

18・28・29)で出土した。この楕円形の形状の住居跡は軒数も多く、構造も類似する点から、当該期における一つの基本形と推測される。つぎに形状が不明瞭なものは10軒(SB19・20・23・24・25・27・30・31・40・54)あり、柱穴本数が判明したのは4本が2軒(SB23・40)、5本が1軒(SB20)、6本が1軒(SB27)である。埋甕については7軒(SB19・20・25・27・30・31・54)で出土している。つぎに隅丸方形のものは4軒(33・37・125・139)あり、柱穴本数はいずれも4本であり、隅丸方形の形態にも柱穴本数の定型化が見られそうである。その中で、埋甕は1軒(SB37)で出土しただけである。またSB37の埋甕には3群J類7種(加曽利E式および同系に類似)の深鉢が用いられており、E地区の他の埋甕に主体的に用いられるG類(唐草状の渦巻文を有するもの)と異なる点も注意される。またSB125・139は先に述べたとおりII期の中でも古い時期に属する可能性がある。これらの点から隅丸方形の住居跡には、他の円形・楕円形等の住居跡との若干の時間差、あるいは埋甕に関する何らかの禁忌が存在した可能性が推測される。現状では資料不足であるものの、今後の資料の増加を待ちたい。

炉については、住居跡中央部の奥壁寄りに位置するものが多く、赤変部を検出したものが15軒(SB18～21・24・25・28・30・31・33・37・39・43・115・125)、方形もしくは長方形と推測される石囲が検出されたものが6軒(23・26・27・34・40・139)である。火床のみ検出した例には削平を受けて上部構造が不明なものが含まれる。石囲炉については、炉縁石が部分的に残存するものも含まれる。内寸は約70～90cmあり、後葉I期よりも更に大型化する。

以上後葉II期について触れてきた。時期が判明する遺構が住居跡のみであり、集落様相のわずかな部分の検討となってしまった。住居跡以外の土坑も多々検出されるものの、遺物が少なく、時期を限定できない状況にある。その中でもE地区の南西部で20基以上の土坑群が検出されているのが注目される。明確な配列は認められないが、いずれも直径1～1.3m、深さ0.7～1mを測り、居住域とは異なる性格の空間が存在したようである。遺物がほとんど出土しないため時期を特定できないが、注意される(第III章第3節3)。また、A2地区の第一検出面にも土坑群が認められる。こちらも出土遺物が少なくて、明確に時期を特定できない状況である。

第10表　吉野遺跡群縄文時代中期の竪穴住居形態

	住居跡	形状	主柱穴本数	炉	炉の規模(内寸)	埋甕
初頭～前葉	SB100	不整円形	4本	自床炉	約70cm	
	SB117	不整円形	5本	埋甕炉		
中葉	SB144	円形	5本	埋甕炉		
	SB35	楕円形	6本	埋甕炉と石囲炉	約30cm（石囲炉)	
後葉I	SB94	隅丸方形	5本	長方形石囲炉	50×40cm	
	SB98	不整円形	5本	不整円形石囲炉	約30cm	
	SB120	多角形状を呈する楕円形	6本	長方形石囲炉	60×30cm	
後葉II	SB34	円形	6本	方形石囲炉	100×90cm	正位で2基
	SB26	楕円形	6本	方形石囲炉？	約80×80cm	
	SB37	隅丸方形	4本	火床のみ検出	約100×100cm	正位で1基

後・晩期（第41図3）

2軒の竪穴住居跡と2棟の掘立柱建物跡、1つの集石遺構と多数の土坑を確認した。遺構の分布範囲は遺跡群南西部のA1・E・F4地区にまとまる。また、過去に未調査区で御物石器が表採されている。このほか、当該期の土器が遺跡群全体で少量採集されている。遺構の時期については、出土土器の様相から後期前葉～晩期前葉までの間に中心があると推測される。ただし、遺構・遺物ともに少量のため、詳細な存続期間を推測することは出来ない。

住居跡は2軒(F4地区でSB22・E地区でSB32)検出した。形状はともに方形である。他遺構との切り合いが多いため、構造については不明の部分が多い。遺物もほとんど出土していない。掘立柱建物跡はF

４地区で２棟(ST4・22)を想定した。Ｆ４地区は当該期の遺構がもっとも多く検出された地区で、このほか土坑が約40基と焼土跡４基を検出している。特に土坑の中には長方形で土器を出土したSK60や、２次焼成を受けた土器が出土したSK53など、墓壙の可能性を有するものも含まれる。Ｆ４地区は遺構に切り合い関係が見られ、土器も後・晩期のものが混じって出土しているため、幾つかの時期において、居住域、墓域・祭祀域など異なる性格の場として用いられた可能性がある。

このほかＡ１地区では配石遺構と推測される遺構(SH2)が検出されている。偏平な石を敷き詰めているが、柱穴や炉などは確認されていない。時期的には後期前葉～中葉の土器が主体的に出土している。また、Ａ２地区とＡ３地区の間では御物石器が採集されている。御物石器は濃尾・北陸地方に分布しており、長野県内では吉野遺跡群のものを含めて３例確認されている。そのいずれもが木曽郡下で発見されていることから(第III章第４節２)、木曽地方と当該地域との関連性を考える上で注意が必要な資料である。

上記で報告したもの以外に、Ｆ４地区南西部・Ｅ地区北東部を中心とする人為的な可能性のある集石や骨片の集中地点の存在、石棒や石製装身具等の出土が注目される(第III章第３節１)。これら資料の詳細は不明であるものの、分布範囲が当該期の生活痕跡の分布範囲と重なる点や調査時の所見をもとにすれば、当該期の資料の可能性が高いものと推測される。

以上、縄文時代における時期別の様相について検討を行った。遺跡群内の変遷については、早・前期にはＤ・Ｅ地区など遺跡南西部で遺構が小規模で断続的に認められ、中期初頭～前葉になると、遺跡北東部のＩ地区で遺構数が増加し、連続する一定の生活空間ができあがる。中葉になると、遺構数は減少するがＩ地区よりやや南部のＣ４地区にも分布範囲が広がり、Ａ２地区では幾つかの不整円形配列土坑も確認された。続く後葉Ｉ期になると範囲は遺跡北東部と南西部に大きく分かれ、後葉II期には南西部のＥ地区で遺構数が増加し、極めて集中する点が判明した。後・晩期になると遺構数が激減し、分布範囲は遺跡群南西部の中でも若干北側に移動する。一方Ｆ４地区では墓域あるいは祭祀域の可能性を有する空間も存在したようである。また晩期中葉以降の遺構は確認できない。

２　縄文時代晩期末・弥生時代・古墳時代後期

縄文時代晩期末～弥生時代前期（第41図４）

１基の性格不明遺構を確認した。Ｉ地区に位置する。表採資料もＩ・Ｊ地区で少量見られるだけである。遺物は弥生時代前期の土器片を主体とし、わずかに縄文時代晩期末の土器片が含まれている。吉野遺跡群では縄文時代晩期中葉以降に遺構の空白期間が見られ、本遺構がそれに続くものであるが、様相を明らかにすることはできなかった。また遺構内では弥生時代中期の土器片も数片出土しているが、遺構は存在せず、後期までの間は再び空白期間となる。

弥生時代後期（第41図４）

８軒の竪穴住居跡と１基の土坑を確認した。遺構の分布は３ヶ所に見られる。Ｅ地区で住居跡６軒(SB44～49)、Ａ３地区で住居跡１軒(SB62)と土坑１基(SK348)、Ｃ２ｃ地区で住居跡１軒(SB136)である。このほかの地区では遺構は検出されず、表採資料も非常に少ない。Ｅ地区ではSB48・49が切り合い、遺構間で時期差が存在する可能性もある。またＥ地区の住居跡の長軸方向にも統一性が見られない。

住居跡の形状には、不整楕円形(SB44)、隅丸方形～長方形(SB45・46・47)、長方形(SB62)などがある。炉については、地床炉が３軒(SB44・48・62)、石囲炉が１軒(SB46)、埋甕炉の可能性があるものが１軒(SB45)である。位置については中央やや奥壁より２軒(SB44・62)と、奥壁側の柱穴間付近(SB45・46)がある。このほかSB62に近接して土坑(SK348)が検出されており、埋土中より正位で甕が出土している。

古墳時代後期（第41図４）

２軒の竪穴住居跡(SB60・61)を確認した。遺構外出土遺物についても極めて少量である。住居跡はＡ２地区で、並んで検出されている。住居形態はともに方形で規模も11m²程である。カマドはSB60で被熱痕だけ検出した。柱穴配置はいずれも不明瞭である。

木曽郡下では当該期の遺構がほとんど発見されない中、今回の調査でその存在が明らかになったことは重要である。上松町では他にも後期の須恵器が出土しており(第II章第２節)、今後の資料の増加が期待される時期である。吉野遺跡群では以後平安時代に至るまで、遺構の空白期間となる。

3　平安時代～中世前期

時期が判明したのは竪穴住居跡38軒、漠然とした竪穴住居跡は13軒である。ここでは時期が明確な住居跡について、規模、カマド位置、土器の様相などを中心に見て行きたい。

なお時期区分については第Ｖ章第３節１、カマドの位置については第Ｖ章第１節の基準を用いる。住居跡規模については削平がはげしいため、完存する住居跡壁面の１辺の長さを用いて床面積を推定し、以下の基準を設定した。よってコーナーのみ検出された住居跡は対象外となる。また、極端な長方形を呈する住居跡が存在した場合には、推定面積が異なる可能性もあり得る。

Ａ類：１辺が4.4m以下を目安(およそ19m²以下)　Ｂ類：１辺が4.5～5.4mを目安(およそ20～29m²)

Ｃ類：１辺が5.5～5.9mを目安(およそ30～35m²)　Ｄ類：１辺が６m以上を目安(およそ36m²以上)

Ｉ期（第42図１）

３軒を確認した。Ａ２地区１軒、Ｃ１地区１軒、Ｅ地区１軒である。住居跡軒数は少ないが、分散して立地する印象がある。住居跡規模はＡ類が１軒(SB83)・Ｂ類が２軒(SB41・59)である。カマドの位置は３軒とも壁面中央で、柱穴はSB41と59でカマド側の壁に近接して２本とその反対側の出入口部に近接して２本配置する構造がみられた。土器は須恵器・土師器・黒色土器が主体となる。

II期（第42図１）

４軒を確認した。Ｂ２地区１軒、Ｃ１地区２軒、Ｃ２ｃ地区１軒である。各住居跡間の距離は離れているが、Ｉ期よりはＣ１地区を中心に立地範囲が狭くなる印象がある。住居跡規模はＢ類が２軒(SB79・134)、Ｄ類が１軒(SB66)である。カマドは２軒(SB66・134)が壁面中央、１軒(SB79)が壁面中央よりやや左コーナー寄りに位置する。柱穴配置が明瞭なのはSB134で、カマド側の壁とその反対側の壁の中央部に近接して配置したと推測される。出土土器は須恵器・土師器・黒色土器がほとんど姿を消して、灰釉陶器の食膳具が大半を占めるようになる。墨書土器はSB134で「二」の字が出土している。

III期（第42図２）

20軒を確認した。Ａ３地区１軒、Ｂ２地区１軒、Ｃ１地区６軒、Ｃ２ｄ地区１軒、Ｃ２ｃ地区１軒、Ｃ３地区１軒、Ｃ４地区２軒、Ｄ地区１軒、Ｆ１地区１軒、Ｆ２地区２軒、Ｇ地区１軒、Ｉ地区１軒、Ｊ２地区１軒である。住居跡軒数が最も増加する時期であり、分布の中心はＣ１地区にみられるものの、調査区の北東端から南西端まで広く展開する。また住居跡の位置関係については、他の時期では住居跡間は離れて点在する傾向が認められるのに対し、III期は切り合い関係はみられないものの、住居跡同士が非常に近接する例が認められており、他の時期にない傾向と思われる。

III期は出土土器の様相から見ると古相と新相が存在し、漸移的に変化すると考えられる。時期差がある程度判明した住居跡は、古相が１軒(SB6)、新相が９軒(SB17・65・77・80・84・85・95・129・138)である。しかし古相・新相不明の住居跡が10軒(SB3・5・63・76・78・111・122・131・133・146)存在し、住居跡の変遷を無理に細分できない状況にあり、III期の様相はまとめて報告する。

住居跡規模は、Ａ類が４軒(SB77・80・133・138)、Ｂ類が４軒(SB6・78・85・129)、Ｃ類が４軒(SB

3・95・131・146)、D類が３軒(63・65・84)である。特にD類の軒数は増加し、特定地区に集中せずに立地する(Ａ３・Ｂ２・Ｃ１地区)。カマド位置が判明したものは、壁面中央部が４軒(SB6・17・78・80)、壁面中央部よりややコーナー左寄りが２軒(SB63・85)、壁面左隅が５軒(SB3・5・65・84・131)であり、壁面隅に設置する例が定着したと思われる。柱穴配置は不明瞭な例が多い中で、３軒(SB3・6・78)がカマド側の壁の中央に近接して配置している。出土土器はII期同様に灰釉陶器の食膳具が大半を占める。墨書土器はIII期の出土例が最も多く、「二」がSB6・63・78で、「六」がSB122で、「本」がSB76・80で、「元」？がSB78・80で出土している。また、IV期以降の墨書土器は確認されていない。

IV～Ｖ期　(第42図３)

10軒を確認した。Ｂ２地区２軒、Ｃ１地区１軒、Ｃ３地区１軒、Ｆ２地区１軒、Ｇ地区２軒、Ｊ１地区１軒、Ｊ２地区２軒である。住居跡軒数はIII期に比べ減少し、分布範囲もＪ２地区～Ｆ２地区へと縮小する。IV～Ｖ期についても土器の様相が漸移的に変化しており、IV期古相が２軒(SB1・73)、新相が３軒(SB11・113・141)、IV期古相・新相不明が３軒(SB13・67・68)、IV期新相～Ｖ期が２軒(SB102・128)あり、住居跡の変遷を無理に細分できないため、当該期の様相についてもまとめて報告する。

住居跡規模はＡ類が２軒(SB67・141)、Ｂ類が１軒(SB73)である。D類は５軒で、特定地区に集中せずに分散して立地する(SB11はＦ２地区、SB13はＧ地区、SB68はＢ２地区、SB102はＪ１地区、SB113はＪ２地区)。特に規模が大きいのはSB68(１辺9.7m)、とSB102(１辺13.7m)で、出土土器の様相からSB68→SB102への時期差が推測される。またSB102は住居跡奥壁右隅から炭化物・焼土とともに、劃花文の青磁皿と多くの小碗・小皿が出土しており、住居廃絶に伴う何らかの行為が行われたことを推測させる。つぎにカマド位置が判明したものを見ると、中央部が１軒(SB102)、壁面左隅が７軒(SB1・11・13・67・68・73・113)で、圧倒的に奥壁左隅に配置する傾向が強くなる。柱穴配置については不明瞭なものが多く明確な傾向が出ない。

出土土器については灰釉陶器と山茶碗が大半を占め、当該期に山茶碗主体の組成に漸移的に変化して行く。このほか、輸入陶磁器が少量出土しており、器形復元可能な個体が、SB102・113で出土している。

以上、平安時代～中世前期の様相を時期ごとに紹介した。吉野遺跡群では、奈良時代の遺構・遺物が発見されず、平安時代に入りＩ期(９世紀後半)に再び住居跡が作られるようになり、III期(10世紀後半～11世紀初頭)には住居跡軒数も増加して最盛期を迎え、IV期新相～Ｖ期(12世紀代を目安)を最後に、生活の痕跡もみられなくなる事が判明した。

当該期の注意点として、まず遺構については住居跡規模の大きいD類の登場があげられる。D類はII期に登場し、IV～Ｖ期には１辺が10m前後の大型住居まで登場した。これはＩ期以来存在するＡ～Ｃ類の規模とは明らかに異なり、集落内に何らかの経済的格差が登場したことをうかがわせる。本来なら出土遺物を含めて考察すべき事項であるが、遺物の残存状況が悪く、各遺構で均質とは言い難い状況があるため、検討することができなかった。住居跡の構造については、柱穴がカマドの付設される奥壁とその反対側の壁のそれぞれ中央部に近接して配置される事例が注意される。この配置は木曽谷の北に位置する松本平ではあまりみられないものであり、今後、その消長や分布範囲については、木曽郡下や岐阜県下、あるいは東海地方などでの事例を探して行く必要がある。住居跡の主軸方位についても時期別に顕著な傾向が認められず、立地した地形に影響された印象がある。

つぎに土器の器種組成についてみると、Ｉ期は土師器・須恵器・黒色土器などで構成され、松本平とほぼ同様の組成であったものが、II期以降は灰釉陶器が組成の大半を占め、土師器がほとんどみられなくなり、以後山茶碗が主体となってもこの傾向に変化が認められない点である。これは松本平とは異なる様相である。同様の傾向は日義村や大桑村にもみられ、木曽地域の中でも特に鳥居峠より南部における特徴と

言えそうである。

今回の調査区では、13世紀以降の遺構・遺物がほとんど出土せず空白期間がしばらく続く。

京都高山寺文書の中には、1329年に小木曽庄の吉野保に荘園内の耕地や産物を調査する検注使が来たことが記録されており、14世紀代にも集落が存在したと推測されるなど、調査により明らかにできない時期も存在する。ただしＦ１地区のST1・2・5付近で若干15世紀の遺物も出土する点が注目される。遺構には伴なわないものの、13～15世紀の遺物はＦ１地区周辺で散見される。

4　安土桃山～江戸時代（第42図４）

Ｃ３地区で数棟の礎石をもつ建物跡、Ｈ地区で１基の墓、Ｅ地区とＦ１地区で性格不明の土坑群を確認した。遺構の時期は、出土遺物から見て16世紀後半～17世紀前半が中心と推測されるが、明確にできない。

以下地区ごとに見ると、まずＣ３地区では礎石をもつ建物跡が複数検出された。特に第一検出面の建物跡(ST20)は桁行が３間約12m、梁行が４間約8.2mの規模を有していた。建物跡の検出された約500m²の地区は現在でも水田が作られている平坦地であり、敷地の範囲の可能性もある。ST20の下からはST21も検出されており、さらにその下からは、焼土や炭化物を多く含む土坑が幾つか検出されている。特にSK1325の埋土中からは鉄製の包丁と寛永通寶が出土し、SK1330では１辺50cm程の方形プランの中から木炭が充塡されたように検出されるなど、通常の遺構とは異なる特殊性がうかがわれる。

つぎにＥ地区とＦ１地区で検出された性格不明の土坑群を見てみたい。両土坑群には、不整形の土坑が密集する点、上面に焼土の堆積が認められる土坑が幾つか存在する点、出土遺物中に少量ながら鉄滓と鉄製品の破片が見られる点(特にSX1では銭貨が複数枚出土)など、幾つかの共通点が存在する。またSX4では上部に何らかの掘立柱建物が存在した可能性もある。左記のような特徴を有する点から、小鍛冶の可能性も推測したい。今後の資料の増加を待ちたい。

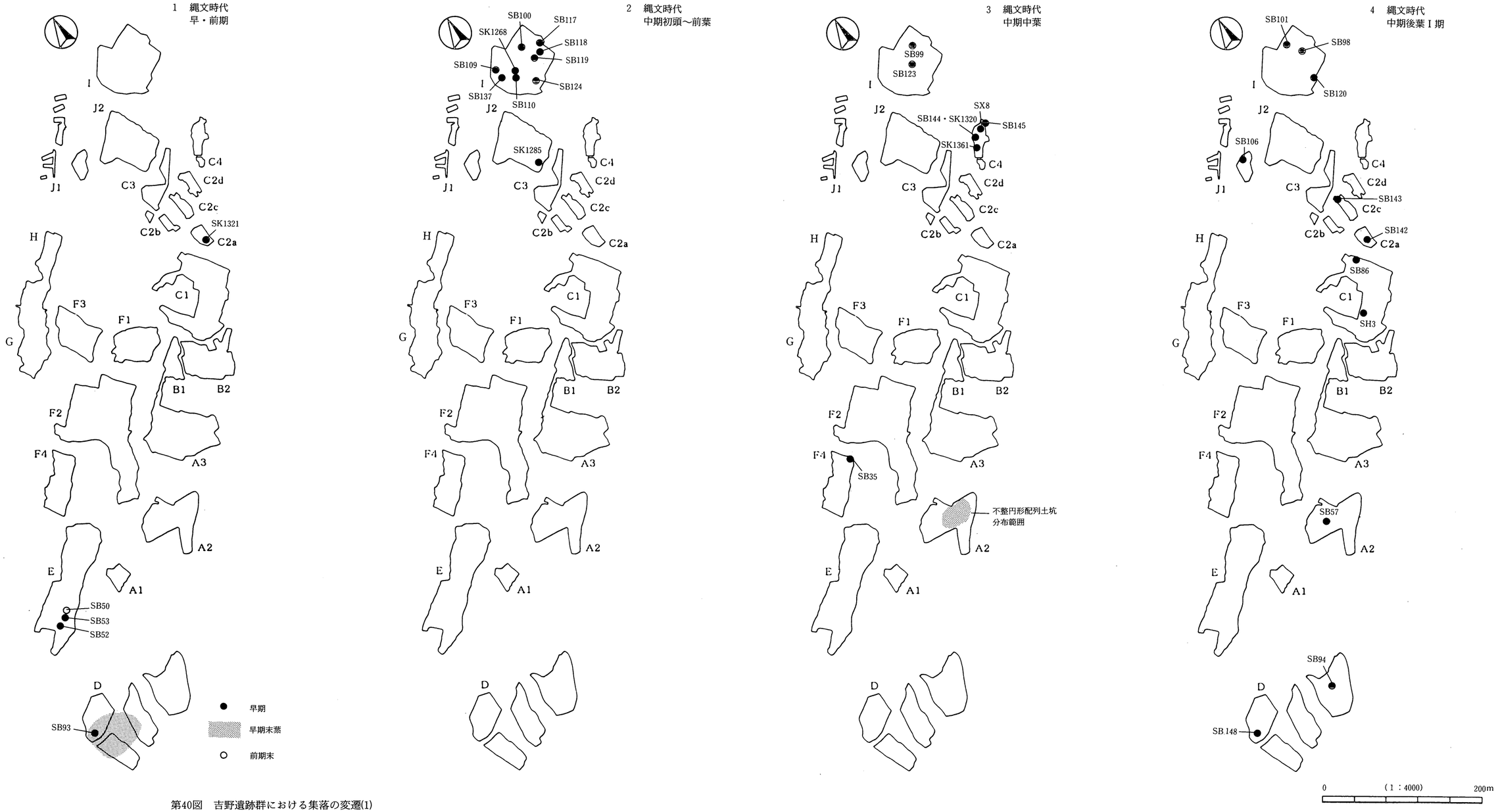
このほかＨ地区では墓を検出した。削平を受けており、基底部が残るのみであるが、形状は円形で、副葬品と推測される３点の陶磁器と６枚の銭貨が出土した。当時の墓制を知る貴重な資料である。

遺物に関しては小柄の存在が注目される。近世の所産と推測され、３点出土した。これらはいずれも鉄製の刃部を有し、茎部には銅板が巻かれていた。特にＣ１地区より表採されたものには茎部に木の切り株と花の象眼が施されていた。上記小柄の性格や類例について、ご存じの方がおられましたら是非御教示を頂きたい。

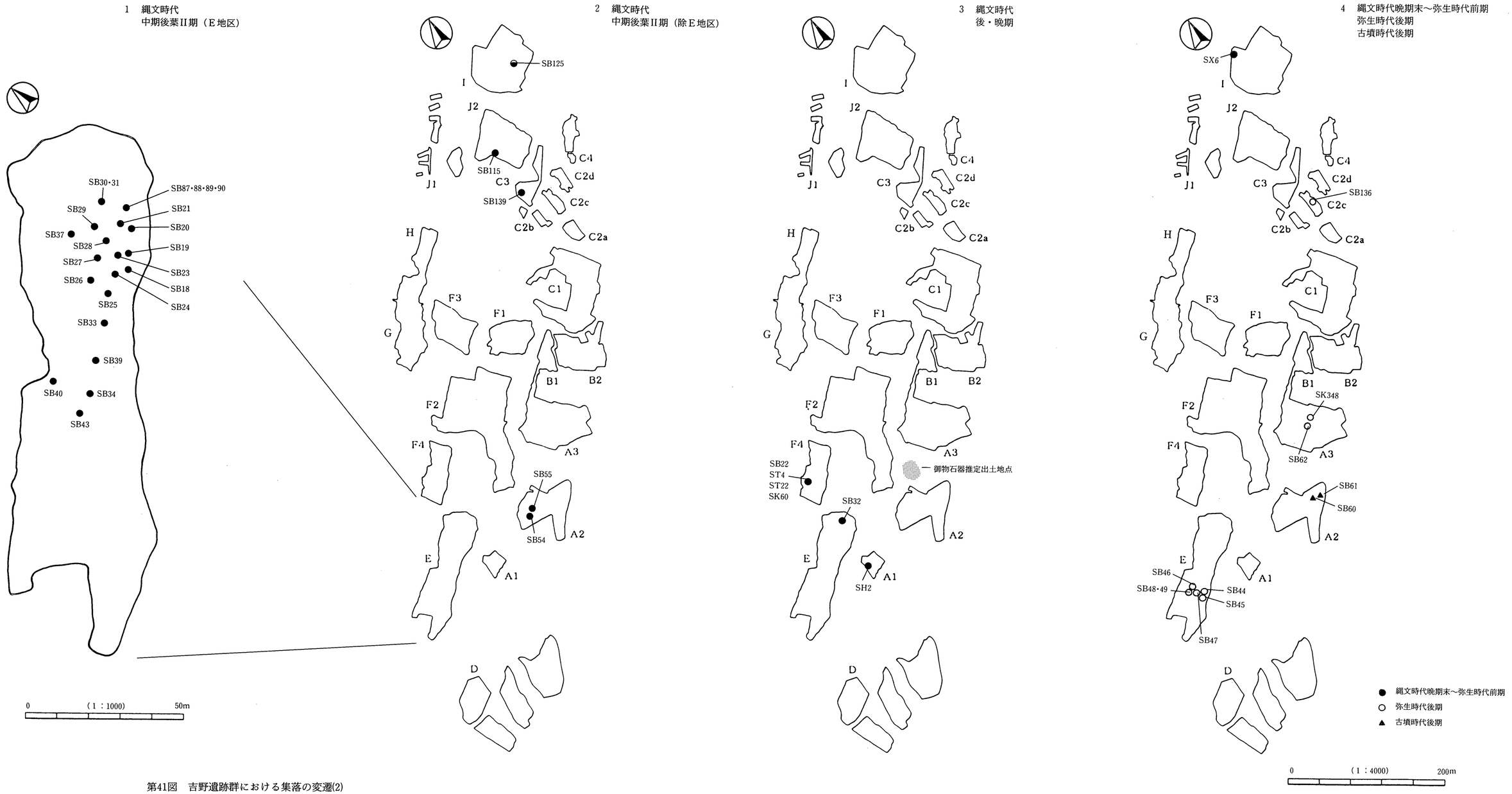
このほか、出土陶磁器については16～17世紀の所産と推測されるものが比較的多い。同様の遺物は、近年調査の進んだ大桑村内の諸遺跡でも確認されている。あくまで推測であるが、当該期に人の動きが活発化した可能性がないかどうか、今後の資料の増加を待ちたい。

以上、雑駁であるが、吉野遺跡群における、各時代の様相について紹介した。

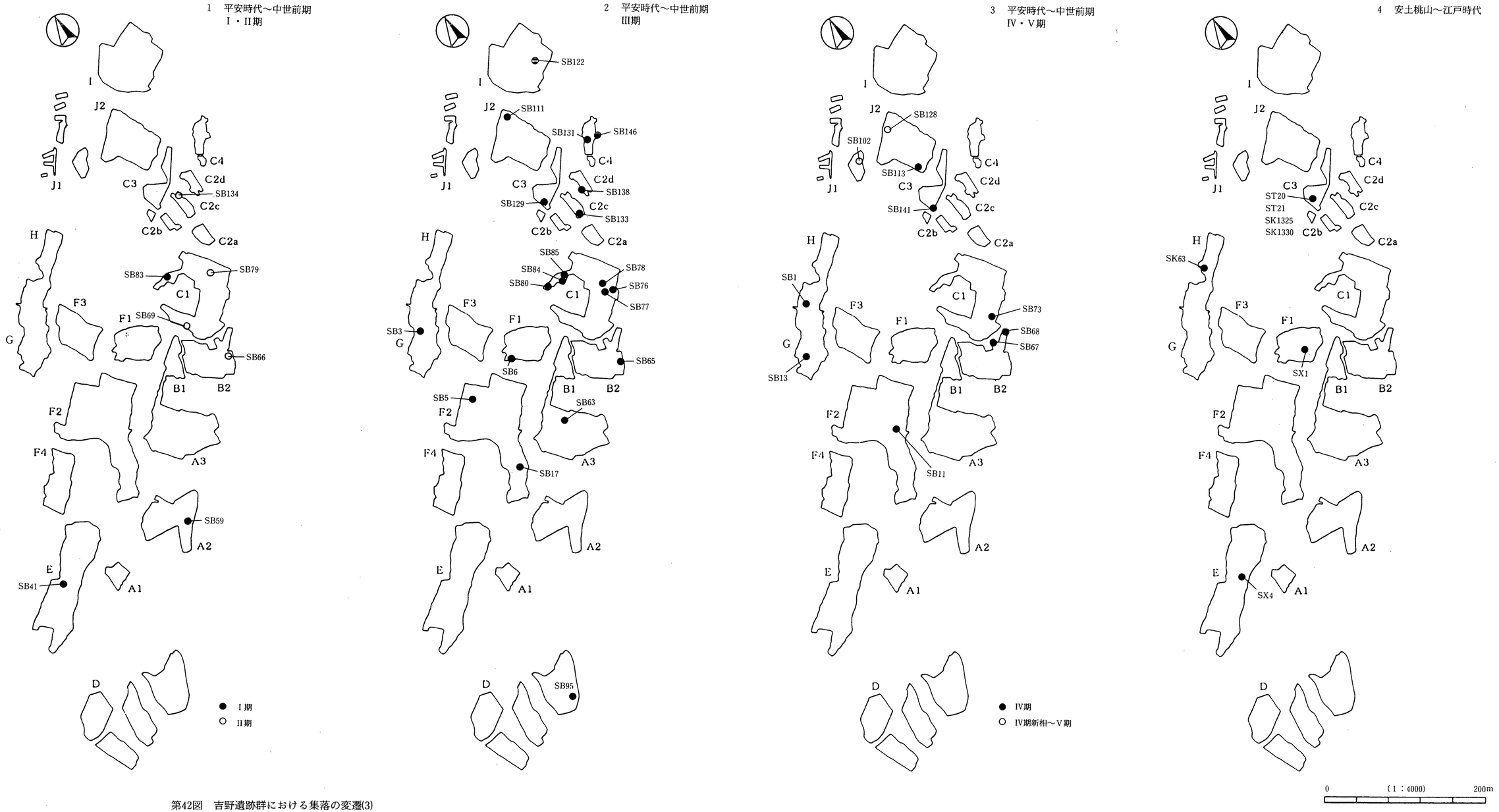
このほかにも、住居跡以外の土坑や建物跡との関係、流路や耕地との関係、遺物についても土器の地域性や石器、鉄製品との関連性等々検討しなければならない課題は山ほど存在する。しかし、担当の力量不足で極めて限定された分野での記述となってしまったことを反省したい。また調査地区は吉野地区の一部であり、今回検討した遺構の分布や変遷の様相については、地域本来の実体を示さない可能性を残す点も指摘しなければならない。たとえばＩ地区の北東側では灰釉陶器片が表採で多数出土たものの、遺構は検出できなかった点、文献資料には14世紀に吉野保が存在した記述があるのに、13～15世紀の資料が非常に少ない点などである。



第40図　吉野遺跡群における集落の変遷(1)



第41図　吉野遺跡群における集落の変遷(2)



第42図　吉野遺跡群における集落の変遷(3)

結　語

吉野遺跡群の発掘調査が平成８年度に開始されてから報告書刊行に至るまで、５年余りの年月を必要とした。

調査面積は約7.5haと広大で、検出した住居跡は120軒以上、点箱も約150箱を越えるなど、資料の量も非常に豊富であった。しかし年度ごとに調査担当者が代わり、調査当時に各自が抱いた地区ごとの所見や貴重な記録などが多々存在したにもかかわらず、報告書にどのくらい反映する事ができたのか、担当として非常に反省するところである。このような状況の中、報告書作成の目標としたのは、事実記載を中心に、出土状況の良好な住居跡や、特殊な性格の遺構を主として紹介し、集落の変遷を大きく把握する点であった。そのため、全体図でしか紹介できない遺構も土坑を中心に存在する。

上記の事情をふまえながらも、吉野遺跡群では縄文時代～近世に至るまで、断続的ではあるが、人々が生活した様相を明らかにすることができた。

縄文時代には、早・前期から生活の痕跡が認められ、中期以降は集落が場所を変えながら変遷し、中期後葉II期に住居跡が増加してＥ地区に集中し、後・晩期には遺構が急激に減少した点などが判明した。

弥生時代・古墳時代には、小規模であるが、住居跡のまとまりが確認でき、当該期の資料が少ない木曽郡下では貴重な資料となった。

平安時代～中世前期には、多くの住居跡が発見され、特にIII期に集落の最盛期を迎え、IV・Ｖ期に大型の住居跡が増加し、中には１辺が10m規模の極めて大きな住居跡も登場するなど、当時の村落構成を検討していく上で非常に興味深い事例となった。また当該期はII期以降に出土土器の大半が灰釉陶器・山茶碗となり、土師器類がほとんど見られなくなるなど松本平とは異なる様相が見られ、木曽地方と東海地方との強い関わりを感じさせた。

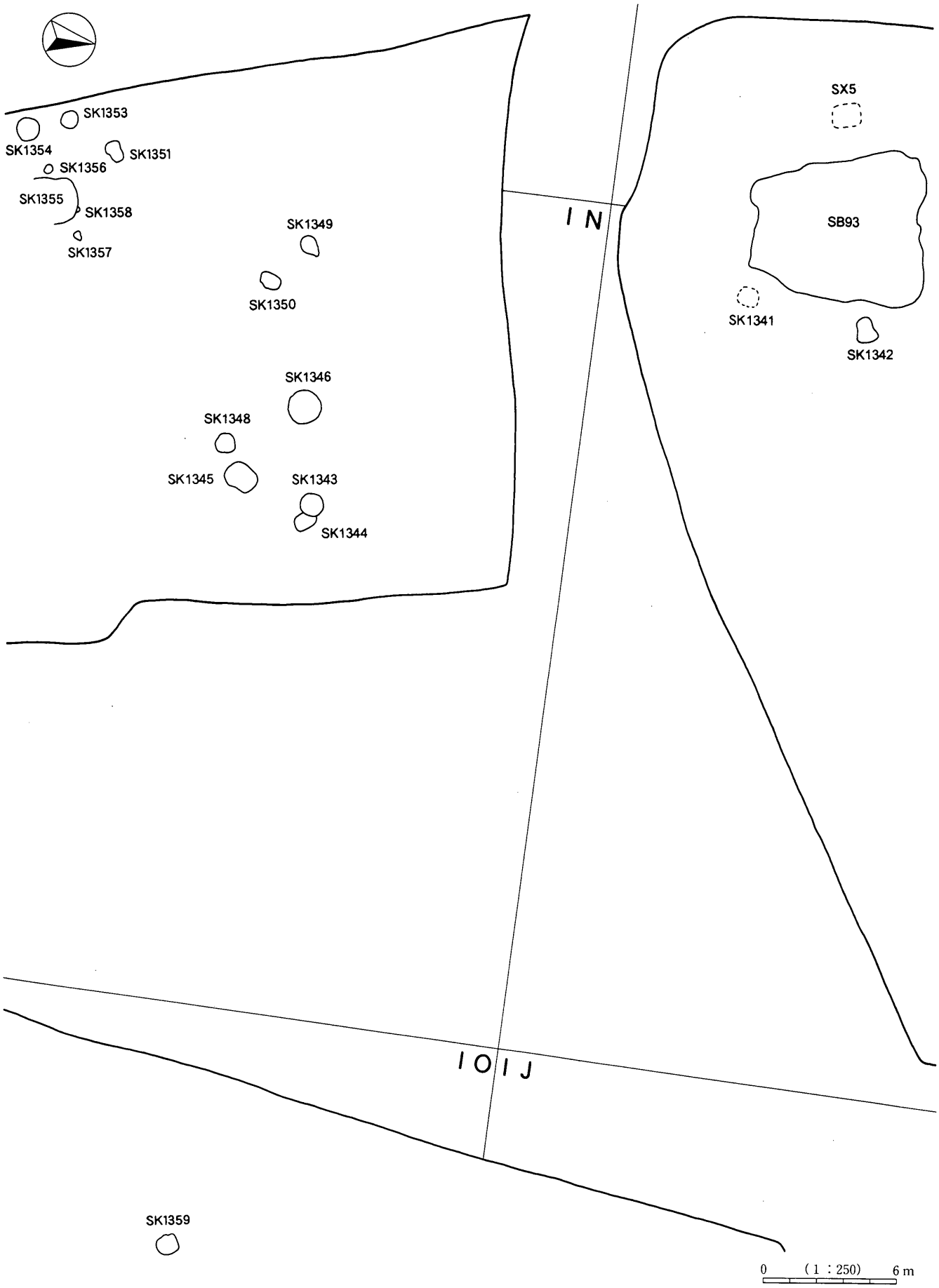
安土桃山～江戸時代には、礎石をもつ建物跡や、性格不明の土坑などを確認した。時期的には16世紀後半から17世紀前半が中心とされるが、この時期は、隣接する大桑村などでも前後の時期に比べて遺構・遺物が目立っており、時期的に人々の移動が激しくなった可能性を含め、資料の増加を待ちたい。

吉野遺跡群では報告すべき情報が縄文時代～江戸時代に至るまで多岐にわたり、担当者一人ではとても太刀打ちできない状況下にあった。そのような中、各分野の諸先生方や、木曽広域連合埋蔵文化財整理係の皆様をはじめ多くの方々から多大なご指導・ご教示を頂いている。この場を借りて感謝申し上げたい。また、担当の力量不足からこれらの御教示を完全に消化しきれなかった点もご容赦頂きたい。

最後になりましたが、発掘調査にご理解・ご協力を頂いた吉野地区の皆様、発掘・整理体制を維持し御指導して頂いた皆様、発掘調査開始から報告書刊行まで、様々な分野で御協力いただいた全ての皆様に対して、深く感謝する次第であります。

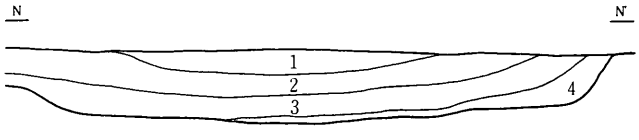
本書が地域史解明の一助になることを祈念して結語としたい。

遺構・遺物図版

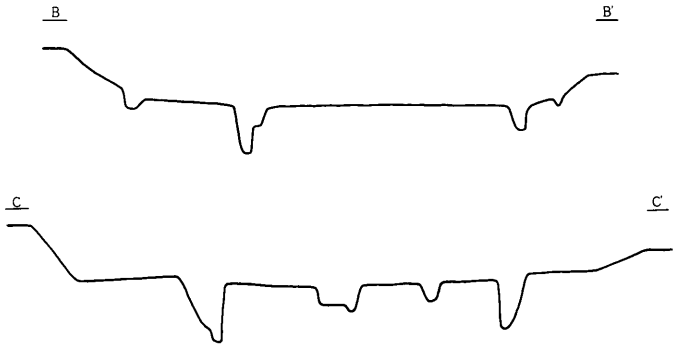

SK1353
SK1354
SK1351
SK1356
SK1355
SK1358
SK1357
SK1349
SK1350
SK1346
SK1348
SK1345
SK1343
SK1344
SX5
SB93
SK1341
SK1342
I N
I O I J
SK1359
0 (1 : 250) 6 m

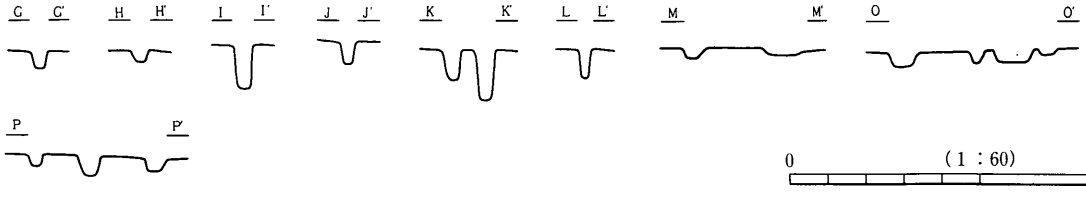
図版 2　縄文時代早・前期 D地区竪穴住居跡

SB93

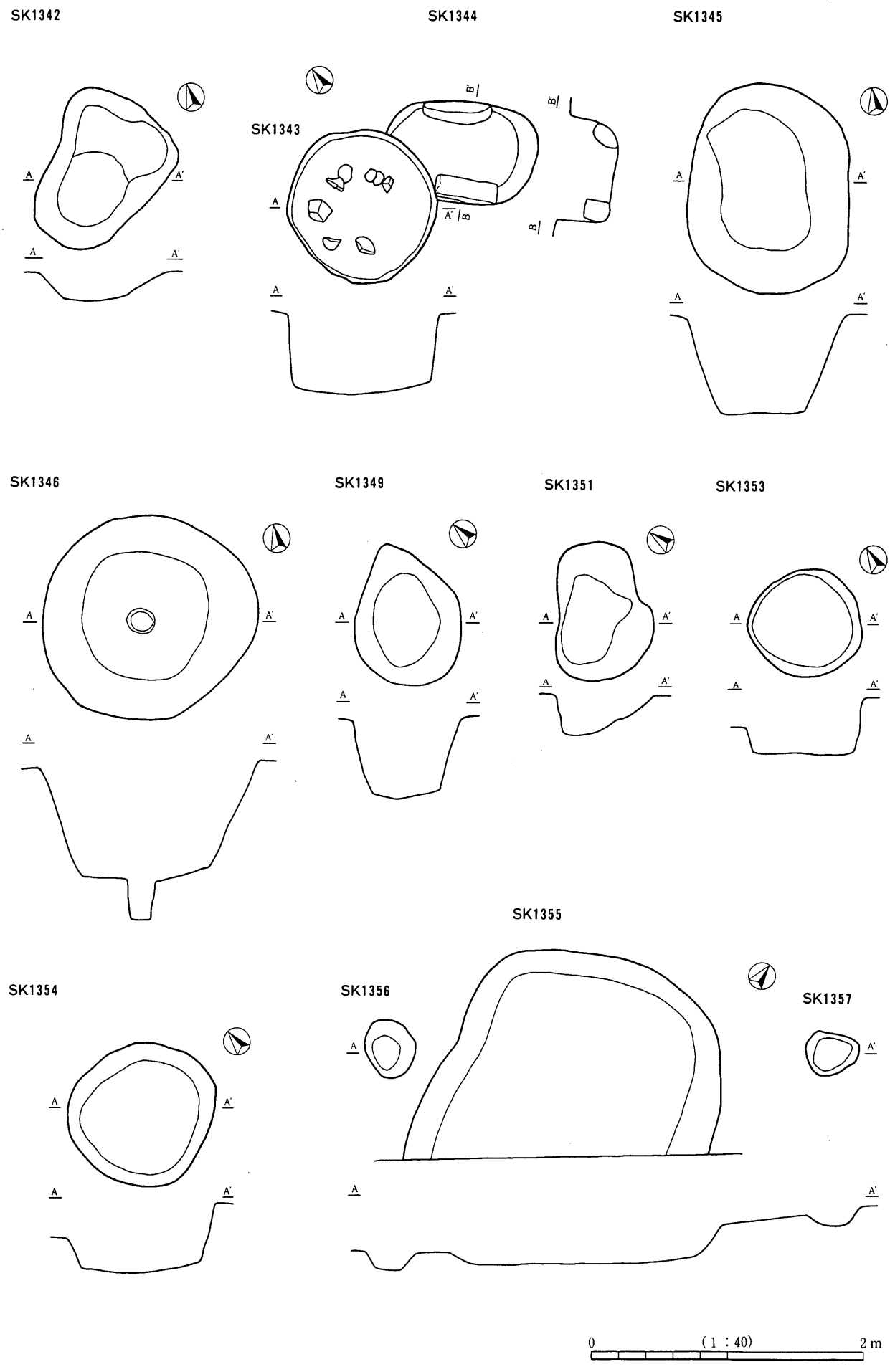


1．黒色砂質土　2．黒色砂質土　小礫を多く含む　3．黒色土　4．黒褐色土　小礫を多く含む





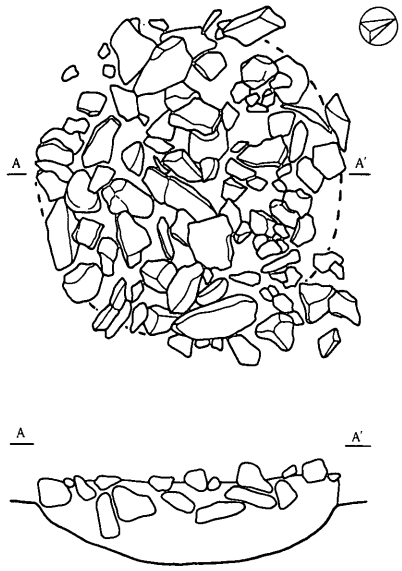
0　(1：60)　3 m


SK1342
SK1343
SK1344
SK1345
SK1346
SK1349
SK1351
SK1353
SK1354
SK1355
SK1356
SK1357
A
A'
B
B'
0
(1：40)
2m

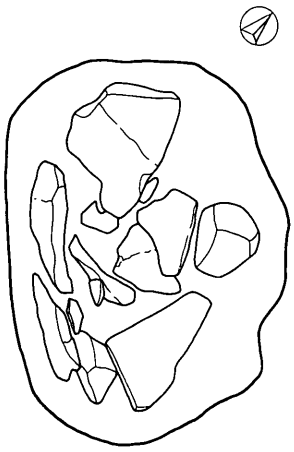
図版 4　縄文時代早。前期 D地区集石。集石炉

SX 5

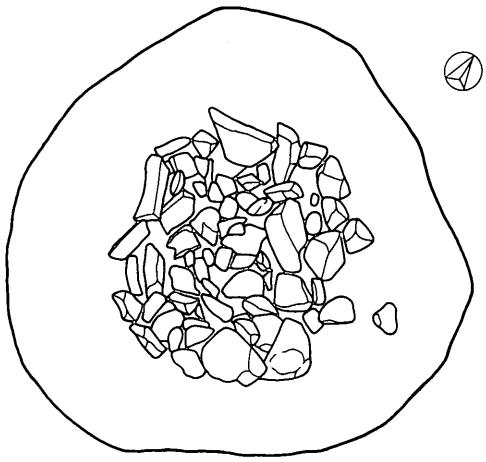
SK1341



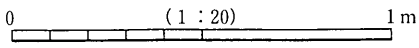
SK1350



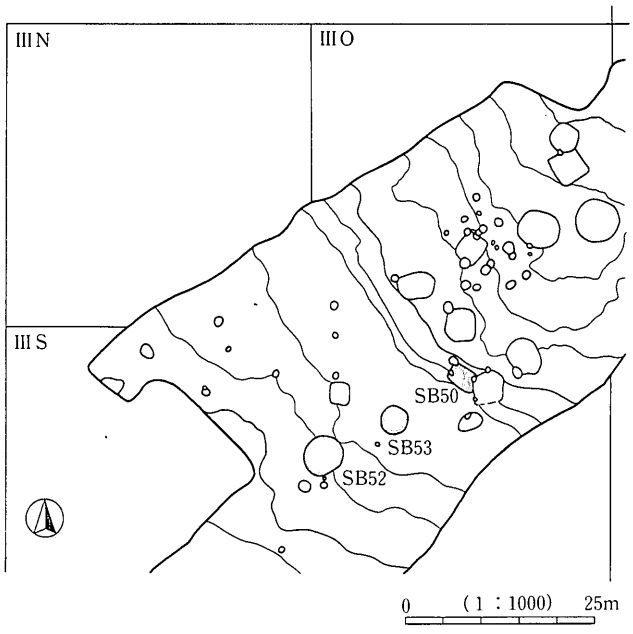
SK1348



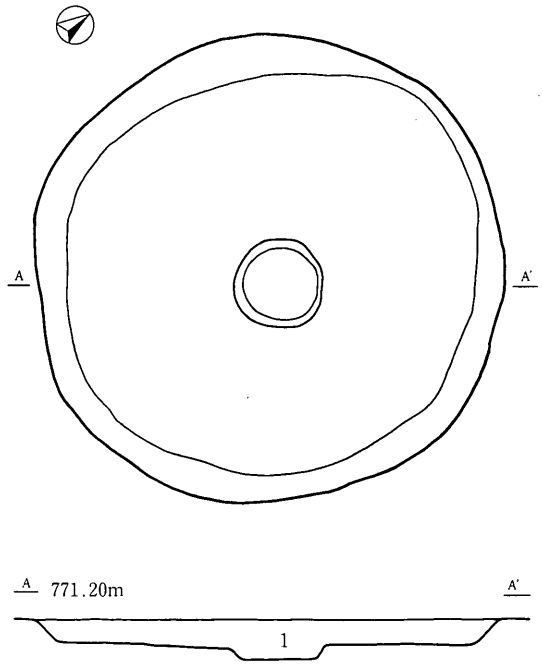
SK1359



E地区

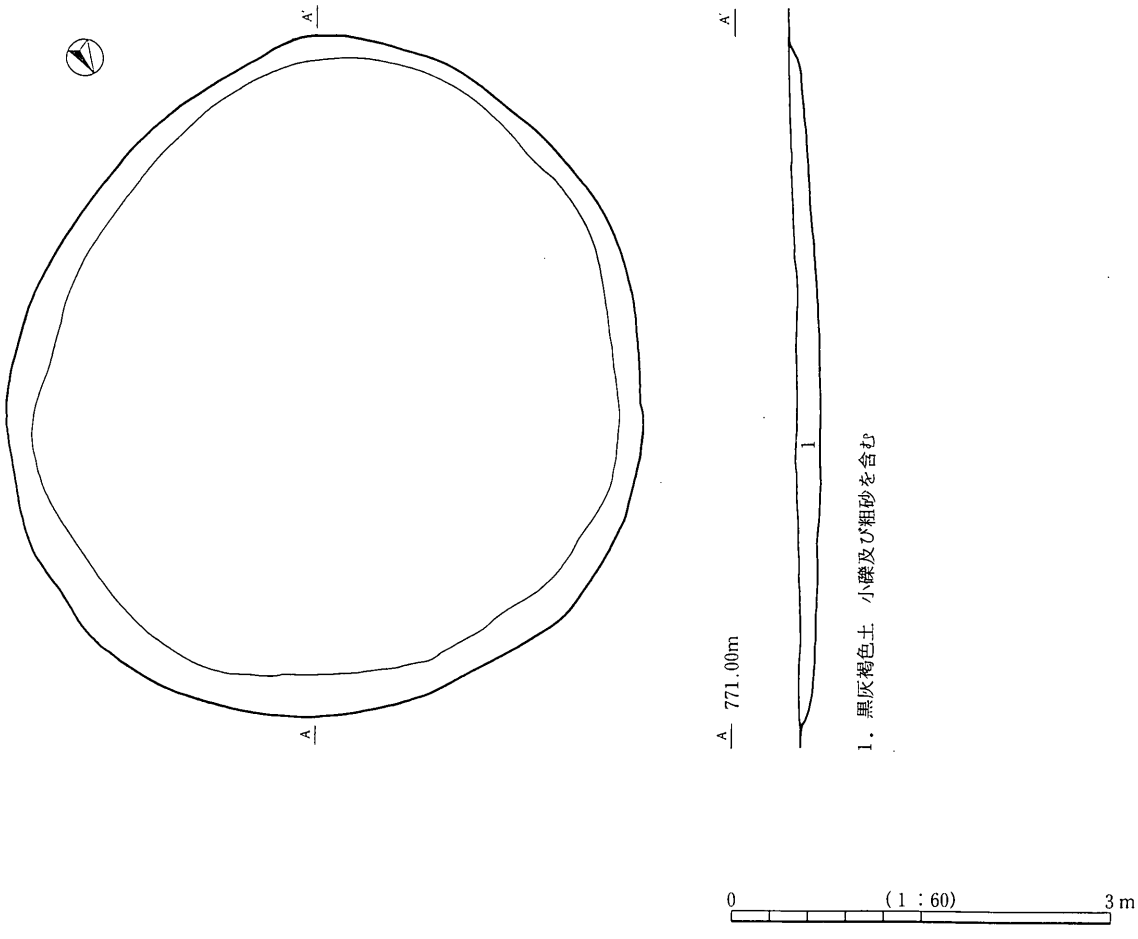


SB53



1．黒灰褐色土

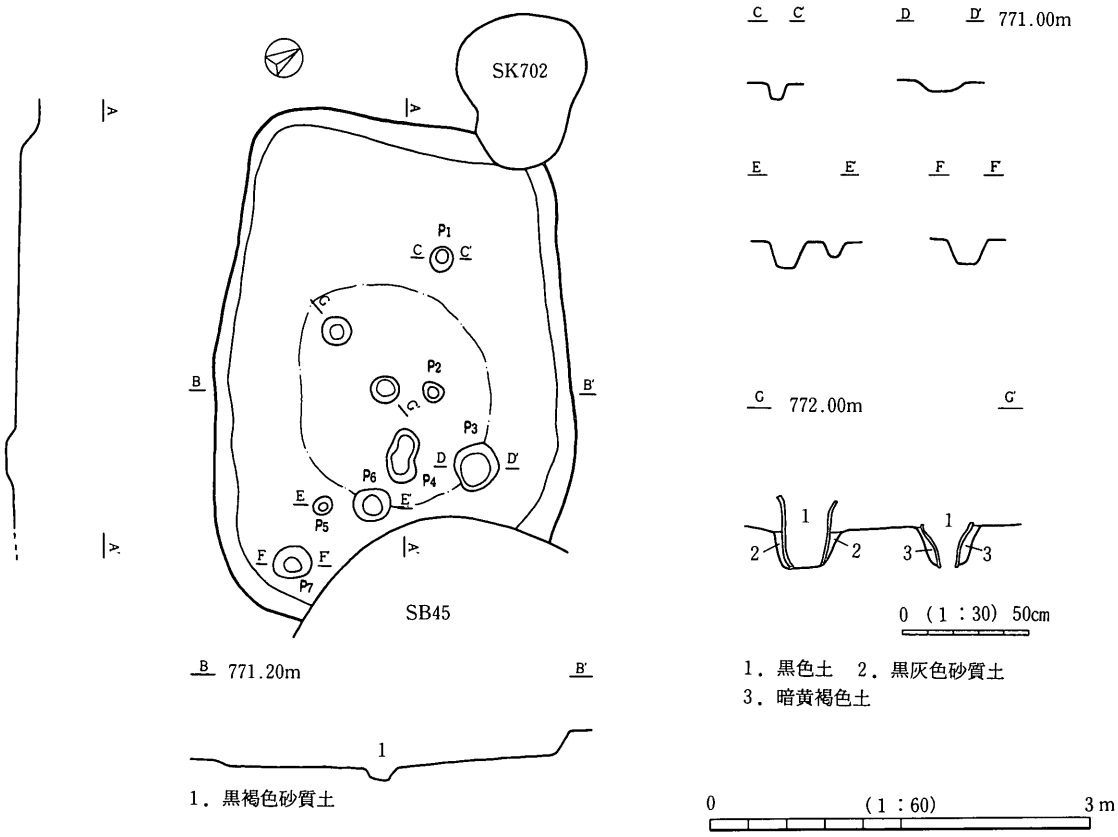
SB52



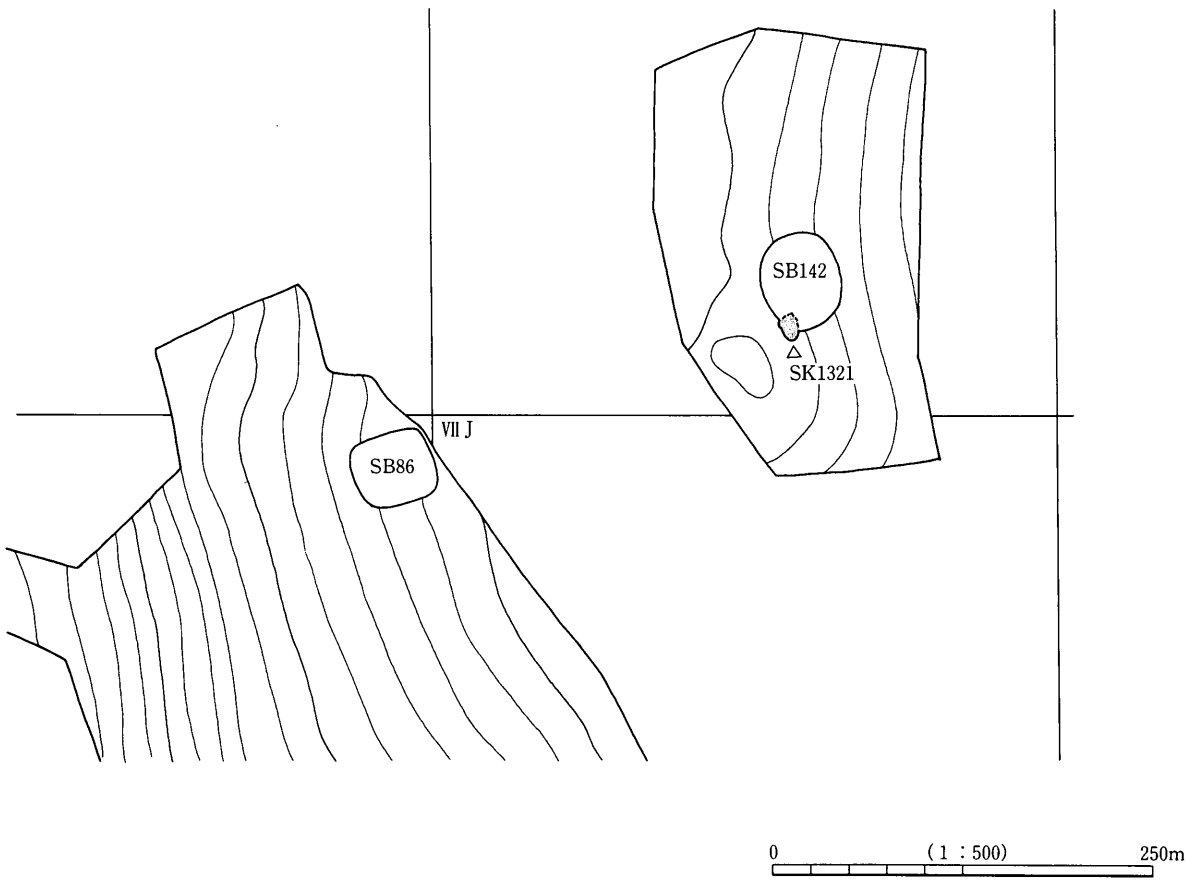
1．黒灰褐色土　小礫及び粗砂を含む

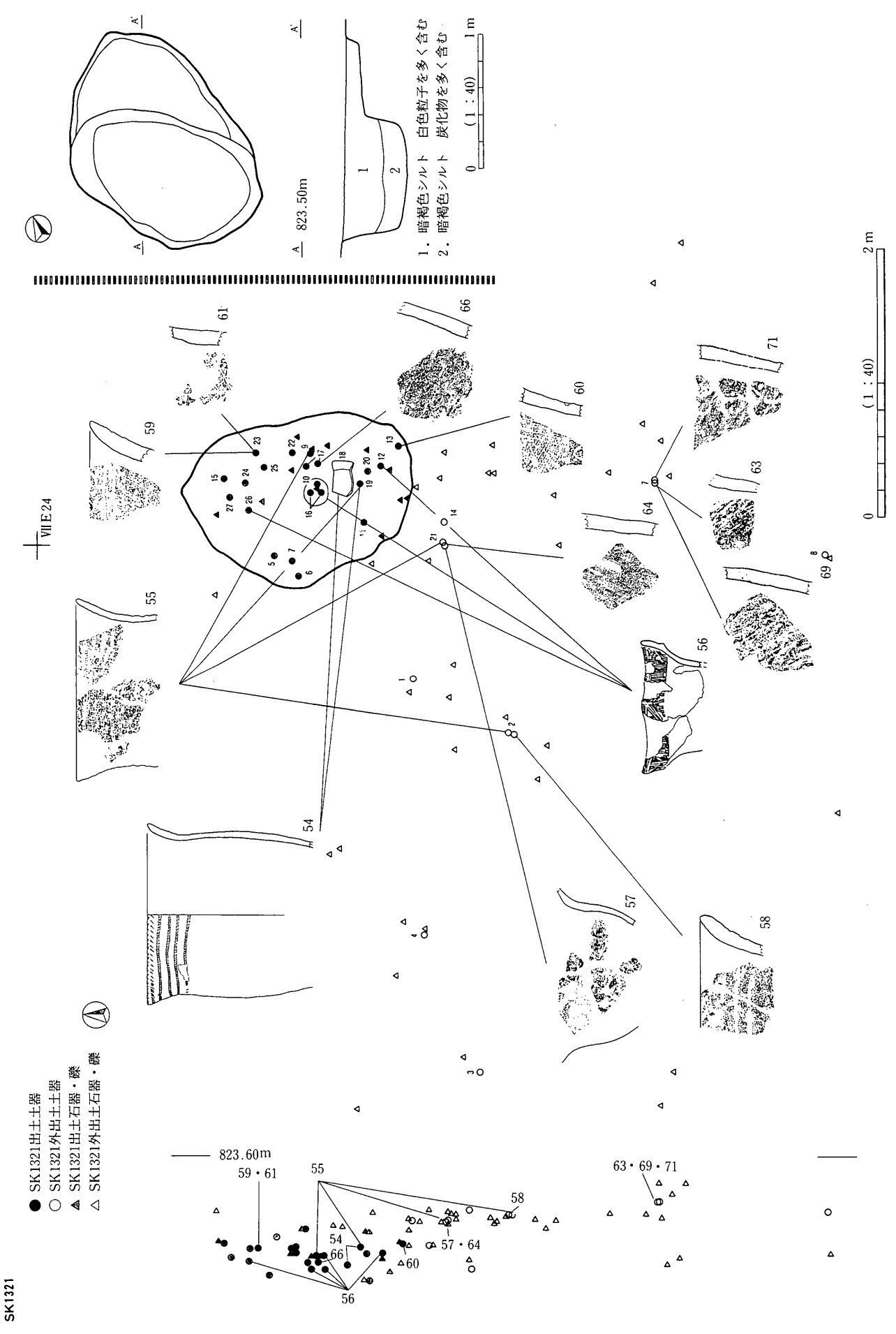
図版 6　縄文時代早・前期 E地区竪穴住居跡(2)およびC2a地区

SB50



C2a地区遺構分布状況

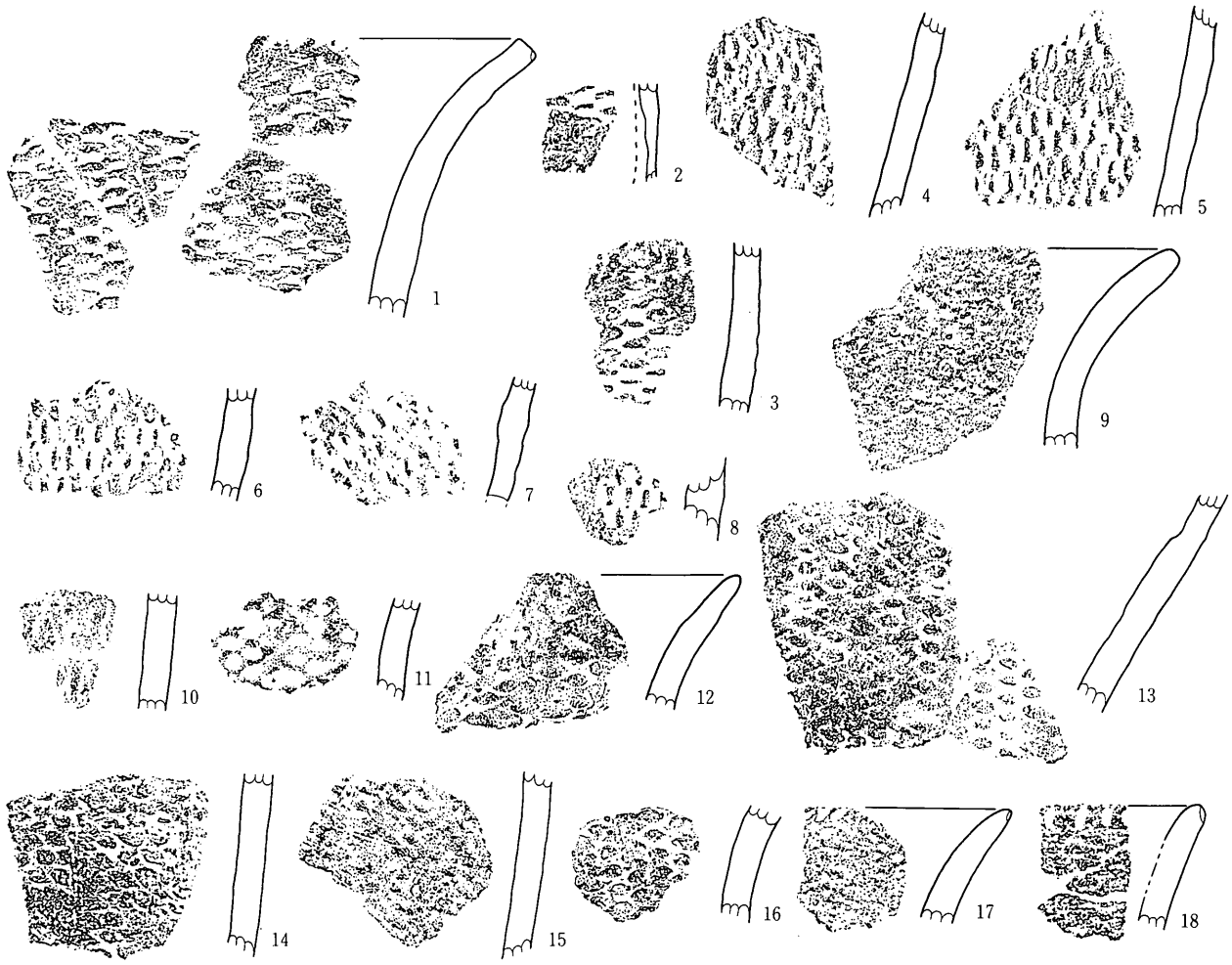




SK1321
823.50m
1. 暗褐色シルト 白色粒子を多く含む
2. 暗褐色シルト 炭化物を多く含む
0 (1:40) 1m
VII E 24
0 (1:40) 2m
823.60m
● SK1321出土土器
○ SK1321外出土土器
▲ SK1321出土石器・礫
△ SK1321外出土石器・礫

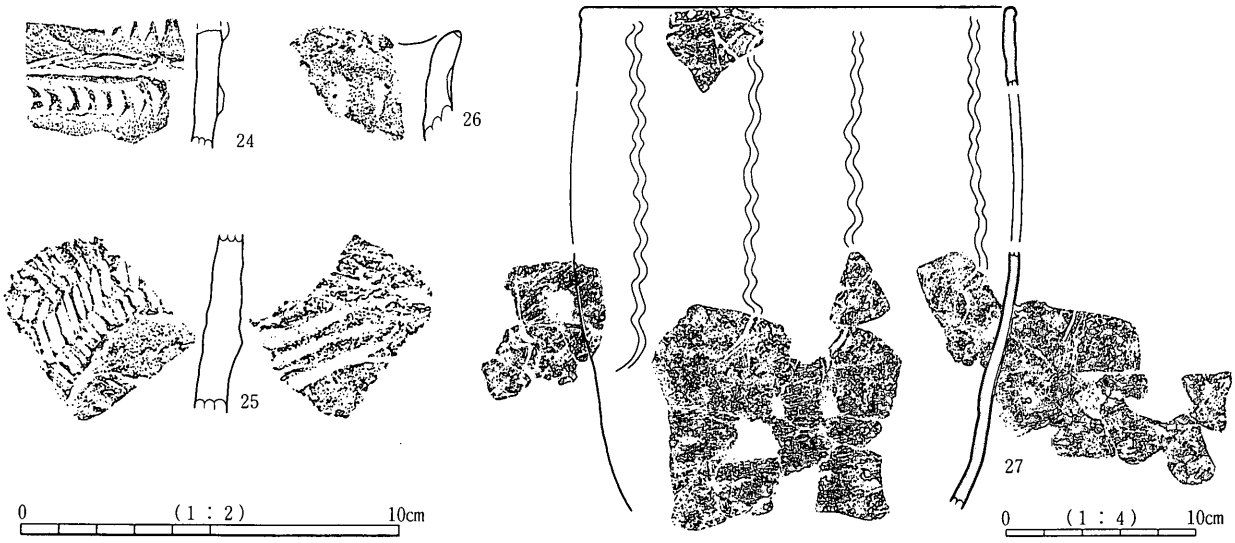
図版 8　縄文時代早・前期土器（1）

SB52

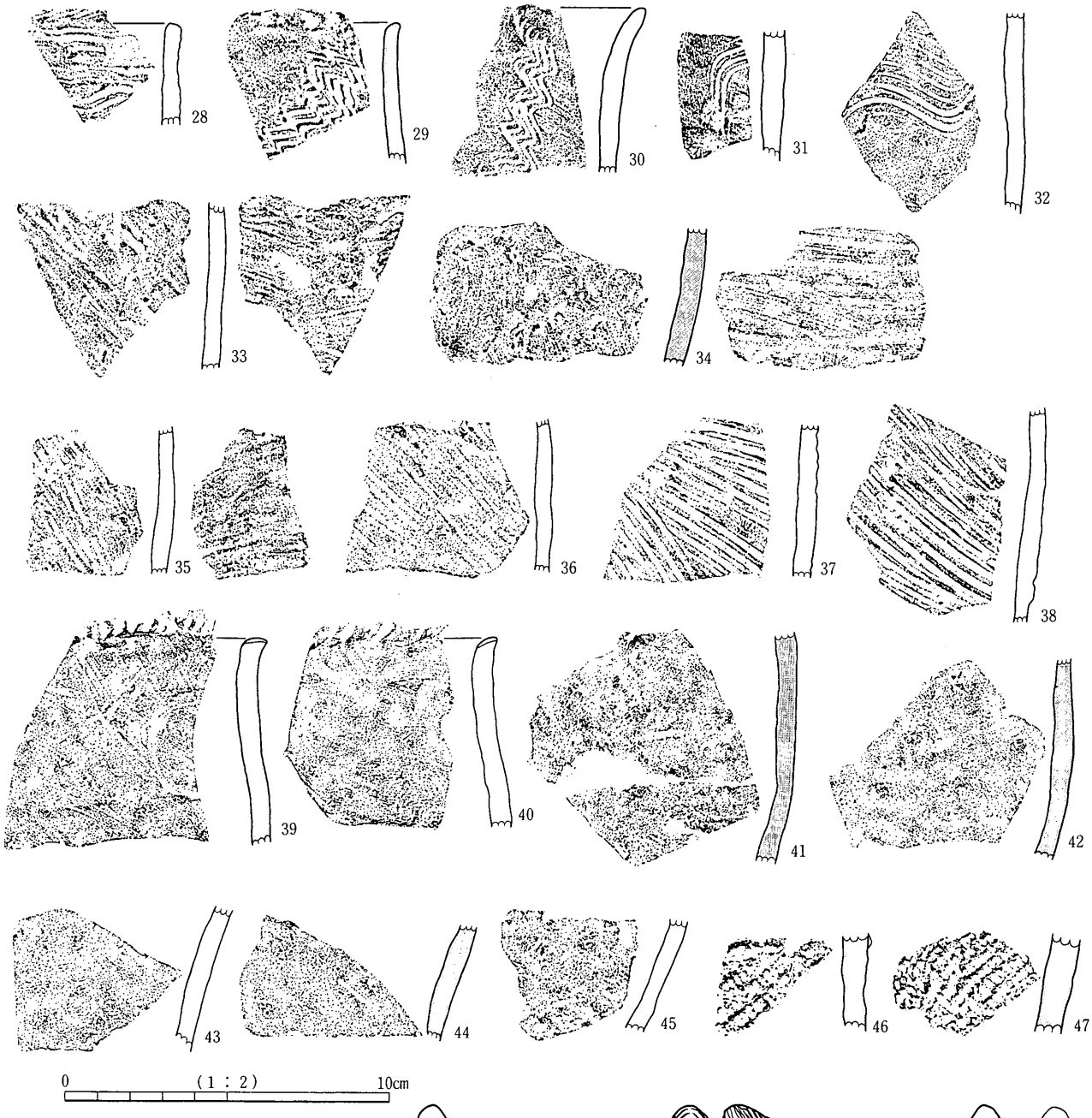


SB53

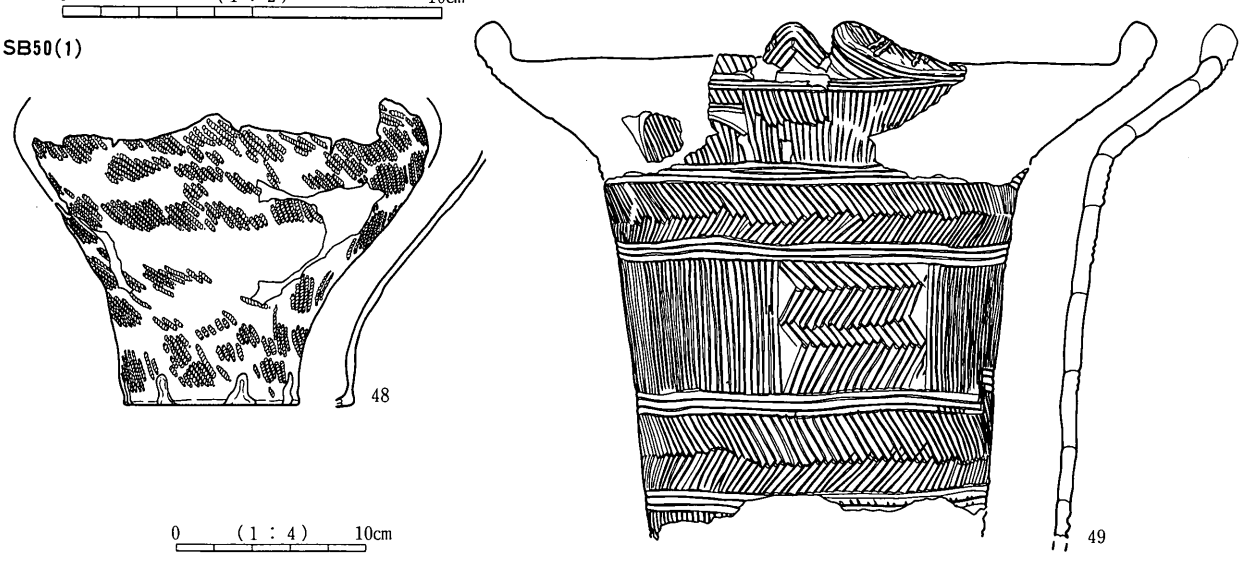
SB93(1)



SB93(2)

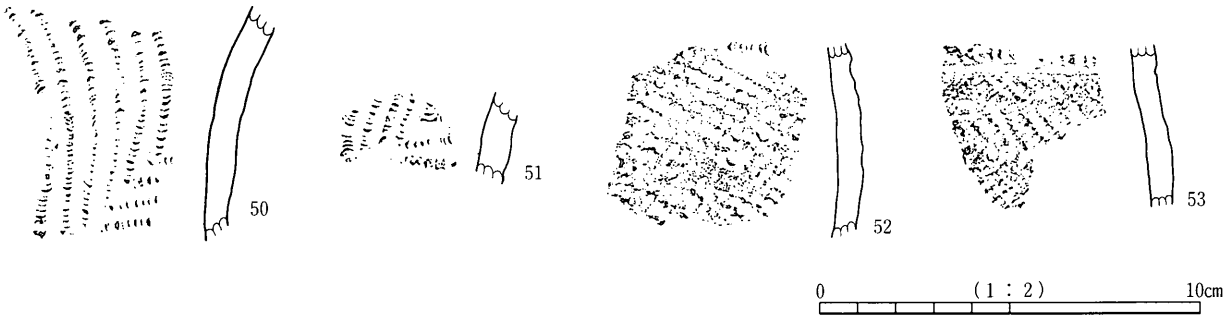

28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
0
(1 : 2)
10cm

SB50(1)

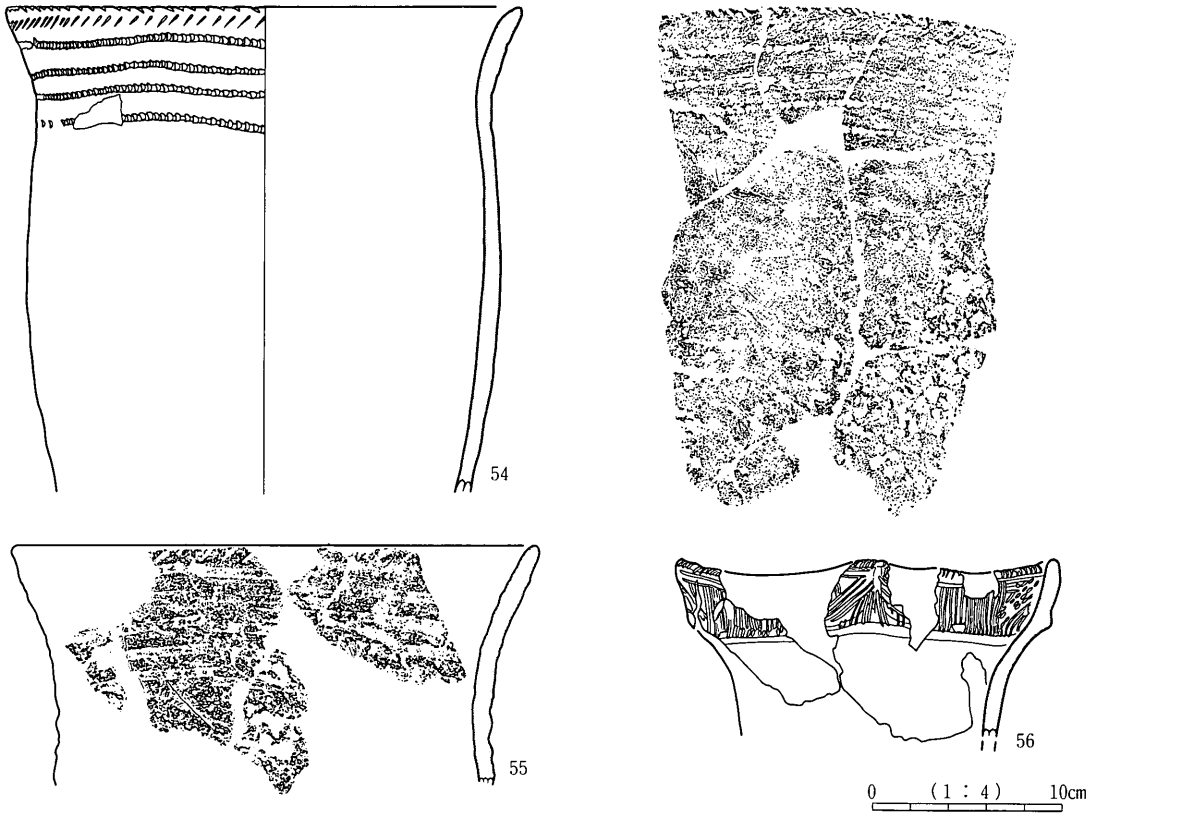

48
49
0
(1 : 4)
10cm

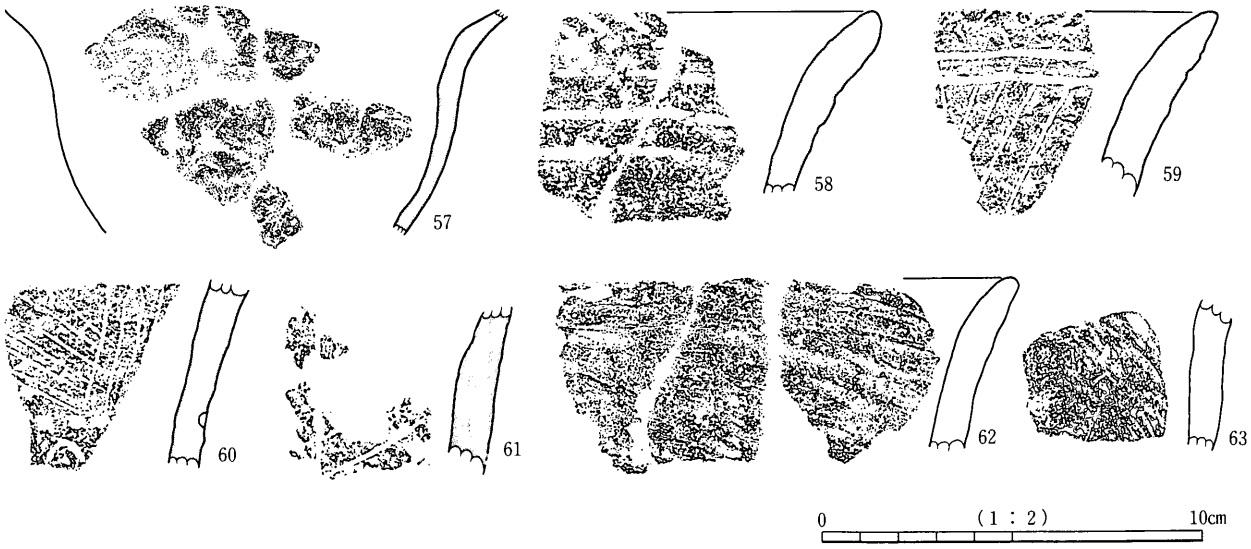
図版10　縄文時代早・前期土器(3)

SB50(2)

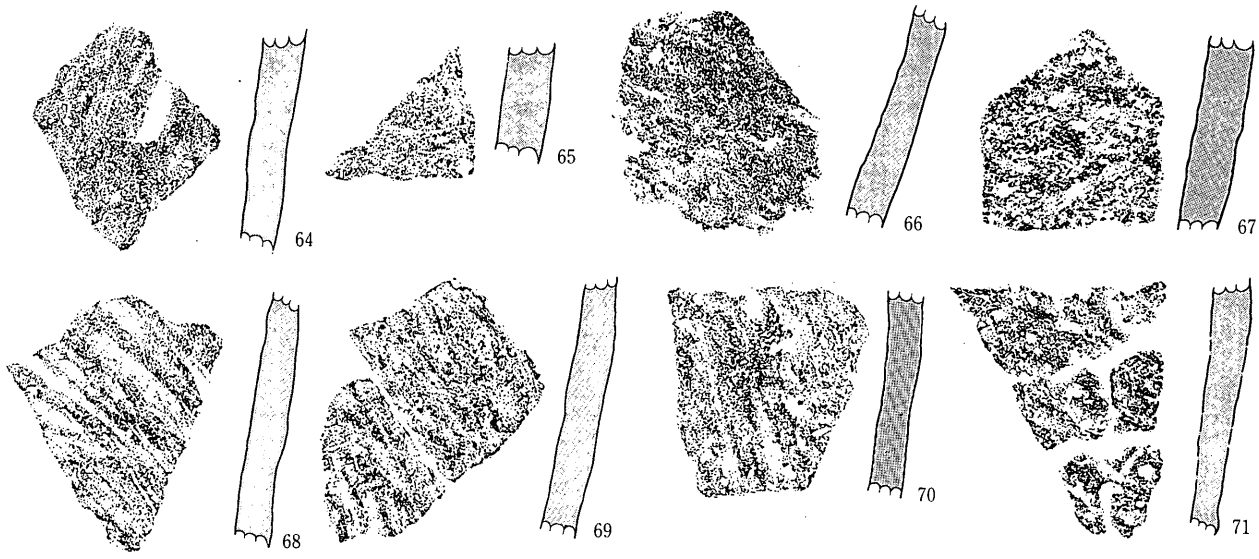


SK1321(1)

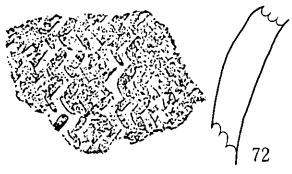




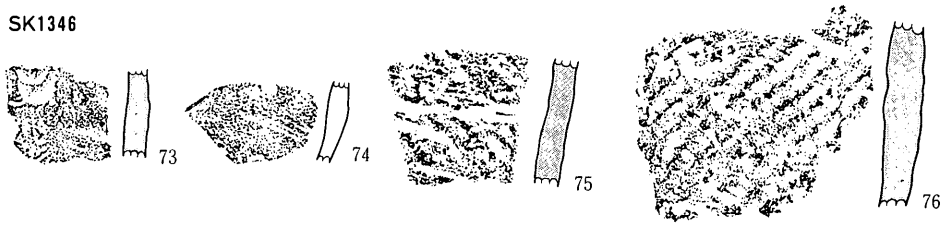
SK1321(2)



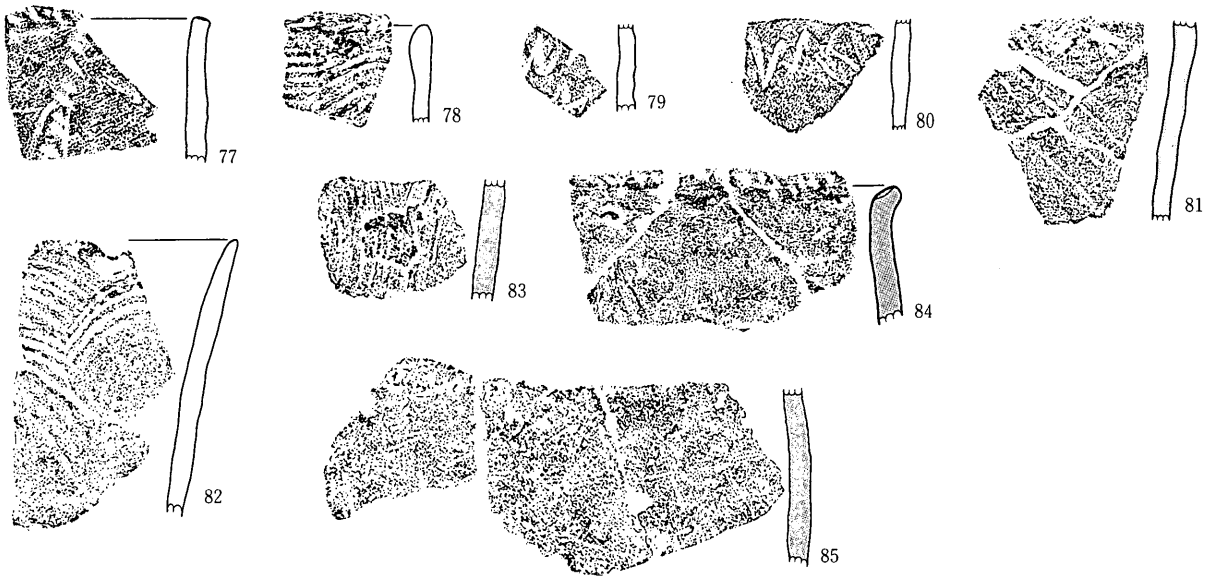
SK1355



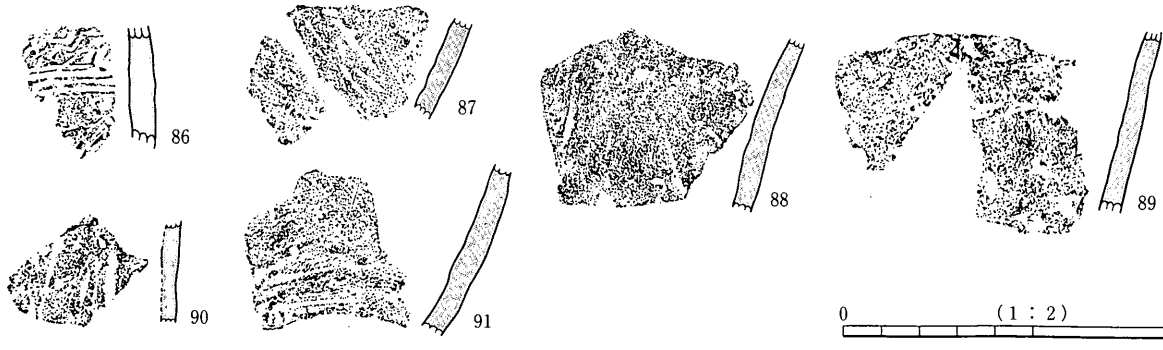
SK1346



SK1349



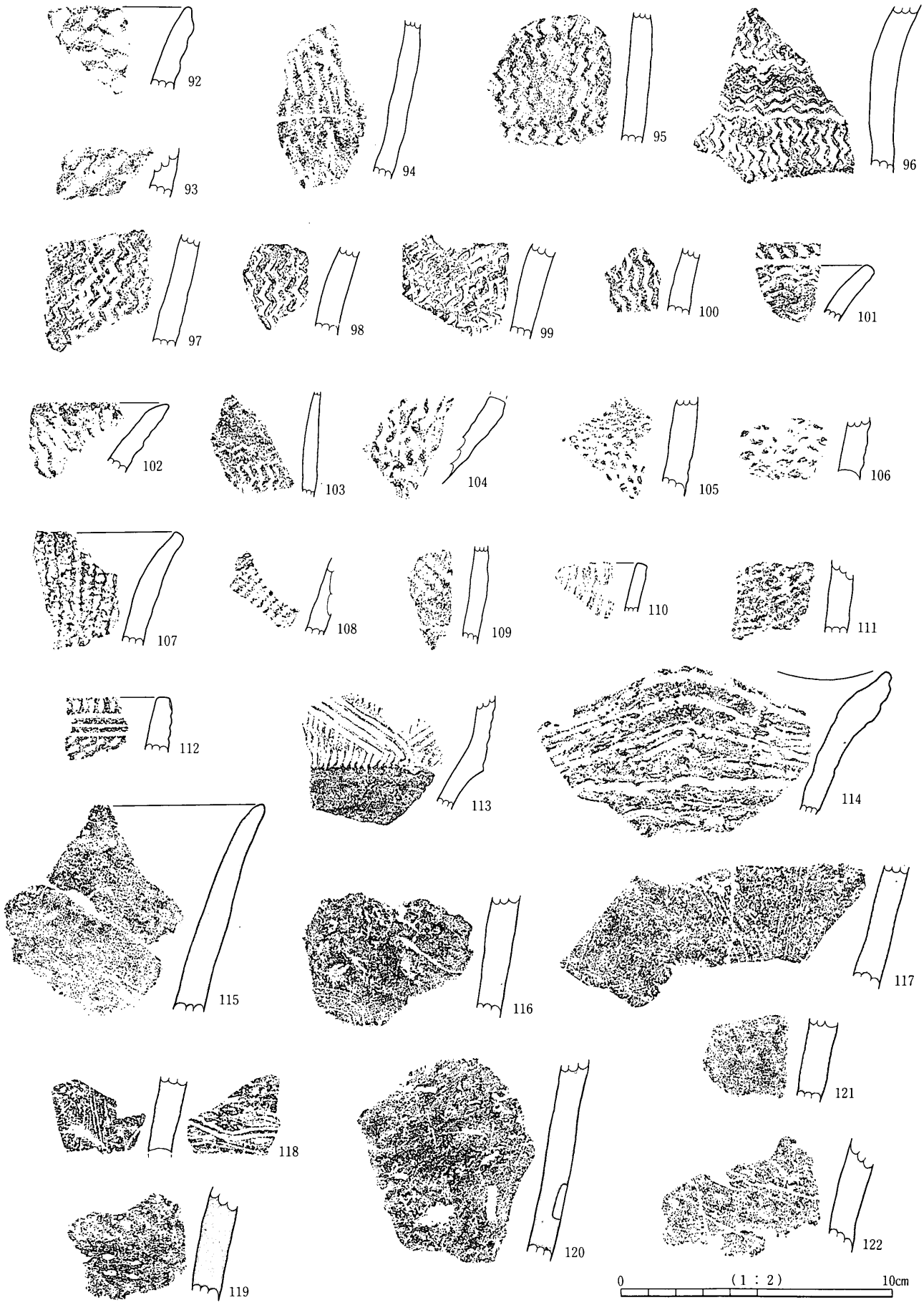
SK1354



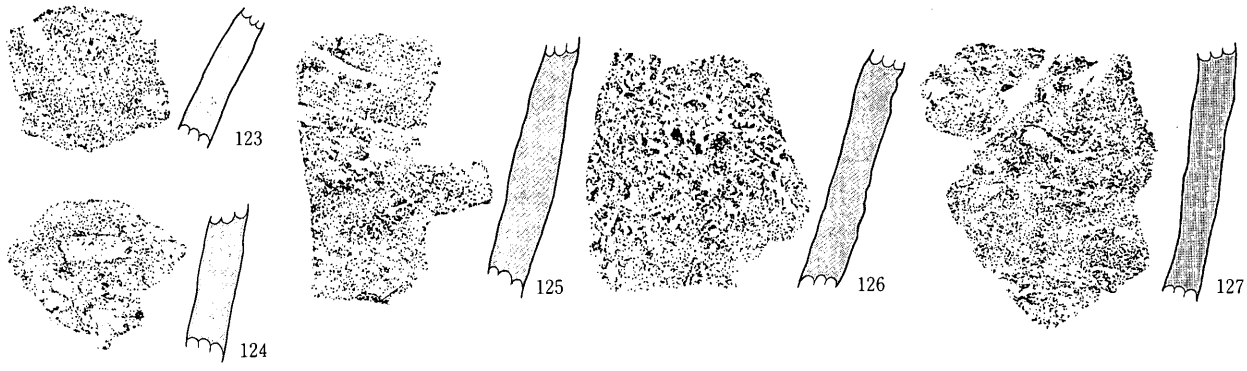
0　（1：2）　10cm

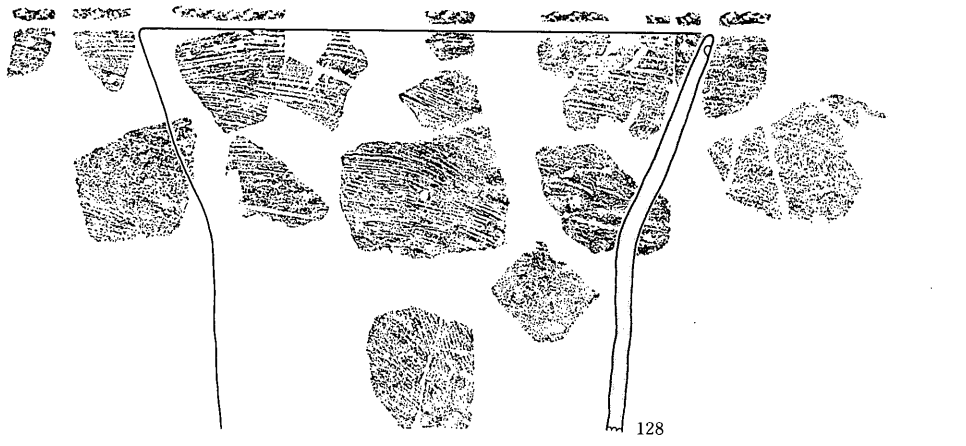
図版12　縄文時代早・前期土器(5)

遺構外(1)

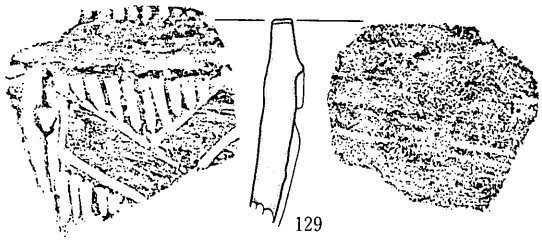


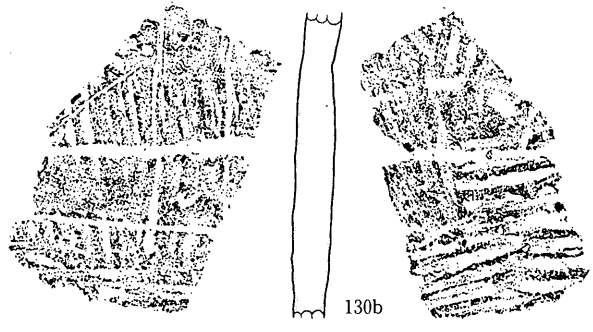
遺構外(2)

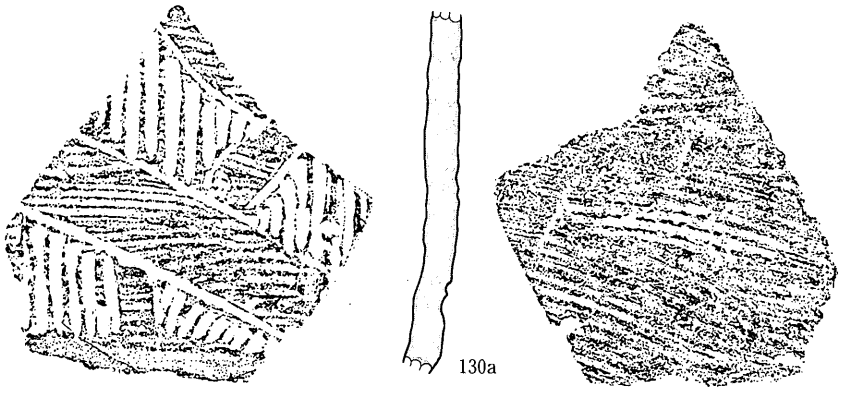




0　(1：4)　10cm



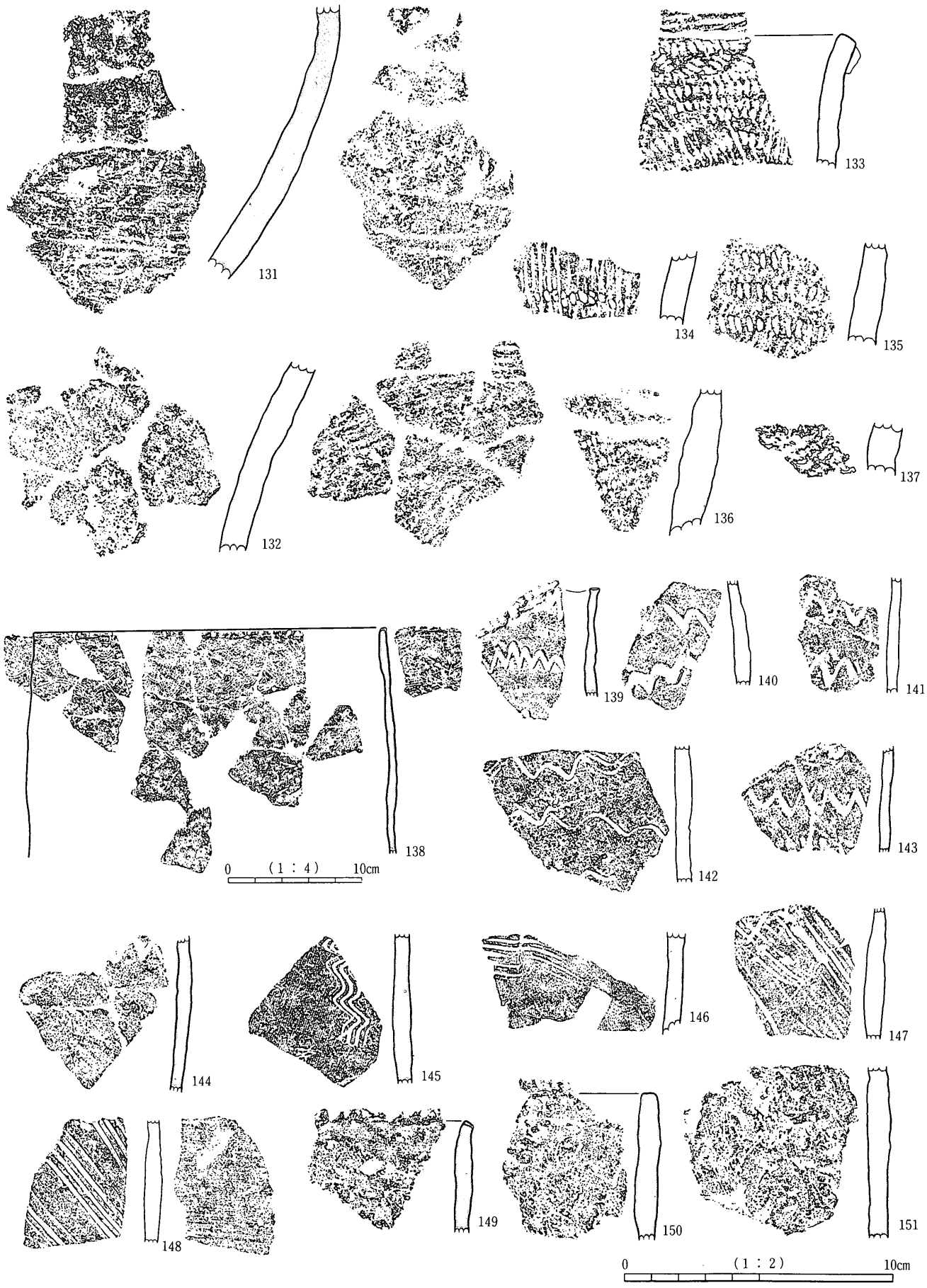




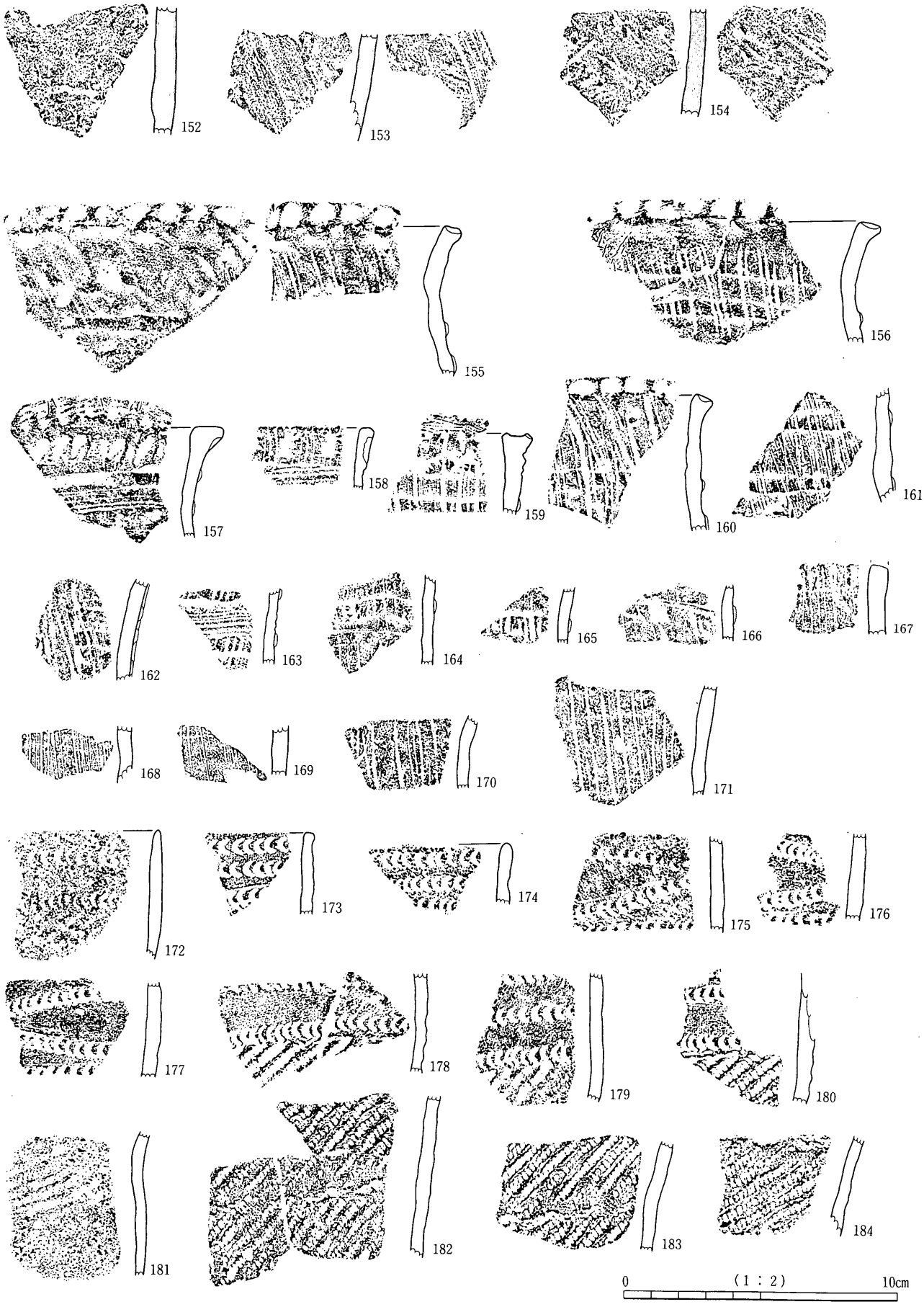
0　(1：2)　10cm

図版14　縄文時代早・前期土器(7)

遺構外(3)

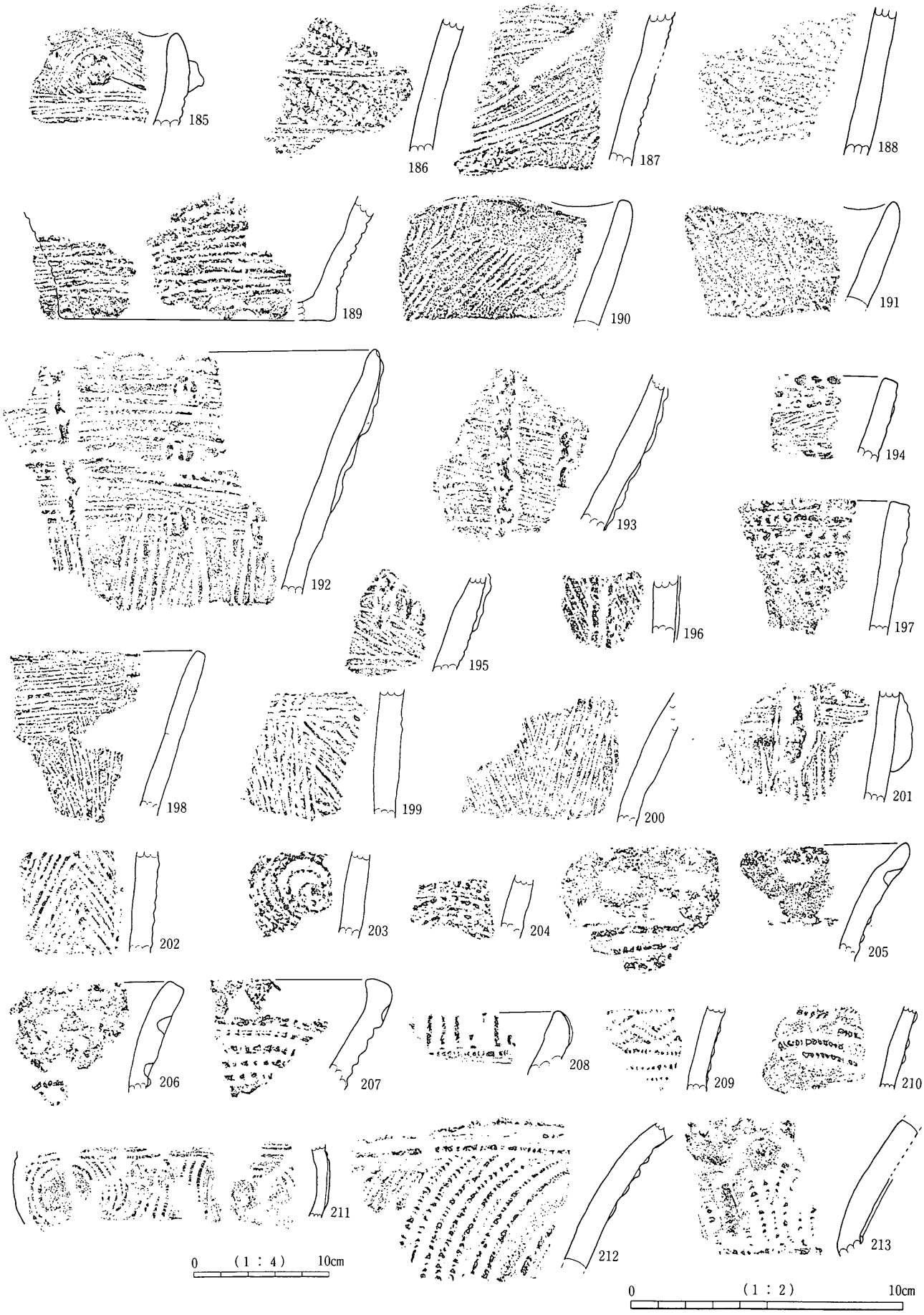


遺構外(4)


152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
0
(1：2)
10cm

図版16　縄文時代早・前期土器(9)

遺構外(5)

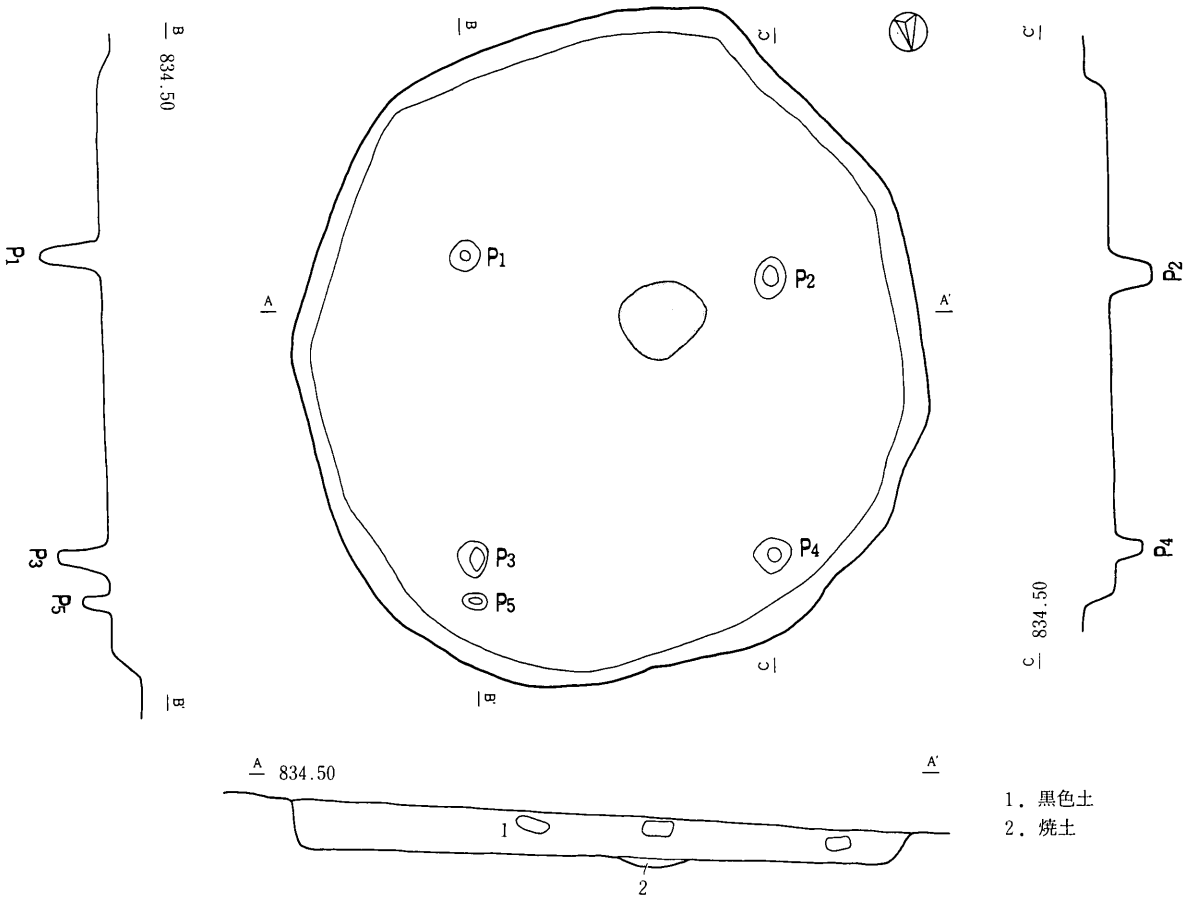


遺構外(6)

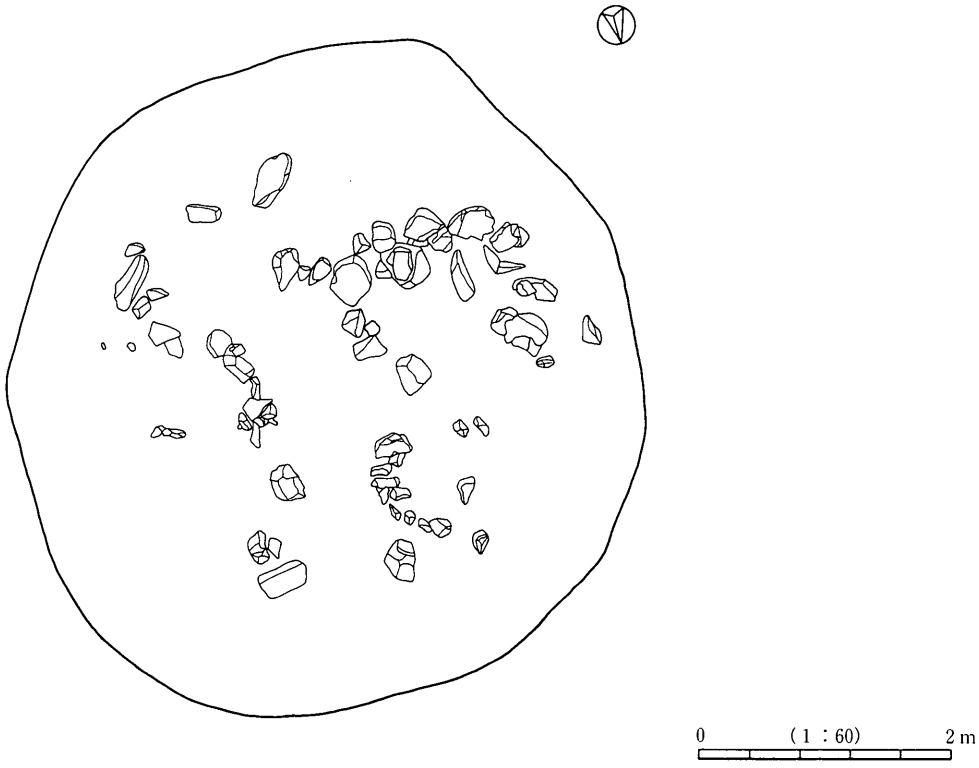
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
0
(1：2)
10cm

図版18　縄文時代中期初頭～前葉遺構図（1）

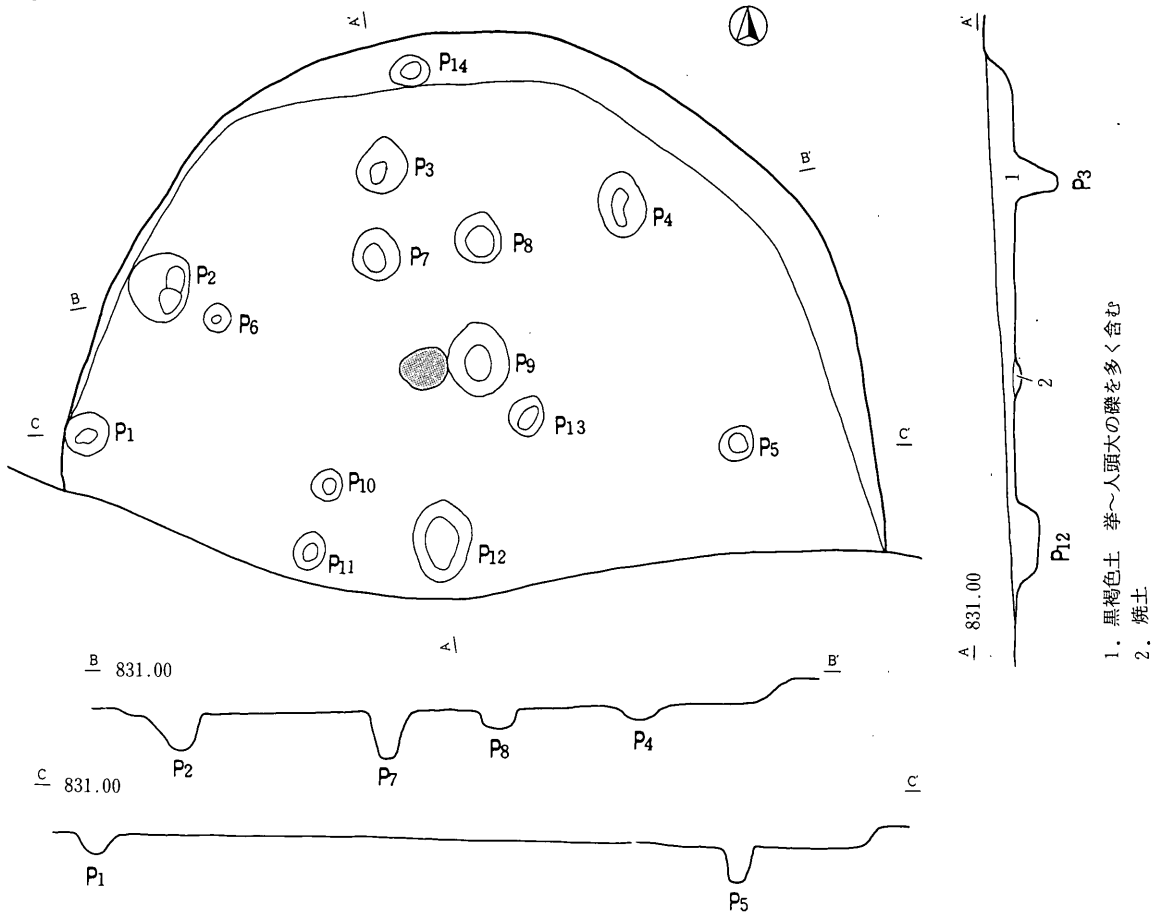
SB100



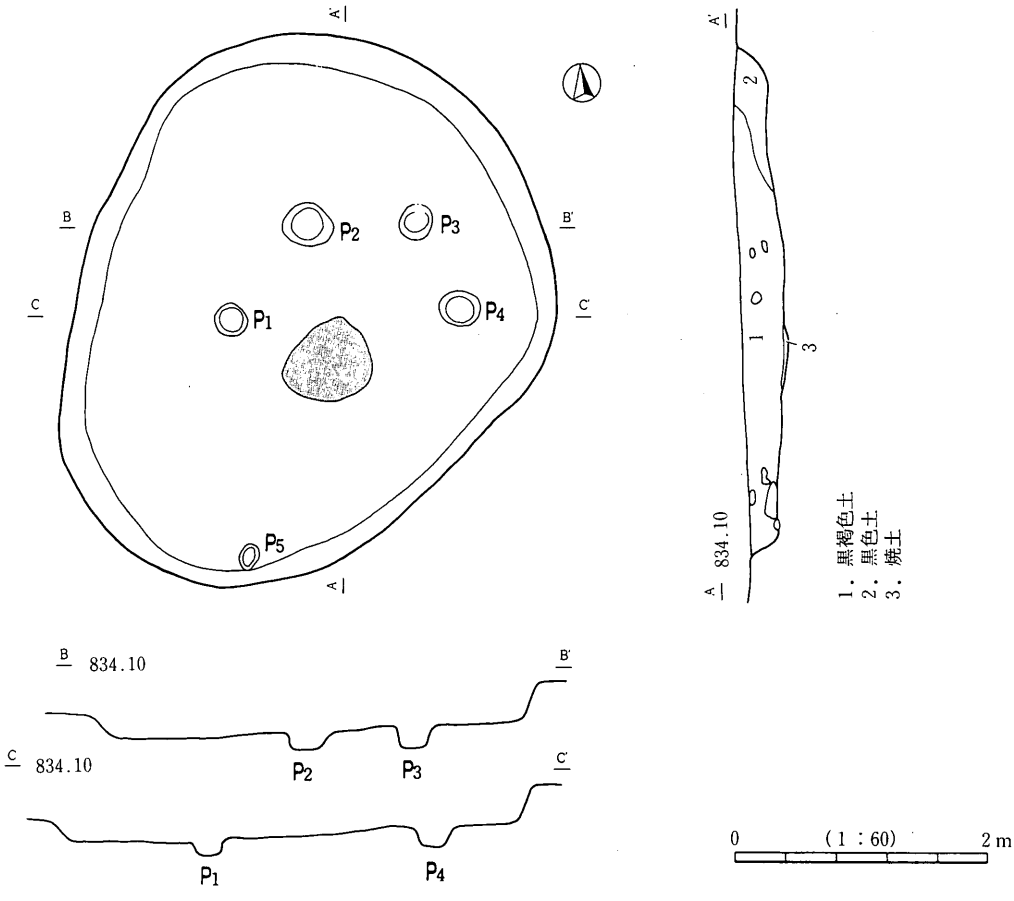
SB100礫集中出土状況



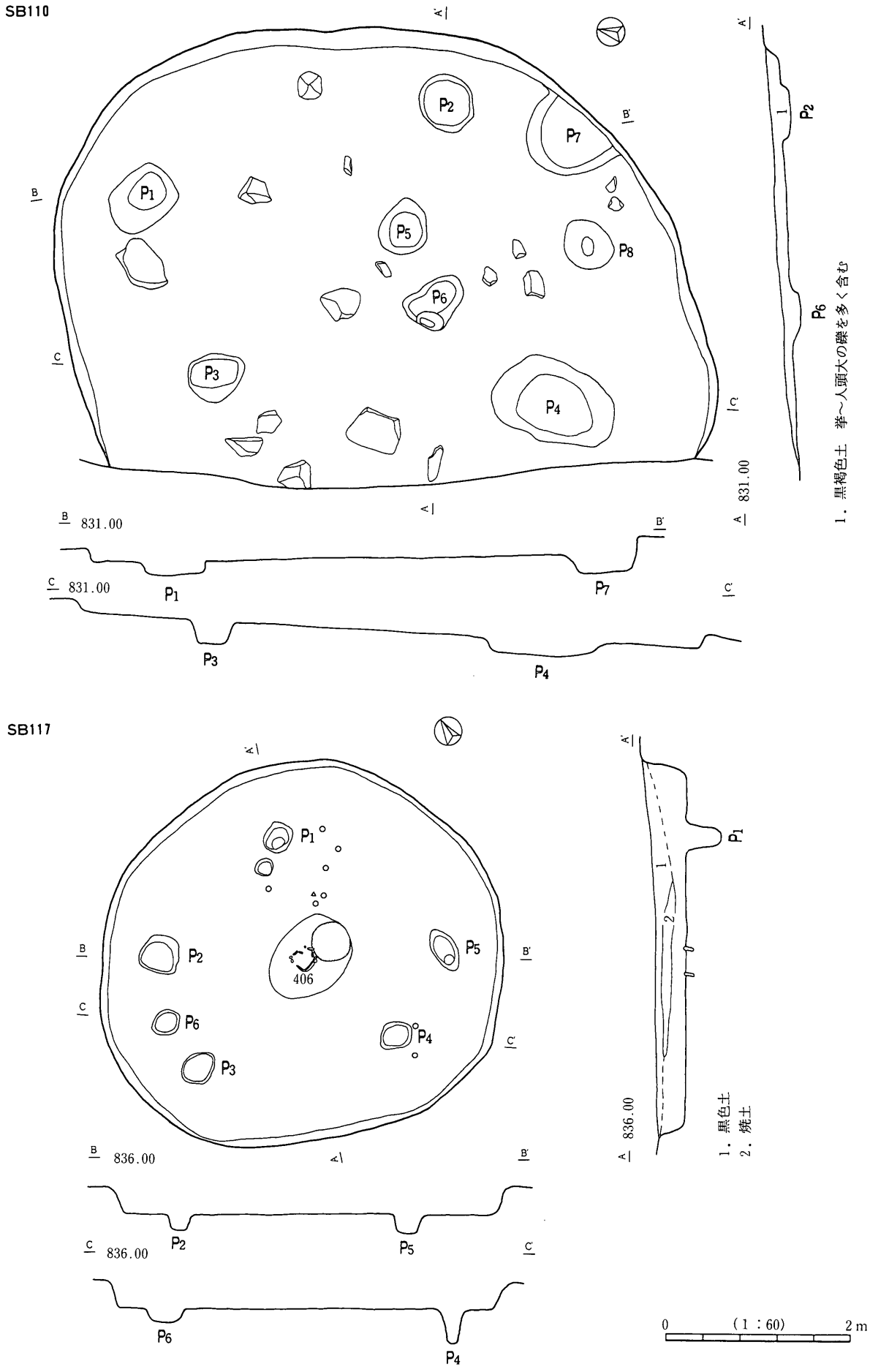
SB109


A
A'
B
B'
C
C'
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
831.00
1．黒褐色土　拳～人頭大の礫を多く含む
2．焼土

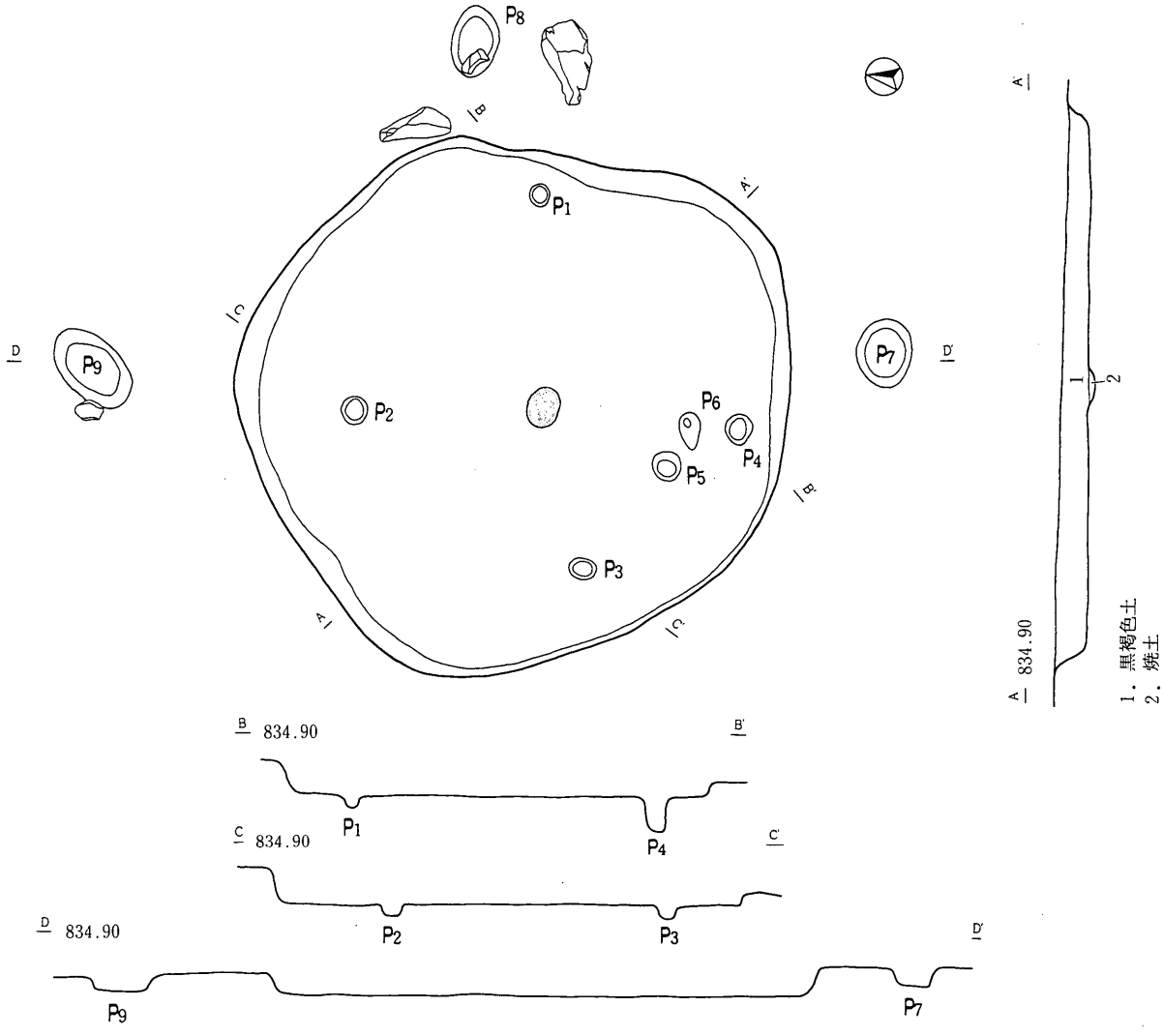
SB119


A
A'
B
B'
C
C'
P1
P2
P3
P4
P5
834.10
1．黒褐色土
2．黒色土
3．焼土
0
(1：60)
2 m

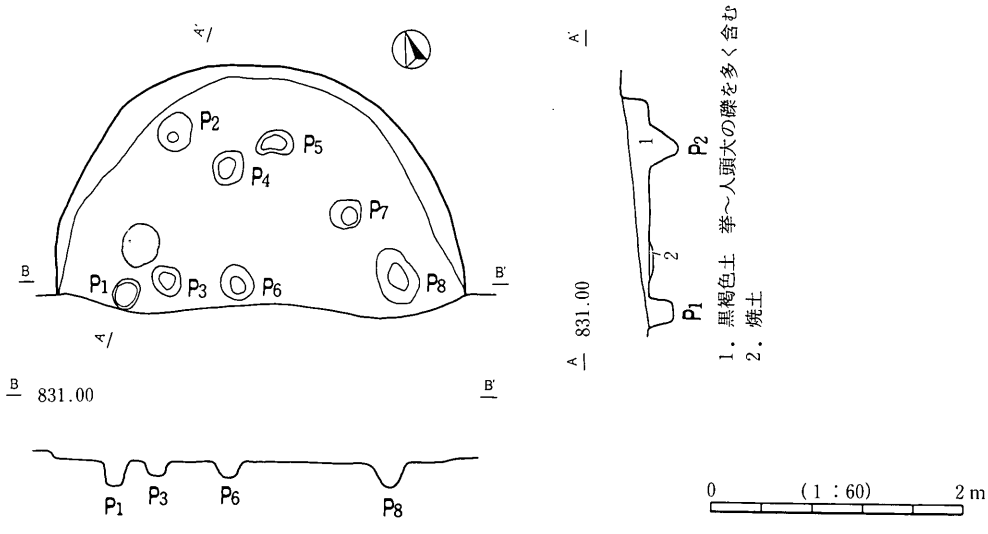
図版20　縄文時代中期初頭～前葉遺構図（３）



SB118

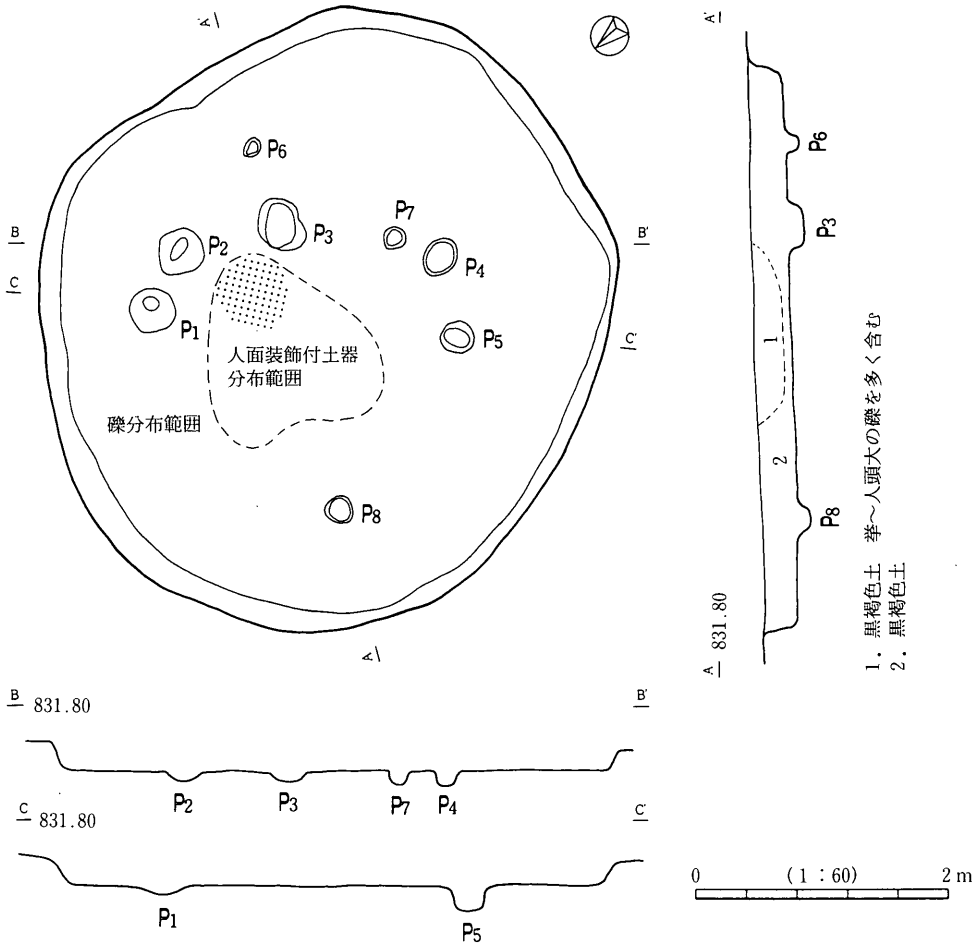

P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
834.90
1．黒褐色土
2．焼土

SB137

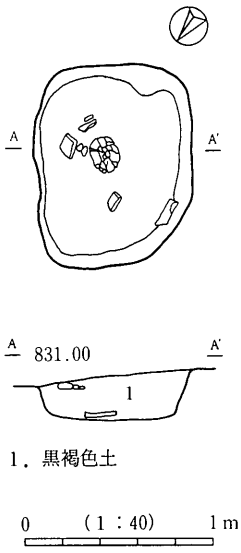

P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
A
A'
B
B'
831.00
1．黒褐色土　拳～人頭大の礫を多く含む
2．焼土
0
(1：60)
2 m

図版22　縄文時代中期初頭～前葉遺構図（5）

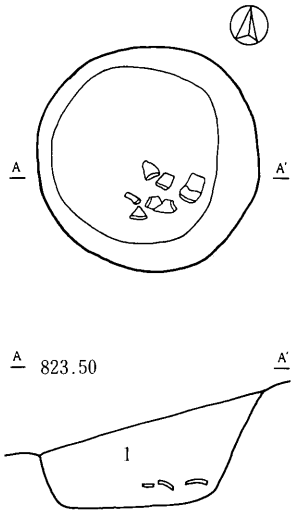
SB124



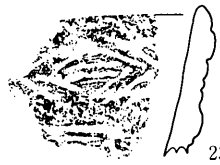
SK1268

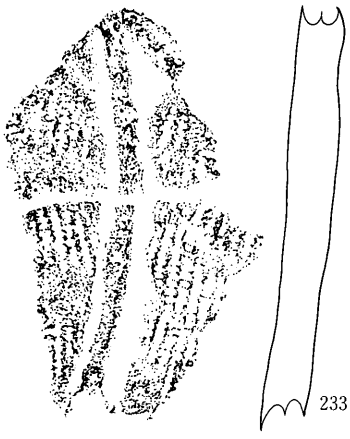


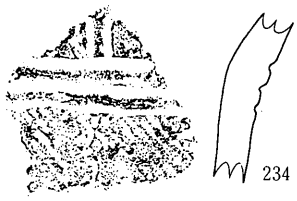
SK1285

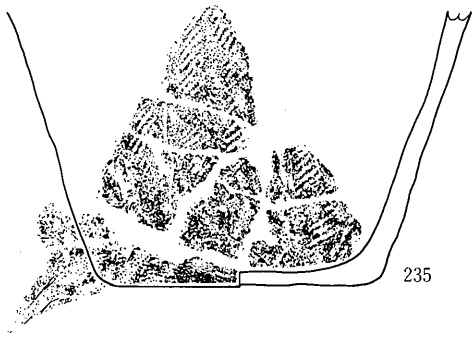


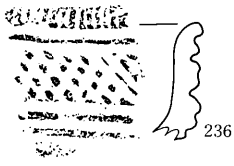
SB100(1)

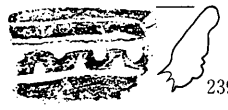


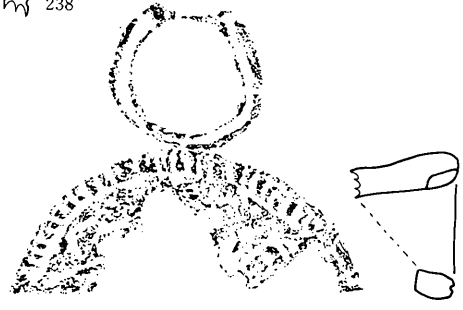


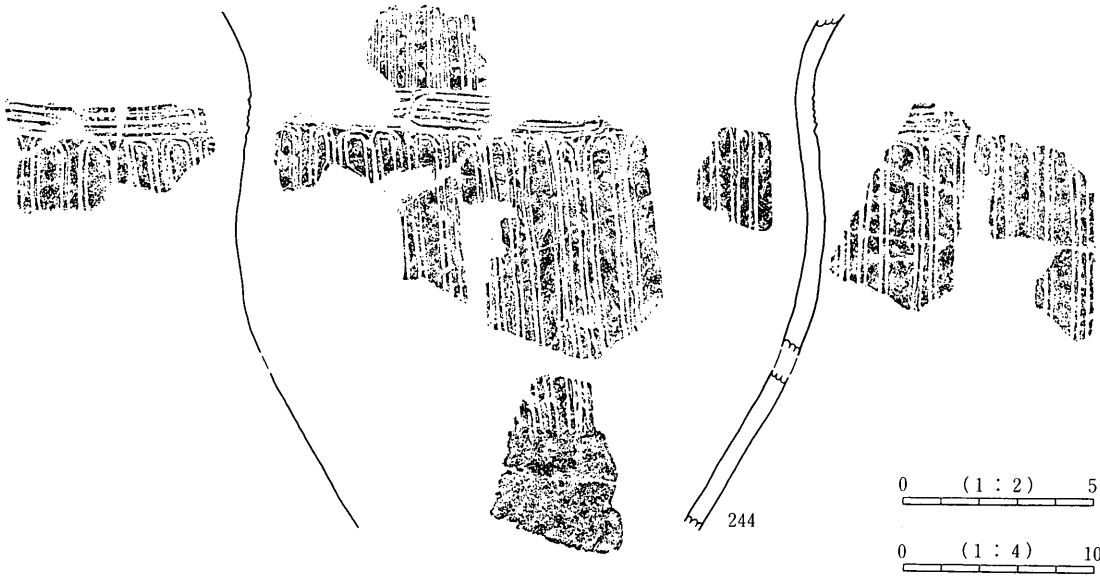












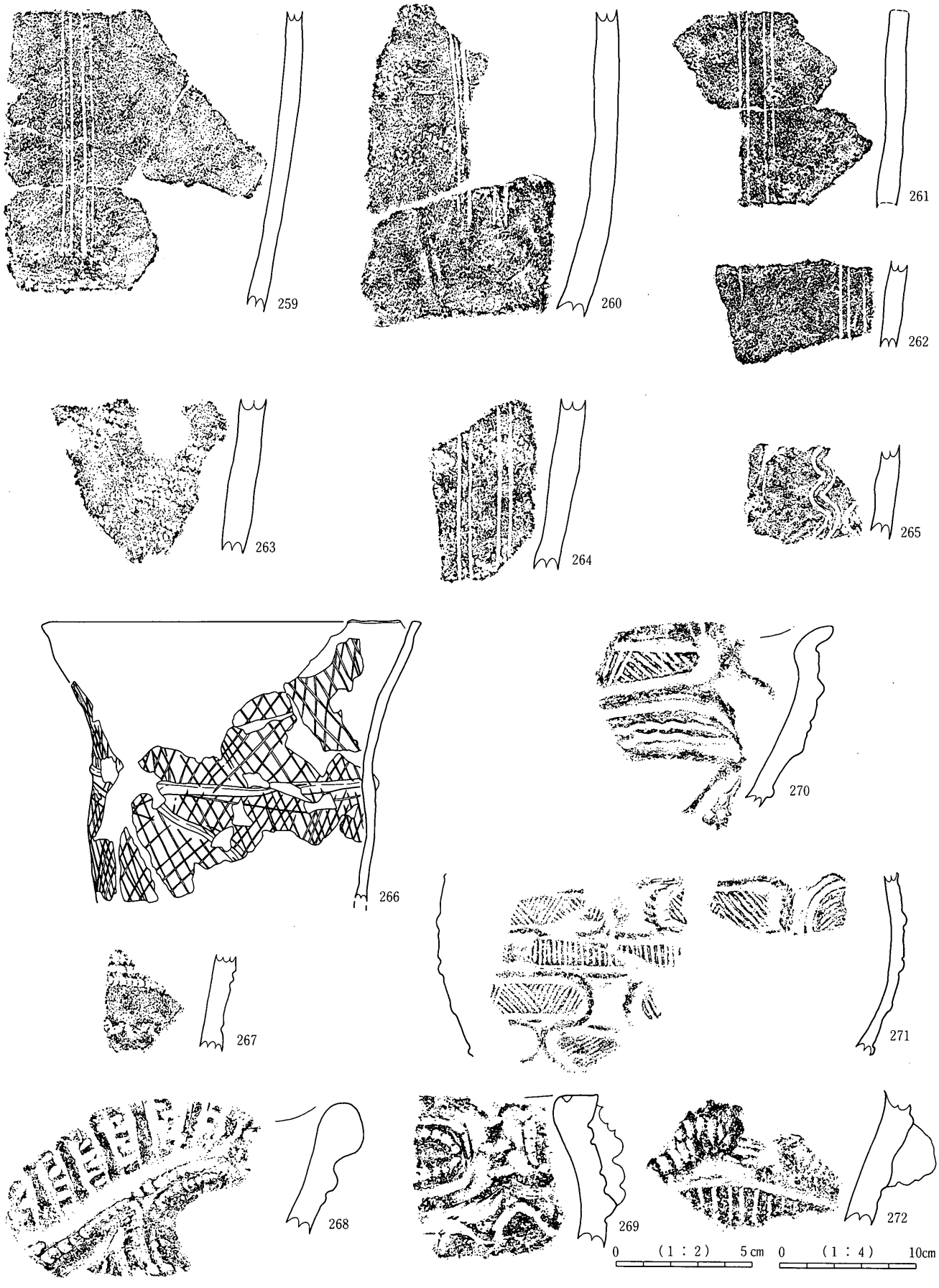
0　（1：2）　5cm

0　（1：4）　10cm

図版24　縄文時代中期初頭～前葉土器（２）

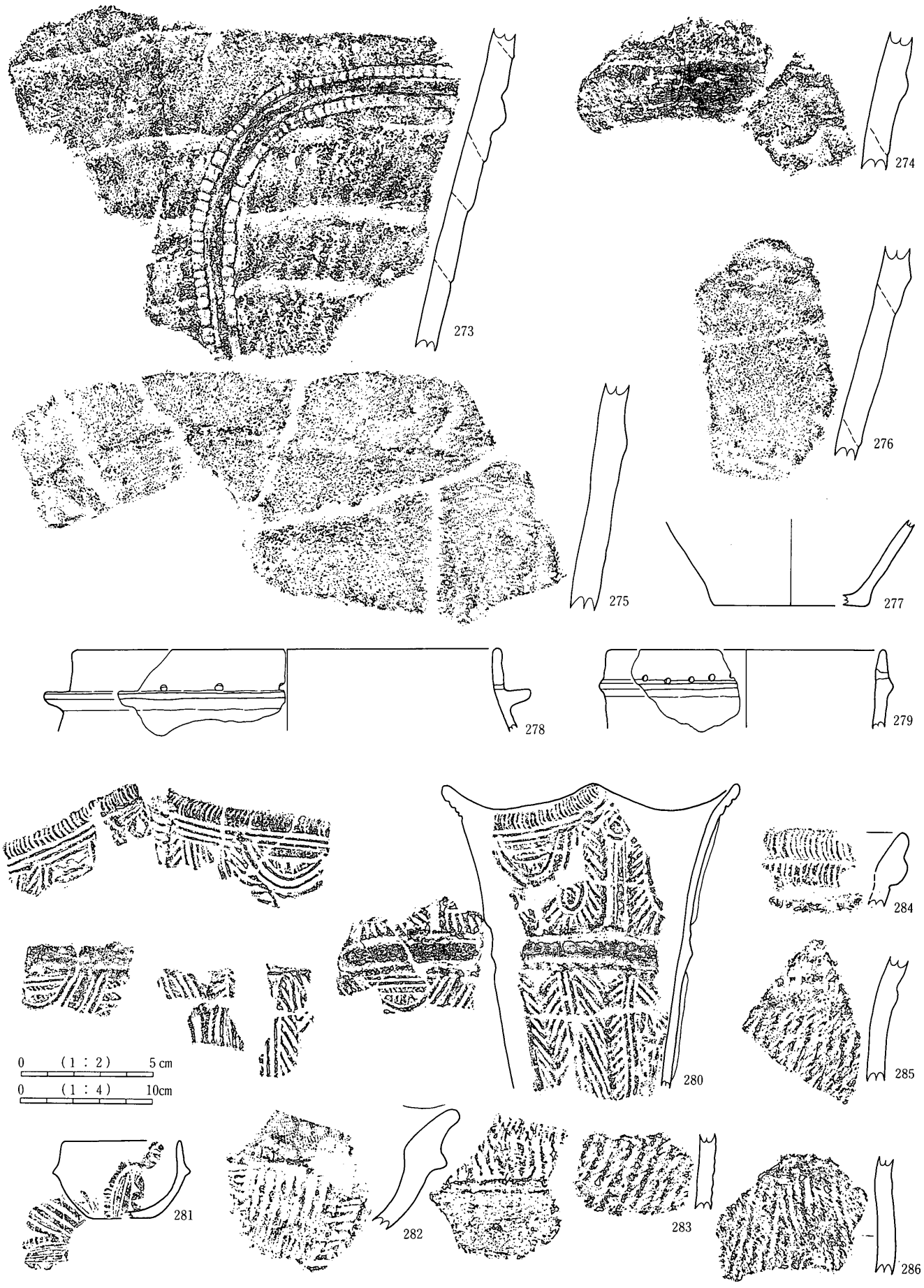
SB100(2)

SB100(3)

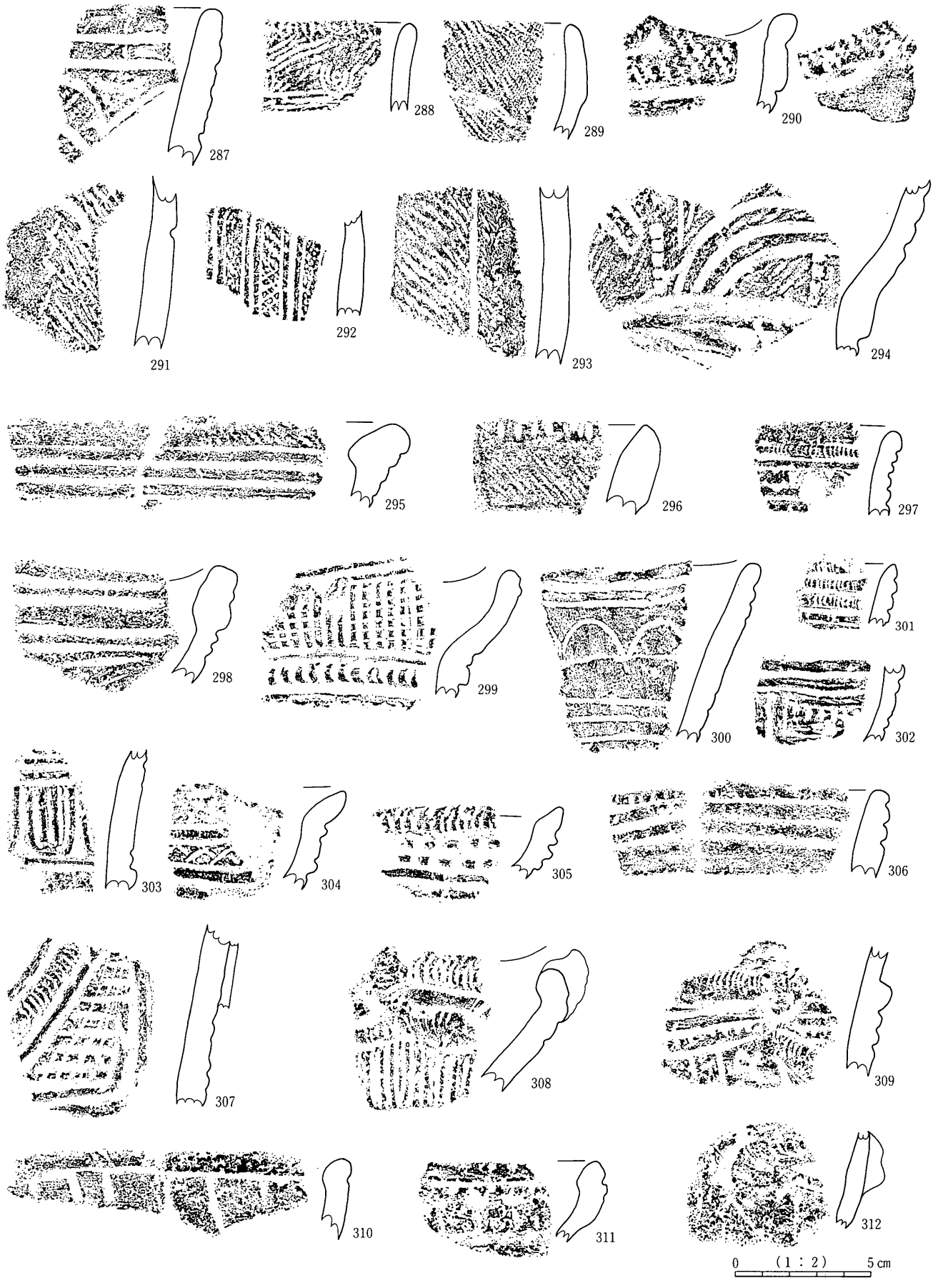

259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
0 (1：2) 5cm
0 (1：4) 10cm

図版26　縄文時代中期初頭～前葉土器（4）

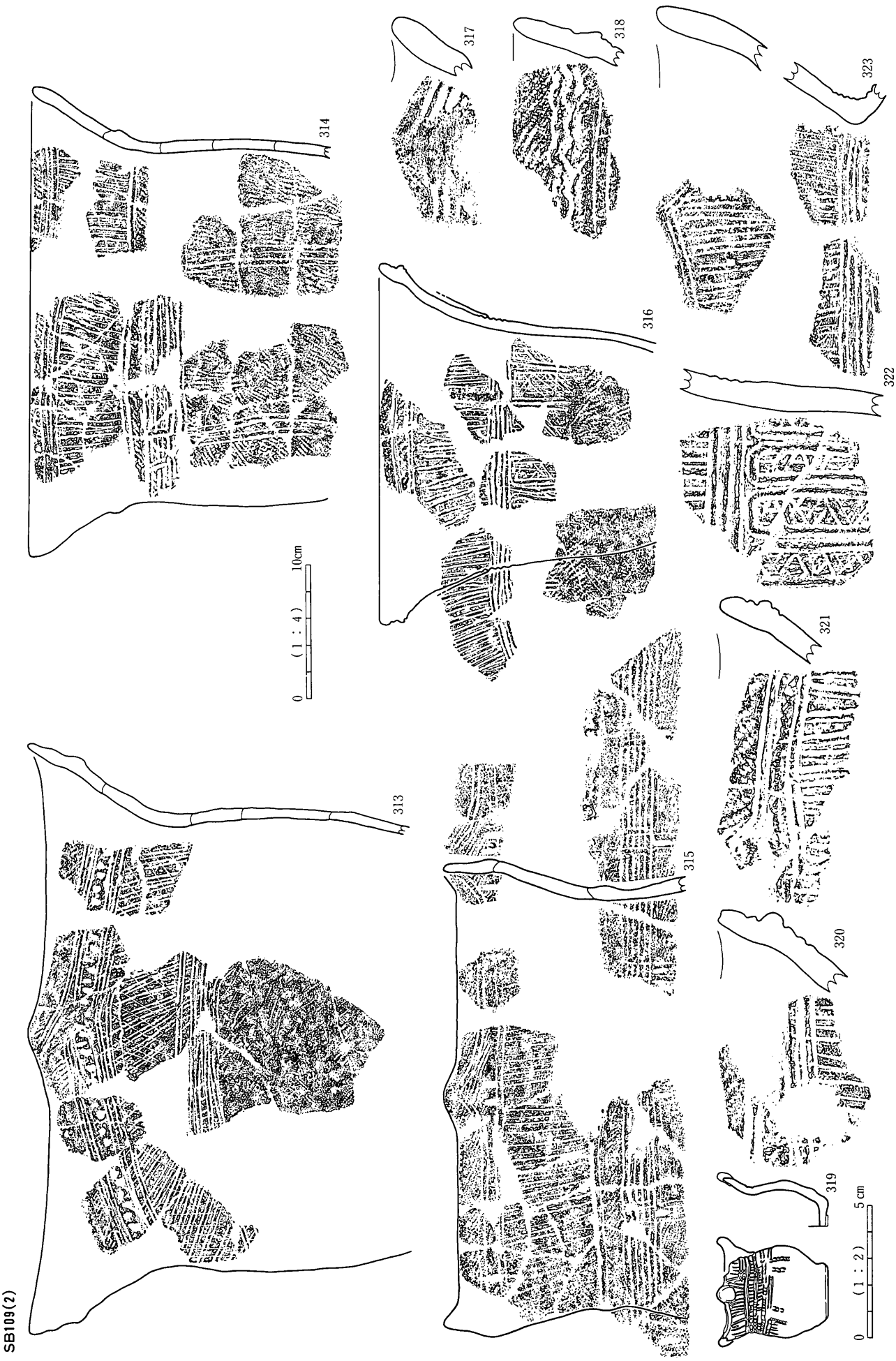
SB100(4)

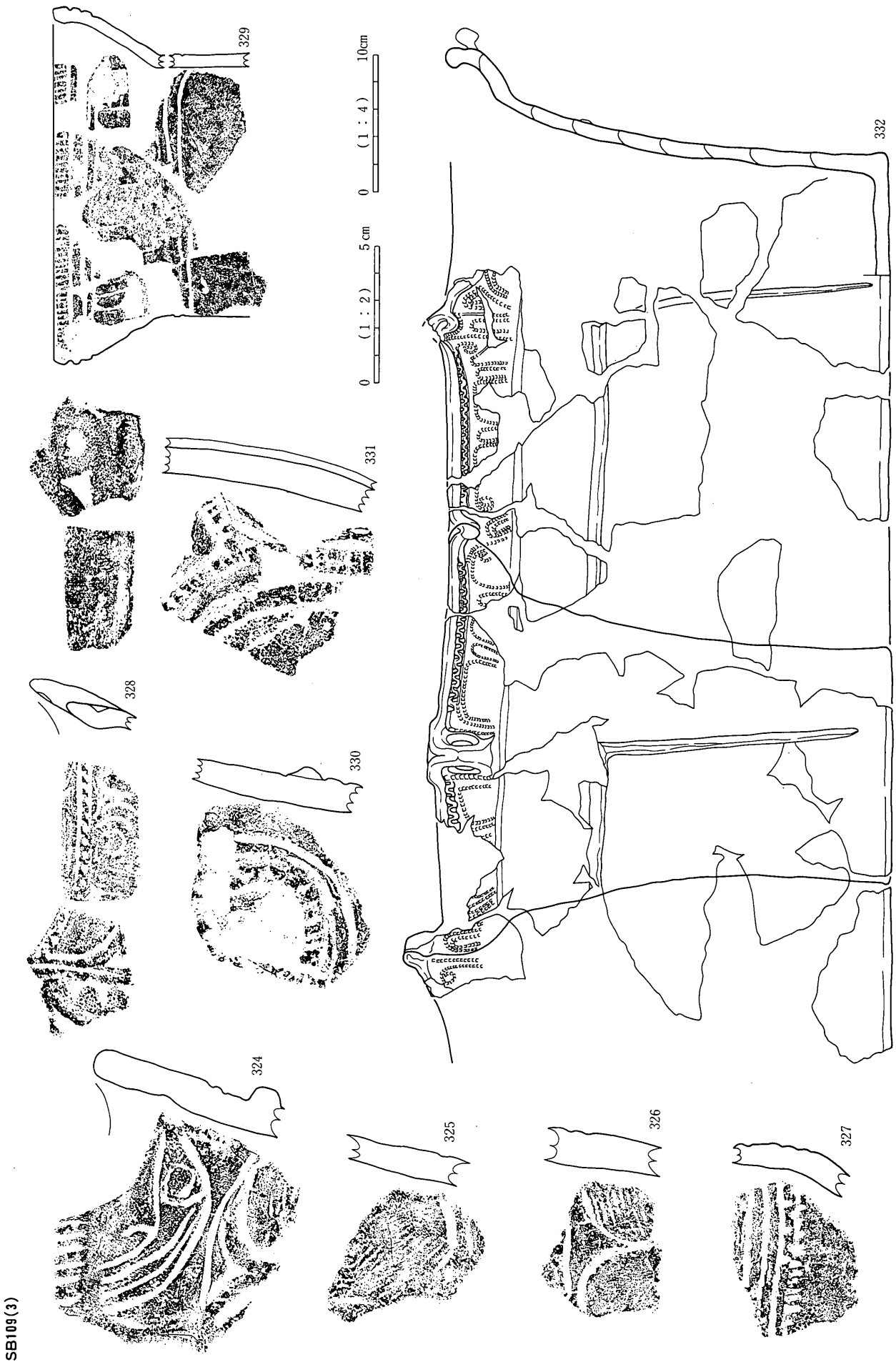


SB109(1)


287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
0 (1：2) 5cm

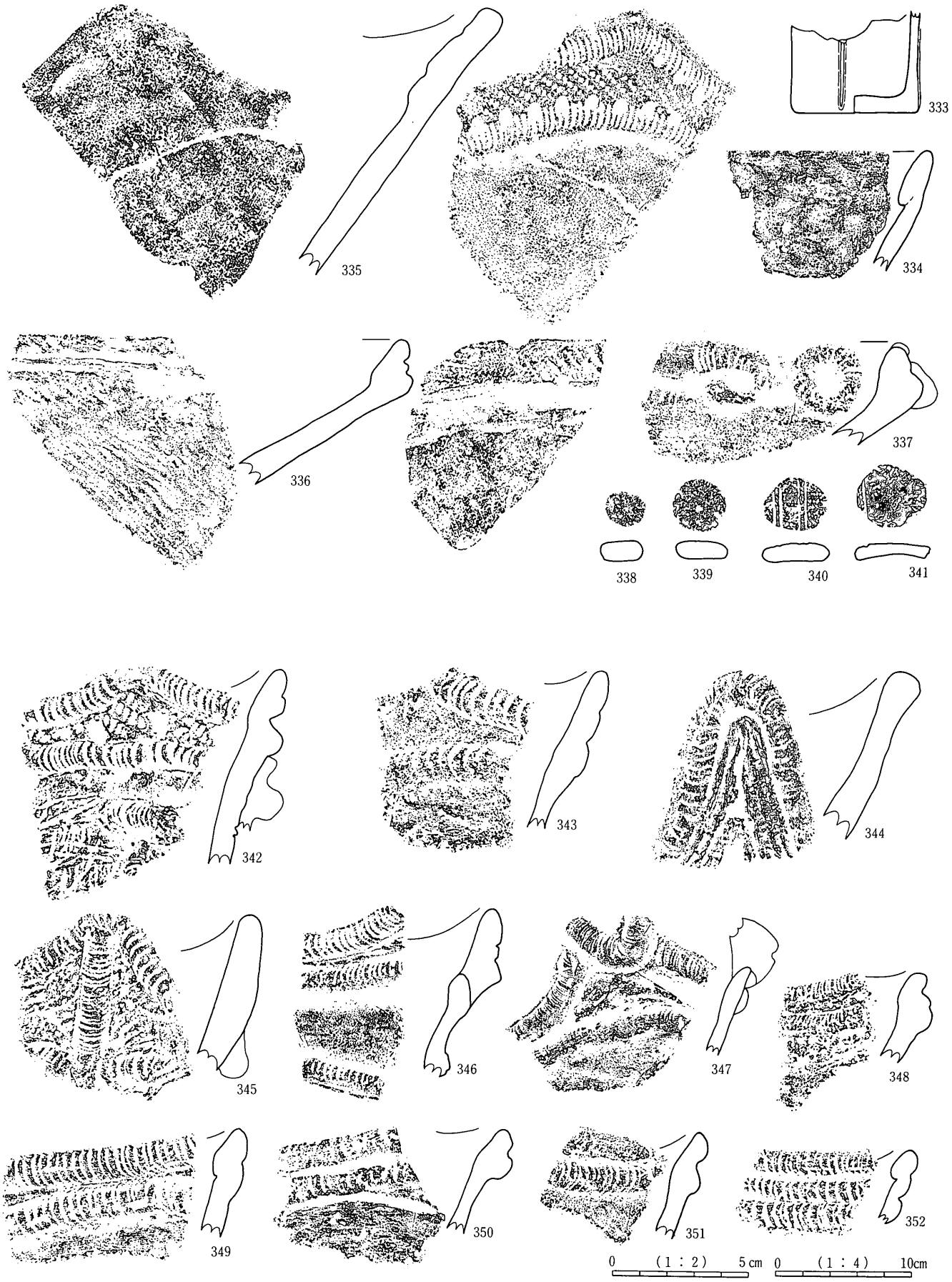
図版28　縄文時代中期初頭～前葉土器（6）

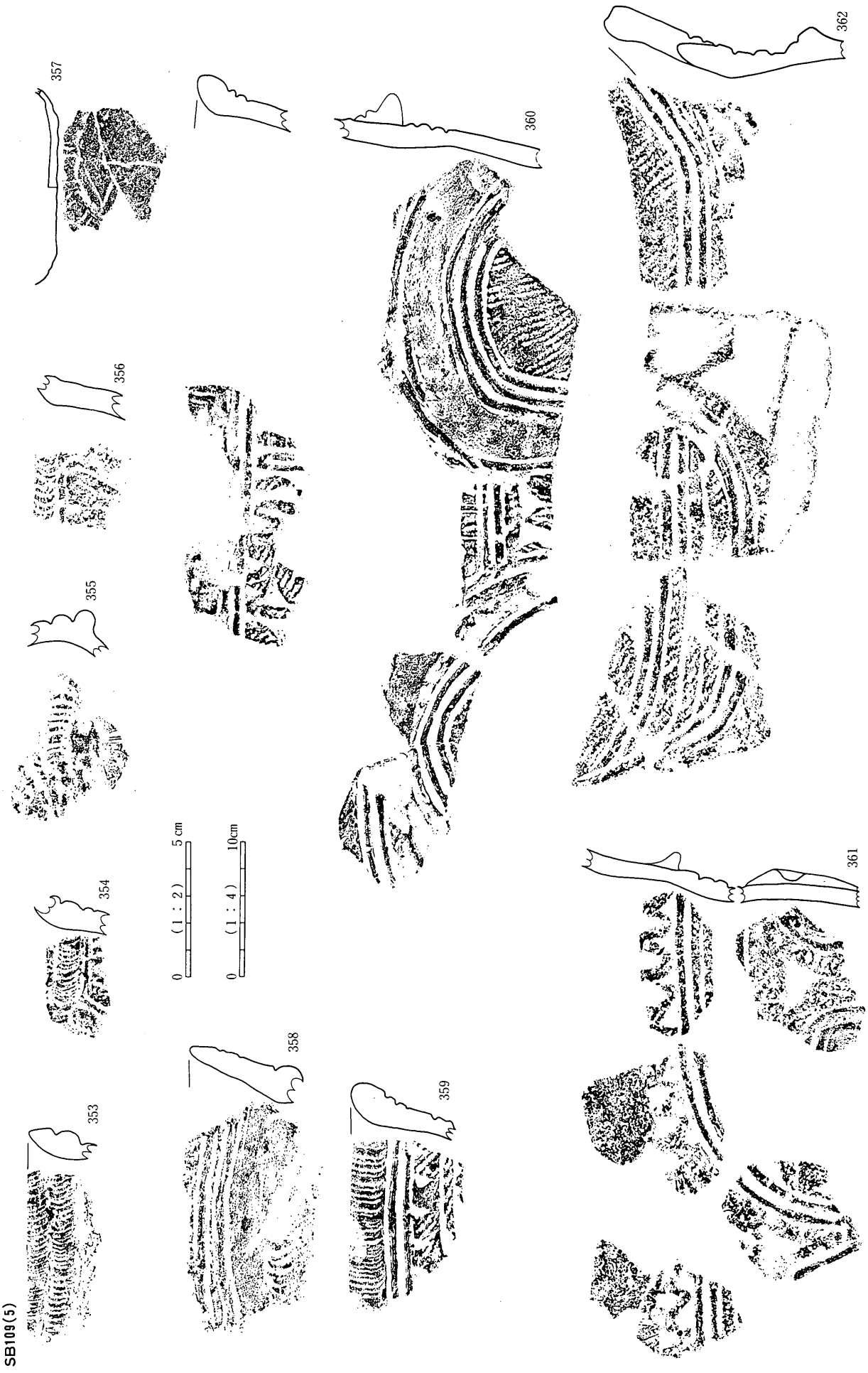



SB109(3)
324
325
326
327
328
329
330
331
332
0 (1：2) 5cm
0 (1：4) 10cm

図版30　縄文時代中期初頭～前葉土器（8）

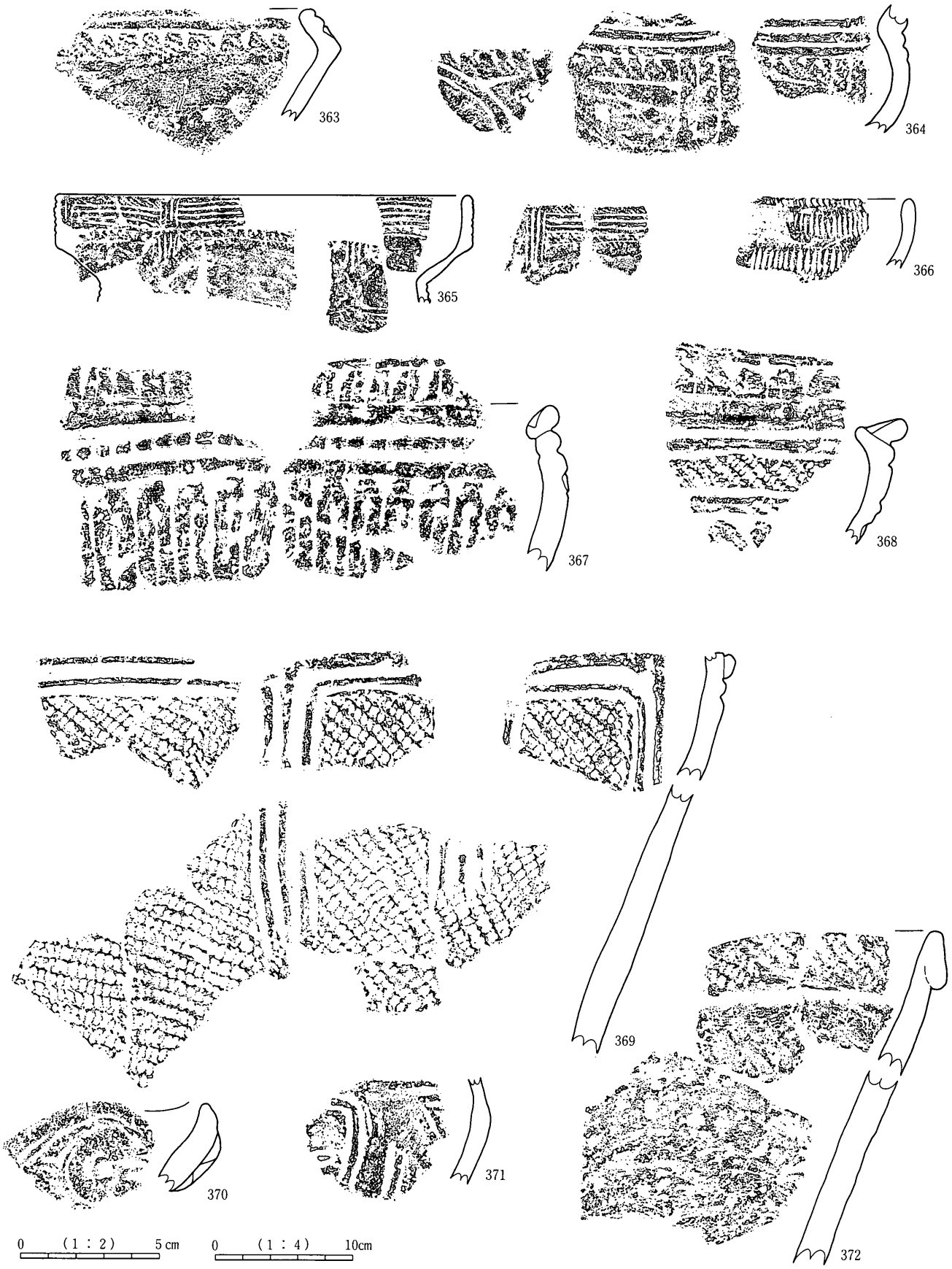
SB109(4)




SB109(5)
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
0 (1：2) 5cm
0 (1：4) 10cm

図版32　縄文時代中期初頭～前葉土器(10)

SB109(6)

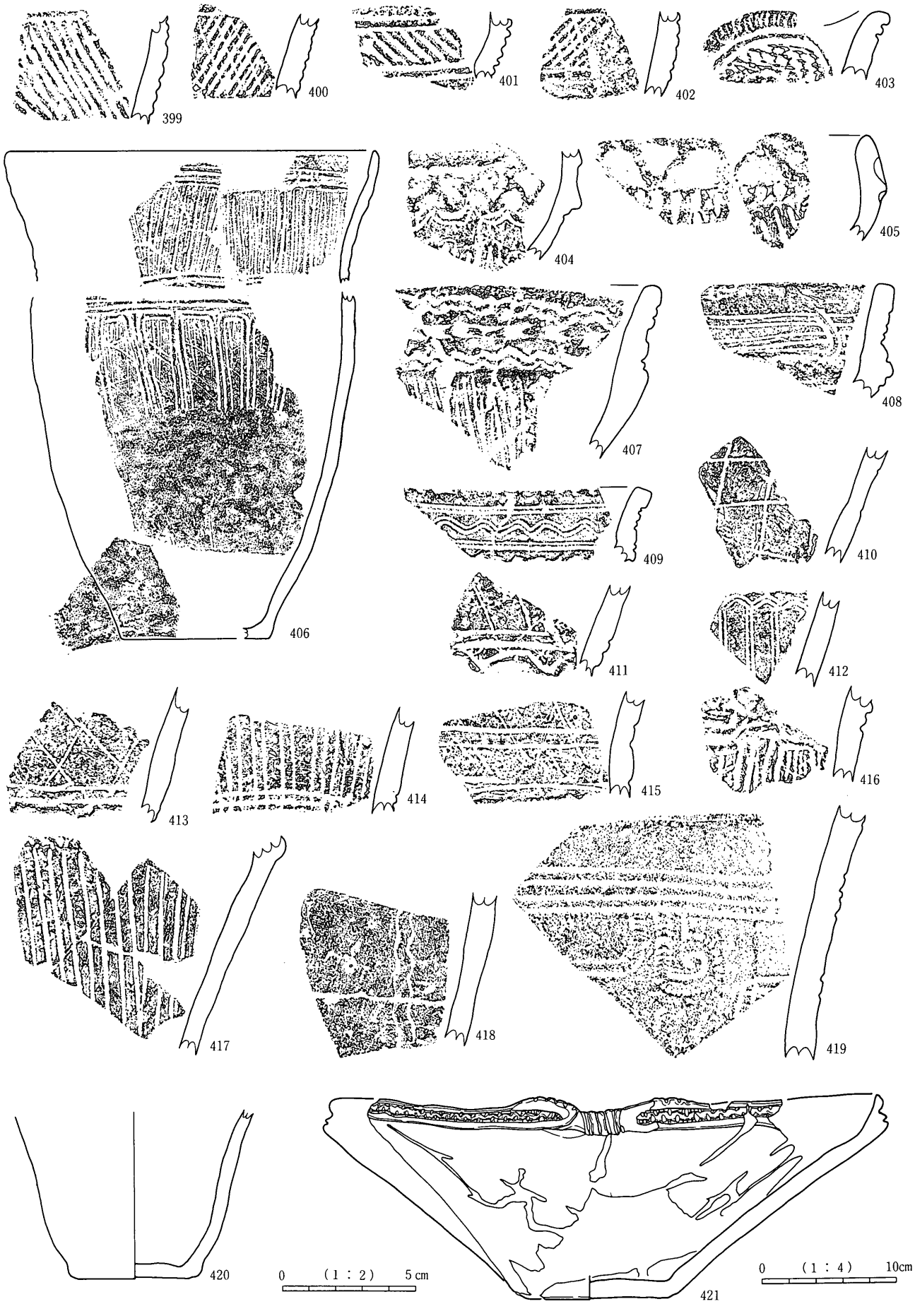


SB117(1)

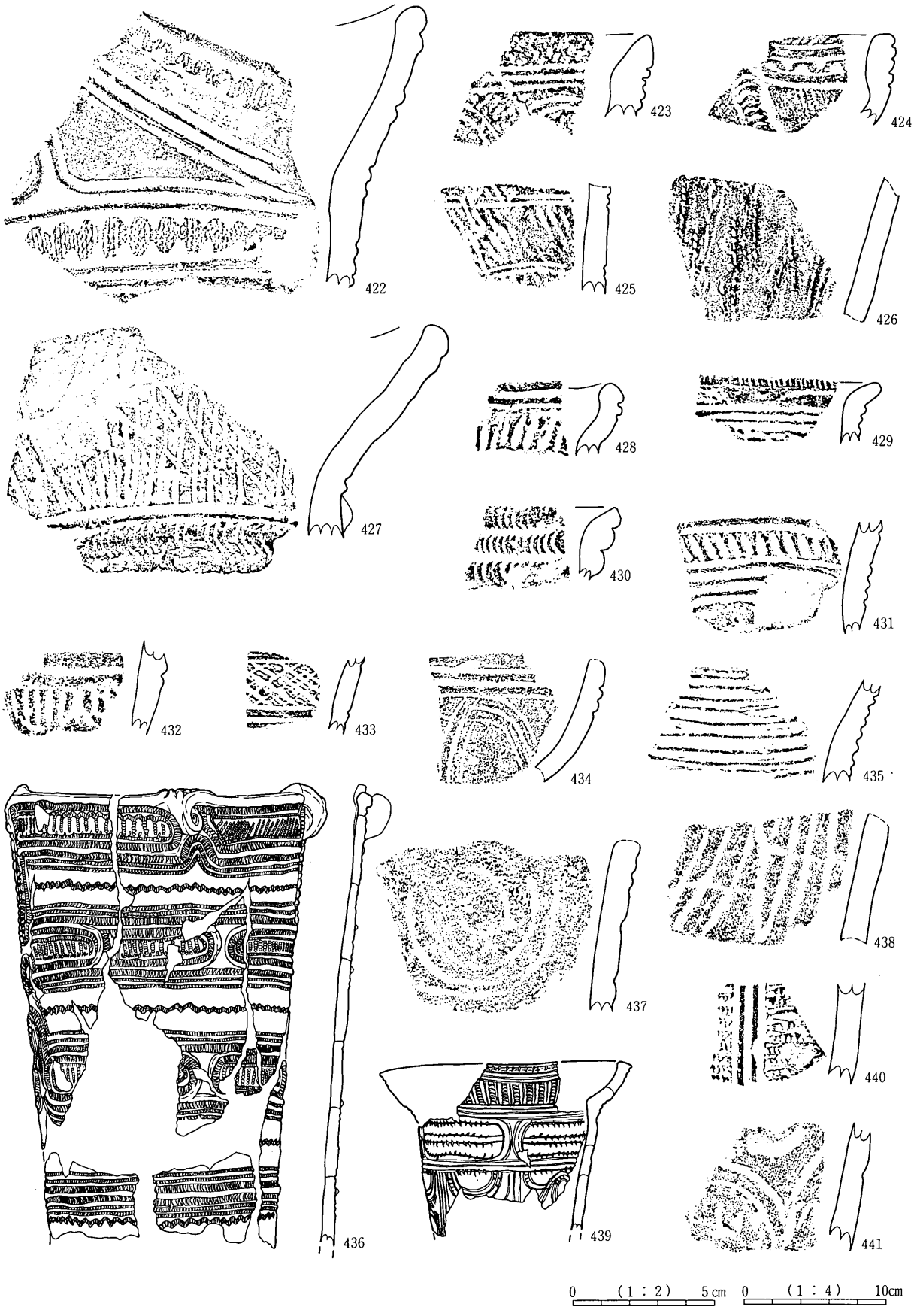
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
0 (1：2) 5cm
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
0 (1：4) 10cm

図版34　縄文時代中期初頭～前葉土器(12)

SB117(2)



SB118


422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
0　(1：2)　5cm
0　(1：4)　10cm

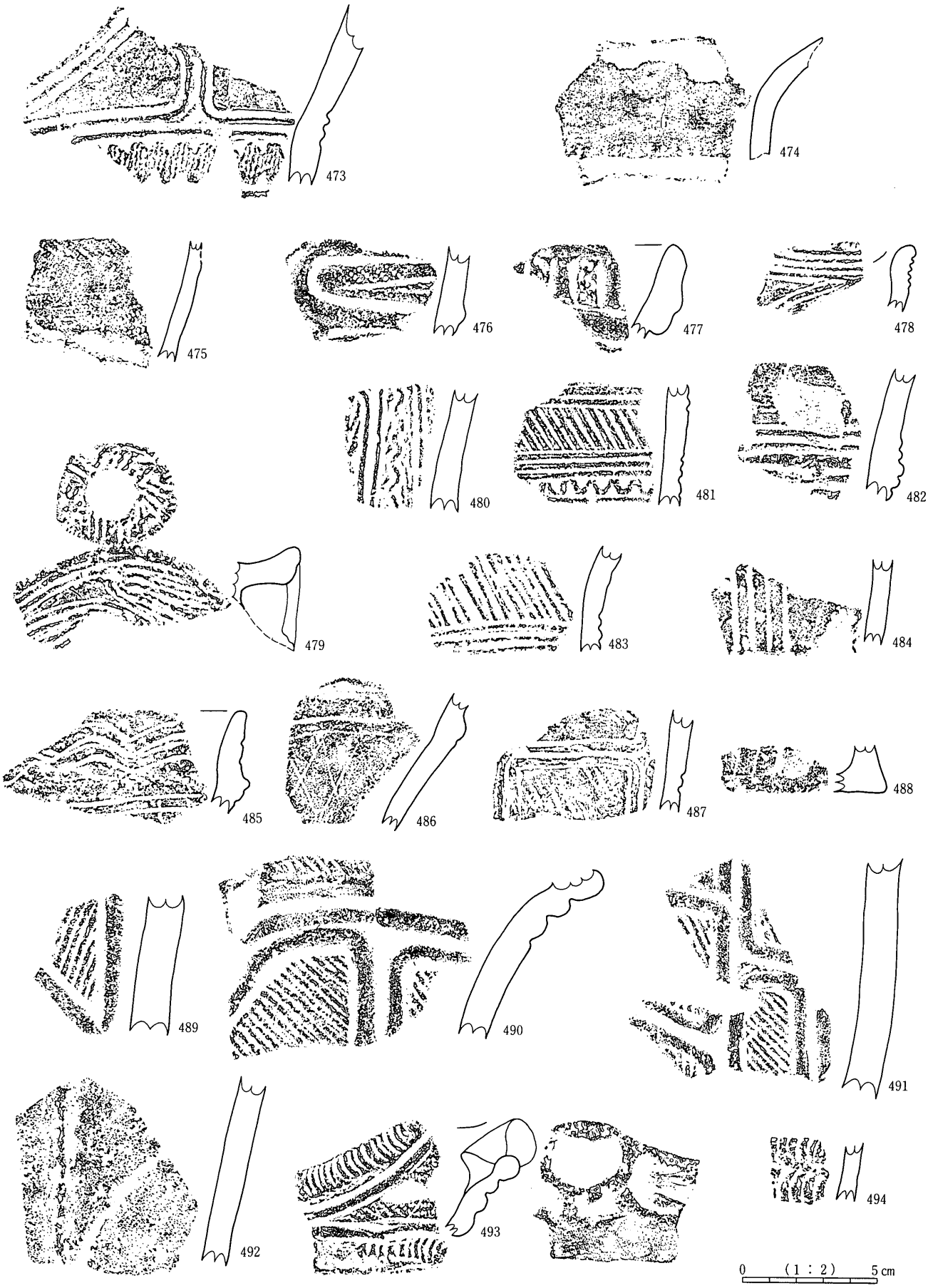
図版36　縄文時代中期初頭～前葉土器(14)

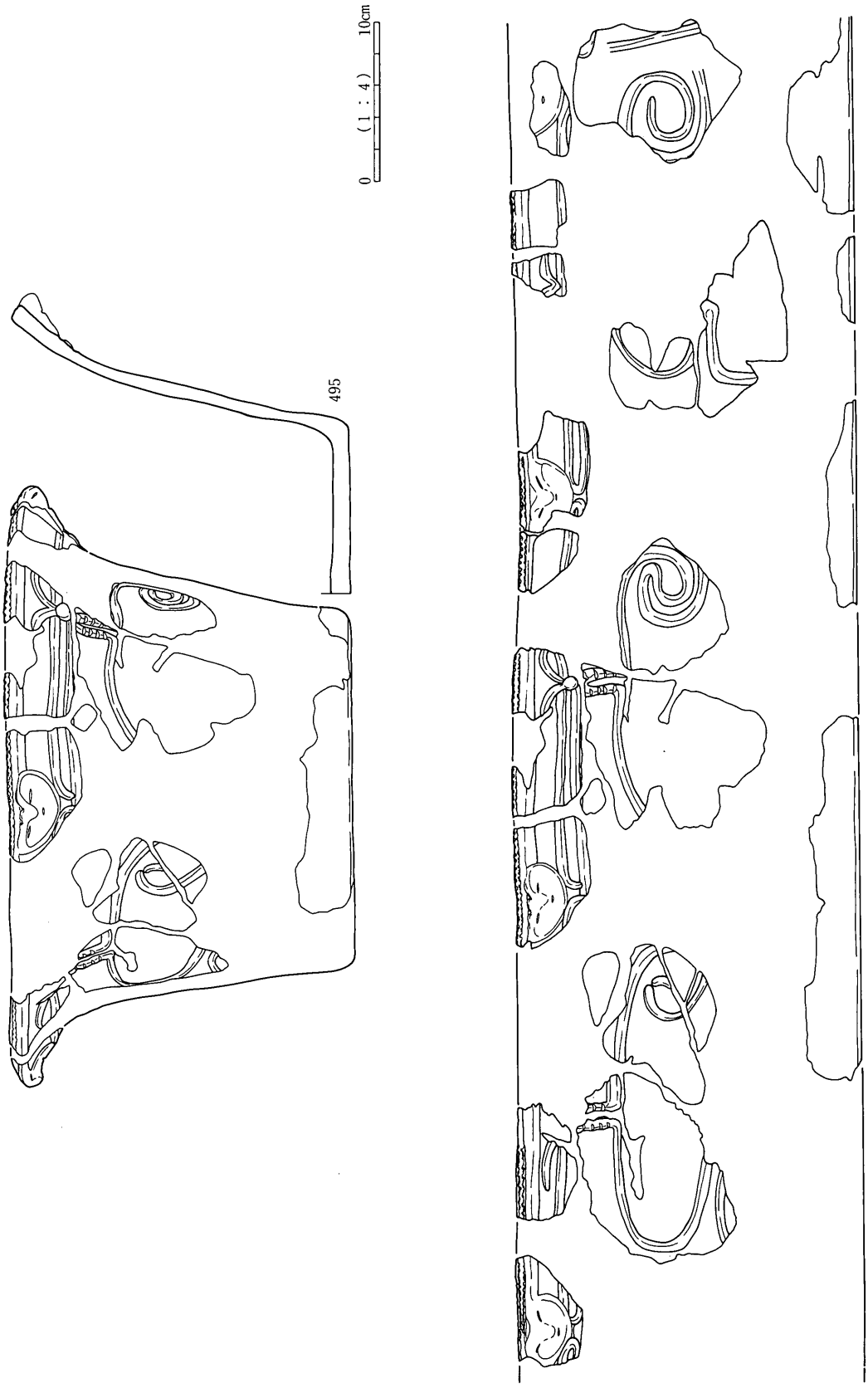
SB119(1)

SB119(2)

図版38　縄文時代中期初頭～前葉土器(16)

SB124(1)

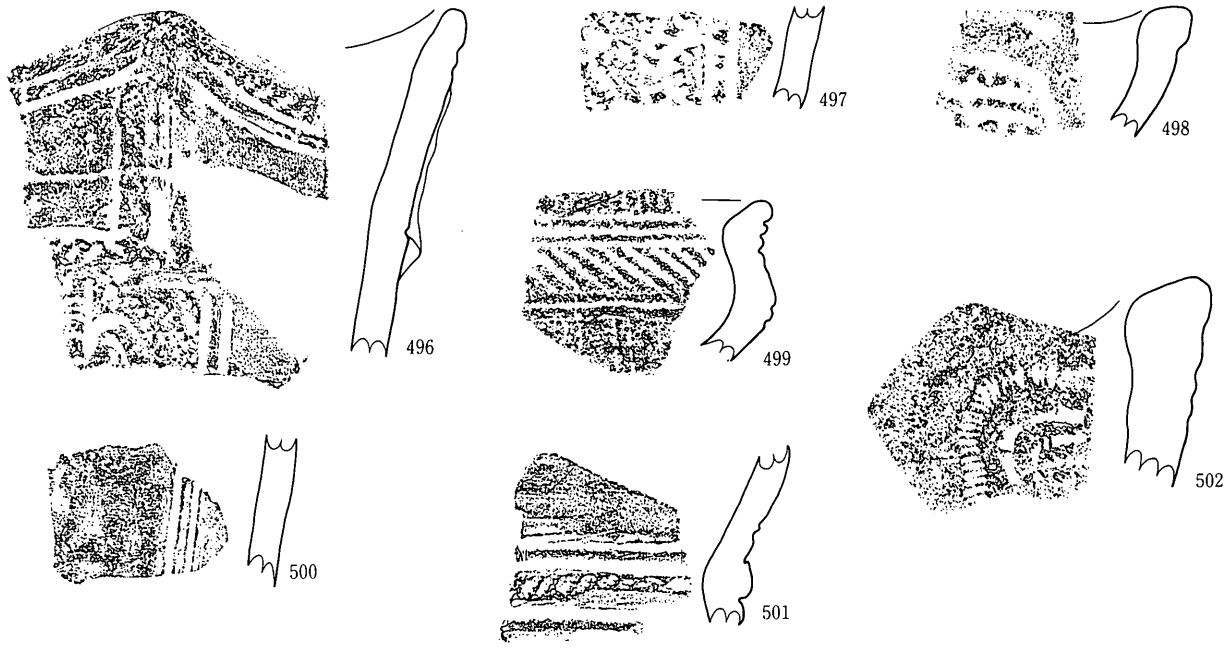




SB124(2)

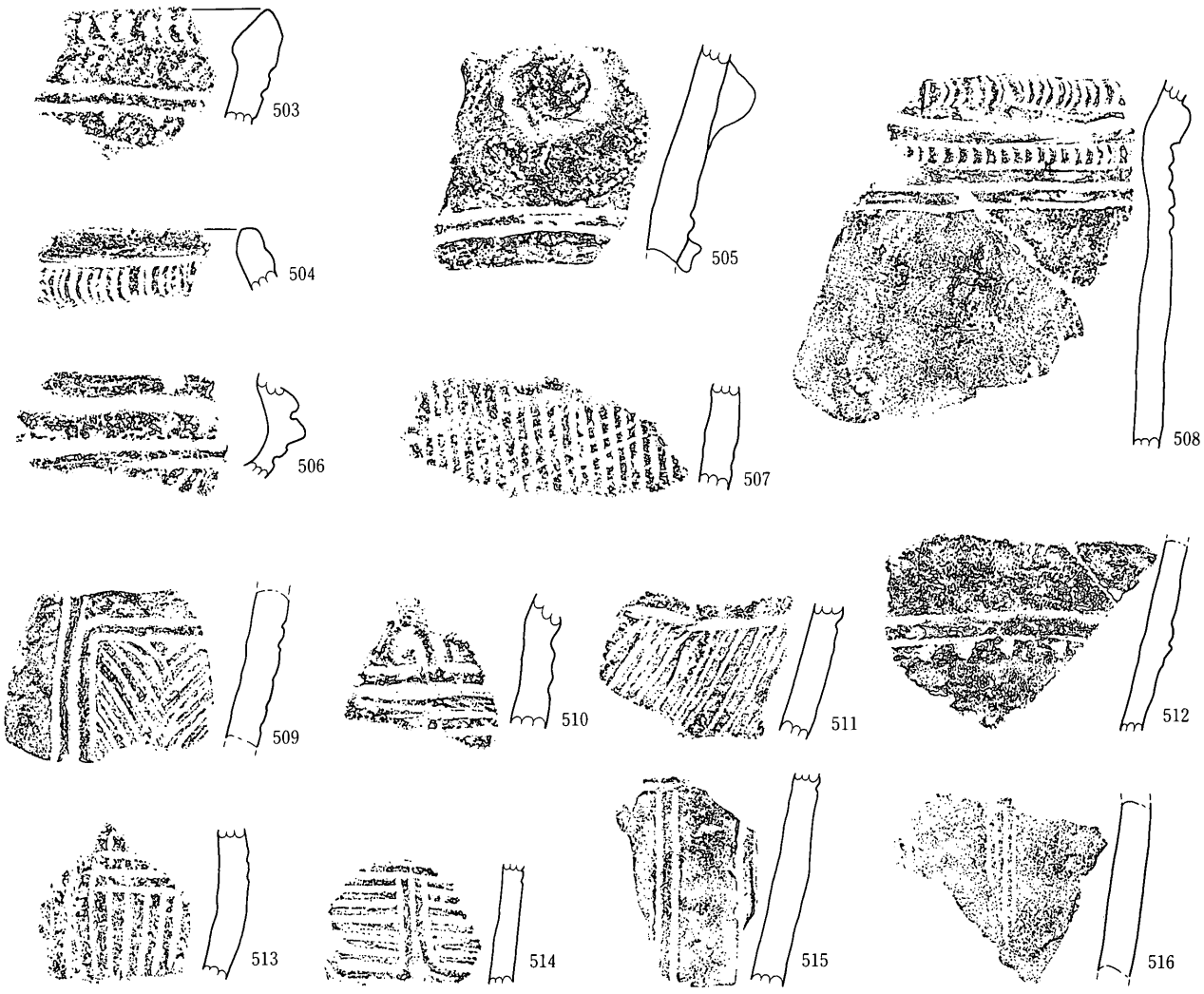
図版40　縄文時代中期初頭～前葉土器(18)

SB110



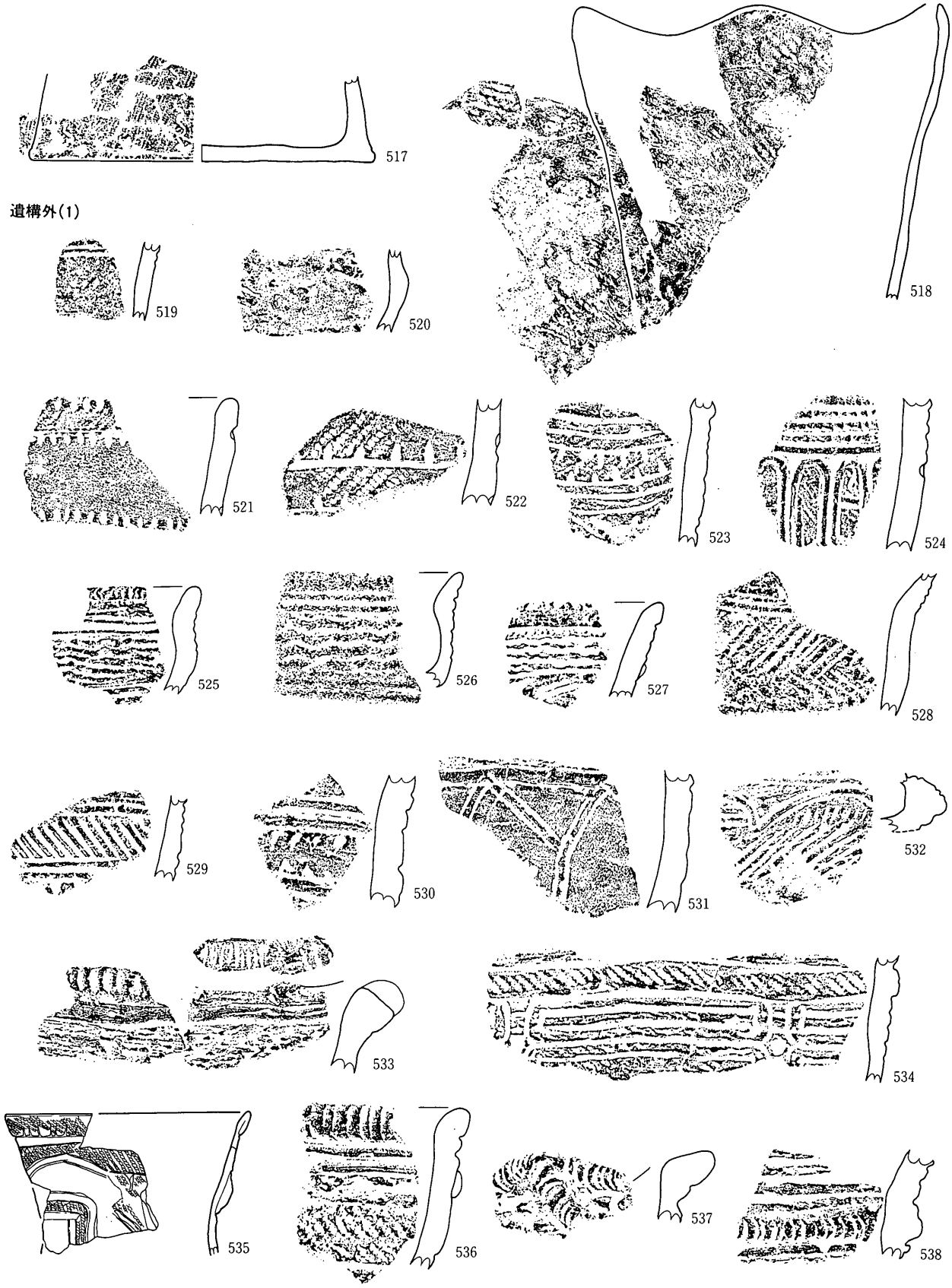
SB137

0　(1：2)　5cm



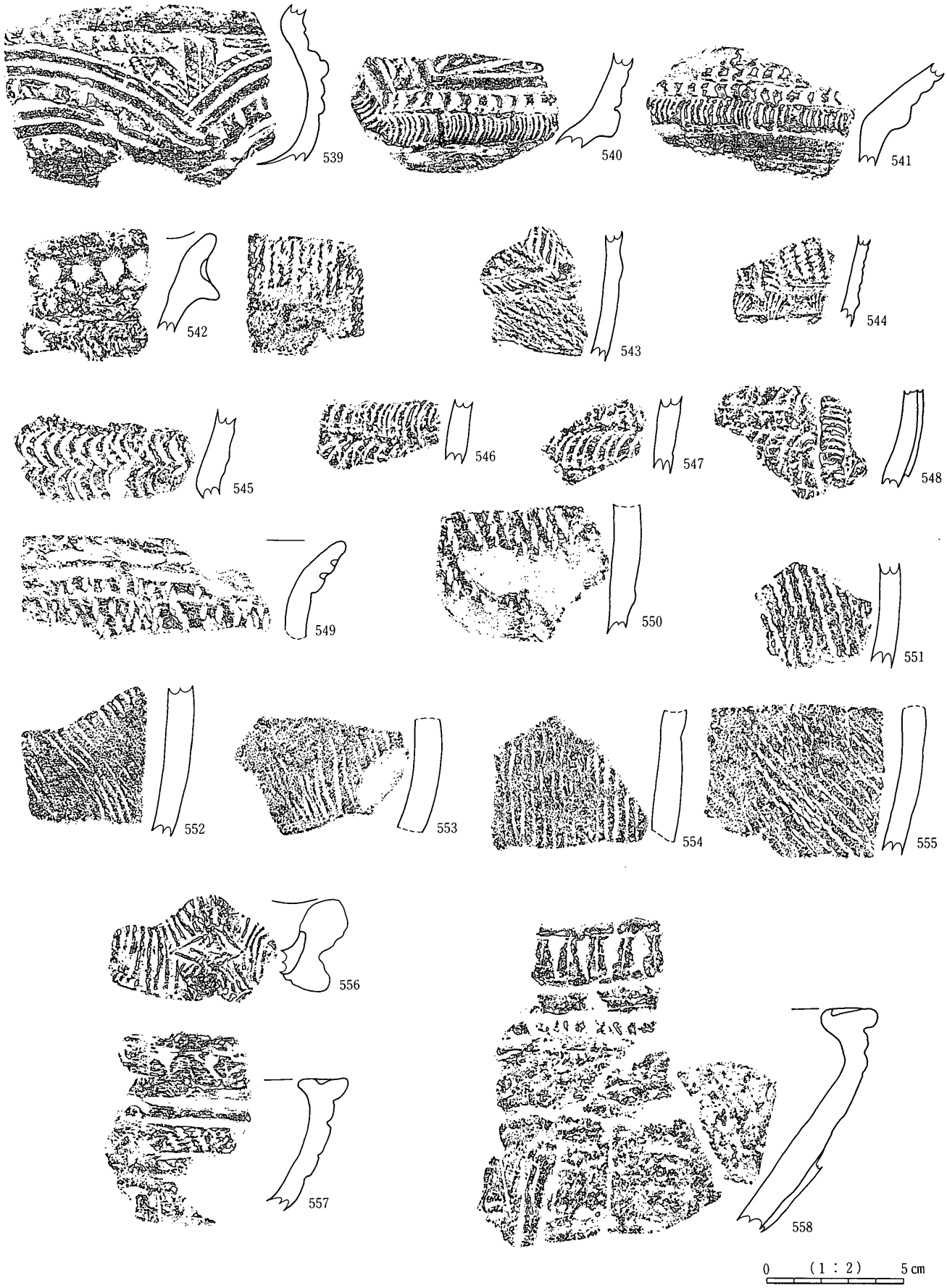
SK1268

SK1285

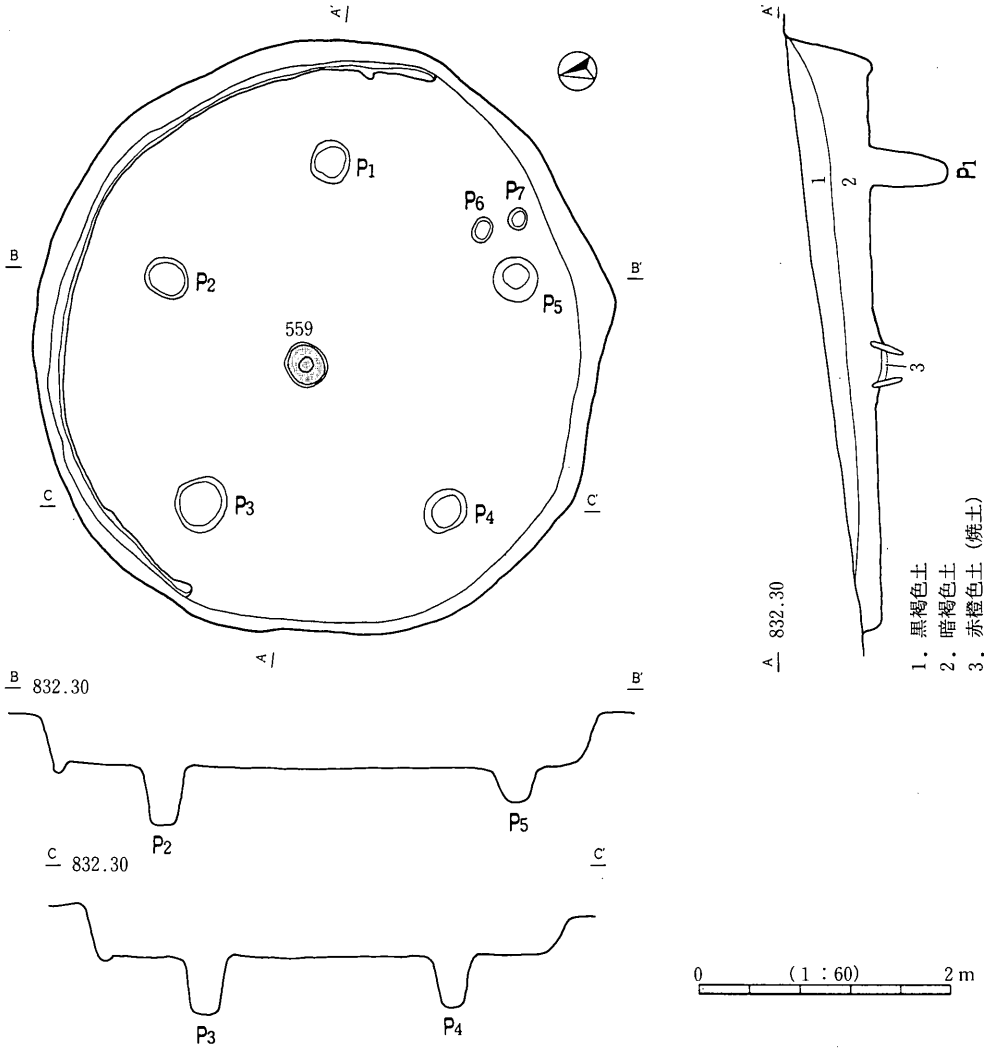


図版42　縄文時代中期初頭～前葉土器(20)

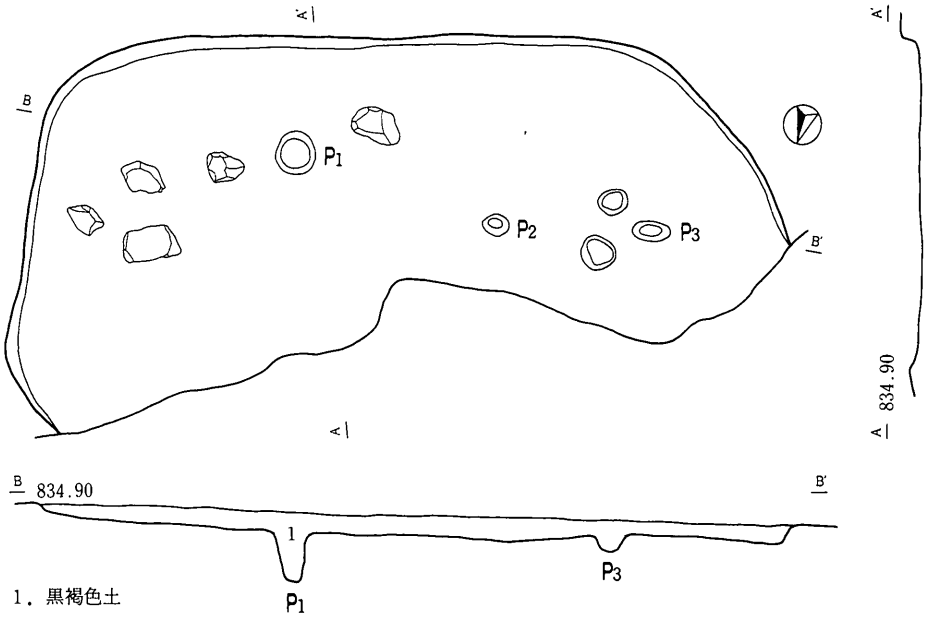
遺構外(2)



SB144

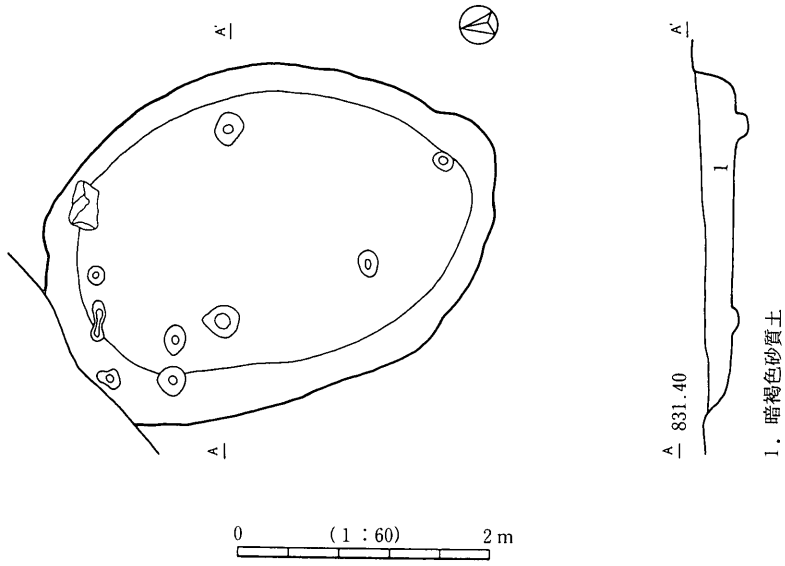

A
A'
B
B'
C
C'
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
559
832.30
1
2
3
1．黒褐色土
2．暗褐色土
3．赤橙色土（焼土）
0
（1：60）
2 m

SB99

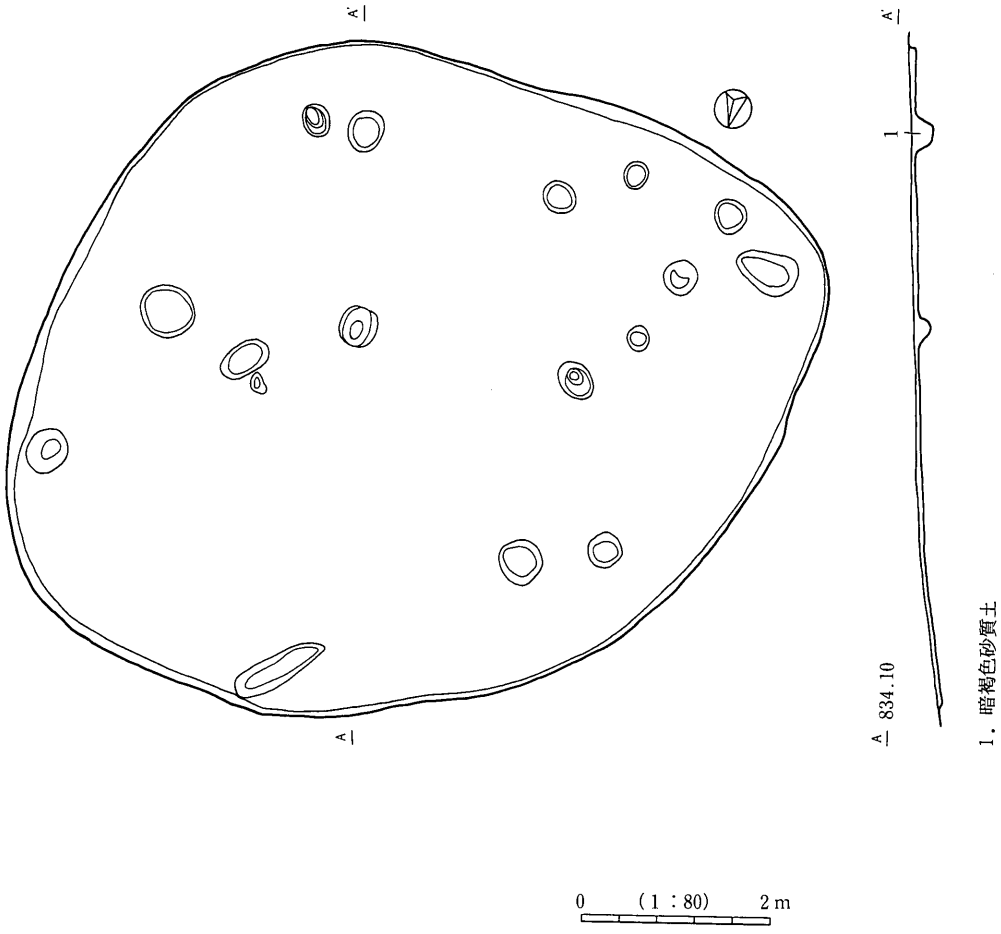

A
A'
B
B'
P1
P2
P3
834.90
1
1．黒褐色土

図版44　縄文時代中期中葉遺構図（2）

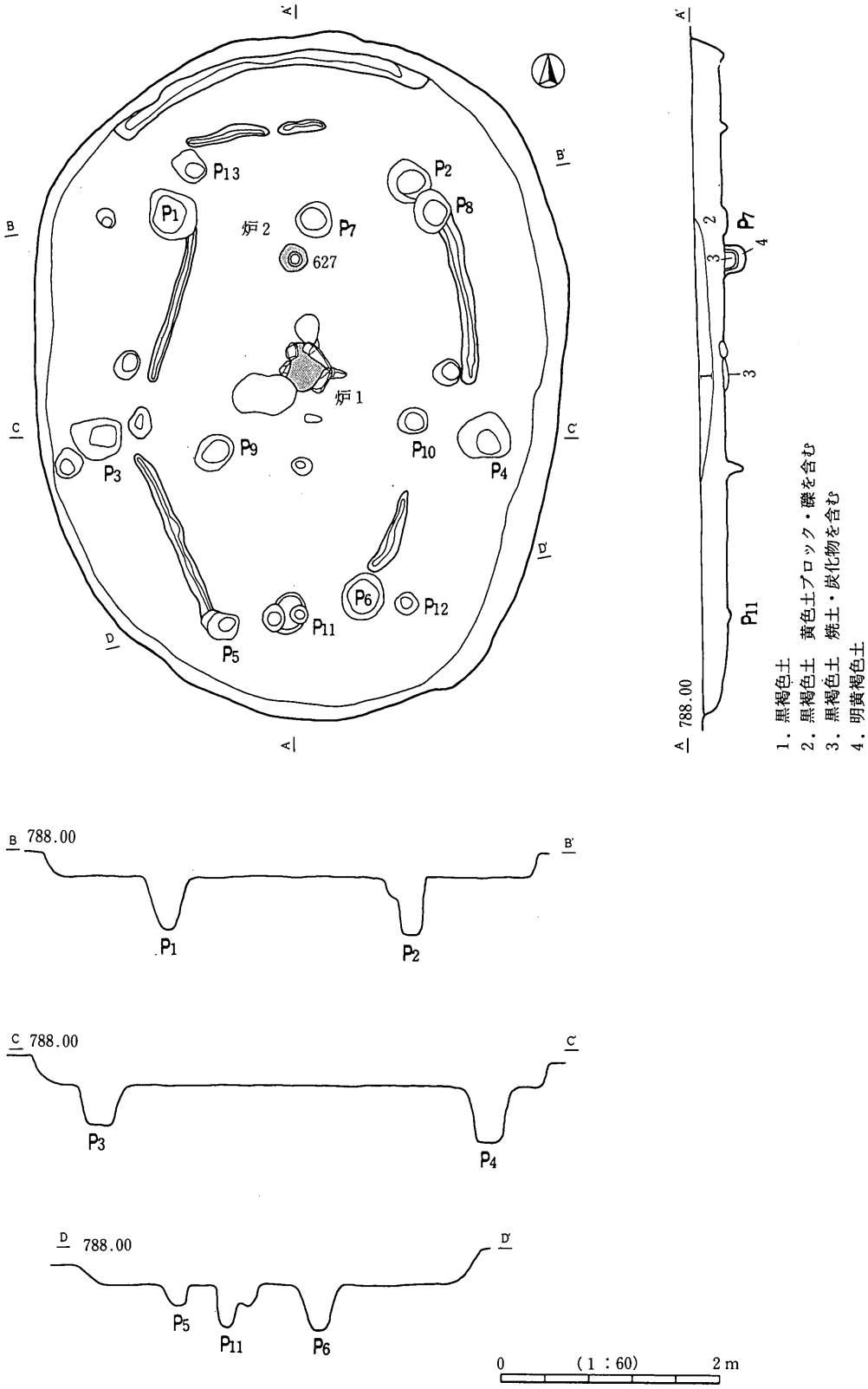
SK1361



SX8

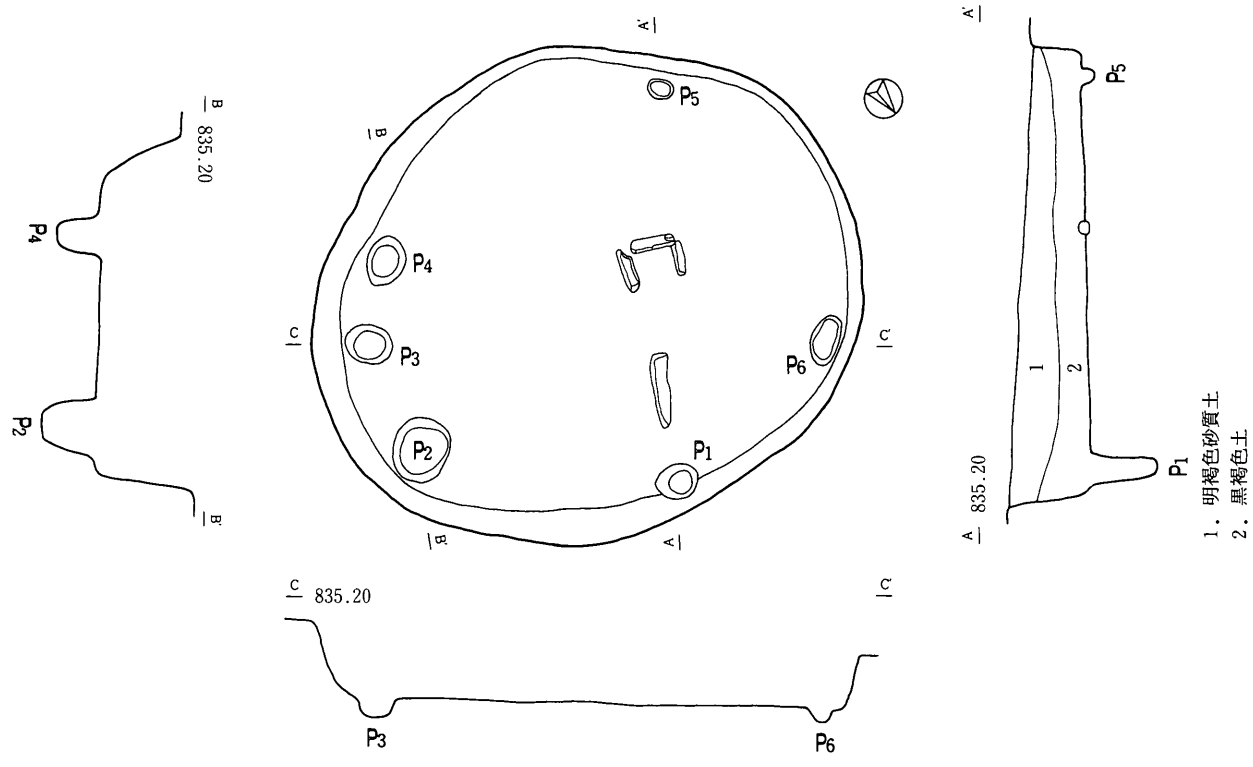


SB35

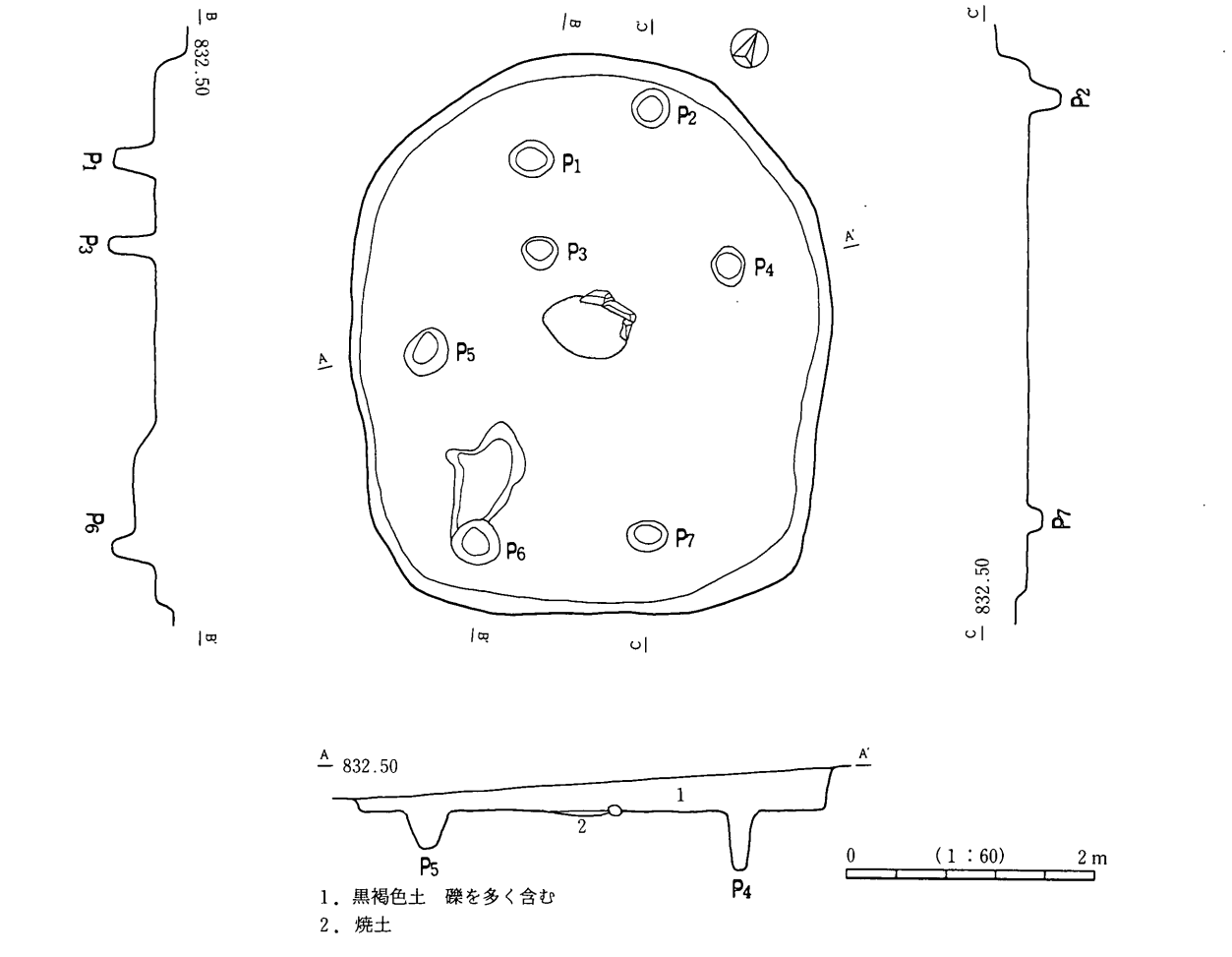

A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
炉1
炉2
627
788.00
1. 黒褐色土
2. 黒褐色土　黄色土ブロック・礫を含む
3. 黒褐色土　焼土・炭化物を含む
4. 明黄褐色土
0
(1：60)
2m

図版46　縄文時代中期中葉遺構図（4）

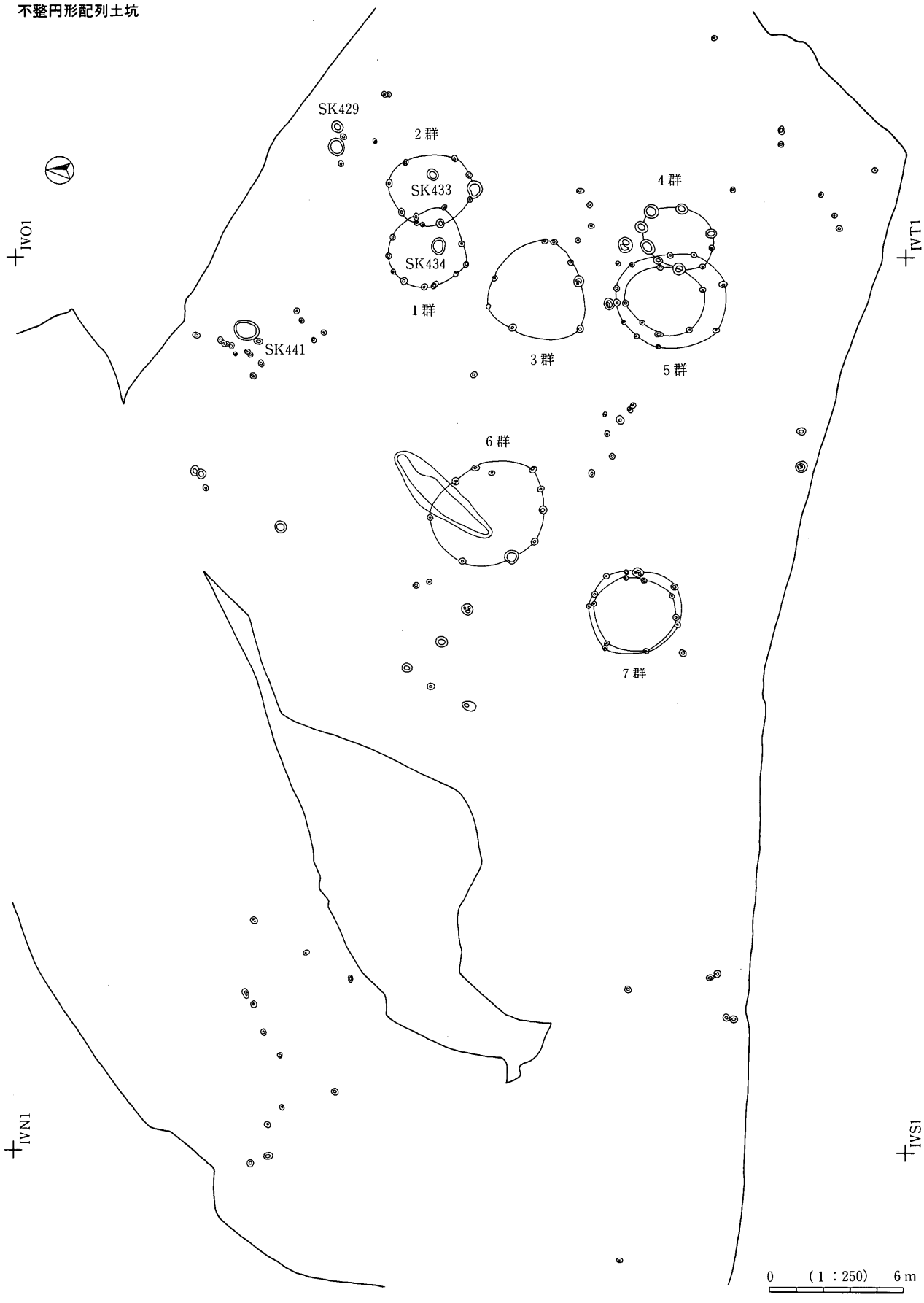
SB145



SB123

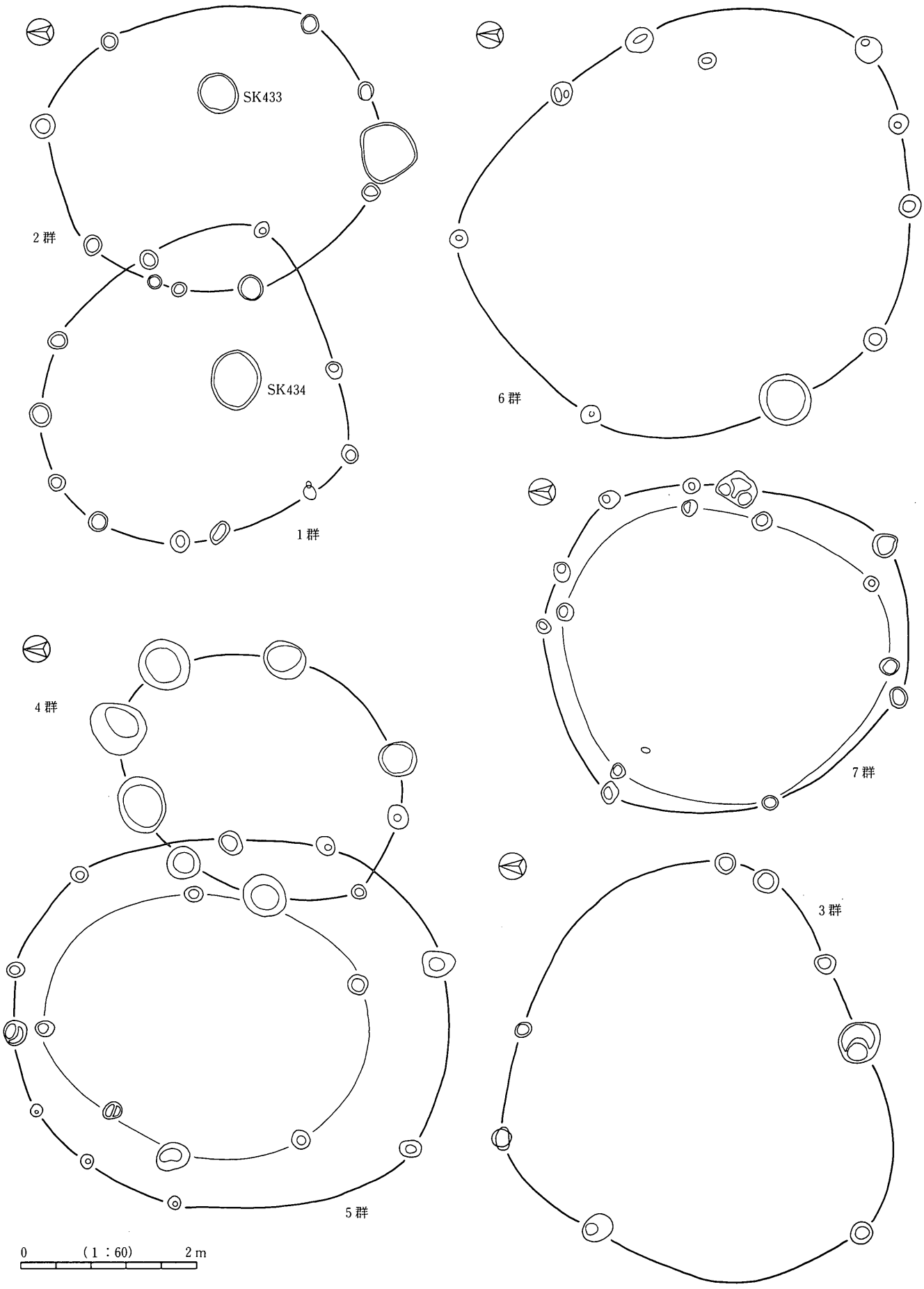


A2地区第2検出面
不整円形配列土坑

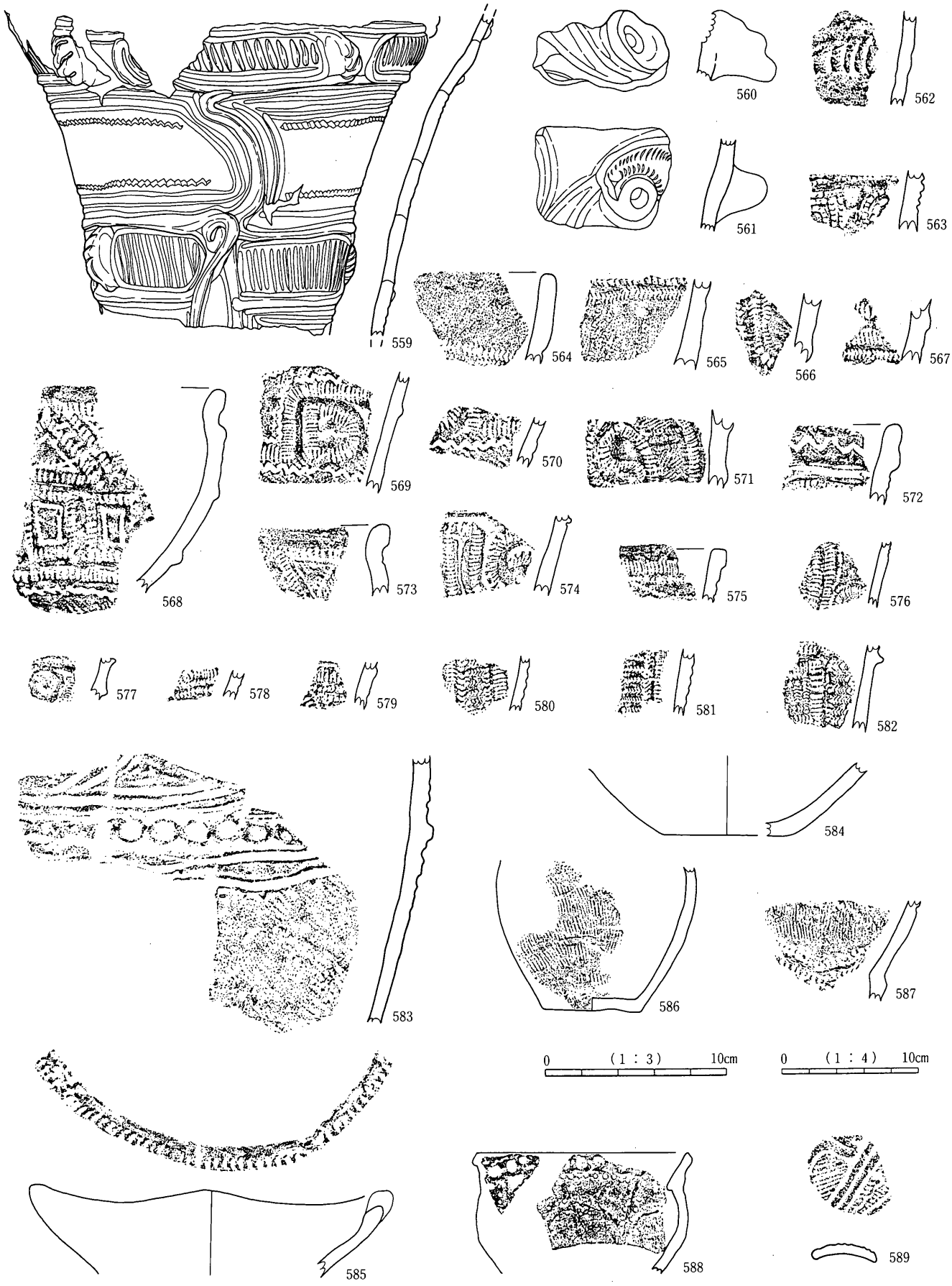


図版48　縄文時代中期中葉遺構図（6）

不整円形配列土坑

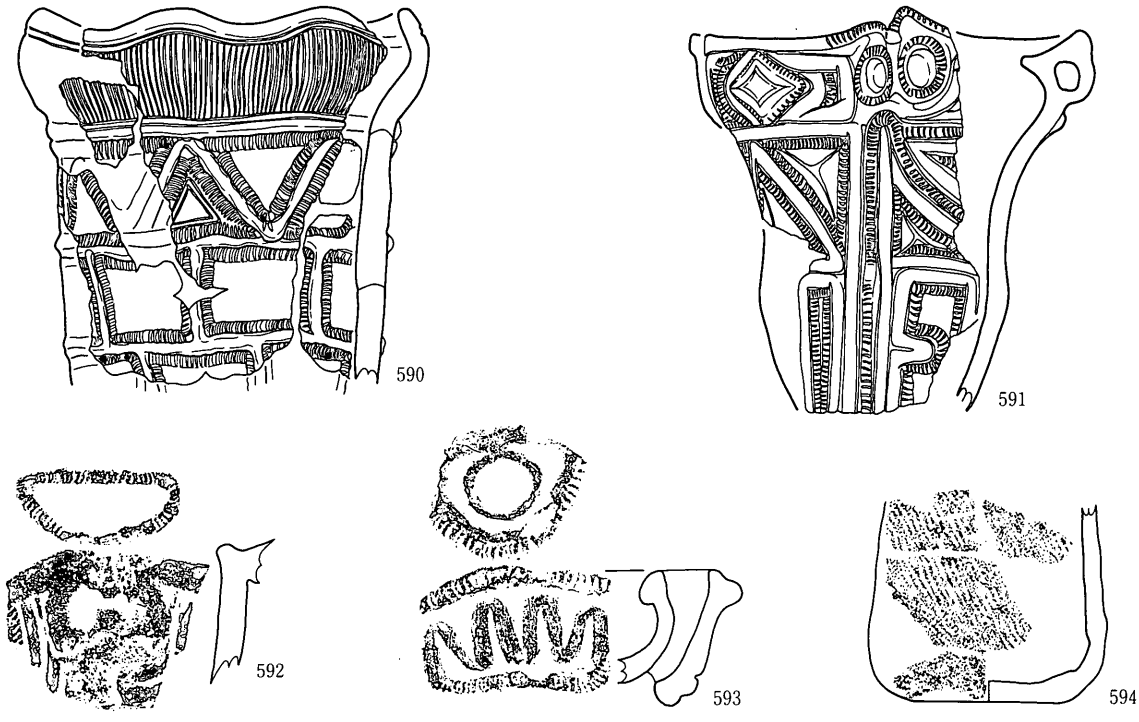


SB144

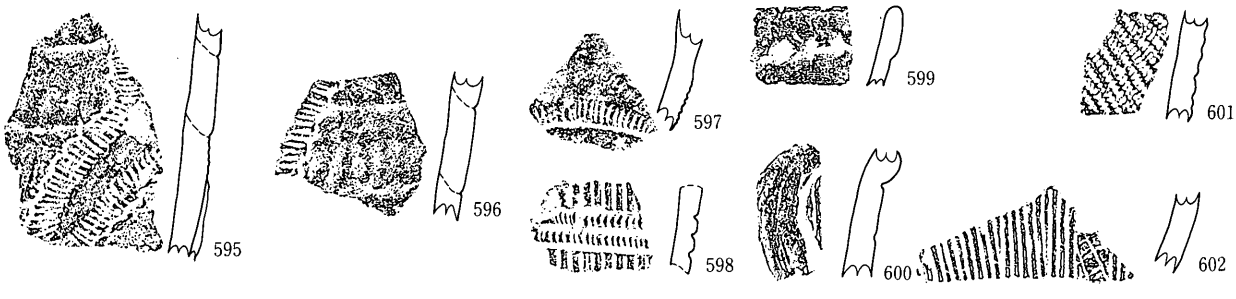

559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
0 (1：3) 10cm
0 (1：4) 10cm

図版50　縄文時代中期中葉土器（2）

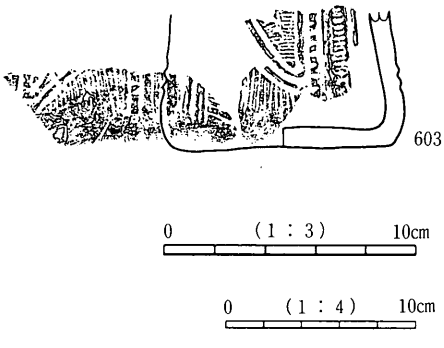
SB99



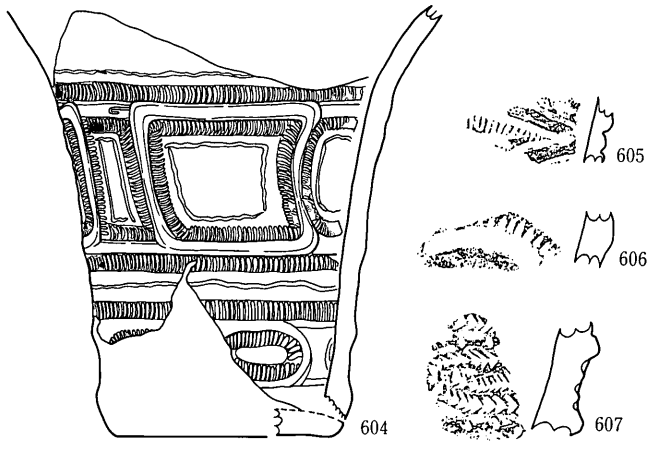
SK1361



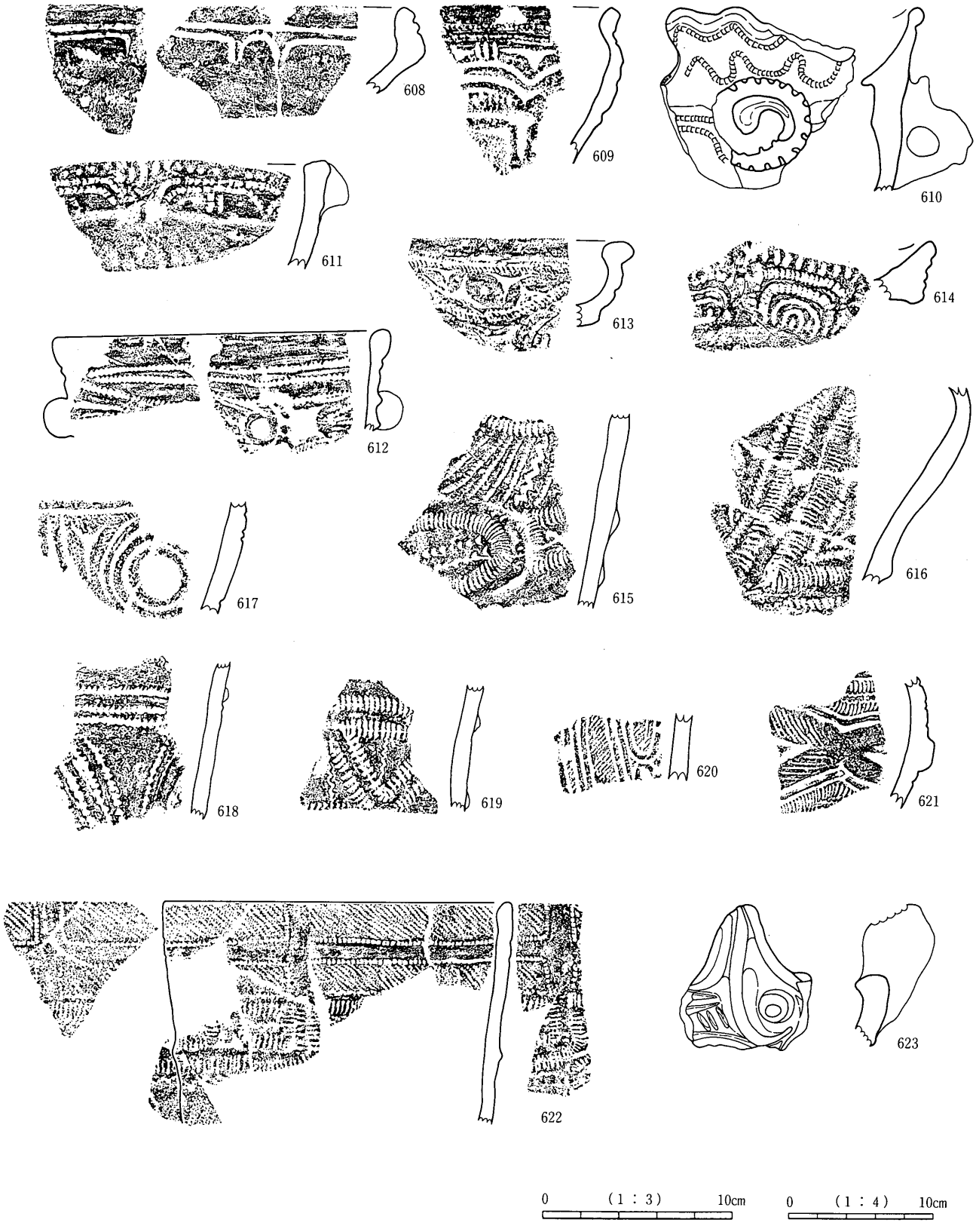
SK1320



SX8

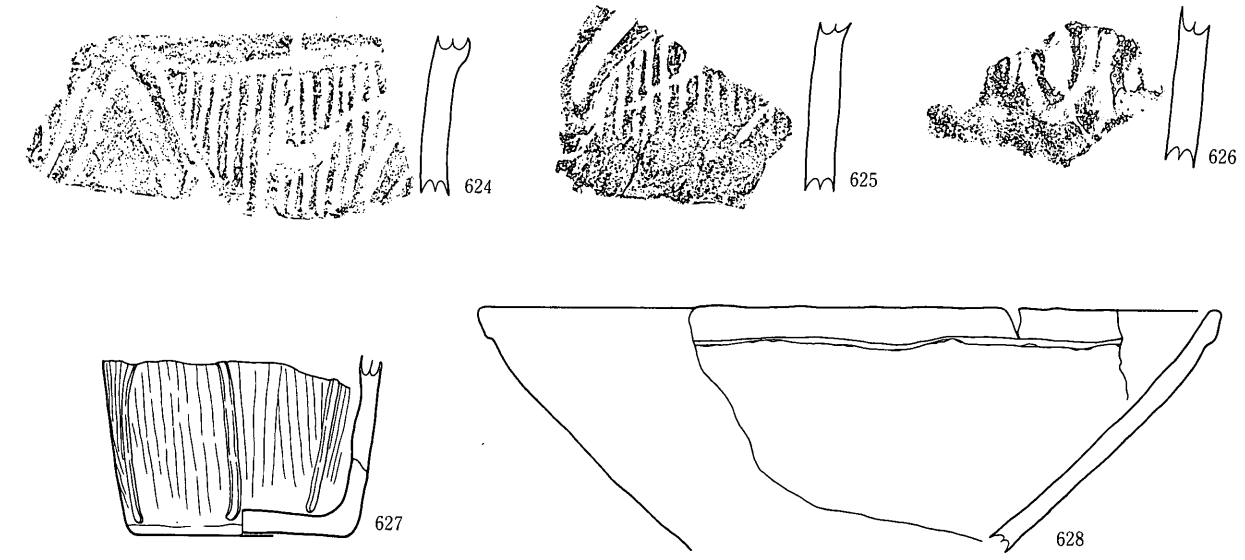


遺構外

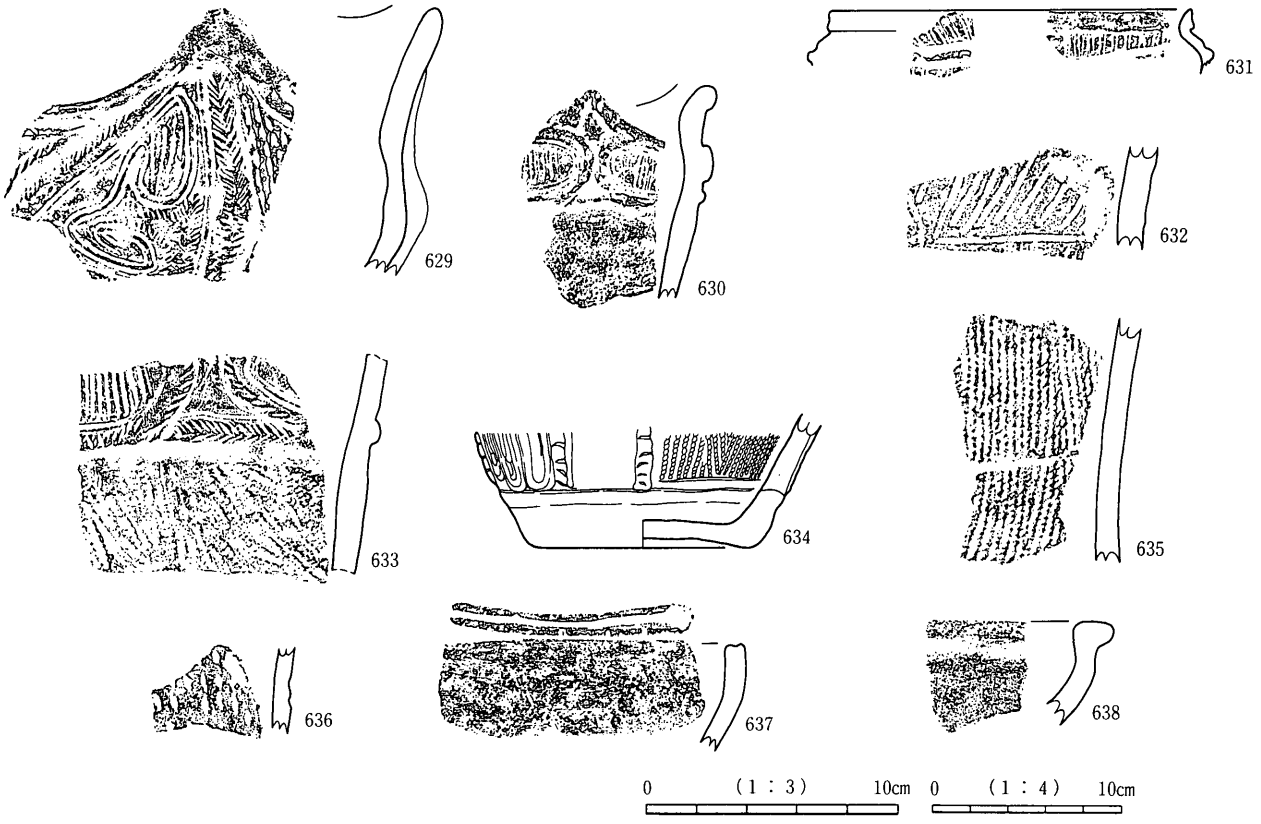

608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
0 (1：3) 10cm
0 (1：4) 10cm

図版52　縄文時代中期中葉土器（4）

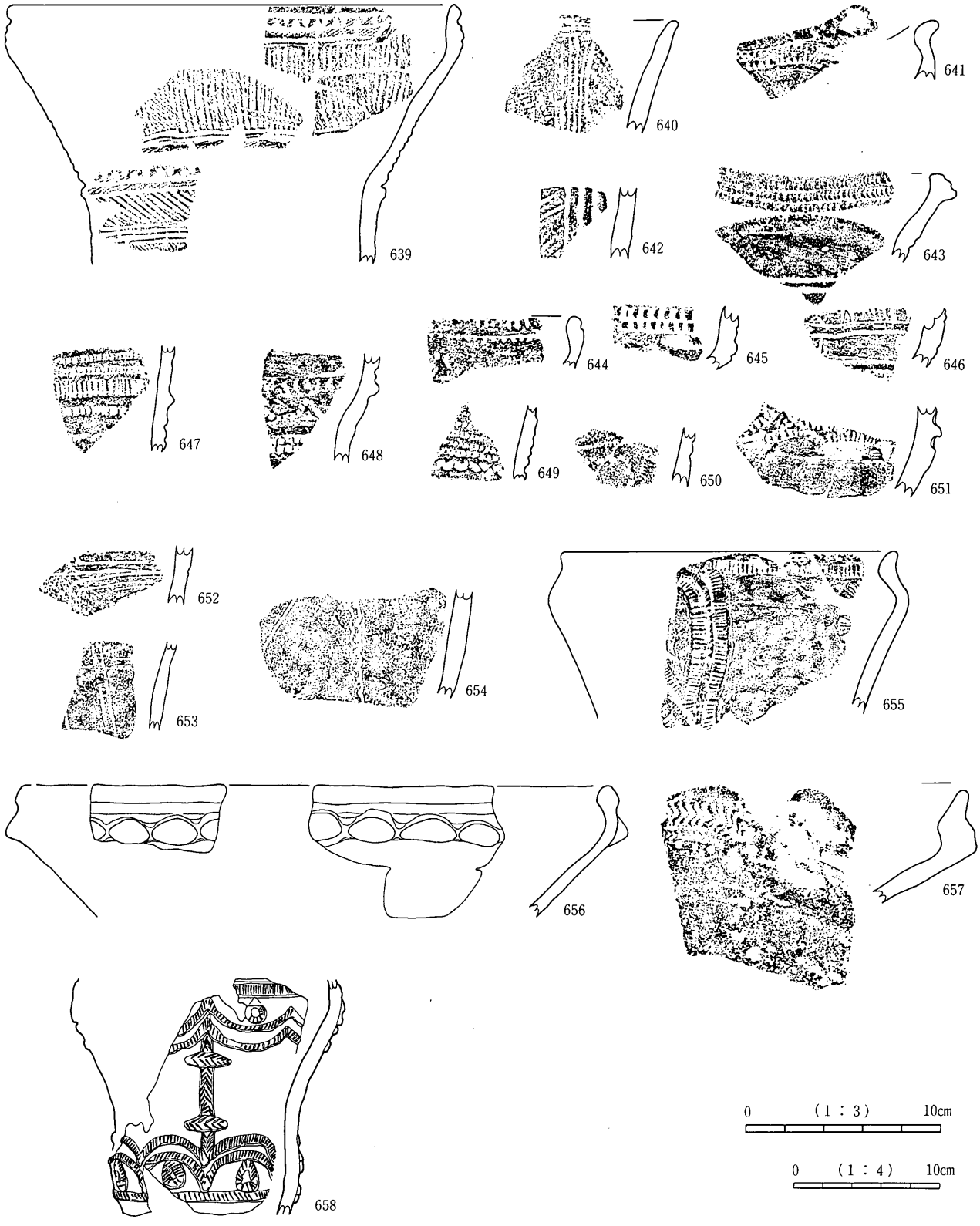
SB35



SB145



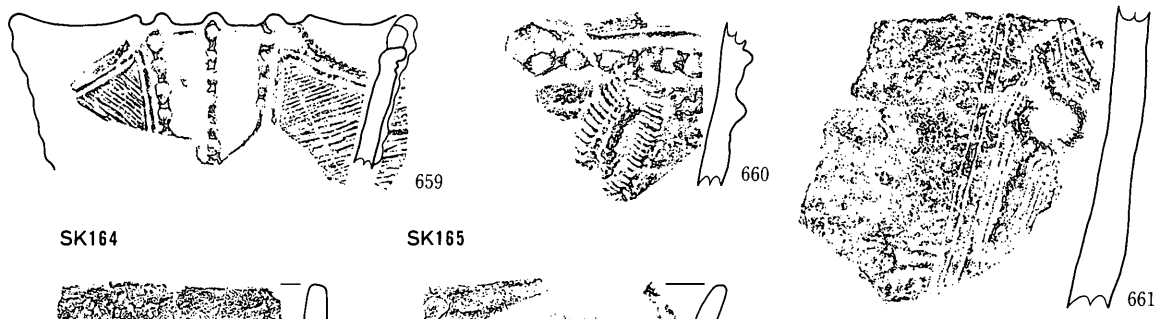
SB123


639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
0 (1：3) 10cm
0 (1：4) 10cm

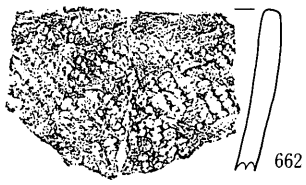
図版54　縄文時代中期中葉土器（6）

A2地区第1検出面

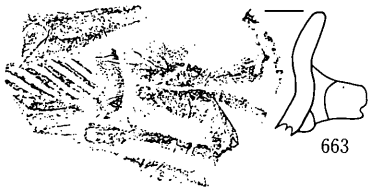
SK139



SK164

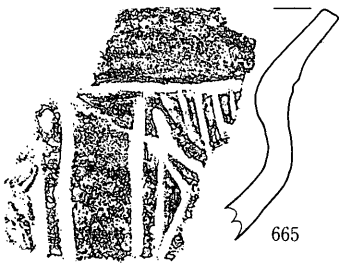


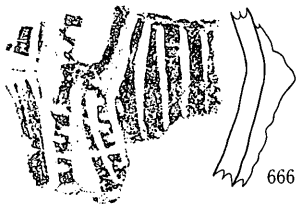
SK165



SK179

NR6





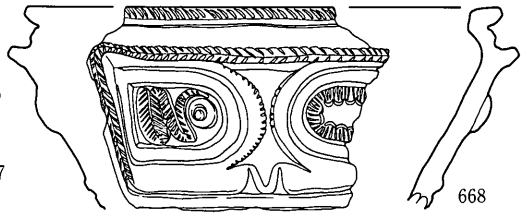
0　（1：3）　10cm

0　（1：4）　10cm

A2地区第2検出面

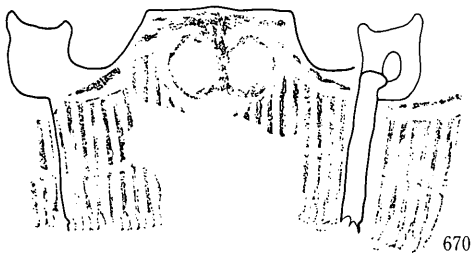
SK429

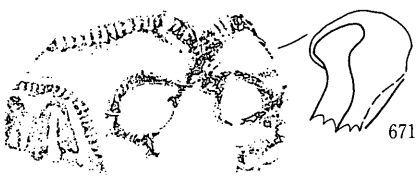
SK441

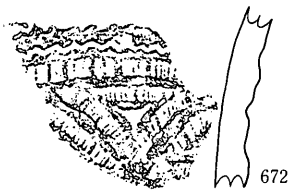


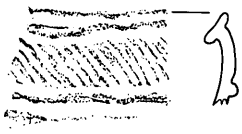
SK433

A2地区第2検出面遺構外

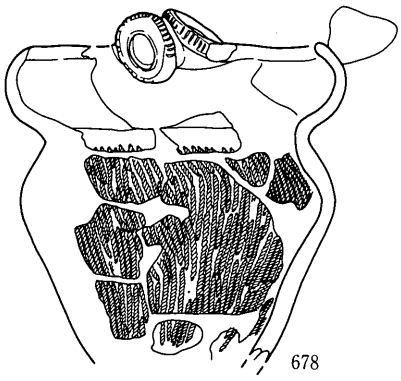


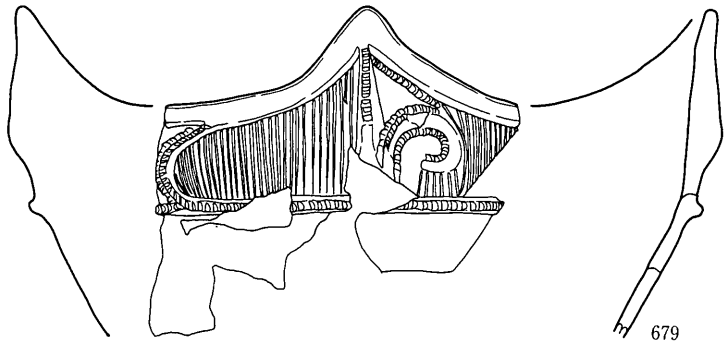


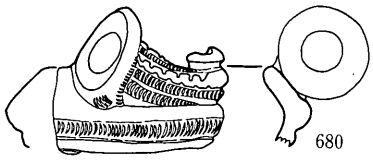


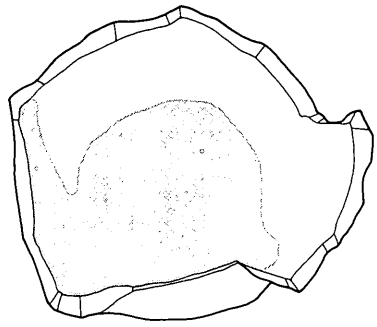


遺構外


678

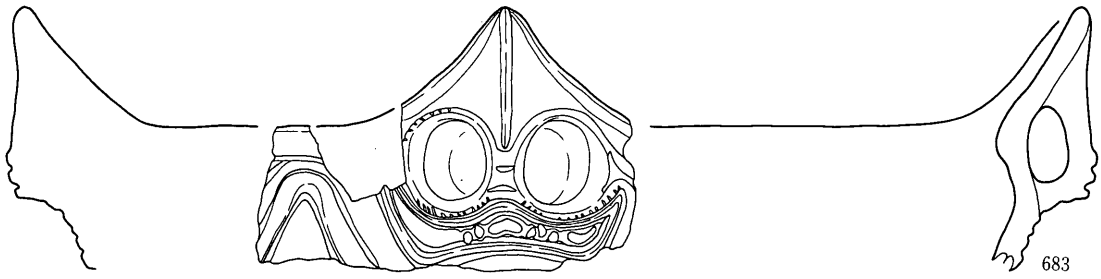

679

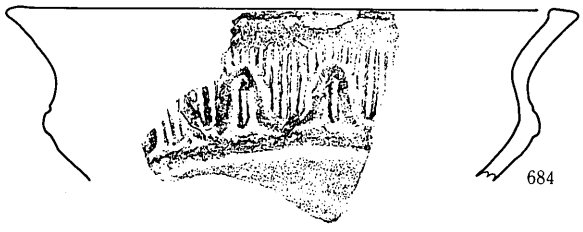

680

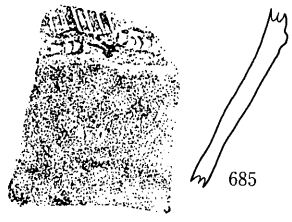


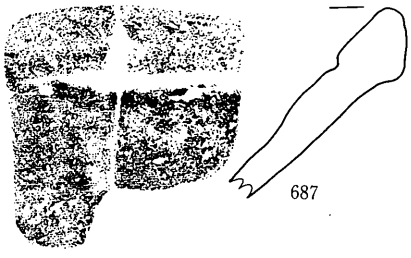
681

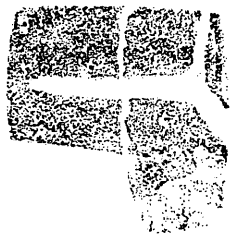
682

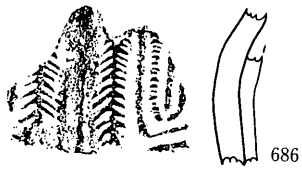

683


684


685


687

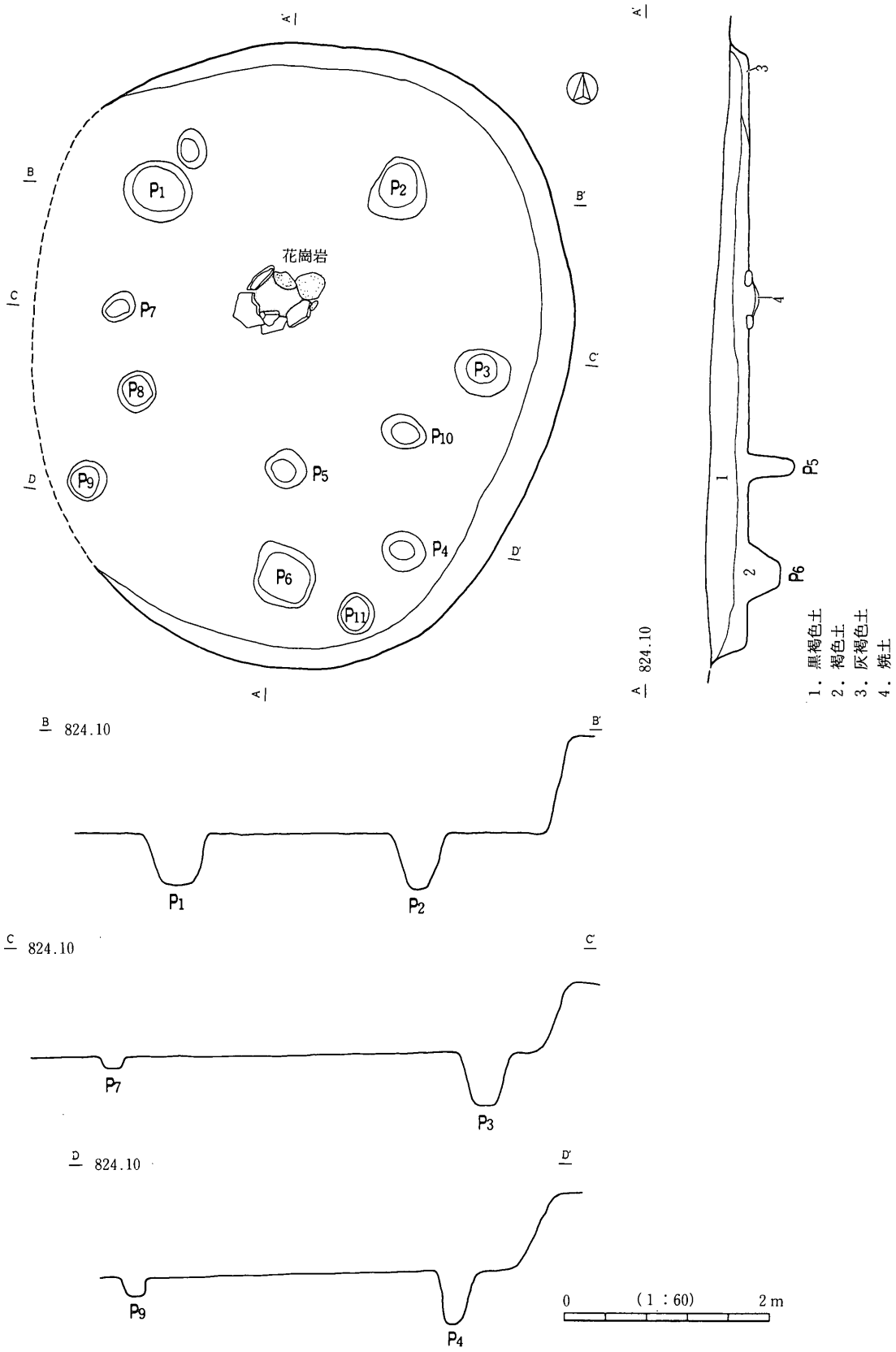



686

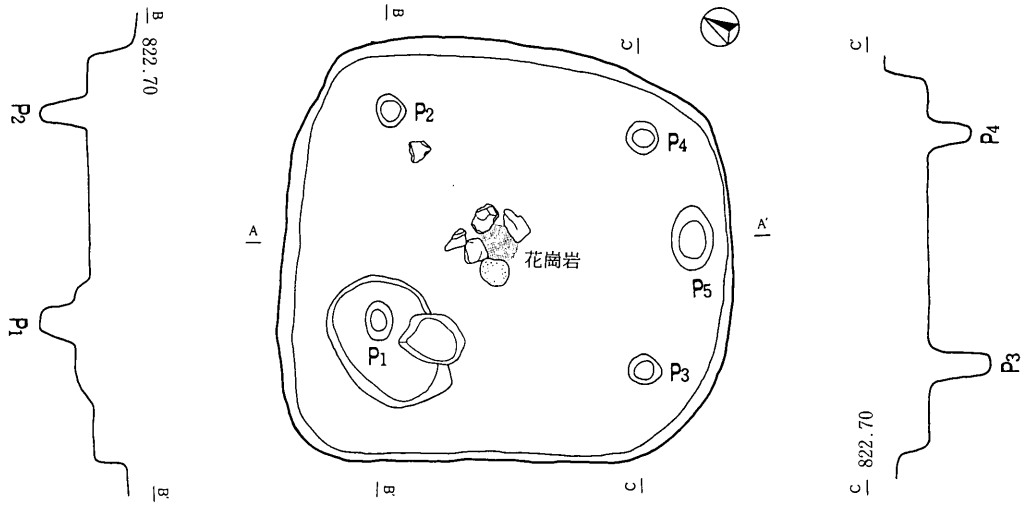
0　（1：3）　10cm　0　（1：4）　10cm

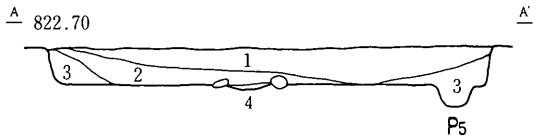
図版56　縄文時代中期後葉Ⅰ期遺構図(1)

SB142



SB143



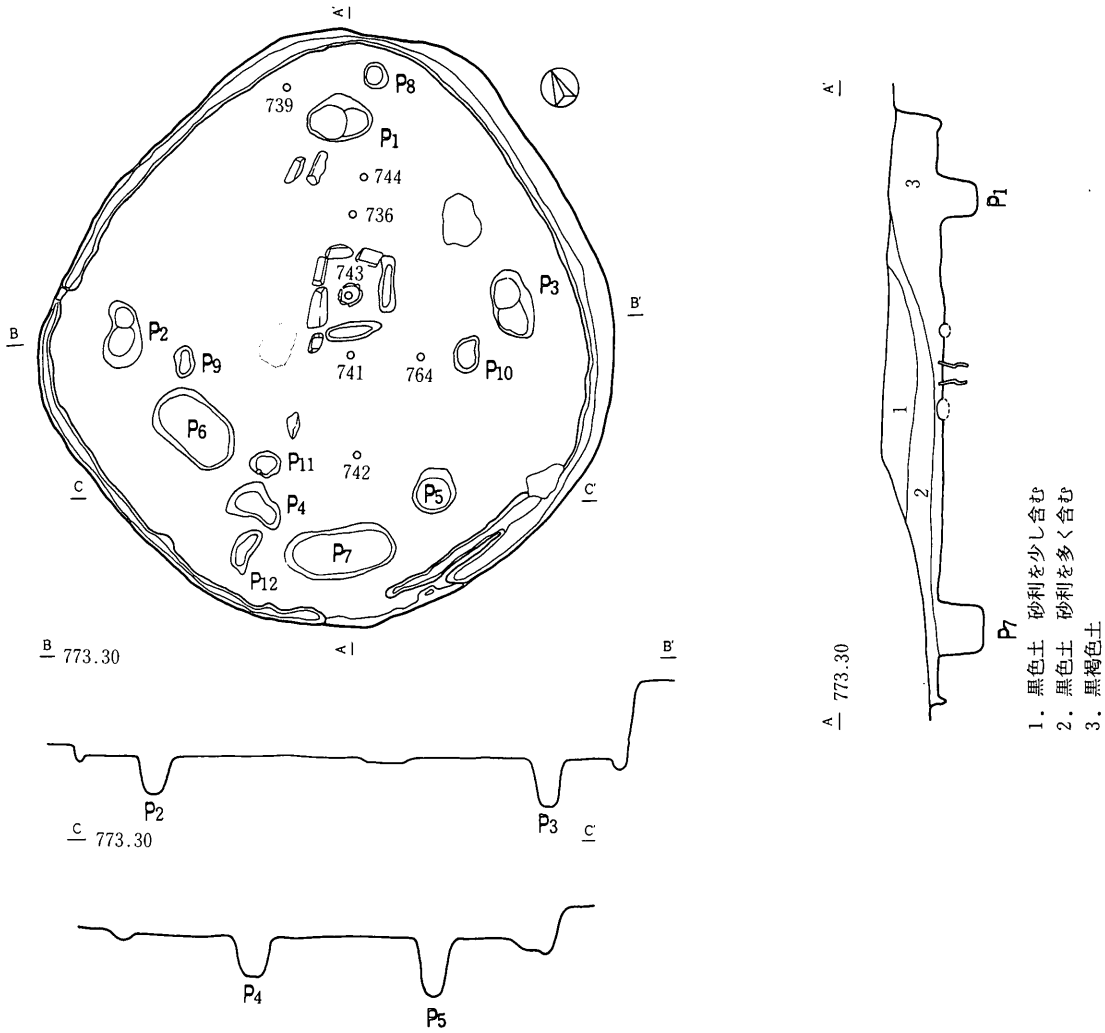


1．黒褐色土　灰黄色ブロックを多く含む
2．茶褐色土　炭化物・焼土を多く含む
3．黒褐色土
4．焼土

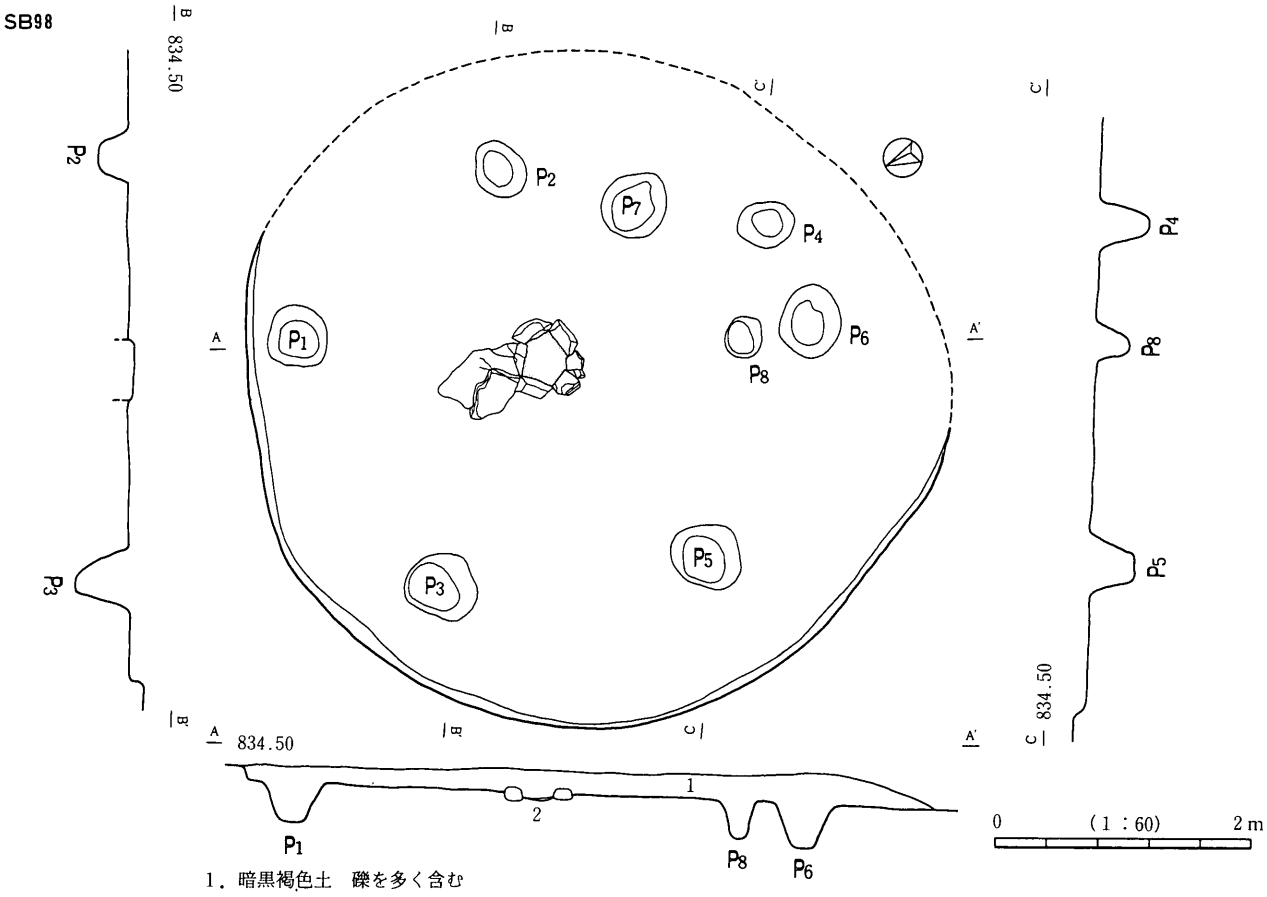
0　(1：60)　2m

図版58　縄文時代中期後葉Ⅰ期遺構図（３）

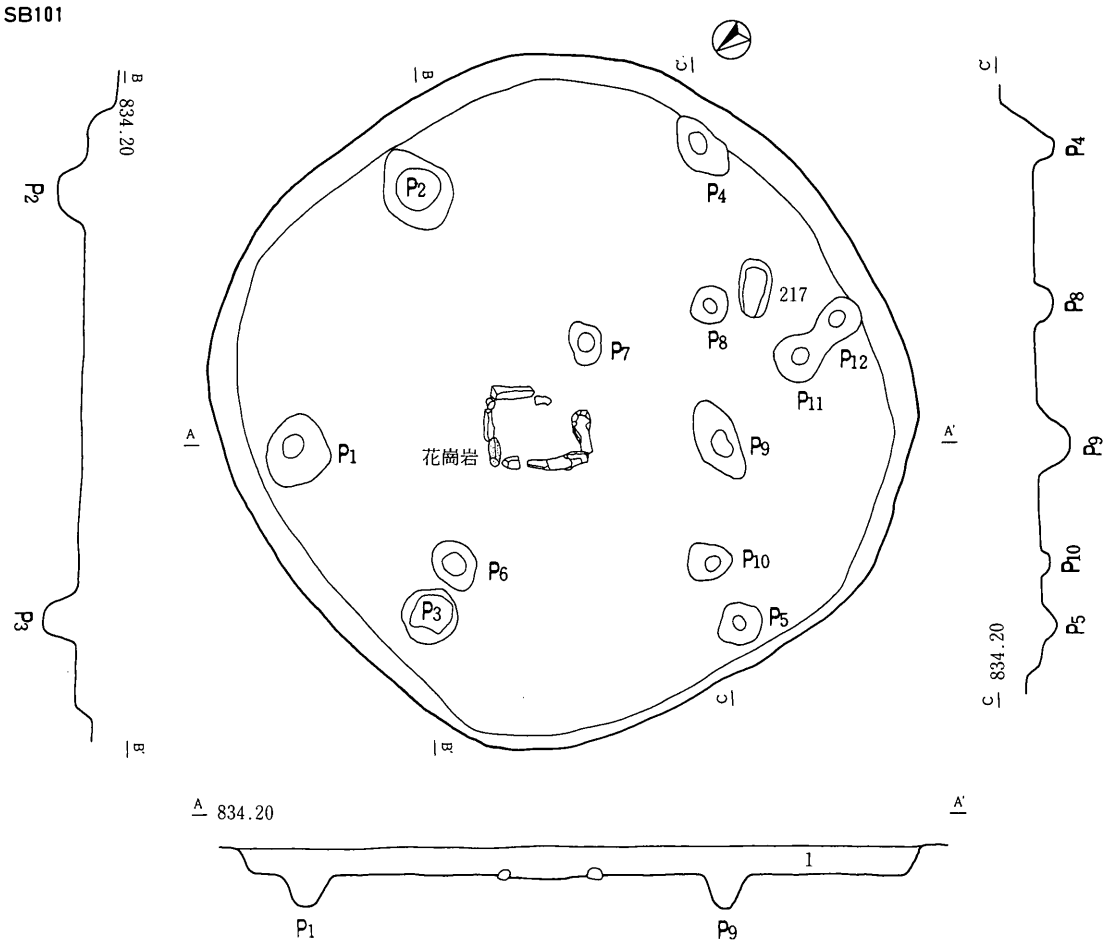
SB94



SB98

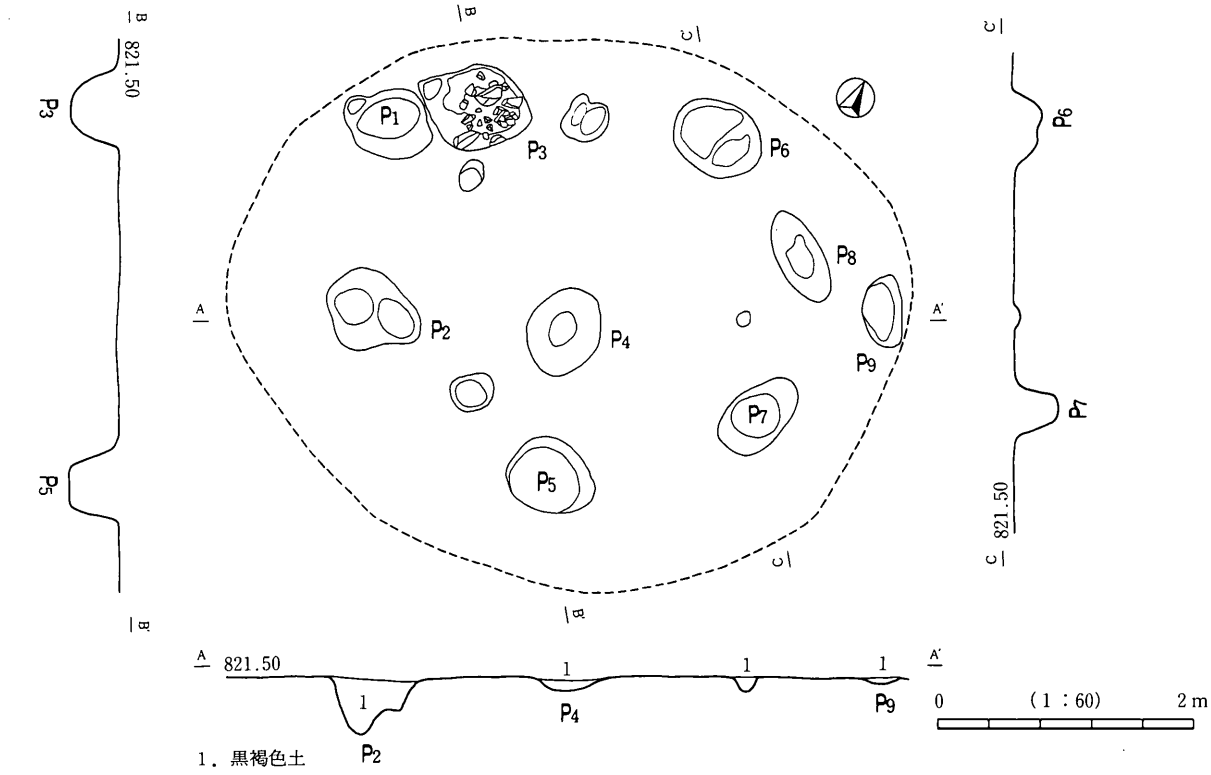


SB101



1．黒褐色土　礫を多く含む

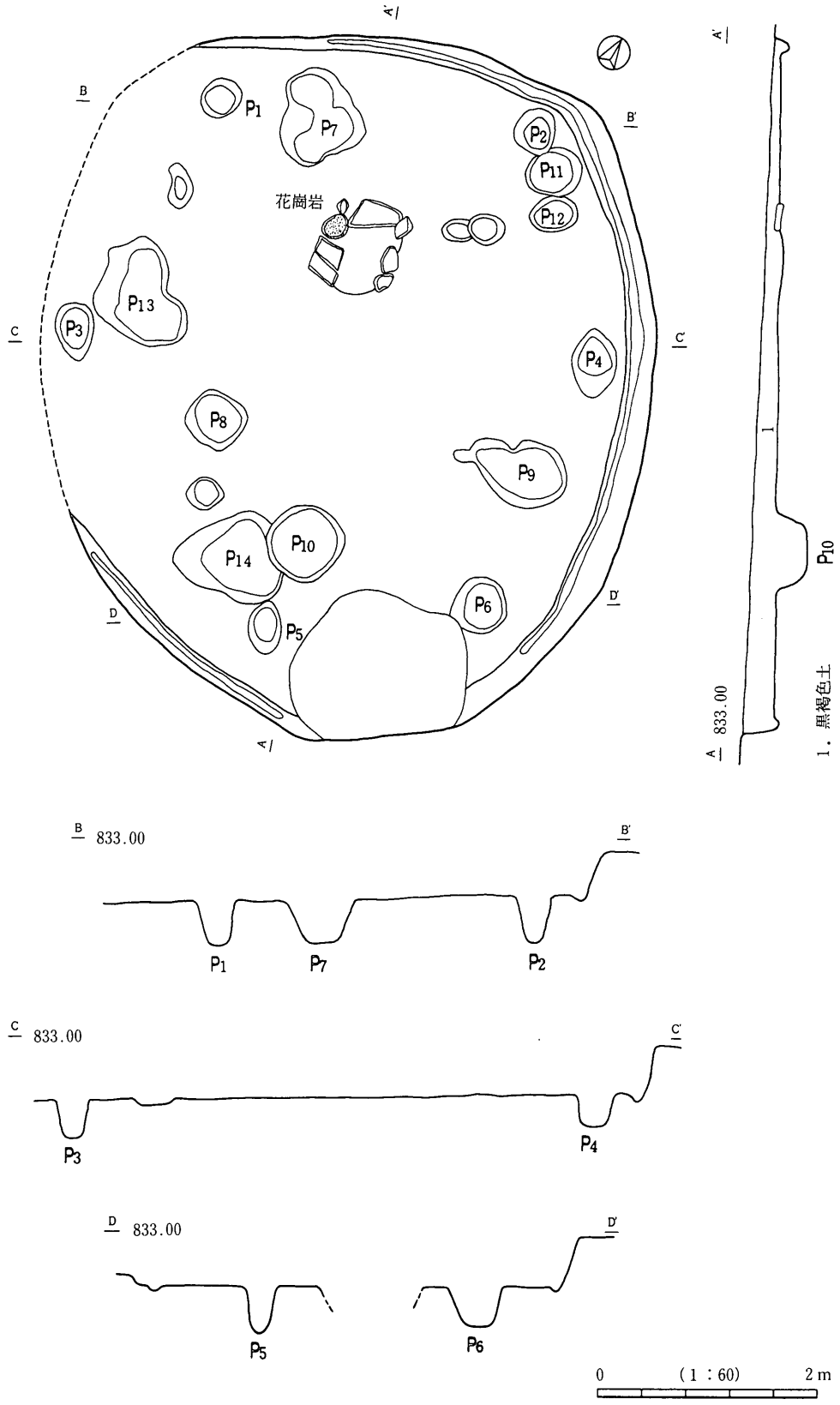
SB106



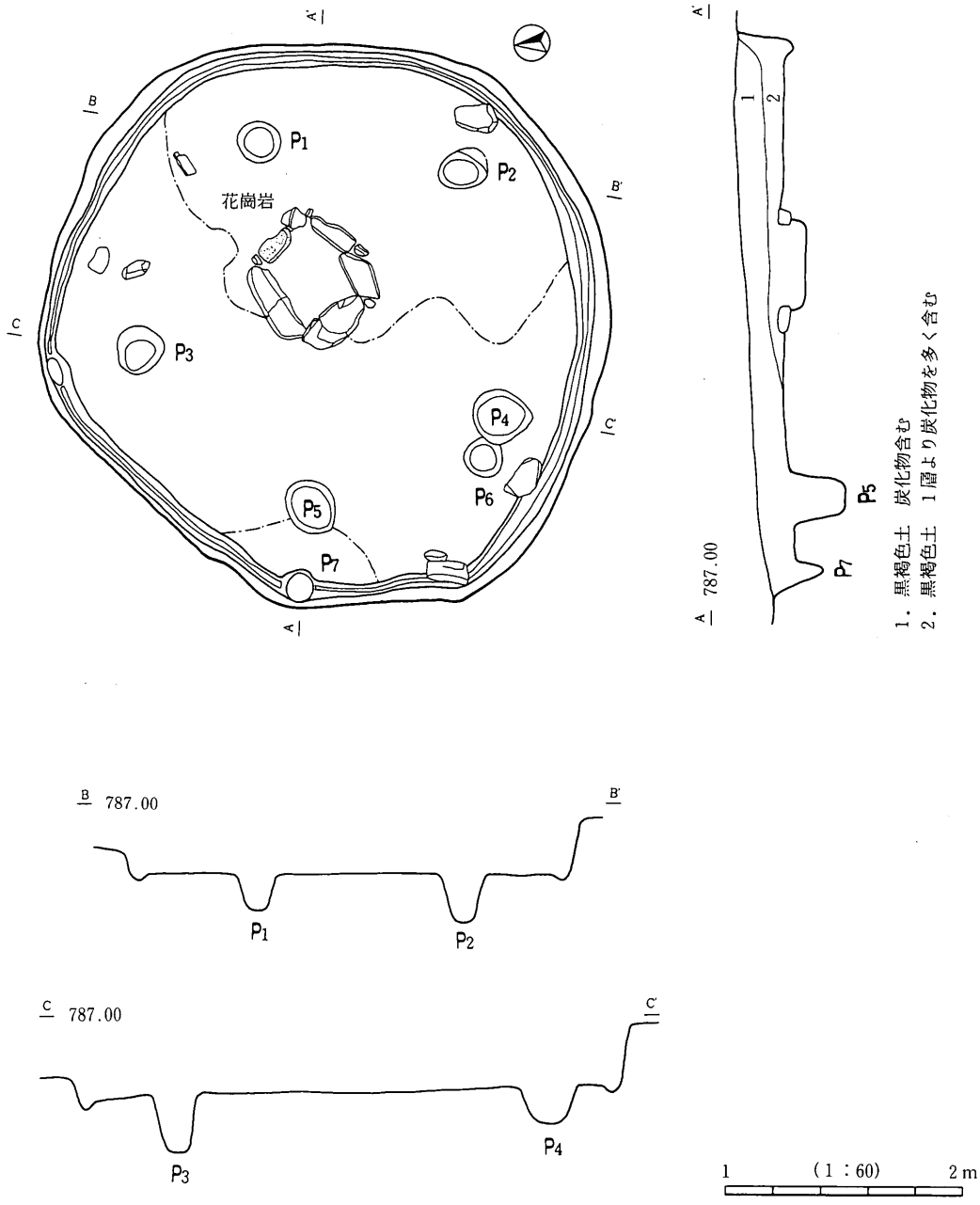
1．黒褐色土

図版60　縄文時代中期後葉Ⅰ期遺構図(5)

SB120

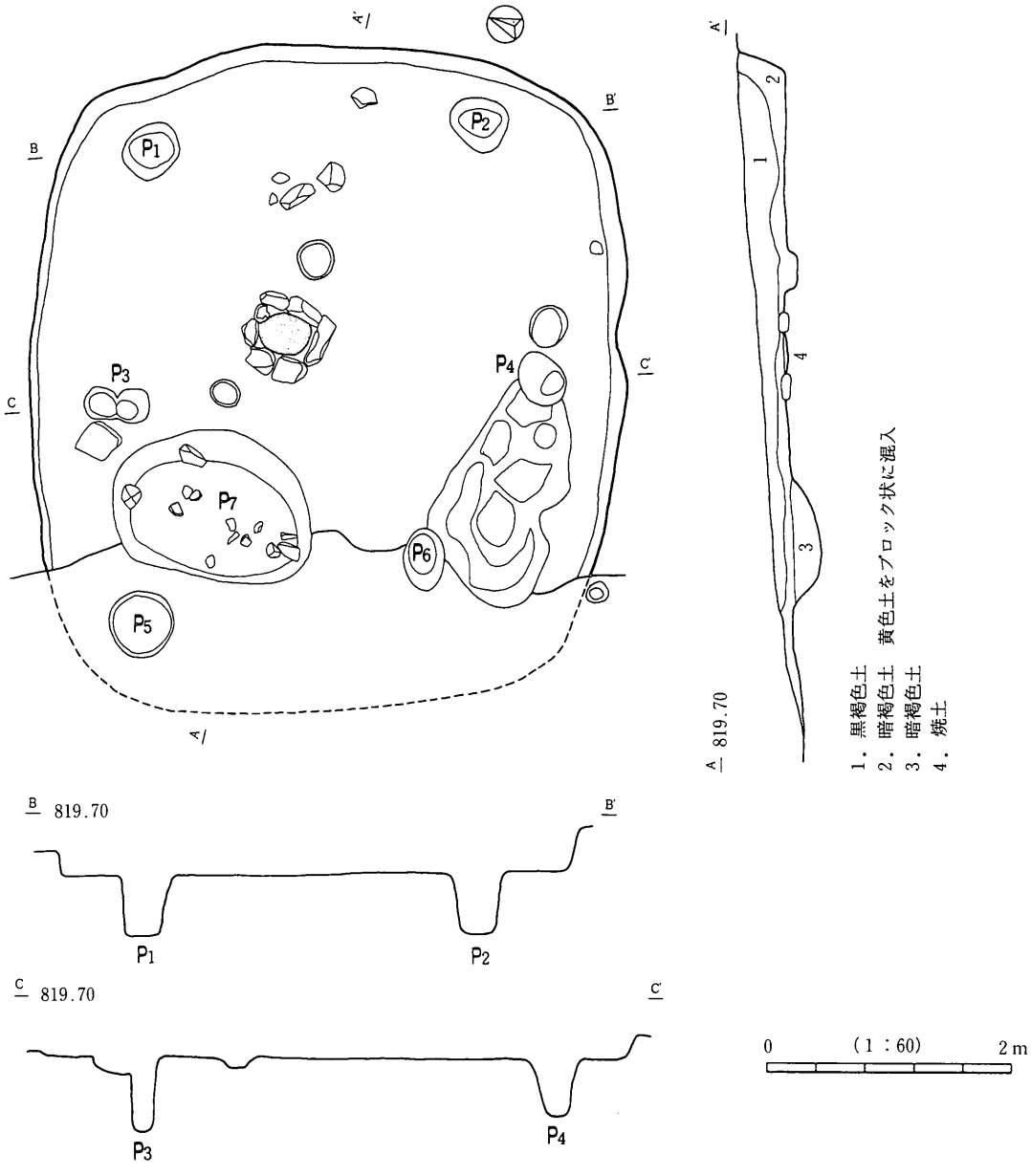


SB57

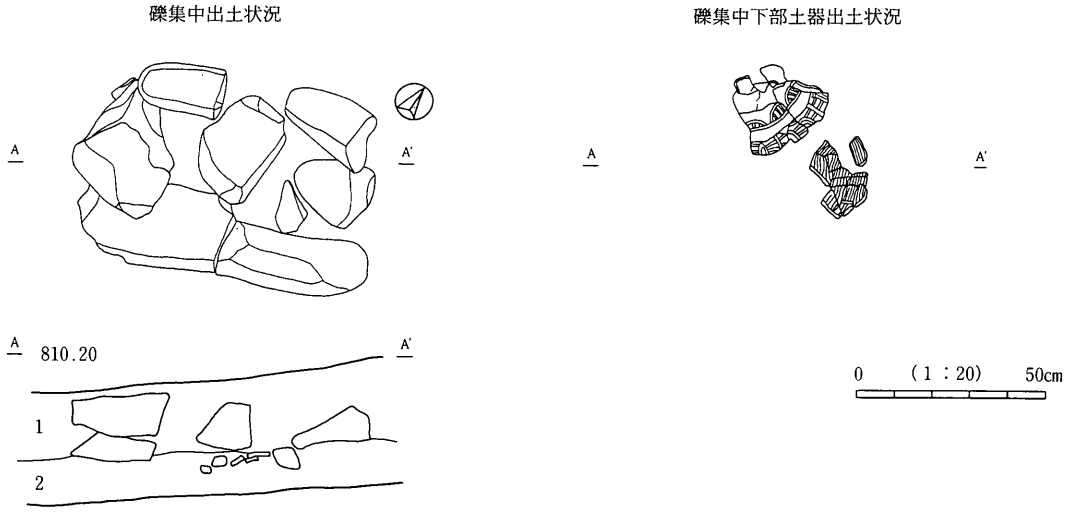

A
A'
B
B'
C
C'
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
花崗岩
787.00
1
2
1．黒褐色土　炭化物含む
2．黒褐色土　1層より炭化物を多く含む
1
(1：60)
2m

図版62　縄文時代中期後葉Ⅰ期遺構図（7）

SB86

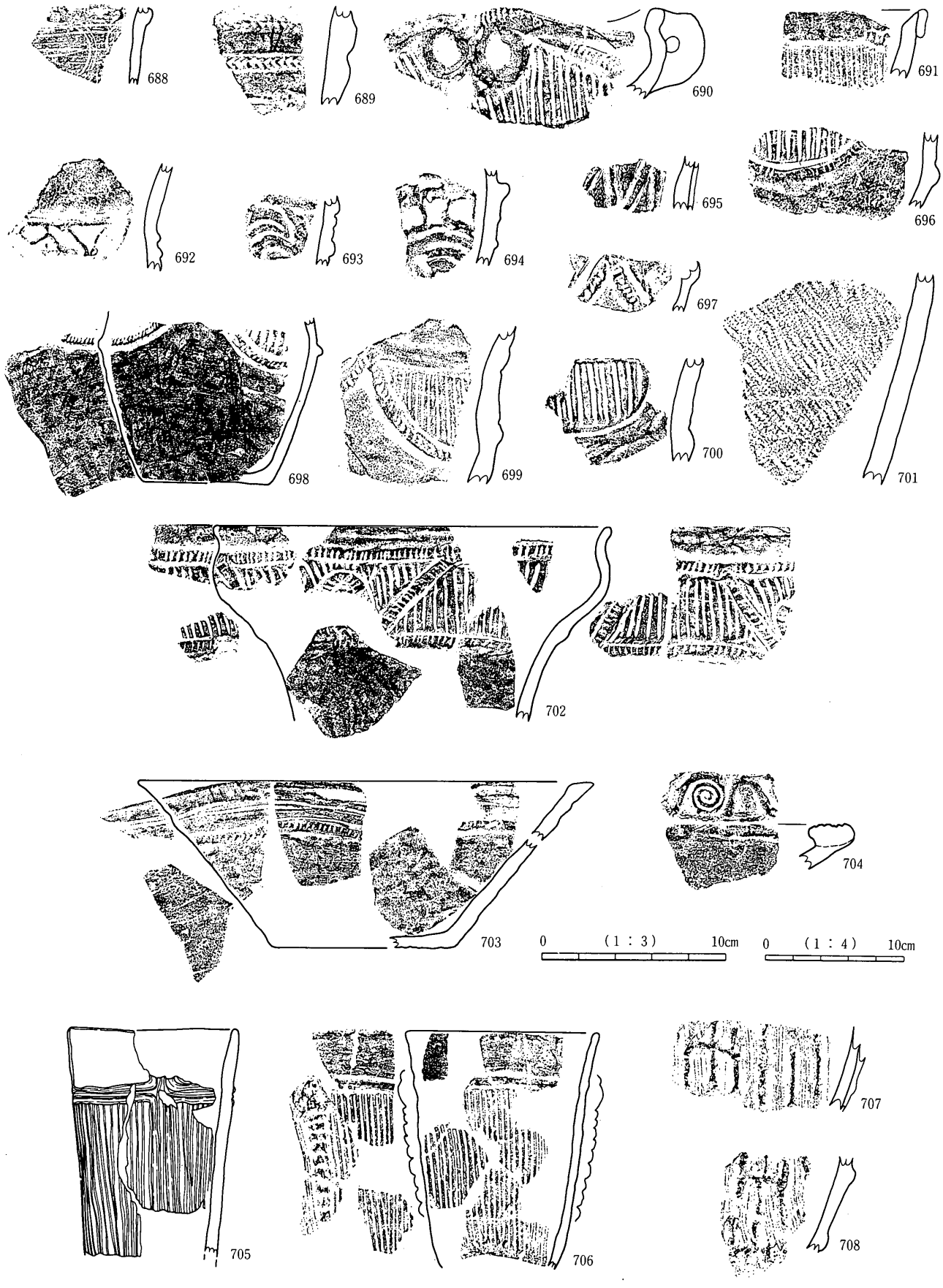


SH3



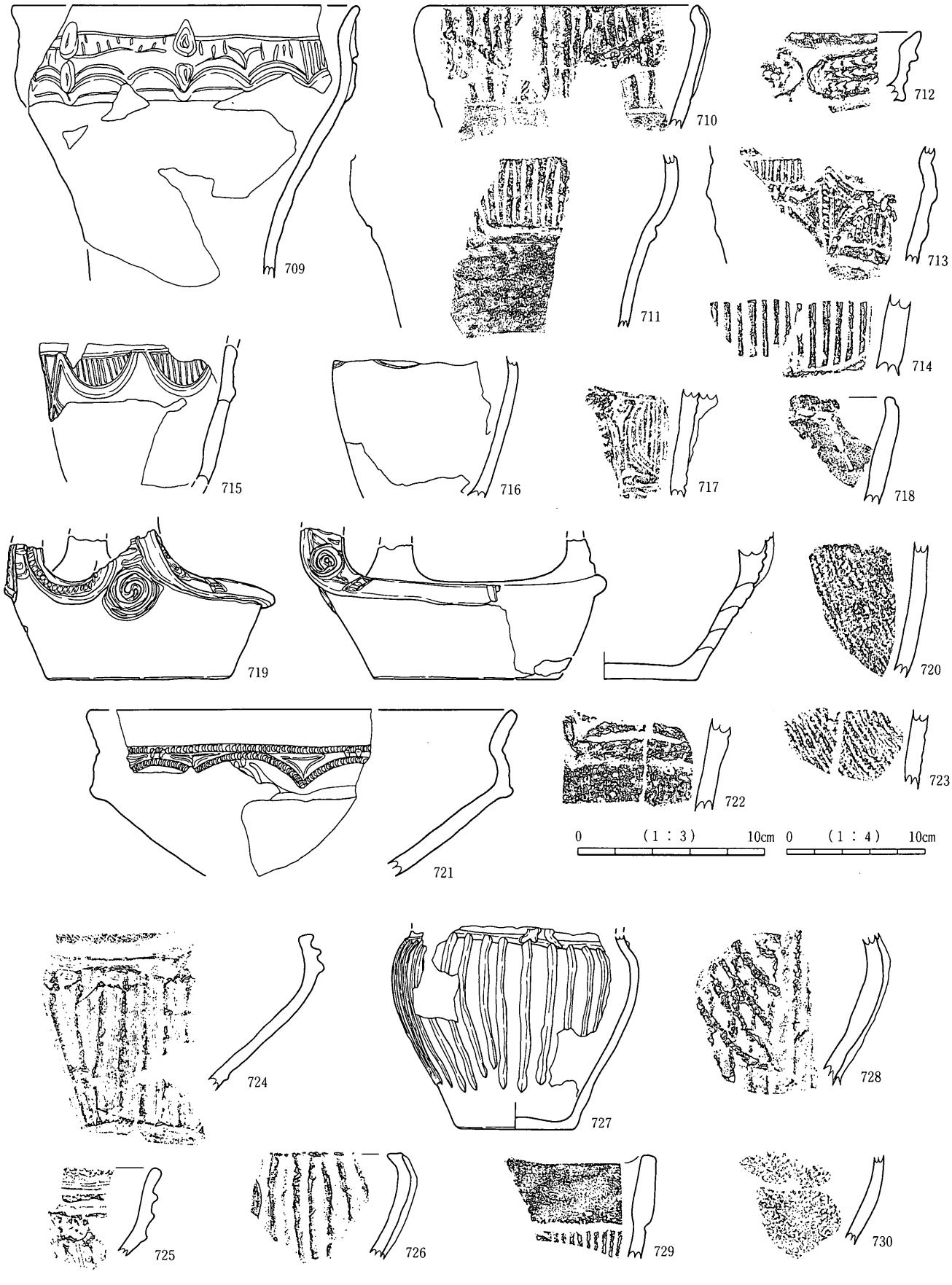
1．黒色土
2．黒褐色土

SB142

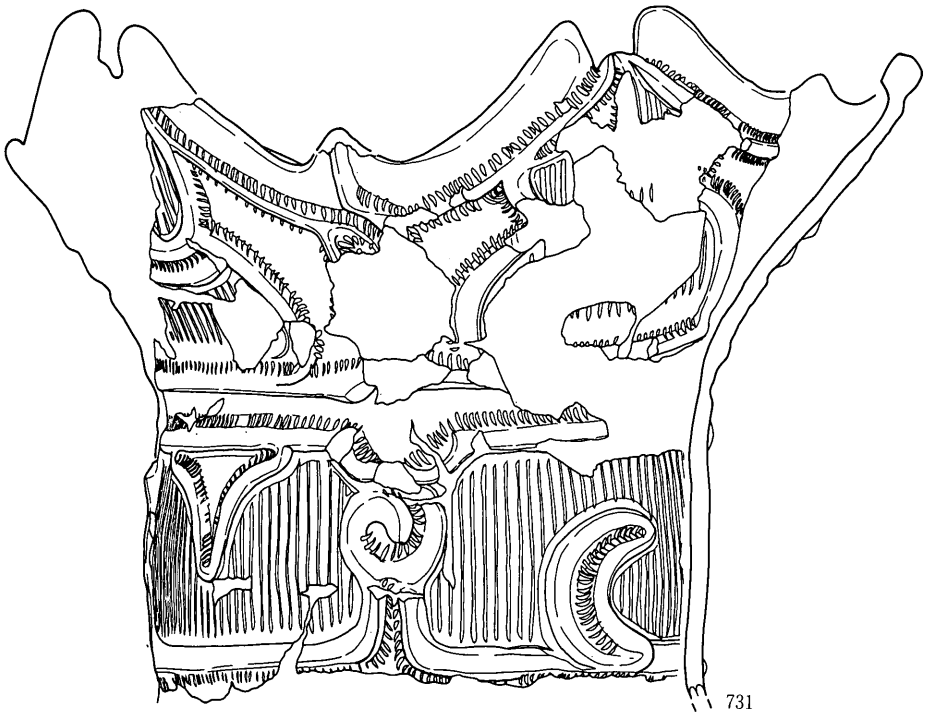

688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
0 (1：3) 10cm
0 (1：4) 10cm
705
706
707
708

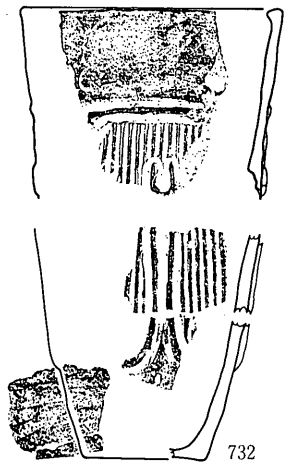
図版64　縄文時代中期後葉Ⅰ期土器(2)

SB143



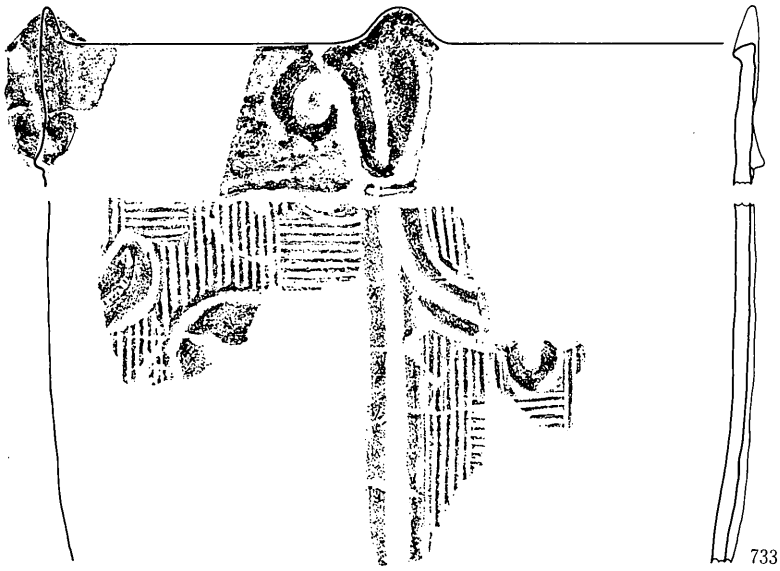
SB94(1)

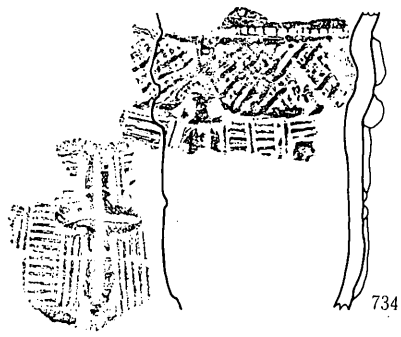

731

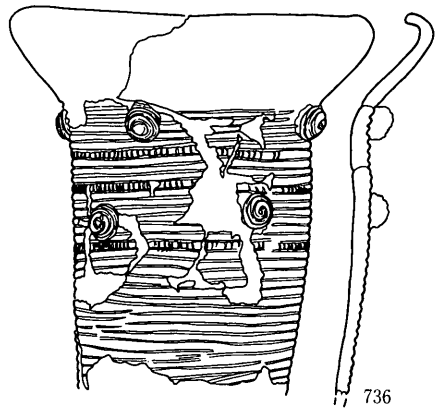

732

0　(1：4)　10cm

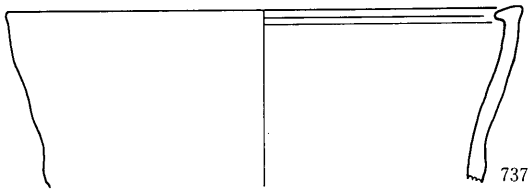
0　(1：3)　10cm

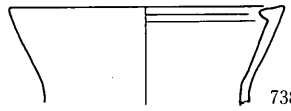

733


734


736

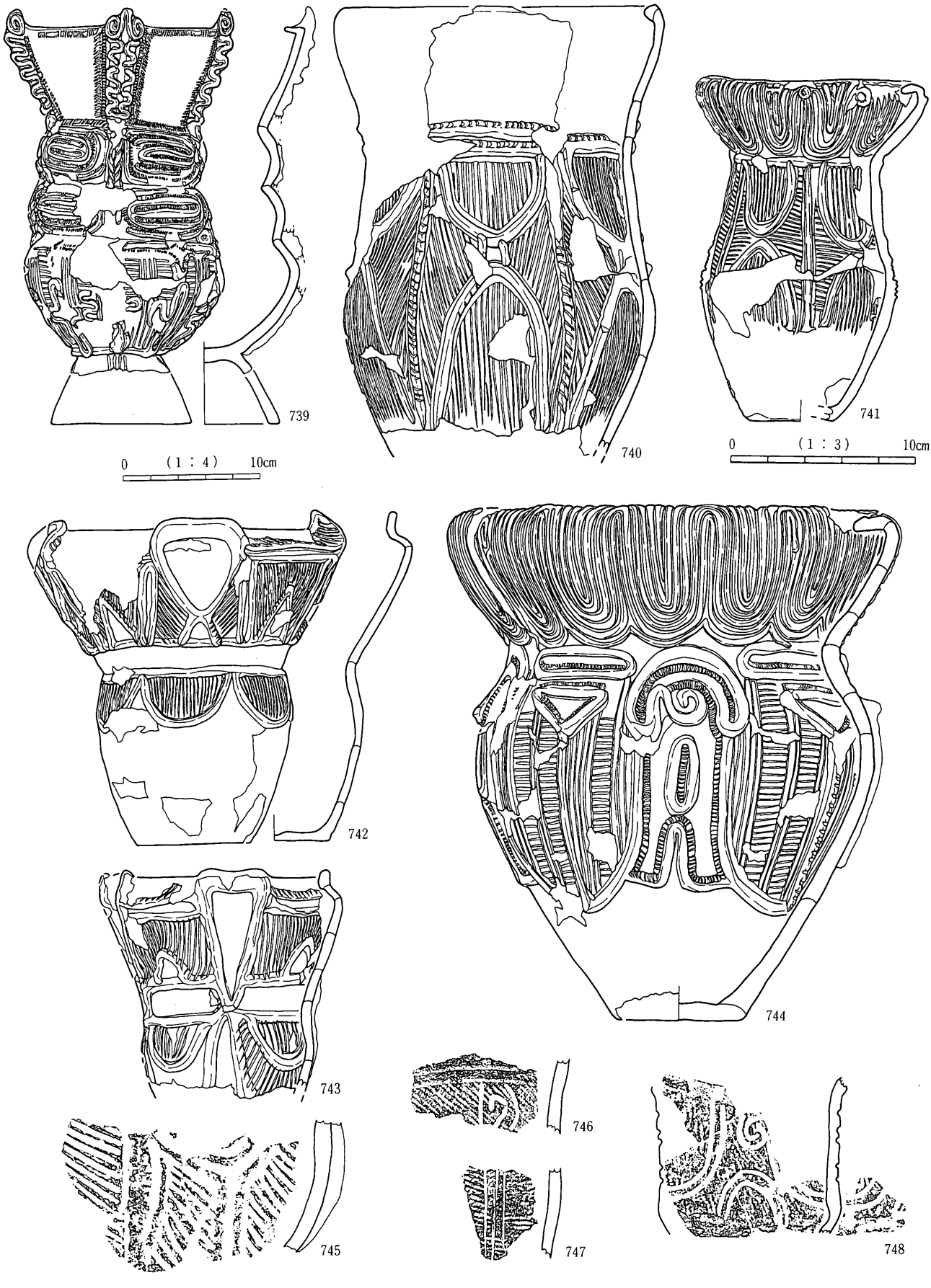
735


737

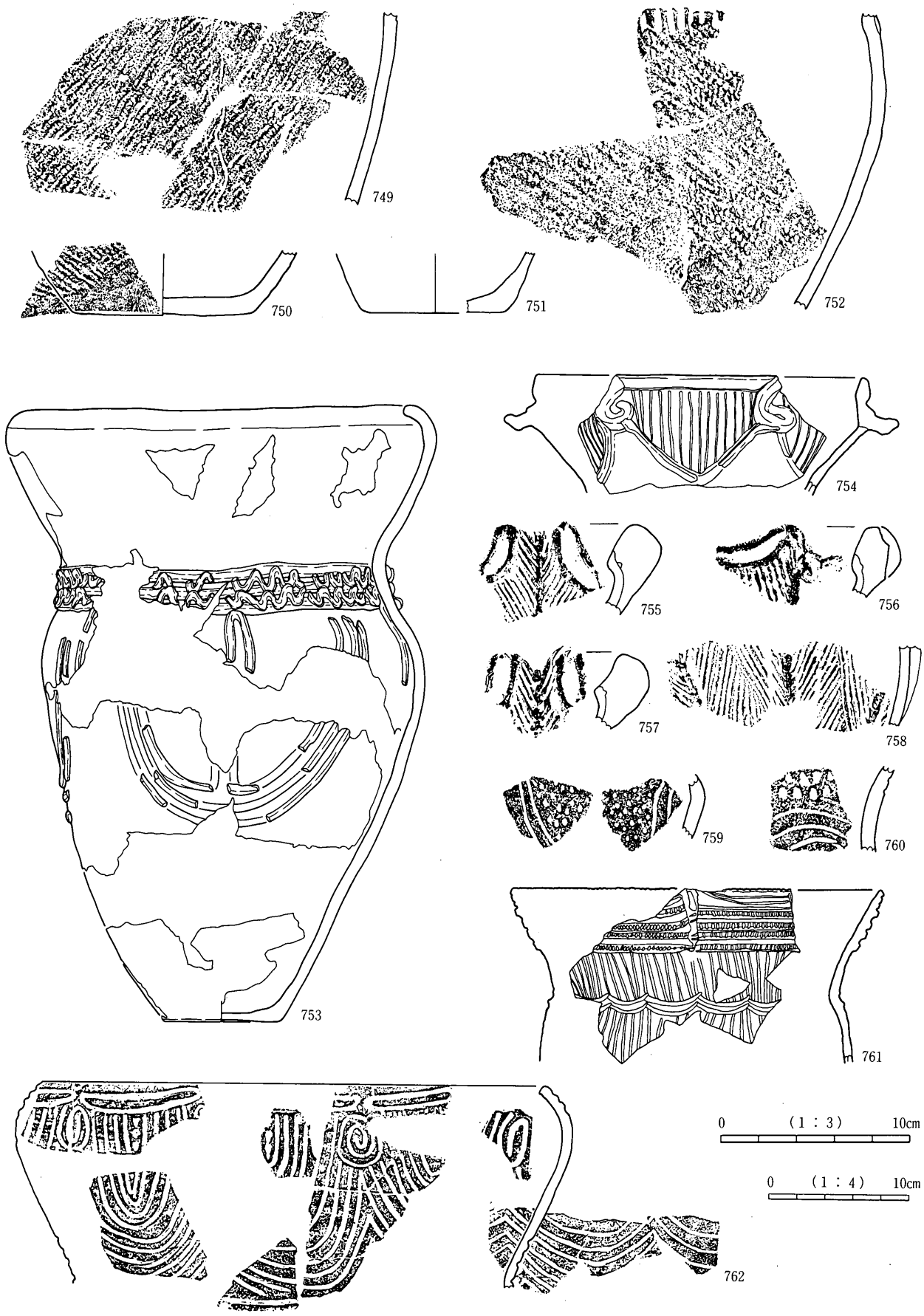

738

図版66　縄文時代中期後葉Ⅰ期土器（4）

SB94(2)

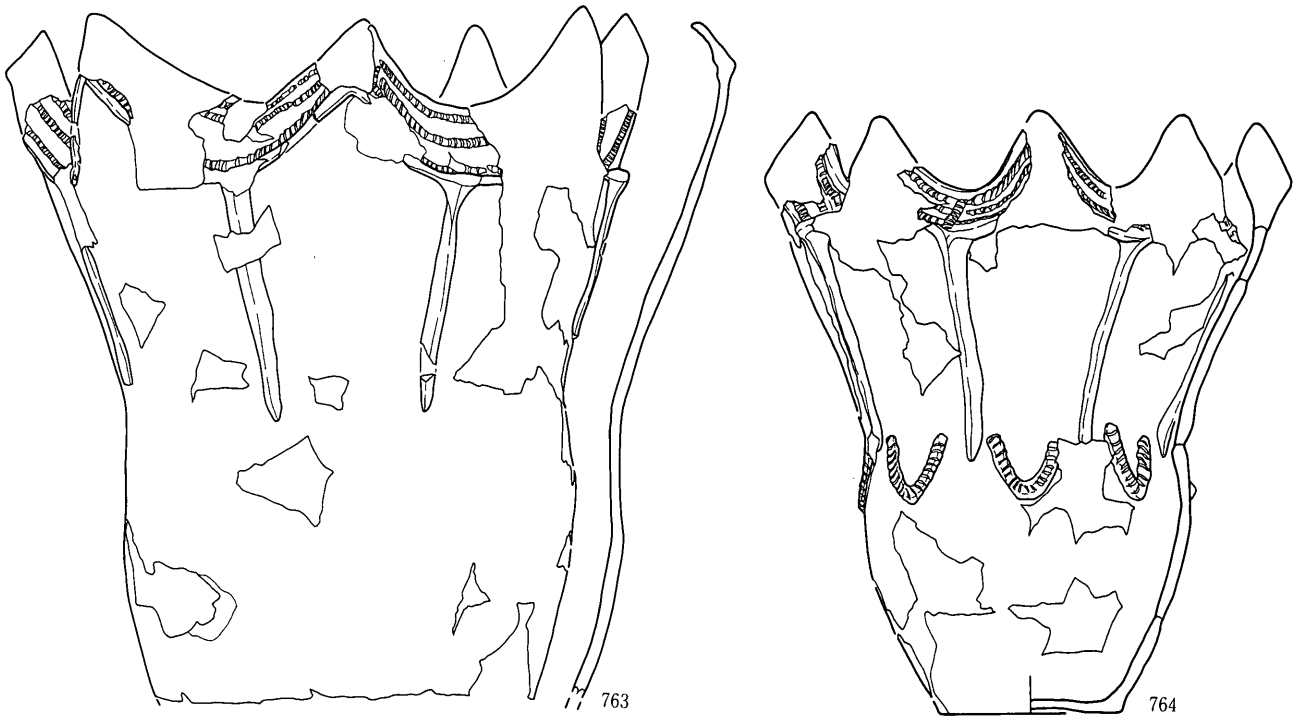


SB94(3)

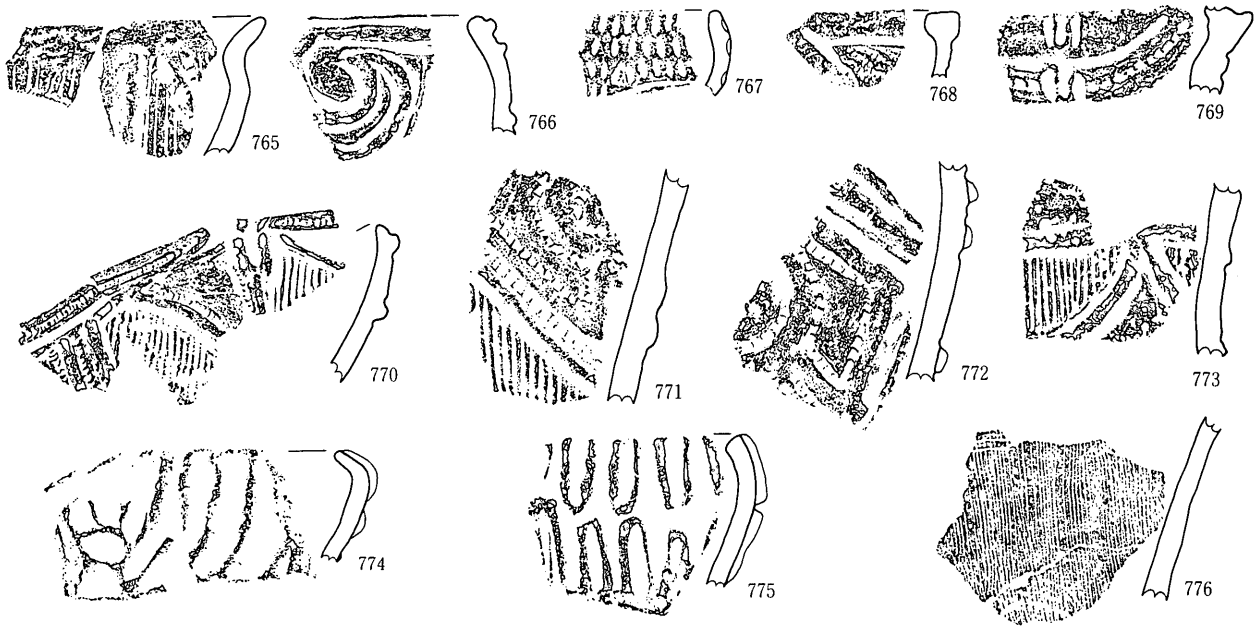

749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
0 (1：3) 10cm
0 (1：4) 10cm

図版68　縄文時代中期後葉Ⅰ期土器（6）

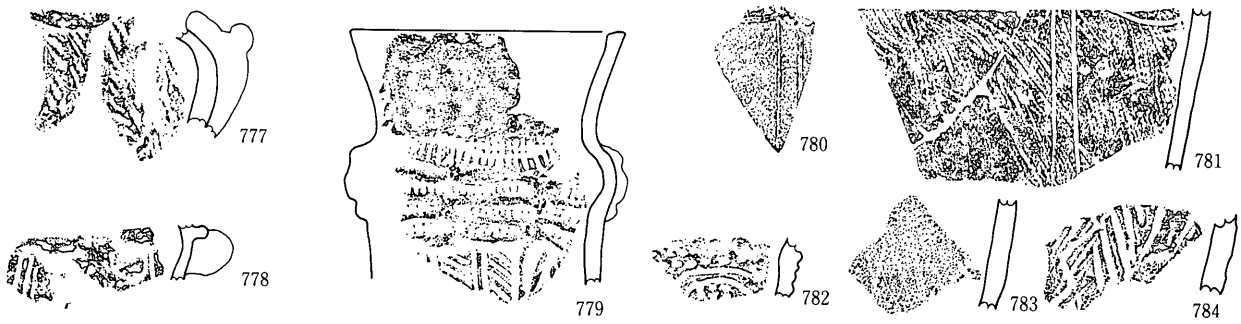
SB94(4)



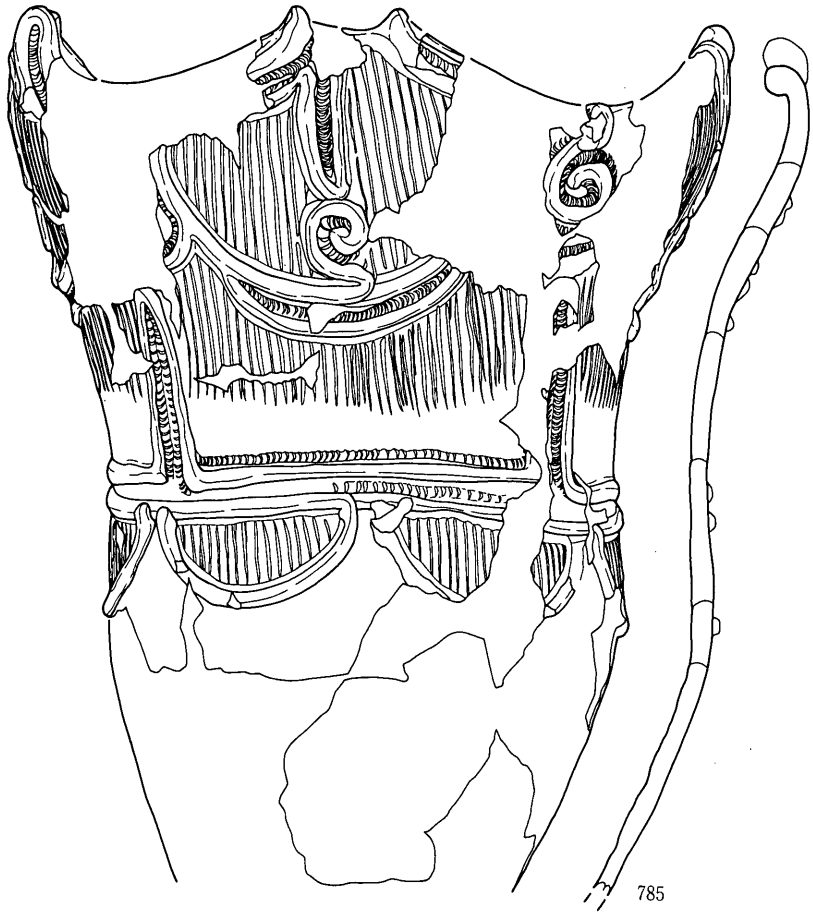
SB86



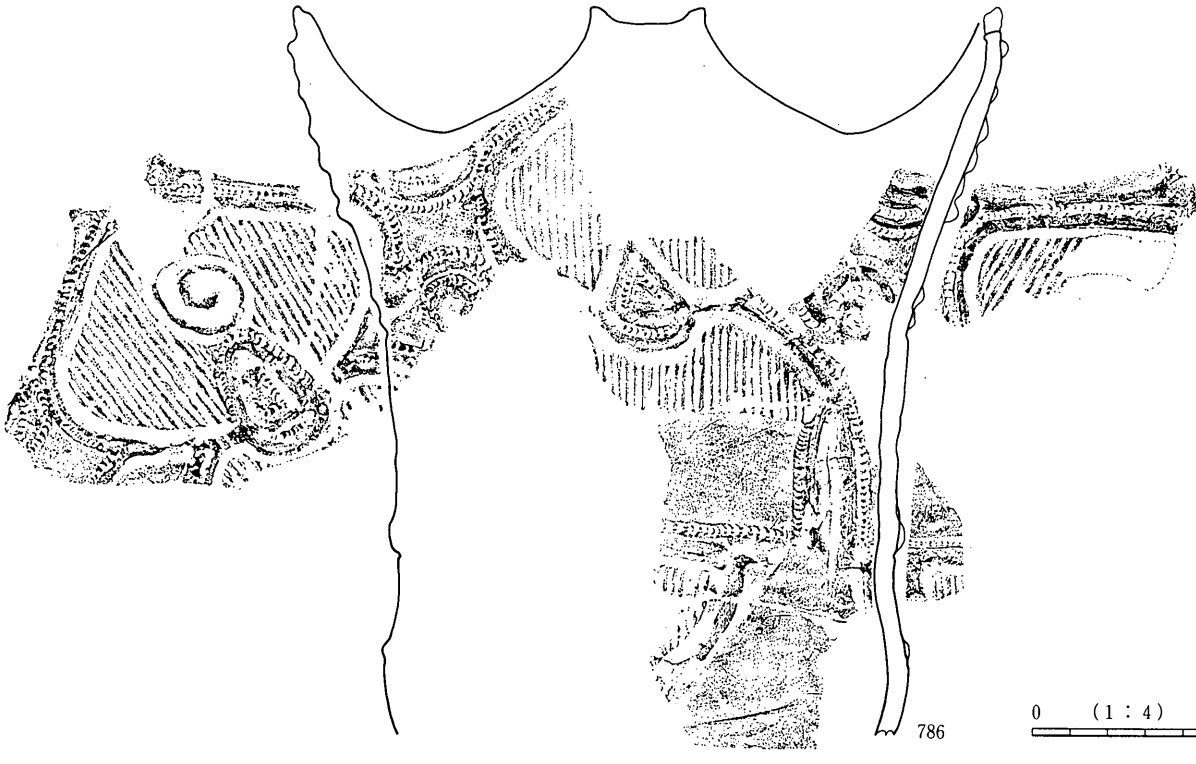
SB106



SB98(1)



785

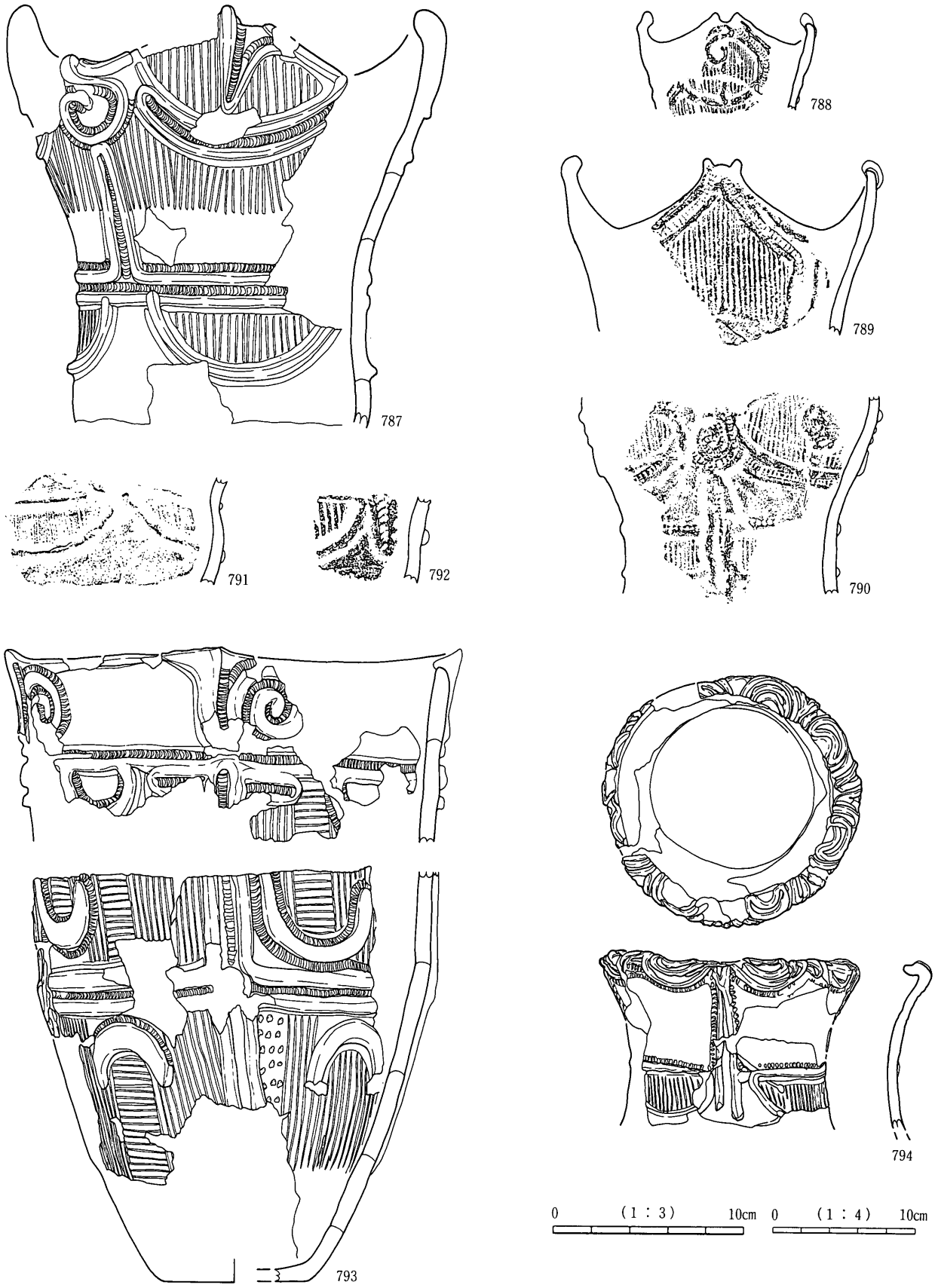


786

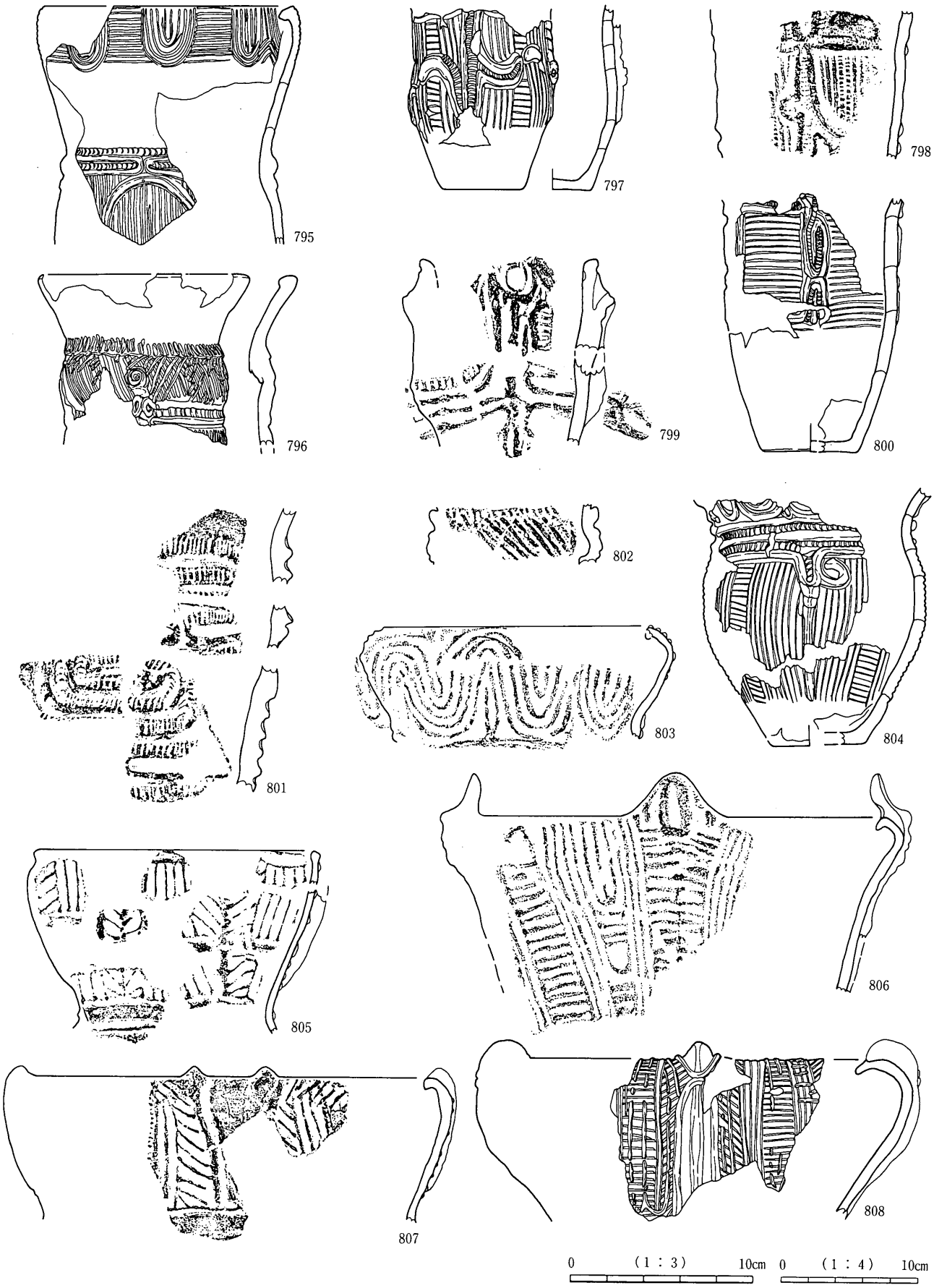
0　（1：4）　10cm

図版70　縄文時代中期後葉Ⅰ期土器（8）

SB98(2)

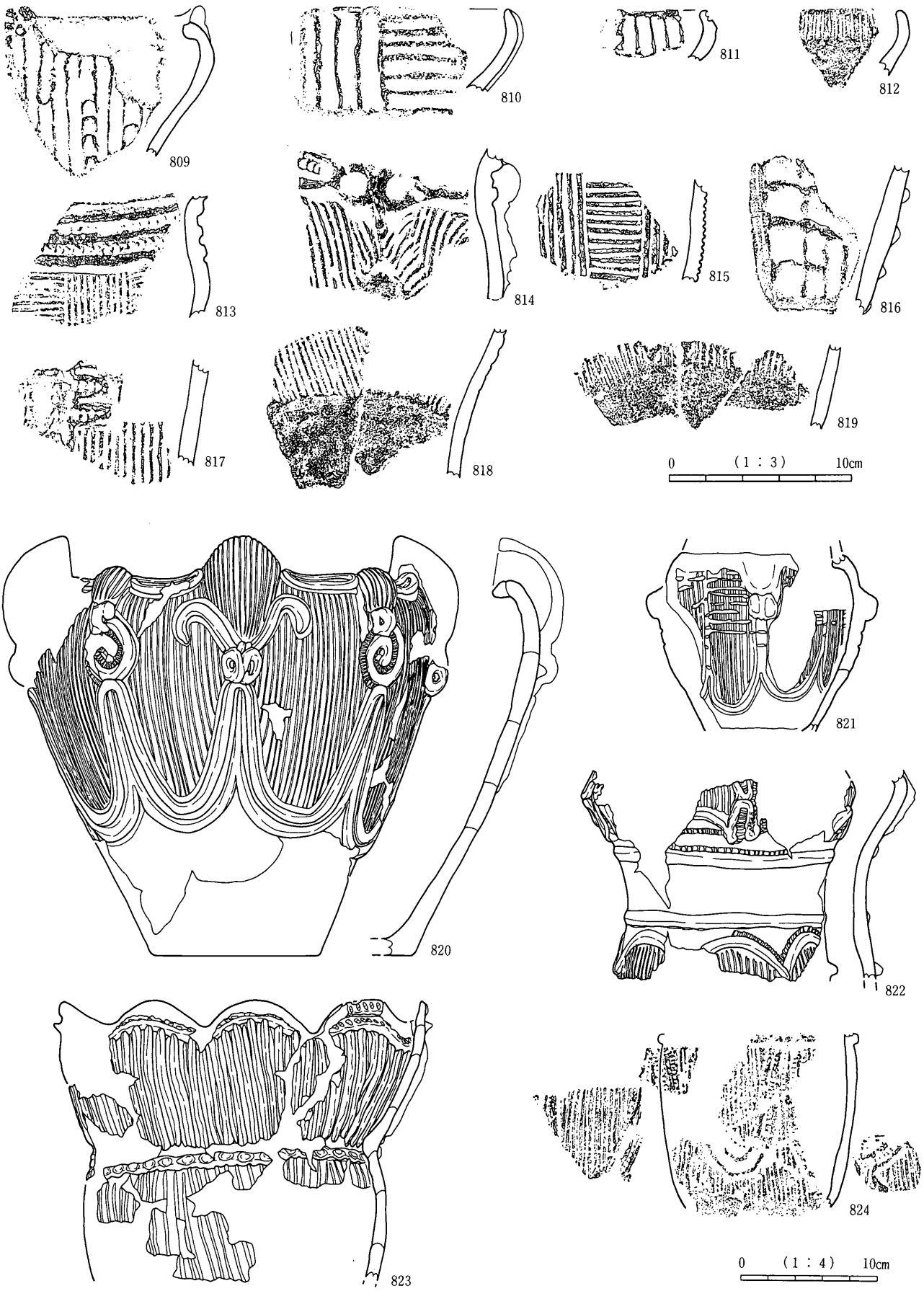


SB98(3)

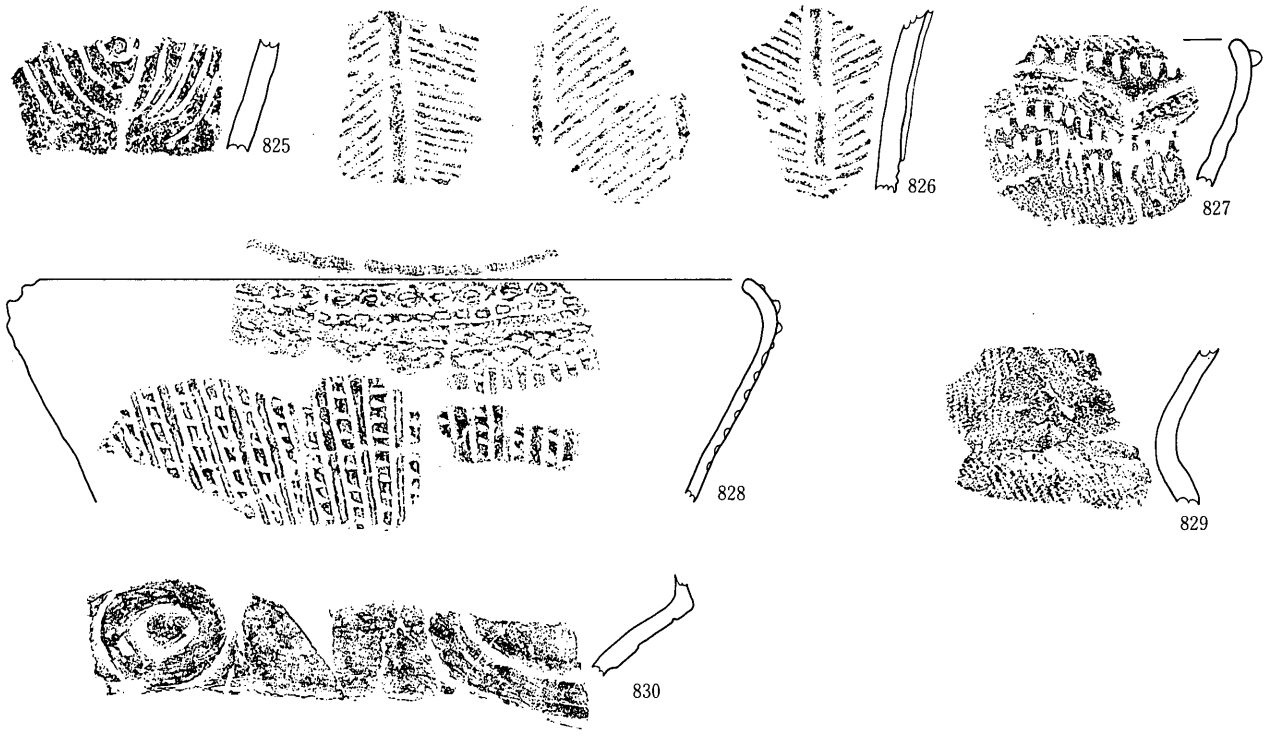

795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
0 (1：3) 10cm
0 (1：4) 10cm

図版72　縄文時代中期後葉Ⅰ期土器(10)

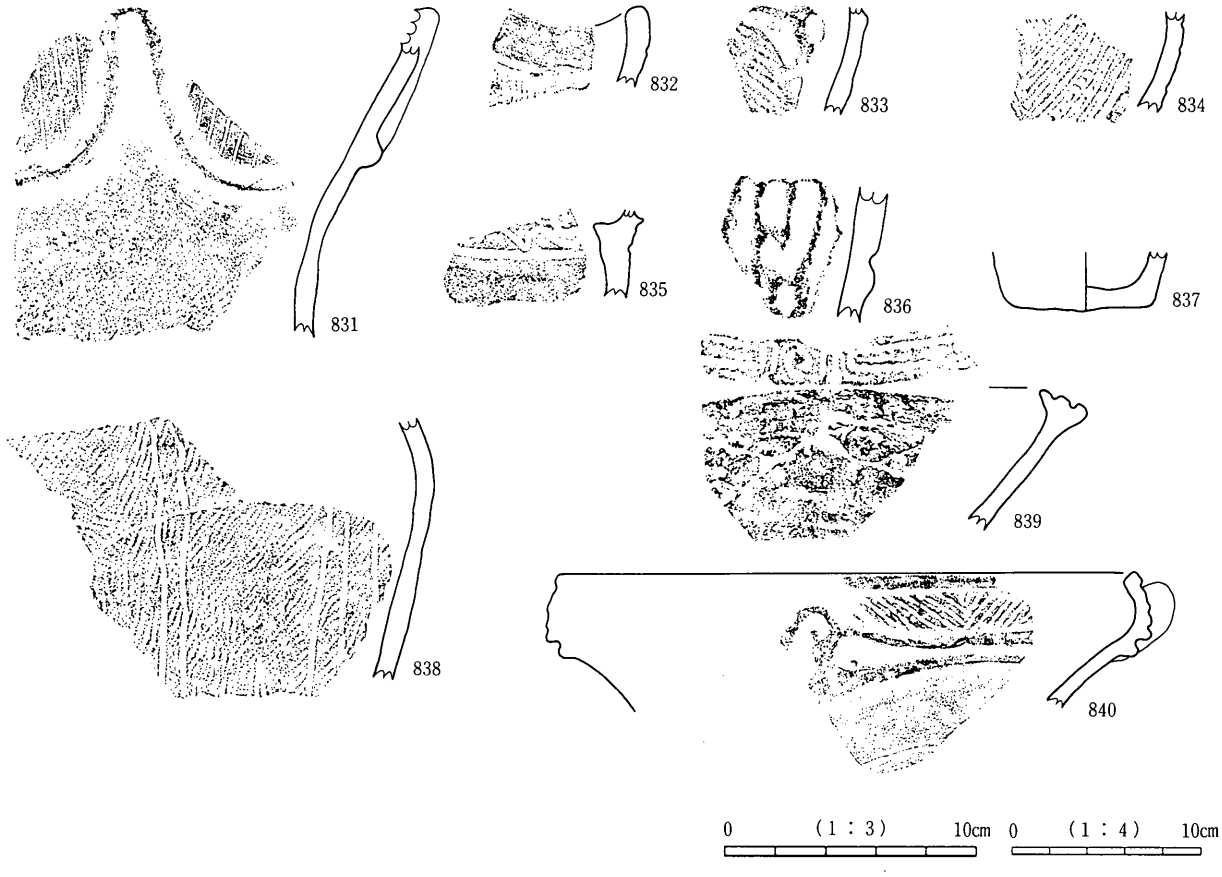
SB98(4)



SB98(5)

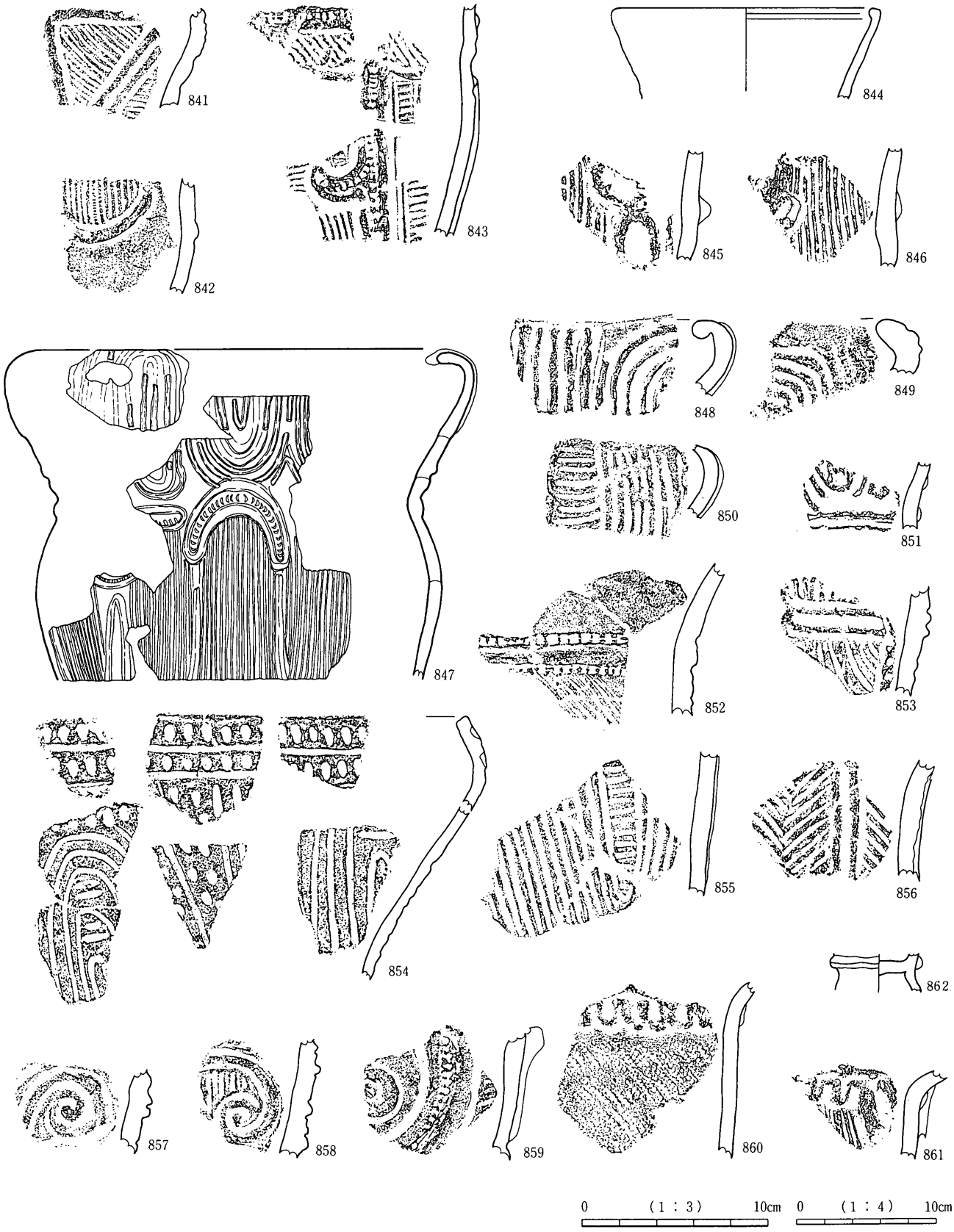

825
826
827
828
829
830

SB57

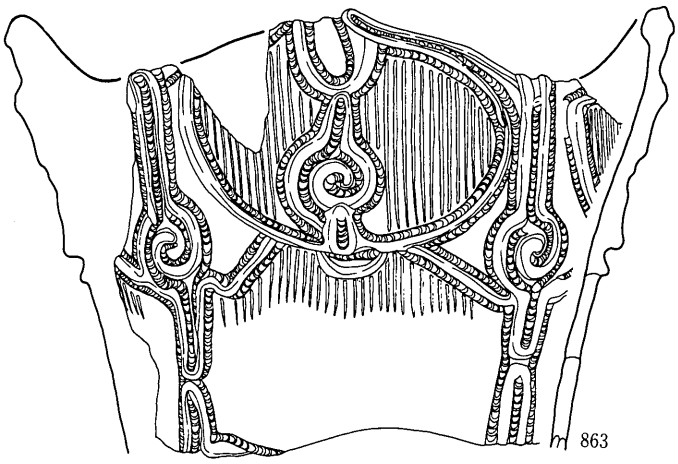

831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
0 (1：3) 10cm
0 (1：4) 10cm

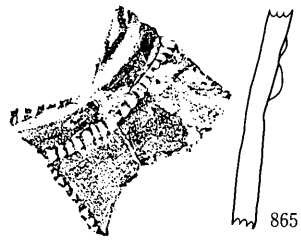
図版74　縄文時代中期後葉Ⅰ期土器(12)

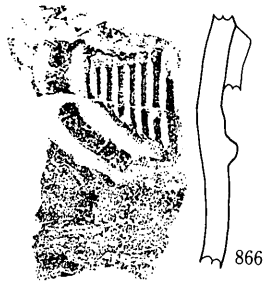
SB101

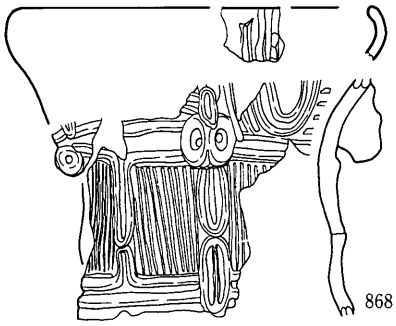


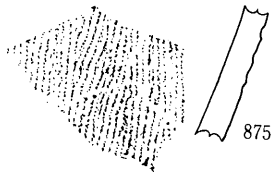
SB120

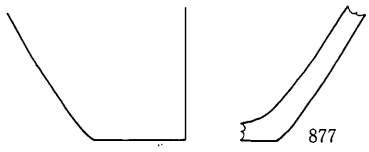




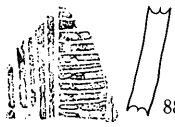


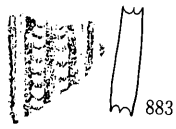


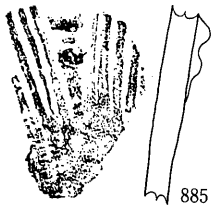


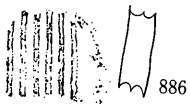


SB148





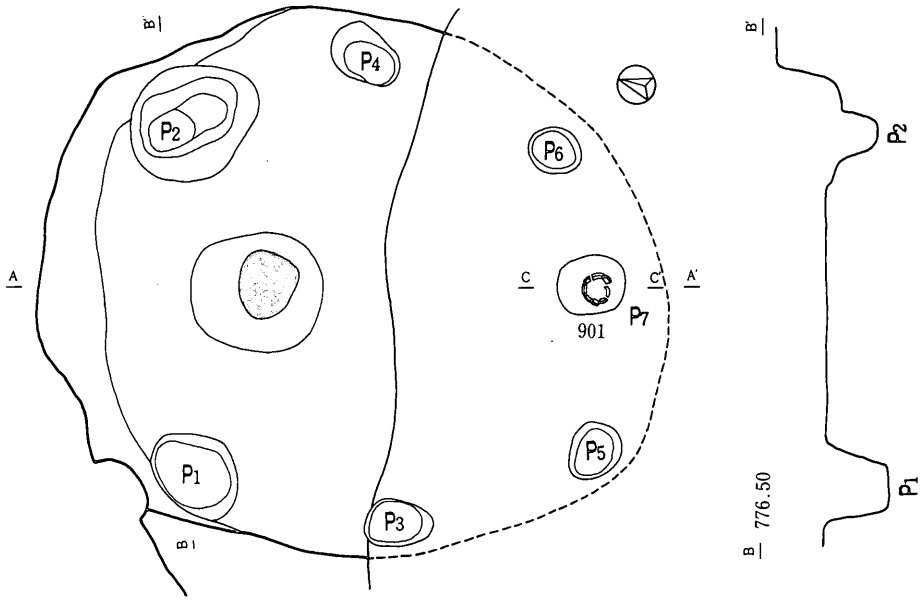


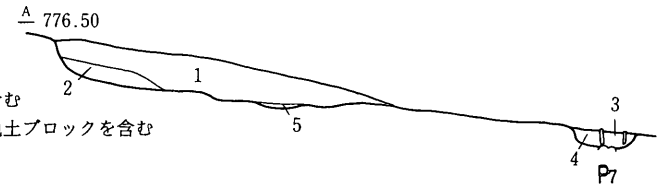


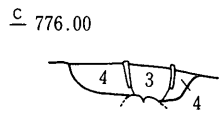
0　(1：3)　10cm　0　(1：4)　10cm

図版76　縄文時代中期後葉II期遺構図(1)

SB18



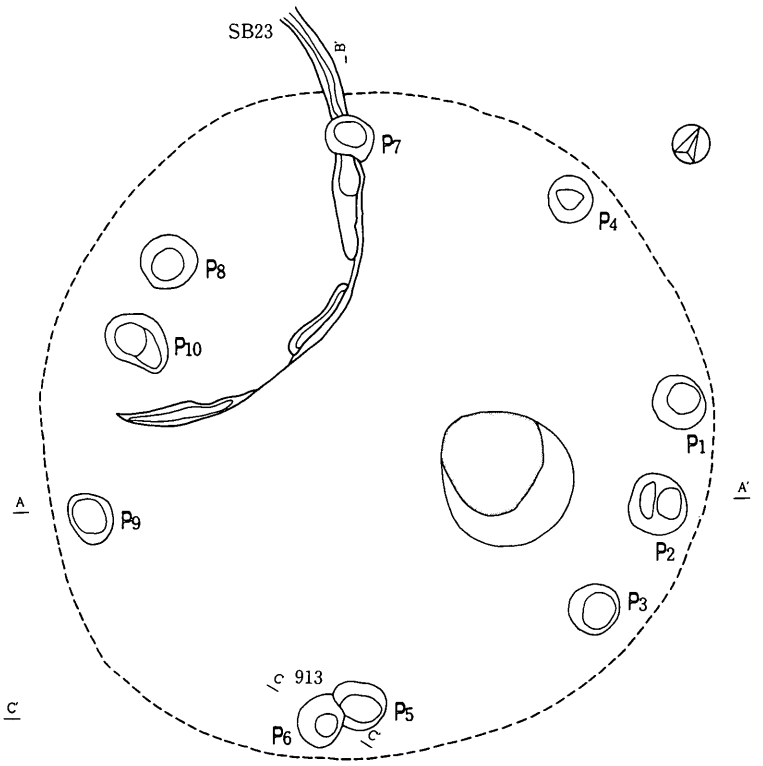


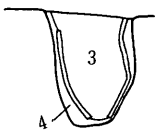


1．黒褐色土
2．褐黒色土
3．黒褐色土　砂粒含む
4．黒褐色土　黄褐色土ブロックを含む
5．焼土

0　(1：30)　1m

SB19

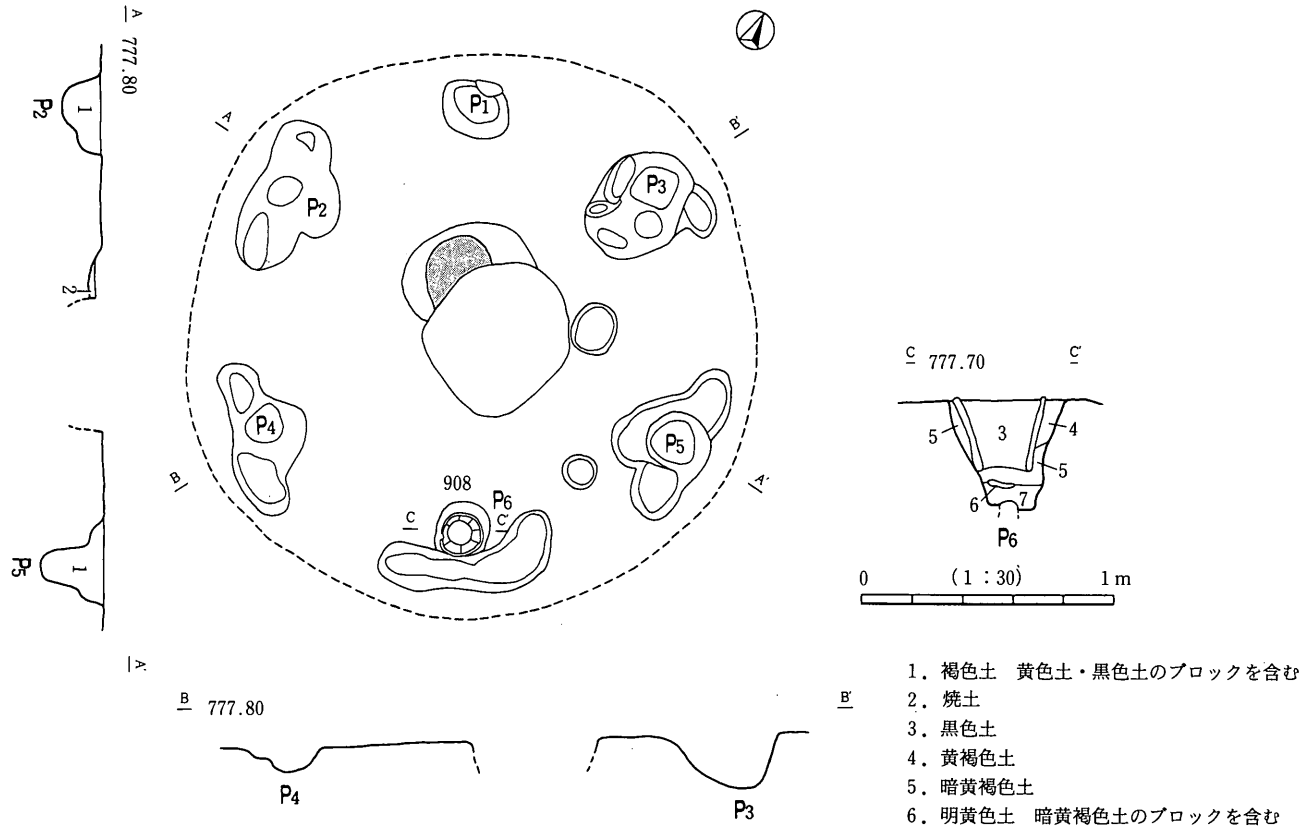




0　(1：60)　2m

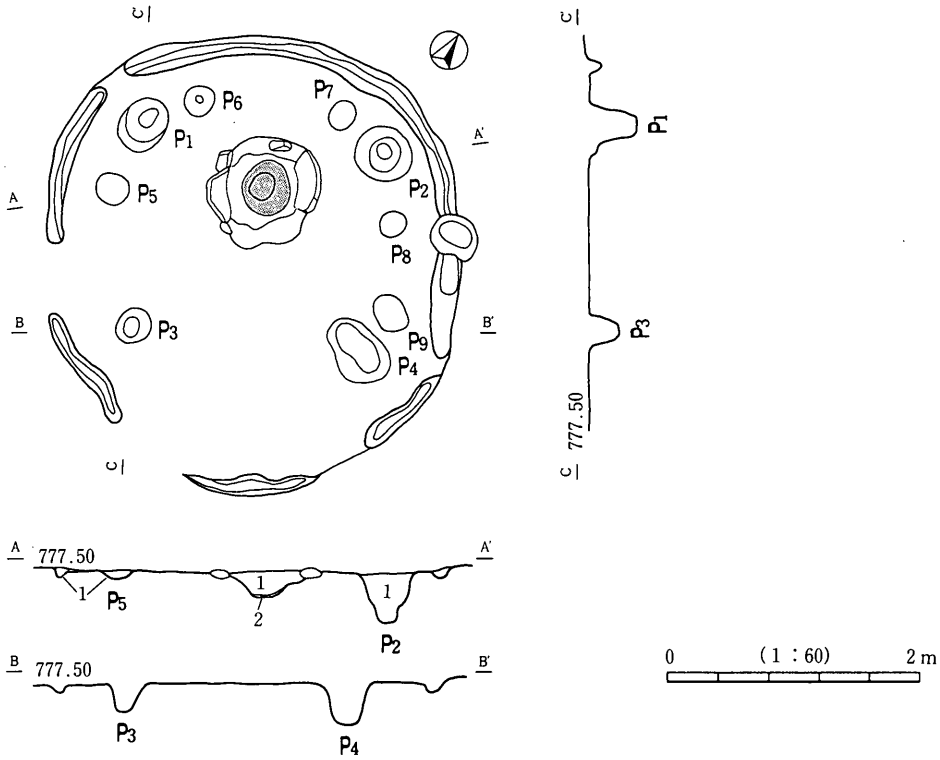
1．黒褐色土　黄色土ブロックを含む
2．焼土
3．黒色土
4．暗黄褐色土

SB20



1．褐色土　黄色土・黒色土のブロックを含む
2．焼土
3．黒色土
4．黄褐色土
5．暗黄褐色土
6．明黄色土　暗黄褐色土のブロックを含む
7．暗赤黄褐色土　焼土混じる

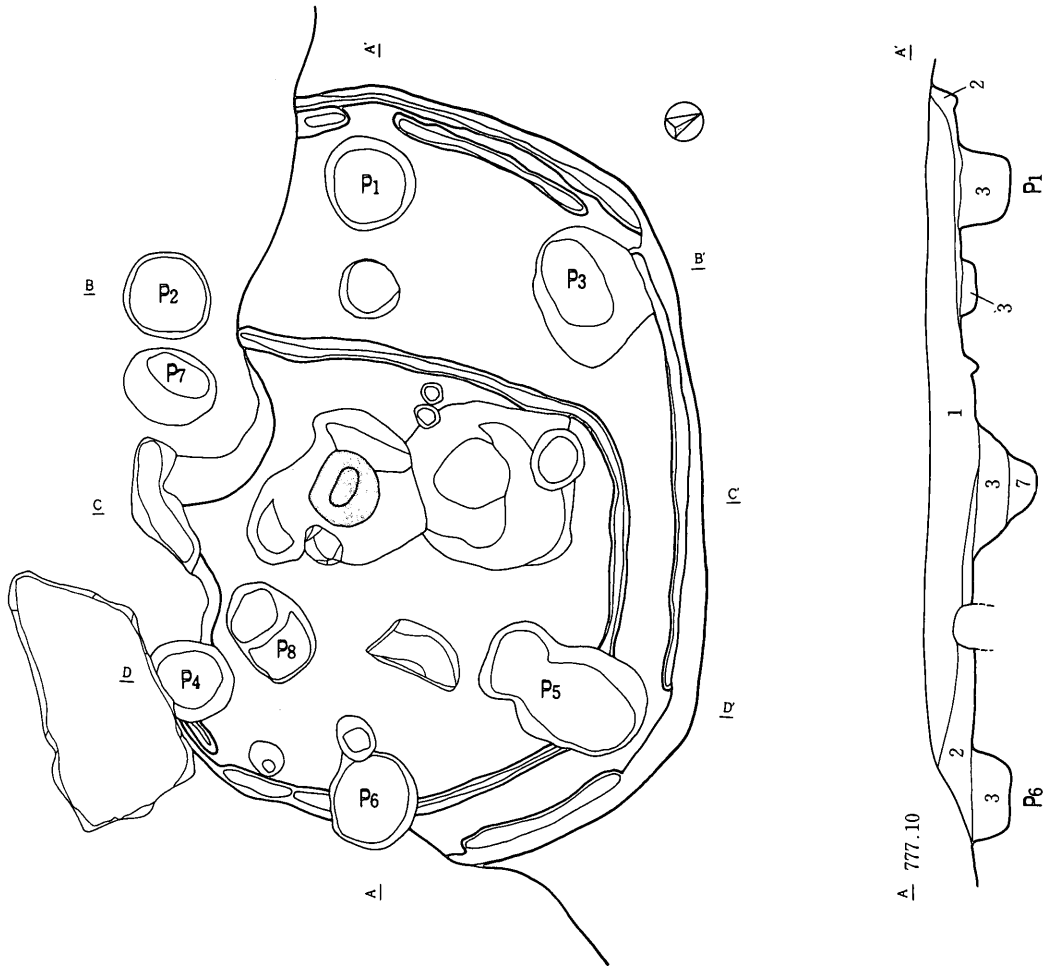
SB23

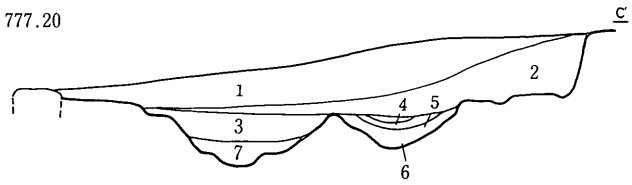


1．黒褐色土
2．焼土

図版78　縄文時代中期後葉II期遺構図（3）

SB24

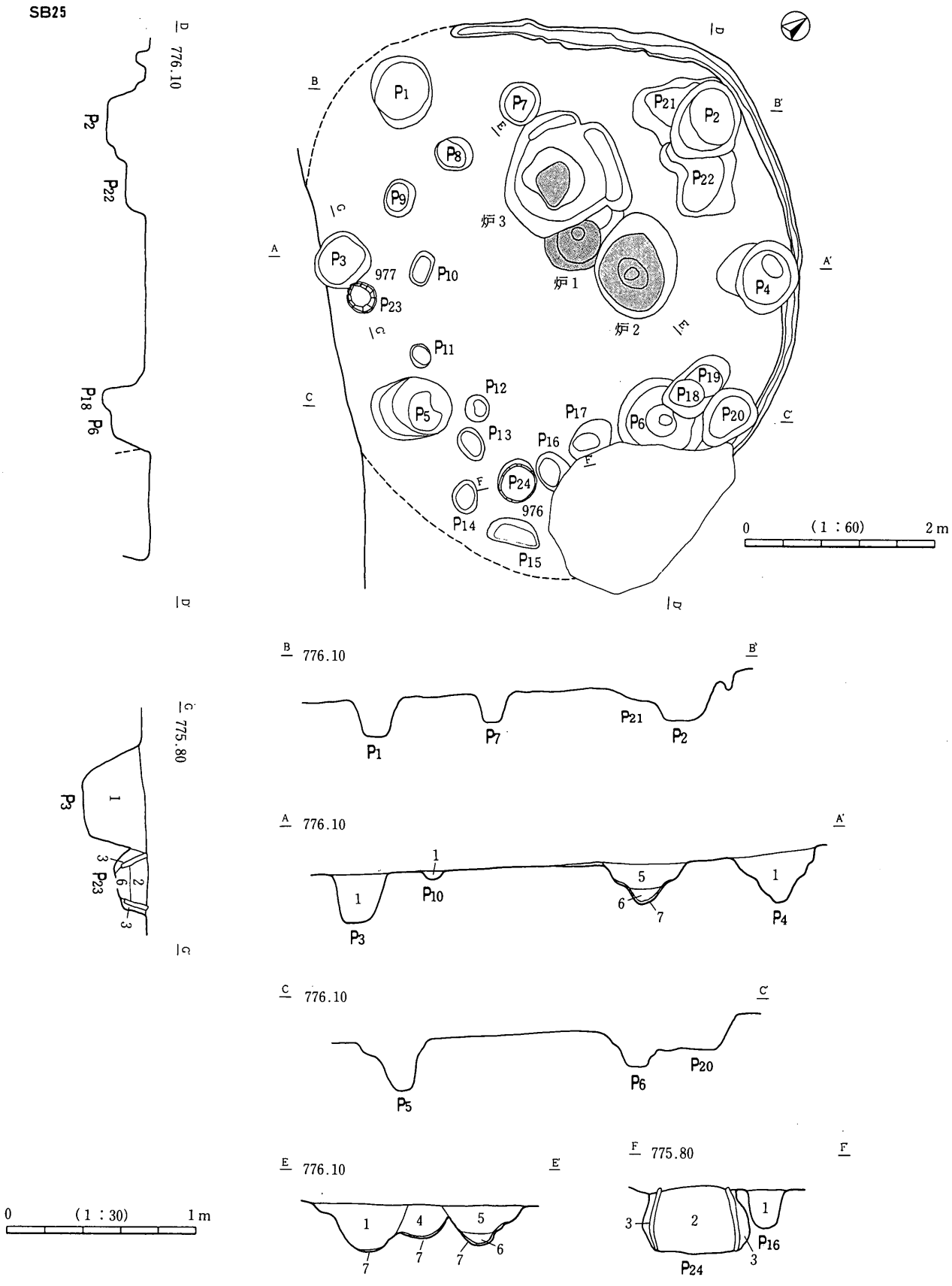




1．黒褐色土
2．黒色土
3．黒褐色土
4．黒褐色～暗黄褐色土（焼土含む）
5．黄褐色土と黒褐色土のブロック貼床
6．黒褐色土
7．暗黄褐色土（焼土含む）

0　（1：60）　2m

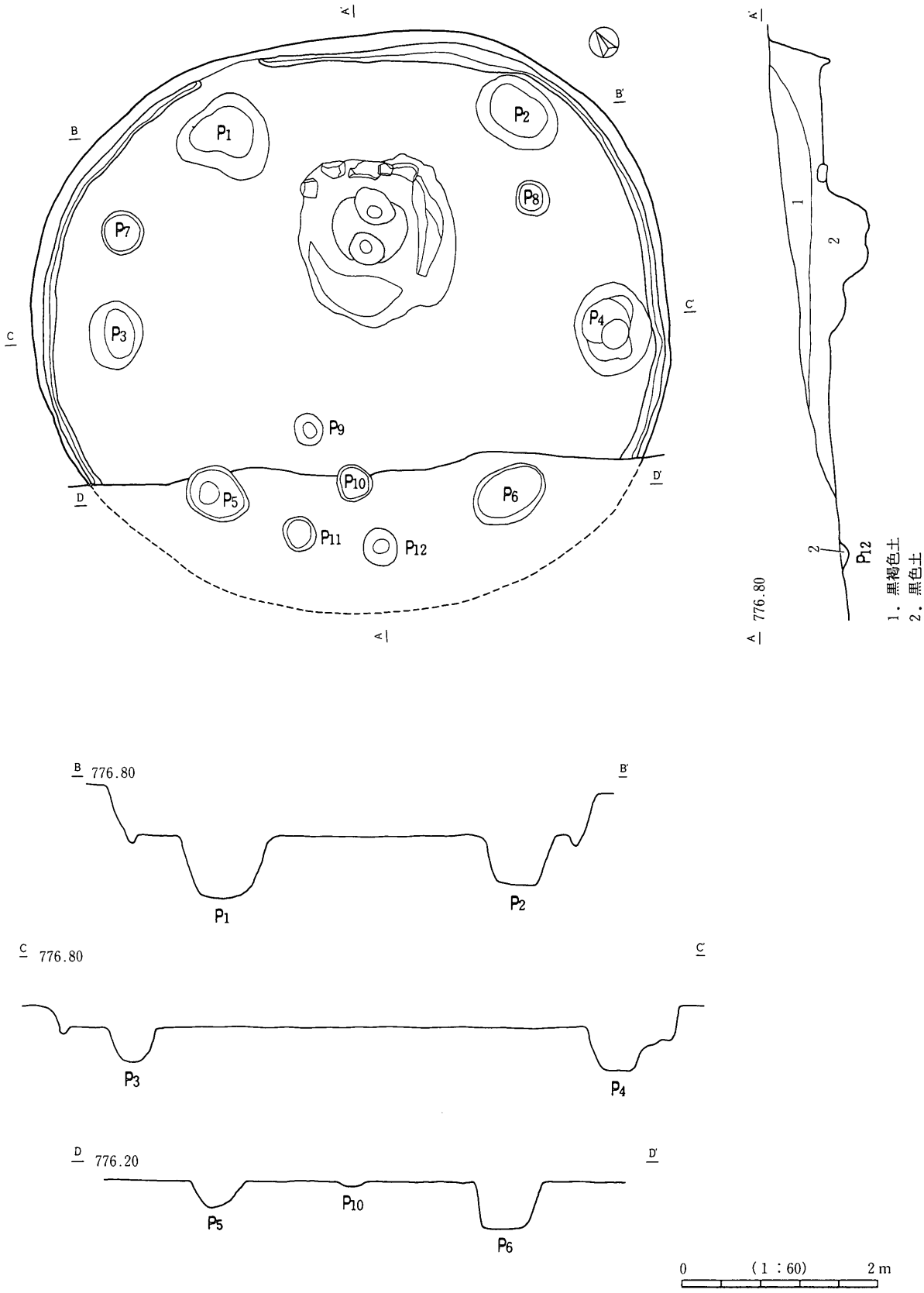
SB25



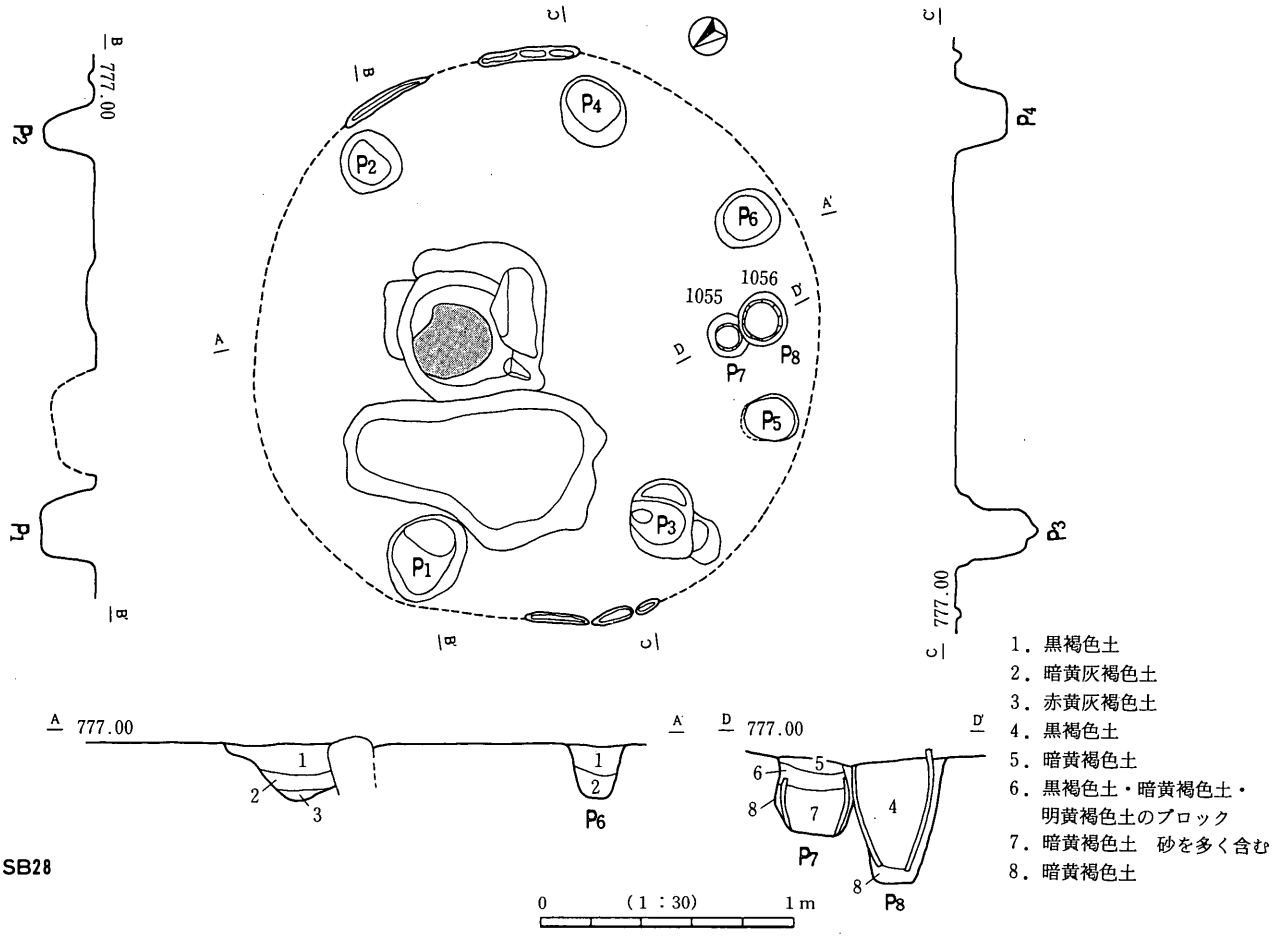
1．黒褐色土
2．黒褐色土　黄色ブロック・炭化物を含む
3．黄灰褐色土
4．暗黄褐色土
5．暗黄褐色土　砂質黄色土ブロックを含む
6．黒褐色土
7．焼土

図版80　縄文時代中期後葉II期遺構図(5)

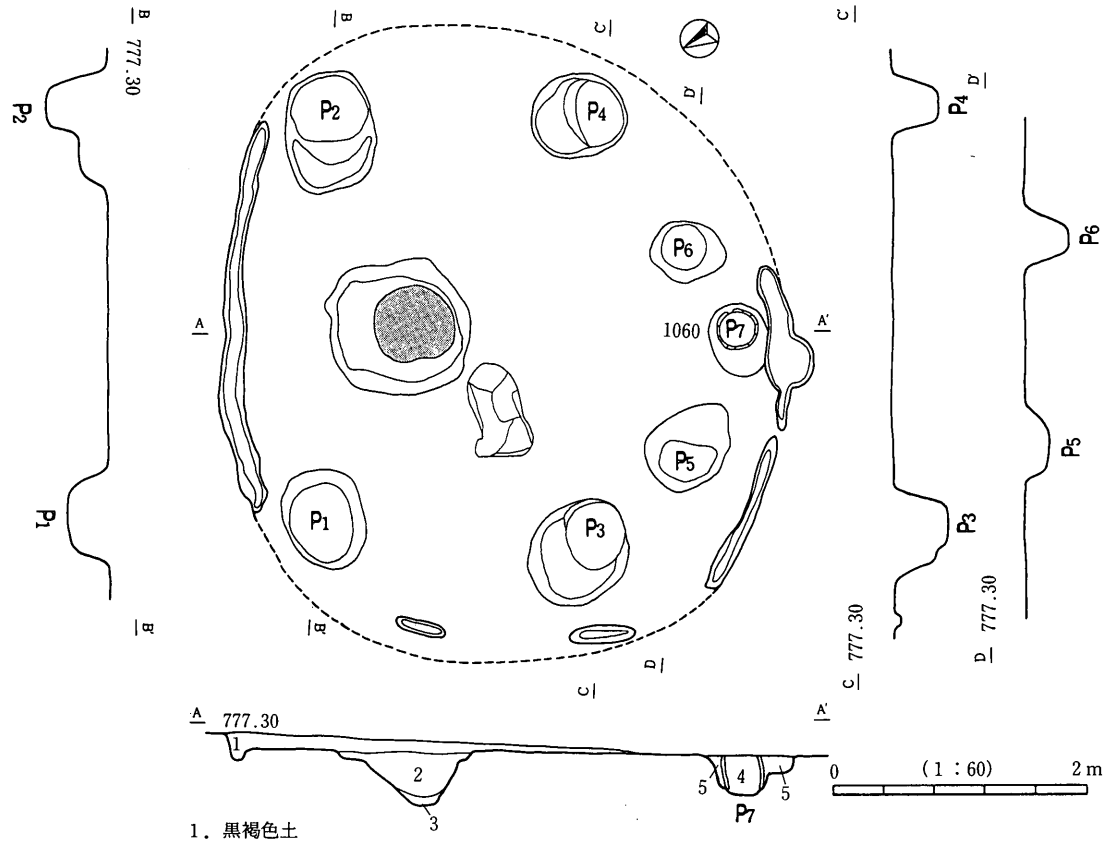
SB26



SB27



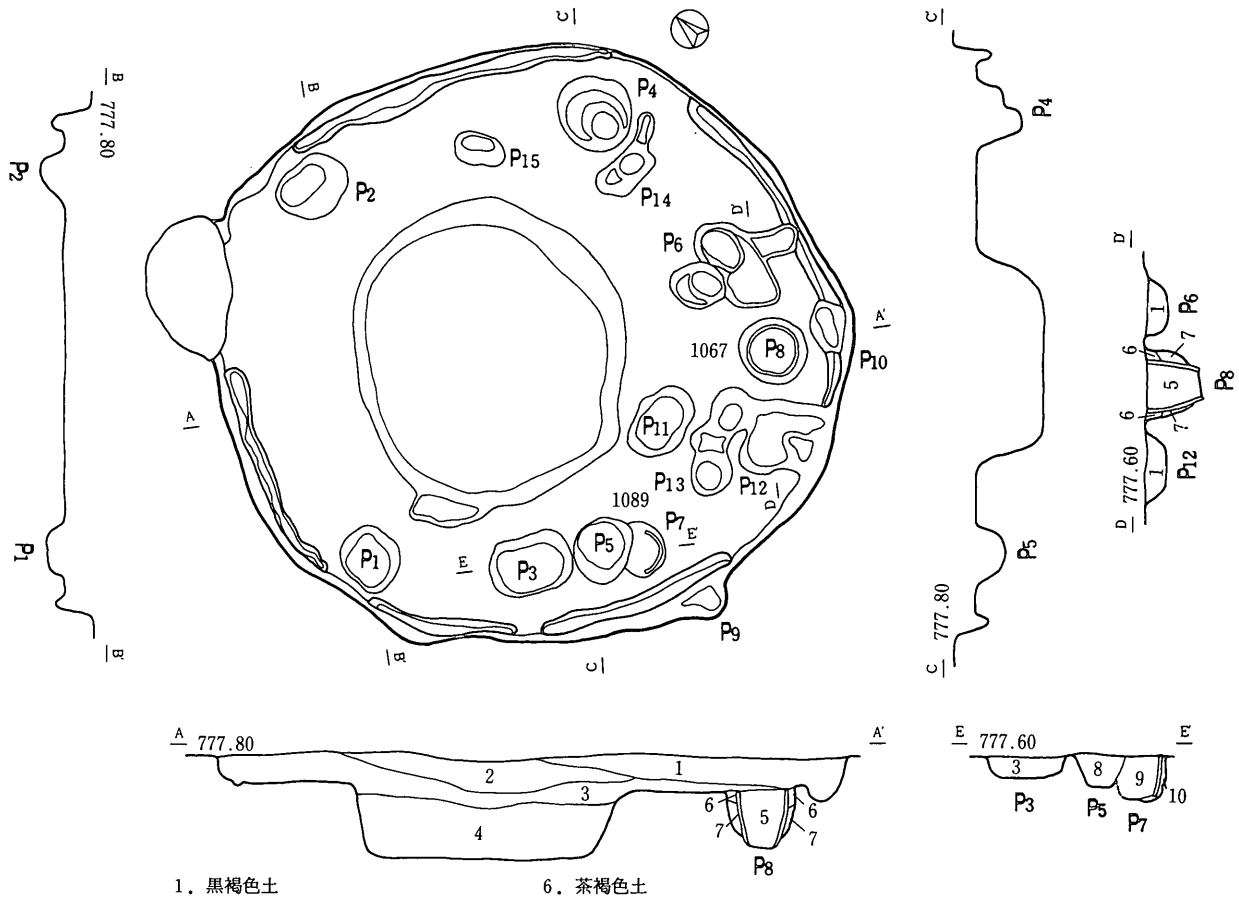
SB28



1. 黒褐色土
2. 黒褐色土　炭化物・焼土まじる
3. 砂質黄褐色土・焼土まじる
4. 黒褐色土　砂粒を含む
5. にぶい暗黄褐色土

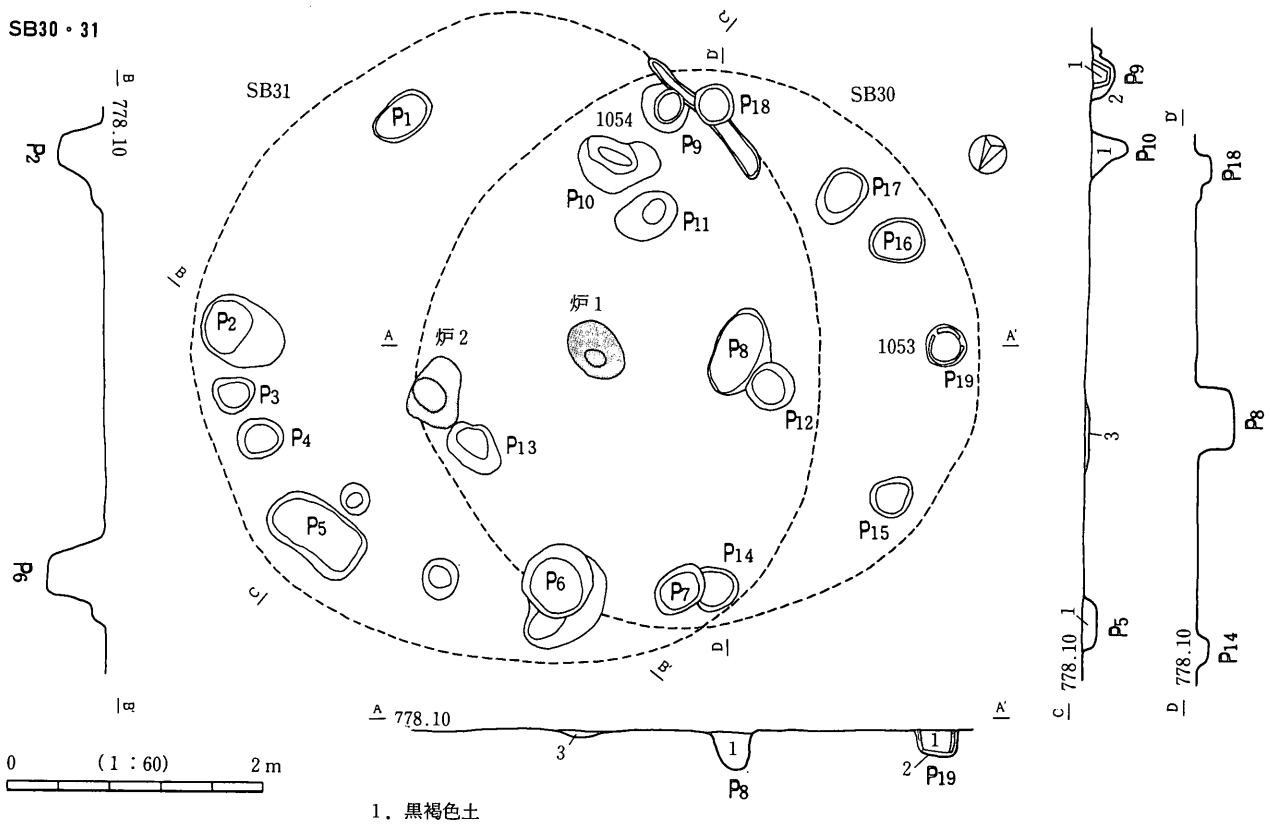
図版82　縄文時代中期後葉II期遺構図(7)

SB29



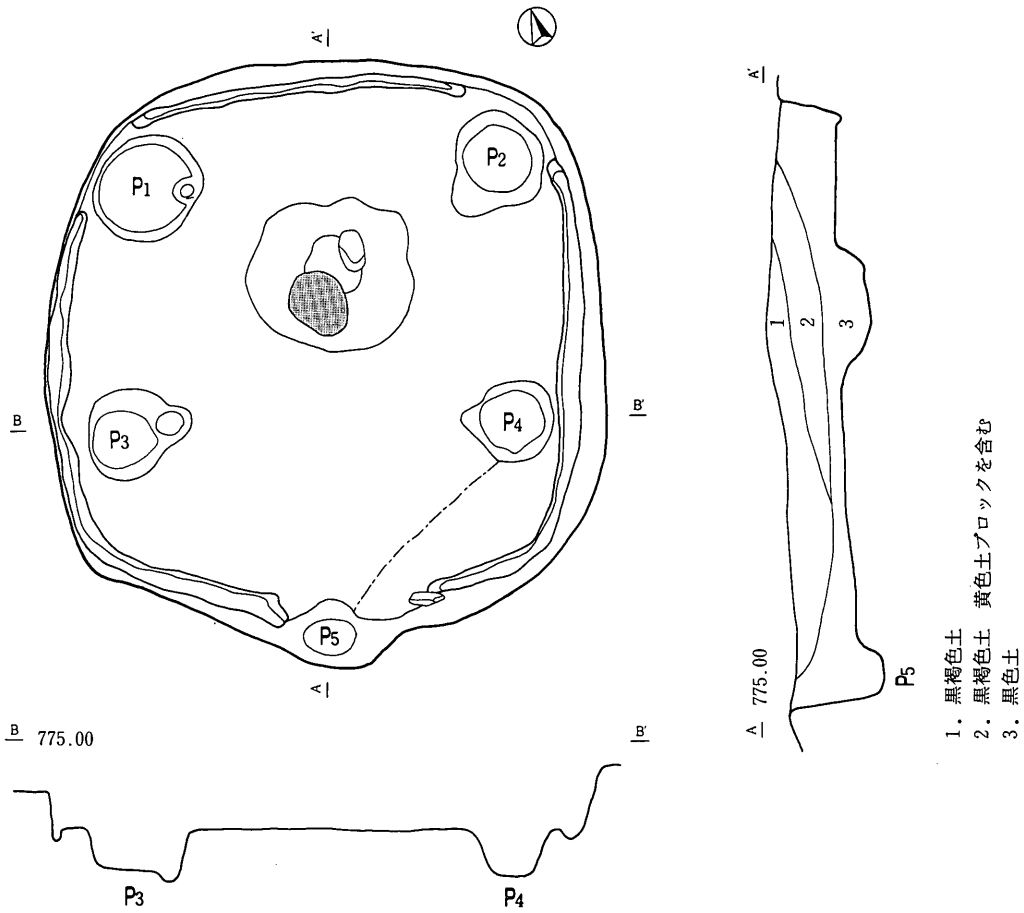
1．黒褐色土
2．灰黄褐色土
3．褐黒色土
4．灰黄褐色土　黒褐色土ブロックを含む
5．黒褐色土
6．茶褐色土
7．暗黄褐色土
8．黒褐色土
9．明黄褐色土と暗黄褐色土と黒色土のブロック
10．暗黄褐色土

SB30・31

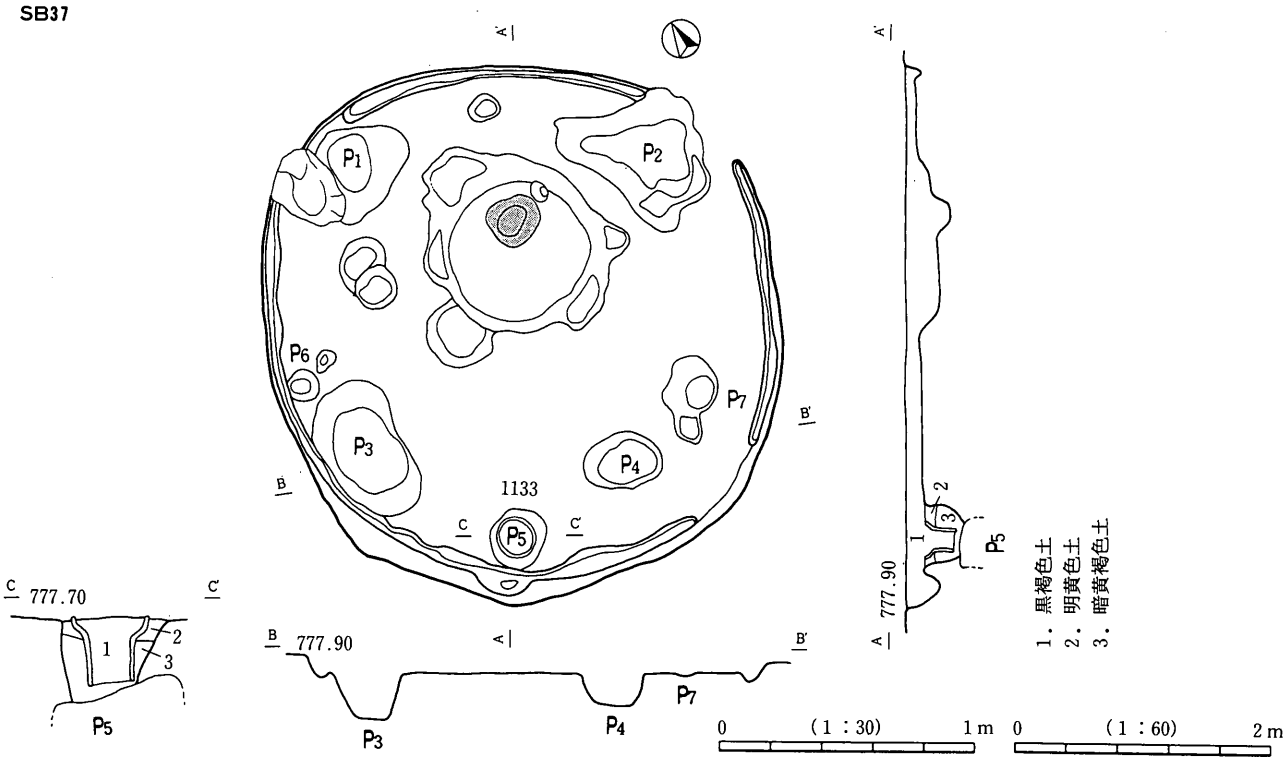


1．黒褐色土
2．暗褐色土　黄色土ブロックを含む
3．焼土

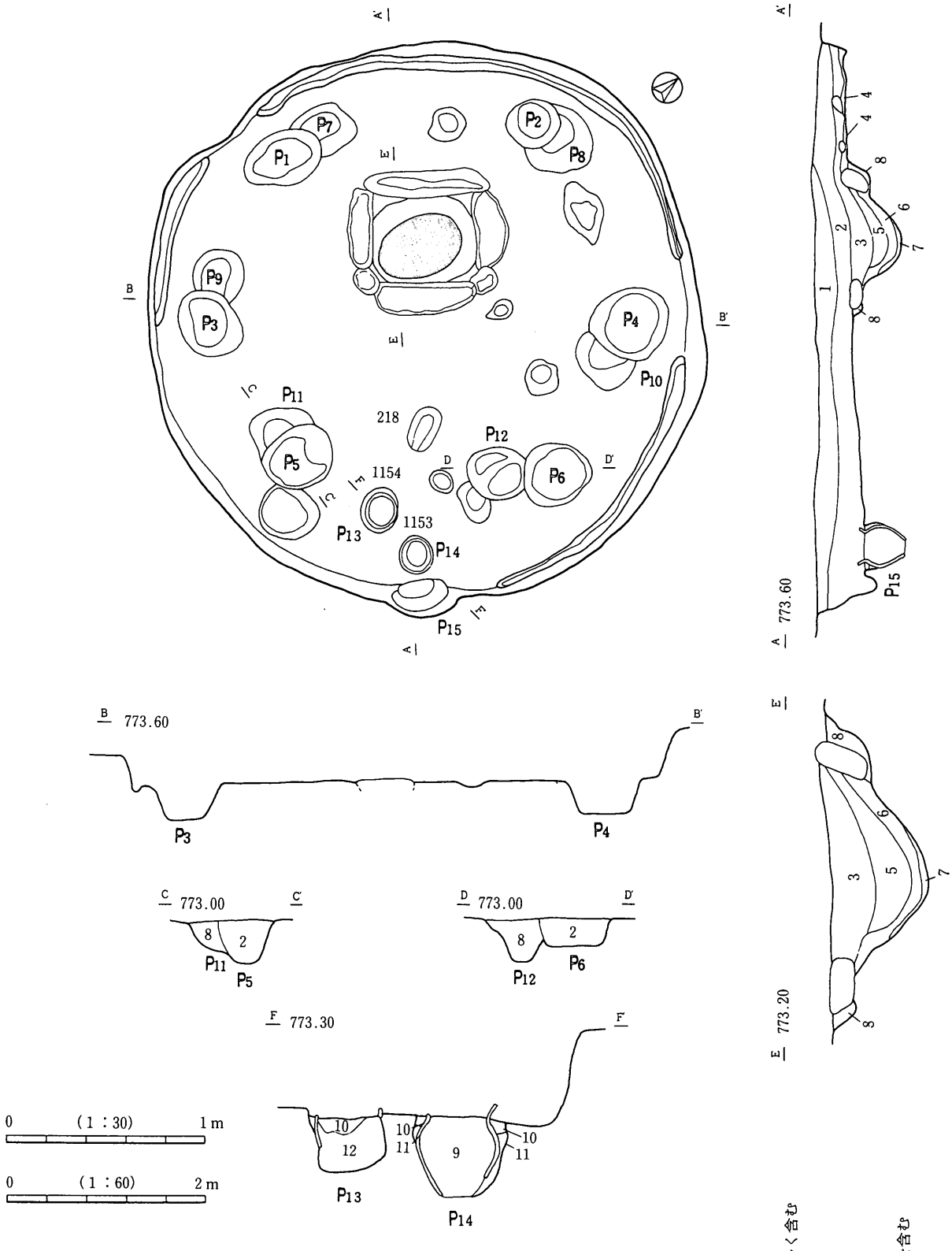
SB33


P1
P2
P3
P4
P5
A
A'
B
B'
775.00
1
2
3
1. 黒褐色土
2. 黒褐色土　黄色土ブロックを含む
3. 黒色土

SB37

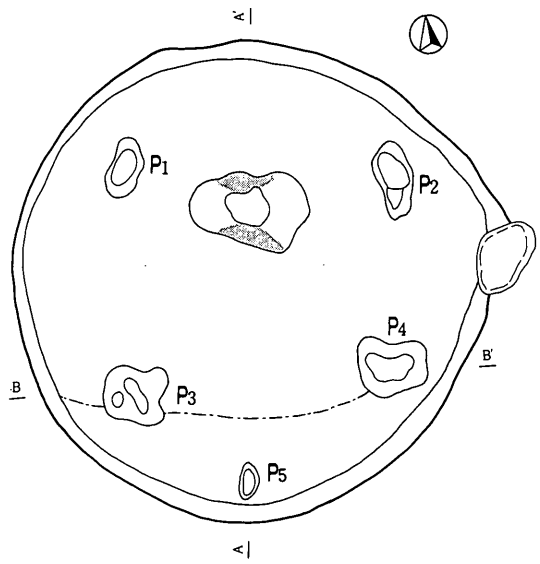

P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
1133
A
A'
B
B'
C
C'
777.70
777.90
1
2
3
1. 黒褐色土
2. 明黄色土
3. 暗黄褐色土
0
(1：30)
1m
0
(1：60)
2m

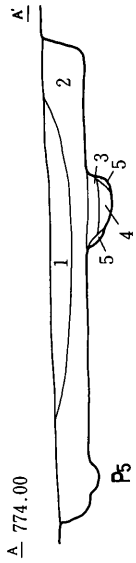
SB34



1. 黒色土
2. 黒褐色土
3. 黒褐色土　炭化物・焼土を多く含む
4. 炭化物
5. 明橙色焼土層
6. 黒褐色土　焼土を含む
7. 焼土
8. 黄褐色土　黒色土ブロックを含む
9. 黒褐色土　炭化物を含む
10. 黄褐色土
11. 暗黄褐色土
12. 黄黒灰色土

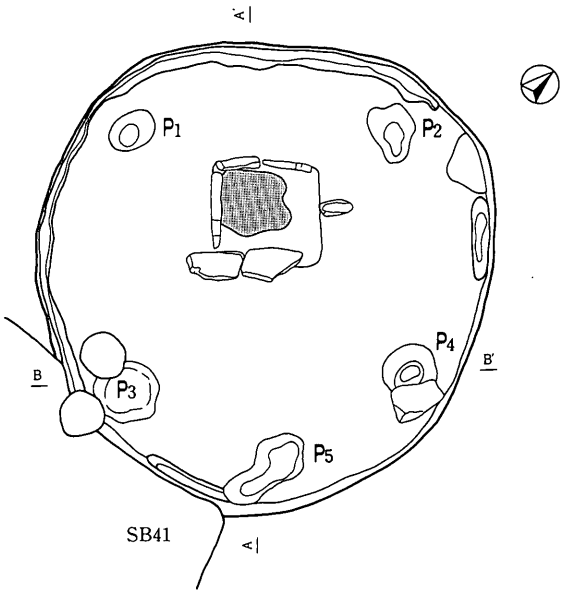
SB39

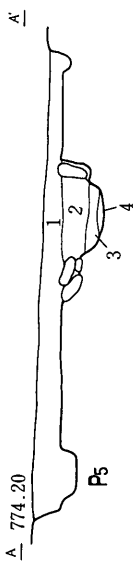




1．黒灰褐色土
2．暗黄褐色土
3．黄褐色土　焼土粒を含む
4．暗赤褐色土
5．焼土

SB40



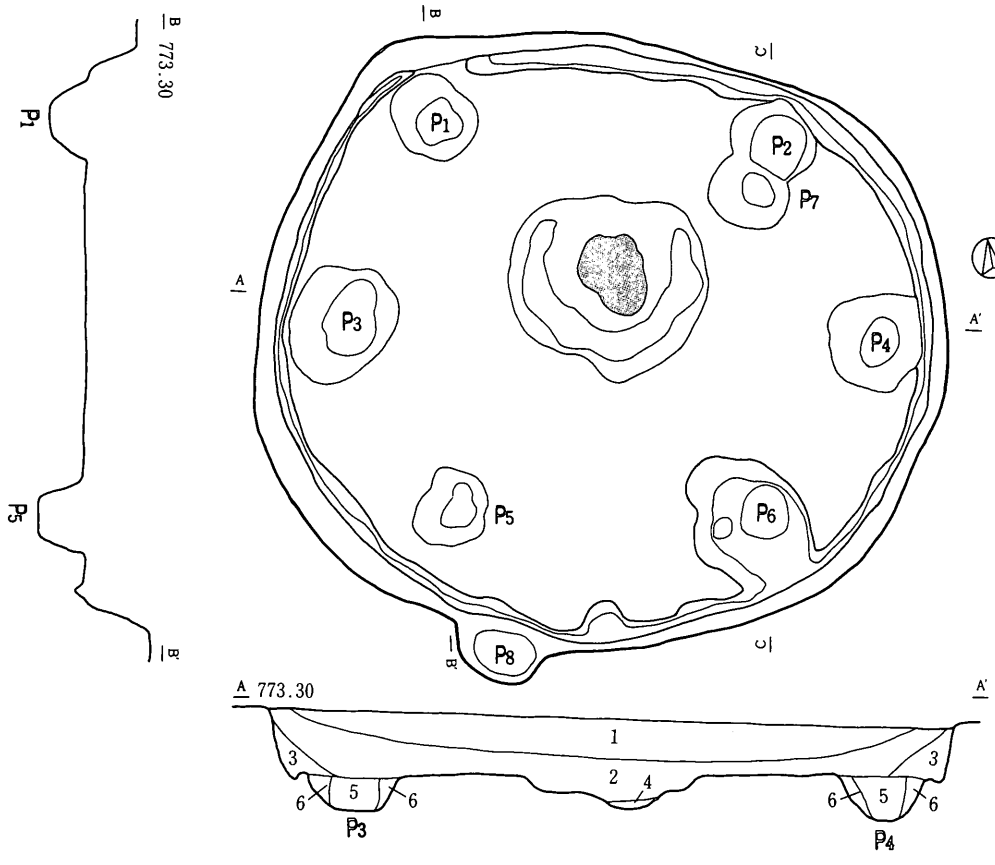


1．黒褐灰色土
2．黒褐灰色土　炭化粒を若干含む
3．暗赤褐色土
4．焼土

1　(1：60)　2m

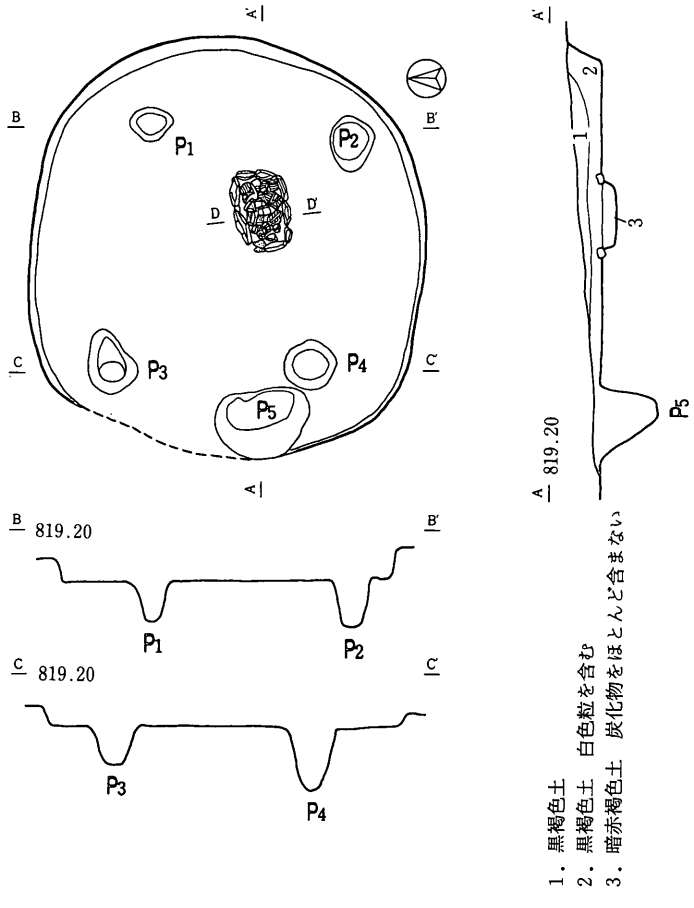
図版86　縄文時代中期後葉II期遺構図(11)

SB43



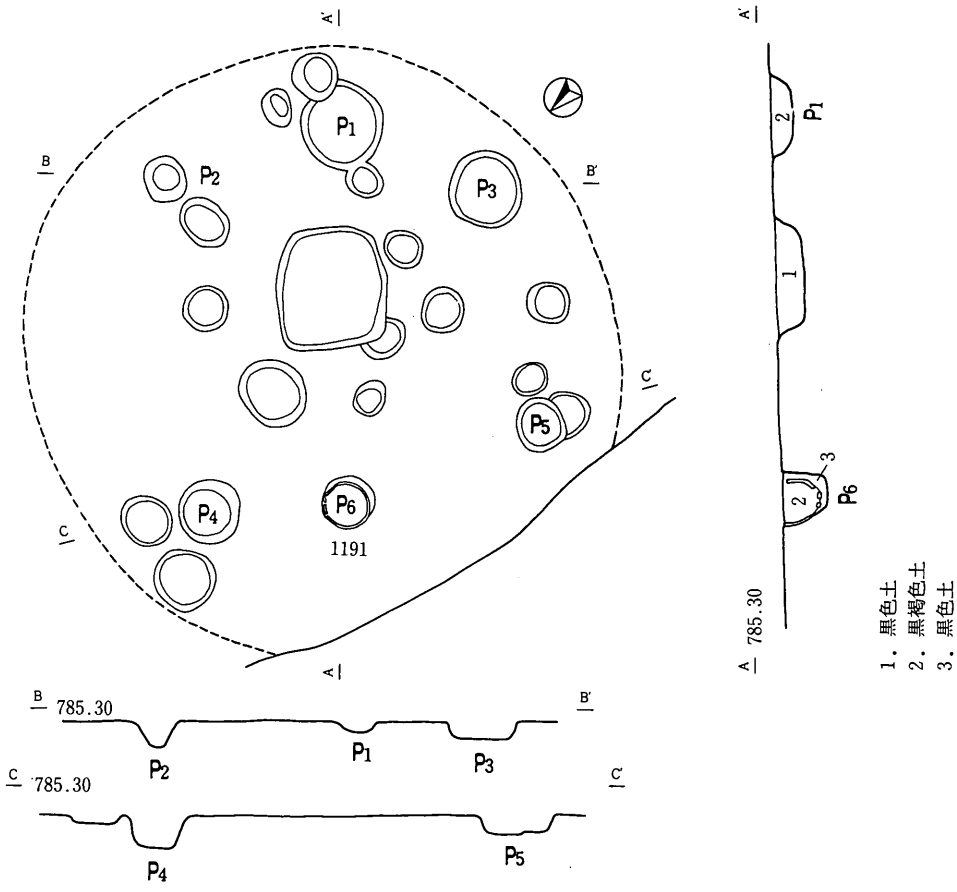
1．黒色土
2．黒褐色土
3．黒色土
　黄色土・漆黒色土をブロック状に含む
4．焼土
5．黒褐色土　黄色土ブロックを少量含む
6．黒褐色土と黄色土がブロック状に混ざる

SB139

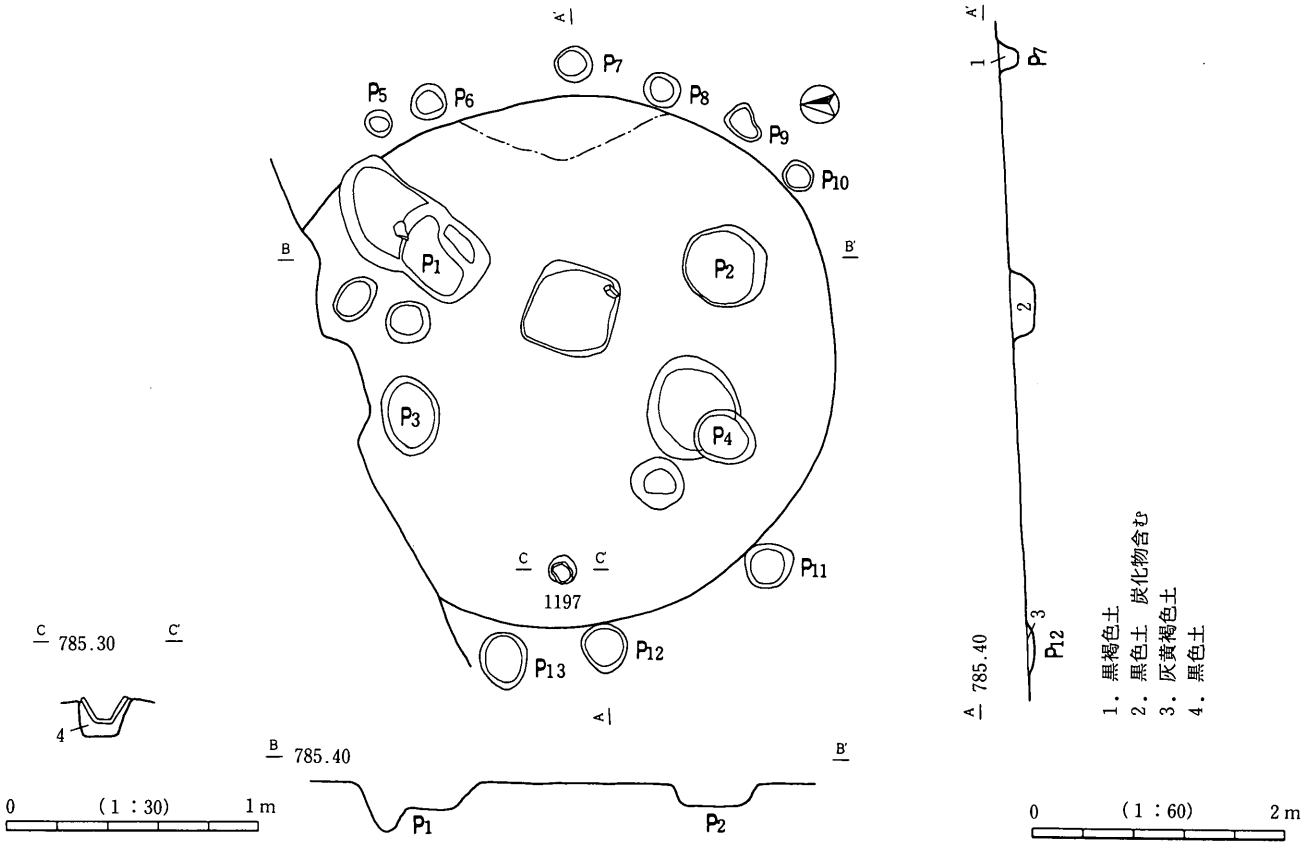


1．黒褐色土
2．黒褐色土　白色粒を含む
3．暗赤褐色土　炭化物をほとんど含まない

SB54

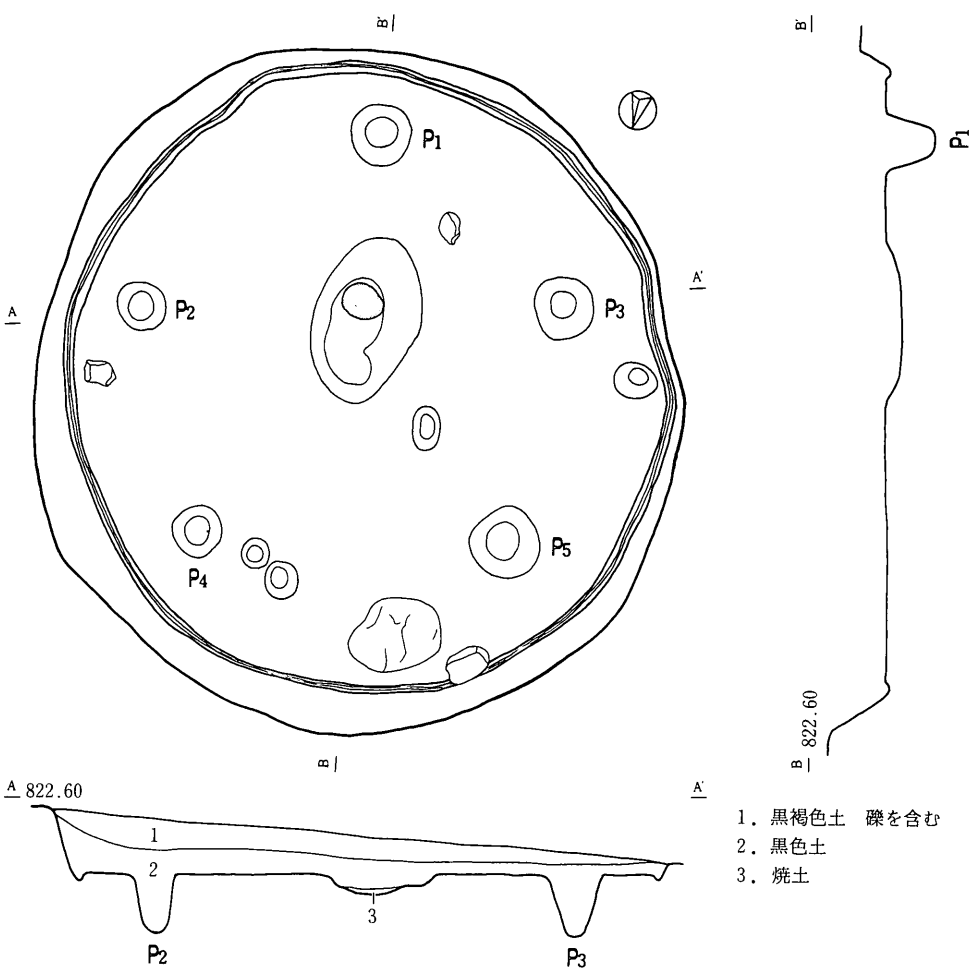

A'
A
B
B'
C
C'
P1
P2
P3
P4
P5
P6
1191
785.30
1. 黒色土
2. 黒褐色土
3. 黒色土

SB55

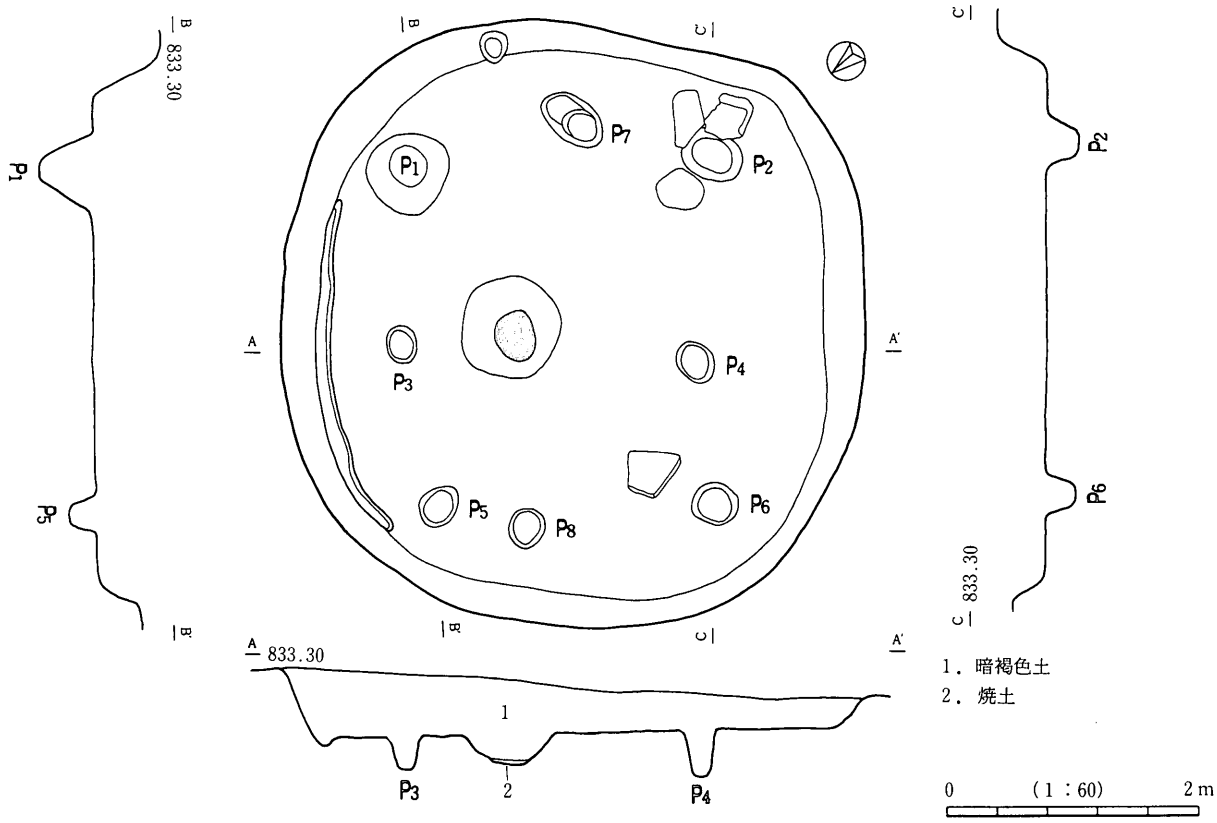

A'
A
B
B'
C
C'
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
1197
785.30
785.40
1. 黒褐色土
2. 黒色土　炭化物含む
3. 灰黄褐色土
4. 黒色土
0
(1：30)
1m
(1：60)
2m

図版88　縄文時代中期後葉II期遺構図(13)

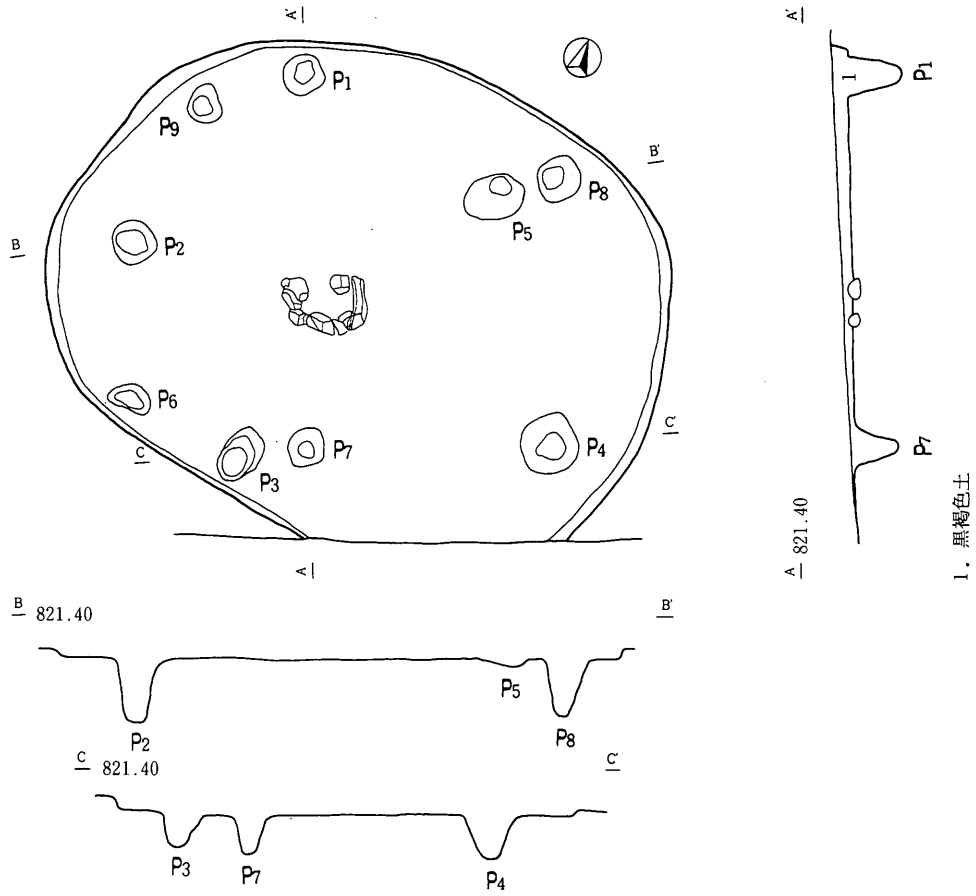
SB115



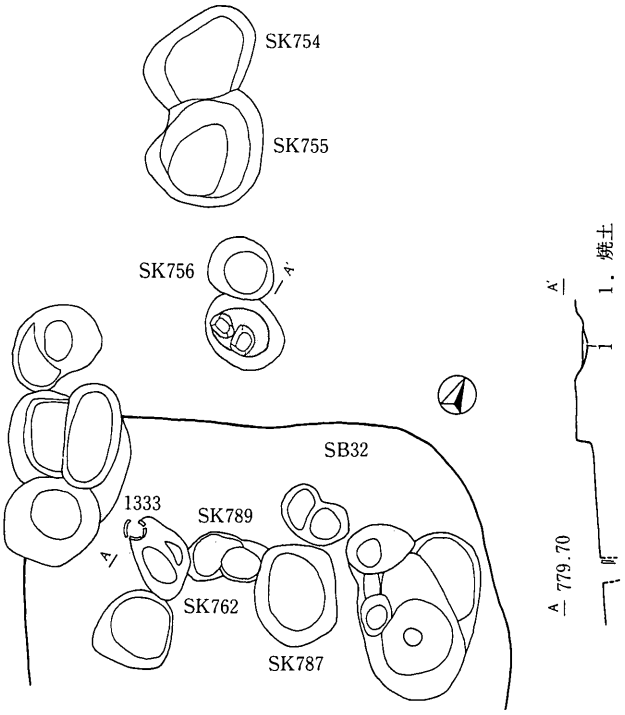
SB125



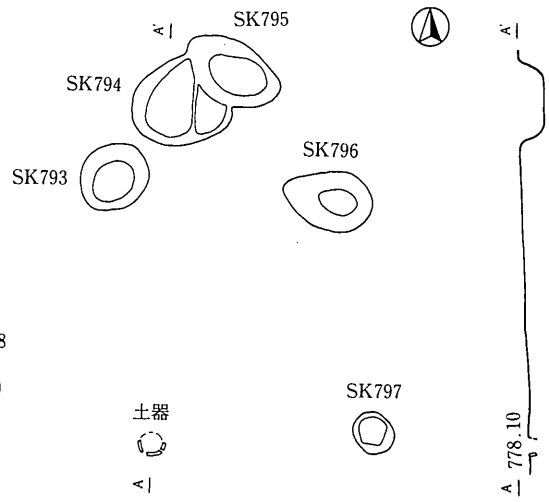
SB105



IVG12グリッド周辺



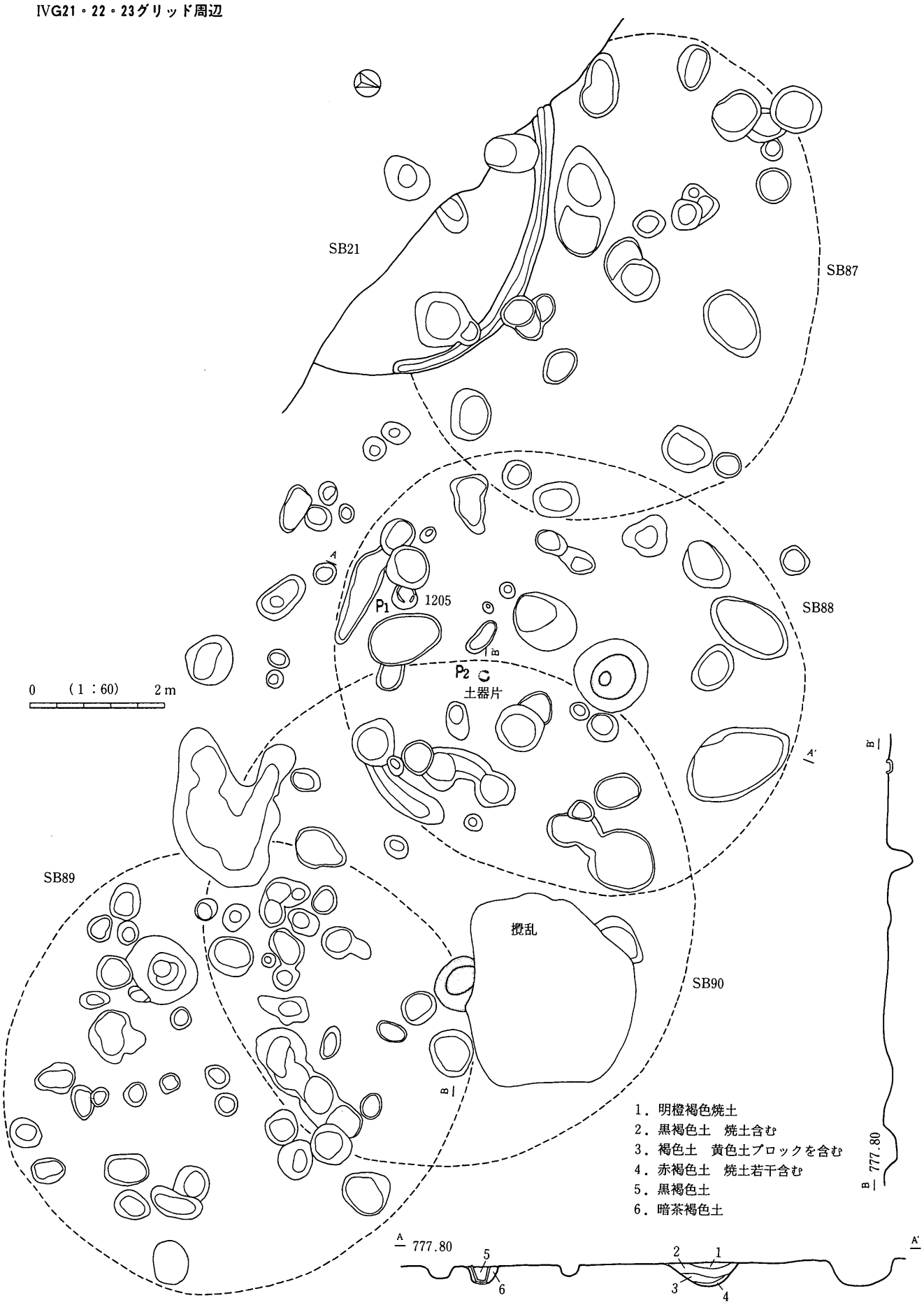
IVG16グリッド周辺



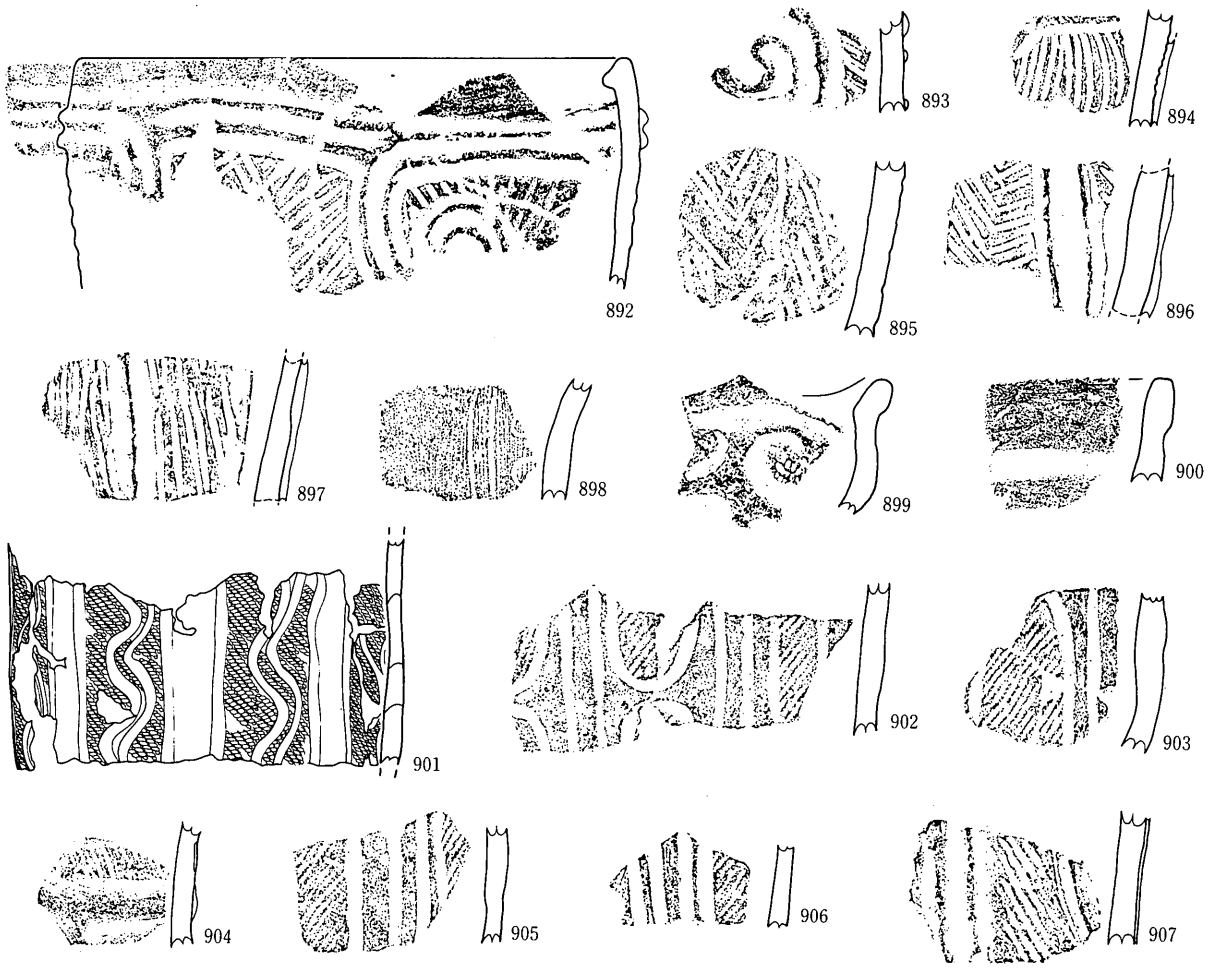
0　(1：60)　2m

図版90　縄文時代中期後葉II期遺構図(15)

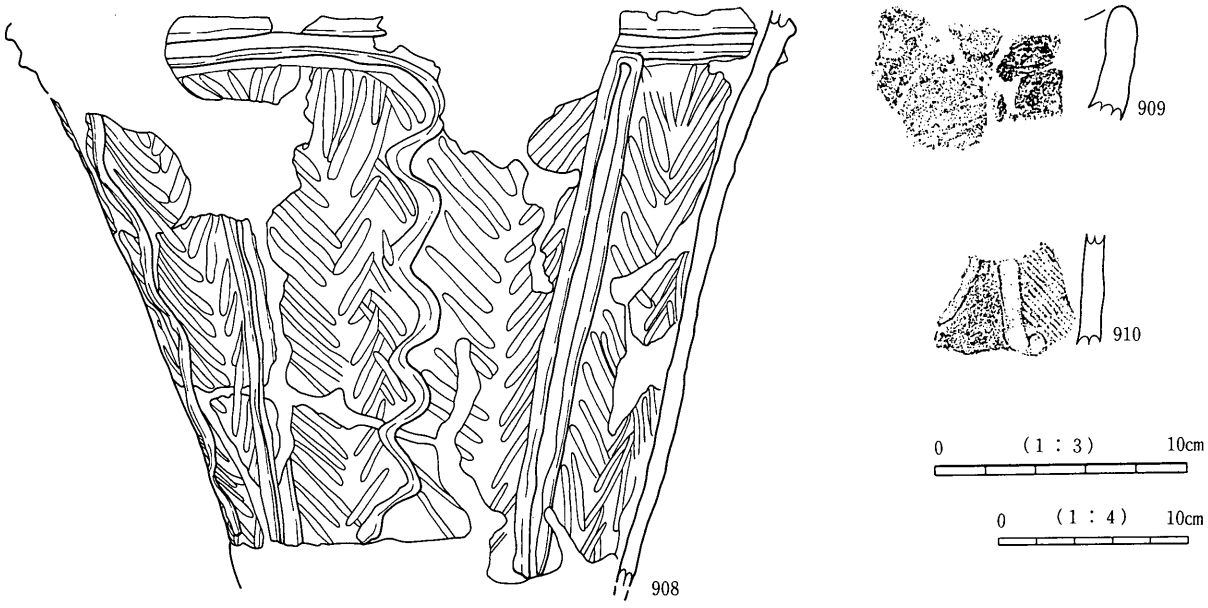
IVG21・22・23グリッド周辺



SB18

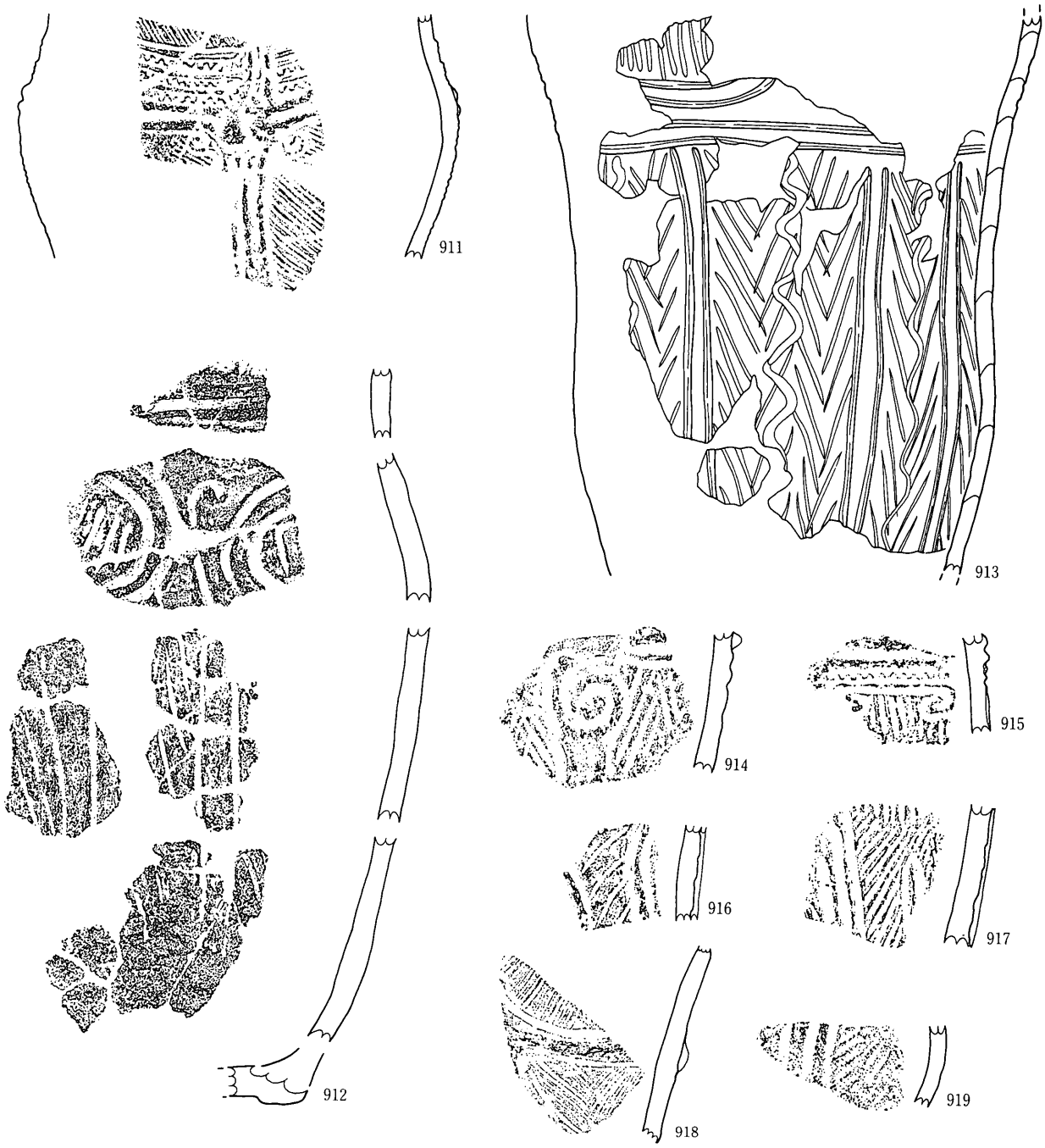

892
893
894
895
896
897
898
899
900
901
902
903
904
905
906
907

SB20

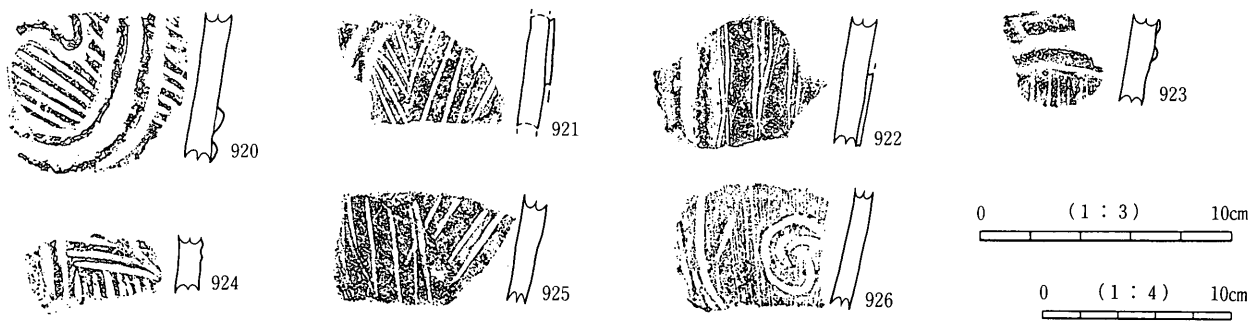

908
909
910
0 (1：3) 10cm
0 (1：4) 10cm

図版92　縄文時代中期後葉II期土器（2）

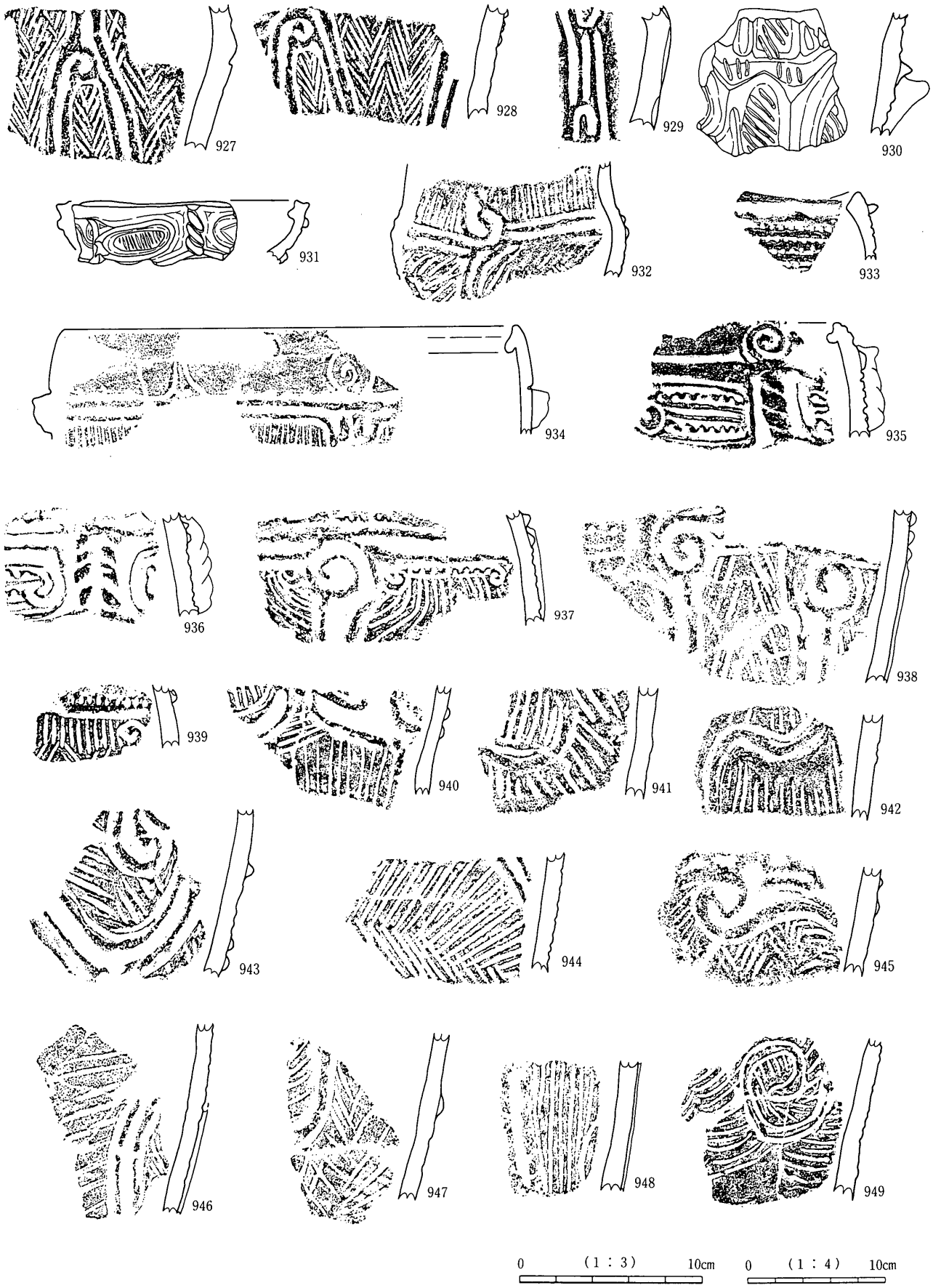
SB19



SB21

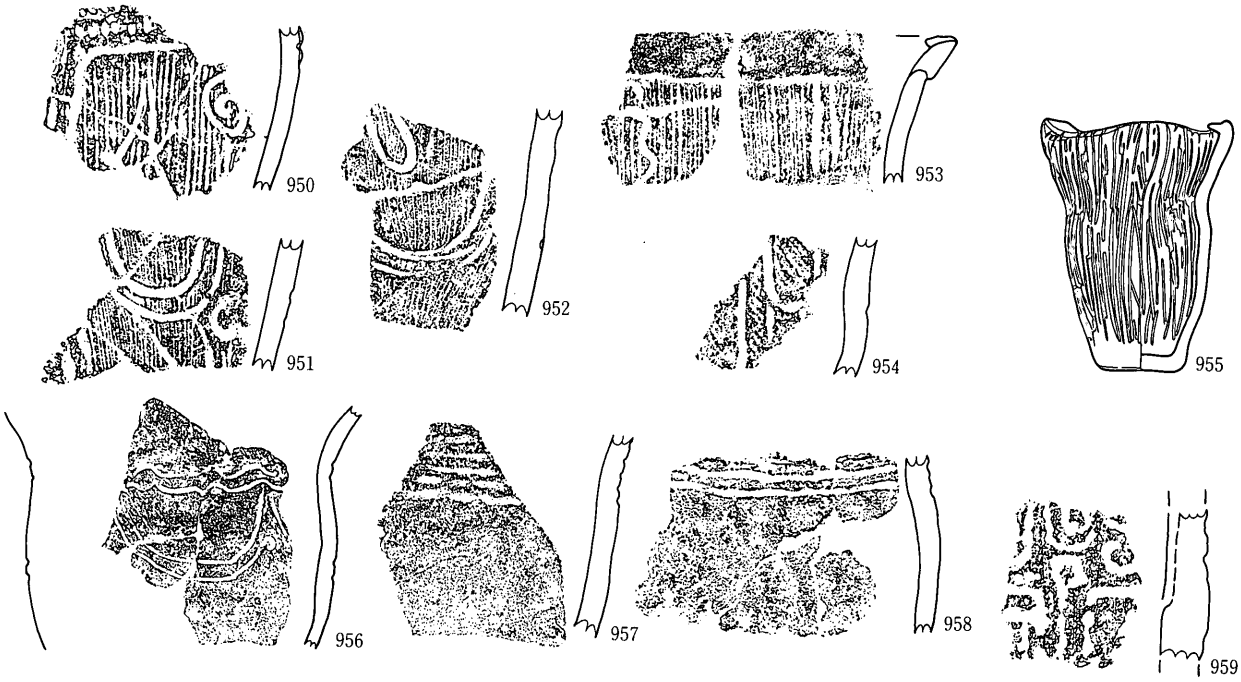


SB24(1)

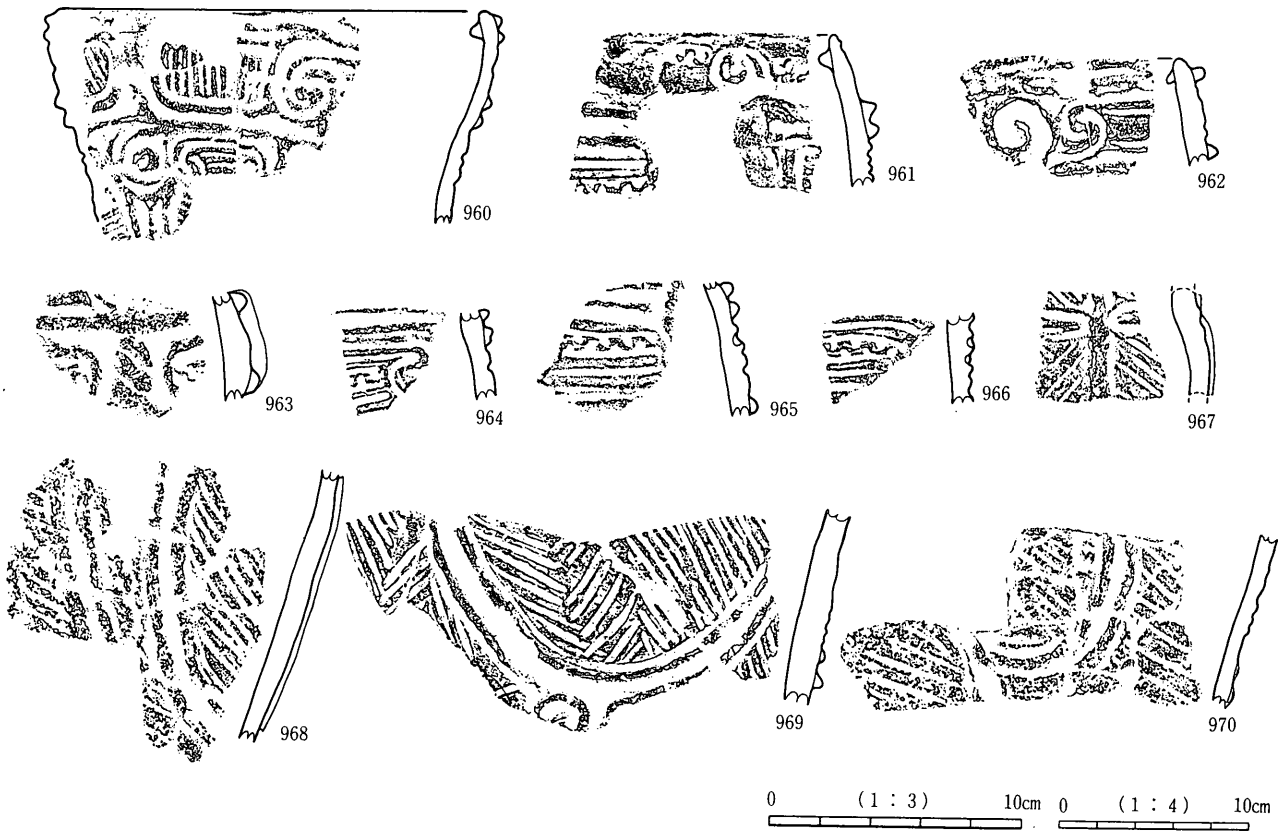

927
928
929
930
931
932
933
934
935
936
937
938
939
940
941
942
943
944
945
946
947
948
949
0 (1：3) 10cm
0 (1：4) 10cm

図版94　縄文時代中期後葉II期土器（4）

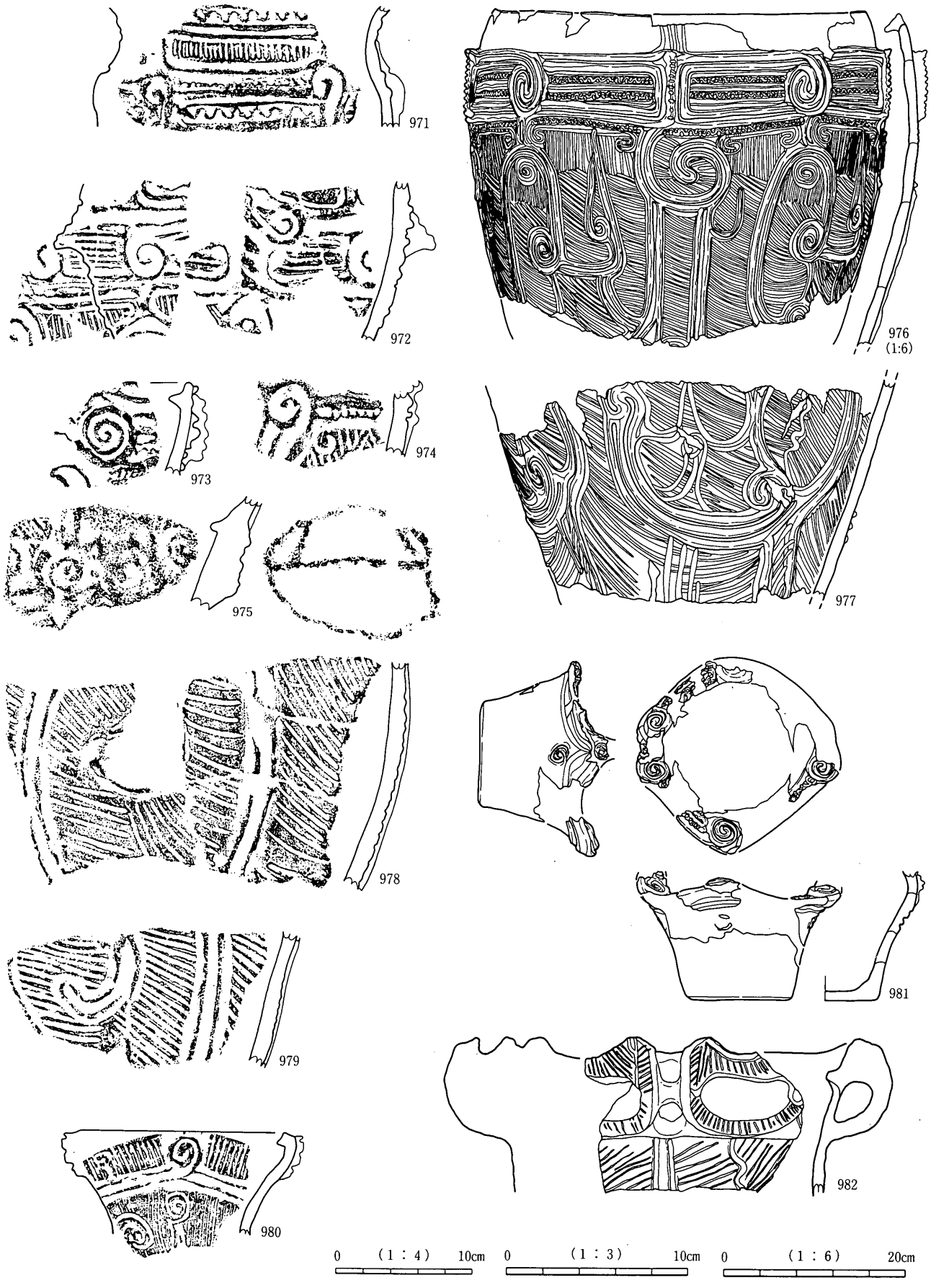
SB24(2)



SB23

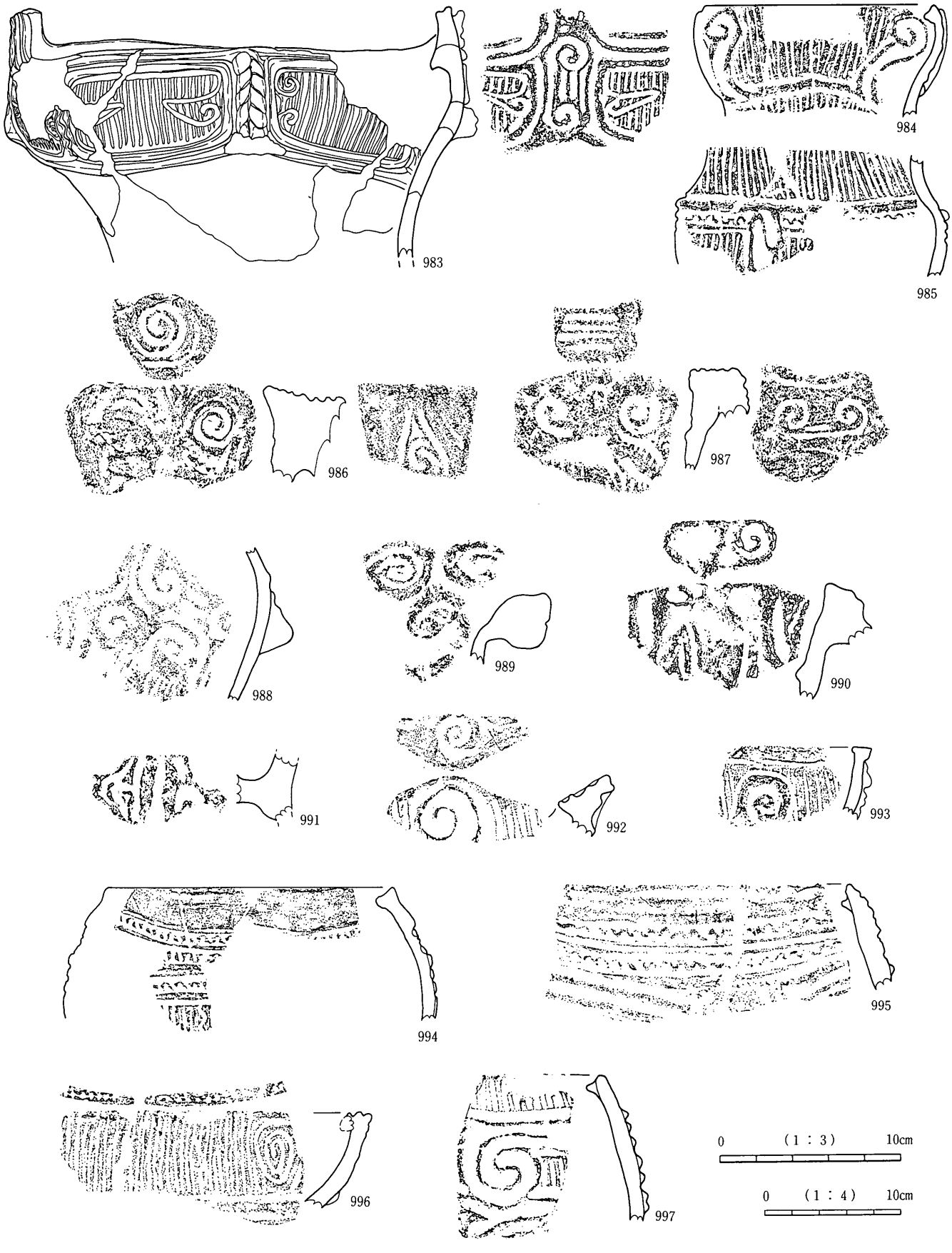


SB25


971
972
973
974
975
976
(1:6)
977
978
979
980
981
982
0 (1:4) 10cm
0 (1:3) 10cm
0 (1:6) 20cm

図版96　縄文時代中期後葉II期土器（6）

SB26(1)



SB26(2)

998
999
1000
1001
1002
1003
1004
1005
1006
1007
1008
1009
1010
1011
1012
1013
1014
1015
1016
1017
1018
1019
1020
1021
1022
1023
1024
0 (1：3) 10cm
0 (1：4) 10cm